

善通寺病院看護学校建設及び統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第1冊

旧練兵場遺跡 I

2009.2

香 川 県 教 育 委 員 会
独立行政法人国立病院機構善通寺病院

序 文

旧練兵場遺跡は、善通寺病院看護学校建設及び統合事業に伴い発掘調査が行われた香川県善通寺市に所在する、弥生時代を中心とする大型の集落遺跡です。

発掘調査は、平成8年度から15年度までは、香川県教育委員会からの委託を受けた財団法人香川県埋蔵文化財調査センターによって実施され、平成16年度は、香川県埋蔵文化財センターによって実施されました。

調査の結果、100棟以上の竪穴住居跡を始めとする夥しい数の遺構や、銅鐸や銅鏃などの青銅器に代表される貴重な遺物が多数発見されたことから、香川県の弥生時代の研究の発展に大いに寄与するものとなりました。

このたび、平成16年度から17年度にかけて実施しました、第1次の整理事業が終了し、「善通寺病院看護学校建設及び統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 旧練兵場遺跡 I」として刊行することになりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、関係機関並びに地元関係者各位には、多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成21年2月

香川県埋蔵文化財センター
所長 大山眞充

例 言

1. 本報告書は、善通寺病院看護学校建設及び統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第1冊で、香川県善通寺市仙遊町に所在する旧練兵場遺跡（きゅうれんぺいじょういせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が独立行政法人国立病院機構から委託され、平成8～15年度は香川県教育委員会を調査主体、旧財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として、平成16年度は香川県埋蔵文化財センターを調査担当者として実施された。
3. 調査に当って、下記の関係諸機関及び各位の協力を得た。記して謝意を表する。（順不同、敬称略）
厚生労働省四国厚生支局、独立行政法人国立病院機構善通寺病院、善通寺市教育委員会、
国立歴史民俗博物館 平川 南、大阪府立弥生文化博物館 宮崎泰史
4. 本報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。
本報告書の執筆・編集は、西岡達哉が担当した。
5. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第IV系の北であり、標高はT. P. を基準としている。
また、遺構は下記の略号により表示している。
S B：掘立柱建物跡 S D：溝状遺構 S H：竪穴住居跡 S K：土 坑 S P：柱穴跡
S R：自然河川跡 S X：不明遺構
6. 遺構実測図の水平線上の数値は、標高値（単位m）である。
7. 石器及び石製品の実測図について、網掛けは摩滅範囲を、輪郭線の回りの実線は磨滅箇所を、破線は敲打痕や潰れ箇所を表す。また、黒色で潰した箇所は、現代の欠損である。
8. 挿図の一部に国土地理院地形図「善通寺」（1/25,000）を使用した。
9. 写真図版（CD-ROM）のビューワーは、株式会社トリワークス（<http://www.kuraemon.com>）「蔵衛門9」を使用した。

本文目次

第1章 調査の経過

第1節	遺跡の発見	1
第2節	事業内容と発掘調査	1
第3節	看護学校建設事業に伴う発掘調査の経過	6
第4節	統合事業に伴う発掘調査の経過	7
第5節	整理作業の経過	7

第2章 立地と環境

第3章 看護学校建設事業に伴う発掘調査の成果

第1節	土層序	13
第2節	遺構と遺物	13
1	弥生時代中期から古墳時代初期の遺構	23
2	古墳時代中期から奈良時代の遺構	183
3	平安時代後半から鎌倉時代の遺構	196
4	遺物包含層	232

第4章 統合事業に伴う発掘調査の成果

第1節	土層序	273
第2節	遺構と遺物	273
1	弥生時代の遺構	273
2	古墳時代以降の遺構	339
3	遺物包含層	352

第5章 自然科学分析の成果

第1節	旧練兵場遺跡から出土した木材の樹種	391
第2節	旧練兵場遺跡出土遺物の赤色顔料成分分析	393

第6章 ま と め

第1節	遺跡の変遷	399
1	縄文時代晩期から弥生時代前期まで	399
2	弥生時代中期から古墳時代初期まで	399
3	古墳時代中期から古墳時代終末期まで	401
4	奈良時代から平安時代前半期まで	401
5	平安時代後半から鎌倉時代まで	401
6	室町時代から江戸時代後半期まで	402
第2節	弥生時代の集落	402
1	居住地の中心部	402
2	居住地の周辺部	404
第3節	特徴的な遺物	404
1	ミニチュア土器	404
2	赤色顔料付着土器	405
3	線刻画土器	406
4	土製品	407
5	金属製品	408
6	刻印須恵器	408
第4節	条里型地割の遺構	409

挿図目次

第 1 図	遺跡位置図及び普通寺病院主要埋蔵文化財調査位置図	2	第 49 図	土坑遺構実測図 1	50
第 2 図	調査地区割図	4	第 50 図	土坑遺物実測図 1	51
第 3 図	調査区割図	5	第 51 図	土器棺墓遺構実測図・遺物実測図	53
第 4 図	「普通寺伽藍并寺領絵図」トレース図	10	第 52 図	溝状遺構遺構実測図 1	54
第 5 図	土層序断面実測図 1	14	第 53 図	溝状遺構遺構実測図 2	55
第 6 図	土層序断面実測図 2	15	第 54 図	溝状遺構遺物実測図 1	56
第 7 図	土層序断面実測図 3	16	第 55 図	溝状遺構遺構実測図 3	57
第 8 図	土層序断面実測図 4	17	第 56 図	溝状遺構遺物実測図 2	58
第 9 図	土層序断面実測図 5	18	第 57 図	溝状遺構遺物実測図 3	59
第 10 図	土層序断面実測図 6	19	第 58 図	溝状遺構遺物実測図 4	60
第 11 図	土層序断面実測図 7	20	第 59 図	溝状遺構遺物実測図 5	61
第 12 図	土層序断面実測図 8	21	第 60 図	溝状遺構遺構実測図 4	62
第 13 図	弥生土器主要器種形態分類模式図	22	第 61 図	溝状遺構遺構実測図 5	63
第 14 図	竪穴住居跡遺構実測図 1・遺物実測図 1	24	第 62 図	溝状遺構遺構実測図 6	64
第 15 図	竪穴住居跡遺物実測図 2	25	第 63 図	溝状遺構遺構実測図 7	65
第 16 図	竪穴住居跡遺物実測図 3	26	第 64 図	溝状遺構遺物実測図 6	67
第 17 図	竪穴住居跡遺物実測図 4	27	第 65 図	溝状遺構遺物実測図 7	68
第 18 図	竪穴住居跡遺物実測図 5	28	第 66 図	溝状遺構遺物実測図 8	69
第 19 図	竪穴住居跡遺構実測図 2	29	第 67 図	溝状遺構遺物実測図 9	70
第 20 図	竪穴住居跡遺構実測図 3	29	第 68 図	溝状遺構遺物実測図 10	71
第 21 図	竪穴住居跡遺構実測図 4	29	第 69 図	溝状遺構遺物実測図 11	72
第 22 図	竪穴住居跡遺構実測図 5	29	第 70 図	溝状遺構遺物実測図 12	73
第 23 図	竪穴住居跡遺構実測図 6	31	第 71 図	溝状遺構遺物実測図 13	74
第 24 図	竪穴住居跡遺構実測図 7	31	第 72 図	溝状遺構遺物実測図 14	75
第 25 図	竪穴住居跡遺物実測図 6	32	第 73 図	溝状遺構遺物実測図 15	76
第 26 図	竪穴住居跡遺構実測図 8	33	第 74 図	溝状遺構遺物実測図 16	77
第 27 図	竪穴住居跡遺構実測図 9	33	第 75 図	溝状遺構遺物実測図 17	78
第 28 図	竪穴住居跡遺構実測図 10	33	第 76 図	溝状遺構遺物実測図 18	79
第 29 図	竪穴住居跡遺構実測図 11	35	第 77 図	溝状遺構遺物実測図 19	80
第 30 図	竪穴住居跡遺物実測図 7	36	第 78 図	溝状遺構遺物実測図 20	81
第 31 図	竪穴住居跡遺物実測図 8	37	第 79 図	溝状遺構遺物実測図 21	82
第 32 図	竪穴住居跡遺物実測図 9	38	第 80 図	溝状遺構遺物実測図 22	83
第 33 図	竪穴住居跡遺構実測図 12	39	第 81 図	溝状遺構遺物実測図 23	84
第 34 図	竪穴住居跡遺構実測図 13	39	第 82 図	溝状遺構遺物実測図 24	85
第 35 図	竪穴住居跡遺構実測図 14	39	第 83 図	溝状遺構遺物実測図 25	86
第 36 図	竪穴住居跡遺物実測図 10	40	第 84 図	溝状遺構遺物実測図 26	87
第 37 図	竪穴住居跡遺構実測図 15	41	第 85 図	溝状遺構遺物実測図 27	88
第 38 図	竪穴住居跡遺構実測図 16	41	第 86 図	溝状遺構遺物実測図 28	89
第 39 図	竪穴住居跡遺物実測図 11	42	第 87 図	溝状遺構遺物実測図 29	90
第 40 図	竪穴住居跡遺構実測図 17	43	第 88 図	溝状遺構遺物実測図 30	91
第 41 図	竪穴住居跡遺構実測図 18	43	第 89 図	溝状遺構遺物実測図 31	92
第 42 図	竪穴住居跡遺構実測図 19	44	第 90 図	溝状遺構遺物実測図 32	93
第 43 図	竪穴住居跡遺構実測図 20	44	第 91 図	溝状遺構遺物実測図 33	94
第 44 図	竪穴住居跡遺物実測図 12	46	第 92 図	溝状遺構遺物実測図 34	95
第 45 図	竪穴住居跡遺構実測図 21	47	第 93 図	溝状遺構遺物実測図 35	96
第 46 図	竪穴住居跡遺構実測図 22	47	第 94 図	溝状遺構遺物実測図 36	97
第 47 図	竪穴住居跡遺物実測図 13	48	第 95 図	溝状遺構遺物実測図 37	98
第 48 図	掘立柱建物跡遺構実測図 1・遺物実測図 1	49	第 96 図	溝状遺構遺物実測図 38	99

第 97 图	沟状遗构遗物实测图 39	100	第 147 图	沟状遗构遗物实测图 87	150
第 98 图	沟状遗构遗物实测图 40	101	第 148 图	沟状遗构遗物实测图 88	151
第 99 图	沟状遗构遗物实测图 41	102	第 149 图	沟状遗构遗物实测图 89	152
第 100 图	沟状遗构遗物实测图 42	103	第 150 图	沟状遗构遗物实测图 90	153
第 101 图	沟状遗构遗物实测图 43	104	第 151 图	沟状遗构遗物实测图 91	154
第 102 图	沟状遗构遗物实测图 44	105	第 152 图	沟状遗构遗物实测图 92	155
第 103 图	沟状遗构遗物实测图 45	106	第 153 图	沟状遗构遗物实测图 93	156
第 104 图	沟状遗构遗物实测图 46	107	第 154 图	沟状遗构遗物实测图 94	157
第 105 图	沟状遗构遗物实测图 47	108	第 155 图	柱穴迹遗物实测图 1	158
第 106 图	沟状遗构遗物实测图 48	109	第 155 图	柱穴迹遗物实测图 2	159
第 107 图	沟状遗构遗物实测图 49	110	第 157 图	柱穴迹遗物实测图 3	160
第 108 图	沟状遗构遗物实测图 50	111	第 158 图	柱穴迹遗物实测图 4	161
第 109 图	沟状遗构遗物实测图 51	112	第 159 图	不明遗构遗构实测图 1·遗物实测图 1	162
第 110 图	沟状遗构遗物实测图 52	113	第 160 图	自然河川迹土層序实测图	163
第 111 图	沟状遗构遗物实测图 53	114	第 161 图	自然河川迹遺構实测图 1·遗物实测图 1	164
第 112 图	沟状遗构遗物实测图 54	115	第 162 图	自然河川迹遺物实测图 2	165
第 113 图	沟状遗构遗物实测图 55	116	第 163 图	自然河川迹遺物实测图 3	166
第 114 图	沟状遗构遗物实测图 56	117	第 164 图	自然河川迹遺物实测图 4	167
第 115 图	沟状遗构遗物实测图 57	118	第 165 图	自然河川迹遺物实测图 5	168
第 116 图	沟状遗构遗物实测图 58	119	第 166 图	自然河川迹遺物实测图 6	169
第 117 图	沟状遗构遗物实测图 59	120	第 167 图	自然河川迹遺物实测图 7	170
第 118 图	沟状遗构遺構实测图 8	121	第 168 图	自然河川迹遺物实测图 8	171
第 119 图	沟状遗构遺構实测图 9	122	第 169 图	自然河川迹遺物实测图 9	172
第 120 图	沟状遗构遗物实测图 60	123	第 170 图	自然河川迹遺物实测图 10	173
第 121 图	沟状遗构遗物实测图 61	124	第 171 图	自然河川迹遺物实测图 11	174
第 122 图	沟状遗构遗物实测图 62	125	第 172 图	自然河川迹遺物实测图 12	175
第 123 图	沟状遗构遗物实测图 63	126	第 173 图	自然河川迹遺物实测图 13	176
第 124 图	沟状遗构遗物实测图 64	127	第 174 图	自然河川迹遺物实测图 14	177
第 125 图	沟状遗构遗物实测图 65	128	第 175 图	自然河川迹遺物实测图 15	178
第 126 图	沟状遗构遗物实测图 66	129	第 176 图	自然河川迹遺物实测图 16	179
第 127 图	沟状遗构遗物实测图 67	130	第 177 图	自然河川迹遺物实测图 17	180
第 128 图	沟状遗构遗物实测图 68	131	第 178 图	自然河川迹遺物实测图 18	181
第 129 图	沟状遗构遗物实测图 69	132	第 179 图	沟状遗构遺物实测图 95	184
第 130 图	沟状遗构遗物实测图 70	133	第 180 图	沟状遗构遺物实测图 96	185
第 131 图	沟状遗构遗物实测图 71	134	第 181 图	沟状遗构遺物实测图 97	186
第 132 图	沟状遗构遺物实测图 72	135	第 182 图	沟状遗构遺物实测图 98	187
第 133 图	沟状遗构遺物实测图 73	136	第 183 图	沟状遗构遺物实测图 99	188
第 134 图	沟状遗构遺物实测图 74	137	第 184 图	沟状遗构遺物实测图 100	189
第 135 图	沟状遗构遺物实测图 75	138	第 185 图	沟状遗构遺物实测图 101	190
第 136 图	沟状遗构遺物实测图 76	139	第 186 图	沟状遗构遺物实测图 102	191
第 137 图	沟状遗构遺物实测图 77	140	第 187 图	沟状遗构遺物实测图 103	192
第 138 图	沟状遗构遺物实测图 78	141	第 188 图	沟状遗构遺物实测图 104	193
第 139 图	沟状遗构遺物实测图 79	142	第 189 图	沟状遗构遺物实测图 105	194
第 140 图	沟状遗构遺物实测图 80	143	第 190 图	柱穴迹遺物实测图 5	195
第 141 图	沟状遗构遺物实测图 81	144	第 191 图	土坑遺構实测图 2	195
第 142 图	沟状遗构遺物实测图 82	145	第 192 图	沟状遗构遺構实测图 10	204
第 143 图	沟状遗构遺物实测图 83	146	第 193 图	沟状遗构遺構实测图 11	205
第 144 图	沟状遗构遺物实测图 84	147	第 194 图	沟状遗构遺構实测图 12	206
第 145 图	沟状遗构遺物实测图 85	148	第 195 图	沟状遗构遺物实测图 106	207
第 146 图	沟状遗构遺物实测图 86	149	第 196 图	沟状遗构遺物实测图 107	208

第 197 图	溝状遺構遺物実測図 108	209	第 247 图	遺物包含層遺物実測図 28	260
第 198 图	溝状遺構遺物実測図 109	210	第 248 图	遺物包含層遺物実測図 29	261
第 199 图	溝状遺構遺物実測図 110	211	第 249 图	遺物包含層遺物実測図 30	262
第 200 图	溝状遺構遺物実測図 111	212	第 250 图	遺物包含層遺物実測図 31	263
第 201 图	溝状遺構遺物実測図 112	213	第 251 图	遺物包含層遺物実測図 32	264
第 202 图	溝状遺構遺物実測図 113	214	第 252 图	遺物包含層遺物実測図 33	265
第 203 图	溝状遺構遺物実測図 114	215	第 253 图	遺物包含層遺物実測図 34	266
第 204 图	溝状遺構遺物実測図 115	216	第 254 图	遺物包含層遺物実測図 35	267
第 205 图	溝状遺構遺物実測図 116	217	第 255 图	遺物包含層遺物実測図 36	268
第 206 图	溝状遺構遺物実測図 117	218	第 256 图	遺物包含層遺物実測図 37	269
第 207 图	溝状遺構遺物実測図 118	219	第 257 图	遺物包含層遺物実測図 38	270
第 208 图	溝状遺構遺物実測図 119	220	第 258 图	遺物包含層遺物実測図 39	271
第 209 图	溝状遺構遺物実測図 120	221	第 259 图	土層序断面実測図 9	274
第 210 图	溝状遺構遺物実測図 121	222	第 260 图	土層序断面実測図 10	275
第 211 图	溝状遺構遺物実測図 122	223	第 261 图	土層序断面実測図 11	276
第 212 图	溝状遺構遺物実測図 123	224	第 262 图	土層序断面実測図 12	277
第 213 图	溝状遺構遺物実測図 124	225	第 263 图	掘立柱建物跡遺構実測図 2	278
第 214 图	溝状遺構遺物実測図 125	226	第 264 图	掘立柱建物跡遺構実測図 3	279
第 215 图	溝状遺構遺物実測図 126	227	第 265 图	掘立柱建物跡遺構実測図 4	280
第 216 图	溝状遺構遺物実測図 127	228	第 266 图	掘立柱建物跡遺構実測図 5	281
第 217 图	溝状遺構遺物実測図 128	229	第 267 图	掘立柱建物跡遺物実測図 2	281
第 218 图	溝状遺構遺物実測図 129	230	第 268 图	竪穴住居跡遺構実測図 23	282
第 219 图	柱穴跡遺物実測図 6	231	第 269 图	土坑遺構実測図 3	282
第 220 图	遺物包含層遺物実測図 1	233	第 270 图	竪穴住居跡遺物実測図 14・土坑遺物実測図 2	284
第 221 图	遺物包含層遺物実測図 2	234	第 271 图	土坑遺物実測図 3	285
第 222 图	遺物包含層遺物実測図 3	235	第 272 图	溝状遺構遺構実測図 13	286
第 223 图	遺物包含層遺物実測図 4	236	第 273 图	溝状遺構遺物実測図 130	286
第 224 图	遺物包含層遺物実測図 5	237	第 274 图	不明遺構遺構実測図 2	286
第 225 图	遺物包含層遺物実測図 6	238	第 275 图	不明遺構遺物実測図 2	287
第 226 图	遺物包含層遺物実測図 7	239	第 276 图	柱穴跡遺物実測図 7	288
第 227 图	遺物包含層遺物実測図 8	240	第 277 图	自然河川跡遺構実測図 2	289
第 228 图	遺物包含層遺物実測図 9	241	第 278 图	自然河川跡遺物実測図 19	291
第 229 图	遺物包含層遺物実測図 10	242	第 279 图	自然河川跡遺物実測図 20	292
第 230 图	遺物包含層遺物実測図 11	243	第 280 图	自然河川跡遺構実測図 3	293
第 231 图	遺物包含層遺物実測図 12	244	第 281 图	自然河川跡遺構実測図 4	294
第 232 图	遺物包含層遺物実測図 13	245	第 282 图	自然河川跡遺構実測図 5	295
第 233 图	遺物包含層遺物実測図 14	246	第 283 图	自然河川跡遺物実測図 21	296
第 234 图	遺物包含層遺物実測図 15	247	第 284 图	自然河川跡遺物実測図 22	297
第 235 图	遺物包含層遺物実測図 16	248	第 285 图	自然河川跡遺物実測図 23	298
第 236 图	遺物包含層遺物実測図 17	249	第 286 图	自然河川跡遺物実測図 24	299
第 237 图	遺物包含層遺物実測図 18	250	第 287 图	自然河川跡遺物実測図 25	300
第 238 图	遺物包含層遺物実測図 19	251	第 288 图	自然河川跡遺物実測図 26	301
第 239 图	遺物包含層遺物実測図 20	252	第 289 图	自然河川跡遺物実測図 27	302
第 240 图	遺物包含層遺物実測図 21	253	第 290 图	自然河川跡遺物実測図 28	303
第 241 图	遺物包含層遺物実測図 22	254	第 291 图	自然河川跡遺物実測図 29	304
第 242 图	遺物包含層遺物実測図 23	255	第 292 图	自然河川跡遺物実測図 30	305
第 243 图	遺物包含層遺物実測図 24	256	第 293 图	自然河川跡遺物実測図 31	306
第 244 图	遺物包含層遺物実測図 25	257	第 294 图	自然河川跡遺物実測図 32	307
第 245 图	遺物包含層遺物実測図 26	258	第 295 图	自然河川跡遺物実測図 33	308
第 246 图	遺物包含層遺物実測図 27	259	第 296 图	自然河川跡遺物実測図 34	309

第 297 図	自然河川跡遺物実測図 35	310	第 329 図	溝状遺構遺物実測図 131	343
第 298 図	自然河川跡遺物実測図 36	311	第 330 図	溝状遺構遺物実測図 132	344
第 299 図	自然河川跡遺物実測図 37	312	第 331 図	溝状遺構遺物実測図 133	345
第 300 図	自然河川跡遺物実測図 38	313	第 332 図	溝状遺構遺物実測図 134	346
第 301 図	自然河川跡遺物実測図 39	314	第 333 図	溝状遺構遺物実測図 135	347
第 302 図	自然河川跡遺物実測図 40	315	第 334 図	溝状遺構遺物実測図 136	348
第 303 図	自然河川跡遺構実測図 6	316	第 335 図	柱穴跡遺物実測図 8	348
第 304 図	自然河川跡遺構実測図 7	317	第 336 図	遺物包含層遺物実測図 40	349
第 305 図	自然河川跡遺物実測図 41	318	第 337 図	遺物包含層遺物実測図 41	350
第 306 図	自然河川跡遺物実測図 42	319	第 338 図	遺物包含層遺物実測図 42	351
第 307 図	自然河川跡遺物実測図 43	320	第 339 図	遺物包含層遺物実測図 43	352
第 308 図	自然河川跡遺物実測図 44	321	第 340 図	I～VI区遺構配置図 1	353
第 309 図	自然河川跡遺物実測図 45	322	第 341 図	I～VI区遺構配置図 2	355
第 310 図	自然河川跡遺物実測図 46	323	第 342 図	I～VI区遺構配置図 3	357
第 311 図	自然河川跡遺物実測図 47	324	第 343 図	I～VI区遺構配置図 4	359
第 312 図	自然河川跡遺物実測図 48	325	第 344 図	I～VI区遺構配置図 5	361
第 313 図	自然河川跡遺物実測図 49	326	第 345 図	I～VI区遺構配置図 6	363
第 314 図	自然河川跡遺物実測図 50	327	第 346 図	I～VI区遺構配置図 7	365
第 315 図	自然河川跡遺物実測図 51	328	第 347 図	I～VI区遺構配置図 8	367
第 316 図	自然河川跡遺物実測図 52	329	第 348 図	I～VI区遺構配置図 9	369
第 317 図	自然河川跡遺物実測図 53	330	第 349 図	I～VI区遺構配置図 10	371
第 318 図	自然河川跡遺物実測図 54	331	第 350 図	I～VI区遺構配置図 11	373
第 319 図	自然河川跡遺物実測図 55	332	第 351 図	I～VI区遺構配置図 12	375
第 320 図	自然河川跡遺物実測図 56	333	第 352 図	I～VI区遺構配置図 13	377
第 321 図	自然河川跡遺物実測図 57	334	第 353 図	I～VI区遺構配置図 14	379
第 322 図	自然河川跡遺物実測図 58	335	第 354 図	I～VI区遺構配置図 15	381
第 323 図	自然河川跡遺物実測図 59	336	第 355 図	I～VI区遺構配置図 16	383
第 324 図	自然河川跡遺物実測図 60	337	第 356 図	X区遺構配置図 1	385
第 325 図	自然河川跡遺物実測図 61	338	第 357 図	X区遺構配置図 2	387
第 326 図	溝状遺構遺構実測図 14	340	第 358 図	Y区遺構配置図	389
第 327 図	溝状遺構遺構実測図 15	341	第 359 図	弥生時代後期から古墳時代までの竪穴住居跡及び掘立柱建物跡配置図	400
第 328 図	溝状遺構遺構実測図 16	342	第 360 図	調査対象地周辺の条里型地割復元図	411

表目次

第 1 表	発掘調査概要・体制一覧表	3	第 5 表	種類別土製品一覧表	408
第 2 表	整理作業期間・体制一覧表	8	第 6 表	種類別金属製品一覧表	409
第 3 表	赤色顔料付着遺物一覧表	406	第 7 表	香川県出土刻印須恵器一覧表	410
第 4 表	線刻画土器一覧表	407			
(CD-ROM)					
第 8 表	竪穴住居跡一覧表		第 14 表	不明遺構一覧表	
第 9 表	掘立柱建物跡一覧表		第 15 表	遺構別出土遺物内訳一覧表	
第 10 表	土坑一覧表		第 16 表	弥生土器・須恵器等一覧表	
第 11 表	土器棺墓一覧表		第 17 表	石器・石製品一覧表	
第 12 表	溝状遺構一覧表		第 18 表	金属製品一覧表	
第 13 表	柱穴跡一覧表		第 19 表	装身具一覧表	

写真図版目次

図版 1

上：I①区

下：II区

図版 2

上：III①・②区

下：IV①区

図版 3

上：IV②区

下：IV③区

図版 4

上：IV④・⑤区

下：V①区1

図版 5

上：V①区2

下：V①区南部

図版 6

上：V②区

下：V③区

図版 7

上：VI区

下：SD56 遺物出土状態 1

図版 8

上：SD56 遺物出土状態 2

下：SD56 遺物出土状態 3

(CD-ROM)

遺構写真図版 (I～VI区)

遺構写真図版 (X・Y区)

図版 9

上：SD56 遺物出土状態 4

下：SD56 遺物出土状態 5

図版 10

上：SD56 遺物出土状態 6

下：SD56 土器溜り 1

図版 11

上：SD56 土器溜り 2

下：SD79 遺物出土状態 1

図版 12

上：SD79 遺物出土状態 2

下：SH01

図版 13

上：SH01 土器溜り

下：SR01 遺物出土状態 1

図版 14

上：SR01 遺物出土状態 2

下：ST01・02

図版 15

上：X区 SRx01 遺物出土状態

下：X区 SRx02 下層中位土器検出状態

図版 16

上：X区・Y区全景

下：X区下層全景

遺物写真図版 (I～VI区)

遺物写真図版 (X・Y区)

第1章 調査の経過

第1節 遺跡の発見

旧練兵場遺跡は、善通寺病院と近畿中四国農業研究センターの敷地を中心として、善通寺市街地北部の東西約1 km、南北約500 mの範囲に所在する集落跡である。

香川県内の周知の埋蔵文化財包蔵地としては、古墳群や窯跡群、広域にわたる条里遺跡以外では最大規模の集落跡であり、隣接する仲村廃寺跡の下層遺構、彼ノ宗遺跡、弘田川西岸遺跡や善通寺市街地南部の四国学院大学構内遺跡等との関連から、その範囲は今後拡大することが予測されている。

さて、遺跡の発見には昭和20年代からの矢原高幸の研究活動が大きく貢献している。矢原は、早くから善通寺市内を中心に遺跡の詳細な踏査を行うことで、多くの遺跡の所在と内容を把握していたが、とりわけ当該遺跡については、長期間軍の管轄下にあったために、広域にわたって地下遺構が良好に保存されていることに留意し、頻繁に遺物が出土することから、再三にわたって遺構の観察と遺物の採集を行った。

こうした活動の成果は、昭和48年発行の『善通寺市の古代文化』の中に「元練兵場遺跡」の項目として纏められ、遺跡の発見の契機になるとともに、当該埋蔵文化財の保護行政の重要な手引きとなった。

ところが、矢原による踏査は個人的な活動であったために、表面的な踏査に留まらざるを得ず、本格的な発掘調査は、昭和30年代に尽誠学園史学会や善通寺第一高等学校歴史同好会等によって行われるのを待つことになった。なお、「旧練兵場遺跡」の名称が用いられ始めるのもこの時期頃である。

そして、さらに大規模な発掘調査は、昭和60年代になって旧四国農業試験場（現近畿中四国農業研究センター）、旧国立善通寺病院（現善通寺病院）、市営住宅等の改築や改修等に伴う事前調査として、香川県と善通寺市の各埋蔵文化財保護部局によって実施されるようになった。

以上のように、矢原の地道な研究活動に端を発し、地元教育界による組織的な小規模調査や自治体による大規模調査を経ることによって、遺跡の具体的な内容が次第に明らかになってきた。

第2節 事業内容と発掘調査

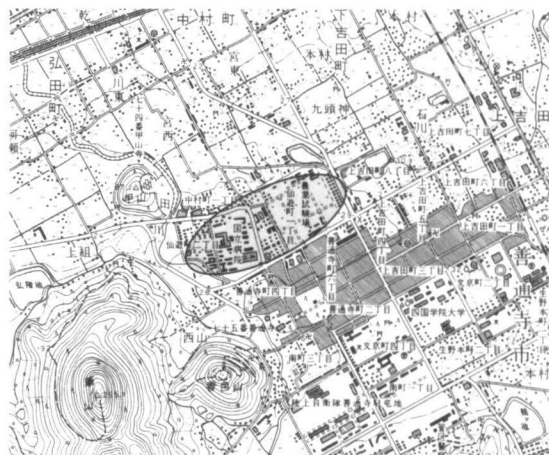
善通寺病院改修事業は、大きく看護学校の新設事業と、四国内の国立病院の一部機能の統合事業に分けられる。

前者は、平成6、7年度頃から計画されており、敷地の北東部にあった旧講習棟、旧総合汚水処理槽等を撤去して、新しい看護学校を建設するものである。

発掘調査は、平成8年10月1日から平成9年9月30日までの期間で実施された。

後者は、平成10年度頃から計画されており、敷地の西部にあった臨床研修研究棟、機能訓練棟や、南西部にあった屋内体育館、看護学校教場棟等を撤去して、新しい施設を建設するものである。

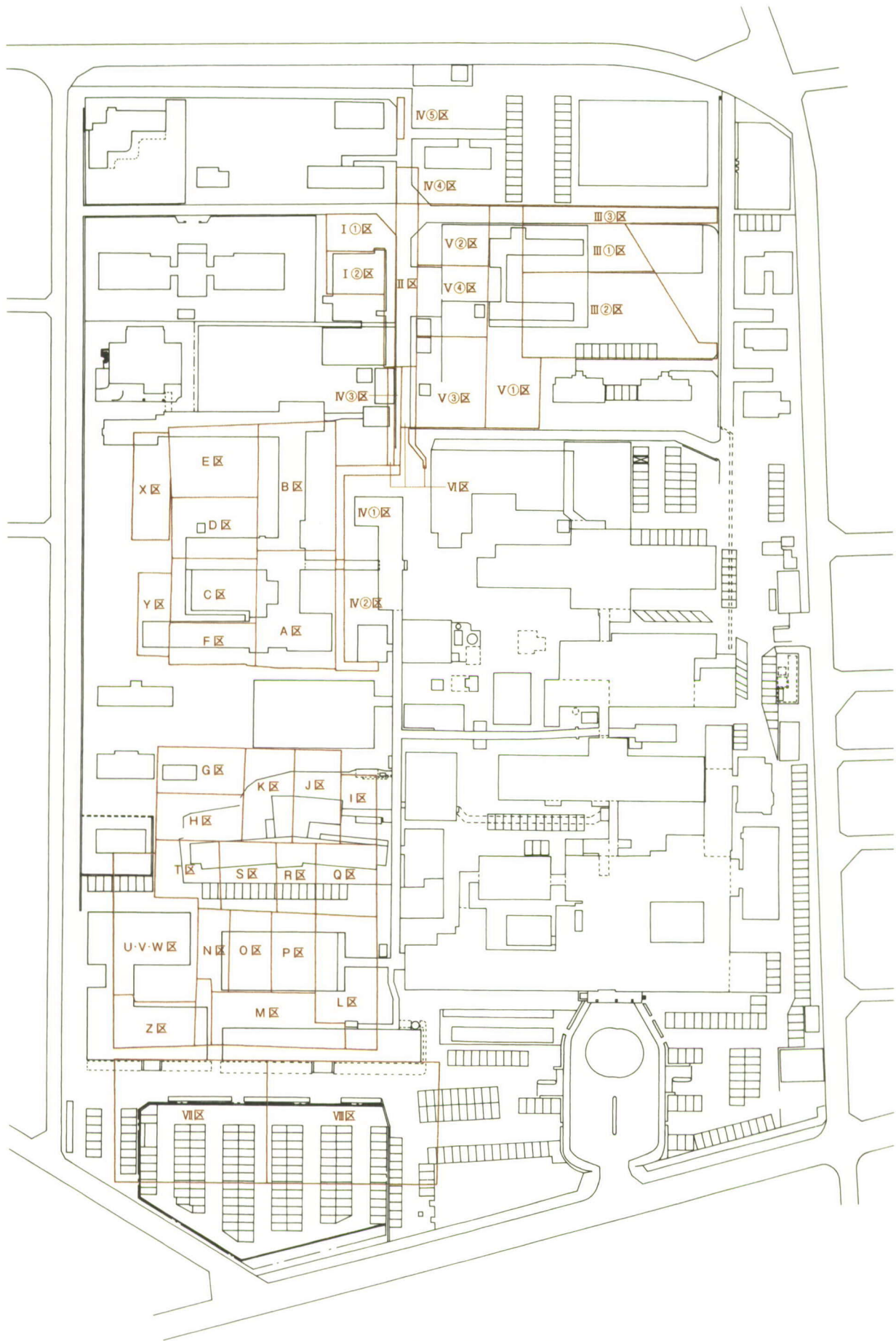
発掘調査は、平成13年4月1日から平成16年3月31日までの期間で実施された。



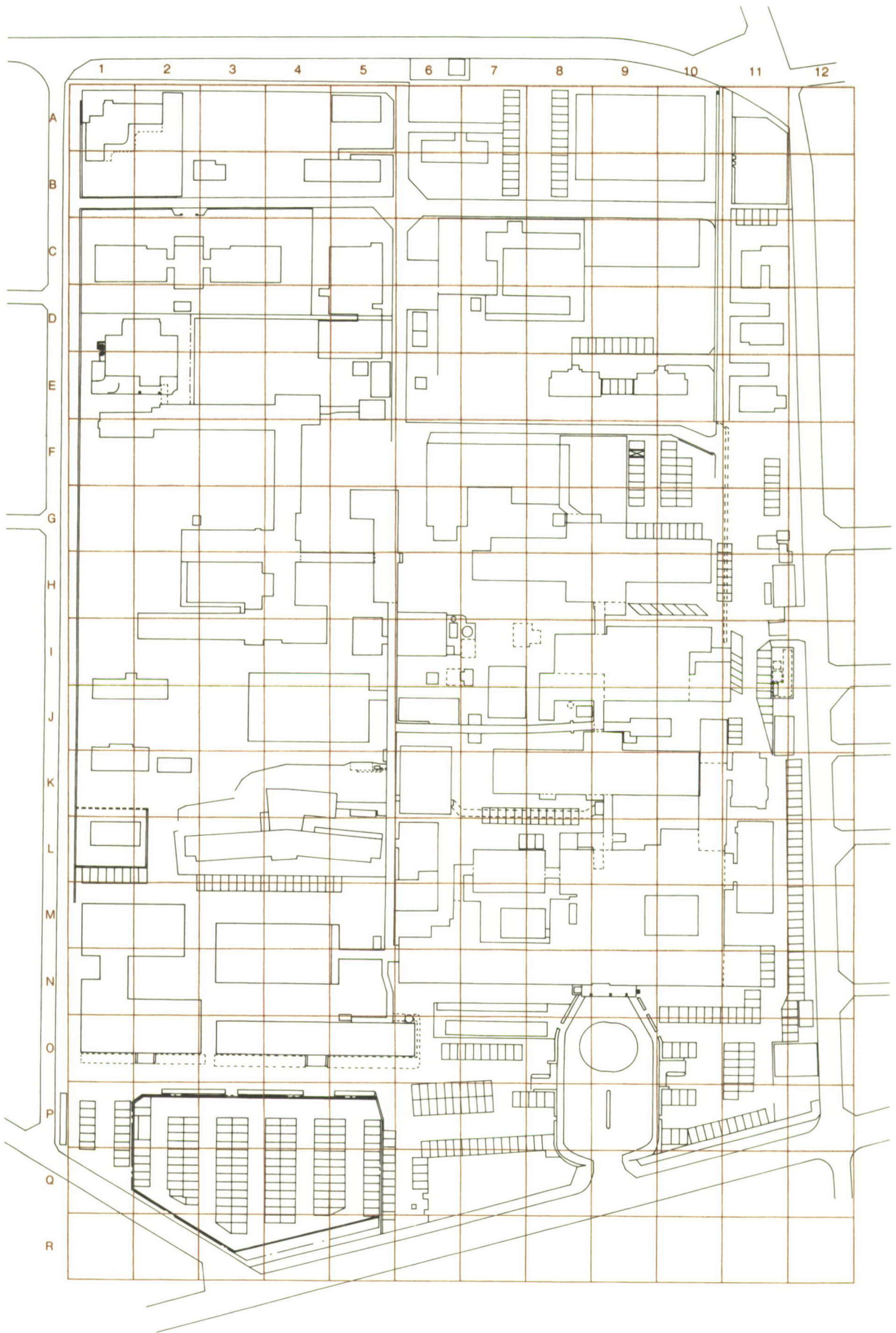
第1図 遺跡位置図及び善通寺病院主要埋蔵文化財調査位置図

第1表 発掘調査概要・体制一覧表

事業区分	看護学校建設事業		統合事業			
年 度	平成8年度	平成9年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
面積 (㎡)	3,000	3,000	3,250	4,854	3,616	3,547
期 間	平成8年 10月1日～ 平成9年 3月31日	平成9年 4月1日～ 平成9年 9月30日	平成13年 4月1日～ 平成14年 3月31日	平成14年 4月1日～ 平成15年 3月31日	平成15年 4月1日～ 平成16年 3月31日	平成16年 4月1日～ 平成17年 3月31日
体制	<p>(総括)</p> <p>課長 藤原章夫 課長補佐 高木一義 課長補佐 北原和利</p> <p>(総務)</p> <p>係長 山崎 隆 主査 星加宏明 主事 打越和美</p> <p>(埋蔵文化財)</p> <p>副主幹 渡部明夫 文化財専門員 植松邦浩 文化財専門員 木下晴一 技師 塩崎誠司</p>	<p>(総括)</p> <p>課長 菅原良弘 課長補佐 北原和利</p> <p>(総務)</p> <p>係長 山崎 隆 主査 松村崇史 主事 打越和美</p> <p>(埋蔵文化財)</p> <p>副主幹 渡部明夫 文化財専門員 木下晴一 技師 塩崎誠司</p>	<p>(総括)</p> <p>課長 北原和利 課長補佐 小国史郎</p> <p>(総務・芸術文化グループ)</p> <p>副主幹 中村禎伸 主任 須崎陽子 主任主事 亀田幸一</p> <p>(文化財グループ)</p> <p>副主幹 大山真充 主任 西岡達哉 文化財専門員 古野徳久 文化財専門員 宮崎哲治</p>	<p>(総括)</p> <p>課長 北原和利 課長補佐 渡邊勇人</p> <p>(総務・芸術文化グループ)</p> <p>主任 香川浩章 主査 須崎陽子 主任主事 亀田幸一</p> <p>(文化財グループ)</p> <p>副主幹 大山真充 主任 片桐孝浩 文化財専門員 古野徳久 文化財専門員 佐藤竜馬</p>	<p>(総括)</p> <p>課長 北原和利 課長補佐 森岡 修</p> <p>(総務・芸術文化グループ)</p> <p>主任 香川浩章 主査 須崎陽子 主任主事 八木秀憲</p> <p>(文化財グループ)</p> <p>副主幹 大山真充 主任 片桐孝浩 文化財専門員 佐藤竜馬 主任技師 松本和彦</p>	<p>(総括)</p> <p>課長 北原和利 課長補佐 森岡 修</p> <p>(総務・芸術文化グループ)</p> <p>主任 香川浩章 主査 堀本由紀 主任主事 八木秀憲</p> <p>(文化財グループ)</p> <p>課長補佐 大山真充 主任 山下平重 文化財専門員 佐藤竜馬</p>
	<p>(総括)</p> <p>所長 大森忠彦 次長 小野善範</p> <p>(総務係)</p> <p>参事 別枝義昭 係長 前田和也 主査 林 照代 主任主事 西川 大 主事 佐々木隆司</p> <p>(調査係)</p> <p>参事 近藤和史 主任文化財専門員 廣瀬常雄 主任文化財専門員 大山真充 係長 藤好史郎 文化財専門員 西岡達哉 文化財専門員 喜岡永光 調査技術員 門脇範子</p>	<p>(総括)</p> <p>所長 大森忠彦 次長 小野善範</p> <p>(総務係)</p> <p>参事 別枝義昭 副主幹兼係長 田中秀文 主査 林 照代 主任主事 西川 大 主事 細川信哉</p> <p>(調査係)</p> <p>参事 近藤和史 主任文化財専門員 廣瀬常雄 主任文化財専門員 大山真充 主任文化財専門員 藤好史郎 文化財専門員 西岡達哉 技師 豊島 修 調査技術員 中村文枝</p>	<p>(総括)</p> <p>所長 小原克己 次長 川原裕章</p> <p>(総務係)</p> <p>参事 河野浩征 副主幹 大西誠司 係長 多田敏弘 主査 山本和代 主任主事 高木康晴</p> <p>(調査係)</p> <p>主任文化財専門員 廣瀬常雄 主任文化財専門員 藤好史郎 文化財専門員 森下英治 主任技師 黒木康弘 調査技術員 森 麻子</p>	<p>(総括)</p> <p>所長 小原克己 次長 渡部明夫</p> <p>(総務係)</p> <p>参事 河野浩征 副主幹 野保昌弘 係長 多田敏弘 主査 山本和代 主任主事 高木康晴</p> <p>(調査係)</p> <p>参事 梅木正信 主任文化財専門員 藤好史郎 文化財専門員 森下英治 主任技師 黒木康弘 調査技術員 森 麻子</p>	<p>(総括)</p> <p>所長 中村 仁 次長 渡部明夫</p> <p>(総務係)</p> <p>参事 河野浩征 副主幹 野保昌弘 係長 多田敏弘 主査 塩崎かおり 主査 田中千晶</p> <p>(調査係)</p> <p>主任文化財専門員 藤好史郎 文化財専門員 森下英治 主任技師 松井和久 調査技術員 森 麻子 調査技術員 加納裕之 調査技術員 中里伸明</p>	<p>(総括)</p> <p>所長 中村 仁 次長 渡部明夫</p> <p>(総務課)</p> <p>課長 野保昌弘 係長 松崎日出穂 主査 塩崎かおり 主査 田中千晶</p> <p>(調査課)</p> <p>参事 河野浩征 課長 藤好史郎 文化財専門員 片桐孝浩 文化財専門員 福家正人 主任技師 細川健一 主任技師 信里芳紀 調査技術員 森 麻子 調査技術員 中嶋将史</p>



第2図 調査地区割図



第3図 調査区割図

第3節 看護学校建設事業に伴う発掘調査の経過

看護学校の建設事業は、平成8年度上半期に計画が具体化されるとともに、旧厚生省四国医務支局（現厚生労働省四国厚生支局）から事業計画が香川県教育委員会に伝えられ、埋蔵文化財の取り扱いについての協議が始まった。

香川県教育委員会では、病院の敷地全域が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、地下遺構に影響がある箇所については、発掘調査の実施が必要である旨を文化庁へ進達した。

文化庁からは、発掘調査の実施を指示した文書が提出され、その指示の下で事業に係る発掘作業が進められた。

ところが、香川県教育委員会は、事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地であるものの、面積が広いために地下遺構の保存状態、内容、密度等に関する情報が不足していると判断し、本格的な発掘調査に着手する前に、数箇所においてこれらの情報を蒐集することを目的とした試掘調査を実施した。

その結果、旧講習棟の東方では自然河川跡のみが確認されたために、当該箇所は調査の対象地から除外された。

本格的な発掘調査は、香川県教育委員会から再委託された財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが直営方式で実施した。

第1期に当たる平成8年度は、最初に焼却場の移転が予定されていたために、移転用地（Ⅰ①・②区）の調査から着手した。ただし、当該箇所については、旧総合污水处理槽の解体が遅れていたために、①区の調査を先行し、②区は同施設の解体後に実施した。

したがって、①区はかなり狭小な範囲となったが、隣接する旧総合污水处理槽の直近以外の箇所は、遺構の保存状態が良好で、多くの遺構・遺物が確認された。特に竪穴住居跡や柱穴跡の生活遺構が濃密に存在したため、居住域の中心部に相当することが予測された。

②区は工事により深い位置まで掘り取られていたために、溝状遺構のような深い遺構の一部が検出されるという状況であった。

次の調査箇所は、旧講習棟の跡地（Ⅲ①・②区）となった。同地は看護学校の校舎建設用地のために面積が大きいことから、北半部を①区、南半部を②区に分割した。当該地については、自然河川跡に近接することがわかっていたために、生活遺構の存在は予測されていなかったが、居住域の東側縁辺に沿うような配置の大型の溝状遺構や農耕に伴う溝状遺構等が検出された。しかも、地形が西から東へ緩やかに傾斜するために、堆積層が厚く、複数の遺構面が確認された。

引き続き、旧焼却炉と旧動物舎の東側から、倉庫棟の北側と西側を経て、病歴保管庫の西側へクランク状に通じる電線埋設箇所（Ⅳ①～③区）の調査を行った。当該箇所は総延長約104m、最大幅約3mの帯状の区画であったが、遺構密度が高く、居住域内部に相当することがわかった。しかしながら、狭小な範囲であることと各所に水道管等の配管が存在したために遺構の全体を確認することができたものは少なかった。

第1期の最後は、旧総合污水处理槽の東側及び旧講習棟北側の各道路部分の調査を行った。これまでの調査成果と同様に、前者において竪穴住居跡が重複して検出され、後者では溝状遺構と自然河川跡のみが確認された。

第2期に当たる平成9年度は、対象地がまとまっていたために、大区画もⅤ、Ⅵ区の2分割で対応し、

効率的な作業が行えた。

まずⅡ区とⅢ区の間をⅤ①～④区として調査を開始した。対象地の東部にⅢ②区から連続する大型の溝状遺構が検出され、多くの弥生土器が出土した。また、西部では竪穴住居跡や大型の柱穴跡で構成された掘立柱建物跡等が検出され、居住域の縁辺部の状況が明らかになった。

Ⅵ区は、Ⅳ①区の隣接地で、短冊型の区画となった。調査成果は、Ⅳ①区の内容を補足するものであった。

第4節 統合事業に伴う発掘調査の経過

平成8・9年度と同様に、発掘調査は香川県教育委員会から再委託された財団法人香川県埋蔵文化財調査センターによって直営方式で実施された。

新しい施設や設備の詳細な配置図と設計図が未完成であったため、建設用地の全域にわたって全面調査を実施した。

調査は、工程管理の便宜を図るために、対象地全体をA～Z、Ⅶ・Ⅷ区の28地区に小区分した上で、工事計画の優先順位に従って進めた。

なお、地区ごとの詳細な経過については、今後作成予定の報告書に収録することとし、本書ではX・Y地区について報告する。

当該地区は、平成15年度の当初計画では、調査対象地とされていなかったが、調査予定地であった外来駐車場の用地が継続使用されることになったため、計画変更で対象地となったものである。

すでに、同箇所にあった建物は、平成12年度中に解体が終了していたため、調査着手に当たっての障害はなく、平成15年12月上旬頃にY区から開始し、平成16年3月上旬頃に終了した。

狭小な地区であったが、自然河川跡を中心として、掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構、柱穴跡等の各種の遺構が検出された。

中でも自然河川跡は、対象地内の広い面積を占めるとともに、遺構が良好に保存されており、弥生土器や石器・石製品を中心とする多くの投棄された遺物を包蔵していたことから、特に慎重な作業が必要となった。

第5節 整理作業の経過

資料整理は、早期に発掘調査を終えたⅠ～Ⅵ・X・Y区から開始することになり、平成16年4月1日から平成18年3月31日の期間で実施した。

このうちⅠ～Ⅵ区の出土品については、平成16年4月1日から平成17年9月30日までの期間で、X・Y区の出土品については、平成17年10月1日から平成18年3月31日までの期間で実施した。

整理対象の出土品の量は、Ⅰ～Ⅵ区が342箱、X・Y区が118箱（A～Z区全体が2,804箱）である。

作業は、遺跡が香川県を代表する弥生時代を中心とした集落跡であることから、出土品が有する情報が香川県の弥生文化の特色を如実に表すことに留意して、可能な限り多くの出土品について報告することに重点を置いて進めた。

この結果、図面あるいは写真を掲載した出土品の総数は9,483点（Ⅰ～Ⅵ区が弥生土器、須恵器等の

土器類が7,168点、石器・石製品が576点、金属製品が18点、管玉・勾玉が5点、X・Y区が弥生土器、須恵器等の土器類が1,559点、石器・石製品が153点、金属製品が2点、ガラス製品2点)となった。

作業は、概ね原稿執筆、接合、実測資料の抽出、実測、トレース、データ入力、編集の工程で進み、当初計画のとおり終了した。

なお、弥生土器の一部についての実測及びトレースと、金属製品の保存処理及び炭化材の樹種同定業務について、専門業者へ業務委託を行った。

また、須恵器に施された刻印について、国立歴史民俗博物館平川南氏から、土製品について、大阪府立弥生文化博物館宮崎泰史氏から教示を得た。

第2表 整理作業期間・体制一覧表

年 度		平成 16 年度	平成 17 年度
期 間		平成 16 年 4 月 1 日～平成 17 年 3 月 31 日	平成 17 年 4 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日
体制	香川県教育委員会事務局文化行政課	(総括) 課長 北原和利 課長補佐 森岡 修 (総務・芸術文化グループ) 主任 香川浩章 主任 堀本由紀 主任主事 八木秀憲 (文化財グループ) 課長補佐 大山真充 主任 山下平重 文化財専門員 佐藤竜馬	(総括) 課長 吉田光成 課長補佐 中村禎伸 (総務・芸術文化グループ) 副主任 河内一裕 主任 堀本由紀 主任主事 八木秀憲 (文化財グループ) 課長補佐 藤好史郎 主任 山下平重 文化財専門員 信里芳紀
	香川県埋蔵文化財センター	(総括) 所長 中村 仁 次長 渡部明夫 (総務課) 課長 野保昌弘 係長 松崎日出穂 主査 塩崎かおり 主査 田中千晶 (資料普及課) 課長 渡部明夫(兼務) 主任文化財専門員 西岡達哉 臨時職員 安藤真澄 猪木原美恵子 河 美抄穂 木下裕美 陶山仁美 長谷川郁子 三谷和子 渡辺美穂	(総括) 所長 渡部明夫 次長 榊原正人 (総務課) 課長 榊原正人(兼務) 副主任兼係長 松崎日出穂 主査 塩崎かおり 主査 田中千晶 (資料普及課) 課長 廣瀬常雄(兼務) 主任文化財専門員 西岡達哉 臨時職員 朝田加奈子 上原慶子 門脇範子 河 美抄穂 木下裕美 鳥谷真希子 米田静恵

第2章 立地と環境

対象地は、善通寺市街地の西郊に位置する。当該地域は、緩傾斜地から平坦地にかけての変化点の地形に相当し、真言宗総本山善通寺に隣接することや、鳥坂峠の利用による丸亀・善通寺地域と三豊・観音寺地域との交通及び多度津・善通寺間の交通の要衝に当ることから、早くから宅地化が進行した経緯がある。ところが一方では、弘田川の利水により広範囲での農耕地の開発が進められてきた。このため、市街地の近郊でありながら、宅地と農耕地が混在する景観を示していることが地理的環境の特徴である。

旧練兵場遺跡については、これまでに多くの調査・研究が行われてきたために、弥生時代の遺跡の立地条件や周辺の遺跡群との関連等について、多くの調査報告や研究成果が公表されている。

そこで本章では、今回の調査によって新たに判明した遺跡の属性である中世前半期について、遺跡を取り巻く景観を絵画資料にもとづいて概観することで、断続的ではあるが、弥生時代から中世前半期を経て、現代に至る景観の変遷を捉える。

さて中世前半期の善通寺市の景観を知ることができる絵画資料としては、真言宗総本山善通寺が所有している徳治2年（1307年）に製作された重要文化財「善通寺伽藍并寺領絵図」（通称「讃岐国善通寺領一円保差図」）が著名である。

すでに同絵図については、野中寛文、高橋昌明等の研究成果が公表されており、内容、作製の目的、作製者等について詳細な分析結果を見ることができる。

これらの研究成果のうち、特に絵図の内容に関する分析結果が、本遺跡の景観と密接な関連性があることから、同結果をもとに作業を進める。

この点は野中の項目整理が簡潔なことから、それに従って五つに分類して記述する。

1 方形に区画された平地・傾斜地、区画線を形づくる道・畦等

整然とした碁盤目状の区画線は、条里地割を表現したものと考えられており、現在の善通寺市街地に見られる南北方向の基軸が北から約30°西へ傾いた整然とした碁盤目状の地割の原形であった可能性が高い。

ただし、絵図では中央やや右寄りの上下に連なる山塊の左右で、区画線の間隔が異なる以外は、完全な碁盤目状であるが、高橋によると絵図の下（北）から4本目の横方向の区画線を境にして、南北方向の区画線の連続性は途切れていたことが明らかであることから、実際の地形を全くの誤りもなく写し取ったものではないことがわかる。

この区画線上には、広狭の幅の溝や川が描かれた箇所があることから、当該時期に直線状の道や畦が実際に存在した可能性がある一方で、溝や川が描かれていない箇所については、区画線を具現化させた構築物の存否については明らかになっていない。

2 山群

画面の右半分にある山塊は、左端を消滅した八幡山（24.5 m）として、右へ香色山（153.2 m）、筆ノ山（295.7 m）、我拝師山（481.2 m）、中山（439.7 m）、火上山（408.9 m）の順で描かれている。作製者は、それぞれの山の高さについても忠実に表現しようとしたことが、概ね我拝師山と中山を他よりも高く表

現していることから想像される。

3 池・出水・溝等の水系施設、川

画面の上部中央からやや右寄りの黒く塗りつぶされた隅丸長方形の箇所が、現在の大池である。池から左方向に派生した黒い波線が弘田川である。描かれた弘田川の流路については、当該時期の本遺跡の景観を考察する際の重要な参考資料である。

なお、川と溝の表現の区別は明確でなく、弘田川は最も幅が広いことと区画線以外の箇所にも描かれていることから、川と認定されているようであるが、溝の表現にも幅の広狭が認められることから、弘田川の表現に区画線上の直線箇所があることを考慮すると、これらの中にも人為的に区画線上に流路が固定された川が含まれる可能性はあると思われる。

4 建築物、石造物等

建築物は、善通寺の伽藍や誕生院等に見られるように、壁の表現がある寺院関係のものと、壁の表現のない屋根だけの民家と考えられるものがある。

特に後者については、総数 122 棟の家屋がまとまり方によって、次の 7 グループに大別されることに気付かされる。

第 1 グループ：善通寺の伽藍を中心としたまとまり (71 棟)

第 2 グループ：左下隅 (北東) のまとまり (5 棟)

第 3 グループ：善通寺の伽藍の真下 (北) で弘田川の東岸のまとまり (11 棟)

第 4 グループ：中央やや右寄りの上下に連なる大きい山塊の右側のまとまり (15 棟)

第 5 グループ：第 4 グループの右側のまとまり (7 棟)

第 6 グループ：第 5 グループと山塊を挟んだ右側のまとまり (6 棟)

第 7 グループ：右下隅 (北西) のまとまり (7 棟)

これらのうち、第 1 グループは現在の善通寺市街地に相当することから、善通寺の創建当時から家屋数が群を抜いていたことは、容易に想像できるのであるが、注目すべきは第 3 グループである。このグループが、現在の善通寺病院の敷地に相当する箇所もしくはその近隣に位置すると考えられる。中でも右半分の 5 棟については、完全に病院の敷地内に含まれる可能性が高いと考えられている。

ところで、描かれた家屋 1 棟分が実際の 1 棟分を表現したもののか否かの結論は出されていないが、重要な点は家屋の出現頻度であり、頻度の高低によって家屋の密度を推定することが可能になる。

そこで、第 3 グループの家屋出現頻度は、グループ全体で $11:122 = 0.09$ 、右半分だけが $5:122 = 0.04$ となる。全体で約 10%、右半分で約 5% の比率は、当該地域の中心地であったと考えられる第 1 グループの 58% ($71:122$) と比較しても、かなりの高比率と判断される。

すなわち、当該時期における当該地については、都市の郊外としては家屋が多く、人口密度が高い地域であったと思われる。

5 人名、寺社名、地名、方角名等

善通寺病院の敷地に相当する箇所に見られるものは、「末弘」、「利友」、「重次四反」、「寺家作」の4項目である。

これらのうち、前2者と「重次」については、人名であり、他に描かれた僧侶を表す人名(「そうしやう(僧正)」、「いんしう(院主)」等)とは明らかに描き方が異なることから、庶民を表すものと考えられている。

このように、庶民のうち古地図上に人名が描かれるのは、土地所有者か土地耕作者の場合が多いことがわかっている。したがって、当該時期の遺跡周辺には、農業に携わるものが多く居住していた可能性がある。

さらに、「四反」は土地の広さを表し、「寺家作」は善通寺の所有地であることを表すことから、土地の属性が農耕地であったことがわかる。

これらのことから、当該時期の遺跡周辺が、広く農耕地として開発されていたことは確実である。

以上の分析結果が、中世前半期の遺跡の景観を復元する際の参考資料である。

すなわち、弥生時代には縦走する多くの自然河川間の中州状の微高地ごとの集落が分散していたものが、当該時期には広い範囲にわたって、耕地整理された農耕地が出現するとともに、集落は多くの家屋を包括することで規模が大型化したことがわかった。

当該時期に形成された集落の規模、形態等が、現在の集落の様相を決定するとともに、景観を固定化させたことが想像される。

第3章 看護学校建設事業に伴う発掘調査の成果

第1節 土層序

調査対象地内には、善通寺病院以前にも陸軍病院等の施設が存在したために、それらの建設工事による深い掘削箇所が島状に多く存在するが、破壊や損傷等を免れた遺構や遺物包含層の保存状態は概ね良好と判断される。これは明治29年の国による土地取得以降、当該地が国の管理下に置かれ、演習場や病院用地として乱開発から守られてきたためである。

基本的な土層序は、以下の3種類に区分されるが、第2層については、対象地内の一部地域に限って存在することが判明している。

第1層：表土層。善通寺病院や陸軍病院等の建設に伴う造成土と、これらの施設建設前の農耕地の耕作土。

後者については、包蔵されていた陶磁器やガラス等から、明治時代初期の所産と考えられる。

第2層：遺物包含層。本層序は、微高地（Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ区）の縁辺部の緩傾斜地に相当するⅢ区、Ⅳ区を中心に分布しており、主に河水による土砂の運搬作用によって形成されたことが推測できる。

ただし、Ⅲ区の自然河川跡の上位の堆積層については、古墳時代以降には水田耕作土として利用されていたと考えられることから、自然堆積によるものだけではなく、人工的に造成あるいは改良されたものを含む可能性がある。

花粉及びプラントオパール分析調査は実施していない。

またⅣ区においては、本層序の上位において遺構が確認された箇所がある。

第3層：弥生時代後期以降の遺構の基盤土。粘性のある黄色系の砂質土。

善通寺市域に見られる同層序中には、旧石器時代や縄文時代後期の遺物が包蔵される例が見られるが、本対象地内では全くの無遺物であった。

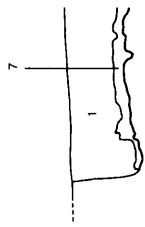
なお、この土層序のありかたは、四国横断自動車道建設に伴って発掘調査された遺跡群のうち、本遺跡から至近距離にある永井遺跡、中村遺跡、乾遺跡の基本土層序と類似することから、善通寺市街地の北部に立地する遺跡に通有なものと考えられる。

第2節 遺構と遺物

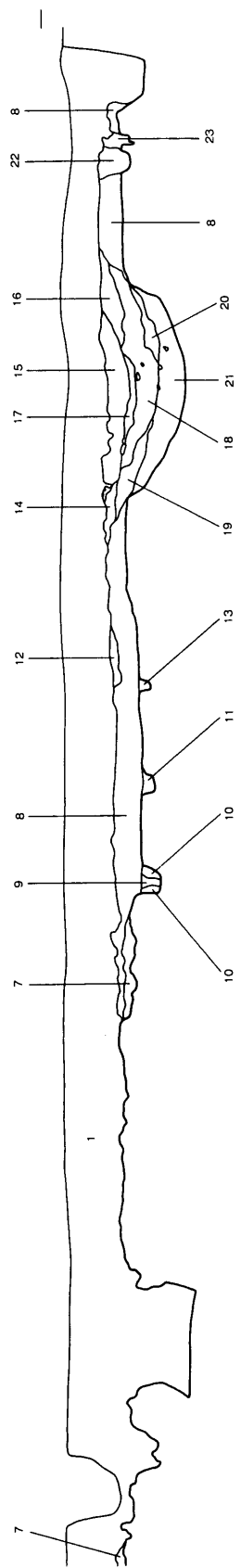
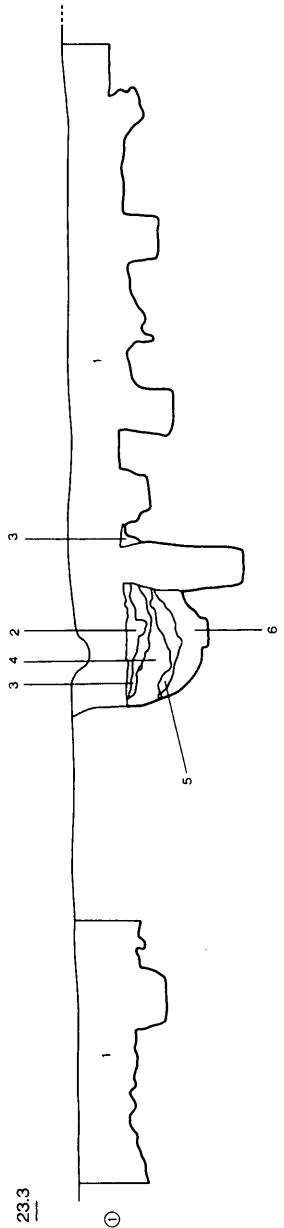
検出された遺構の所属時期は、弥生時代中期から古墳時代初期まで、古墳時代から奈良時代まで、平安時代後半期から鎌倉時代までの3期に大別することができる。

報告に際しての留意点は、以下のとおりである。

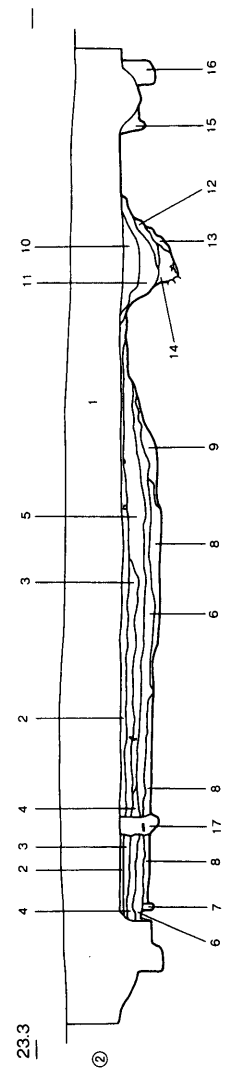
- ・遺構略号は、原則として種類別の古い所属時期順に「01」からの通し番号とした。
- ・竪穴住居跡及び掘立柱建物跡に伴う柱穴跡、土坑、溝状遺構の遺構略号は、「S」を削除して、遺構ごとに「P01」、「K01」、「D01」からの通し番号とした。
- ・遺構の平面形態、規模、方向性については、種類別に一覧表にまとめ、解説文との重複を避けた。



23.3



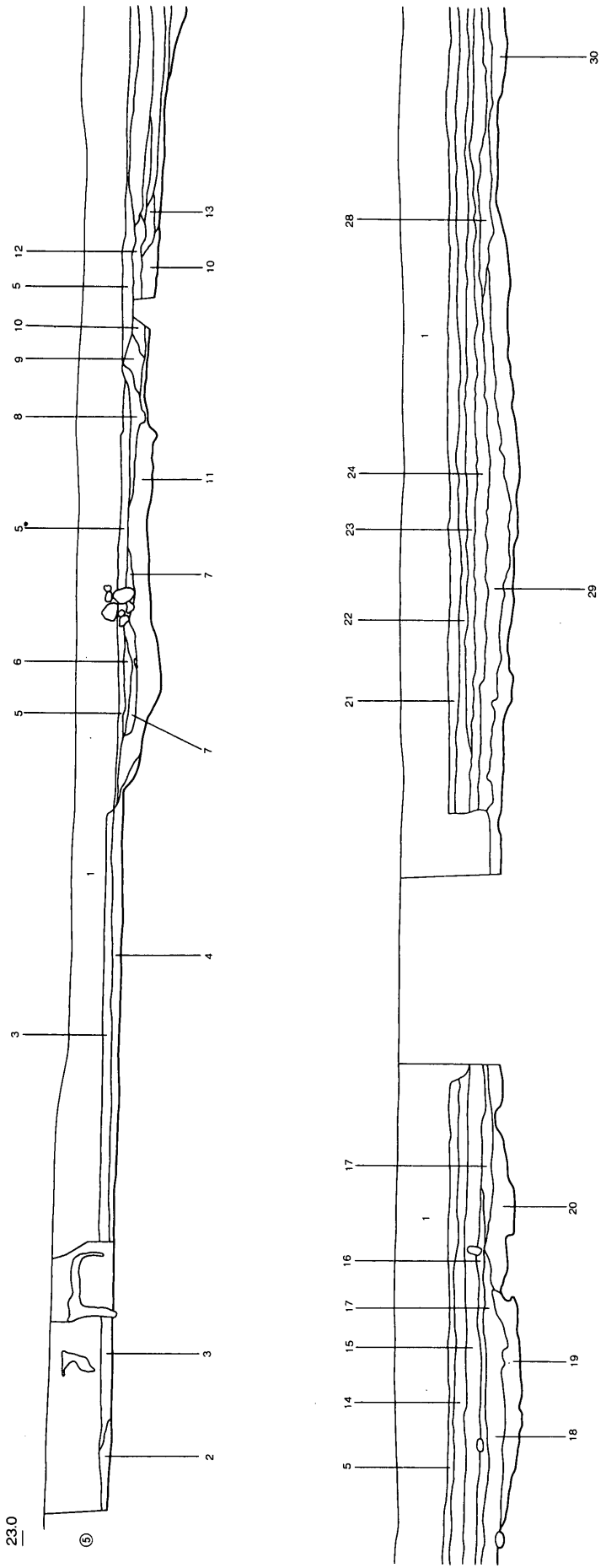
- 1 造成土
- 2 灰褐色砂質土
- 3 黄灰色砂質土 (黄色土壤が混入する)
- 4 灰褐色砂質土
- 5 黄灰色砂質土
- 6 灰褐色砂質土
- 7 灰褐色砂質土
- 8 灰褐色砂質土 (弱粘性)
- 9 黄褐色砂質土
- 10 黄褐色砂質土
- 11 褐色砂質土
- 12 褐色砂質土
- 13 黑褐色砂質土
- 14 灰褐色砂質土
- 15 灰褐色砂質土
- 16 灰褐色砂質土
- 17 灰褐色砂質土
- 18 灰褐色砂質土
- 19 灰褐色砂質土
- 20 褐色砂質土
- 21 黄褐色砂質土
- 22 灰褐色砂質土
- 23 褐色砂質土



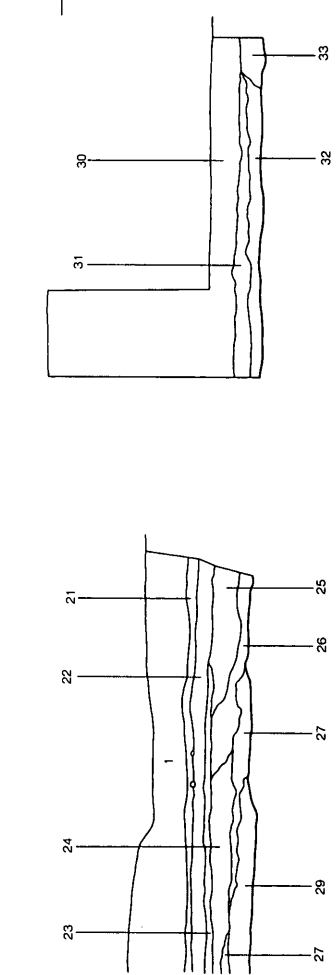
- 1 造成土
- 2 黑褐色砂質土
- 3 黄褐色砂質土
- 4 黄褐色砂質土
- 5 黄褐色砂質土
- 6 黄褐色砂質土 (粘床)
- 7 黄褐色砂質土 (粘床)
- 8 黄褐色砂質土 (黄色土壤が混入する)
- 9 黄褐色砂質土 (黄色土壤が混入する)
- 10 黄褐色砂質土
- 11 灰褐色砂質土
- 12 黄褐色砂質土
- 13 黄褐色砂質土
- 14 灰褐色砂質土
- 15 灰褐色砂質土
- 16 灰褐色砂質土
- 17 黑褐色砂質土

第5図 土層序断面実測図 1

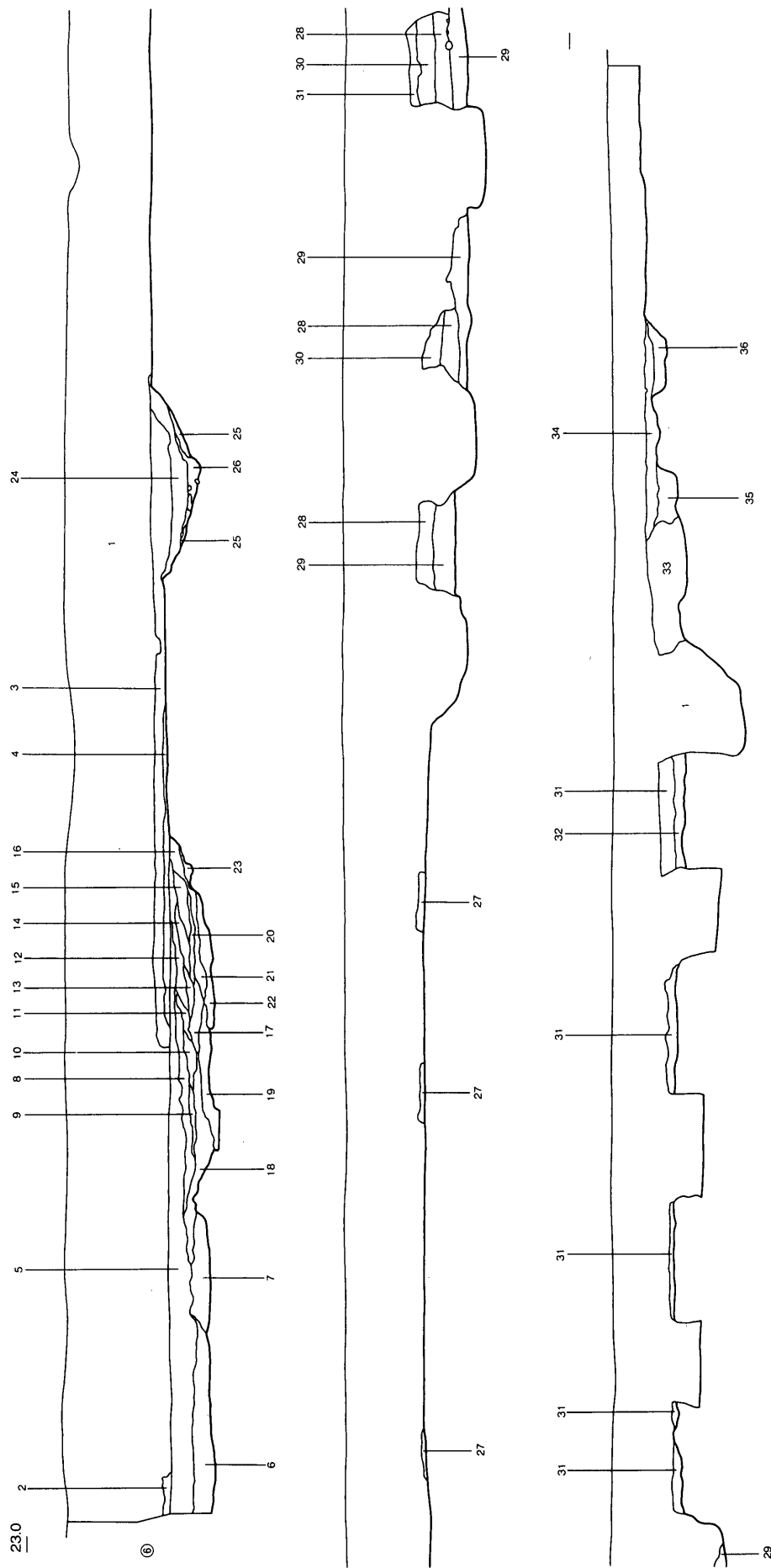
23.0



- 1 造成土
- 2 黑灰色砂質土
- 3 灰褐色砂質土
- 4 灰褐色砂質土
- 5 灰褐色砂質土
- 6 灰褐色砂質土
- 7 灰褐色砂質土
- 8 灰褐色砂質土
- 9 灰褐色砂質土
- 10 黑褐色砂質土
- 11 砂礫
- 12 灰褐色砂質土
- 13 灰褐色砂質土
- 14 灰褐色砂質土
- 15 灰褐色砂質土
- 16 灰褐色砂質土
- 17 灰褐色砂質土
- 18 灰褐色砂
- 19 黑灰色砂質土
- 20 灰褐色砂質土
- 21 灰褐色砂質土
- 22 灰褐色砂質土
- 23 灰褐色砂質土
- 24 灰褐色砂質土
- 25 灰褐色砂質土
- 26 灰褐色砂質土
- 27 灰褐色砂質土
- 28 灰褐色砂質土
- 29 灰褐色砂質土
- 30 灰褐色砂質土
- 31 灰褐色砂質土
- 32 灰褐色砂質土
- 33 灰褐色砂質土

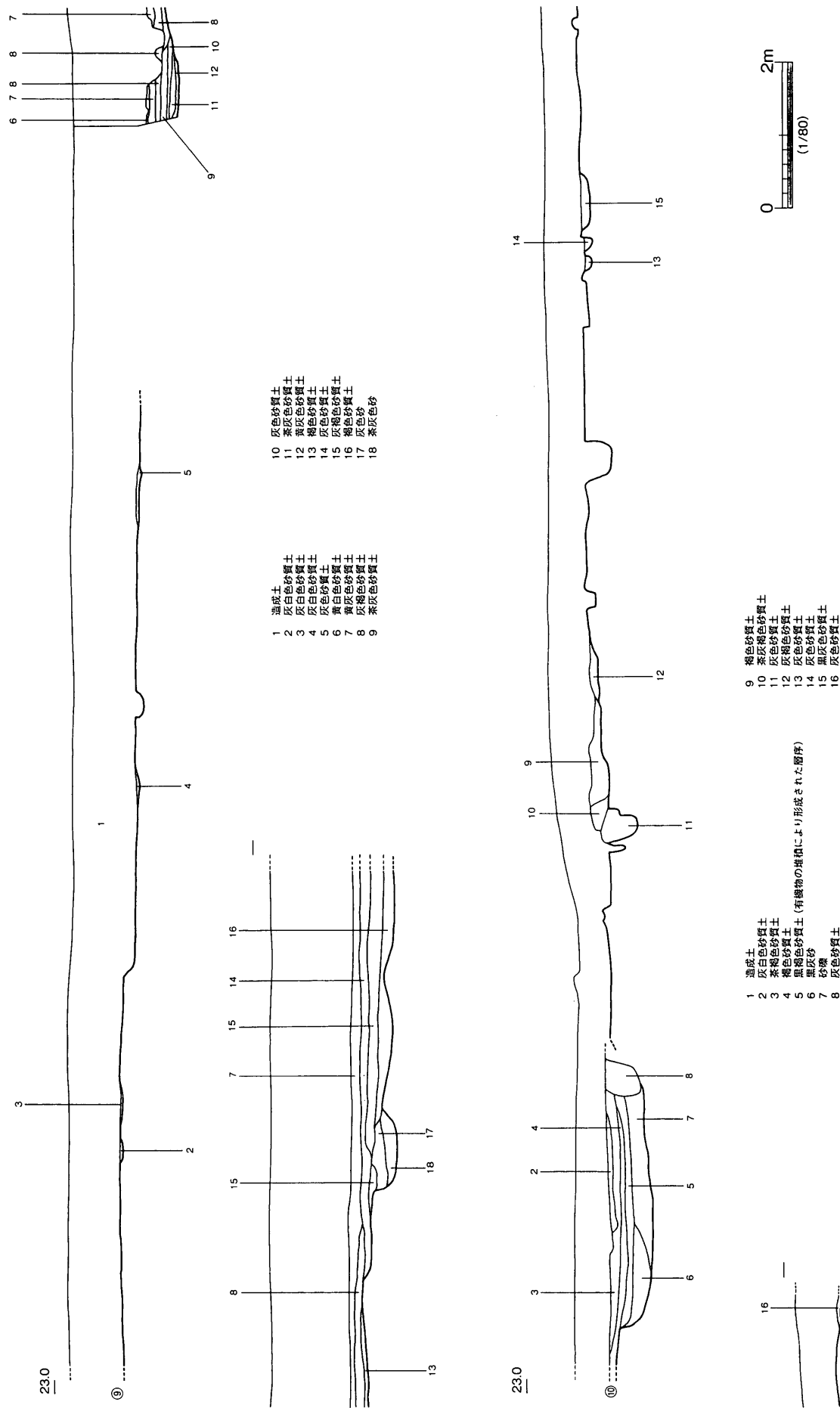


第8圖 土層序断面実測図4

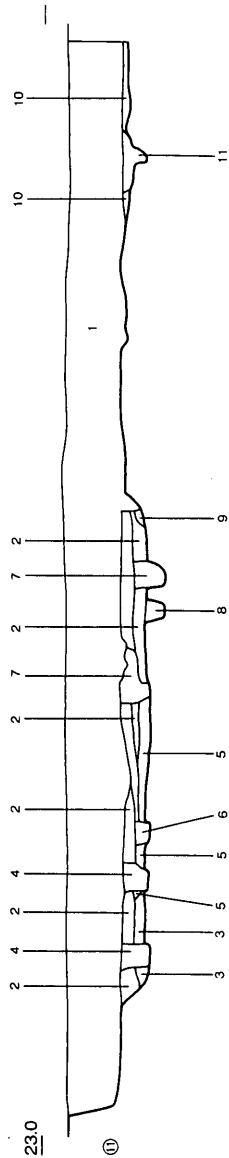


- | | | | |
|----|---------------|----|--------|
| 1 | 遺積土 | 28 | 茶灰色砂質土 |
| 2 | 灰褐色砂質土 | 29 | 灰色砂質土 |
| 3 | 灰色砂質土 | 30 | 茶褐色砂質土 |
| 4 | 黄灰色砂質土 | 31 | 灰色砂質土 |
| 5 | 茶灰色砂質土 | 32 | 黄灰色砂質土 |
| 6 | 黒灰色砂質土 | 33 | 茶色砂質土 |
| 7 | 褐色砂質土 | 34 | 茶色砂質土 |
| 8 | 灰白色砂 | 35 | 茶褐色砂質土 |
| 9 | 灰色砂質土 | 36 | 灰褐色砂質土 |
| 10 | 黄灰色砂質土 | | |
| 11 | 灰色砂質土 | | |
| 12 | 灰褐色砂質土 | | |
| 13 | 黄灰色砂質土 | | |
| 14 | 灰褐色砂質土 | | |
| 15 | 灰褐色砂質土 | | |
| 16 | 灰褐色砂質土 | | |
| 17 | 灰白色砂 | | |
| 18 | 灰白色砂 | | |
| 19 | 黒灰色砂質土 (粘性あり) | | |
| 20 | 茶褐色砂質土 | | |
| 21 | 黒灰色砂質土 | | |
| 22 | 黒灰色砂 | | |
| 23 | 灰白色砂 | | |
| 24 | 灰色砂 | | |
| 25 | 茶灰色砂質土 | | |
| 26 | 黄灰色砂質土 | | |
| 27 | 灰色砂質土 | | |

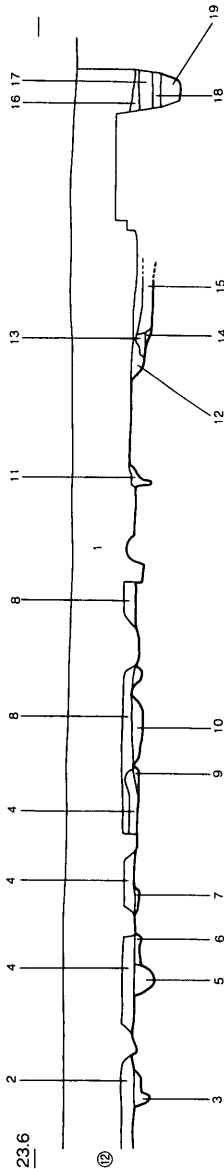
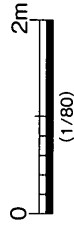
第9図 土層序断面実測図5



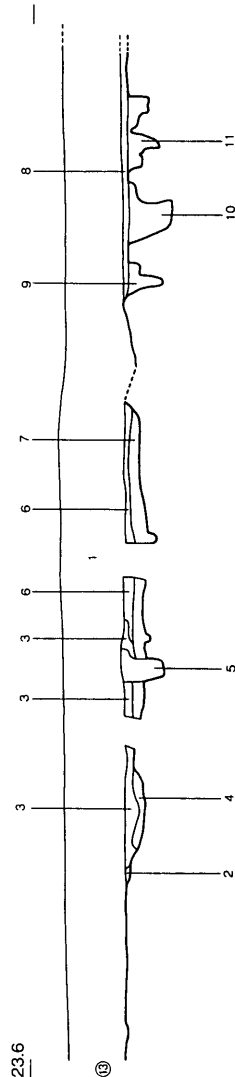
第 11 図 土層序断面実測図 7



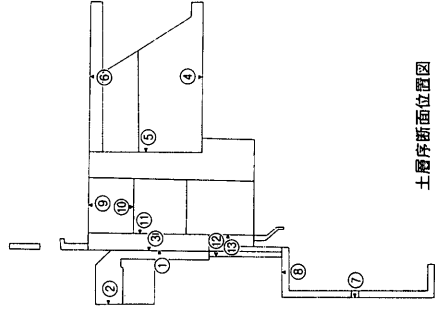
- 造成土
 1 灰色砂質土
 2 黄灰色砂質土
 3 黄灰色砂質土
 4 黄灰色砂質土
 5 灰白色砂質土
 6 灰褐色砂質土
 7 灰褐色砂質土
 8 灰褐色砂質土
 9 黒褐色砂質土
 10 灰色砂質土
 11 灰白色砂質土
- (ベッド状遺構を形成していた層序)
 (炭化材、焼土が混入する)



- 造成土
 1 灰色砂質土
 2 灰褐色砂質土
 3 黄灰色砂質土
 4 黒灰色砂質土
 5 黒灰色砂質土
 6 褐色砂質土
 7 褐色砂質土
 8 褐色砂質土
 9 灰褐色砂質土
 10 黒灰色砂質土
- 11 灰色砂質土
 12 灰褐色砂質土
 13 灰褐色砂質土
 14 黒灰色砂質土
 15 褐色砂質土
 16 褐色砂質土
 17 褐色砂質土
 18 褐色砂質土
 19 黒灰色砂質土



- 造成土
 1 灰色砂質土
 2 黒灰色砂質土
 3 黒灰色砂質土
 4 灰褐色砂質土
 5 灰褐色砂質土
 6 灰褐色砂質土
 7 黒灰色砂質土
 8 黒灰色砂質土
 9 黒灰色砂質土
 10 黒灰色砂質土
 11 黒灰色砂質土



土層序断面位置図

第12図 土層序断面実測図8

・弥生土器の各器種の名称については、「壺形土器」は「壺」、「甕形土器」は「甕」のように、「形土器」を省略した。

・弥生土器の主要器種の「壺形土器」、「甕形土器」、「鉢形土器」、「高杯形土器」については、口縁部の形態により「壺形土器」及び「甕形土器」を「A」～「E」、「鉢形土器」を「A」～「C」、「高杯形土器」を「A」～「C」、脚端部の形態により「高杯形土器」を「D」～「E」に分類することにより、出土頻度を把握するための基準とした。

特に、大量の弥生土器が出土した、溝状遺構、自然河川跡、遺物包含層の各資料については、上記の分類にもとづいて、簡潔な解説に努め、記述は、「壺・甕A」、「鉢B」、「高杯C」のように簡略化した。各部位の分類基準は、以下のとおりである。

「壺形土器及び甕形土器」の「A」：口縁端部が肥厚されたもの。

「壺形土器及び甕形土器」の「B」：口縁上端部が下端部よりも相当大きく肥厚されたもの。

「壺形土器及び甕形土器」の「C」：口縁端部が小さく肥厚されたか、肥厚されていないもの。

「壺形土器及び甕形土器」の「D」：壺形土器のうち、頸部が直立する形態のもの。

「壺形土器及び甕形土器」の「E」：口縁上端部が突出した複合口縁の形態のもの。

「鉢形土器」の「A」：口縁部に屈曲箇所がなく、同端部が肥厚されたもの。

「鉢形土器」の「B」：口縁部がく字形に折り曲げられており、同端部が細く成形されたもの。

「鉢形土器」の「C」：口縁部に屈曲箇所がなく、同端部が細く成形されたもの。

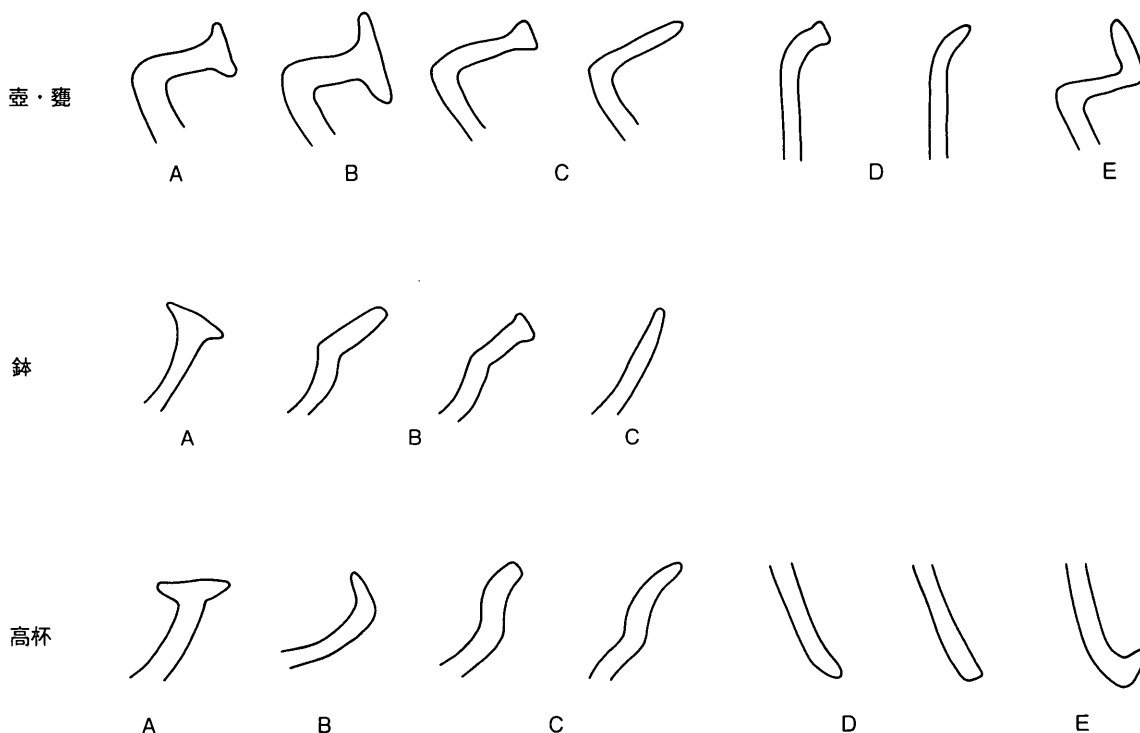
「高杯形土器」の「A」：口縁端部が大きく肥厚されたもの。

「高杯形土器」の「B」：口縁部が内側に折り曲げられたもの。

「高杯形土器」の「C」：口縁部に屈曲箇所があり、同端部が外反されたもの。

「高杯形土器」の「D」：脚端部に屈曲箇所がないもの。

「高杯形土器」の「E」：脚端部が上方に屈曲するもの。



第13図 弥生土器主要器種形態分類模式図

- ・当該遺構が、下位の遺構を壊して構築されたか、あるいは下位の遺物包含層を掘削して構築されたときに混入した、本来当該遺構に伴わない遺物については、原則として当該遺構の解説の文末で報告した。
- ・各遺構からの出土品については、遺構ごとに内訳を一覧表にまとめることで報告を簡略化するとともに、実測図を掲載したものについても、図面に表現のある内容と、CD-ROM 掲載の一覧表の記載と重複する内容についての解説は省略した。

1 弥生時代中期から古墳時代初期の遺構

(1) 竪穴住居跡

① SH01

[遺構] I ①区の南西隅部に所在し、遺構の西半部は対象地の外部に存在する。

床面の中心部が、東西、南北方向がともに約 240cm となる正方形の範囲にわたって、周囲に比べて、約 5 cm 深い凹地になっている。このため、周縁の壁面沿いには基盤土の掘り残しによって形成されたベッド状遺構が認められる。

炉跡は床面中央部の P18、P34、P94、P95 を包括した不整形の凹地で、主柱穴跡は床面の凹地の各隅部にある P03、P83、P91 である。

これらの遺構を含めて、112 個の柱穴跡が検出されており、4 本柱以外にも 6～8 本柱の内部構造を想定することも可能であるが、上記以外の主柱穴跡の構成については把握できていない。

本遺構の特徴としては、埋土の中央部に破碎された弥生土器群が集中して包蔵されていることがある。これらには、原形に復元することができる資料を含むことから、破片が他所へ移動した可能性が少ないために、竪穴住居跡の埋没過程において、遺構内へ一括して投入されたことが考えられる。破片の散逸が少ないことは、丁寧に投入されたことを意味することから、不要物の廃棄よりも祭祀に伴う行為の形跡と考えられる。

[遺物] 88 は孔の直径が小さいことから、道具としての用途は考え難く、装身具の可能性が高い。139 の外面には、鋸歯文 1 単位について、頂点の位置が同心円上に定められた後に、棒あるいは板状の道具が各頂点間に当てられて、繊細な直線が引かれている。幾何的な思考にもとづいた造作と判断できる。157 は精巧な造作である。179 は縦断面が鼓形に似た低い台形であることから、鯨や鯨のような大型動物の脊椎骨を模倣した形態と考えられる。大型動物の脊椎骨を作業台として利用する例は、縄文時代から弥生時代にかけて日本列島の広い地域に分布することが知られている。

② SH02

[遺構] I ②区の南西隅部に所在し、遺構の西半部は対象地の外部に存在する。壁面は全く存在しないが、最下面が平坦であることと、同面に柱穴跡 8 個が存在することから、竪穴住居跡の床面と判断した。

遺構の規模が小さく、柱穴跡が浅いために、柱穴跡の配列や主柱穴跡の構成については不明である。

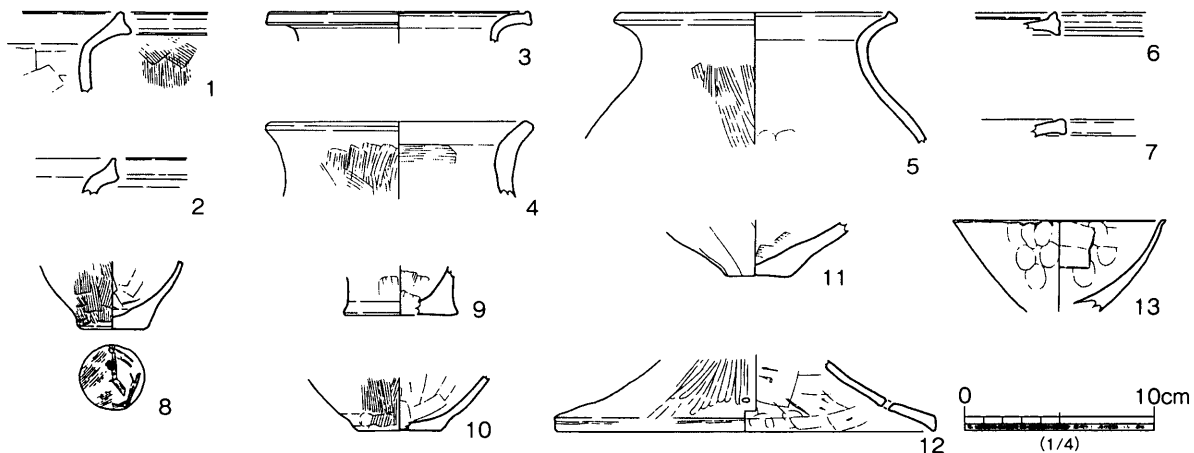
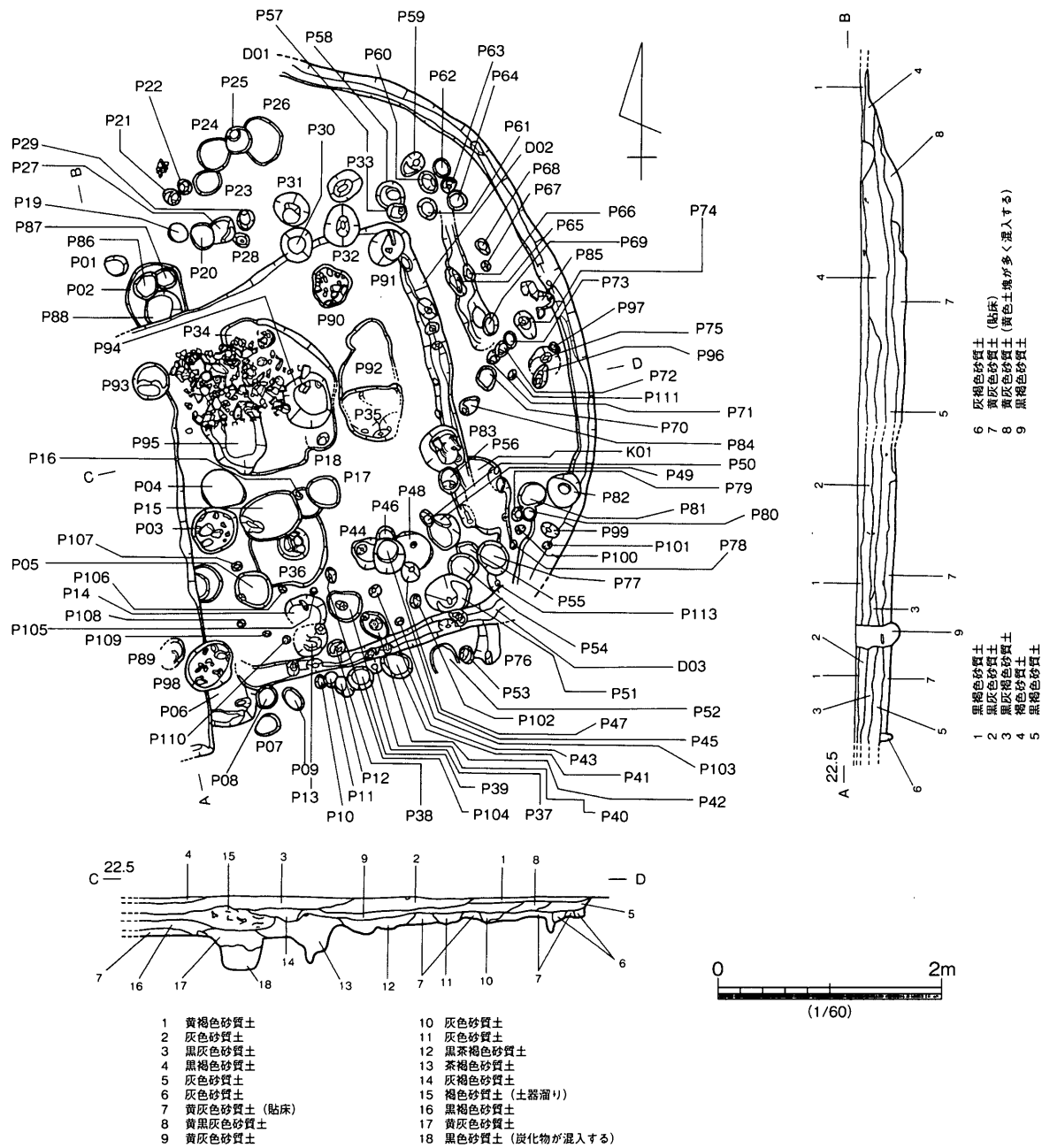
[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良で、図示できたものは 214 だけである。

③ SH03

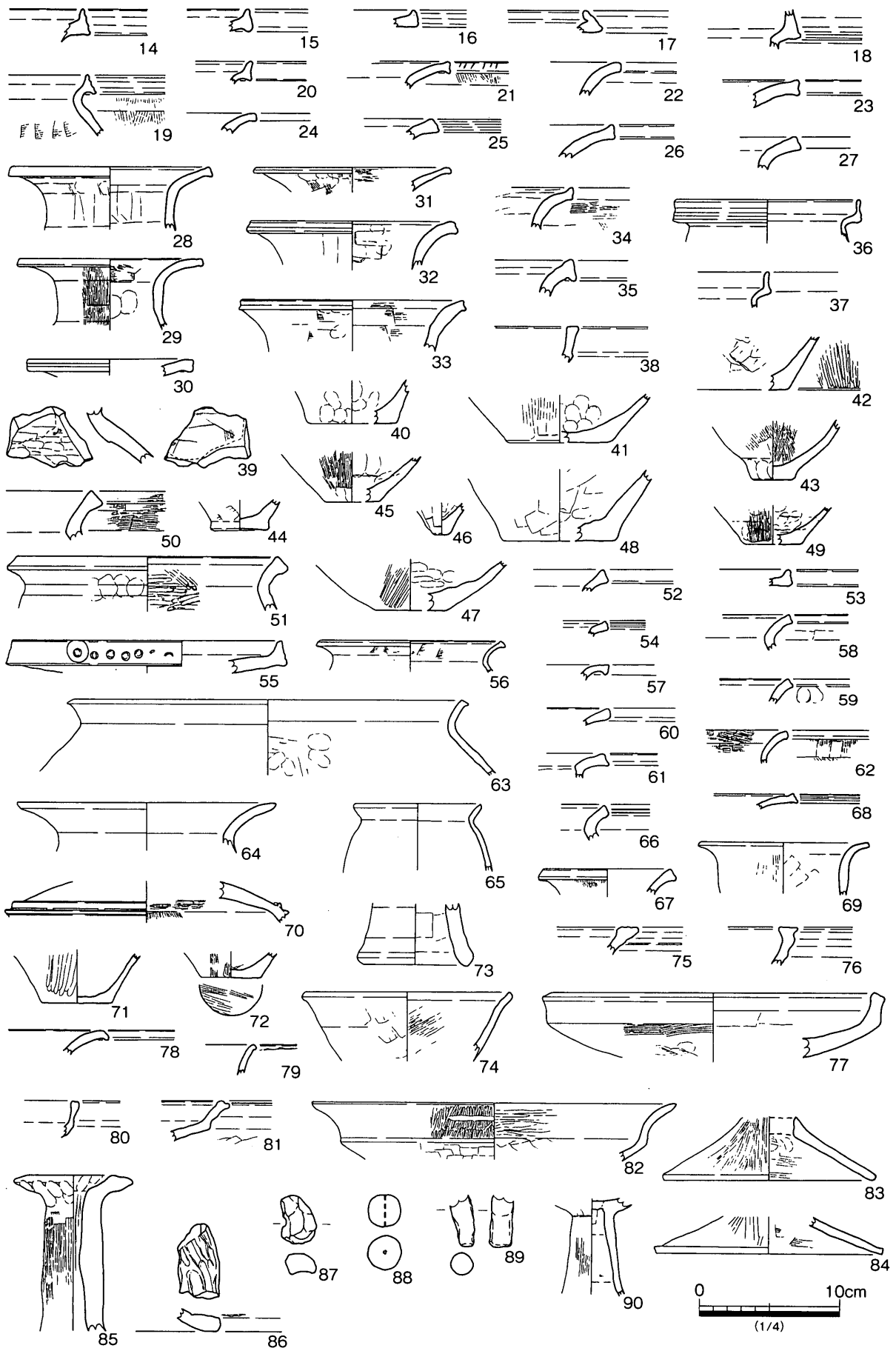
[遺構] II 区の南部に所在する。隣接する I ①区では、遺構の延伸部分が検出されていない。

直線的な壁面と、直角に近い北東隅部の平面形態から、規格的に構築されたことが想定される。

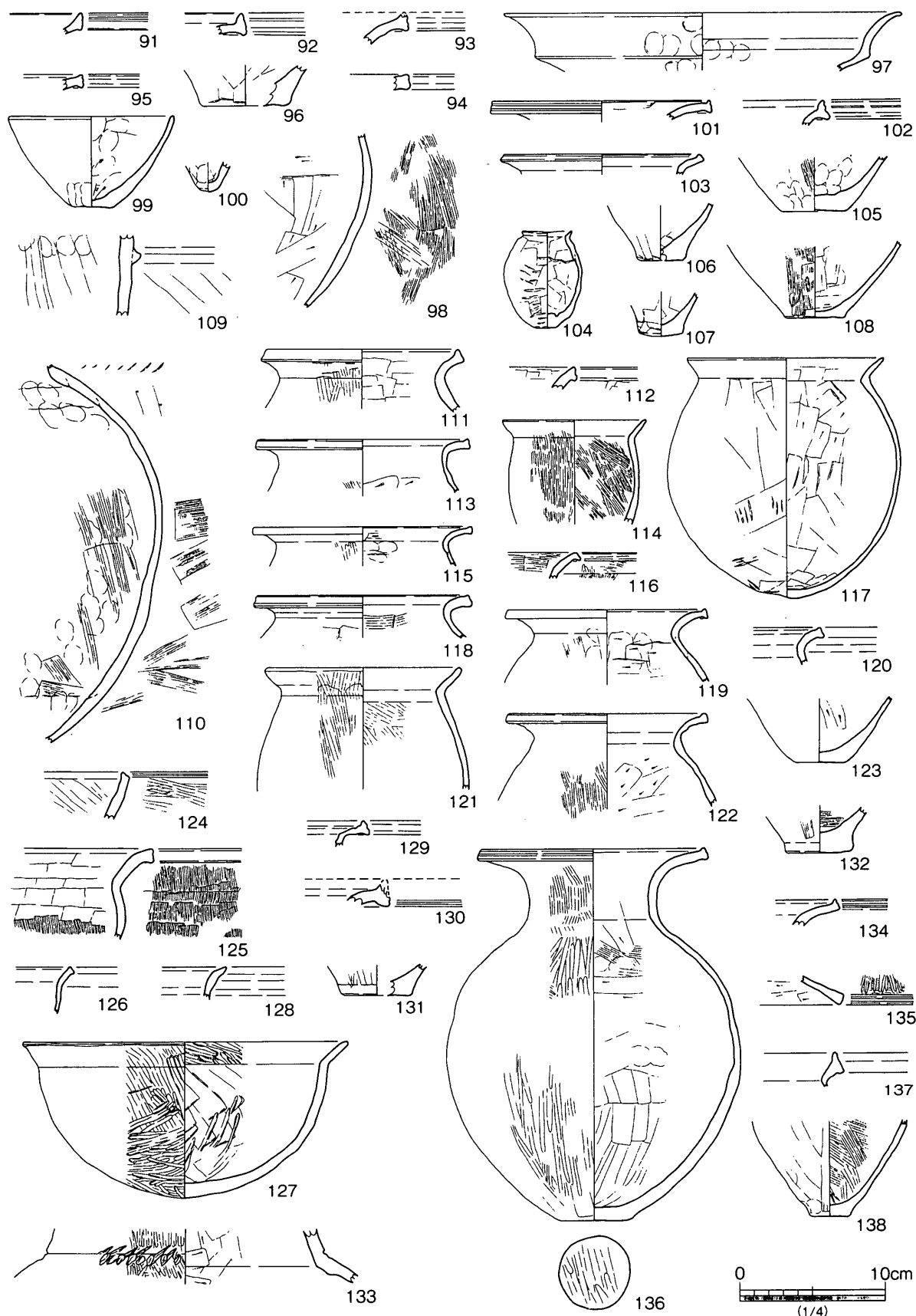
東壁面沿いに断続的な壁溝が存在する。P01、P02 が主柱穴跡と考えられることから、全体では 4 個



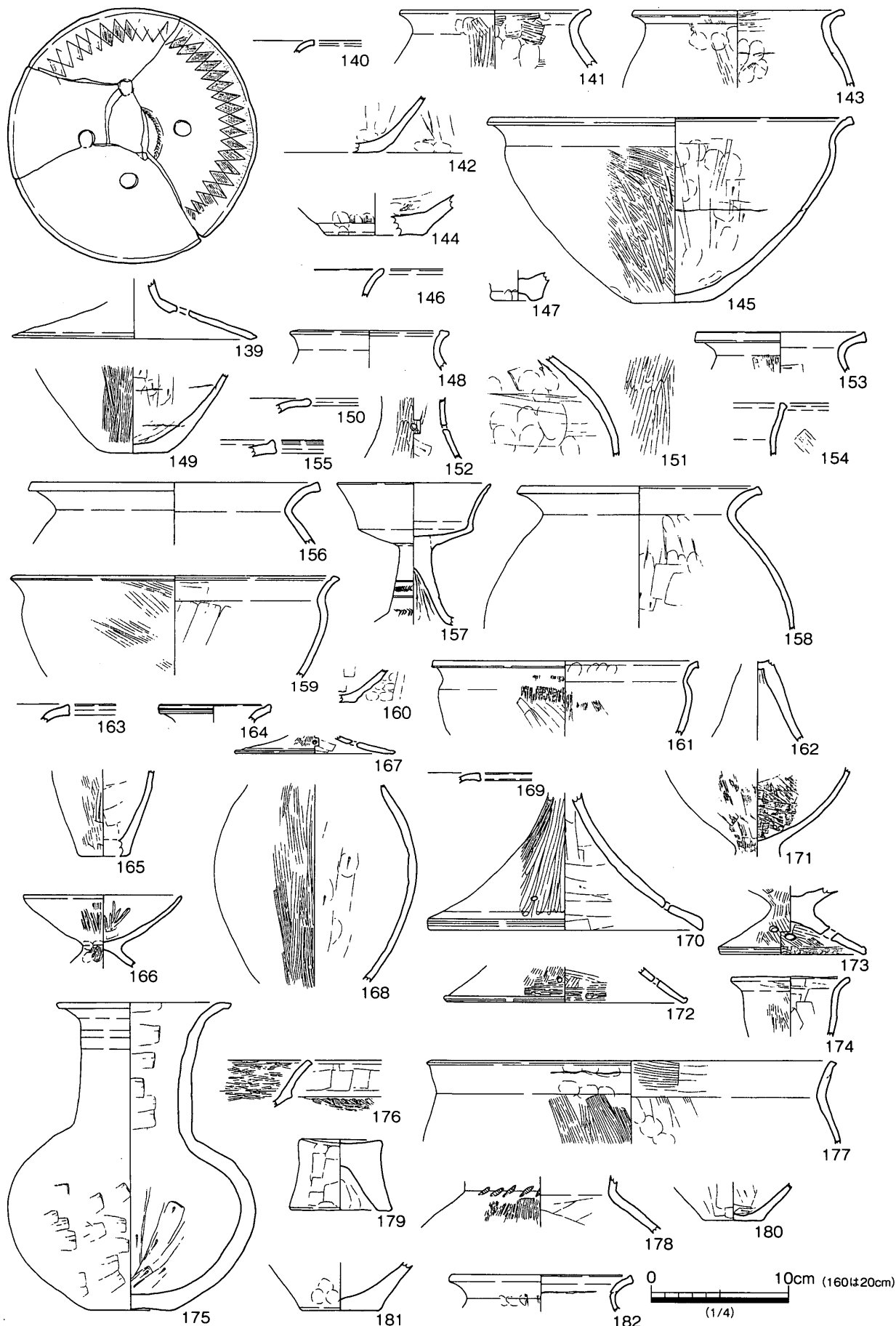
第14図 竪穴住居跡遺構実測図1 (SH01)・遺物実測図1 (1~13:SH01)



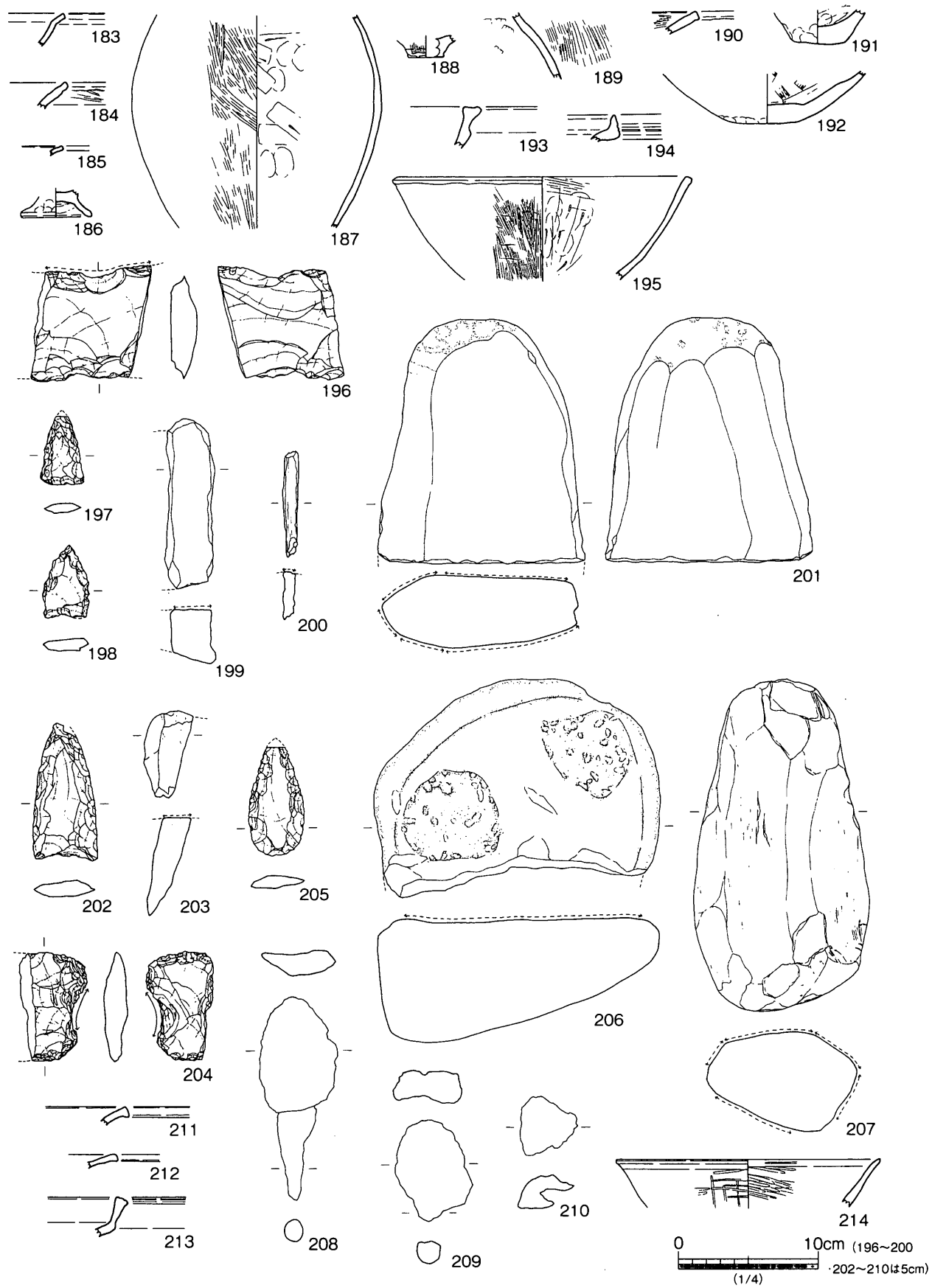
第 15 图 竖穴住居跡遺物実測図 2 (14 ~ 90:SH01)



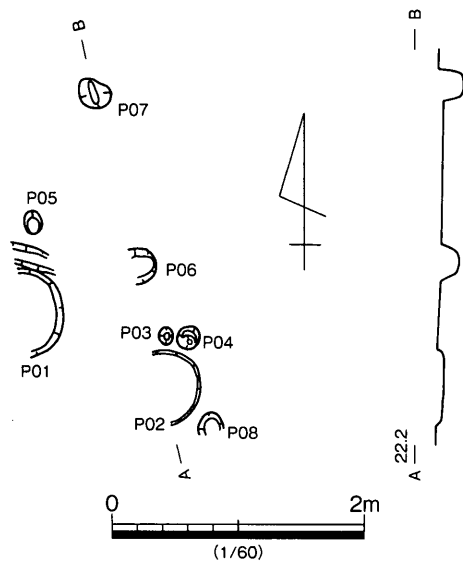
第 16 図 豎穴住居跡遺物実測図 3 (91 ~ 138:SH01)



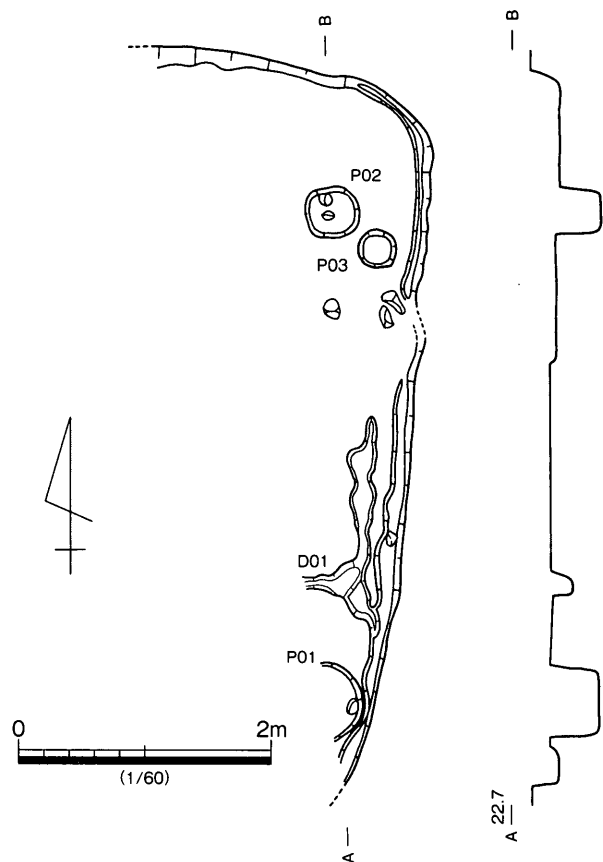
第 17 図 竪穴住居跡遺物実測図 4 (139 ~ 182:SH01)



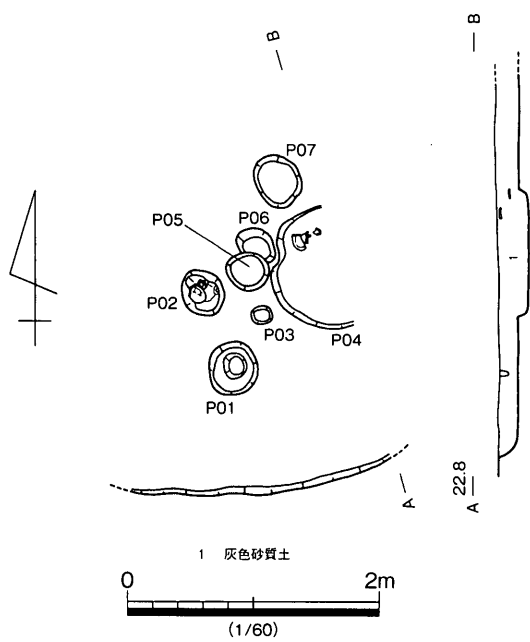
第 18 図 豎穴住居跡遺物実測図 5 (183~213:SH01,214:SH02)



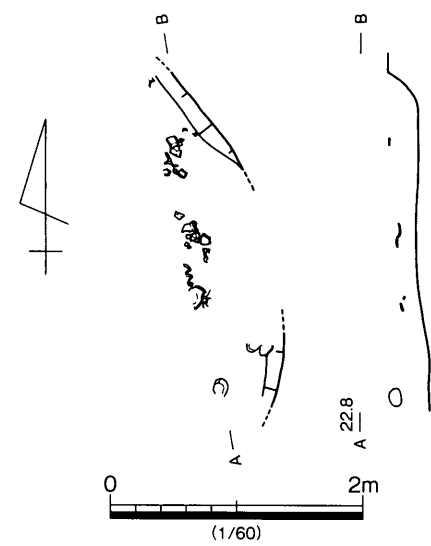
第 19 図 豎穴住居跡遺構実測図 2 (SH02)



第 20 図 豎穴住居跡遺構実測図 3 (SH03)



第 21 図 豎穴住居跡遺構実測図 4 (SH04)



第 22 図 豎穴住居跡遺構実測図 5 (SH05)

の柱穴跡が正方形に配置されていたことが推測される。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

④ SH04

[遺構] II 区の南部に所在し、SH03 が上位に存在する。隣接する V③区では、遺構の延伸部分が検出されていない。

南壁面の一部分が残存する。7 個の柱穴跡のうち、柱痕がある P01 が主柱穴跡と考えられる。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

⑤ SH05

[遺構] II 区の南部に所在し、SH03 と SH06 が上位に存在する。隣接する I①区では、遺構の延伸部分が検出されていない。東壁面が断続的に検出されているが、平面形態は円弧を描いていることがわかる。

床面から遊離した状態で弥生土器が集中して出土した。これらは、広い範囲にわたって散乱していることと、原形に復元することが難しいことから、他所で破損した不用品の一部分が投棄されたものと考えられる。

[遺物] 231 は口縁部が直線的に長く開口する器形である。

⑥ SH06

[遺構] II 区の南部に所在する。隣接する V③区では、遺構の延伸部分が検出されていない。

直線的な壁面と、直角に近い南西隅部の平面形態から、規格的に構築されたことが想定される。

各壁面沿いには壁溝が存在し、床面の南半部には柱穴跡が集中して存在している。主柱穴跡は P06 であり、柱痕の内部には根石が残されていた。同柱穴跡の位置から、主柱穴跡は 4 個が正方形の配列を示すものであったことが推測される。

[遺物] 244 は複合口縁の形態である。

⑦ SH07

[遺構] II 区の北部に所在する。

北壁面の一部分と床面が検出された。壁面の平面形態は、円弧を描いていることがわかる。柱穴跡は、壁面沿いと住居跡の中心部の位置に分かれて分布している。主柱穴跡は不明である。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

⑧ SH08

[遺構] II 区の中央部において、SH09 の下位に所在するため、遺構の大部分が失われている。隣接する I①区では、延伸部分は検出されなかった。

東壁面の平面形態は、円弧を描いていることがわかる。壁面沿いには、壁溝が存在する。柱穴跡は 9 個確認されているが、主柱穴跡に相当するものは確定できない。

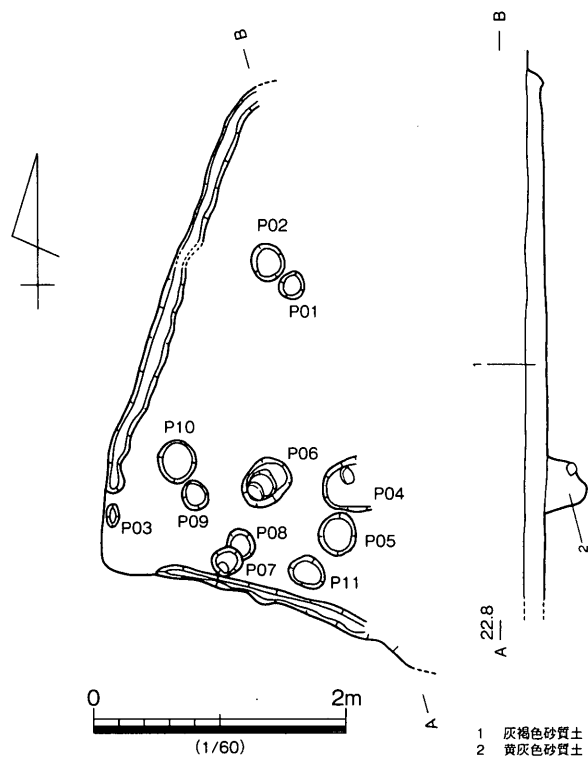
[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

⑨ SH09

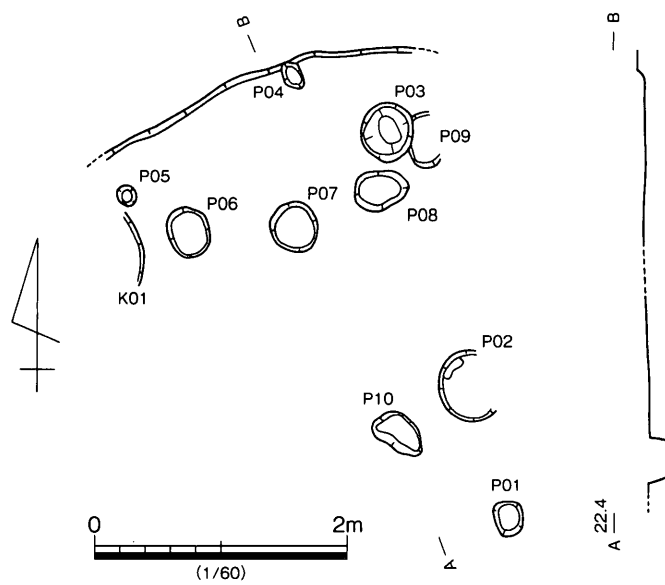
[遺構] II 区の中央部に所在し、北・南壁面及び床面の一部分が確認された。

南壁面沿いには、壁溝が存在する。床面にある 23 個の柱穴跡は、壁面に沿った位置に集中して分布していることから、主柱穴跡は、壁面に平行して同心円状に配列されていると考えられる。柱痕が認められる P17 が主柱穴跡に属する可能性が高い。

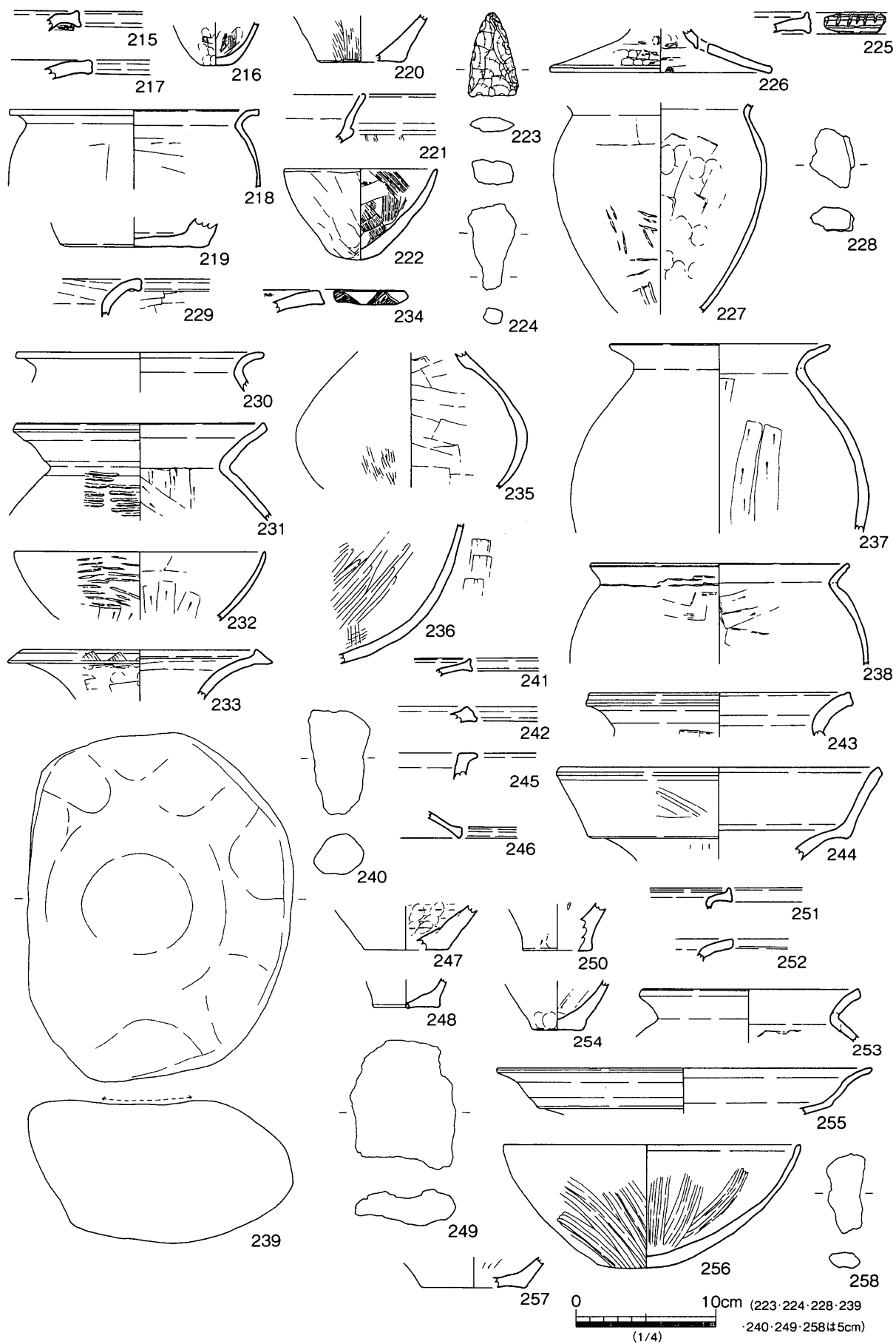
[遺物] 275 は残存する横方向の先端部に抉りがある。277 は刃部が長い不整な菱形の平面形態を示す先



第 23 図 豎穴住居跡遺構実測図 6 (SH06)

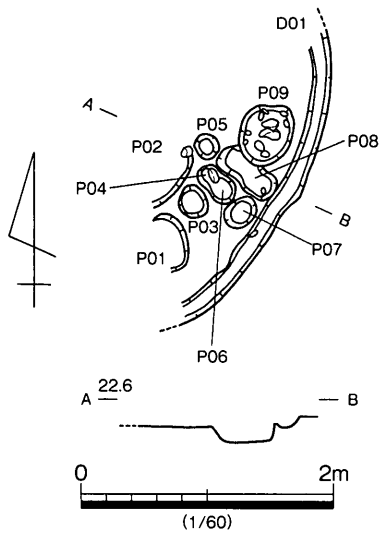


第 24 図 豎穴住居跡遺構実測図 7 (SH07)

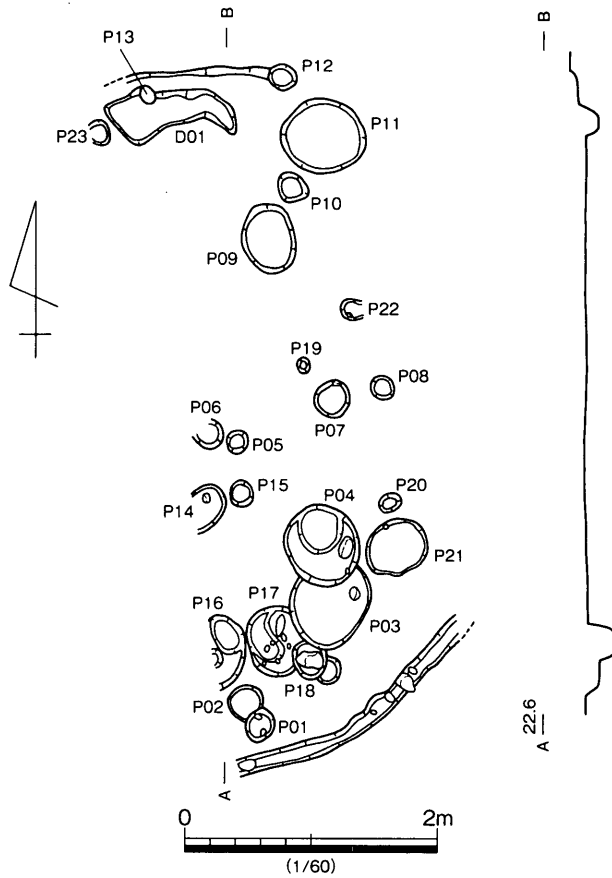


第 25 図 竪穴住居跡遺物実測図 6

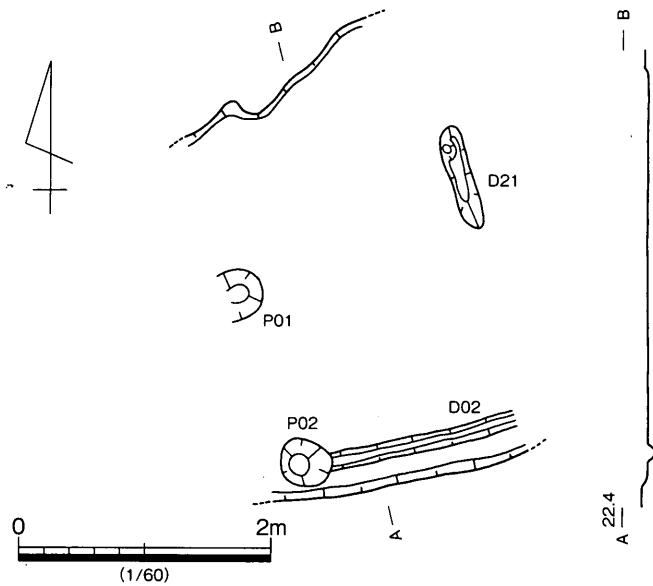
(215 ~ 224:SH03;225 ~ 228:SH04;229 ~ 240:SH05;241 ~ 249:SH06;250 ~ 258:SH07)



第26図 竪穴住居跡遺構実測 (SH08)



第27図 竪穴住居跡遺構実測図9 (SH09)



第28図 竪穴住居跡遺構実測図10 (SH10)

端部に、扁平な断面形態を示す基部が装着された器形である。

⑩ SH10

[遺構] II区の北端部に所在する。不整な平面形態であるが、南北方向に壁面が存在することと、内部が平坦であることから竪穴住居跡として報告する。

南壁面に平行する方向の溝状遺構は、壁溝と考えられる。柱穴跡の配列は不明である。

[遺物] 284、286 は口縁部が湾曲気味に外反し、端部が丸い形態である。

⑪ SH11

[遺構] IV①区の北部に所在し、遺構の北半部は対象地の外部に存在する。

東・南・西壁面が整然とした直線状の平面形態であり、南東隅部及び南西隅部が直角の平面形態であることから、規格的に構築されたことがわかる。

各壁面沿いには壁溝が存在し、西壁面から約1 m内側に寄った位置にも壁面に平行する溝状遺構が認められる。同溝状遺構と西壁面の間空間については、床面全体と比高差が認められないことから、ベッド状遺構とは判断されない。

南壁面に接する位置に、土坑2個が存在するが、住居跡に関連するものか否かは不明である。

[遺物] 305 は表面に指の痕跡が多く見られる粗製の模造品であるが、モチーフは判然としない。307 は半球形の体部が特徴である。321 の頸部は短く直立気味に外反する形態である。334 は2重口縁がある器形である。346 は体部の高さに比べて、直線的に開口するやや長い口縁部が不安定さを感じさせる器形である。347 についても、直線的に開口する口縁部が特徴である。350 の外面上部には、上下5列の半裁竹管文による文様帯が見られる。355 には湾曲気味に直立する短い口縁部と、肩が張らない体部があり、出土頻度が低い種類である。360～367 は口縁端部が上方に摘み上げられているために、受け口状の形態である。これらの器形は、360～362のように球形の体部と丸底が特徴である。365 は粗製の小型品である。小型の鉢はボウル状の浅い器形(384、387)と、半球形の深い器形(385、386、388、389)に区別される。405、406 は人工的に加工された痕跡が認められない。413、414 は材質が異なるが、同じ装飾品の部品であったと考えられる。

⑫ SH12

[遺構] IV①区の中央部に所在し、遺構の西半部は対象地の外部に存在する。

壁面沿いには壁溝が存在し、壁面及び壁溝と同心円上に6個の柱穴跡が配列されている。これらの柱穴跡については検出された範囲が狭いために、主柱穴跡の構成は不明である。

[遺物] 424 の表面には、研磨によって生じた細かい線状の溝跡が認められる。

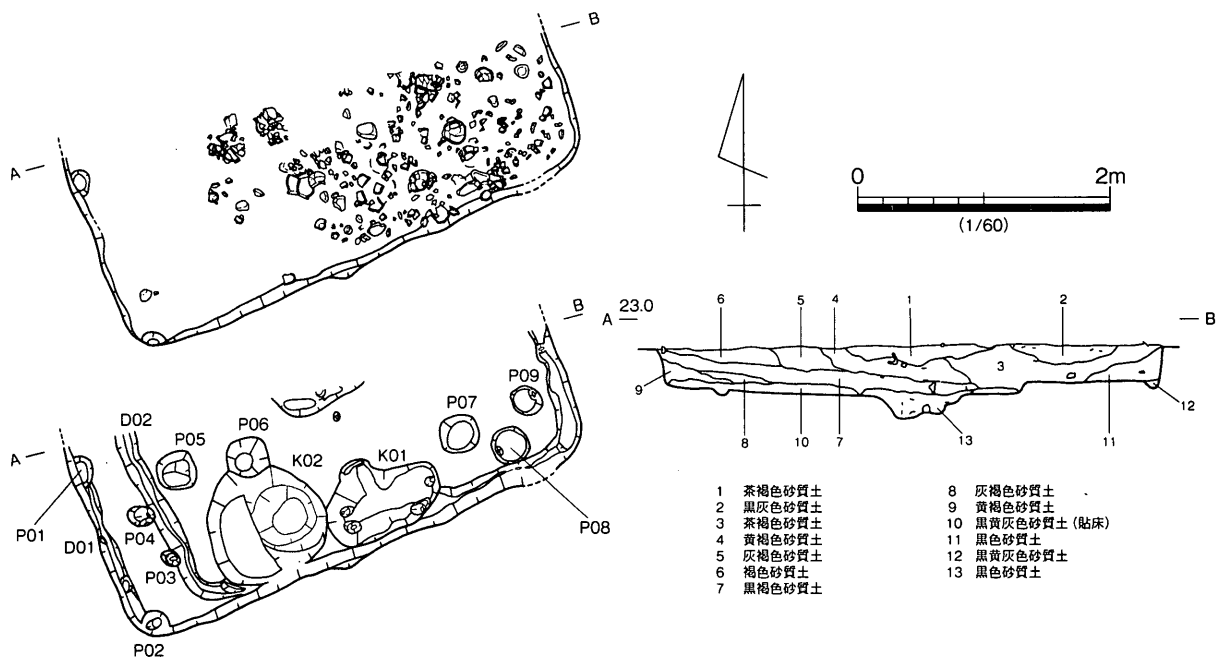
⑬ SH13

[遺構] IV②区の南部に所在し、遺構の中心部から北壁面にかけての箇所が検出された。

床面には18個の柱穴跡が存在するが、配列や壁面との位置関係に規格性が認められないことから、主柱穴跡の構成は不明である。しかしながら、壁面よりも床面中心部付近に集中して分布する傾向があることから、同心円上の配列であった可能性は低いと考えられる。

[遺物] 440 は直立する長い口縁部が特徴である。486、487 は脚部がく字形に屈曲して、端部が水平気味に開脚した形態である。後者の杯部のように、長い口縁部と脚部との接合箇所近くに屈曲点があることも認識しやすい特徴であり、弥生時代の終末期から古墳時代の初期に出現した器形である。

⑭ SH14



第 29 図 竪穴住居跡遺構実測図 11(SH11)

[遺構] IV②区の南部に所在し、SH13 に近接した位置にある。遺構の大部分については、対象地の外部にあるか、後世に破壊されていることから、壁面が垂直気味であることと、床面が平坦であることだけが竪穴住居跡と判断される根拠である。

検出された箇所は南東隅部である。壁面に近接して、4 個の柱穴跡が確認された。これらが主柱穴跡を構成していたか否かはわからない。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

⑮ SH15

[遺構] IV②区の中央部に所在し、SH13 に近接した位置にある。上位の SD75 の開削に伴い、遺構の大部分が損なわれている。北壁面が垂直気味であることと、床面が平坦であることから竪穴住居跡と判断した。

床面には、10 個の柱穴跡が存在しており、北壁面沿いの P01、P02、P10 が主柱穴跡と考えられる。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

⑯ SH16

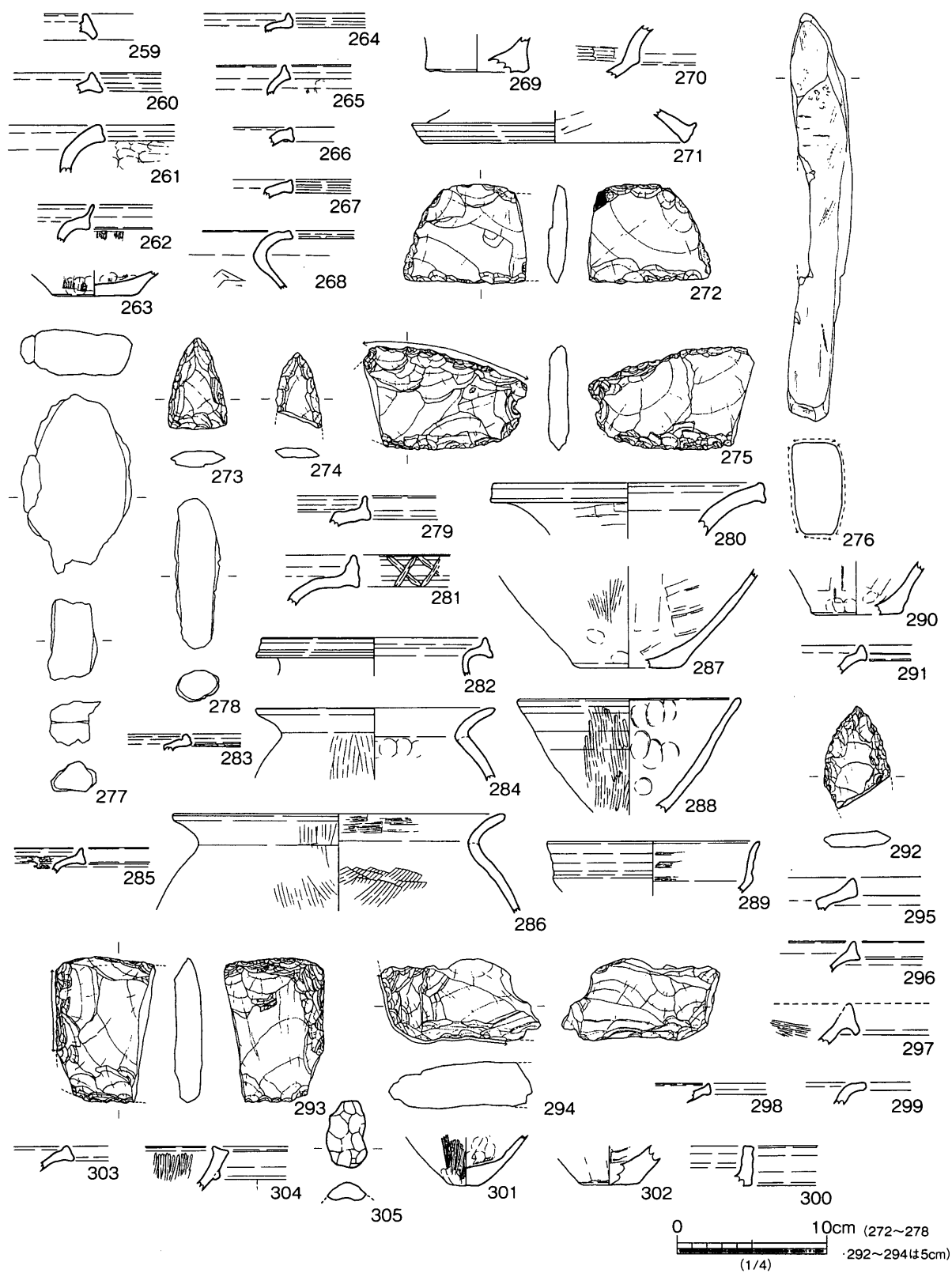
[遺構] IV③区の中央部と VI 区に所在し、遺構の東部が SH21 によって損なわれている。

北・南壁面沿って断続的に壁溝が存在することから、原形はほぼ壁面全体に沿って壁溝が巡らされていたと考えられる。

床面の中心部にある P19 が炉跡であり、壁面の同心円上の配列にある P03、P04、P08、P09、P15、P20、P13 が主柱穴跡であるが、P04 は P03、P09 は P08 の各柱の入れ替えに伴った代替遺構である。

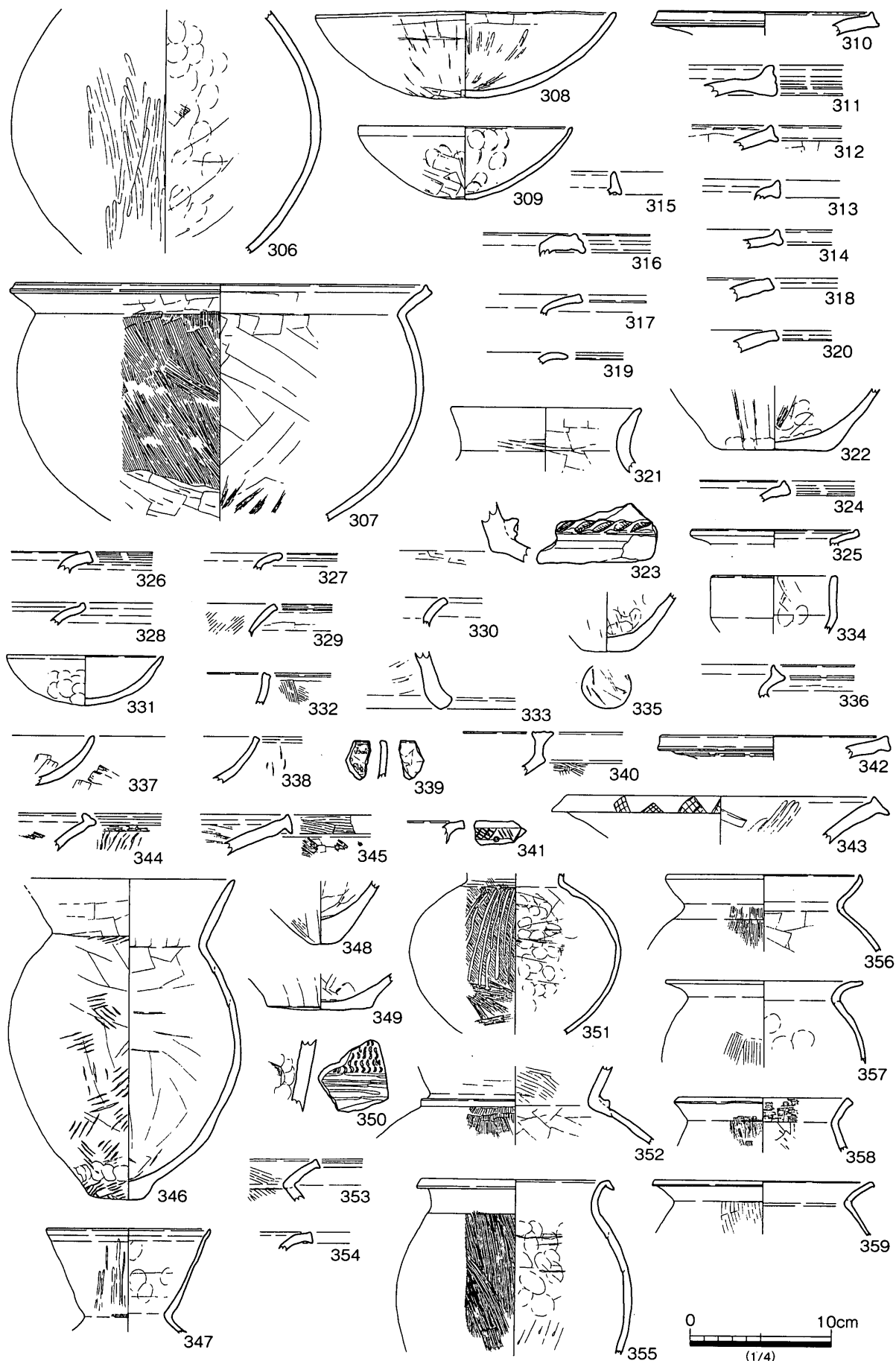
[遺物] 509 は粗製の小型品である。

⑰ SH17

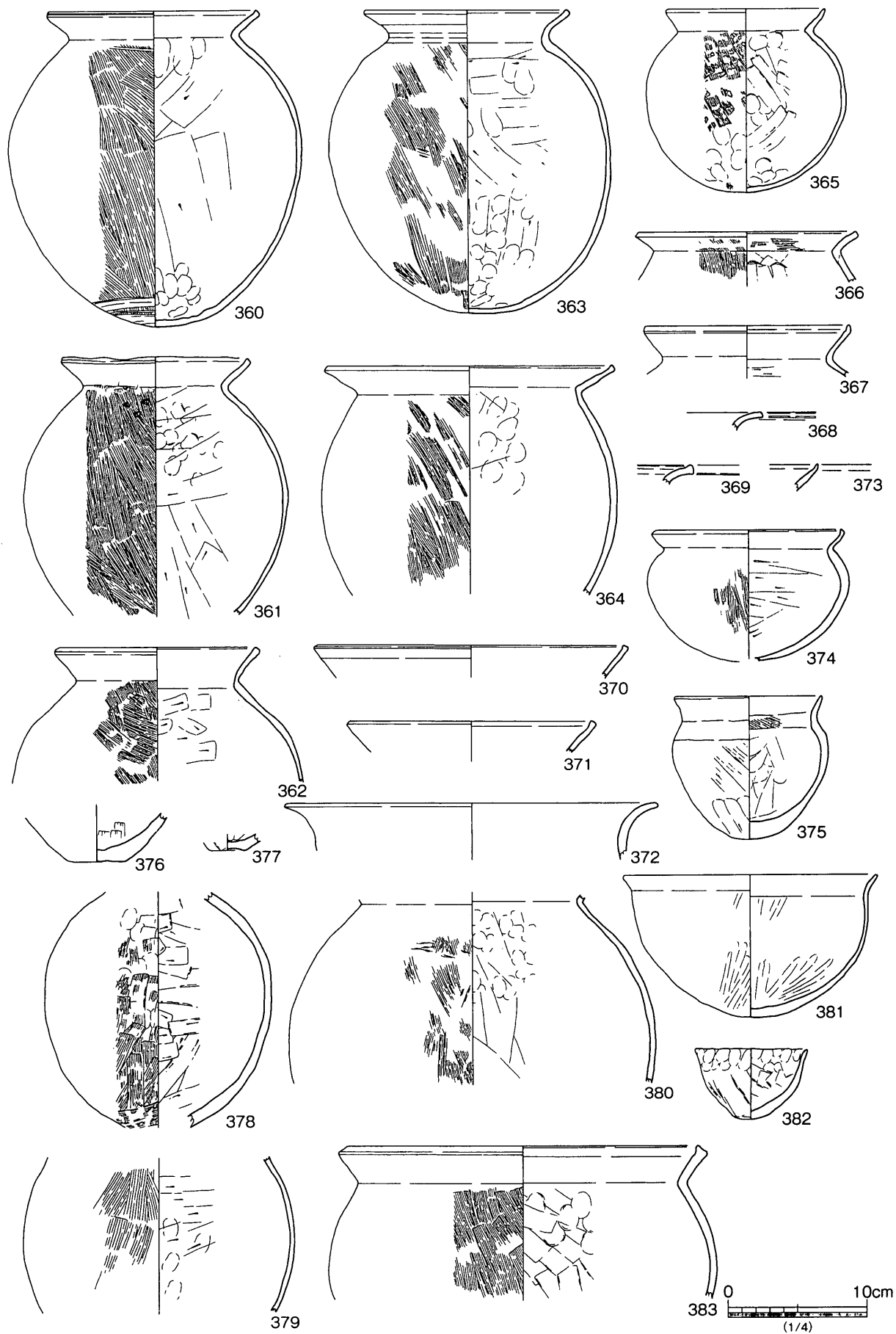


第30図 豎穴住居跡遺物実測図7

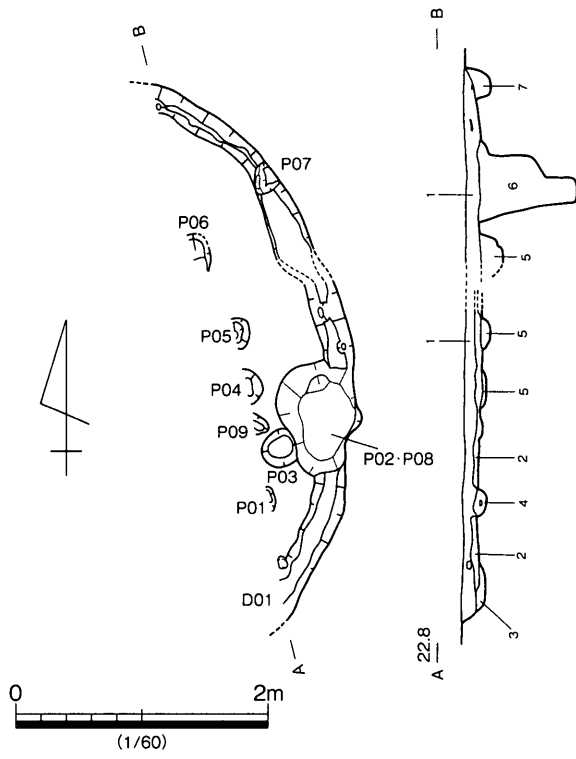
(259:SH08,260 ~ 278:SH09:279 ~ 294:SH10,295 ~ 305:SH11)



第31图 竖穴住居跡遺物実測图8(306~359:SH11)

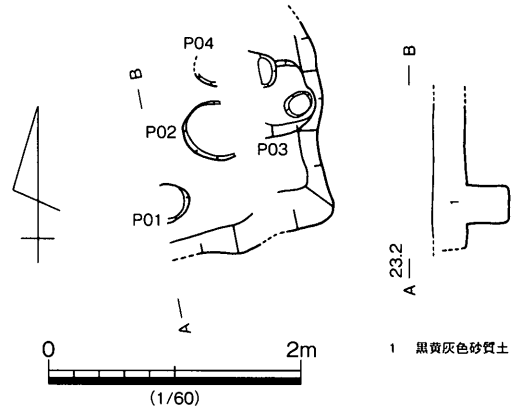


第 32 图 竖穴住居跡遺物実測図 9 (360 ~ 383:SH11)

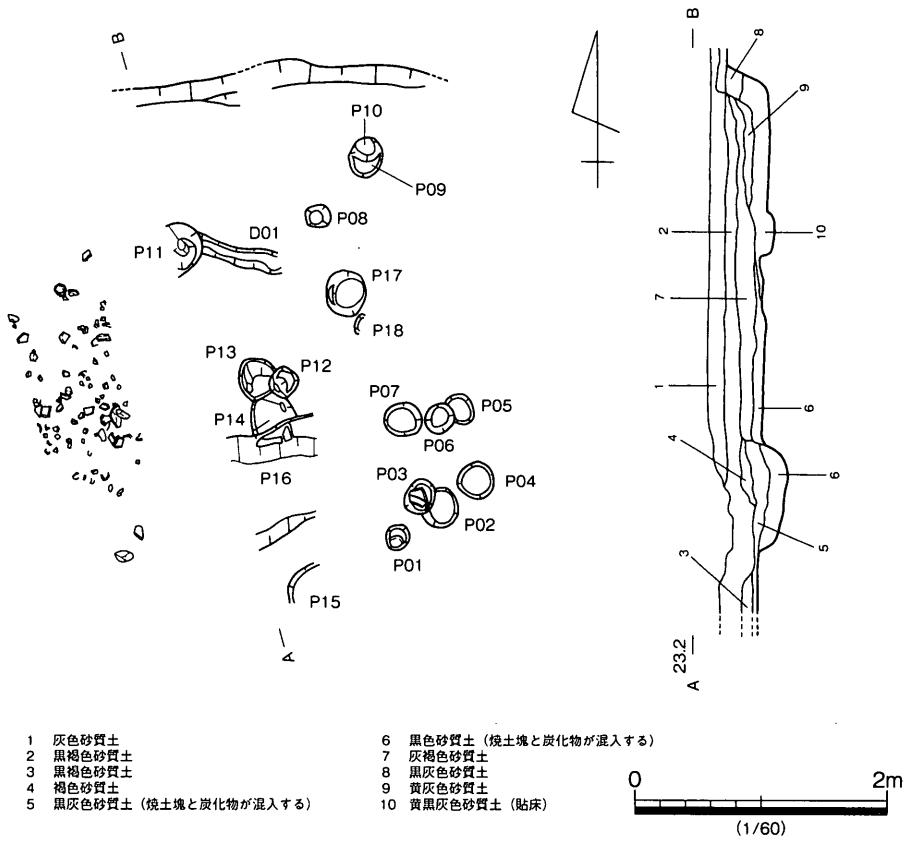


- | | |
|--------------|----------|
| 1 茶褐色砂質土 | 5 黒黄色砂質土 |
| 2 黄灰色砂質土(貼床) | 6 黄褐色砂質土 |
| 3 灰色砂質土 | 7 灰色砂質土 |
| 4 灰色砂質土 | |

第33図 竪穴住居跡遺構実測図12(SH12)

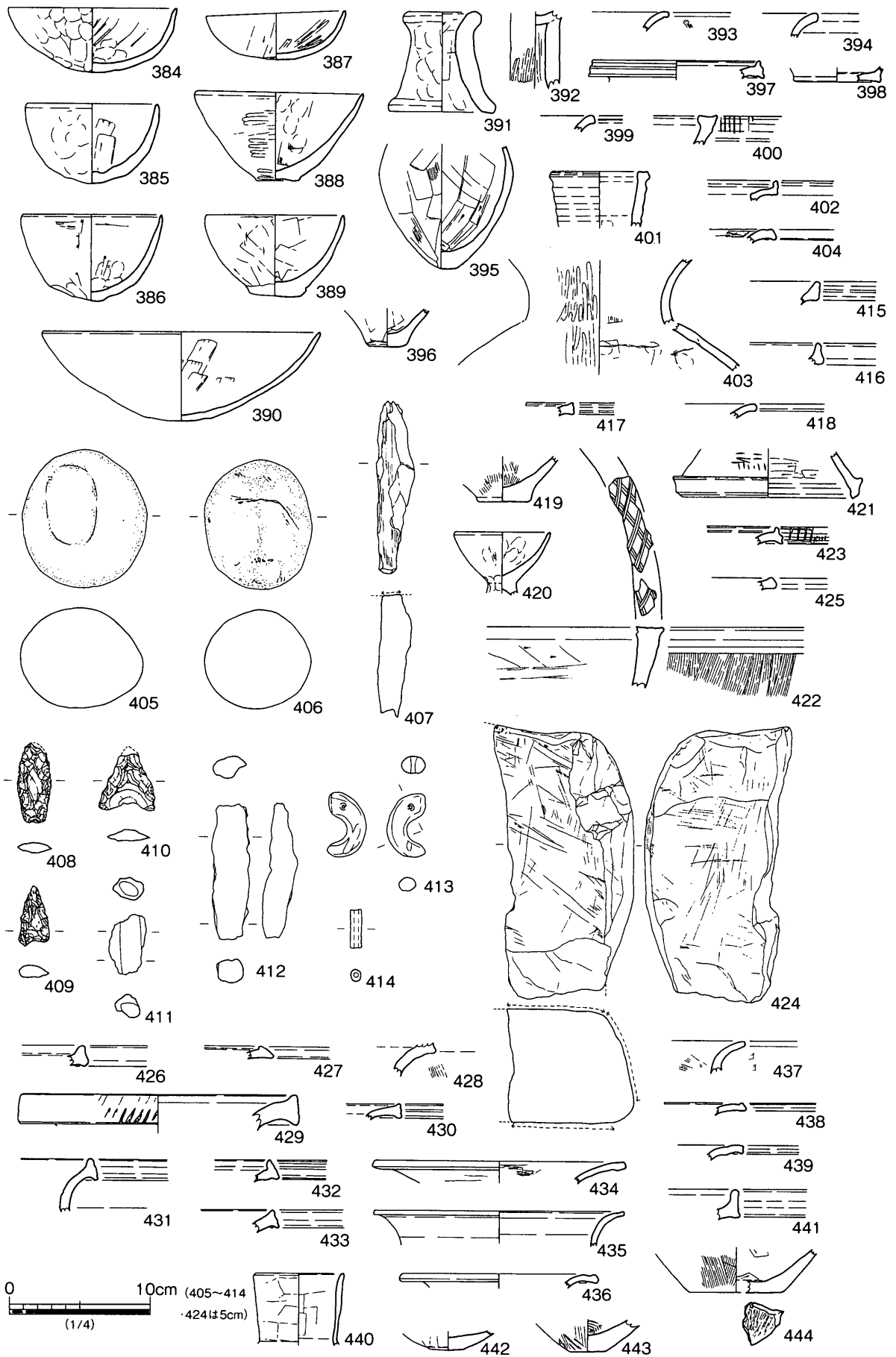


第35図 竪穴住居跡遺構実測図14(SH14)

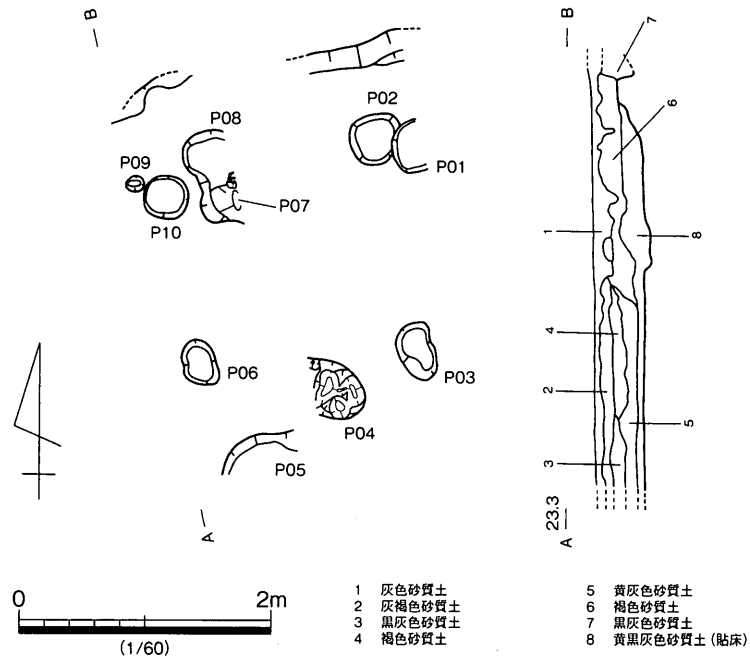


- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1 灰色砂質土 | 6 黒色砂質土(焼土塊と炭化物が混入する) |
| 2 黒褐色砂質土 | 7 灰褐色砂質土 |
| 3 黒褐色砂質土 | 8 黒灰色砂質土 |
| 4 褐色砂質土 | 9 黄灰色砂質土 |
| 5 黒灰色砂質土(焼土塊と炭化物が混入する) | 10 黄黒灰色砂質土(貼床) |

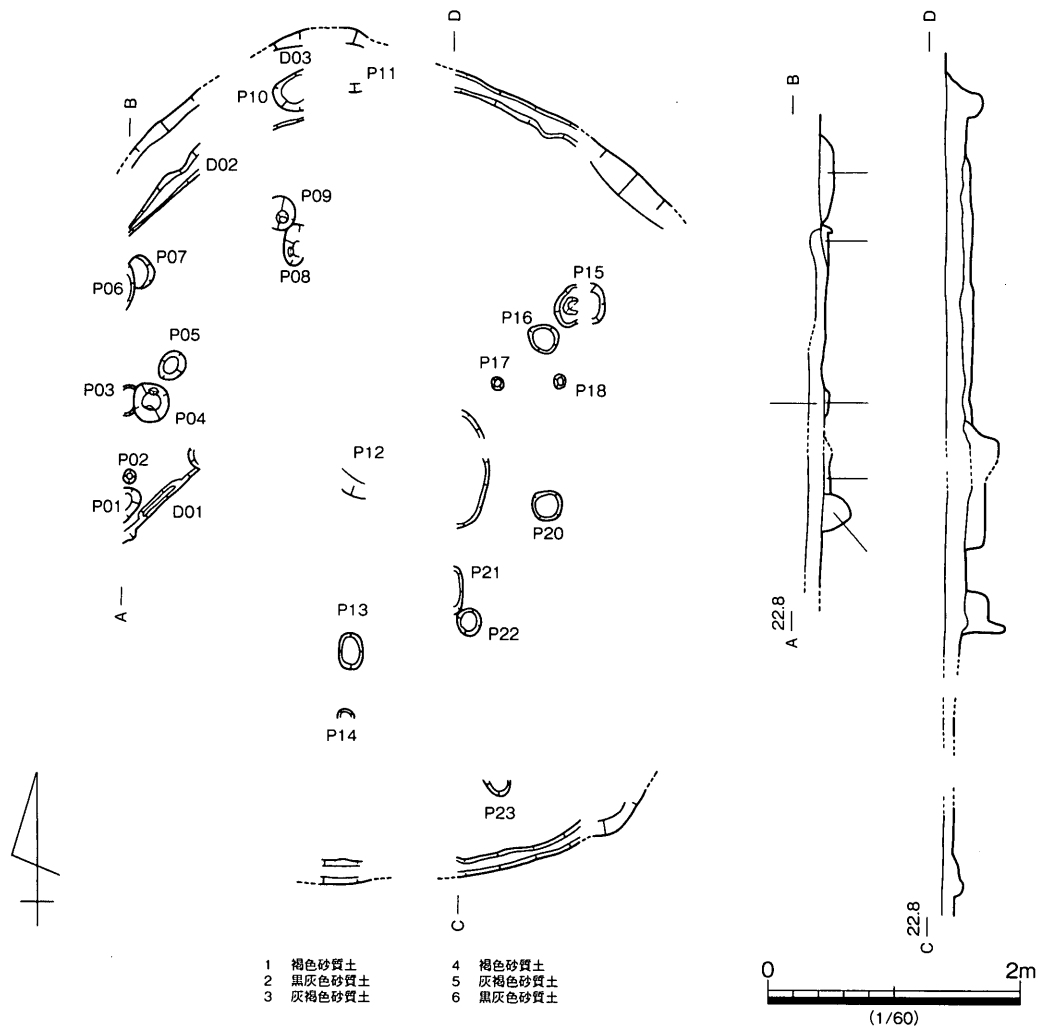
第34図 竪穴住居跡遺構実測図13(SH13)



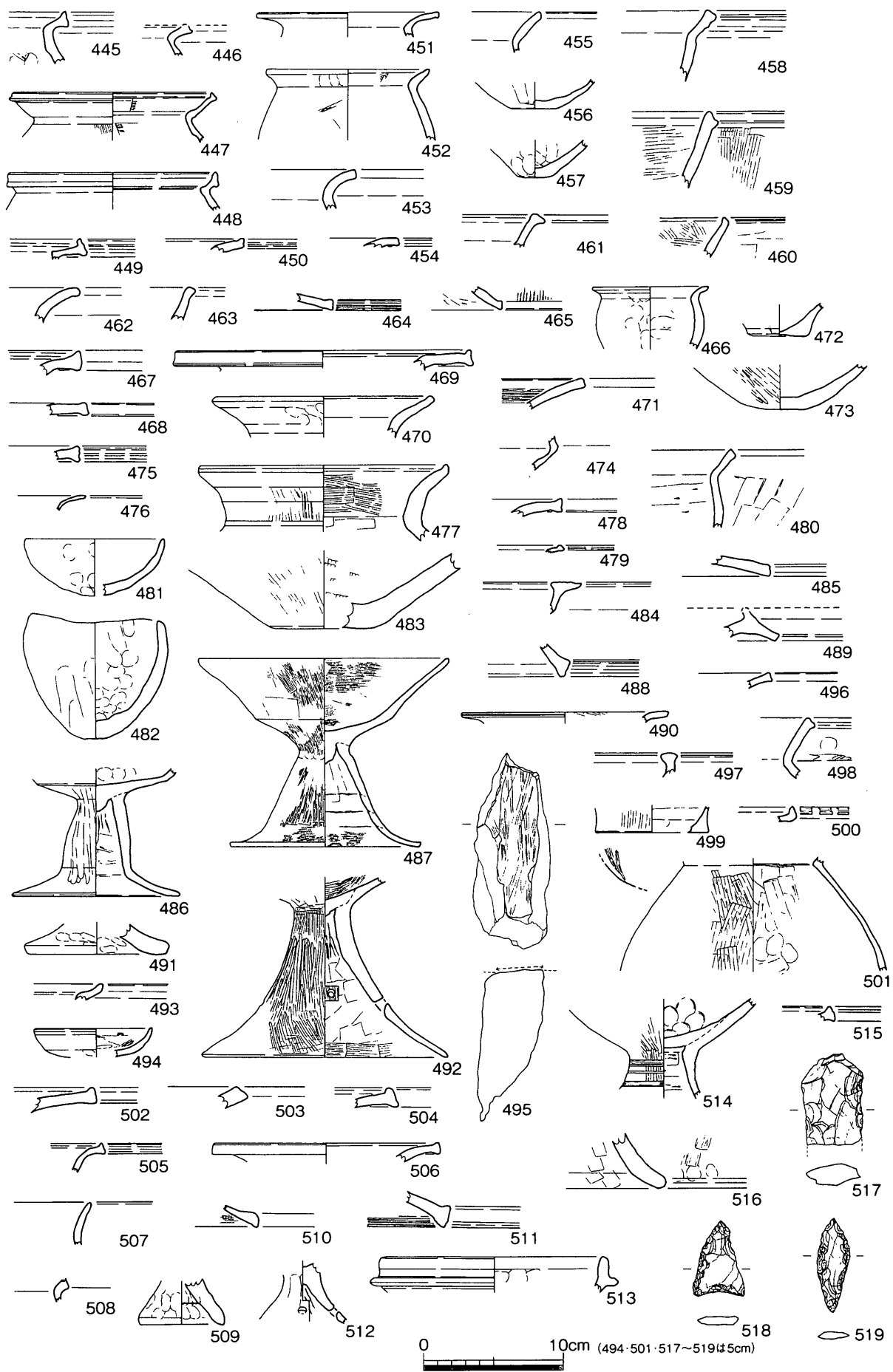
第 36 图 豎穴住居跡遺物実測図 10(384 ~ 414:SH11,415 ~ 425:SH12,426 ~ 444:SH13)



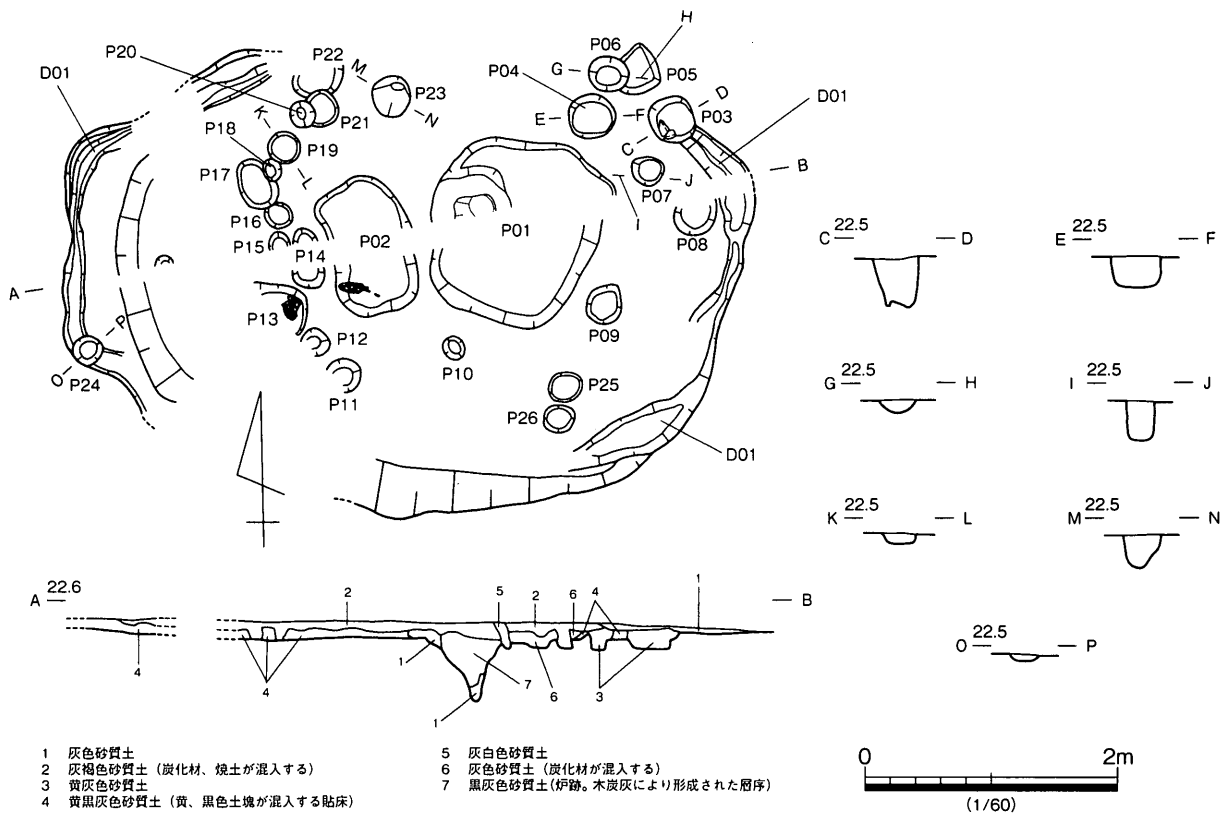
第 37 図 豎穴住居跡遺構実測図 15(SH15)



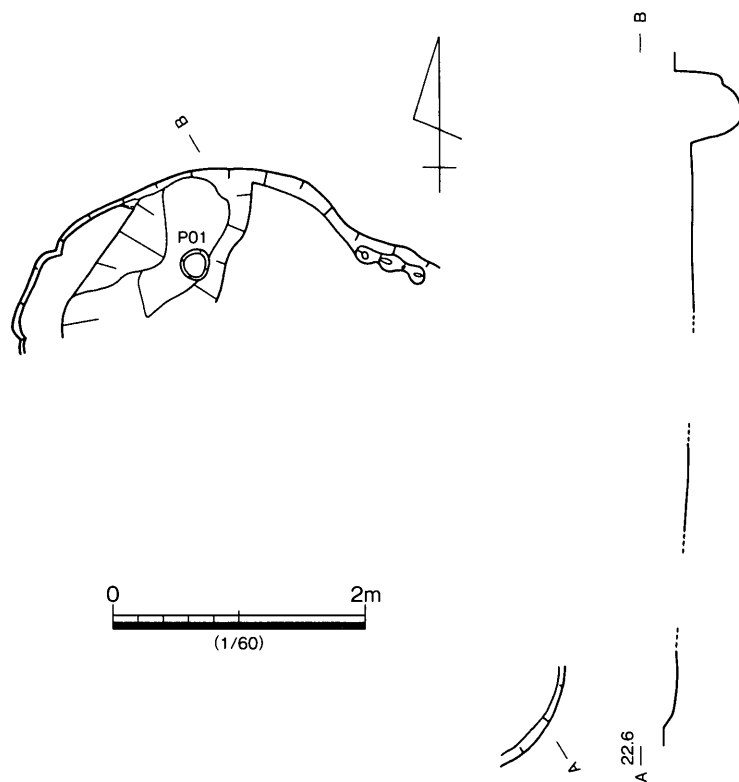
第 38 図 豎穴住居跡遺構実測図 16(SH16)



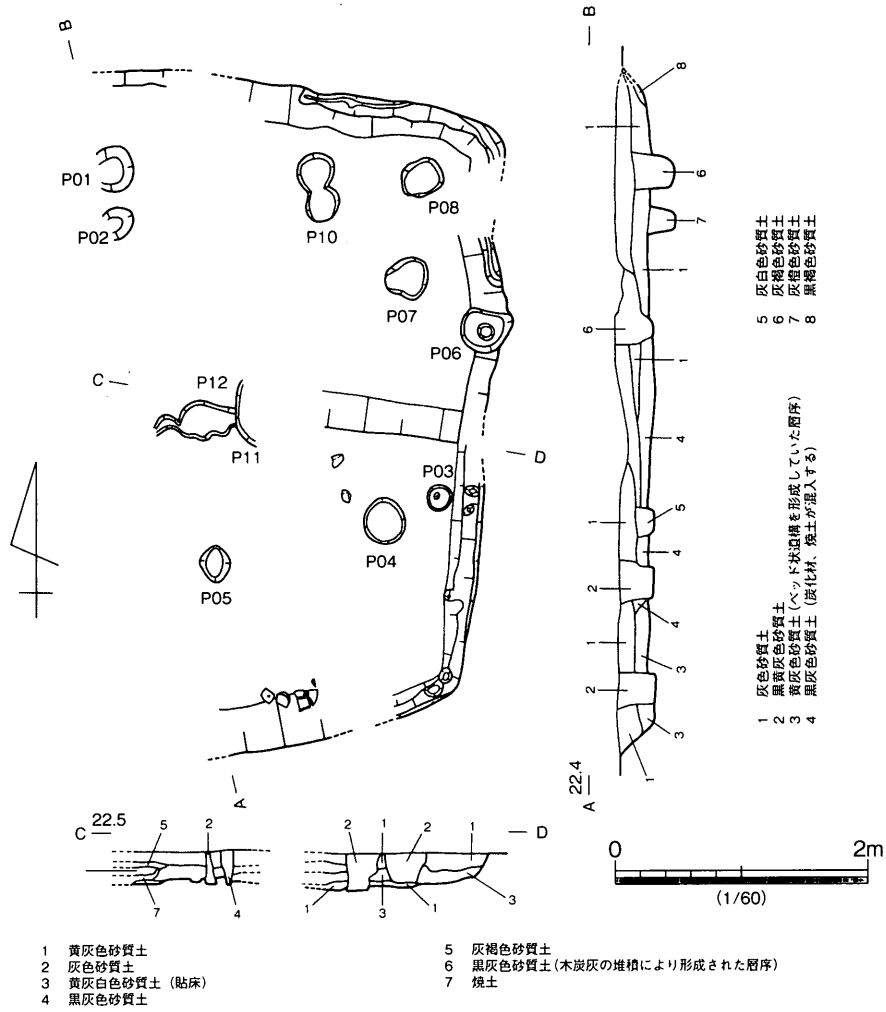
第 39 図 竪穴住居跡遺物実測図 11(445 ~ 495:SH13,496 ~ 501:SH14,502 ~ 519:SH16)



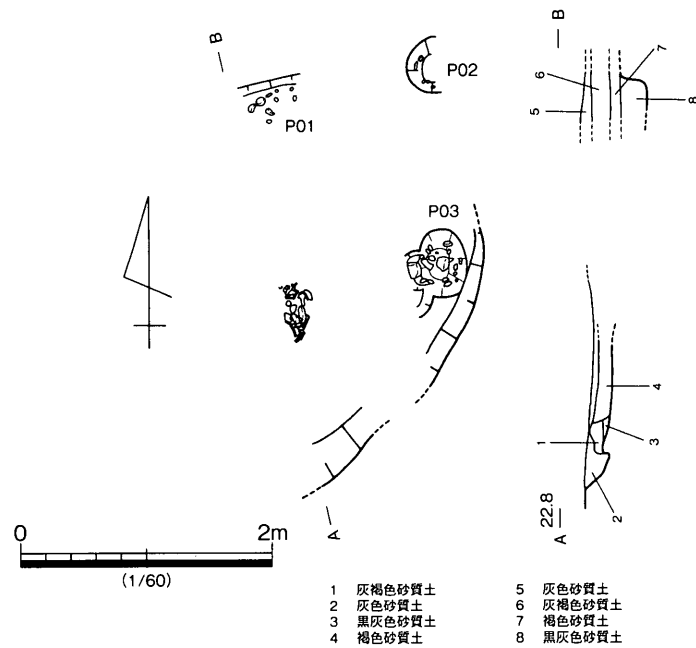
第40図 竪穴住居跡遺構実測図 17(SH17)



第41図 竪穴住居跡遺構実測図 18(SH18)



第 42 図 竪穴住居跡遺構実測図 19(SH19)



第 43 図 竪穴住居跡遺構実測図 20(SH20)

[遺構] V③区の北部に所在する。平面形態が扁平なことから、検出された遺構は、住居跡の中心部分であり、周囲にさらに床面と壁面が存在した可能性がある。

床面には、2個の大型の土坑（P01、P02）があり、P02から炭化物と炭化木材が出土したことから炉跡と判断できる。P01については、貯蔵穴様の用途が考えられる。

主柱穴跡は、壁面の同心円上の配列を示す P04、P08、P11、P15、P19、P25 である。

P13 から出土した炭化木材は、住居が取り壊された時に混入したものと考えられる。

[遺物] 552、553 については、形態及び大きさが類似した資料であり、先端部の平面形態は菱形で、基部の断面形態は円形である。

⑱ SH18

[遺構] V③・④区に跨って所在する。ほとんど原形を留めていないが、壁面が垂直気味に傾斜することと、床面が平坦なことから竪穴住居跡と判断した。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

⑲ SH19

[遺構] V④区の南西隅部に所在する。北・東・南壁面が直線的な平面形態であり、北東・南西隅部の角度が直角であることから、規格的に構築されたことがわかる。

主柱穴跡は、各壁面隅部に近い位置にある P04、P07 を含んだ4個で構成されていたことが推察できる。

炭化材、木炭灰、焼土が出土した P12 が炉跡である。

[遺物] 581 は低い脚台が装着された器形である。小型の鉢は、半球形のもの（582）と逆三角形のもの（583）がある。

⑳ SH20

[遺構] VI区の北西隅部に所在し、隣接するII区及びIV①区においては、延伸部分が検出されていない。

床面の中心部分から南寄りの位置で、破碎された土器群が発見された。

[遺物] 589 の口縁部は、体部の接合箇所から大きく外反して逆八字形に開口する形態である。体部は肩が張るために、底部が窄まった印象を与える。内外面が細かいハケ目調整により、丁寧に仕上げられている。601 の線刻画は、弧状の2重線による胴体と、外方向へ向かって先細りになったひげ状の1重線による足が表現されている。したがって、5本以上の足か鱗があったことになるため、哺乳類ではなく、昆虫類か魚類の表現と考えられる。

㉑ SH21

[遺構] VI区とV②区の境界部分に所在するが、後者では病院施設の建設に伴って遺構が損壊していたために、西壁面だけが残存していた。

P01・02 は規模が小さいが、壁面の同心円上に配列されていることから、円形に配列された主柱穴跡と考えられる。

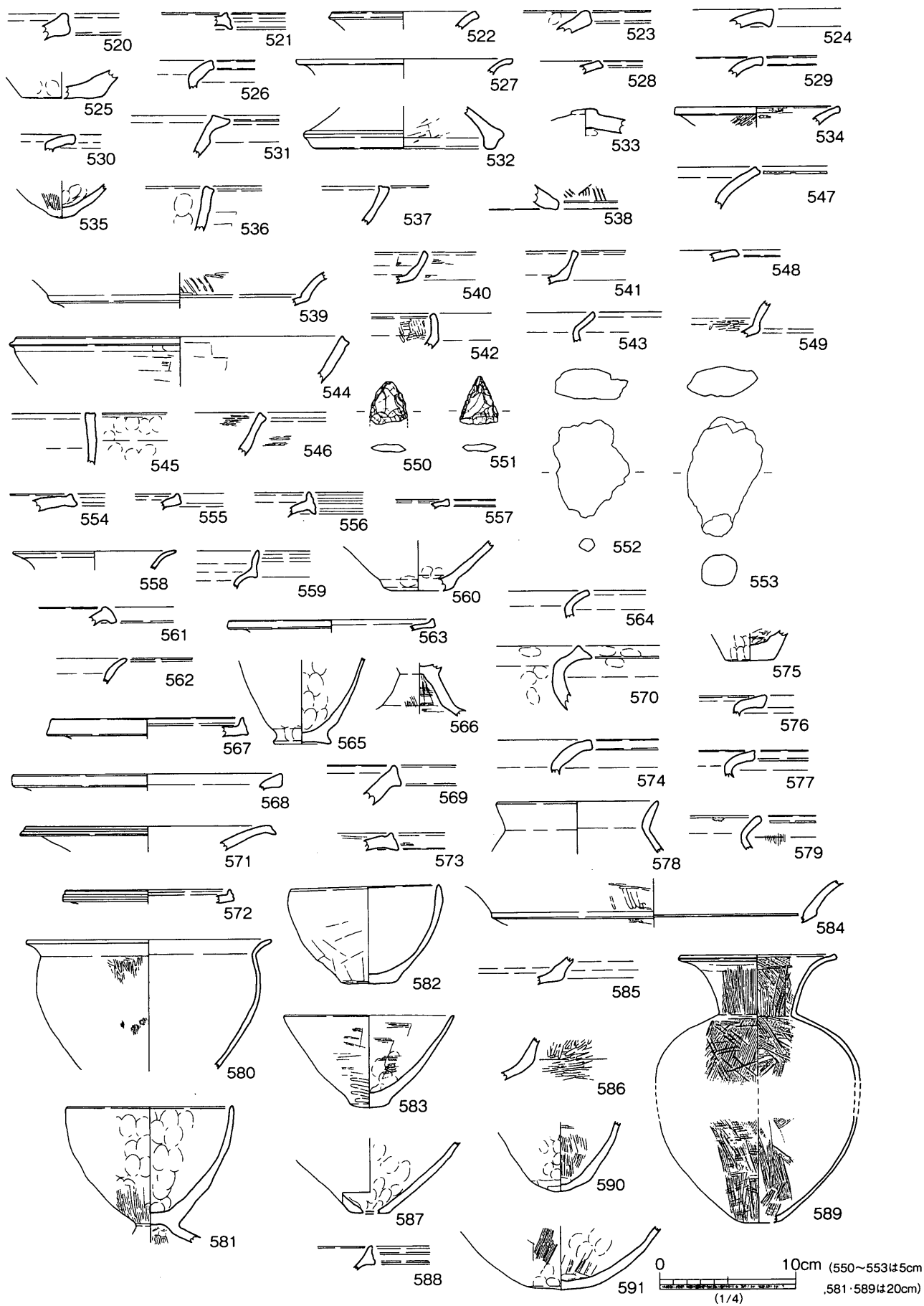
[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

㉒ SH22

[遺構] VI区の南端部に所在し、SH16 の下位に存在する。

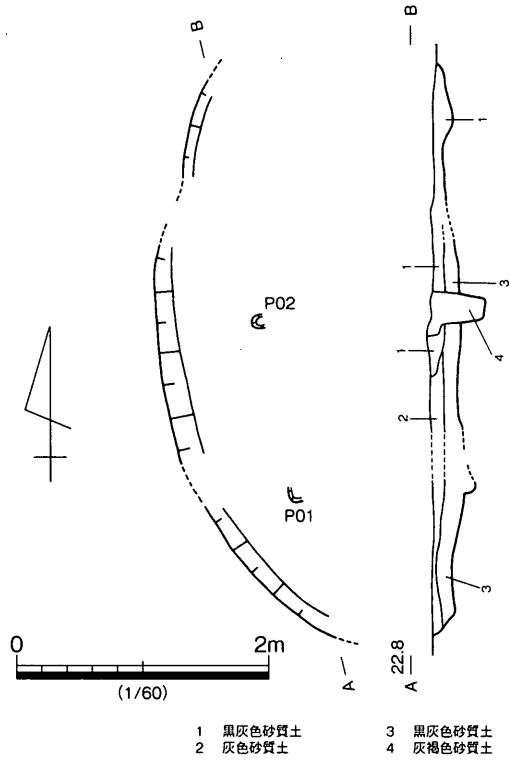
壁面が残存しないが、床面に11個の柱穴跡が存在する。主柱穴跡の配列は不明である。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

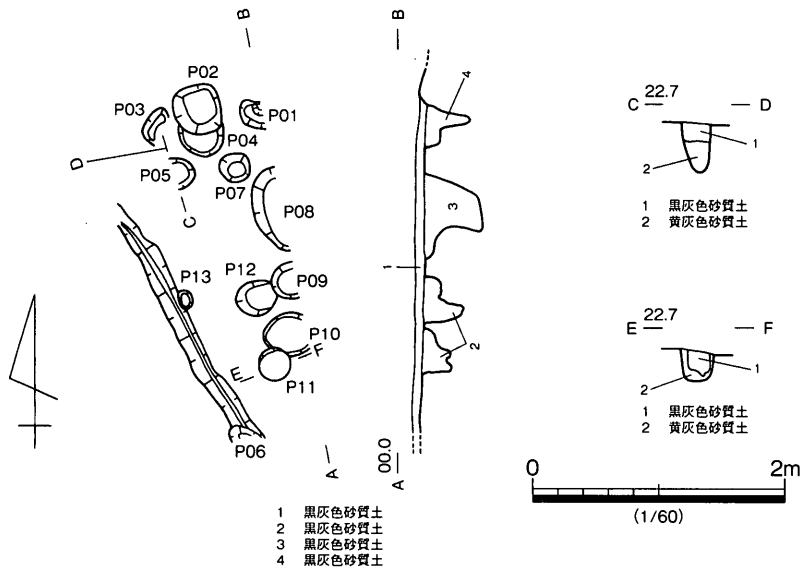


第 44 図 竪穴住居跡遺物実測図 12

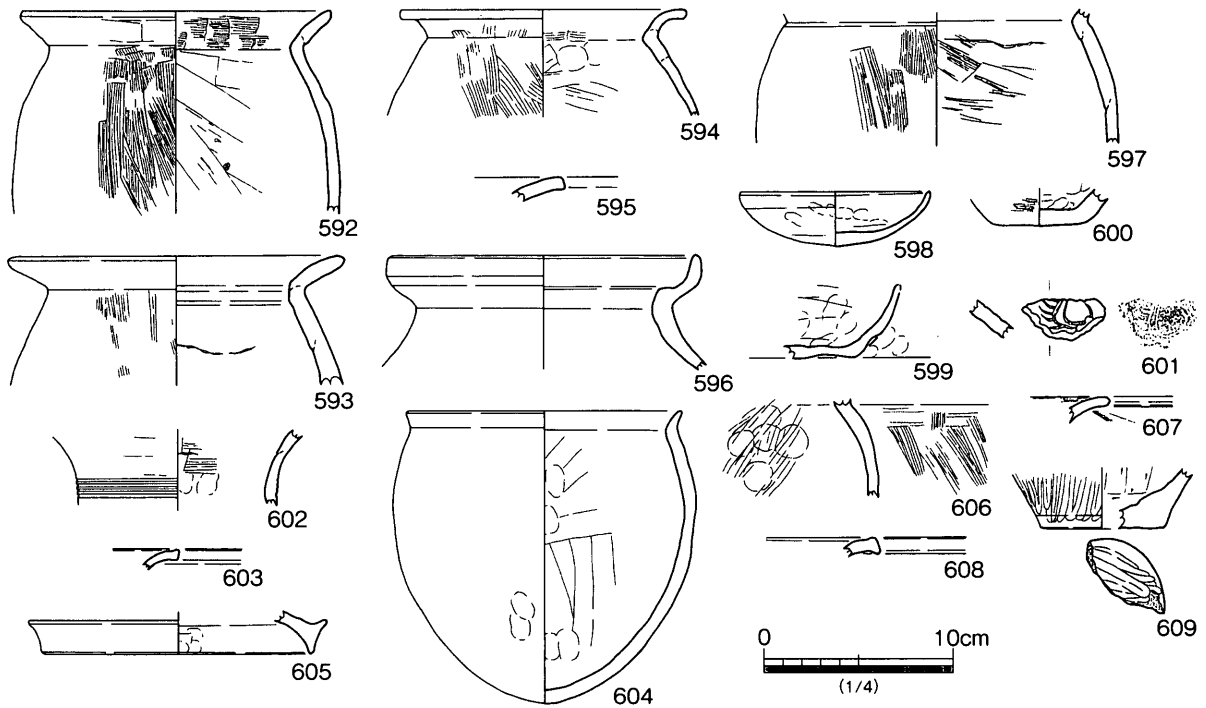
(520 ~ 553:SH17,554 ~ 566:SH18,567 ~ 587:SH19,588 ~ 591:SH20)



第45図 竪穴住居跡遺構実測図 21(SH21)



第46図 竪穴住居跡遺構実測図 22(SH22)



第 47 図 竪穴住居跡遺物実測図 13(592 ~ 601:SH20,602 ~ 605:SH21,606 ~ 609:SH22)

(2) 掘立柱建物跡

SB01

[遺構] V②区の北西部に所在する。

桁行方向の各柱穴跡は、一直線上に整然と配列されており、4隅の角度もほぼ直角であることから、規格的に構築されたことがわかる。

各柱穴跡のほりかたの直径に比べて、柱痕のそれがかなり小さいことから、柱を直線的に配列するための調整用の空間があったと思われる。

SP905 から出土した自然石は、底面から遊離しているために、柱の抜き取り後に投入されたことが推測できる。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

(3) 土 坑

① SK01

[遺構] I①区の西半部に所在し、SH01 との直線距離は約 1 m である。

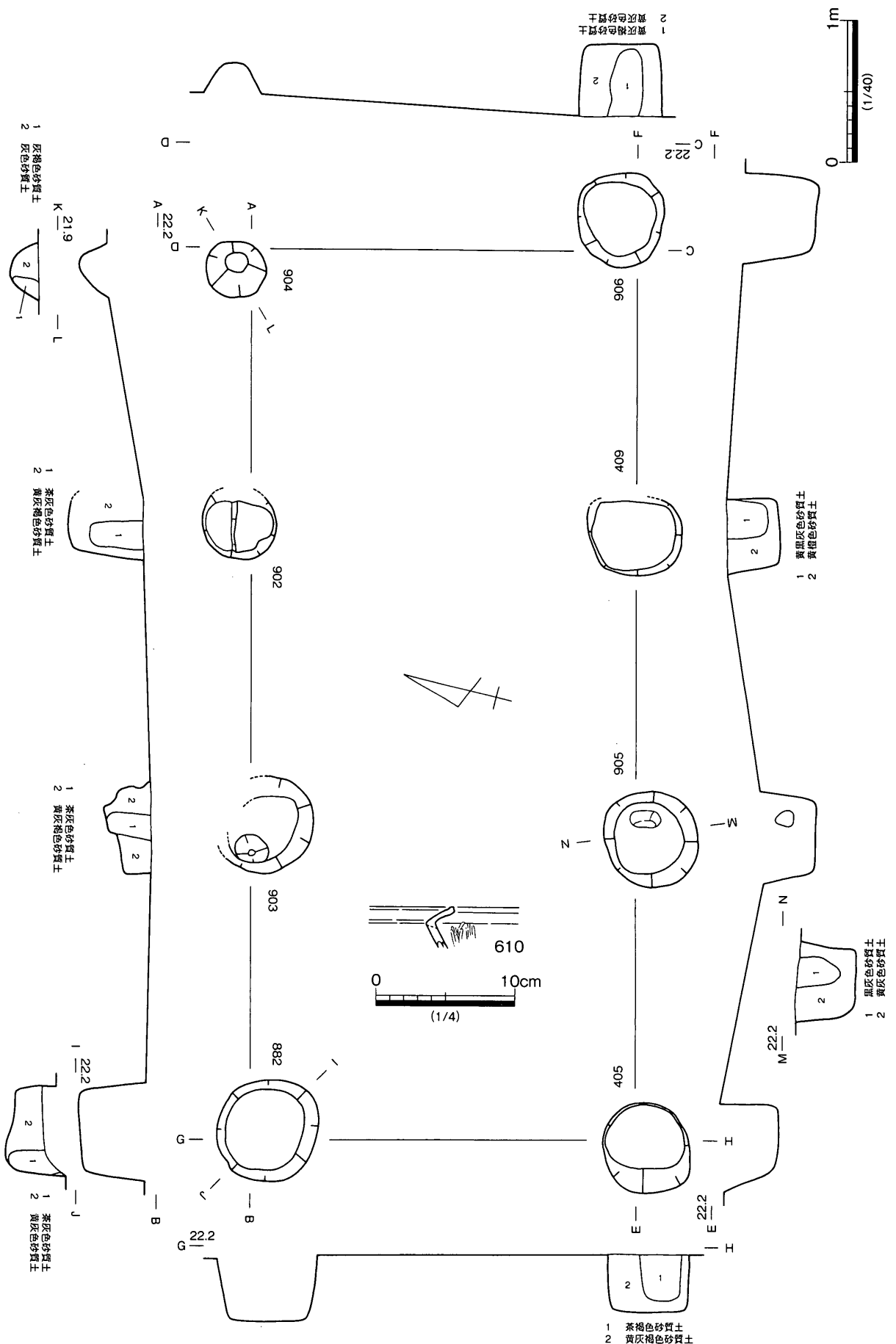
整然とした平面形態であることと、底面が平坦なことから、埋葬施設の可能性がある。

[遺物] 620 のつまみ部は、円周上に巡らされた複数の細かい平行線によって、摘み易い加工が施されている。口縁部は正円に近い器形である。

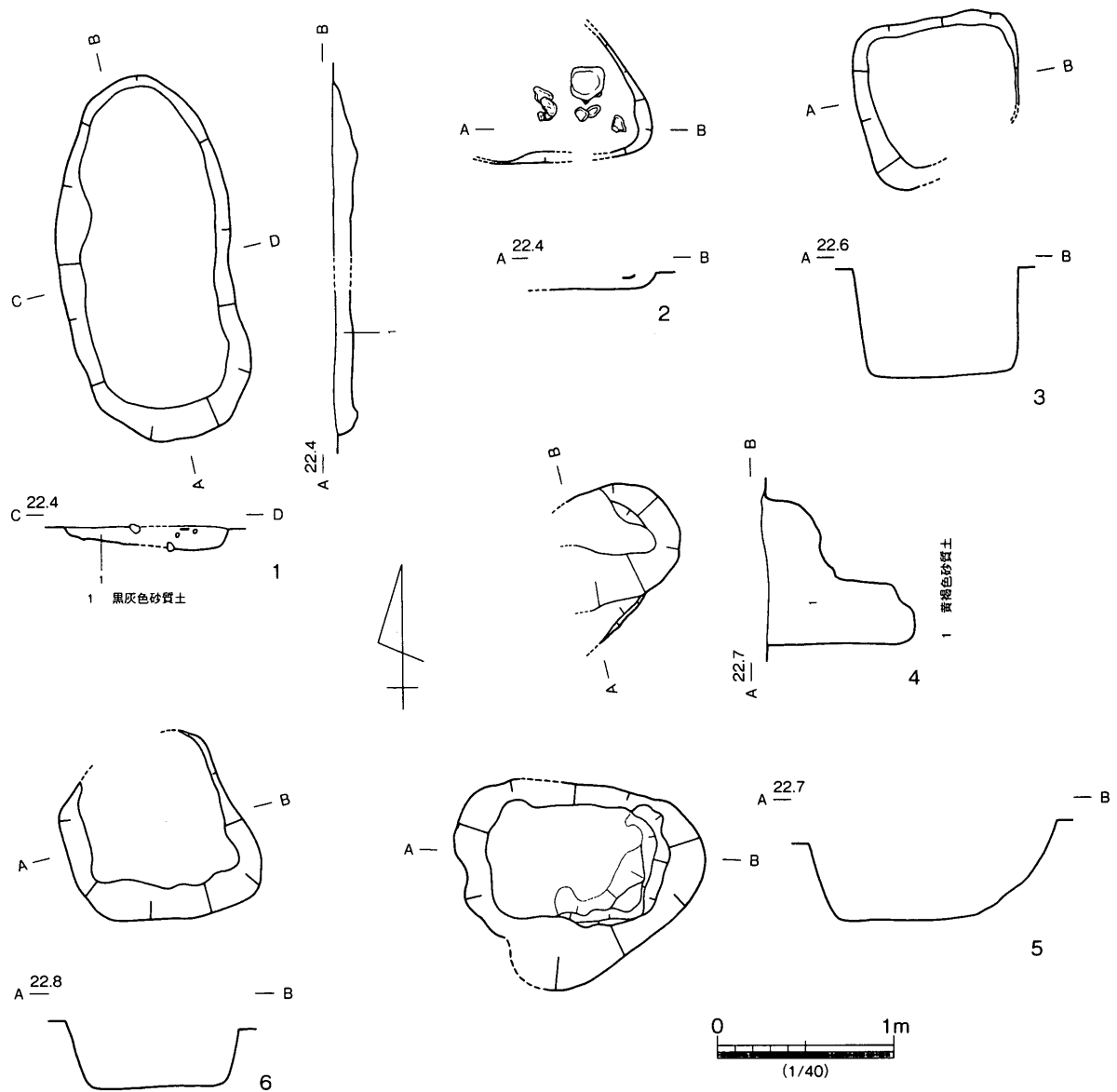
② SK02

[遺構] I①区の中央部から東寄りの位置に所在する。

底面には多くの自然石が残存することから、人為的に投入された可能性がある。



第 48 图 掘立柱建物跡遺構実測图 1 (SB01) · 遺物実測图 1 (SB01)



第 49 図 土坑遺構実測図 1 (1:SK01,2:SK02,3:SK03,4:SK04,5:SK05,6:SK08)

[遺物] 621 の口縁端部にある円孔は、容器本体に装着するために紐を通すためのものである。

③ SK03

[遺構] V①区の南部に所在する。

ほりかた上面が整然とした平面形態である上に、壁面が垂直気味で、底面が平坦であることから、規格的に開削されたことが考えられる。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

④ SK04

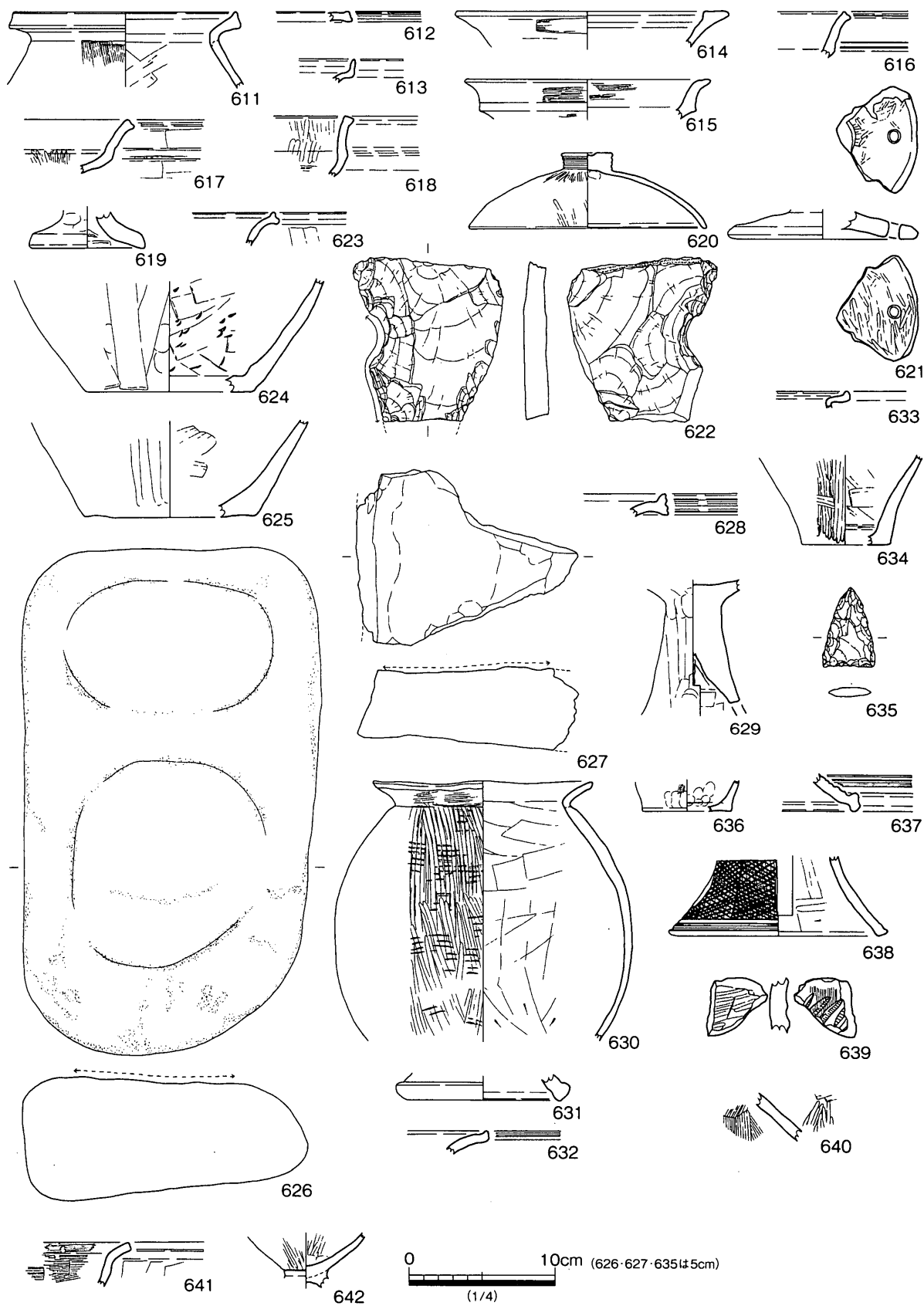
[遺構] V①区の中央部に所在し、西半部は対象地の外部に存在する。

北壁面が階段状の形態であるのに対して、南壁面はほぼ垂直な形態である。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

⑤ SK05

[遺構] V①区の中央部において、SH04 の北東方約 2 m の位置に所在する。北西壁面の一部は SH12 により損壊している。



第 50 図 土坑遺物実測図 1

(611 ~ 620:SK01,621·622:SK02,623 ~ 627:SK12,628·629:SK15,630 ~ 632:SK16,633:SK03,634:SK04,635:

SK05,636 ~ 638:SK07,639·640:SK08,641·642:SK09)

南壁面の上部の一部分が外方向に突出するが、全体の平面形態は、ほぼ長方形であることから、原形は規格的に開削されたことがわかる。底面は平坦であるが、埋設されたものの痕跡は認められない。

[遺物]数量は少なく、保存状態は不良である。

⑥ SK06

[遺構] V①区の北部に所在し、南半部は対象地の外部に存在する。

[遺物]数量は少なく、保存状態は不良である。

⑦ SK07

[遺構] V①区の北東部に所在し、南半部は対象地の外部に所在する。西壁面の一部分が SH11 によって損壊している。

[遺物] 638 の外面の文様は、交差する両方向の細線が完全に平行するように施されていることと、密度が高いことが特徴である。

⑧ SK08

[遺構] V①区の南部に所在し、北壁面が損壊している。底面は平坦であるが、埋設されたものの痕跡は認められない。

[遺物] 639 の外面の線刻画は、2重線で描かれた流線形の空間の内部に、直線と斜線を組み合わせた葉脈状の文様があることから、木葉の表現と考えられる。

⑨ SK09

[遺構] V③区の北西隅部に所在し、SK10 の南壁面を損壊している。

[遺物]数量は少なく、保存状態は不良である。

⑩ SK10

[遺構] V③区の北西隅部に所在する。

[遺物]数量は少なく、保存状態は不良である。

(4) 土器棺墓

① ST01

[遺構] IV②区の南部に所在する。病院施設の電線や水道管等の埋設工事によって、遺構の上部とほりかたが損壊を被っている。

墓制は人為的に口縁部が除去されたと考えられる壺を棺身、合わせ口にした鉢を棺蓋とした形態である。

棺身の内部に充満していた土壌からは、被葬者の骨と歯は採取されなかった。

[遺物] 副葬品は出土していない。7605 が棺身内に転落していた棺蓋、7608 が棺身である。

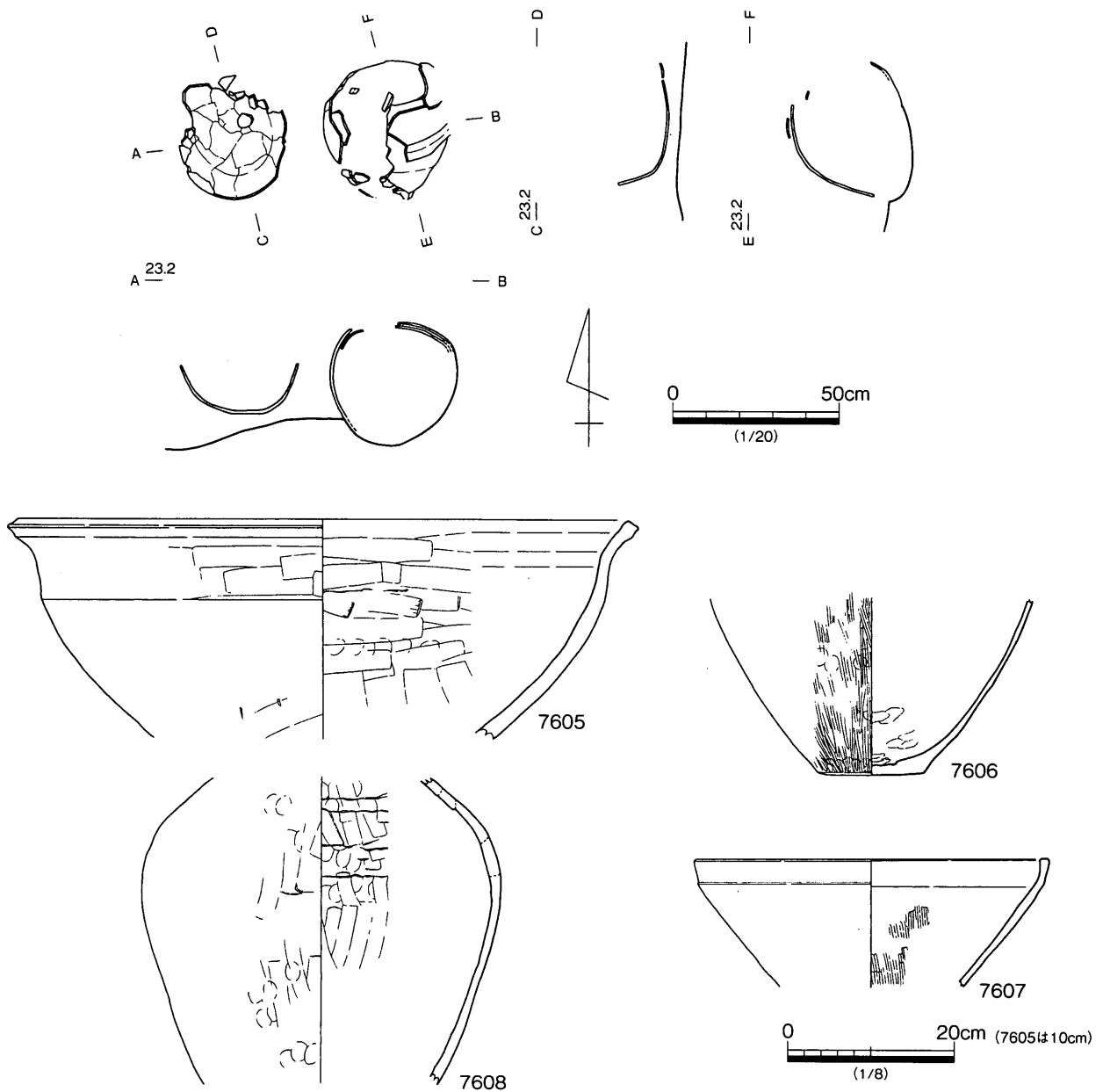
② ST02

[遺構] IV②区の南部に所在する。ST01 との距離は約 10cm であることから、同一土坑内に埋葬されたと考えられる。同一の土坑内に複数の土器棺が埋設される例としては、香川県内では初例である。

墓制を明らかにできる状態ではなかったが、大型の鉢の一部分が出土したことから、SH01 と同様に、棺蓋と棺身が合わせ口になった形態が想像される。

棺身の内部に充満していた土壌からは、被葬者の骨と歯は採取されなかった。

[遺物] 副葬品は出土していない。7607 が棺蓋と考えられる土器、7607 が棺身である。



第 51 図 土器棺墓遺構実測図 (1:ST02,2:ST01)・遺物実測図 (7605・7608:ST01,7606・7607:ST02)

(5) 溝状遺構

① SD01

[遺構] I ①区に所在し、SH01、SK01、SD02、SD100 等により、遺構の各所が損壊を被っている。

遺構の幅と深さは全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。横断面の形態についても、ほぼ全体にわたってV字形である。

埋土は、遺構内の狭い空間中においても、上下に複数の土層序に分離されることから、遺構の埋積には、時間がかかったことがわかる。

本遺構は、底面全体に多くの土器が残存することから、不用品の廃棄場所として利用されたことが想

像されるが、石器、石製品、食料残滓等が含まれていないことから、土器に限定した廃棄場所と考えられる。

[遺物]654の体部は、肩が張る形態で、底部は底面が広く、平坦なことから安定感がある器形である。外面が緻密な調整で仕上げられているとともに、器壁が薄く、均一な厚さに整形されているために、精巧な印象がある器形である。655の口縁部には、蓋の装着のための穿孔がある。657は、弥生時代中期に出現した器形で、最大径が器高を凌駕する扁平な算盤玉形の体部が特徴である。口縁部には、蓋の装着のための穿孔がある。662、663、675は、肩部がく字形に屈曲するために肩が張った形態である。670は、弥生時代前期の所産のもので、体部の上位にヘラ描きによる歪みの激しい複数の沈線文がある。683は、混入品である。

② SD03

[遺構] I ①区とII区に跨り、SH03、SH04、SH06の下部に所在する。残存箇所幅と深さは全体にわたって一定で、中心軸は直線的である。横断面の形態は皿形である。

埋土は、最下層が一時期に形成された状態を示す以外、他の土層序は時間をかけて形成された状態を示すことから、人為的に埋められた可能性は低いと考えられる。

[遺物]684と685の口縁端部は、水平方向に広く開口した形態である。

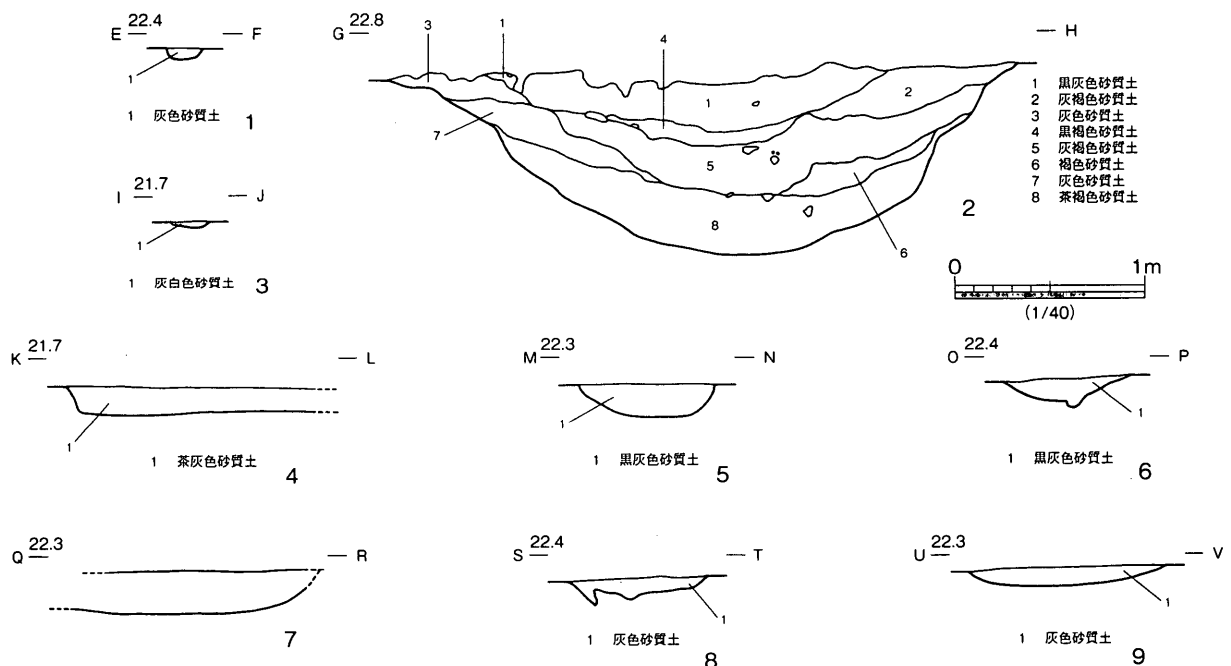
③ SD08

[遺構] III ③区の西部に所在する。遺構の両岸部は緩く傾斜する形態で、東岸部の南部に向かうほど斜度が小さくなっている。

④ SD18

[遺構] IV ②区の北部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。

⑤ SD27

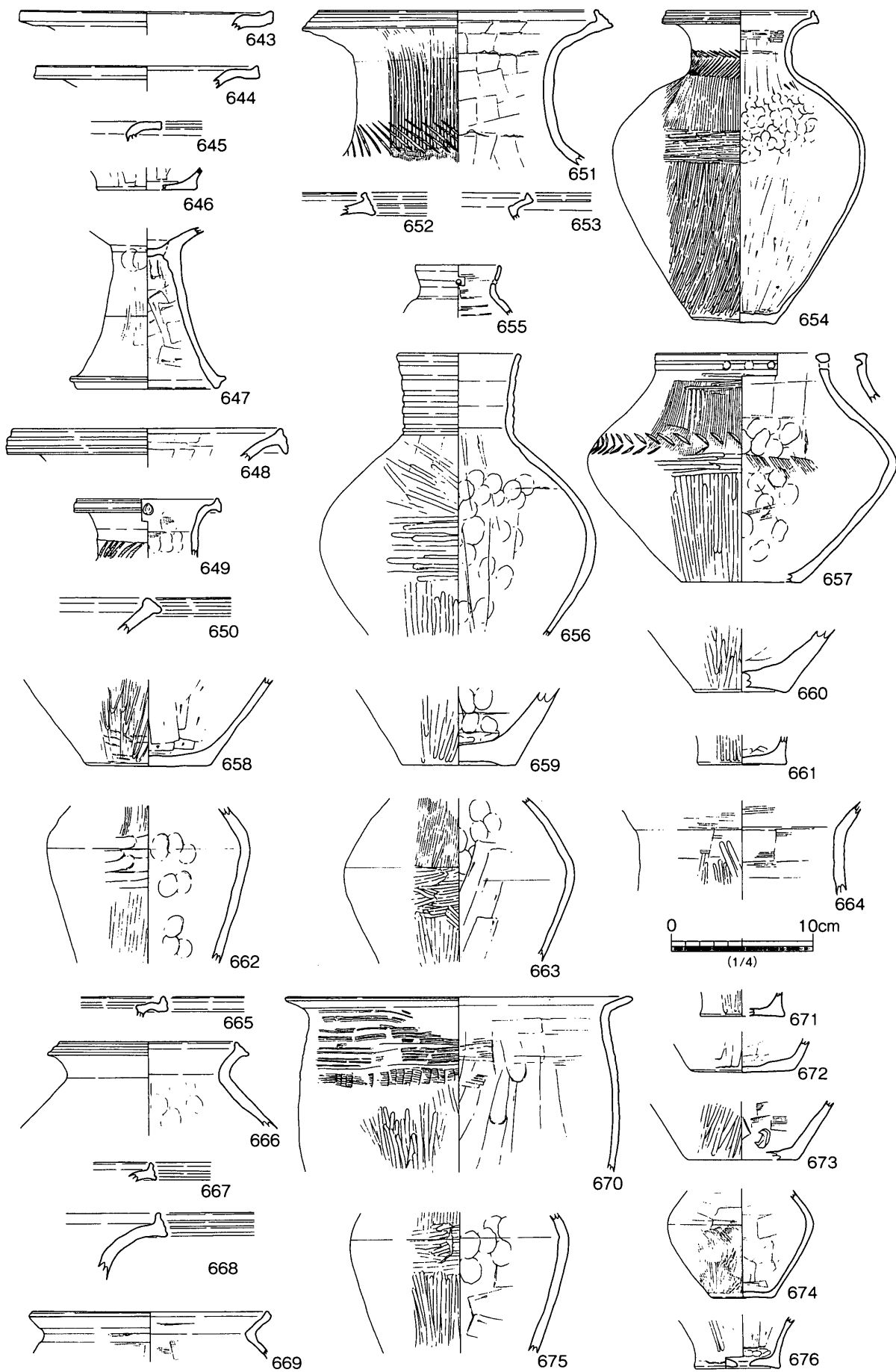


第52図 溝状遺構遺構実測図1

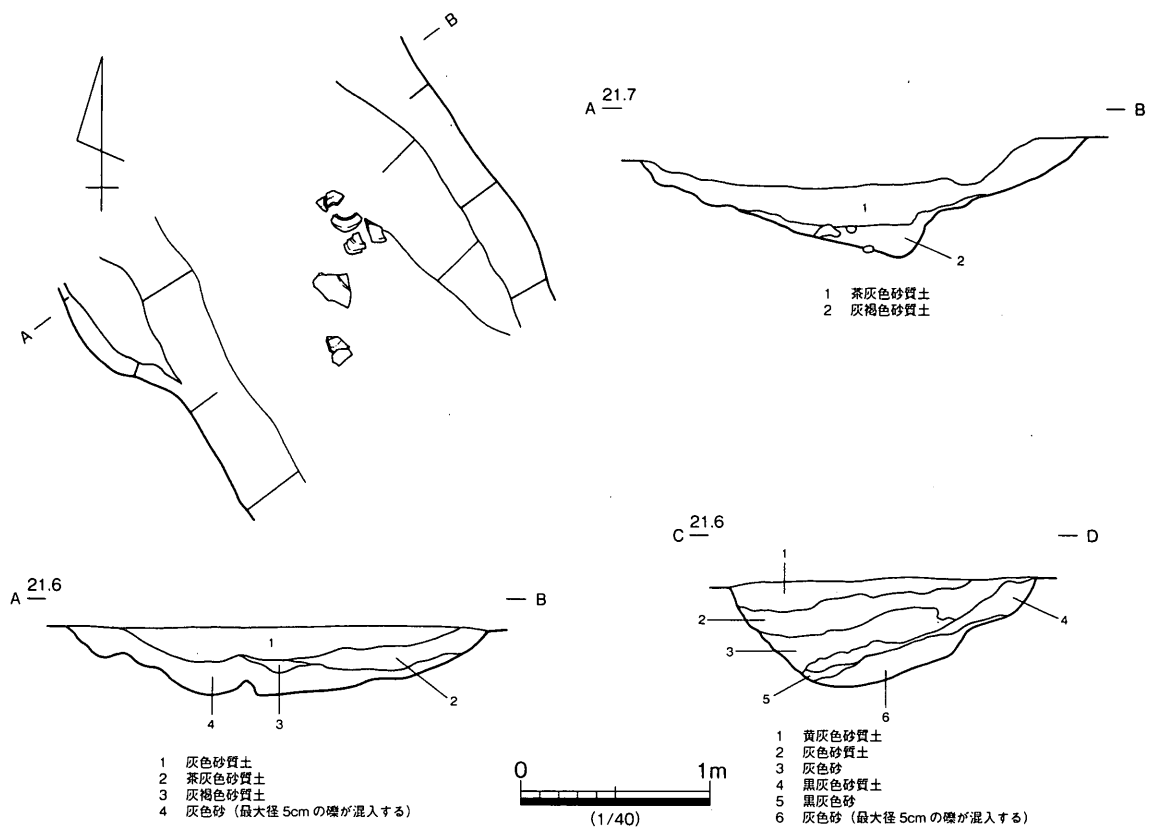
(1:SD02,2:SD03,3:SD06,4:SD07,5:SD30,6:SD35,7:SD40,8:SD35,9:SD48)



第 53 图 沟状遺構實測圖 2 (SD01)



第 54 図 溝状遺構遺物実測図 1 (643 ~ 647:SD100,648 ~ 676:SD01)



第 55 図 溝状遺構遺構実測図 3 (SD08)

[遺構] V③区の中央部に所在する。遺構の大部分が損壊しているが、保存状態が良好な北半部の形態から、原形はほぼ直線的な平面形態であったことがわかる。

[遺物] J748 は大型品である。752 は長軸方向の 4 面に、主として短軸及び斜め方向の使用痕が見られる。

⑥ SD30

[遺構] V②区の北西隅部に所在する。SD28 や SD79 により、検出面積が少なくなっているが、遺構の幅と深さは全体にわたって一定で、中心軸は直線的であったことが推測できる。

⑦ SD35

[遺構] V④区の西半部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定で、中心軸は直線的であることから、規格的に開削されたことがわかる。

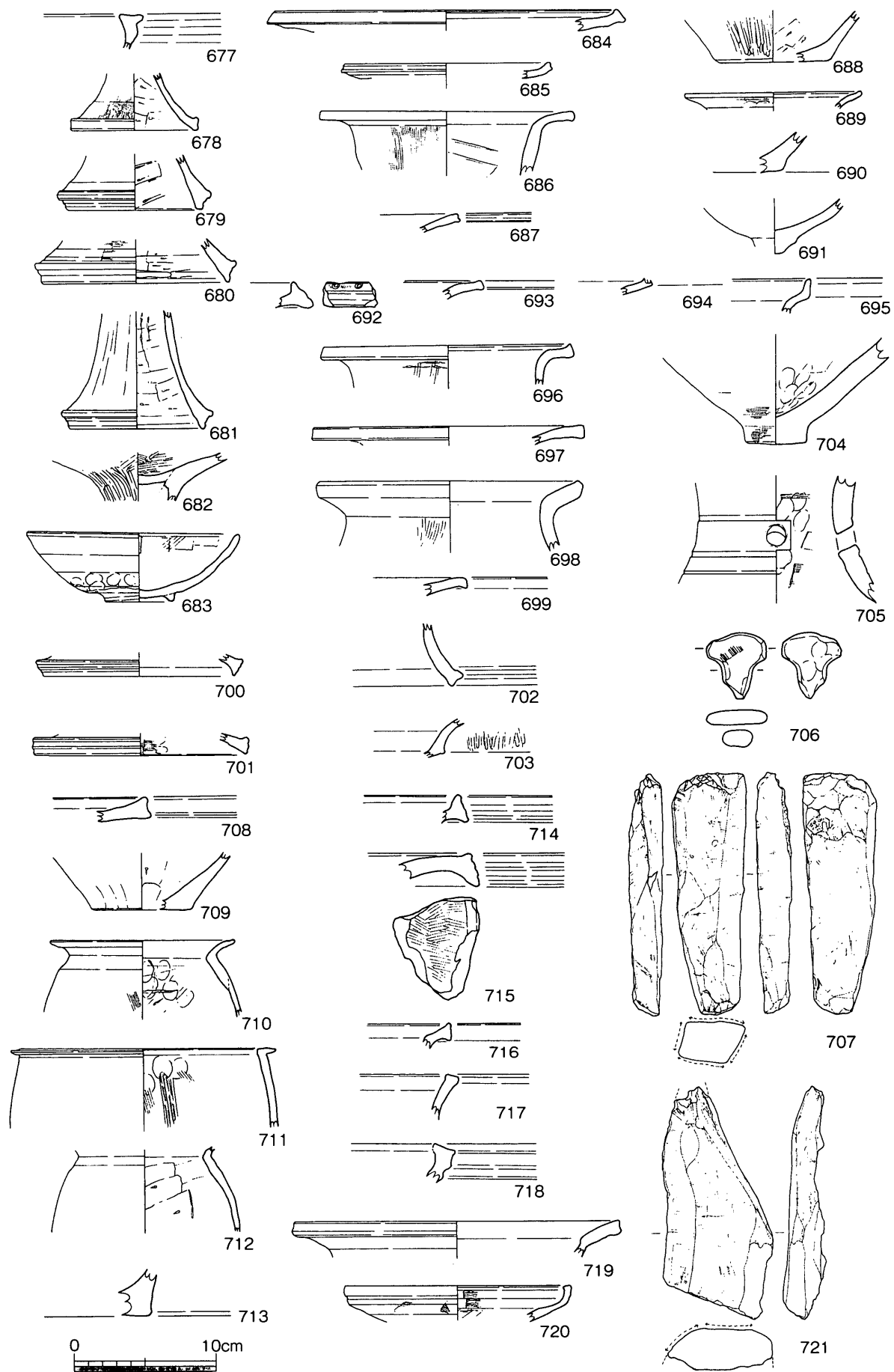
[遺物] J763 の原形は、最大径に相当する体部の器壁がく字形に屈曲し、同部から底部にかけての下位部分が直線的な形態を示す器形が想像される。

⑧ SD42

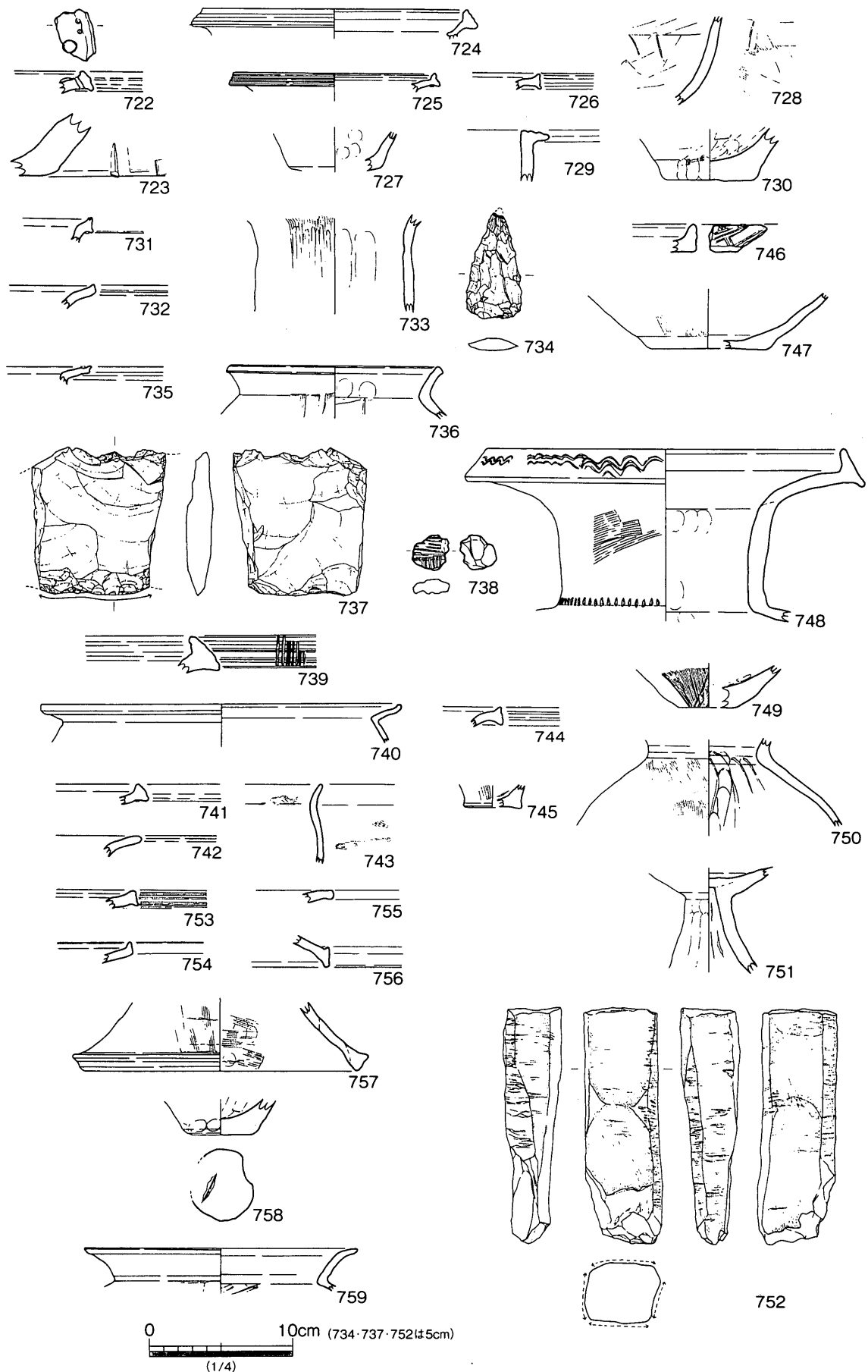
[遺構] V②区の北東部の SD56 の下位に所在する。当該地区の大部分の溝状遺構が、南東から北東への方向性を示すのに対して、本遺構の中心軸は、ほぼ南北方向を示している。これは、SD56 の中心軸が、V①区と V②区の境界部分で東西方向から南北方向に変化しているためである。

[遺物] J805 は製作途上で廃棄されたものと考えられる。

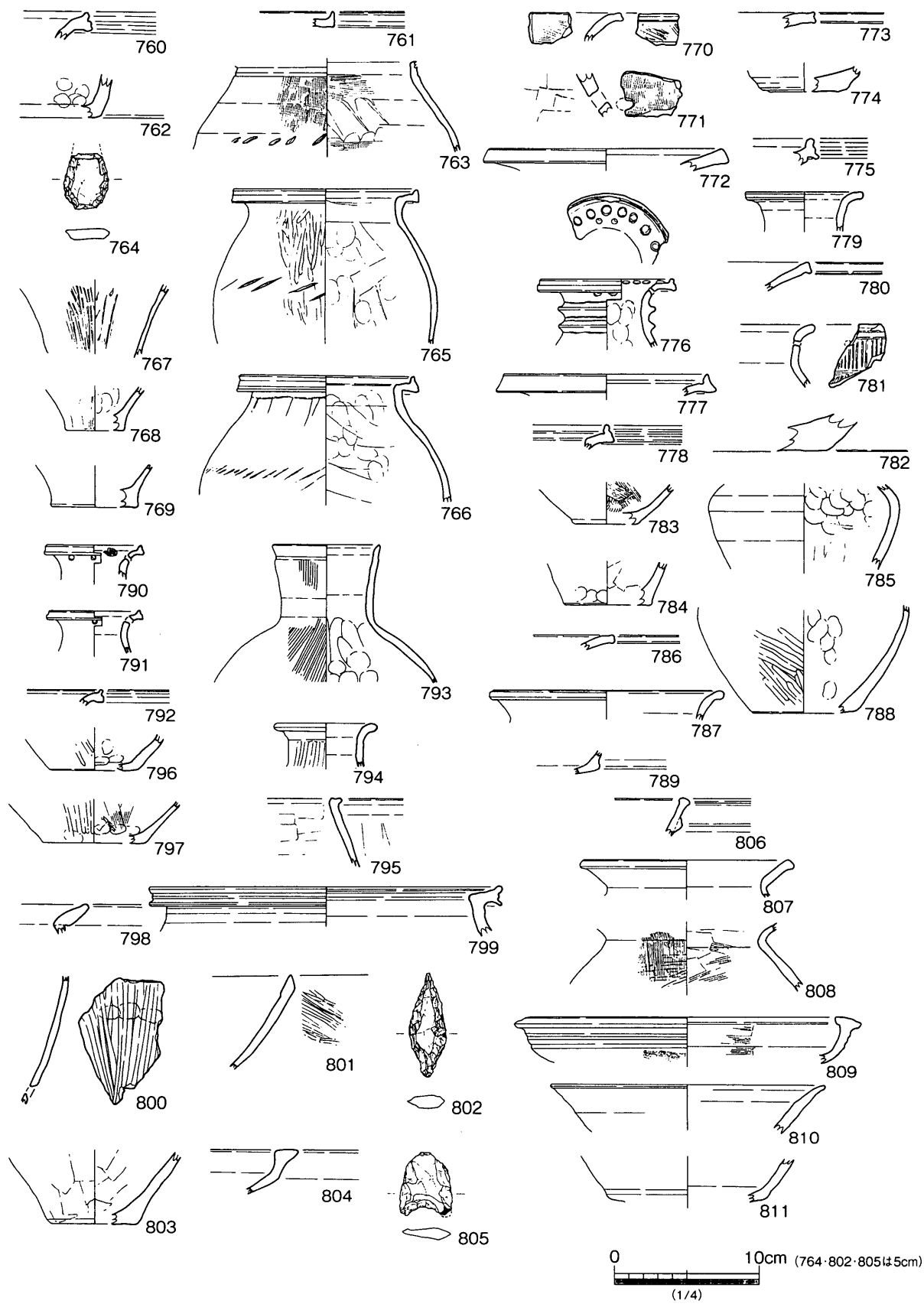
⑨ SD48



第 56 図 溝状遺構遺物実測図 2 (677 ~ 683:SD01,684 ~ 687:SD03,688:SD04,689 ~ 690:SD101,691:SD102,692 ~ 707:SD104,708 ~ 712:SD05,713:SD121,714 ~ 721:SD11)

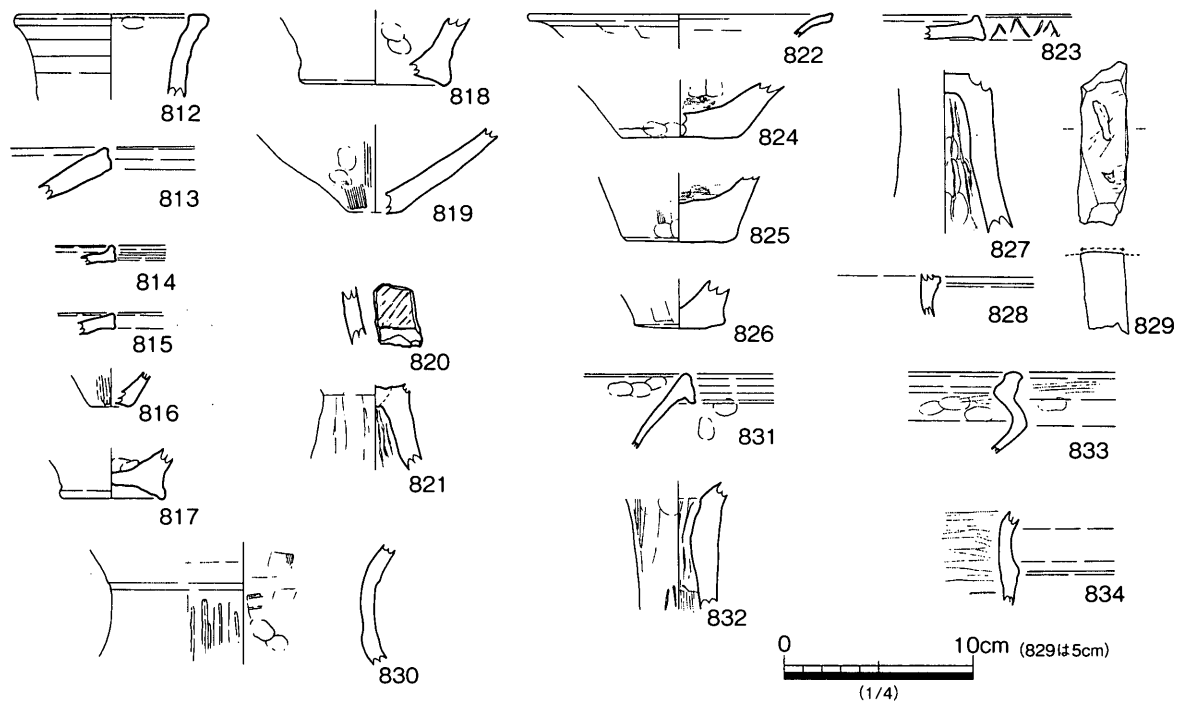


第 57 図 溝状遺構遺物実測図 3 (722:SD12,723:SD161,724:SD162,725 ~ 727:SD14,728:SD165,729·730:
SD16,731 ~ 734:SD17,735 ~ 737:SD168,738:SD19,739 ~ 743:SD169,744:SD170,745:SD20,746·747:SD171,748 ~
752:SD27,753:SD28,754 ~ 757:SD30,758·759:SD31)



第 58 図 溝状遺構遺物実測図 4

(760 ~ 764:SD35,765 ~ 769:SD175,770:SD36,771·772:SD37,773·774:SD38,775:SD39,776 ~ 789:SD40,790 ~ 802:SD41,803 ~ 805:SD42,806 ~ 811:SD43)



第 59 図 溝状遺構遺物実測図 5

(812・813:SD44,814～821:SD46,822～829:SD48,830:SD49,831・832:SD54,833・834:SD55)

[遺構] V④区の中央部に所在し、SD35 とほぼ平行した位置関係にある。遺構の幅と深さは全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。

⑩ SD56

[遺構] III①・②区の南西隅部、V①区の中央部、V②区にわたって所在する。遺構の所在地は、集落跡が存在する微高地形の東側縁辺部に相当する。当該箇所は、後述する SR01 に近い位置であり、本遺構の南部については、同河川跡と合流すると考えられる。したがって、本遺構は自然河川から人工的に引き込まれた水路であった可能性がある。

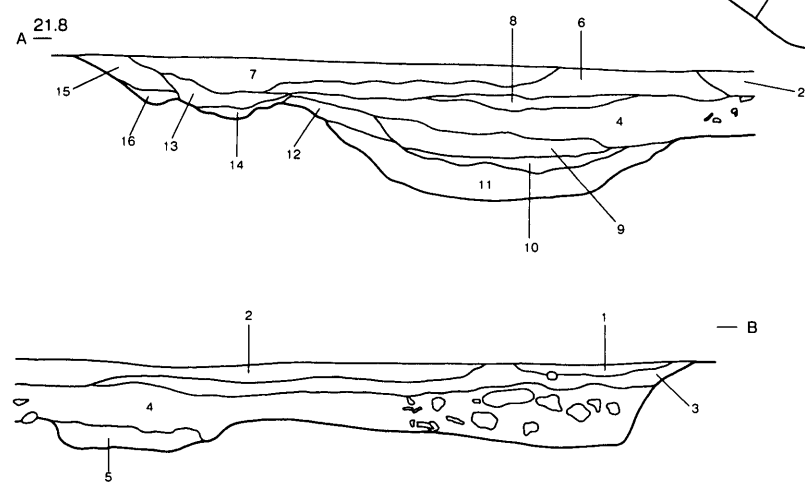
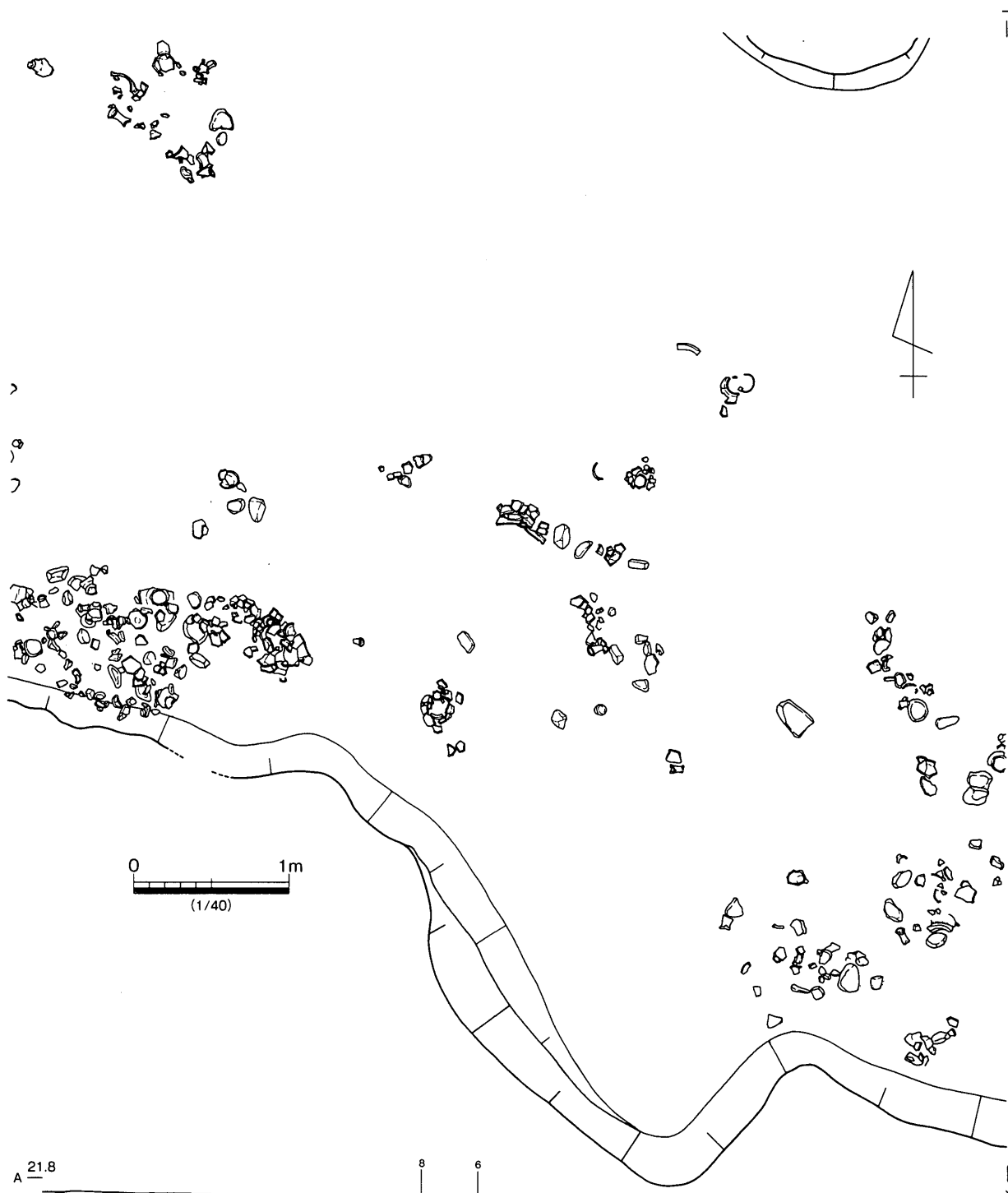
遺構の中心軸は、微高地形の平面形態の影響を受けて、南半部が東南から北西への方向性を示すのに対して、北半部はほぼ南北方向を示す。

さて本遺構は、検出された溝状遺構全体で最大の規模があり、破碎された状態の土器が多量に出土したことが特徴である。特に後者の点については、集落跡側に集中する傾向が認められることから、集落跡に伴う廃棄場所として利用されたことを意味するものである。ただし、獣骨、獣歯等の動物遺体や植物遺体等が少ないことから、土器の廃棄場所として、限定的に活用されていたことが推測できる。また、土器の中には丁寧に置かれた状態を示すものが含まれていたことから、祭祀行為の結果を現している可能性もある。

[遺物] 835～848 は「壺・甕 A」である。839 の口縁部の内面には、2 個単位の竹管文が均等な間隔で施されている。849～869 は「壺・甕 C」である。858 は、口縁部の端面が上方向を示すように成形されており、同面に竹管文が均等な間隔で施されている。862 は、頸部が直立する器形である。866～869 は、口縁部の上端部が内傾気味の形態を示す。870～875 は「壺・甕 E」である。874 は、頸部から口縁部にかけての変化点が、明瞭な稜線を示す器形で、口縁端部には幅のある粘土紐によって成形された複合

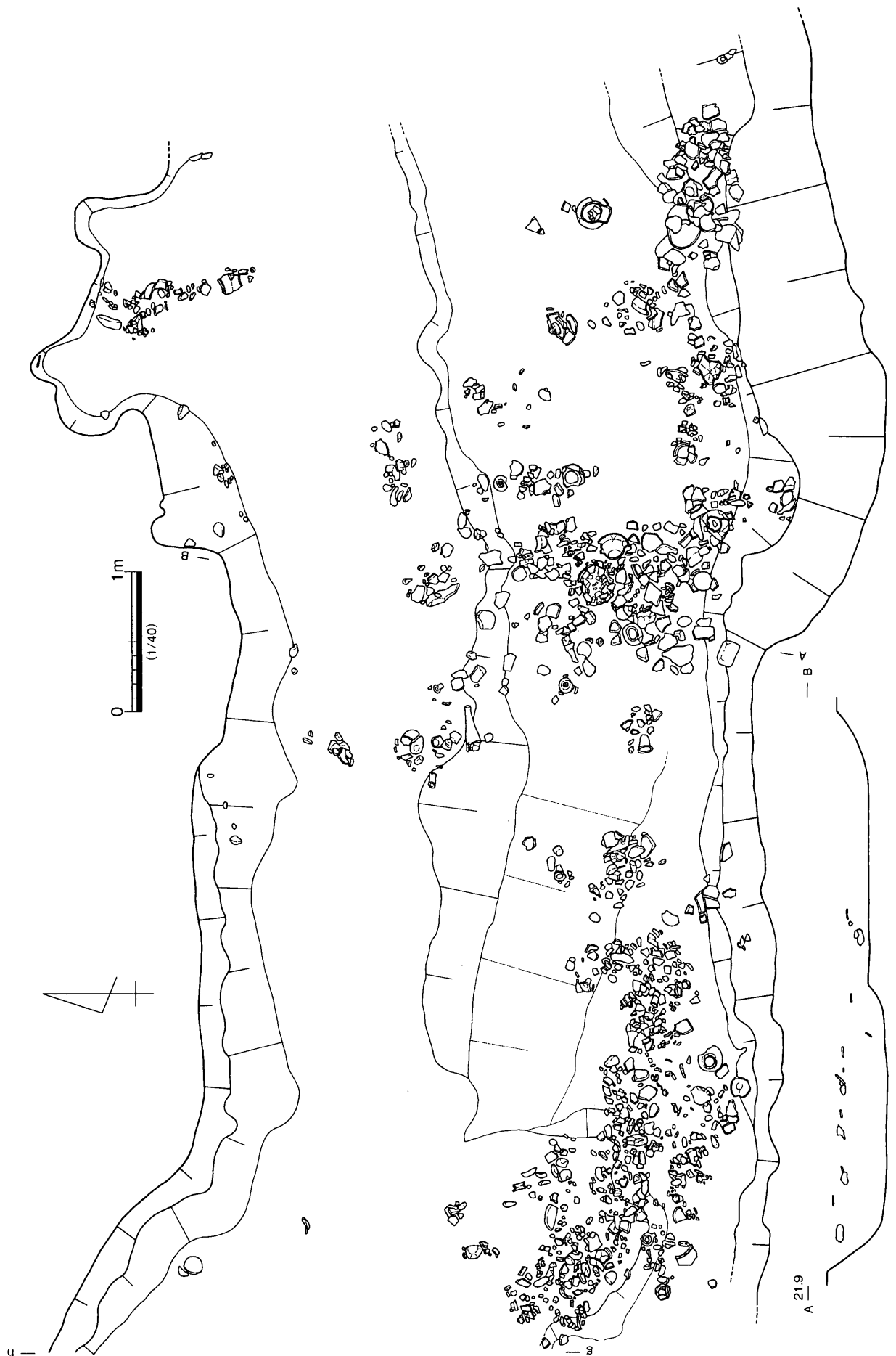


第 60 図 溝状遺構遺構実測図 4 (SD56)



- 1 茶灰色砂質土
- 2 黒褐色砂質土 (粘性あり)
- 3 灰褐色砂質土
- 4 砂礫
- 5 灰褐色砂質土
- 6 褐色砂質土
- 7 黒褐色砂質土
- 8 灰褐色砂質土
- 9 灰色砂
- 10 灰褐色砂
- 11 黒灰色砂
- 12 灰色砂
- 13 砂礫
- 14 灰色砂
- 15 灰色砂質土
- 16 黄灰色砂質土

第 61 図 溝状遺構遺構実測図 5 (SD56)



第 62 図 溝状遺構遺構実測図 6 (SD56)

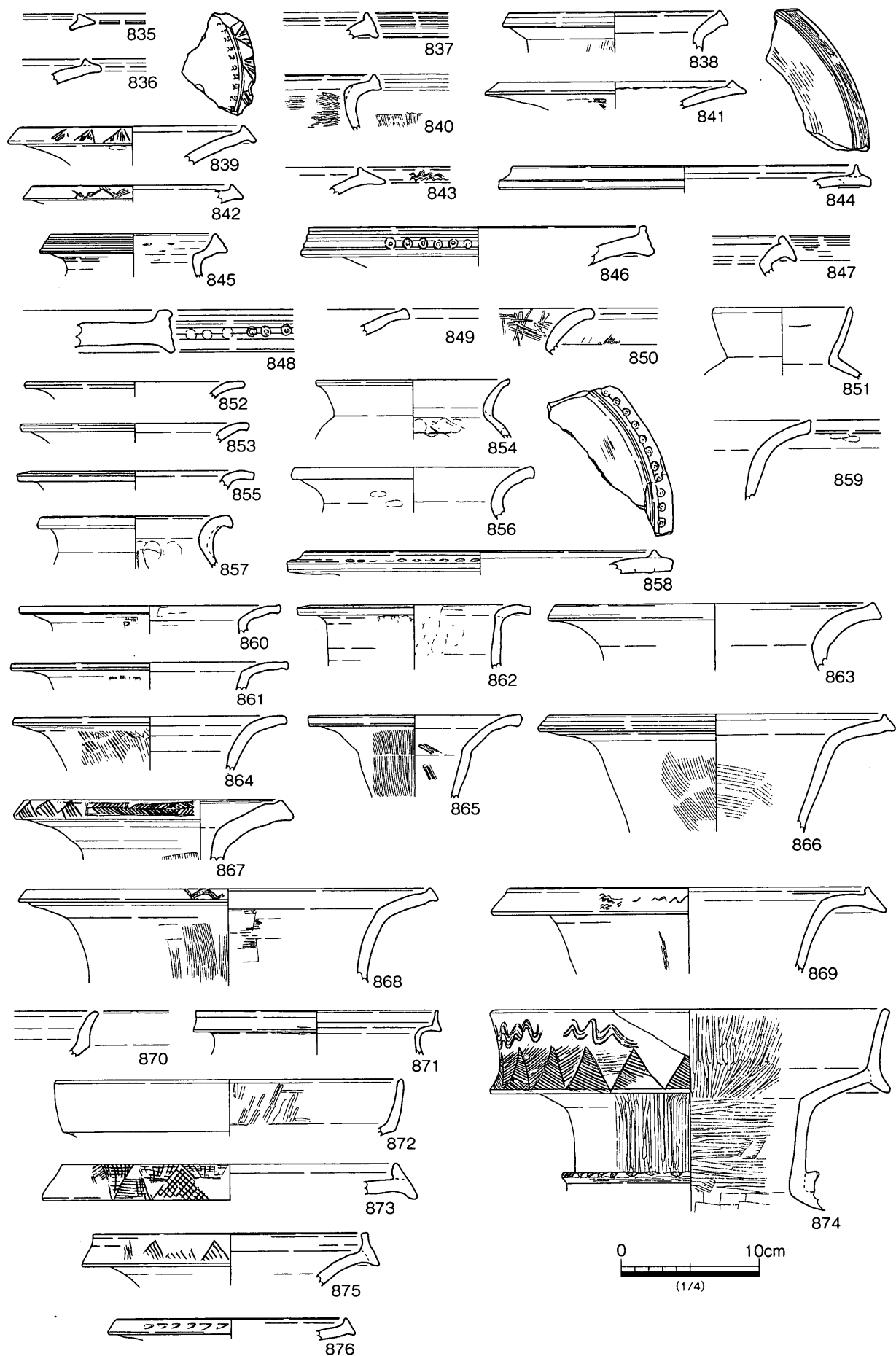


第 63 図 溝状遺構遺構実測図 7 (SD56)

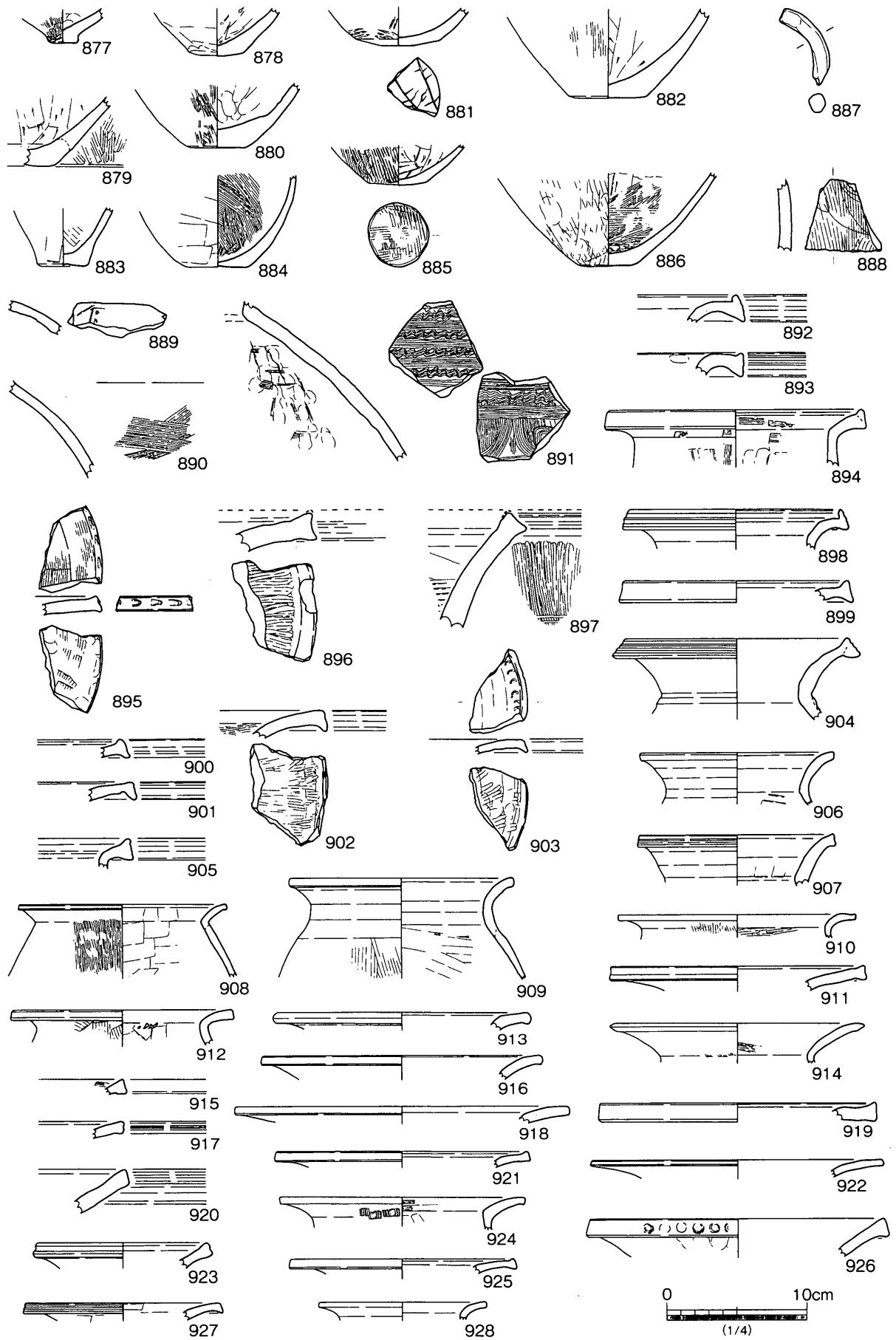
口縁部が存在する。同部は波状文や鋸歯文に見られるように、加飾を目的として成形されたことがわかる。881の底面には、製作時に使用された樹木の葉脈の痕跡が認められる。891の外面は、上部が通常の平行沈線文と波状文の組み合わせによって加飾されているのに対して、下部は絵画のような、統一性のない沈線文によって加飾されている。892～939は「壺・甕C」である。903の上面には、半裁竹管文が等間隔に施されている。934の上面のヘラミガキは、放射状に施行していたものが、次第に斜め方向に変化したものである。940～944は「壺・甕E」である。942の外面にある沈線文は、樹木の葉脈か、幹と枝を表現したものと考えられる。957の外面の装飾は、平行しないために乱雑な様態を示す。958の外面の装飾は、直線を意識した内容である。961～1007は「壺・甕A」である。993は、直線状の口縁部が逆八字形に開口する器形であり、体部との変化点の稜線が明瞭な器形である。999の上面には、均整のとれた放射状のヘラミガキが認められ、口縁端部の重複した波状文についても、重なり方が自然である。1005と1006の文様は、乱雑に施されたことがわかる。1008～1135は「壺・甕C」、1143～1152は「壺・甕B」である。1145の口縁端部は、擬口縁の先端部と上部に幅広の粘土板が装着されて、複合口縁の形態に成形されている。1147の口縁部外面の波状文は、土器本体を回転させずに施文されたために、流麗さが見られない。1231の底面には、樹木の葉脈の痕跡が認められる。1249の外面の線刻画は、左から右へ向かって、細い線が薄く描かれた後に、下から上へ向かって、太い線を跳ね上げるように交差させて描かれていることがわかる。両方向の線の間隔は、均等になるように意図されたことがわかる。1267の外面には、同心円様の絵画が認められる。1268の外面の絵画は、2本線の区画線の内部を斜線で均等に区分するように描かれたことがわかる。1274～1393は「壺・甕A」、1394～1714は「壺・甕C」である。1506は体部が球体状の器形で、頸部から口縁部にかけての部位が小型化している点に特徴がある。1508は器壁が厚く、安定感がある器形である。1510と1511は、広く開口した口縁部と、肩が張った扁平な体部が特徴的な器形である。1519は大型の口縁部に対して、体部が小型で扁平な安定感を欠いた器形である。1715～1768は「壺・甕E」である。1924の外面の2箇所にある、同心円様の線刻画は、左右対称な状態で描かれた可能性がある。1951の外面には、籠様のものに包まれた状態で、被熱したことによって生じた、紐の痕跡が網目状に残されている。1982の外面の線刻画は、樹枝を模したことが考えられる。1987～2025は「壺・甕A」、2026～2147は「壺・甕C」、2148～2163は「壺・甕E」である。2159は、擬口縁端部から内側に寄った位置に、粘土板が直立気味に貼り付けられることにより、複合口縁の形態に成形されている。2160の口縁部外面は、綾杉文で加飾されている。2214は小型丸底壺に分類される器形である。2223の外面の線刻画は、左右に向い合った渦巻き様の絵画である。直線部分から渦巻き部分にかけて連続した表現で、上向きに巻き上がっていることから、蕨の茎と葉を模したことが考えられる。2291～2338が「壺・甕A」、2339～2519が「壺・甕C」、2520と2521が「壺・甕E」、2546～2573が「壺・甕A」、2574～2943が「壺・甕C」である。2704は、最大径が体部の下位にある器形である。2750の体部は、整然とした球形状の形態を示す。3025～3190は「壺・甕C」である。

3224～3226が「鉢A」、3227～3246が「鉢B」、3257～3286が「鉢C」、3294～3306が「鉢A」、3307～3369が「鉢B」、3375～3429が「鉢C」、3447～3467が「鉢B」、3468～3487が「鉢C」である。「鉢A」～「鉢C」の3分類以外の器形として、半球形(3488、3489)と皿形(3491、3497、3502)の資料がある。

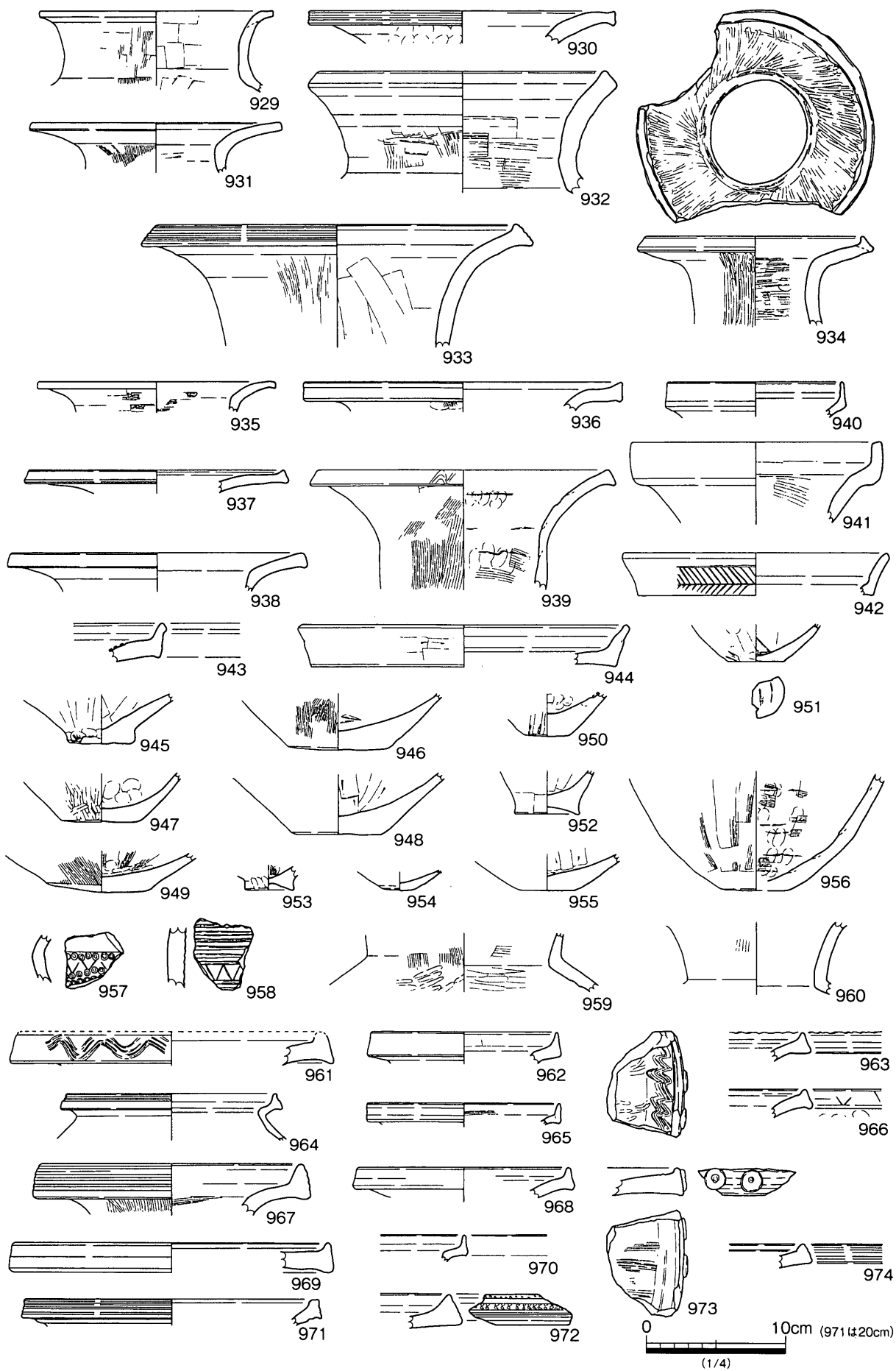
3505は以下の資料に比べると、新しい時期に所属する資料である。3528～3536が「高杯A」、3537



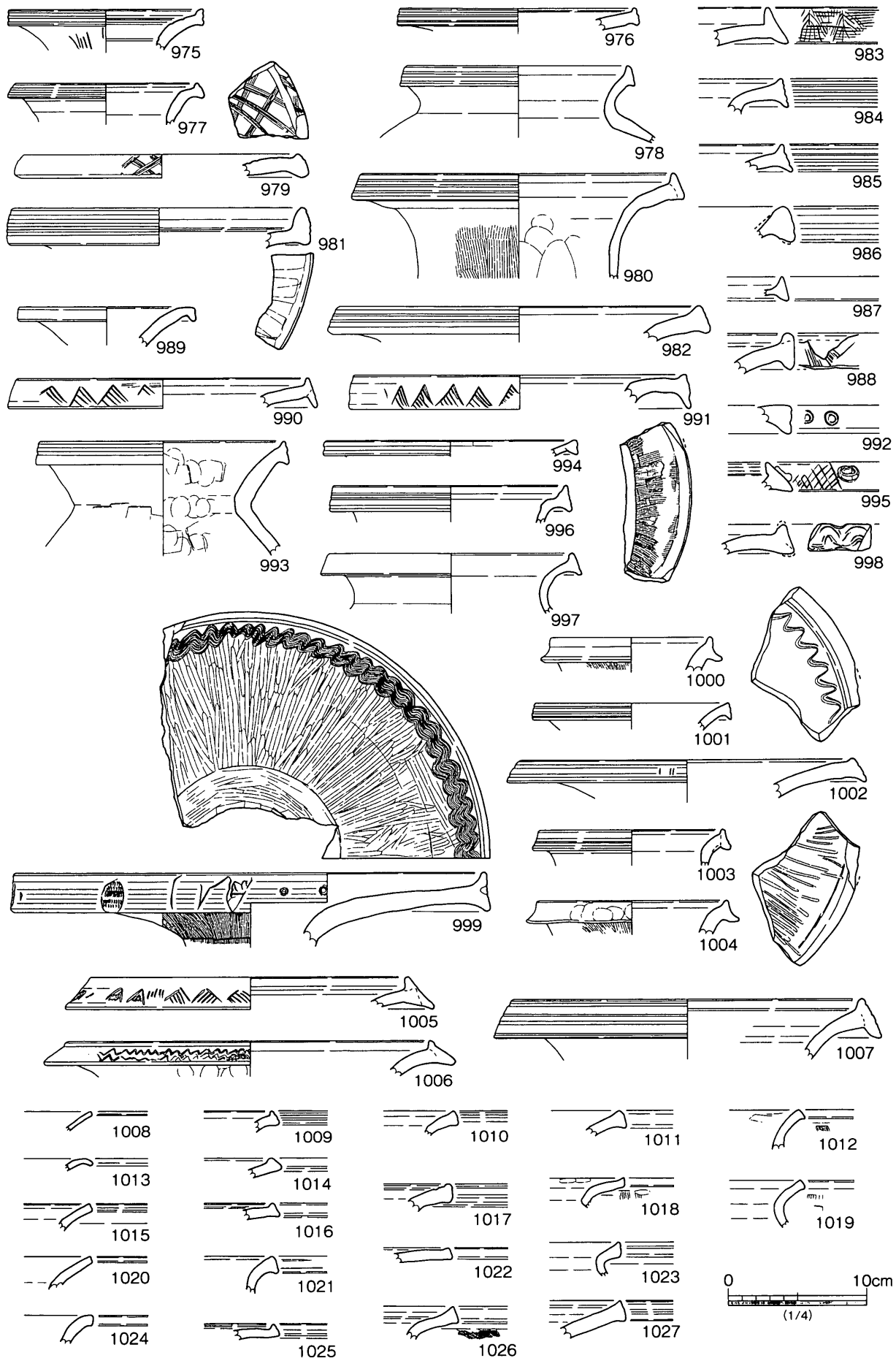
第 64 図 溝状遺構遺物実測図 6 (835 ~ 876:SD56)



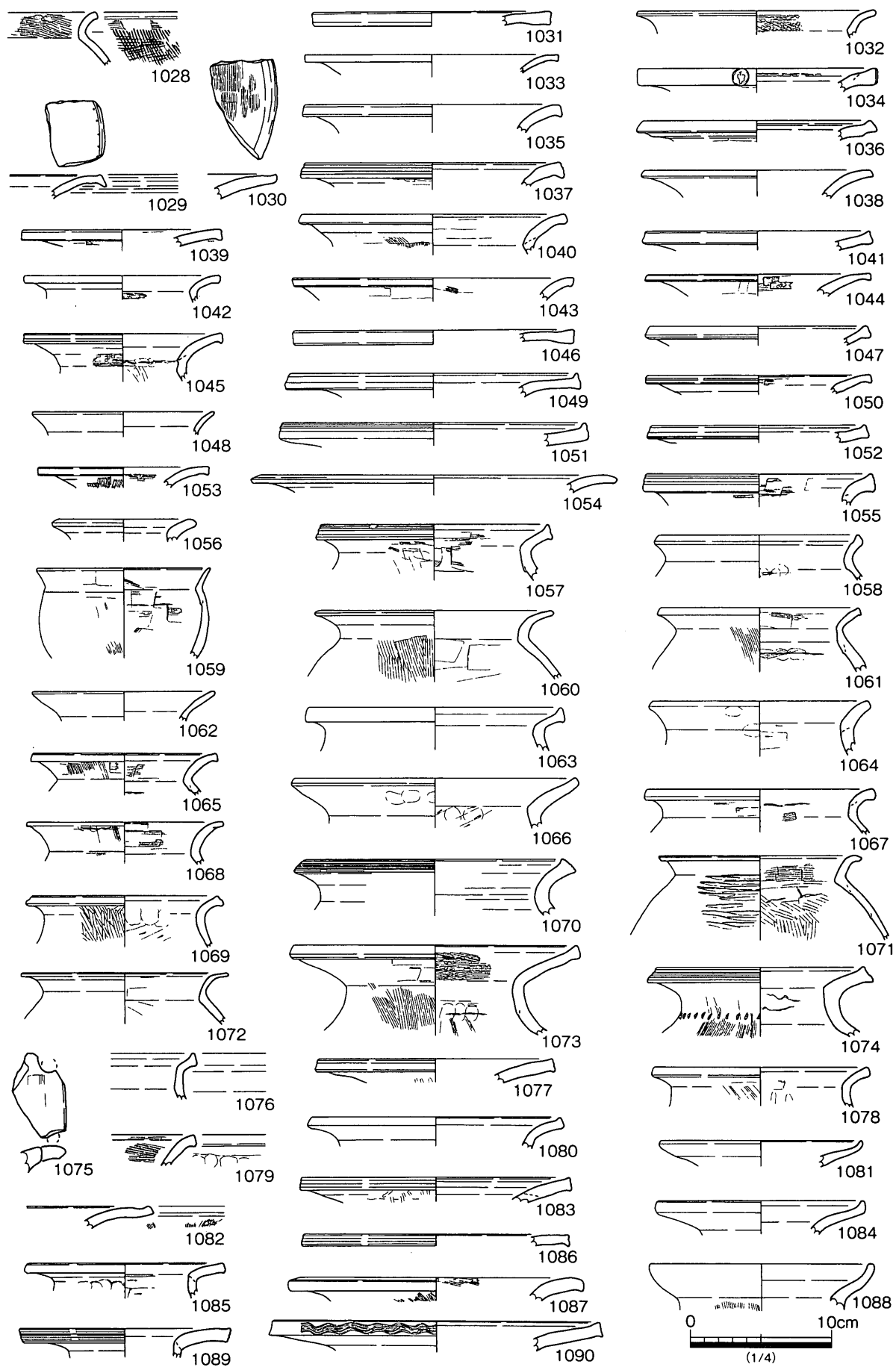
第 65 図 溝状遺構遺物実測図 7 (877 ~ 928:SD56)



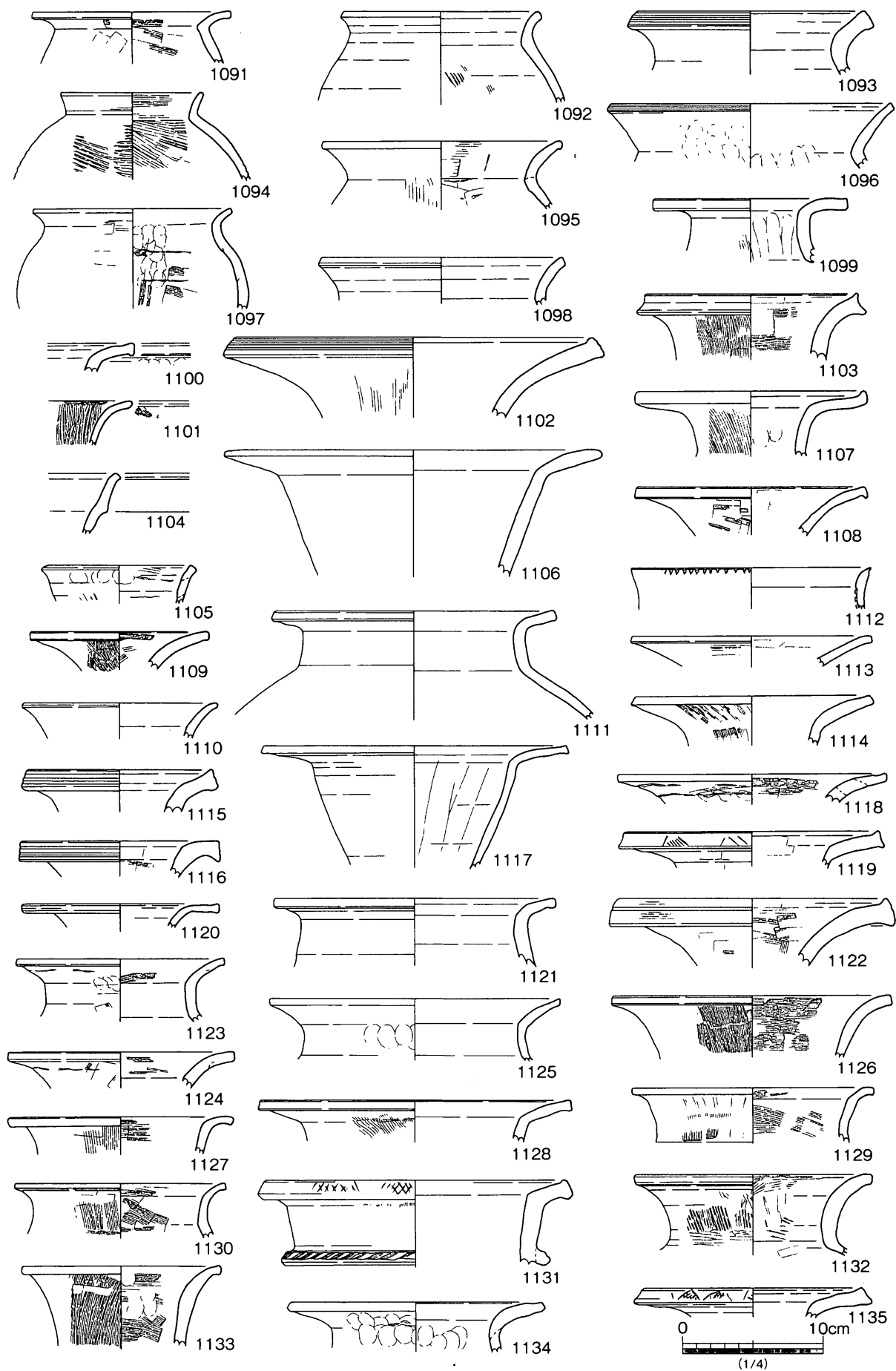
第 66 図 溝状遺構遺物実測図 8 (929 ~ 974:SD56)



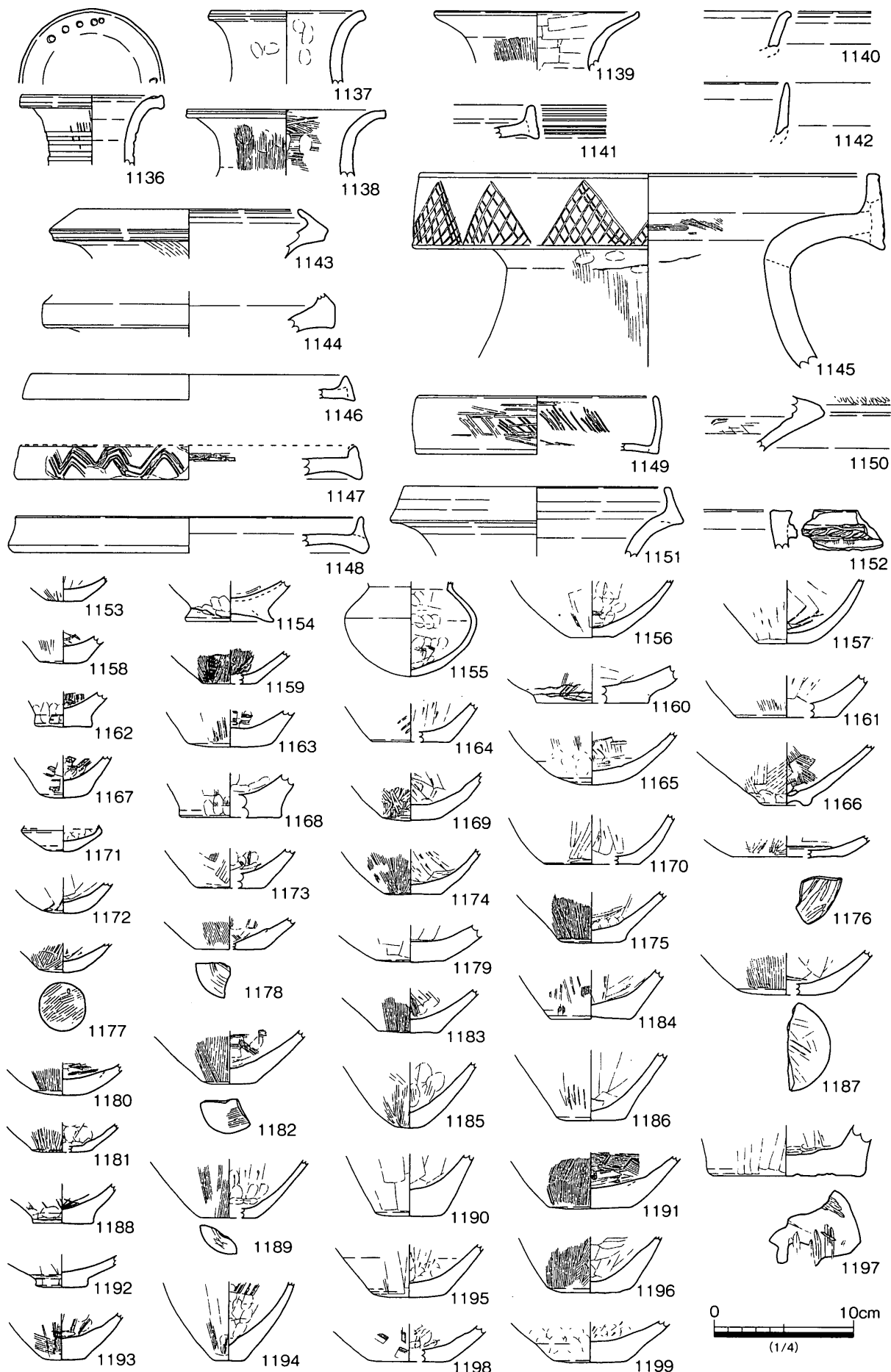
第 67 图 沟状遺構遺物実測图 9 (975 ~ 1027:SD56)



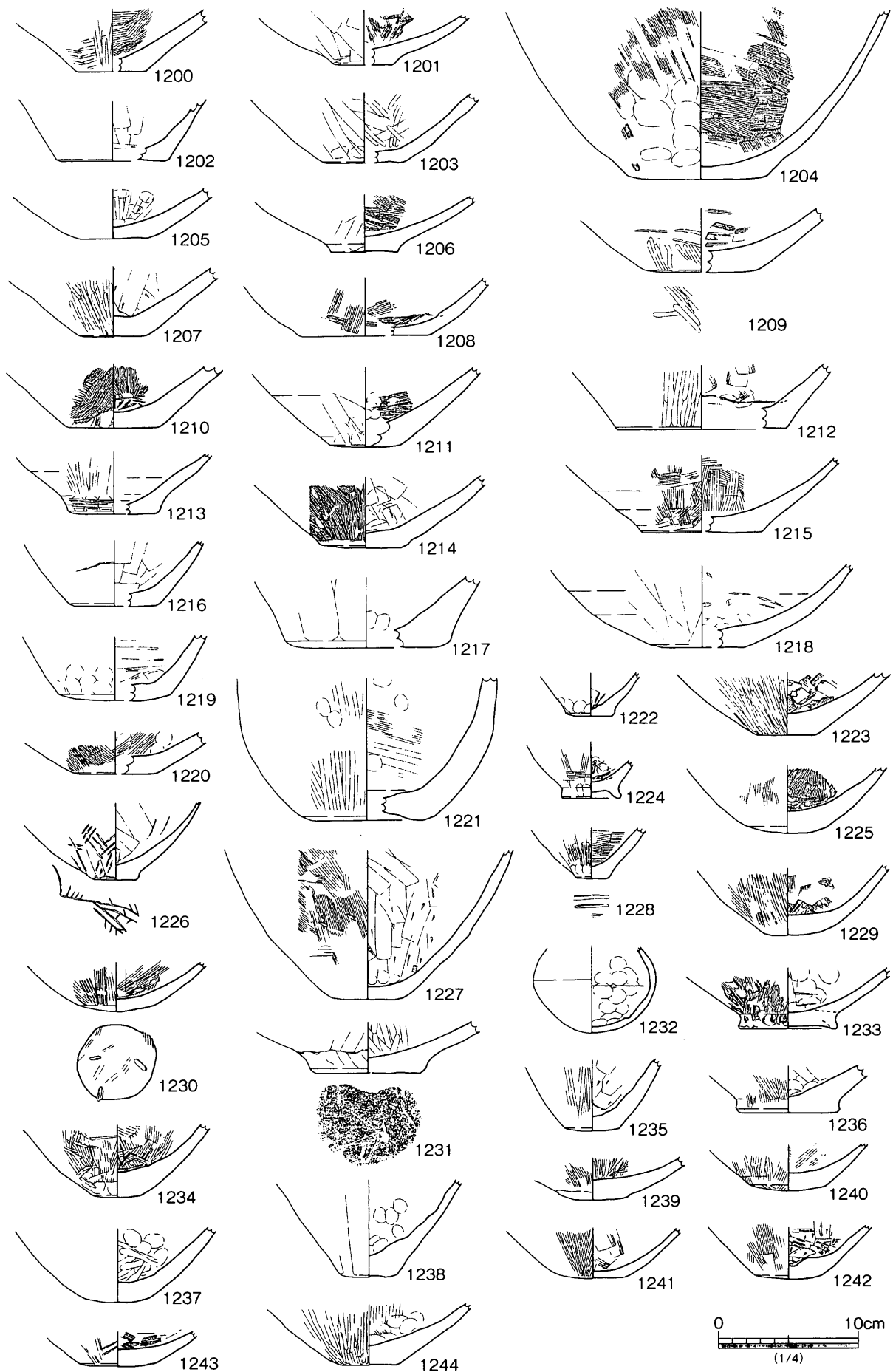
第 68 图 沟状遺構遺物実測図 10(1028 ~ 1090:SD56)



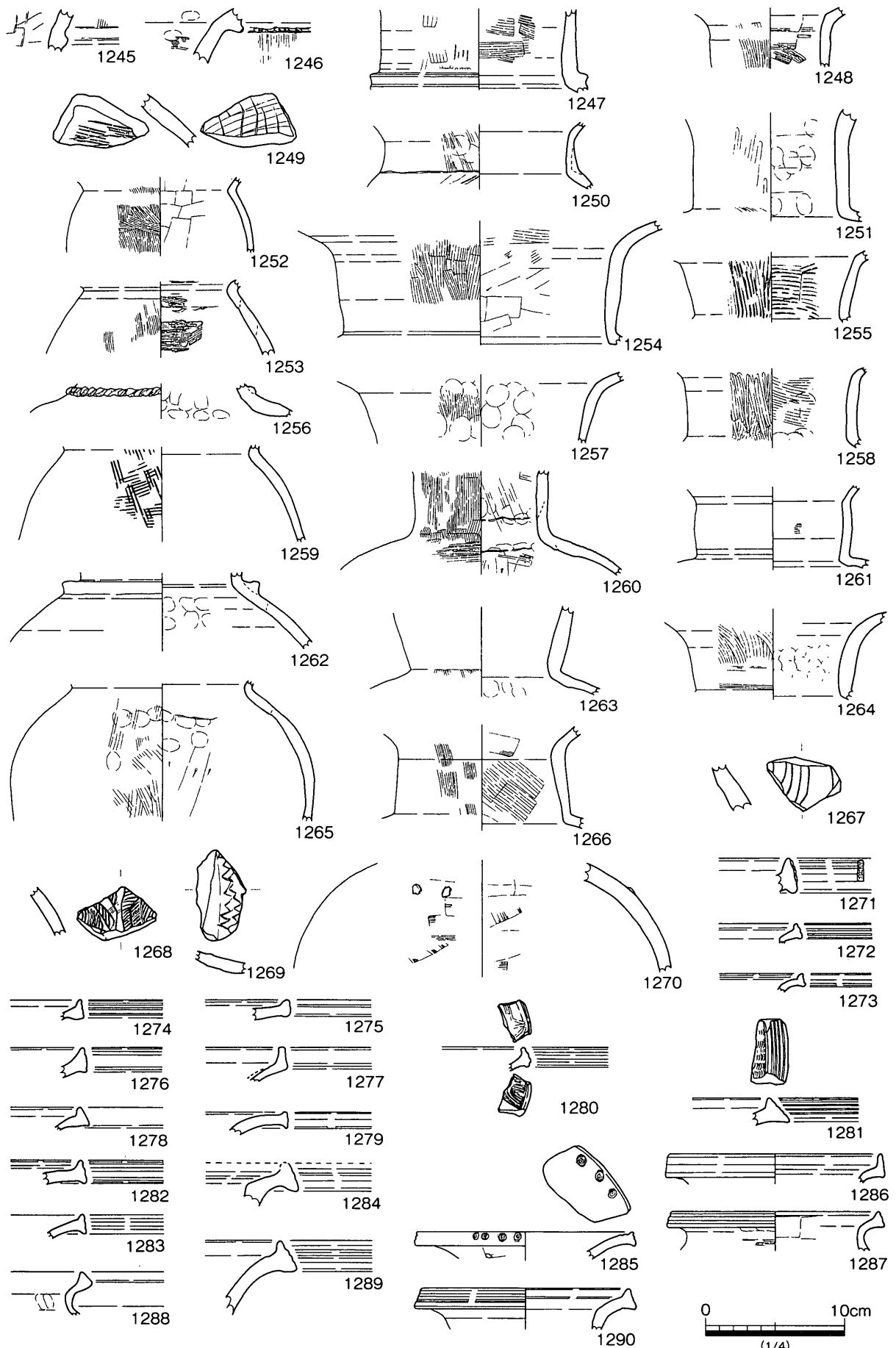
第 69 図 溝状遺構遺物実測図 11(1091 ~ 1135:SD56)



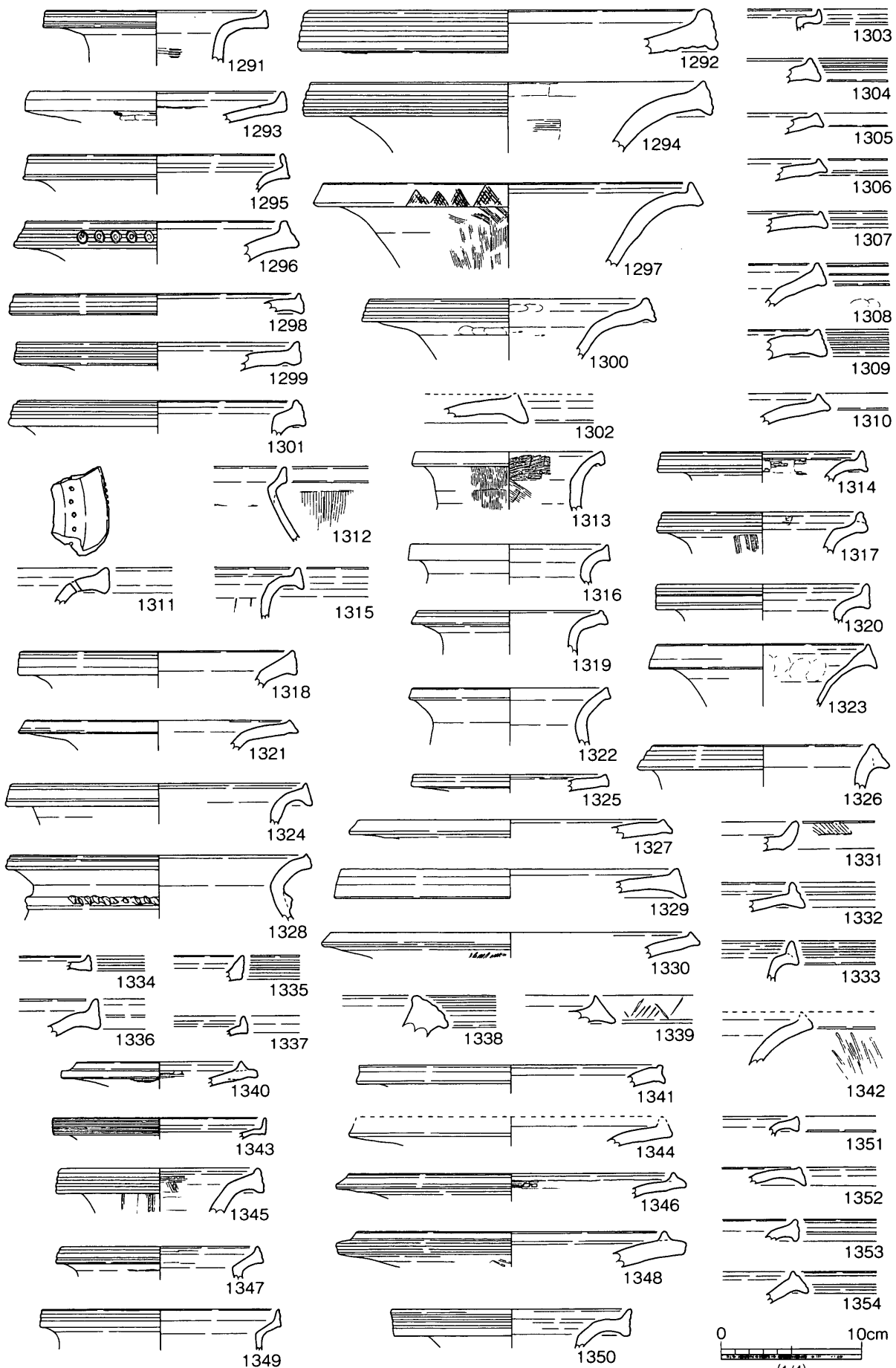
第70图 溝状遺構遺物実測図 12(1136~1199:SD56)



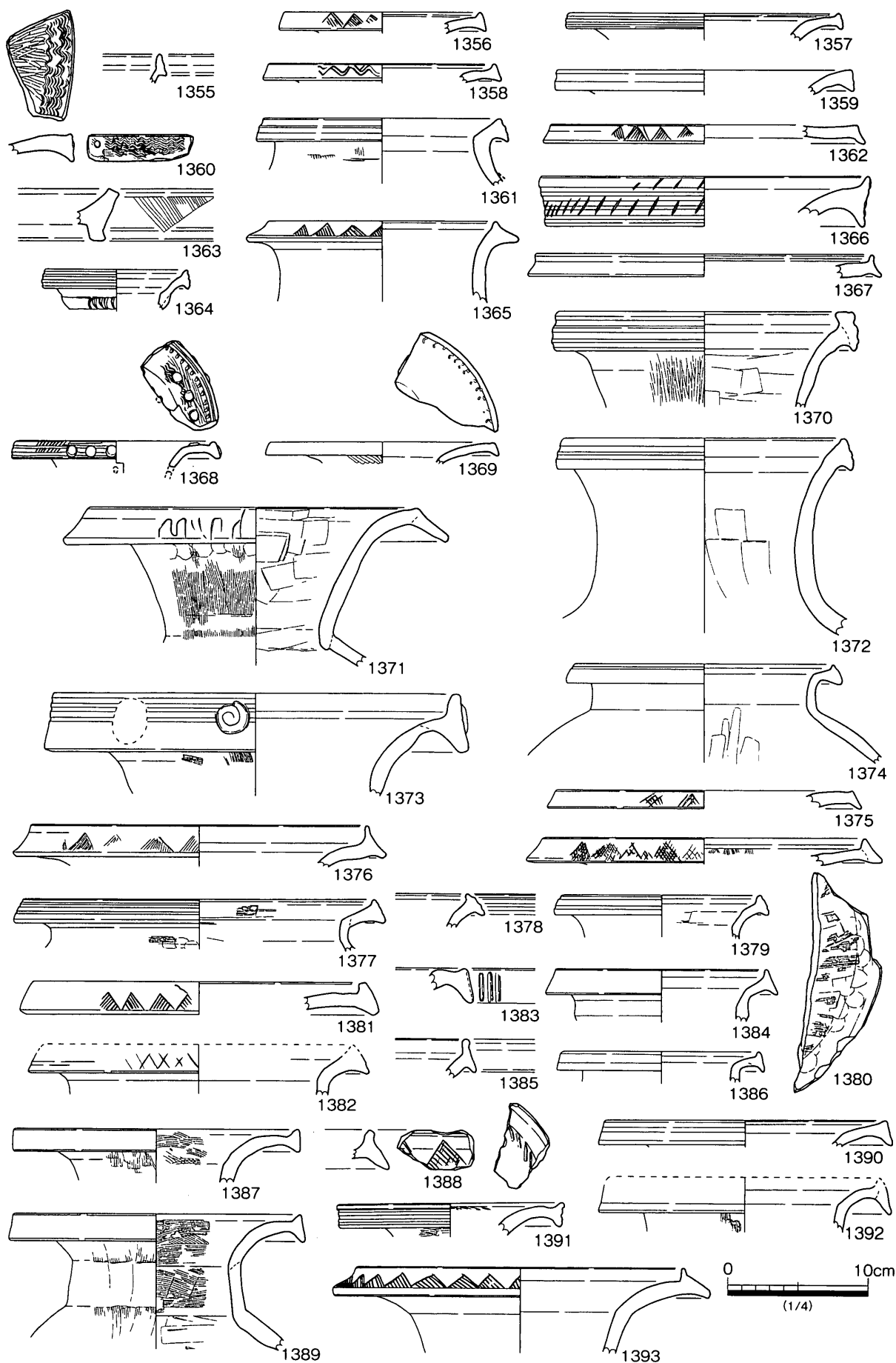
第 71 図 溝状遺構遺物実測図 13(1200 ~ 1244:SD56)



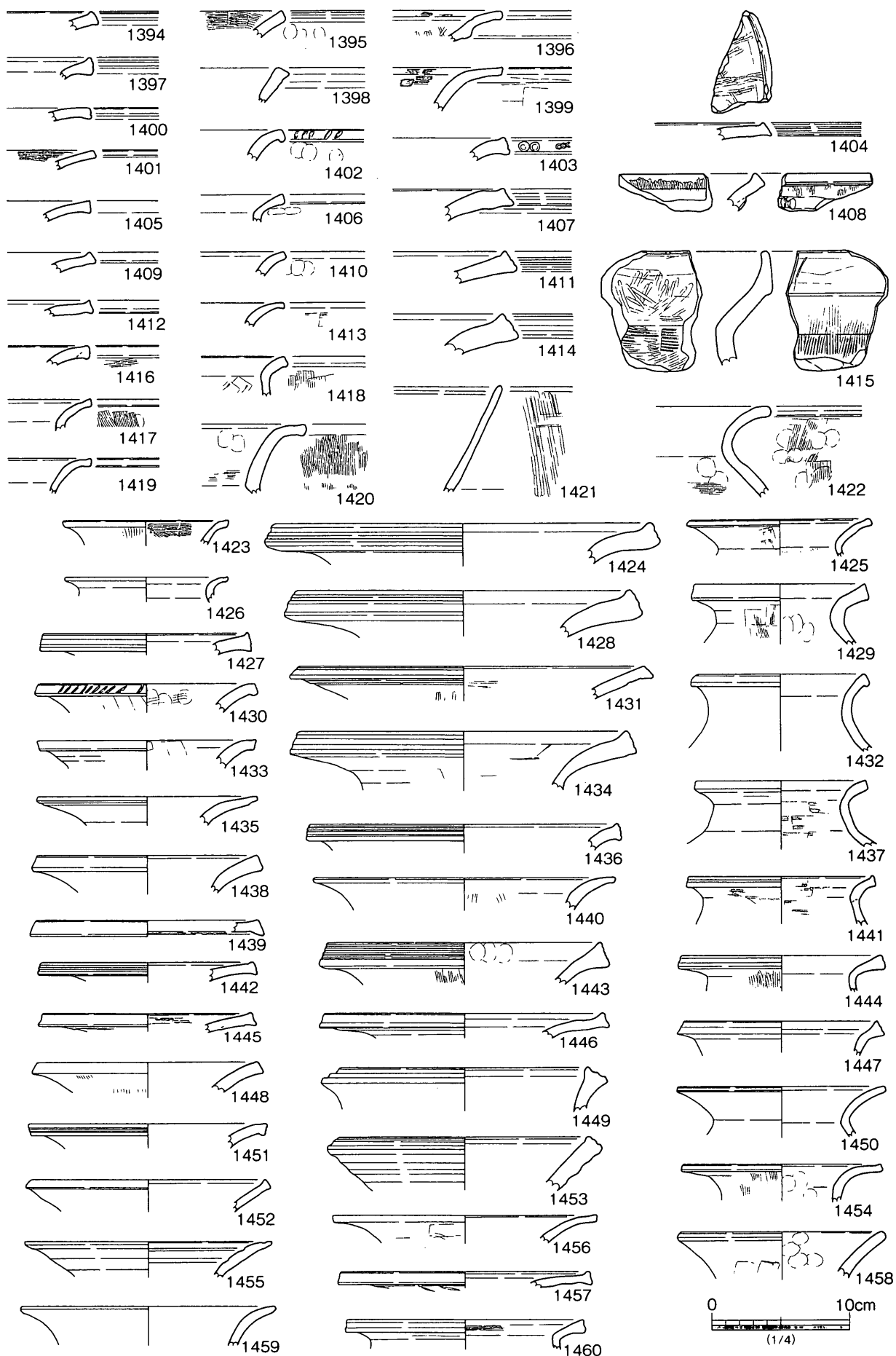
第 72 図 溝状遺構遺物実測図 14(1245 ~ 1290:SD56)



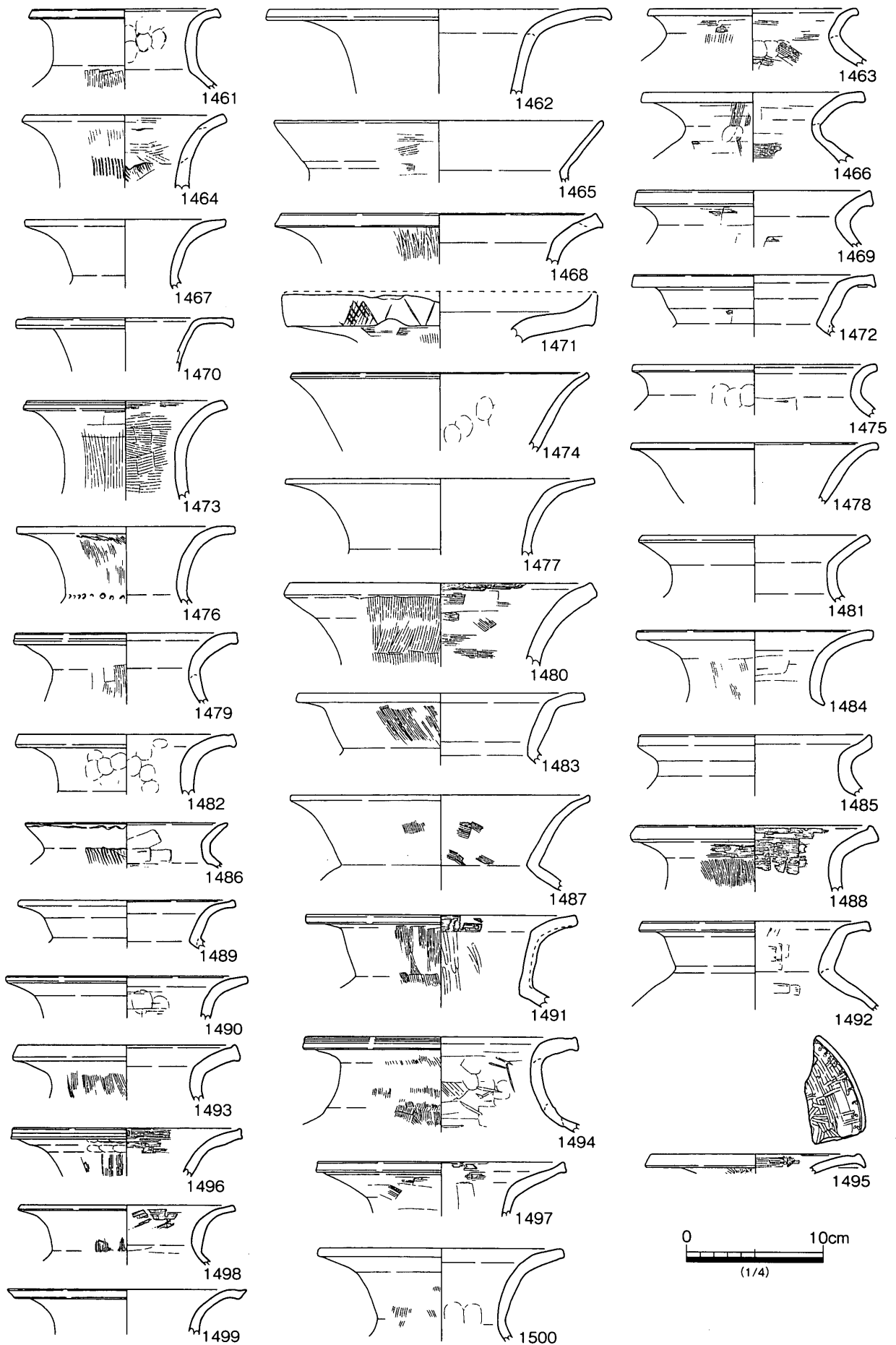
第 73 図 溝状遺構遺物実測図 15(1291 ~ 1354:SD56)



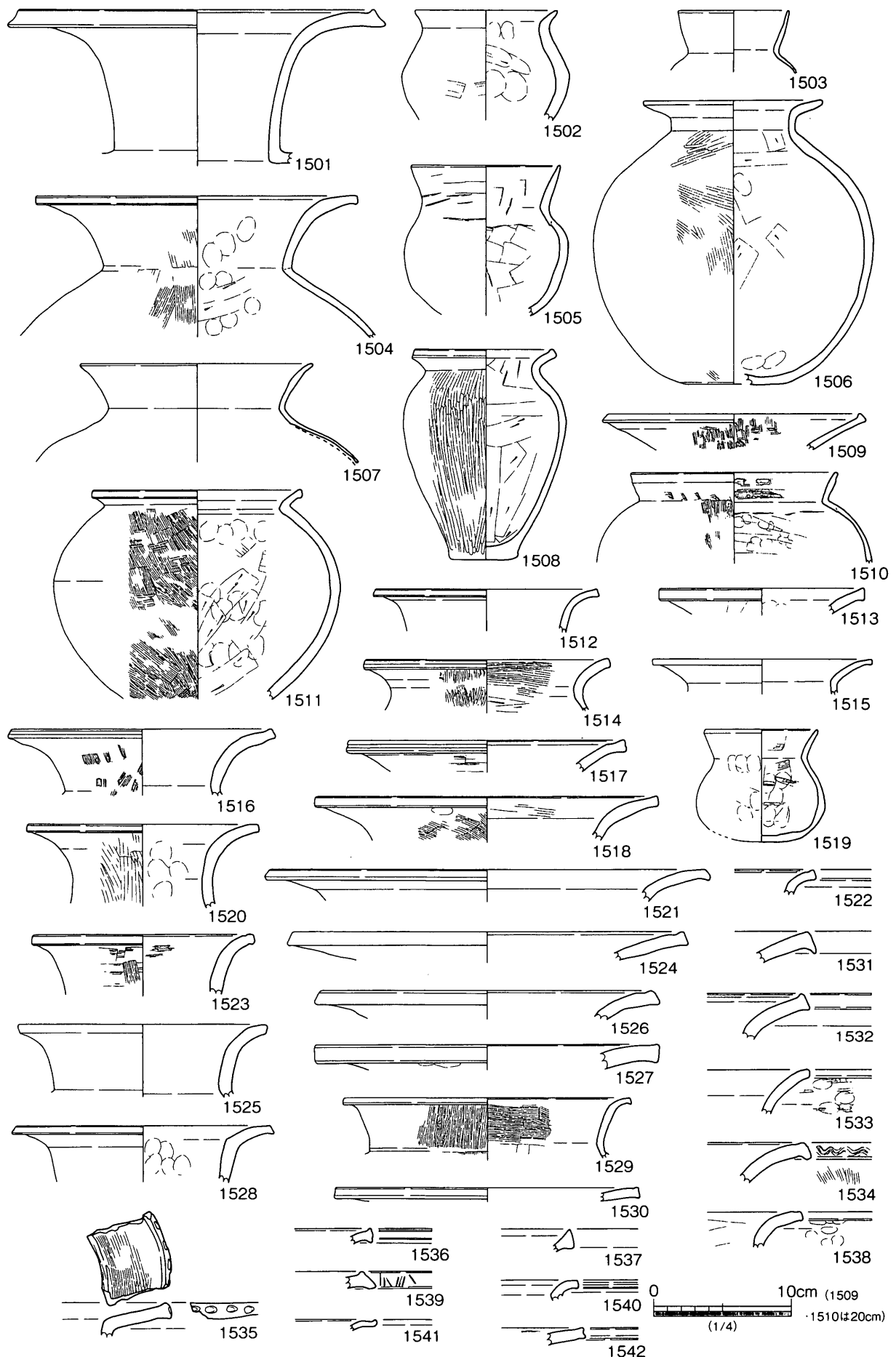
第 74 図 溝状遺構遺物実測図 16(1355~1393:SD56)



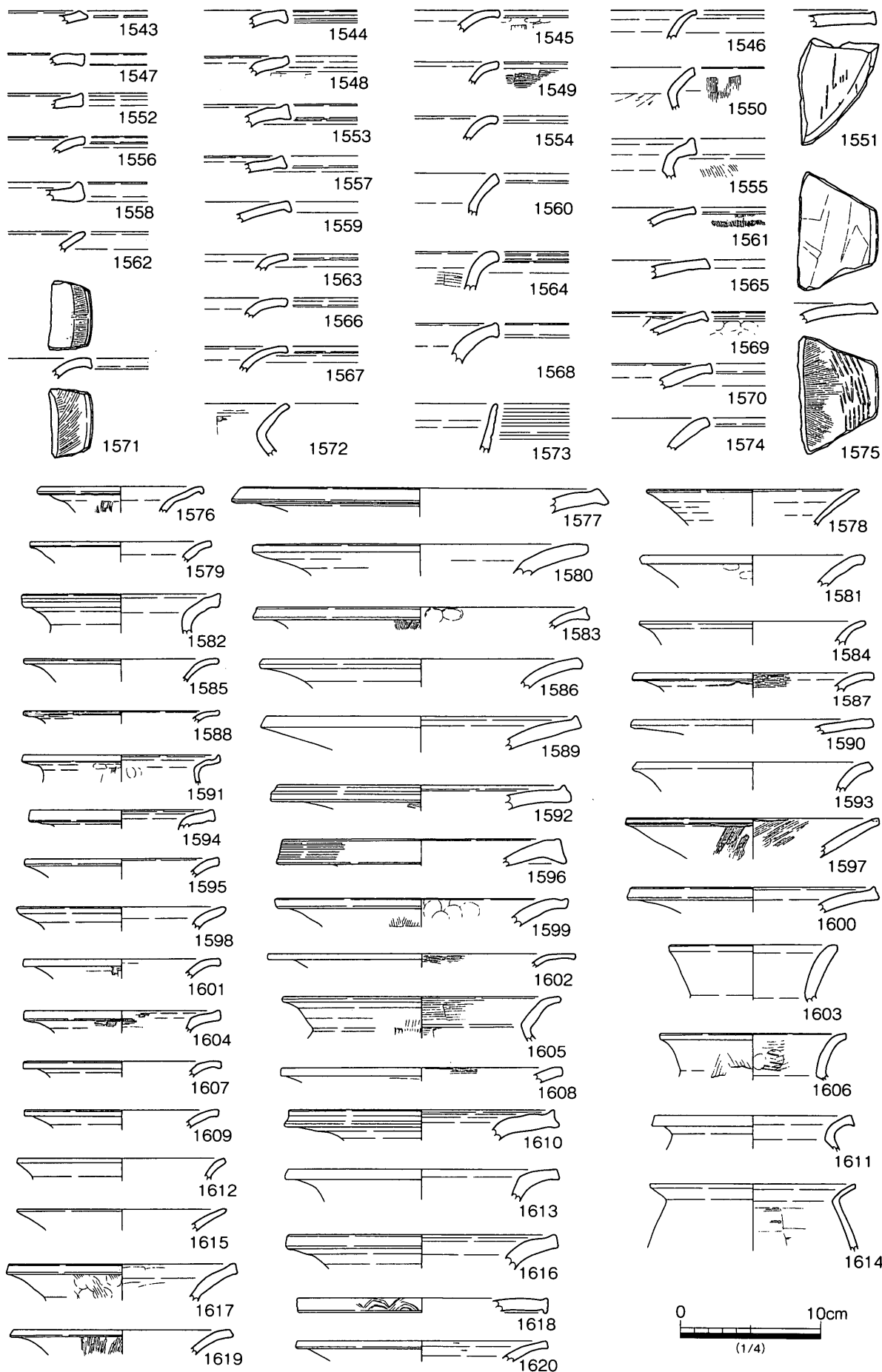
第 75 図 溝状遺構遺物実測図 17(1394 ~ 1460:SD56)



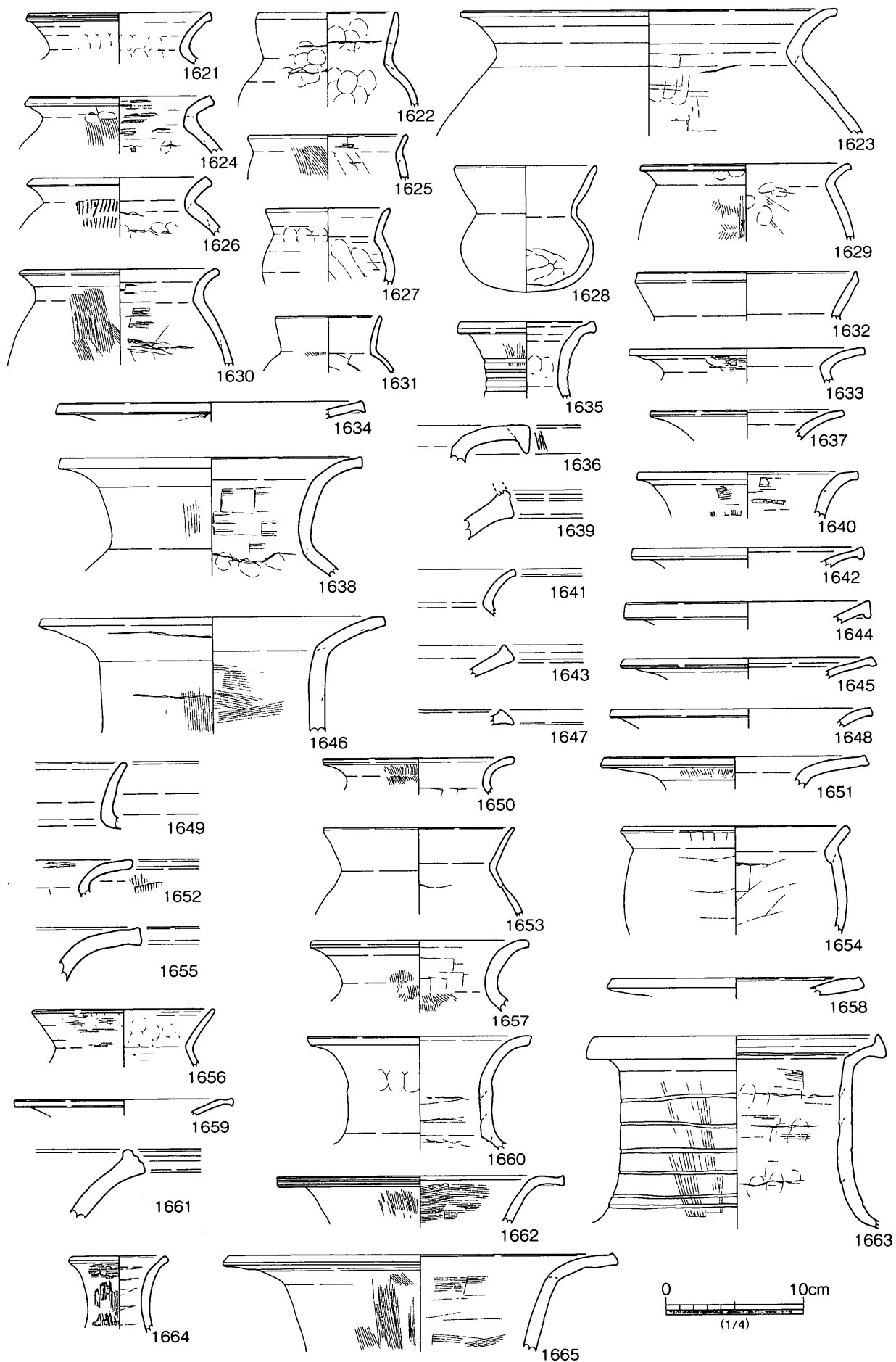
第76图 溝状遺構遺物実測図 18(1461~1500:SD56)



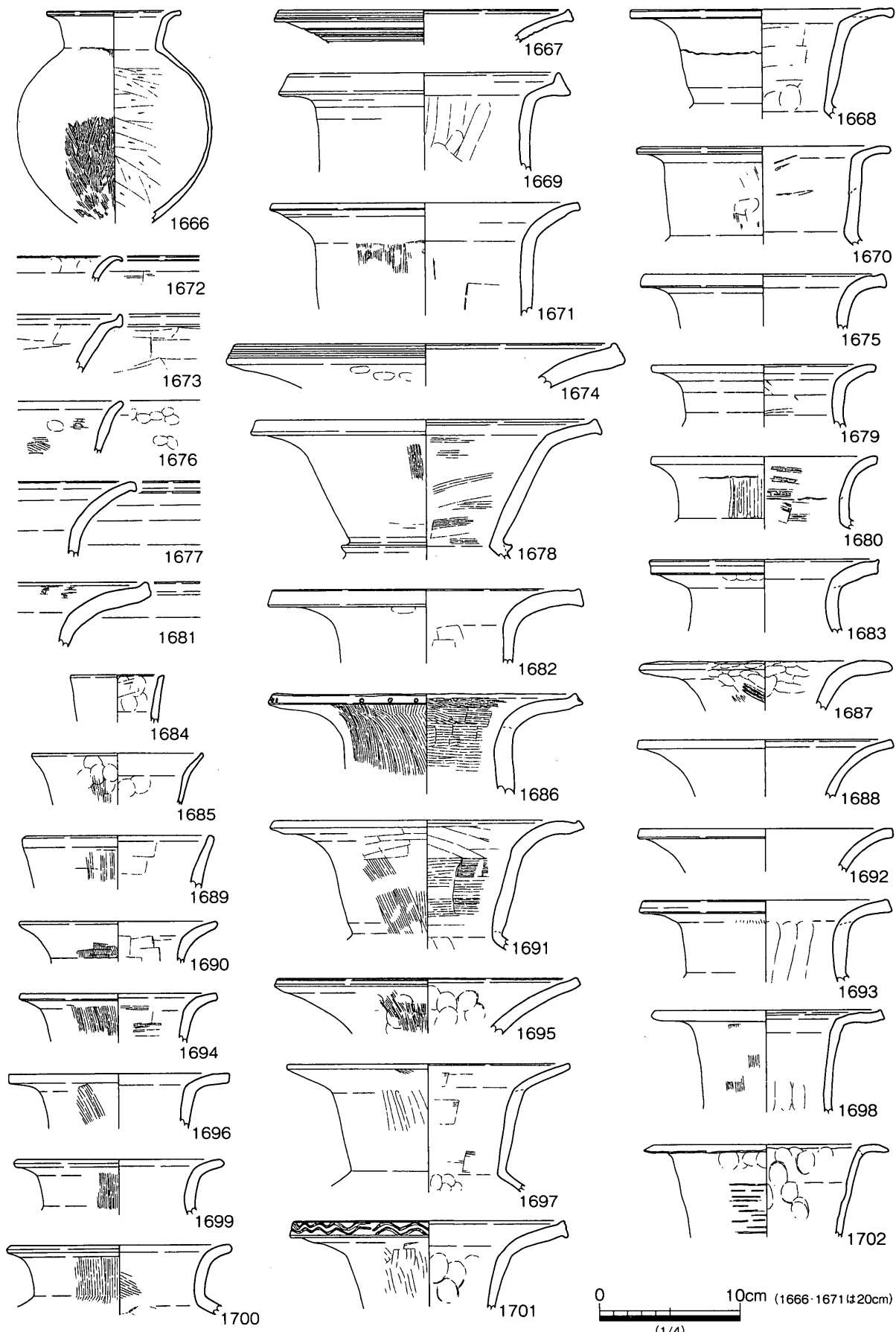
第 77 図 溝状遺構遺物実測図 19(1501 ~ 1542:SD56)



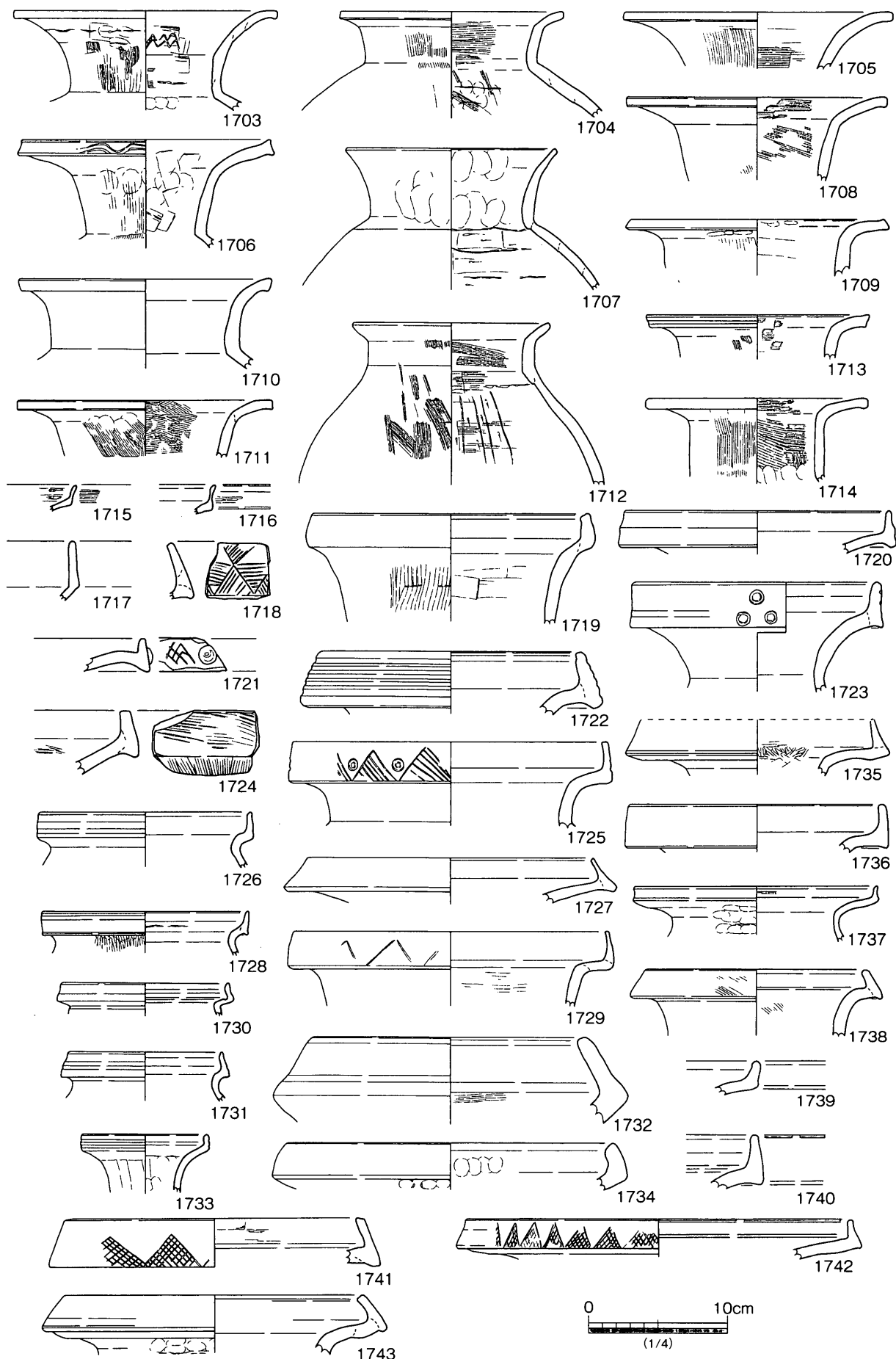
第 78 图 沟状遺構遺物実測図 20(1543~1620:SD56)



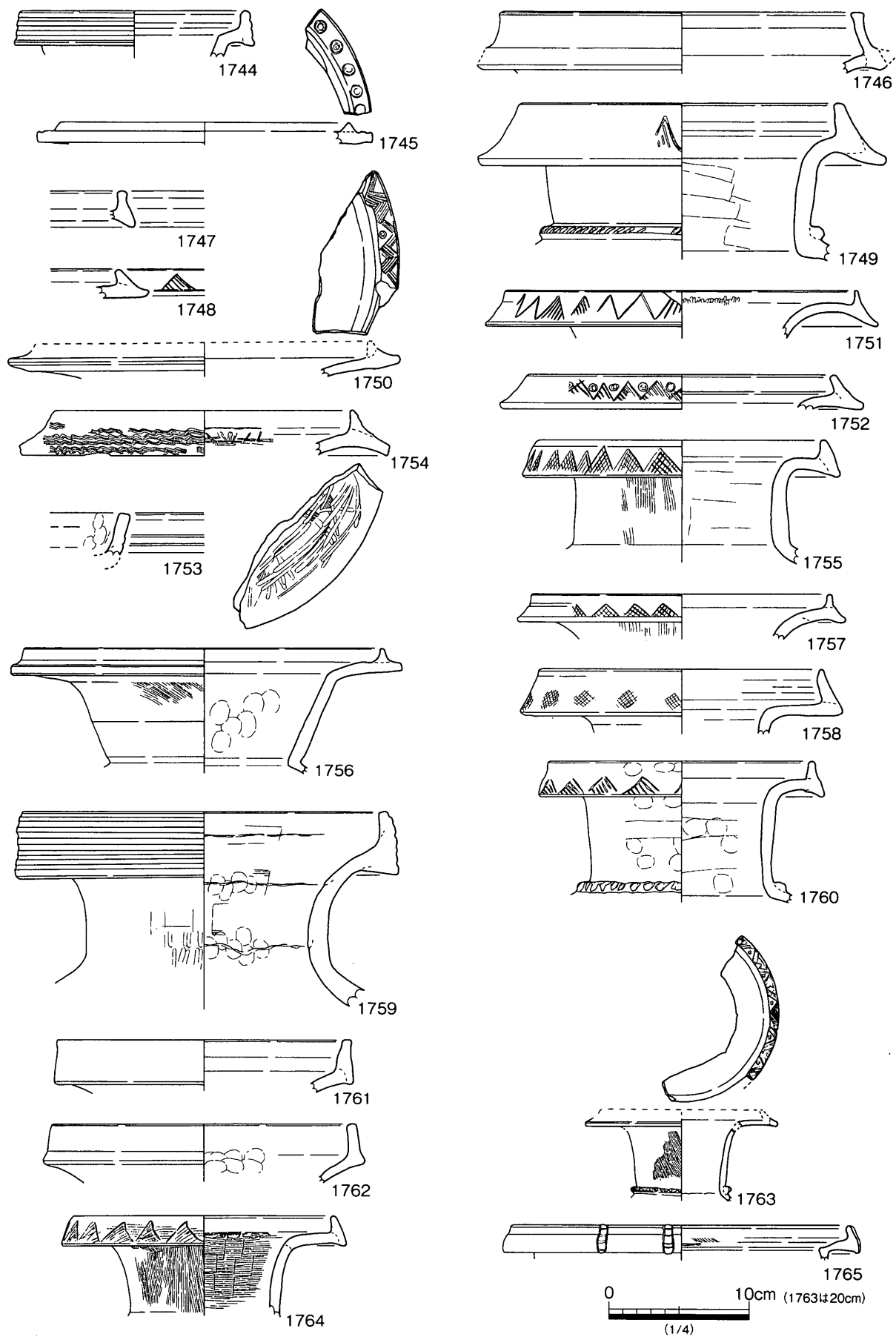
第 79 図 溝状遺構遺物実測図 21(1621 ~ 1665:SD56)



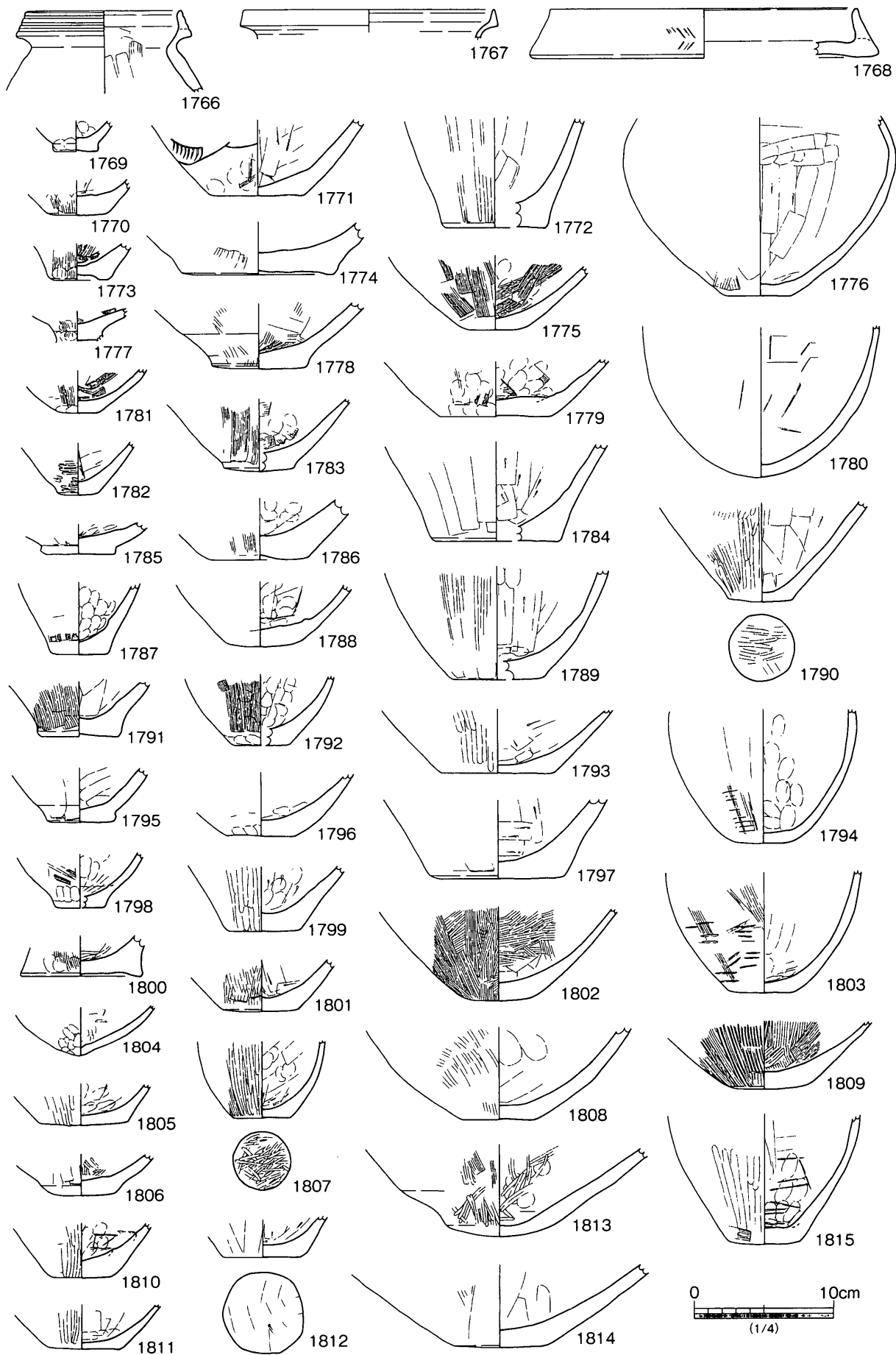
第80図 溝状遺構遺物実測図 22(1666～1702:SD56)



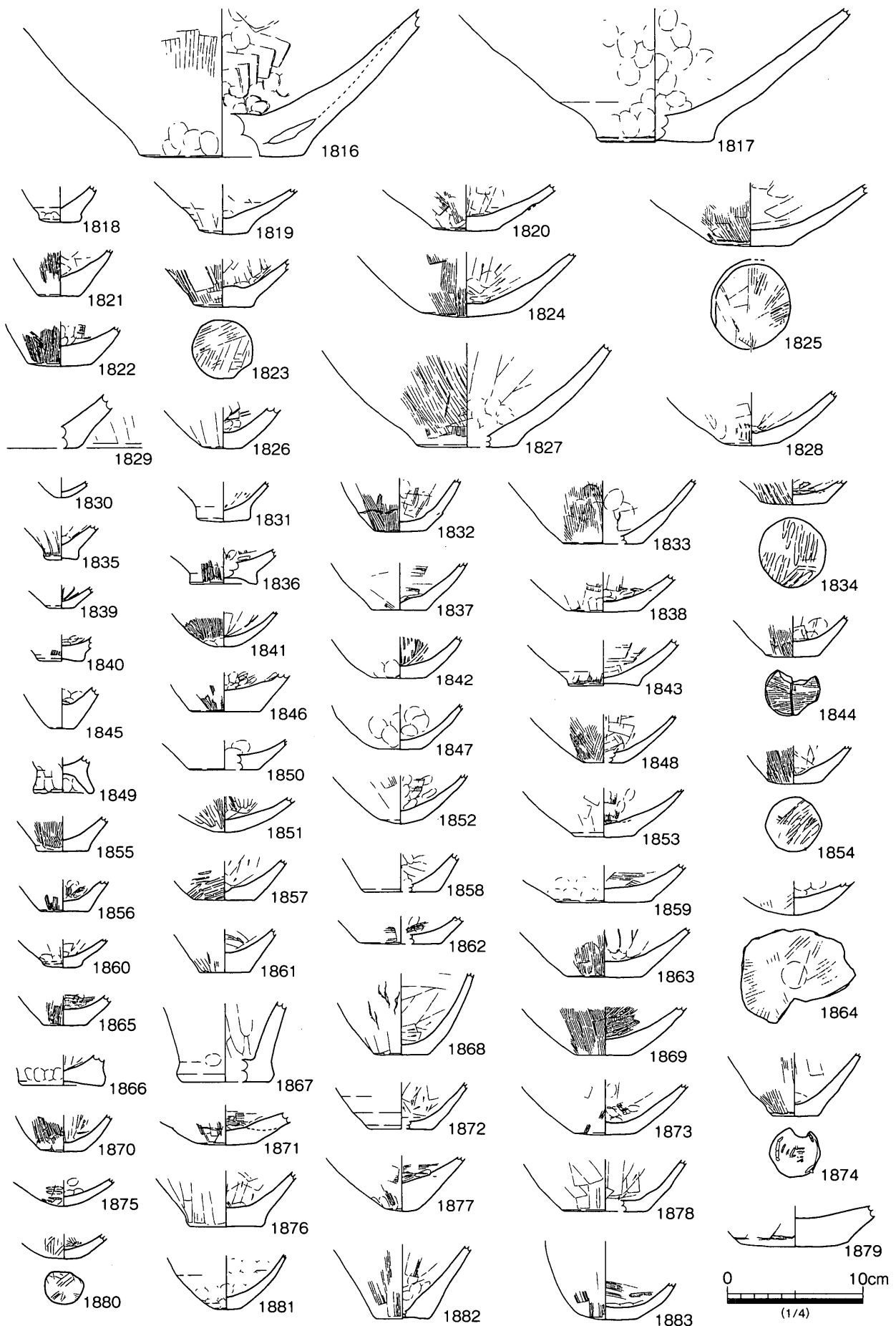
第 81 図 溝状遺構遺物実測図 23(1703~1743:SD56)



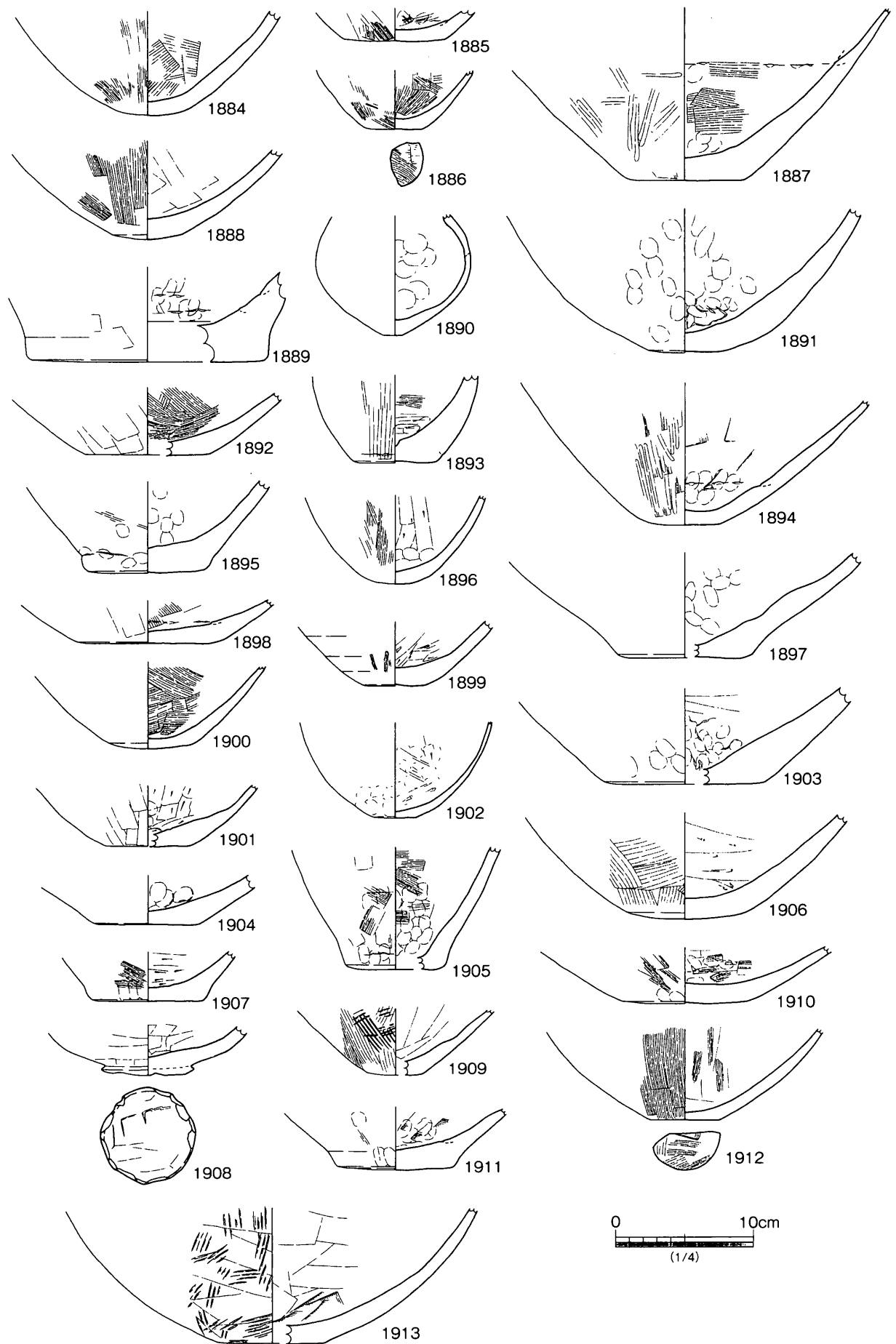
第 82 図 溝状遺構遺物実測図 24(1744 ~ 1765:SD56)



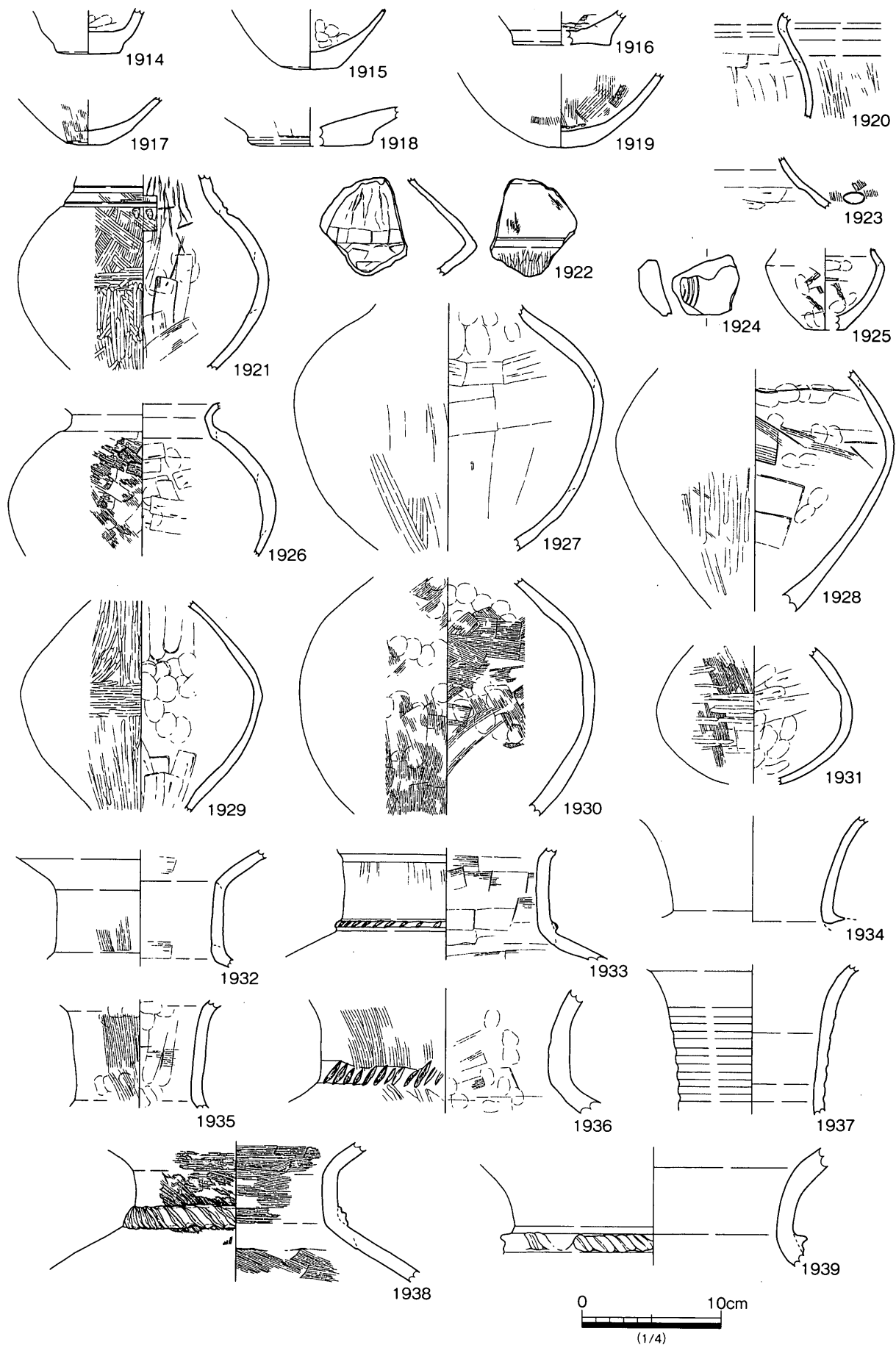
第 83 図 溝状遺構遺物実測図 25(1766 ~ 1815:SD56)



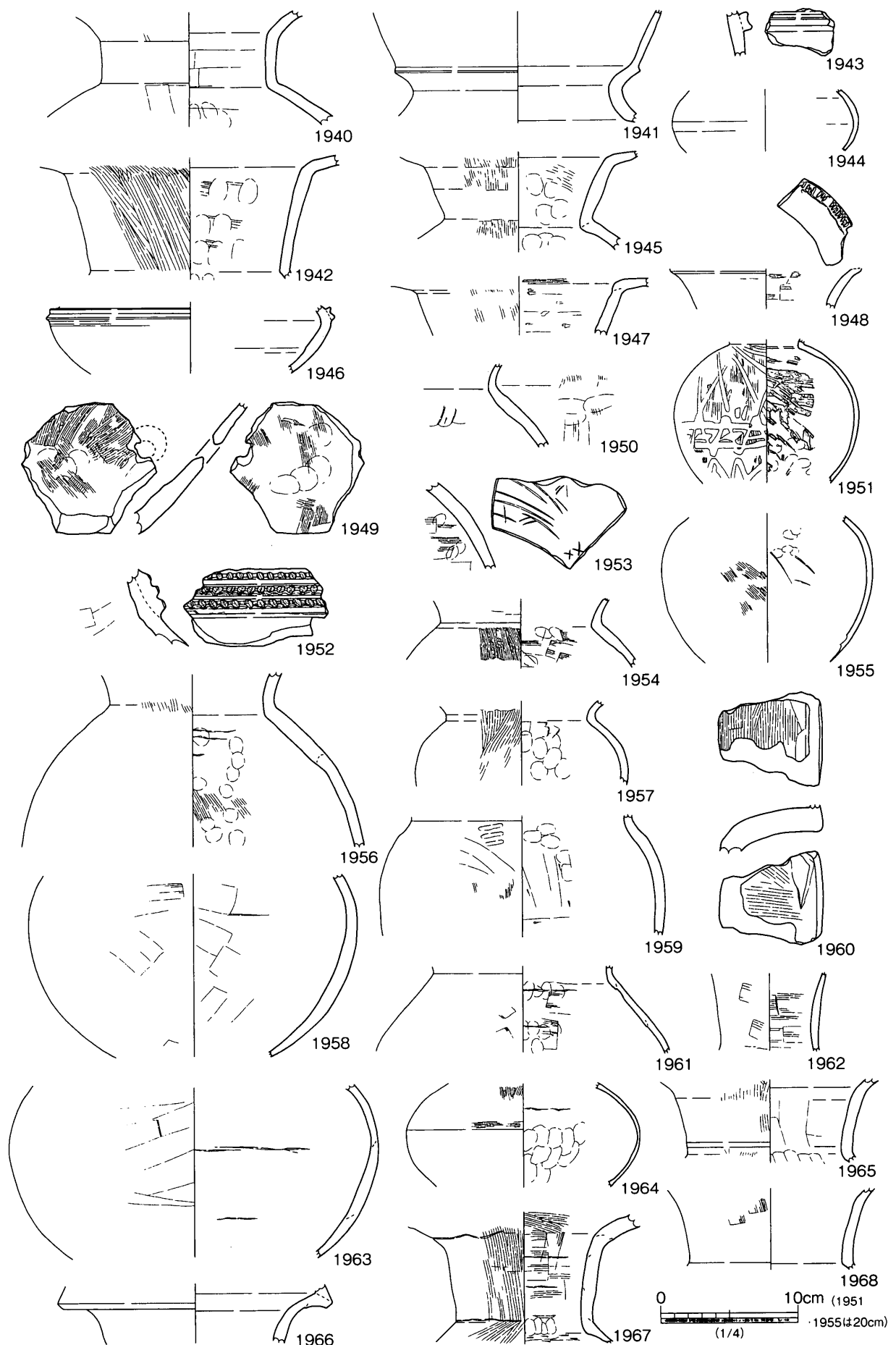
第 84 图 沟状遺構遺物実測図 26(1816 ~ 1883:SD56)



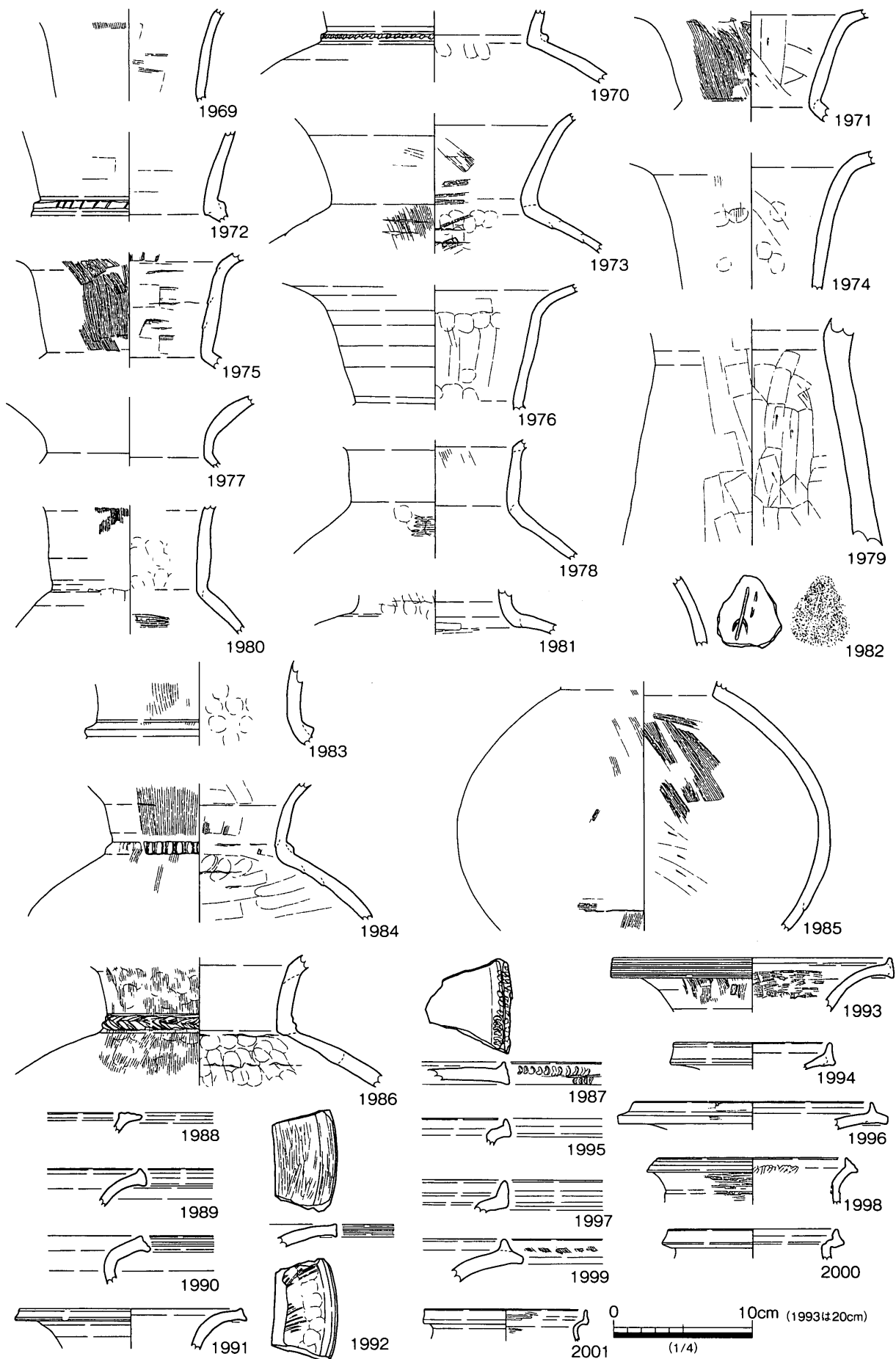
第 85 図 溝状遺構遺物実測図 27(1884 ~ 1913:SD56)



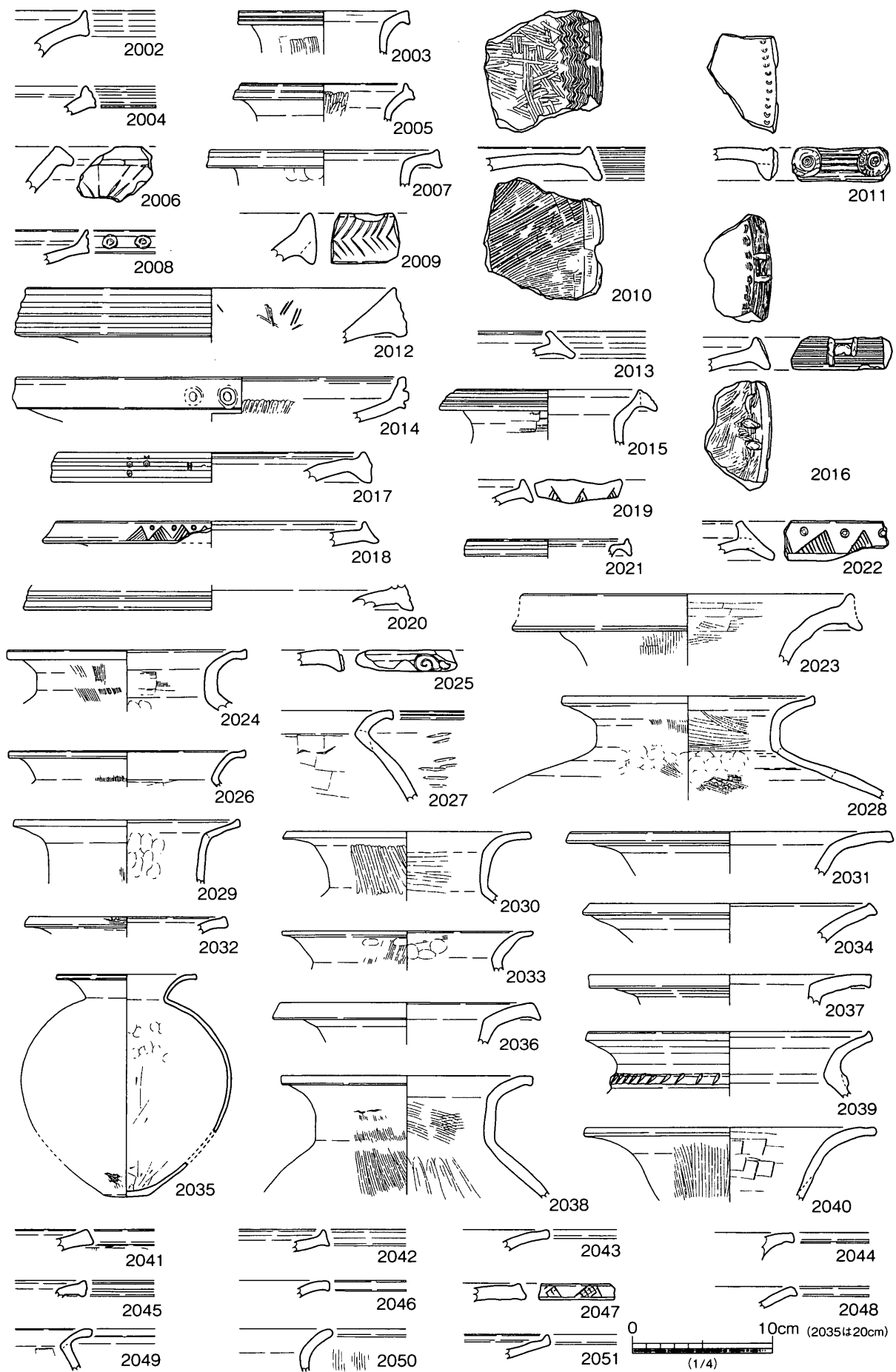
第 86 図 溝状遺構遺物実測図 28(1914 ~ 1939:SD56)



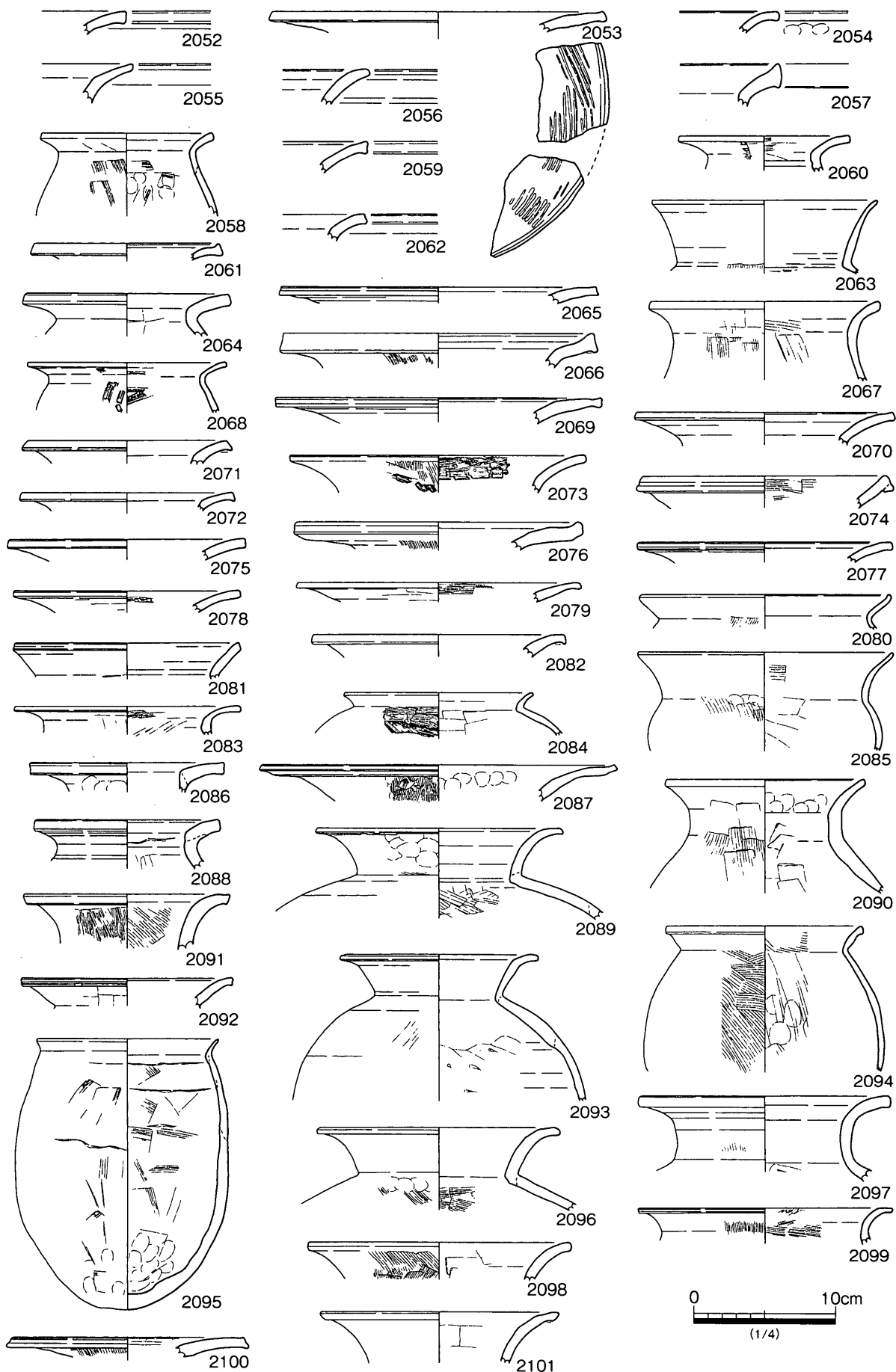
第 87 图 沟状遺構遺物実測图 29(1940 ~ 1968:SD56)



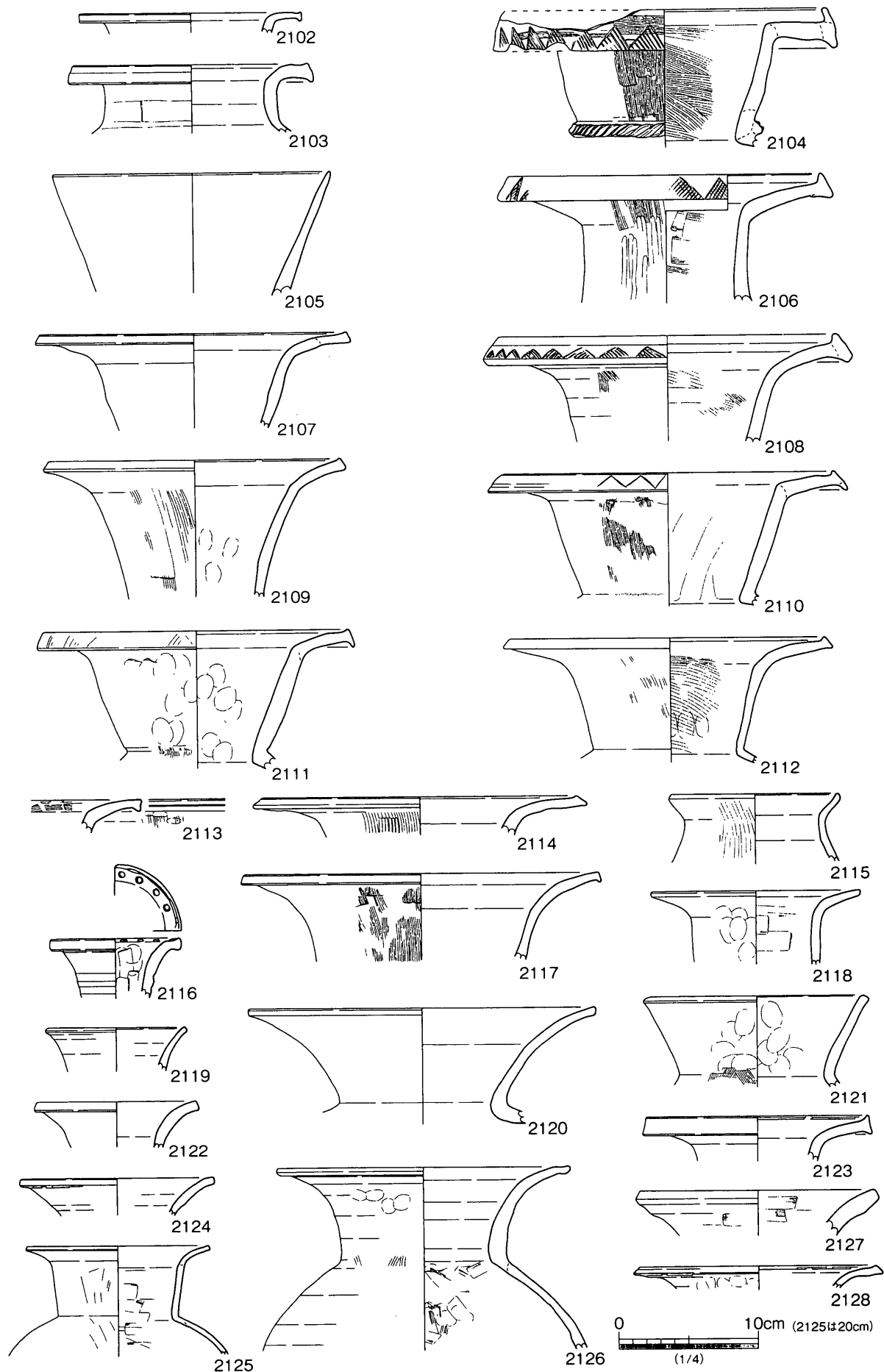
第 88 図 溝状遺構遺物実測図 30(1969 ~ 2001:SD56)



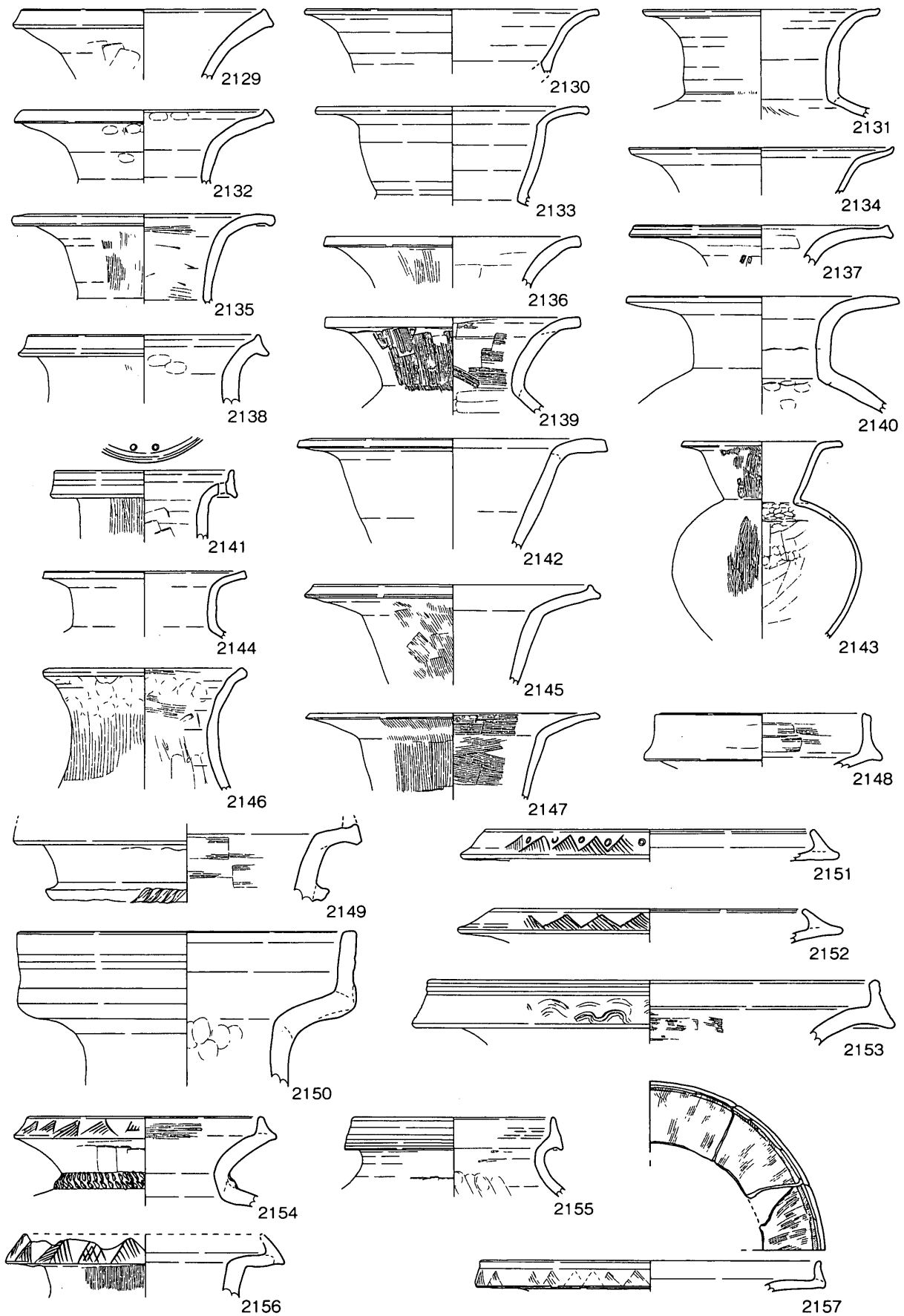
第 89 図 溝状遺構遺物実測図 31(2002 ~ 2051:SD56)



第 90 図 溝状遺構遺物実測図 32(2052 ~ 2101:SD56)

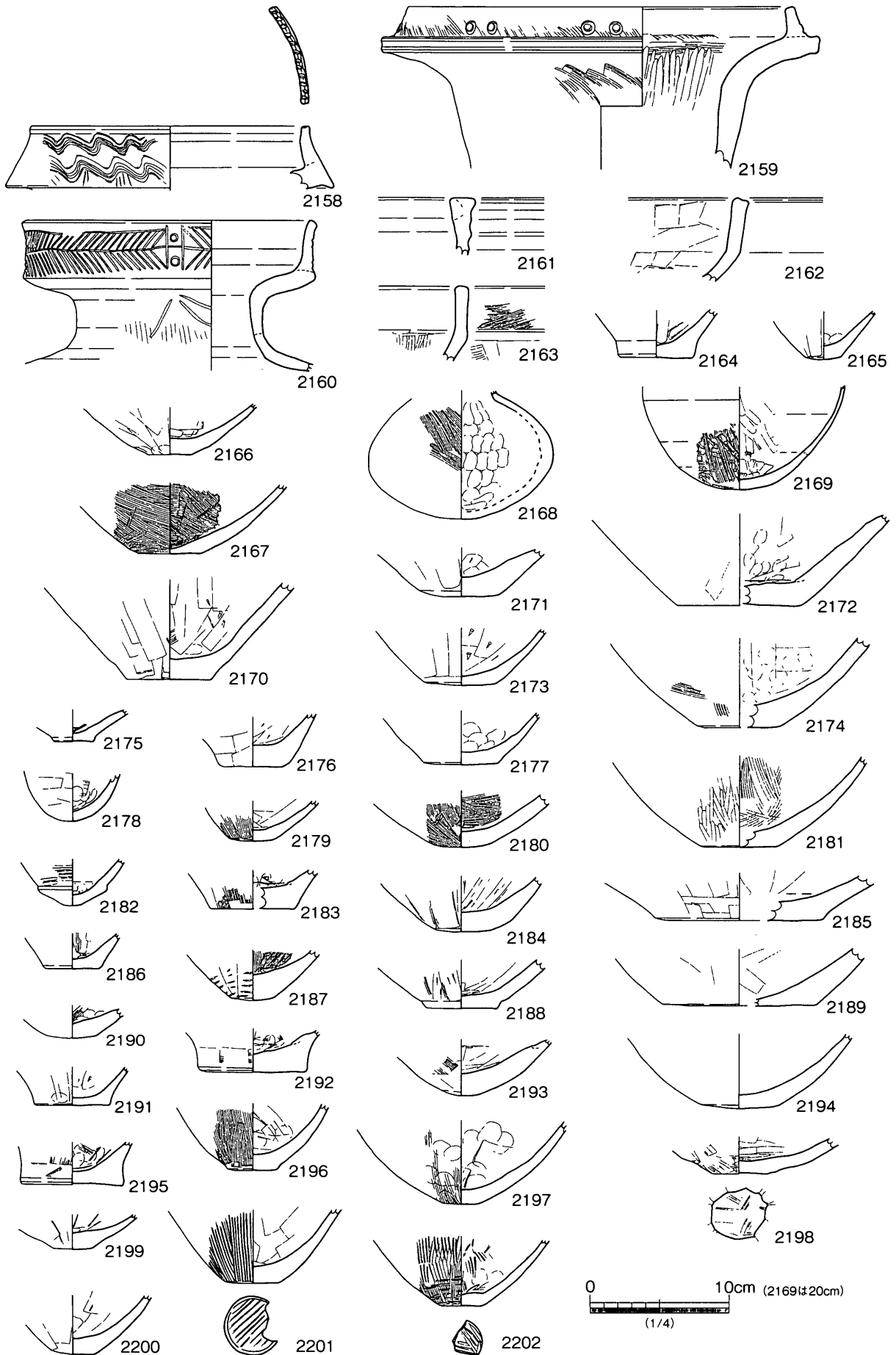


第 91 図 溝状遺構遺物実測図 33(2102 ~ 2128:SD56)

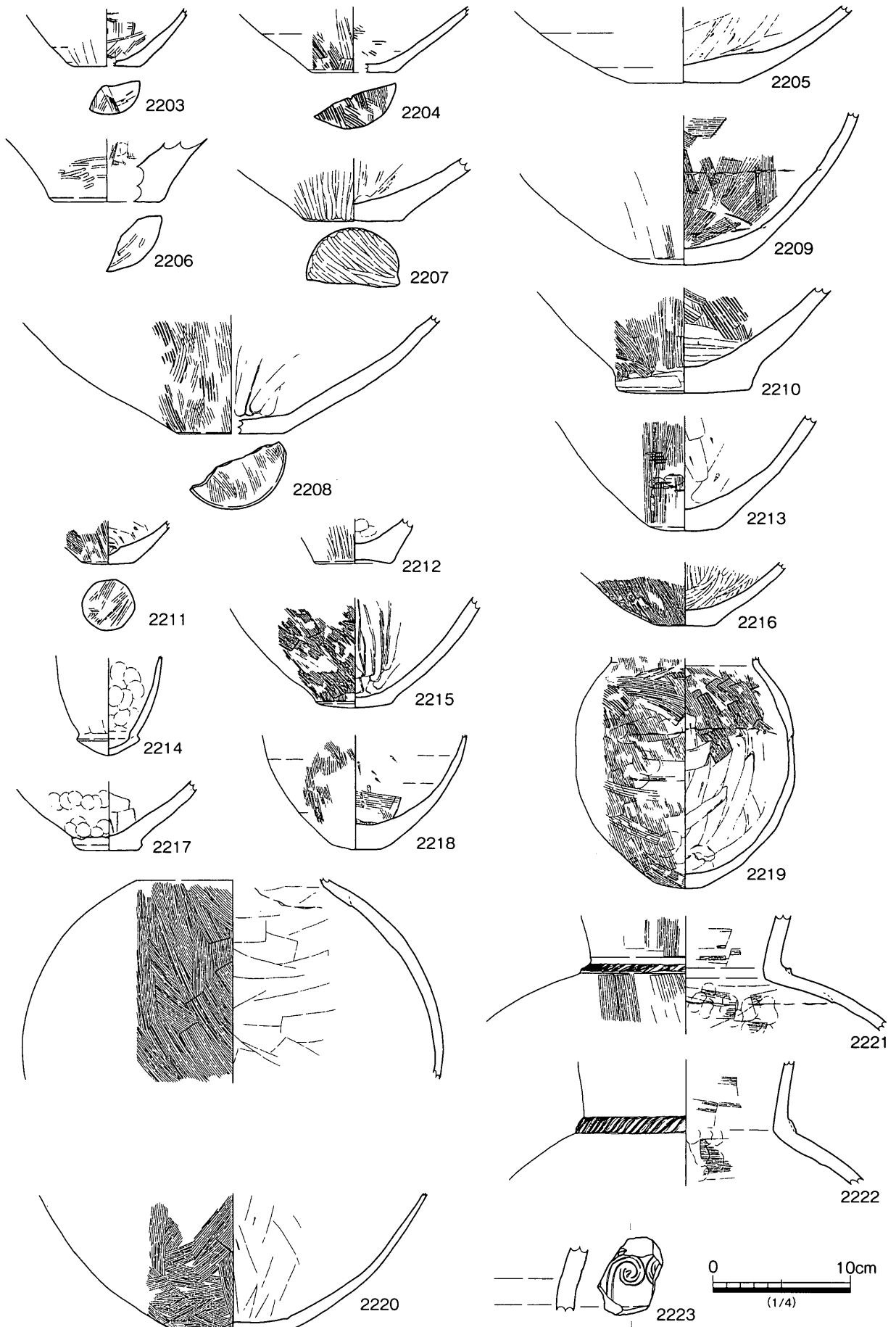


0 10cm (2143は20cm)
 (1/4)

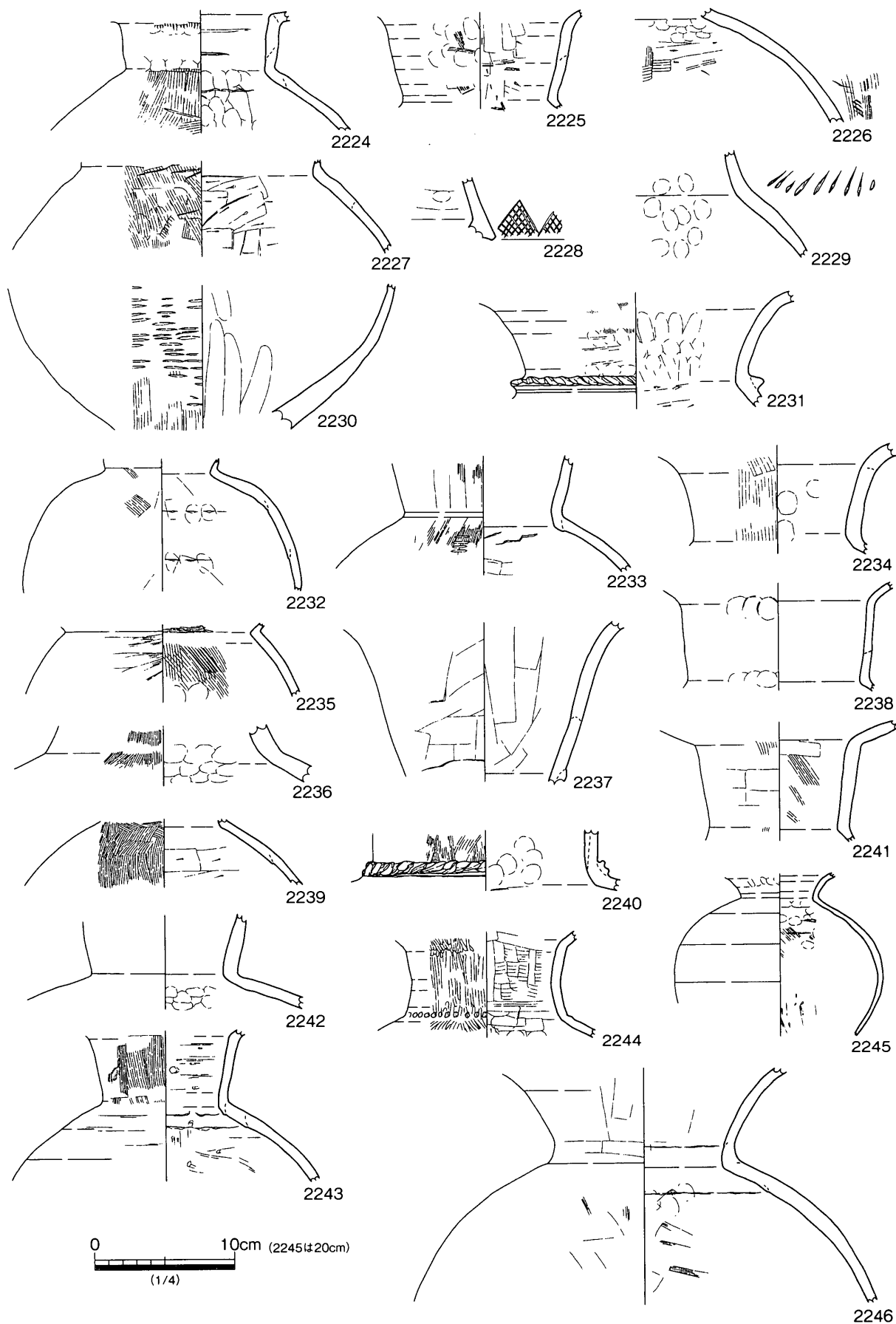
第 92 図 溝状遺構遺物実測図 34(2129 ~ 2157:SD56)



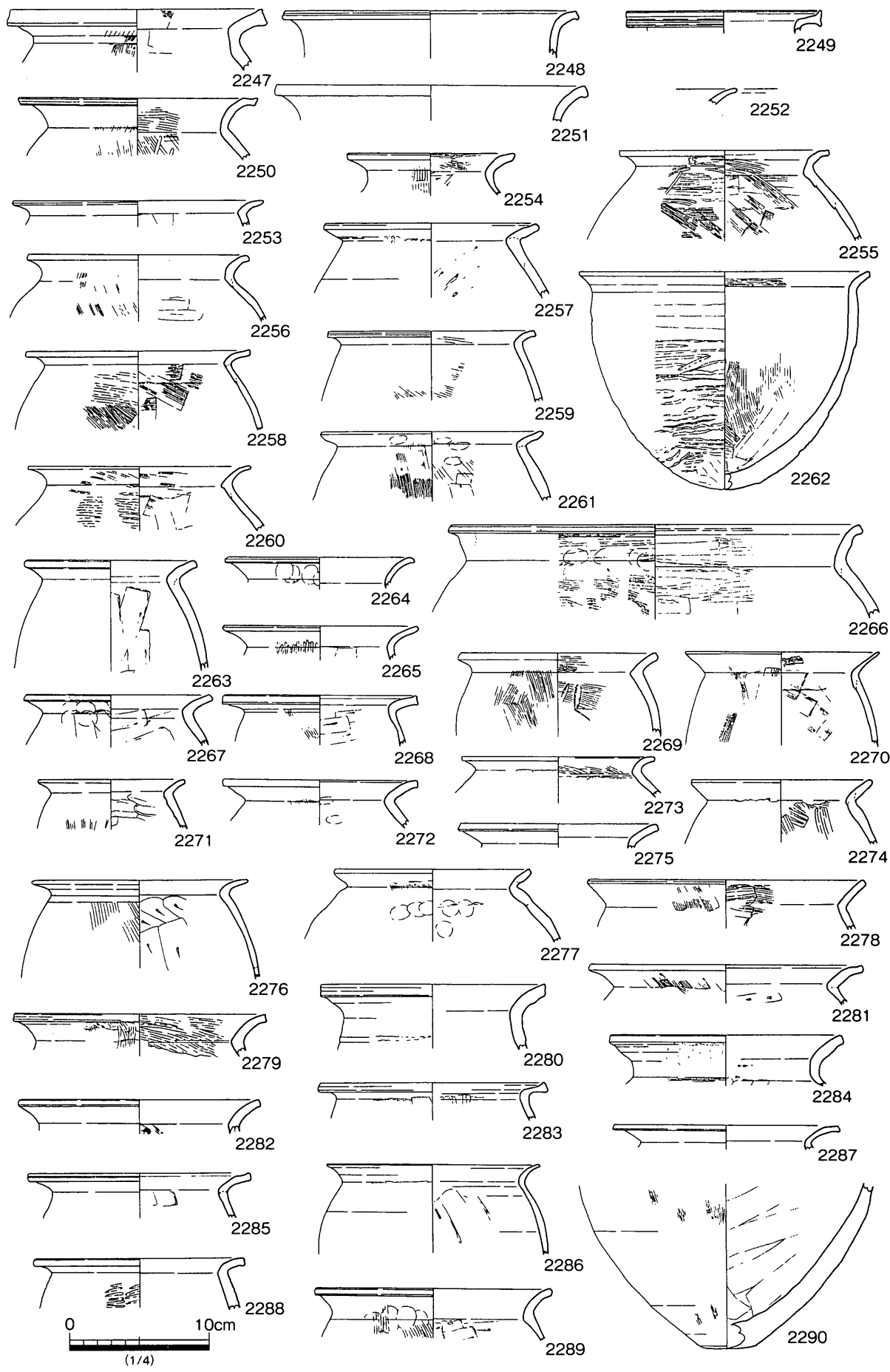
第 93 图 沟状遺構遺物実測図 35(2158 ~ 2202:SD56)



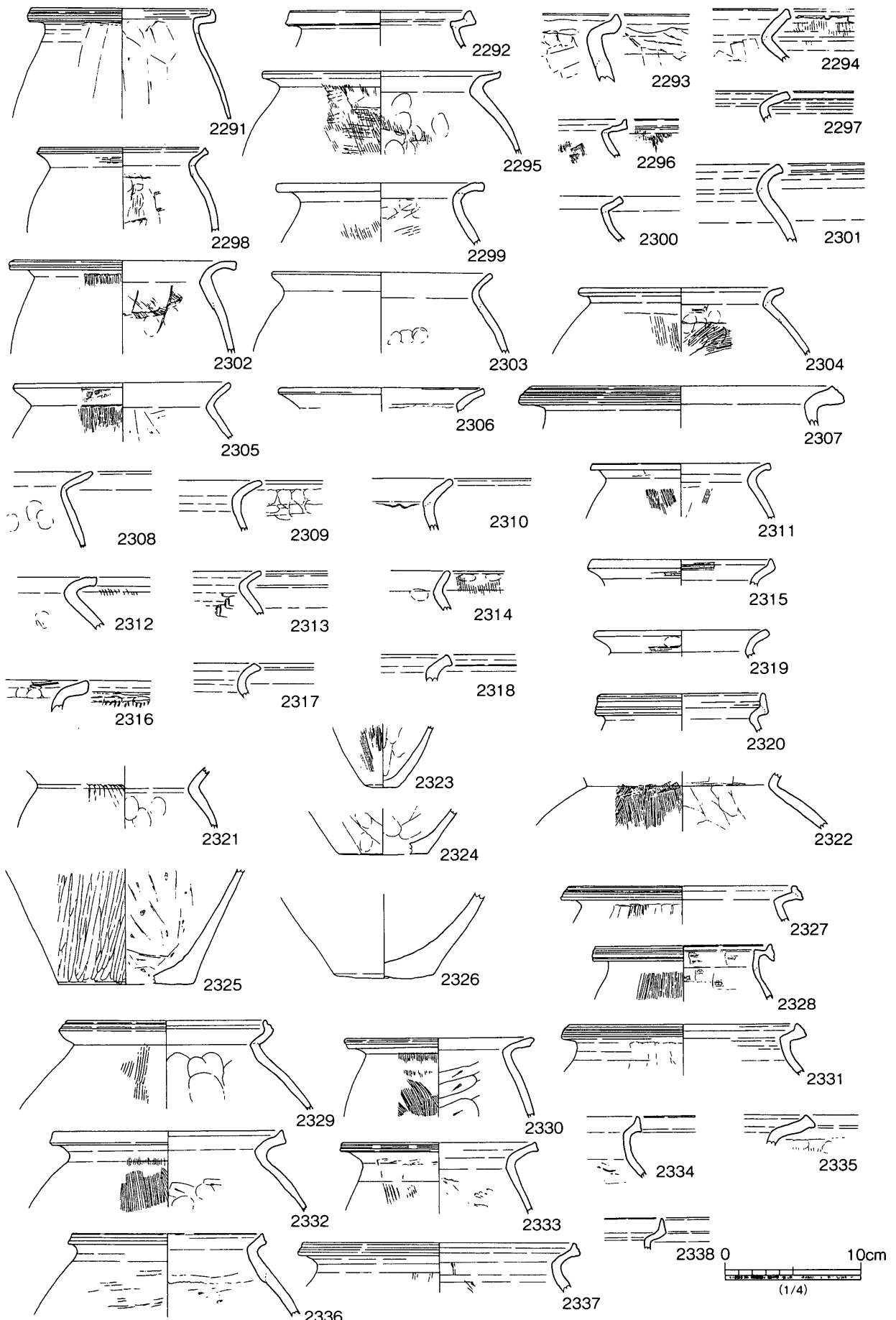
第 94 図 溝状遺構遺物実測図 36(2203 ~ 2223:SD56)



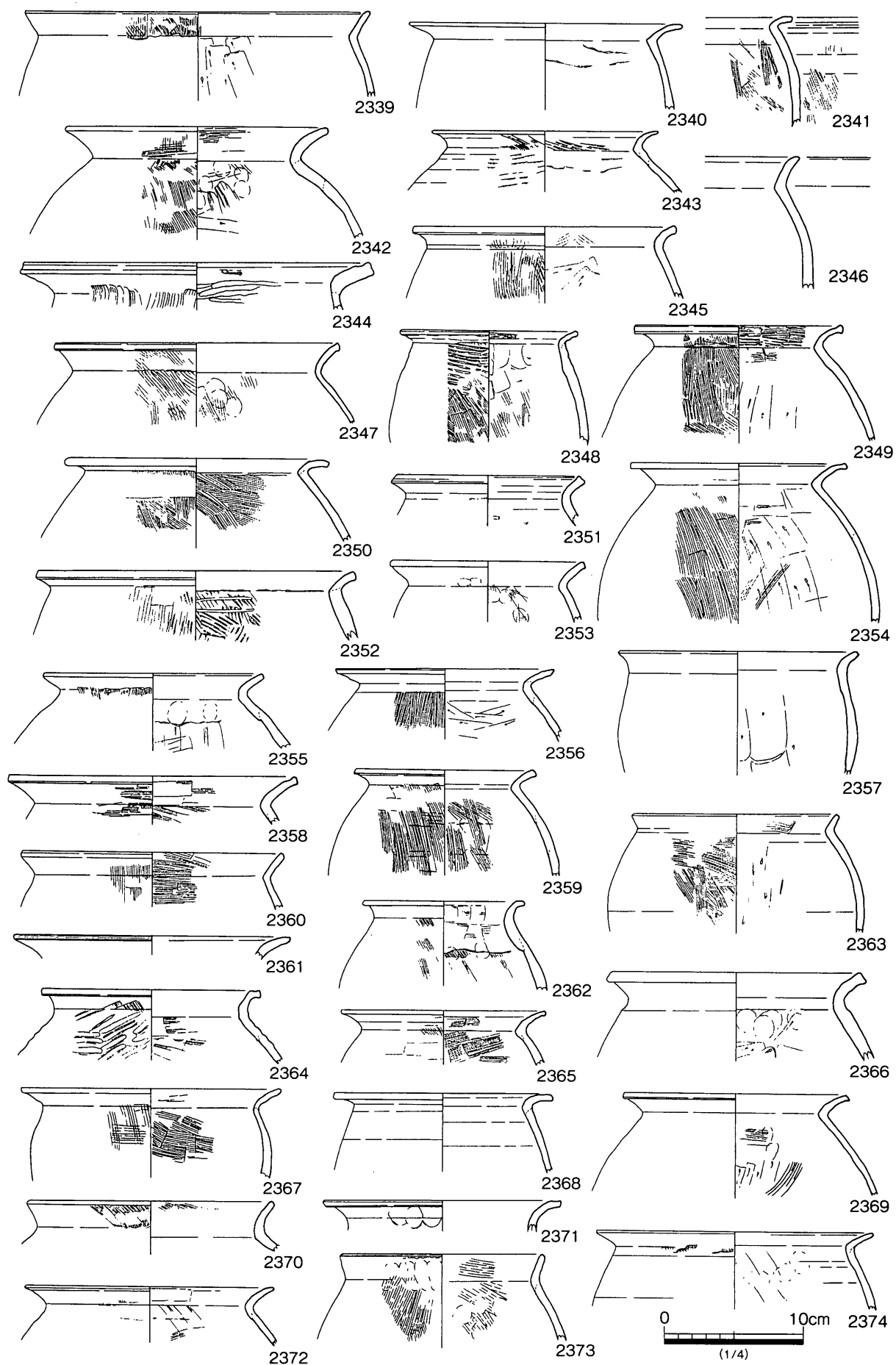
第 95 図 溝状遺構遺物実測図 37(2224 ~ 2246:SD56)



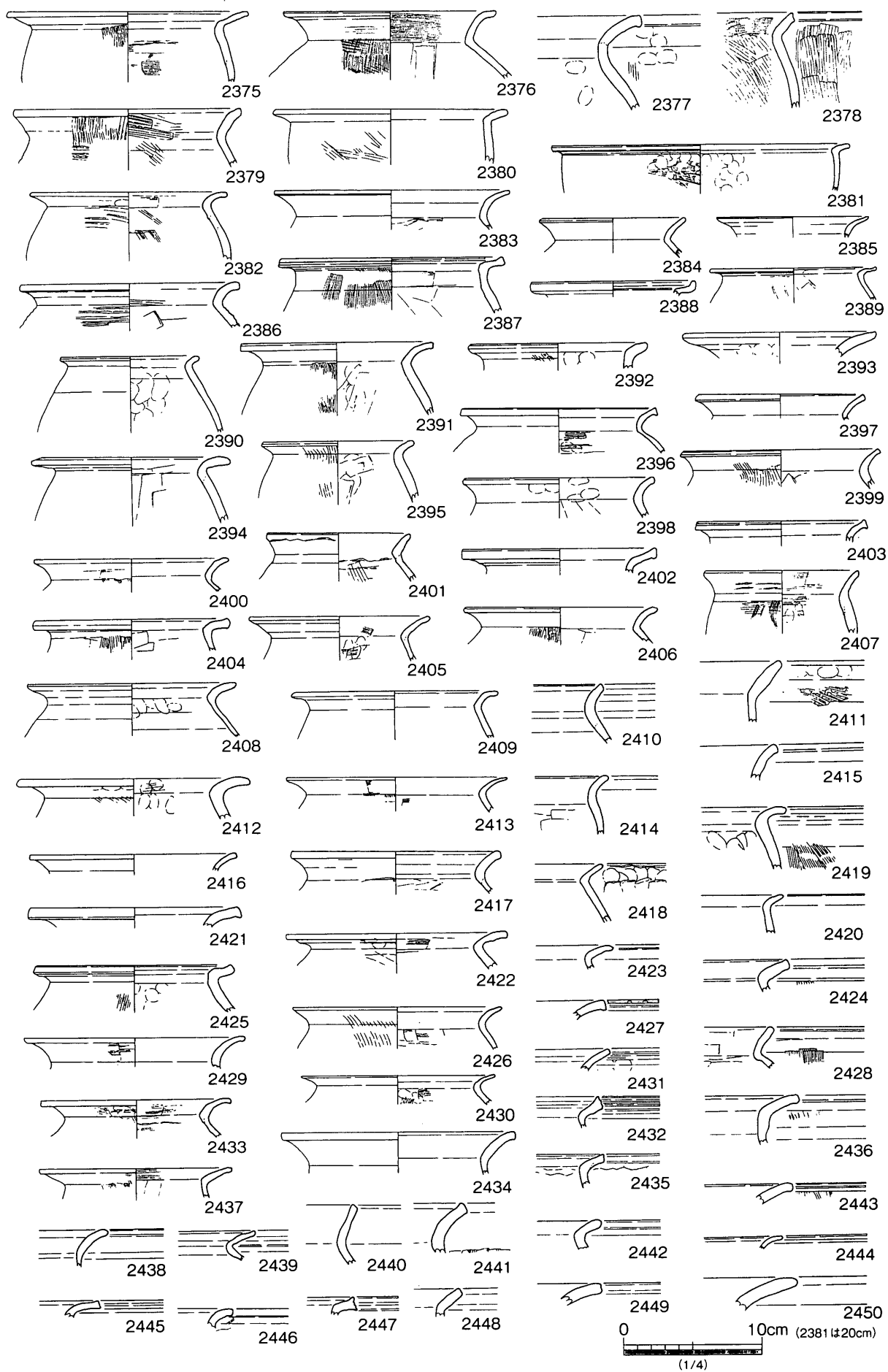
第 96 図 溝状遺構遺物実測図 38(2247 ~ 2290:SD56)



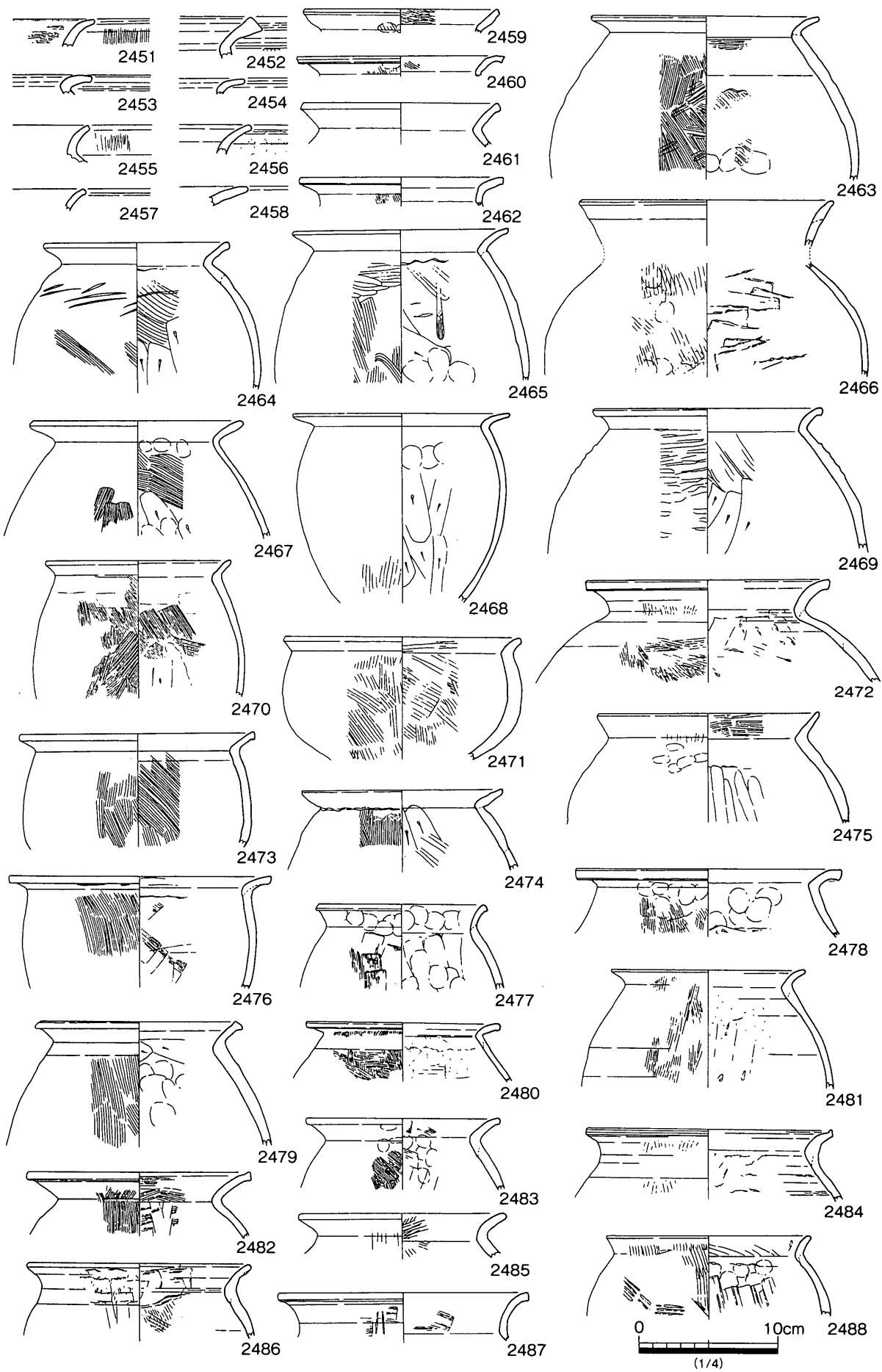
第 97 図 溝状遺構遺物実測図 39(2291 ~ 2338:SD56)



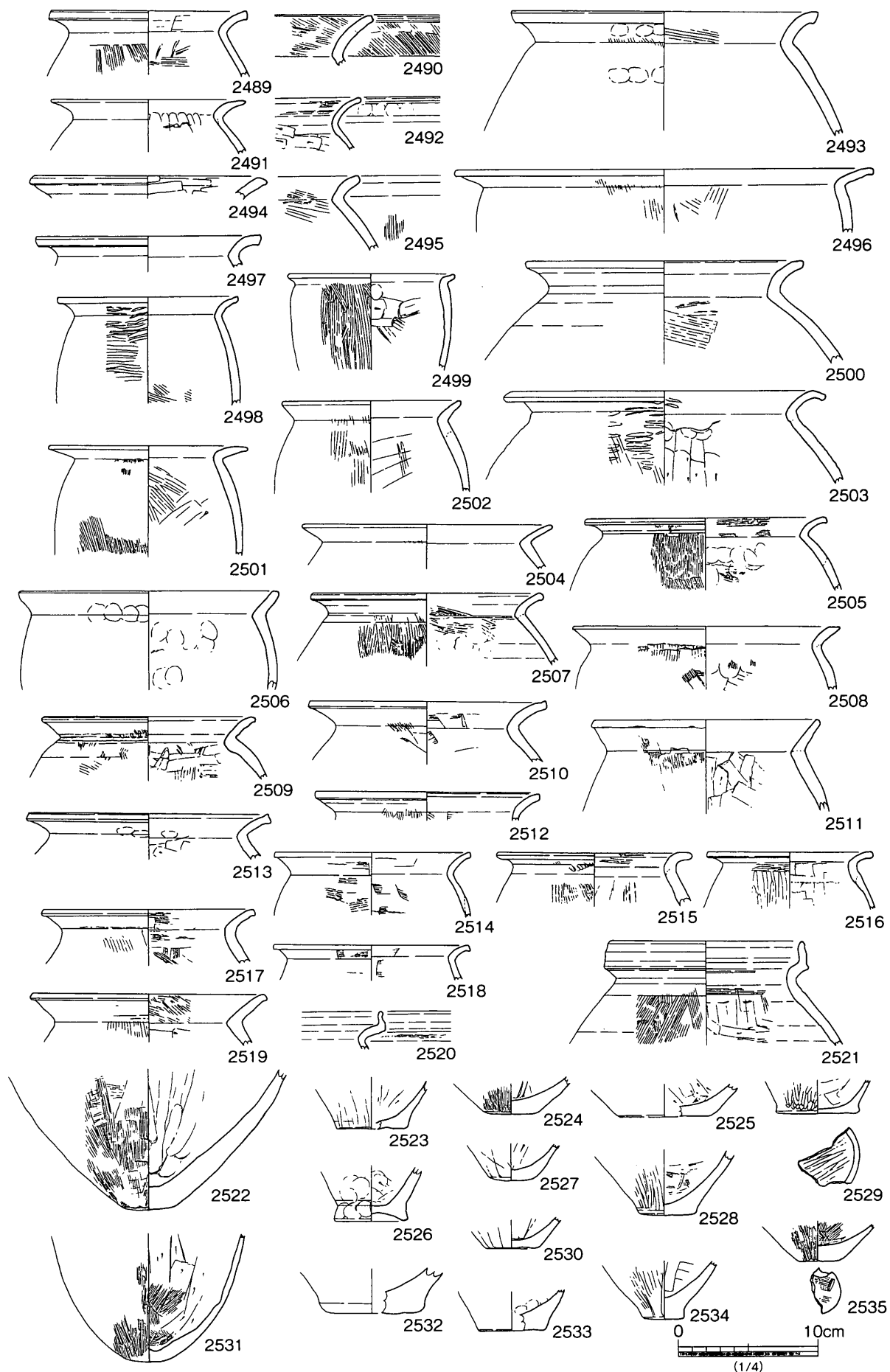
第 98 図 溝状遺構遺物実測図 40(2339 ~ 2374:SD56)



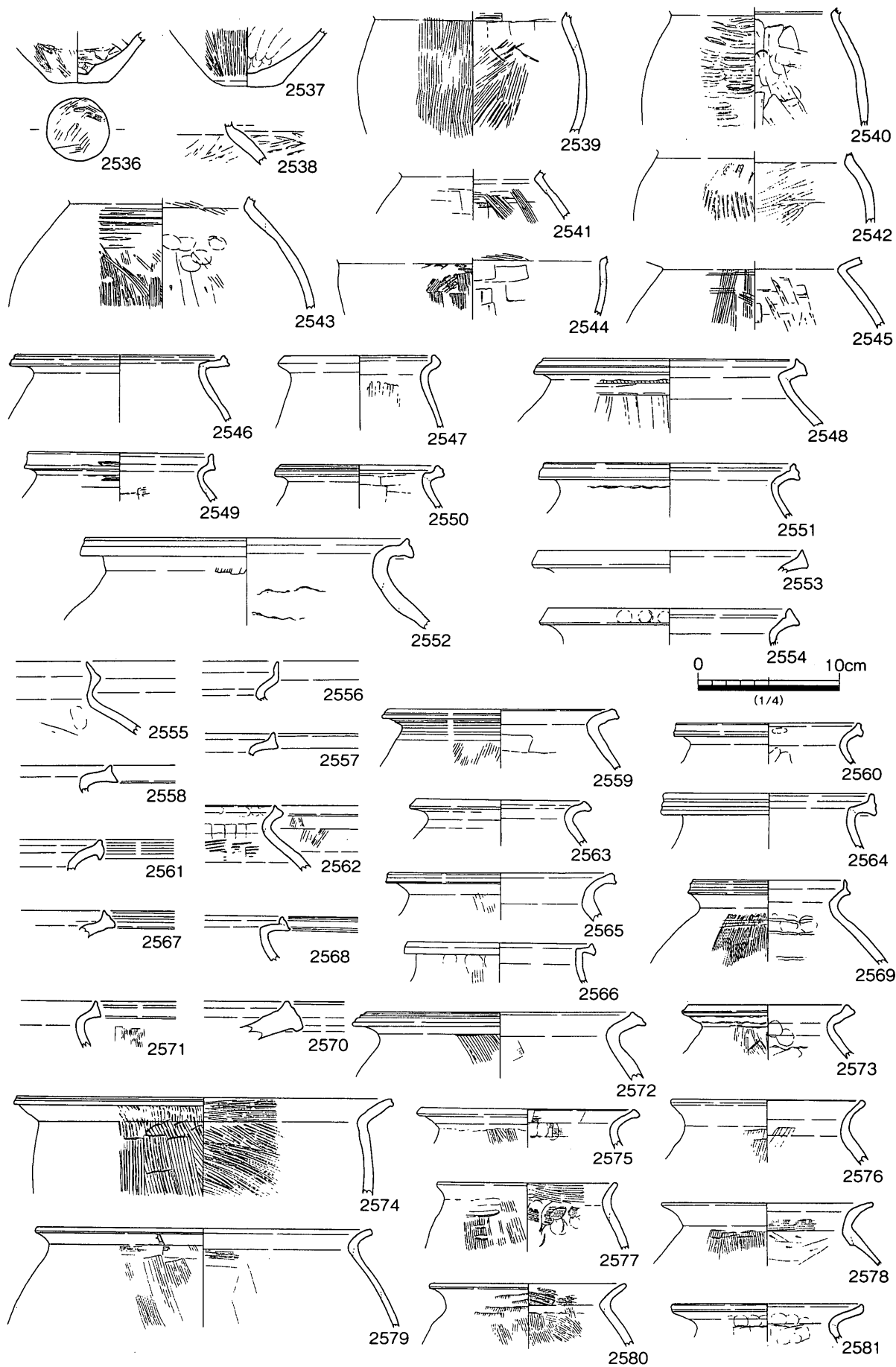
第 99 図 溝状遺構遺物実測図 41(2375 ~ 2450:SD56)



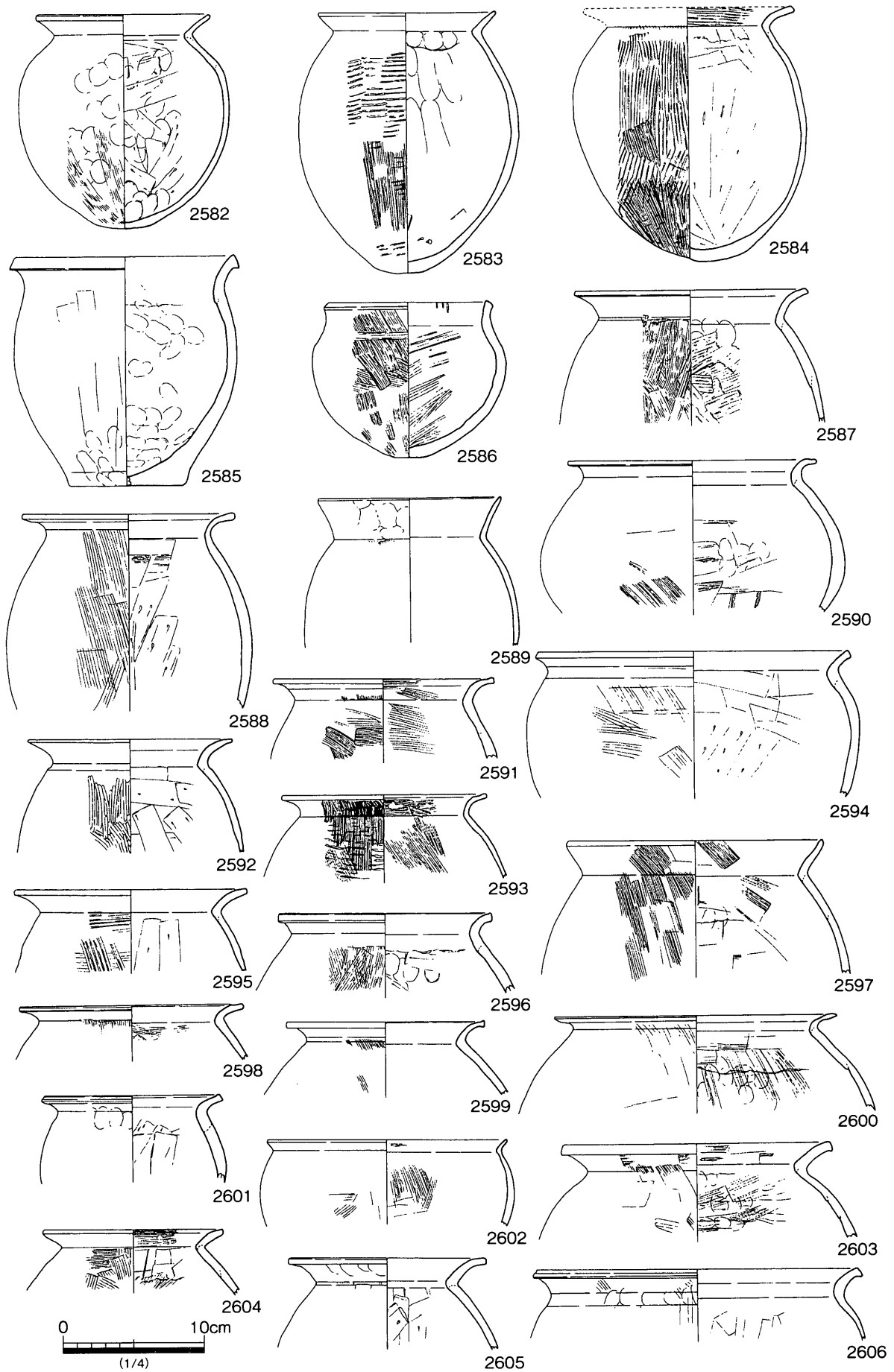
第 100 図 溝状遺構遺物実測図 42(2451 ~ 2488:SD56)



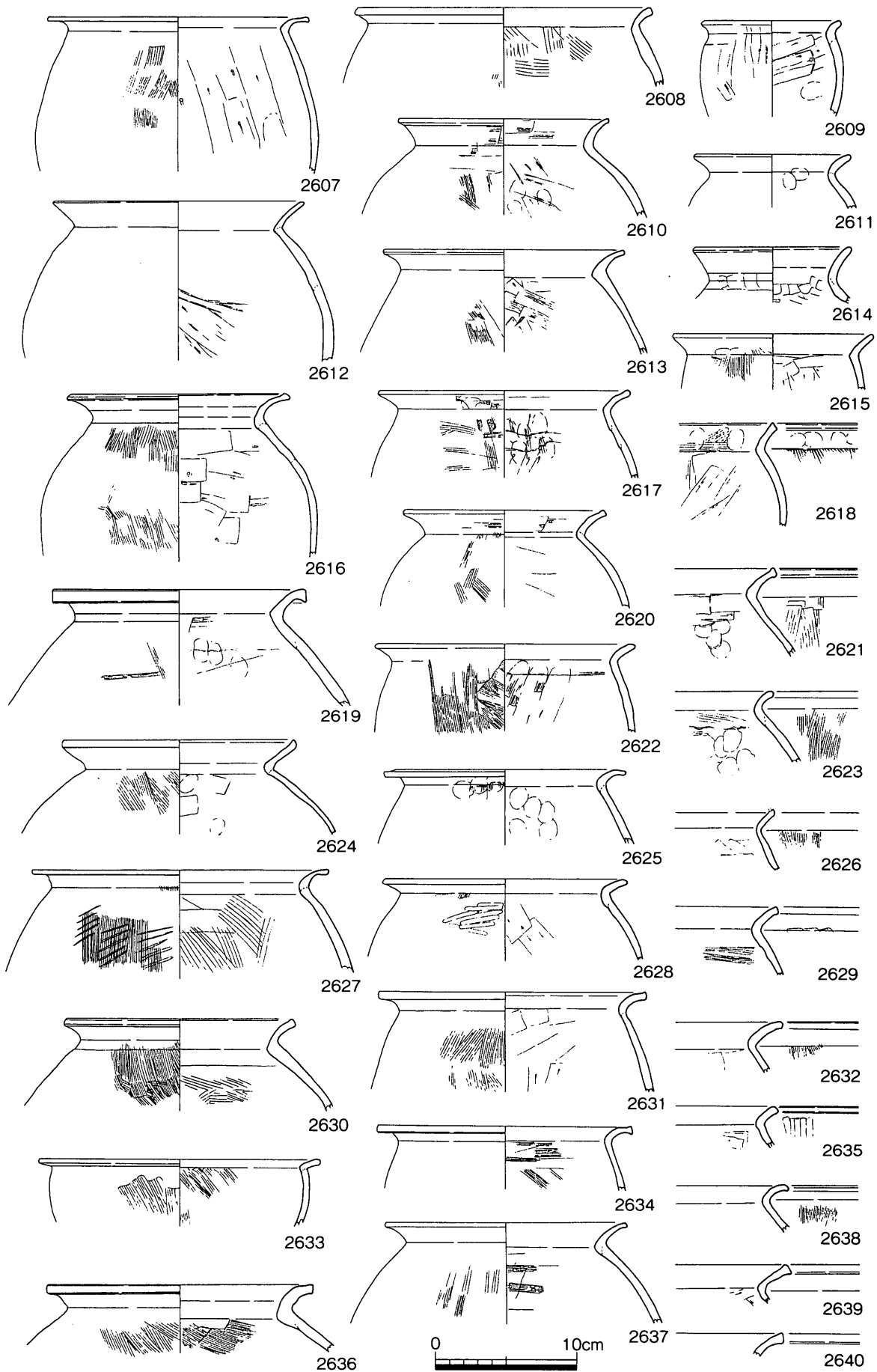
第 101 図 溝状遺構遺物実測図 43(2489 ~ 2535:SD56)



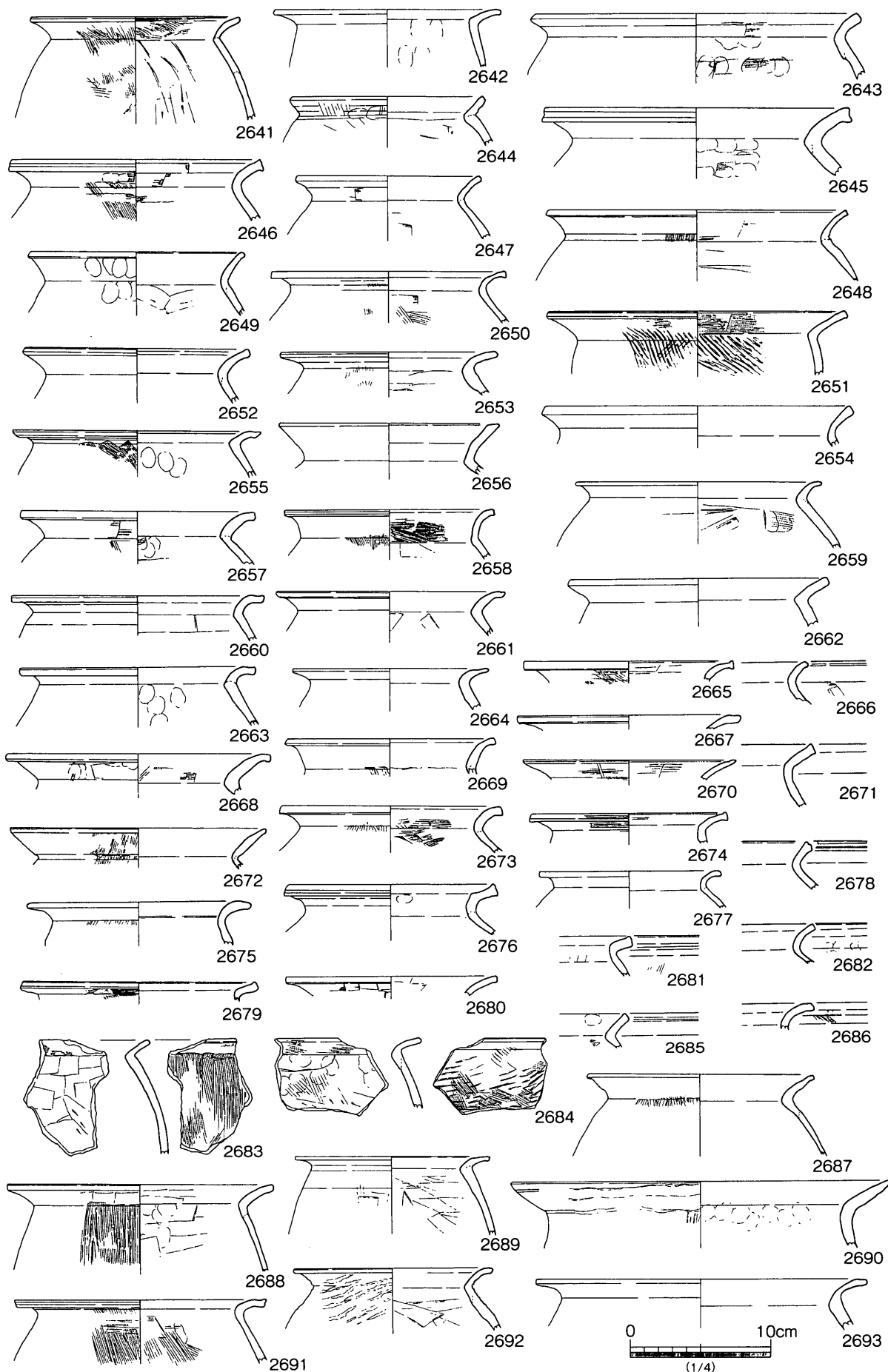
第 102 図 溝状遺構遺物実測図 44(2536 ~ 2581:SD56)



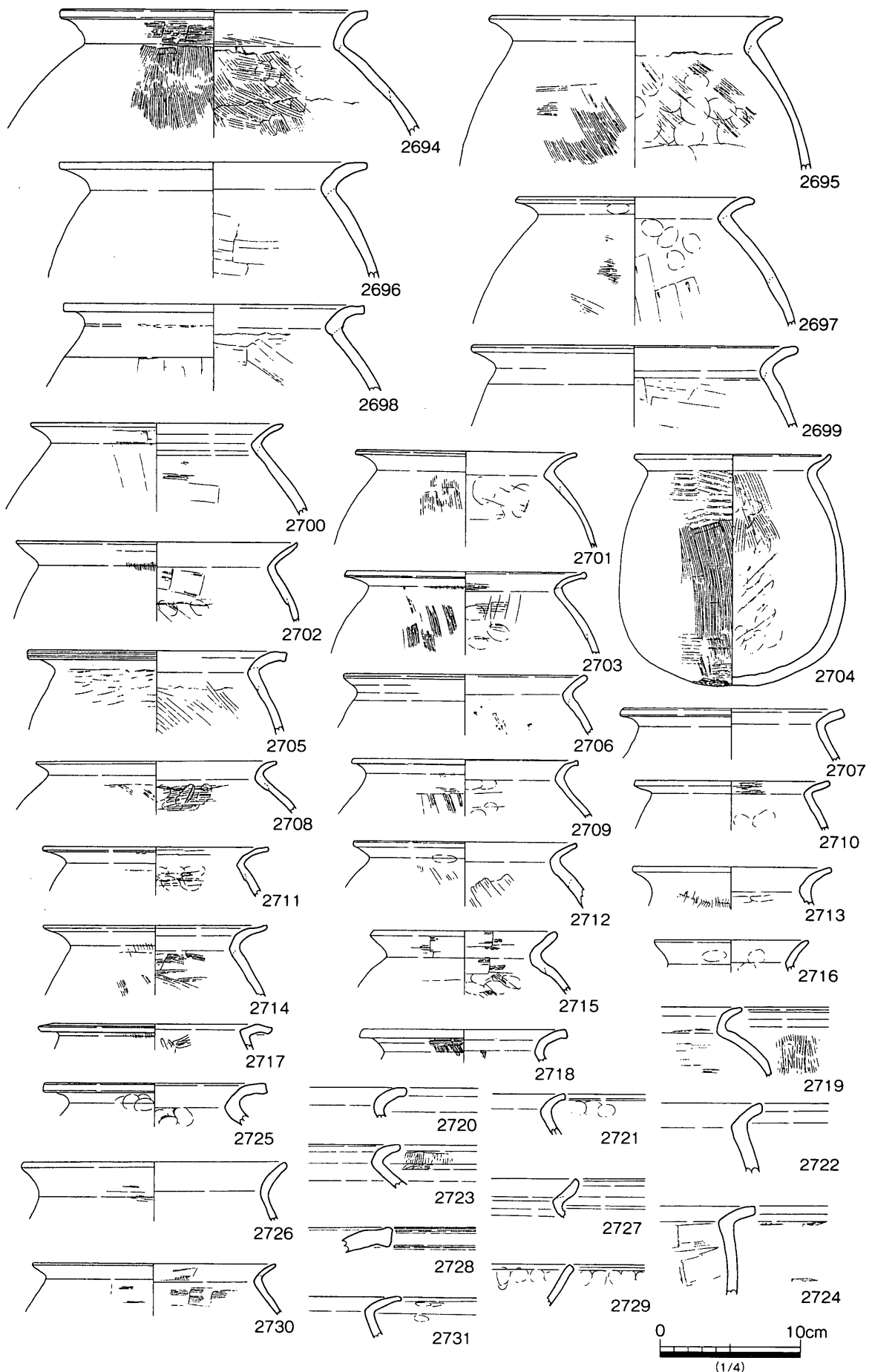
第 103 図 溝状遺構遺物実測図 45(2582 ~ 2606:SD56)



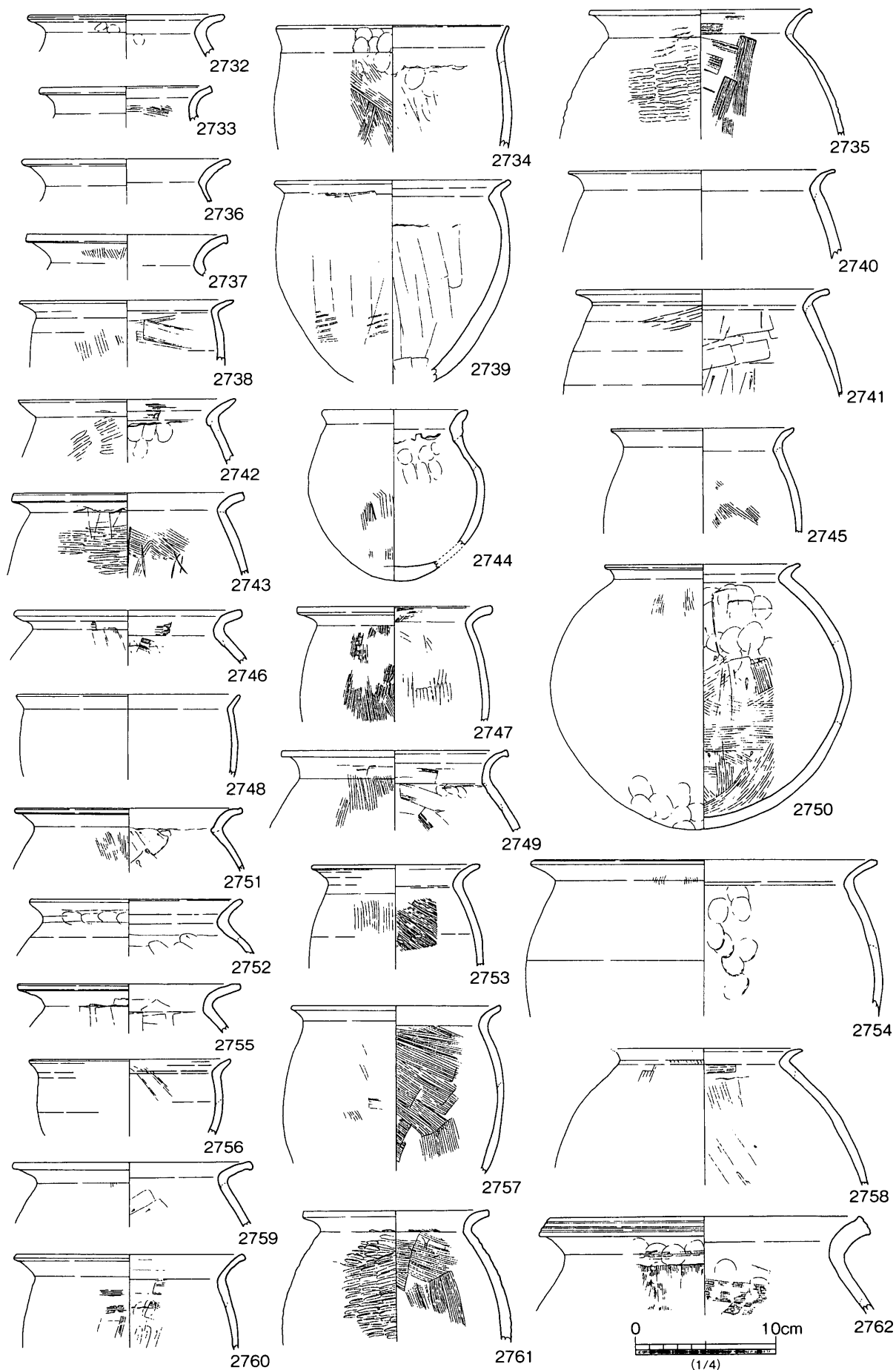
第 104 図 溝状遺構遺物実測図 46(2607 ~ 2640:SD56)



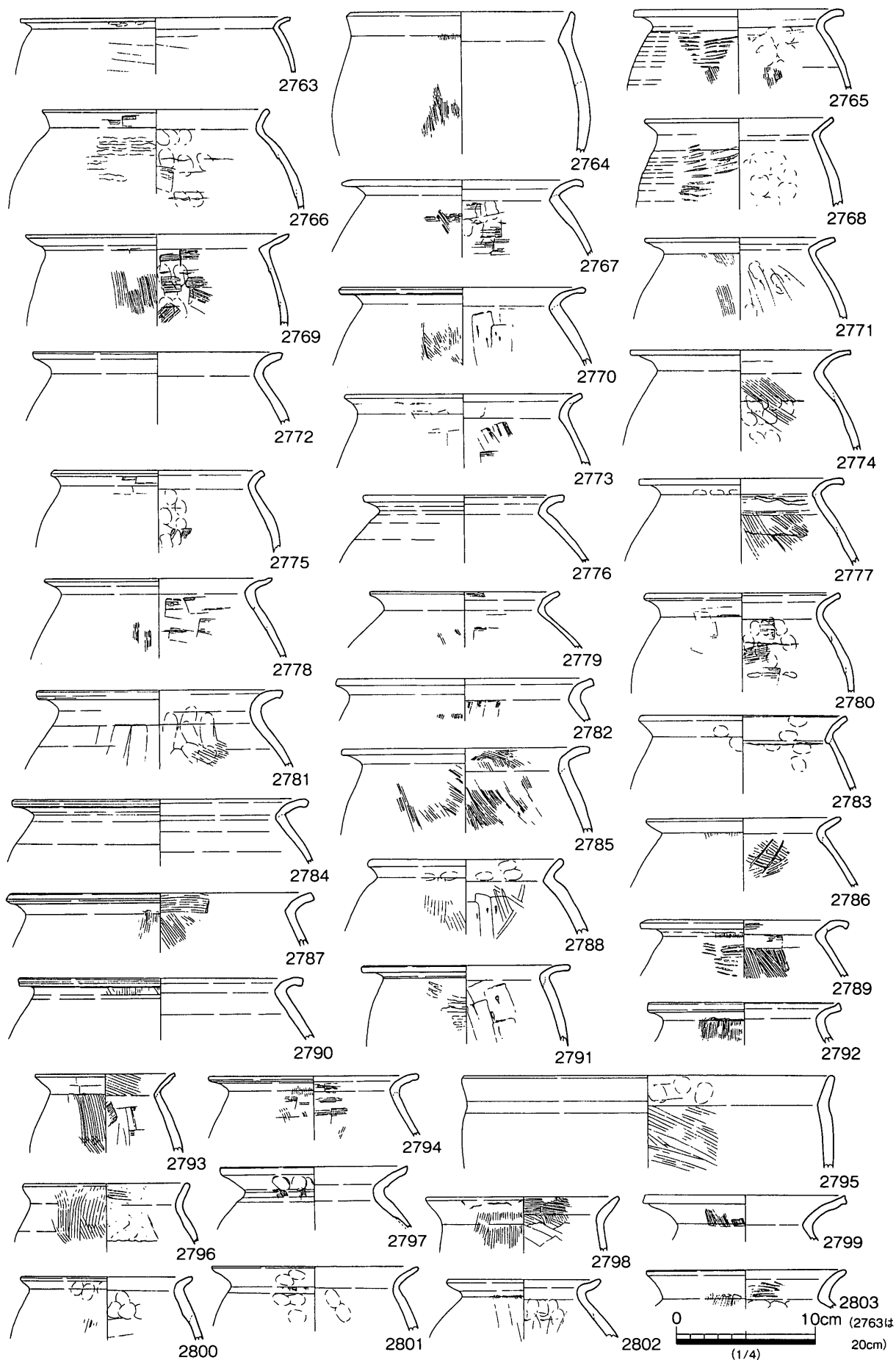
第105図 溝状遺構遺物実測図 47(2641 ~ 2693:SD56)



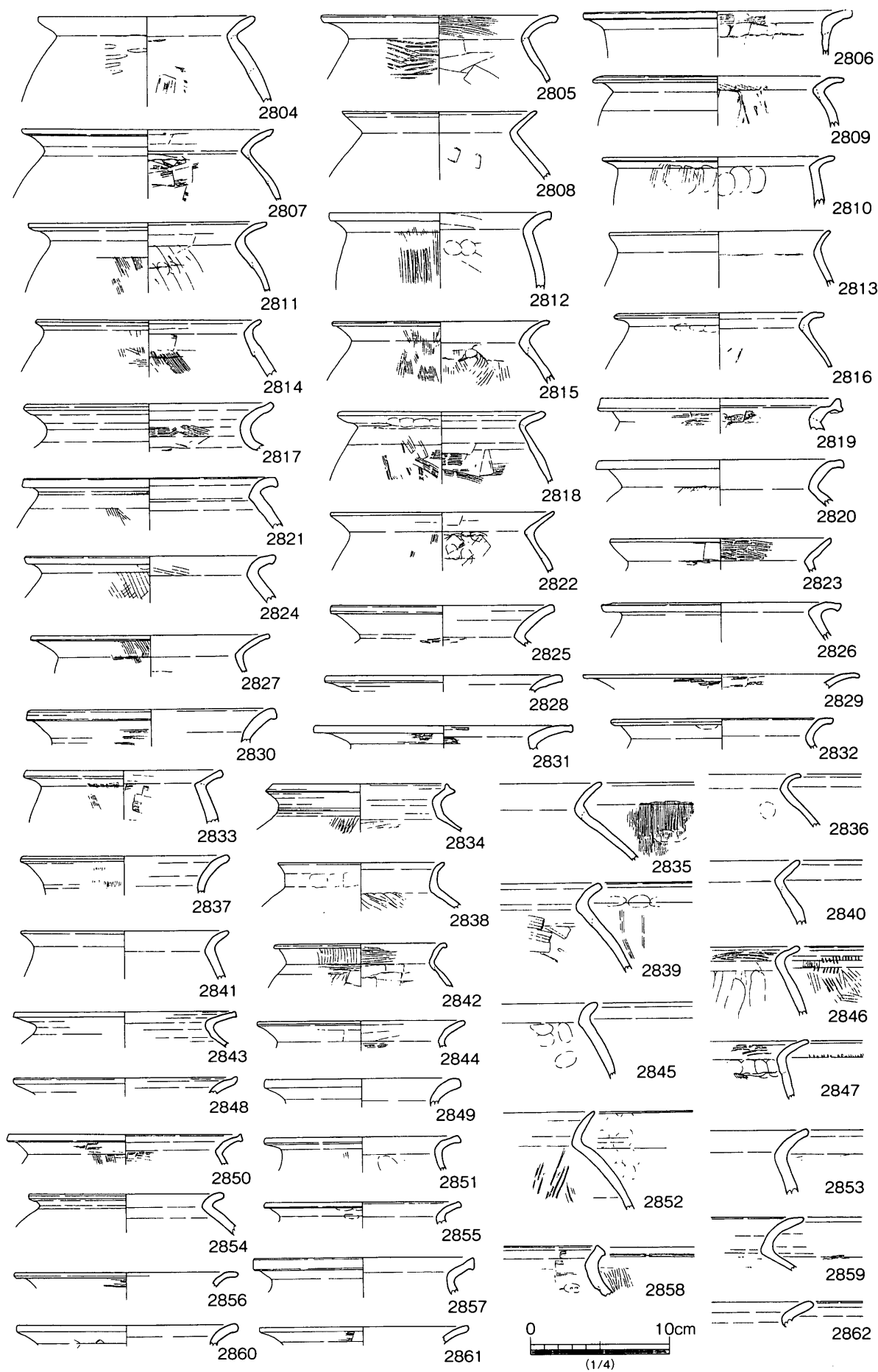
第 106 図 溝状遺構遺物実測図 48(2694 ~ 2731:SD56)



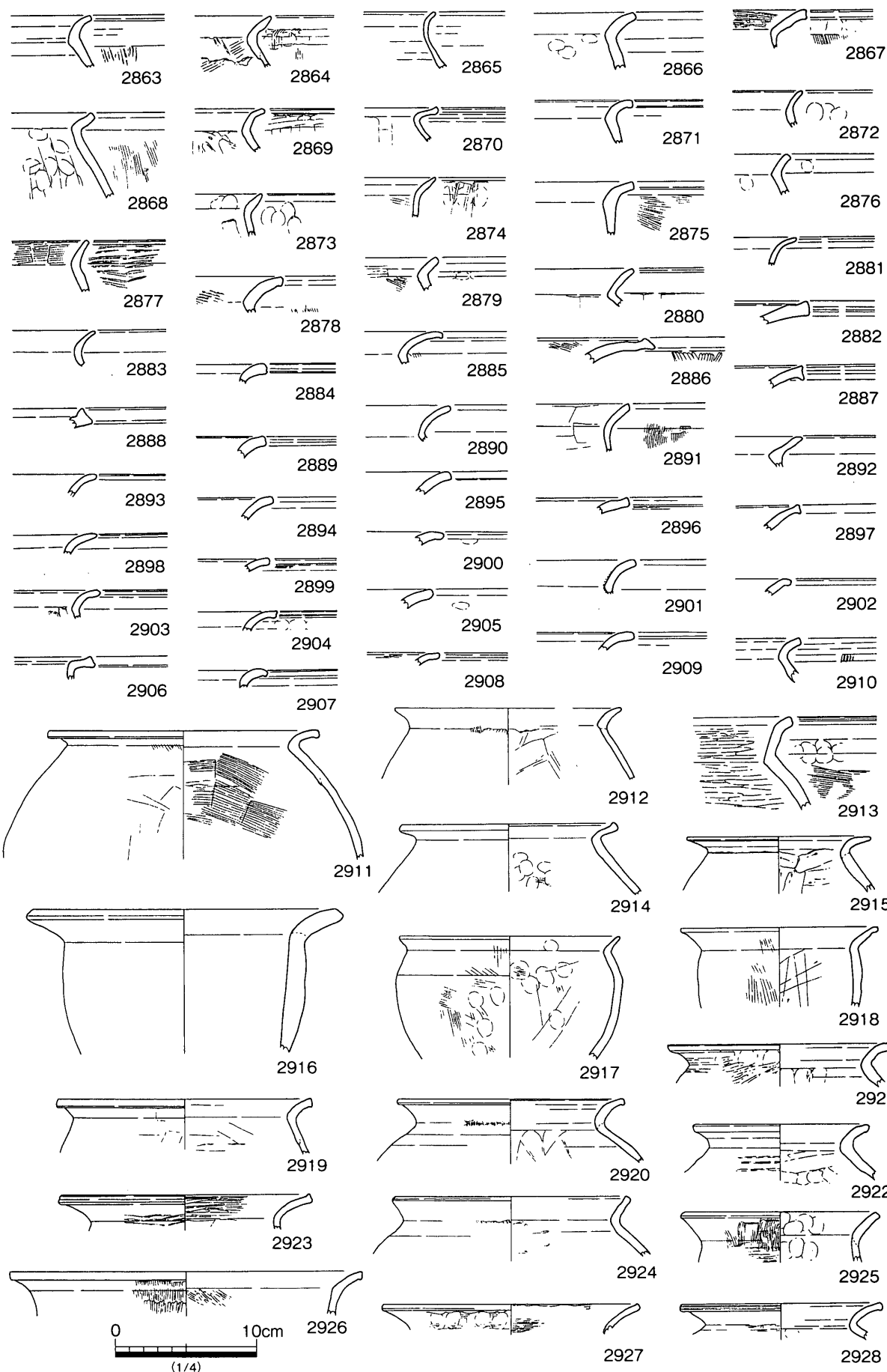
第 107 図 溝状遺構遺物実測図 49(2732 ~ 2762:SD56)



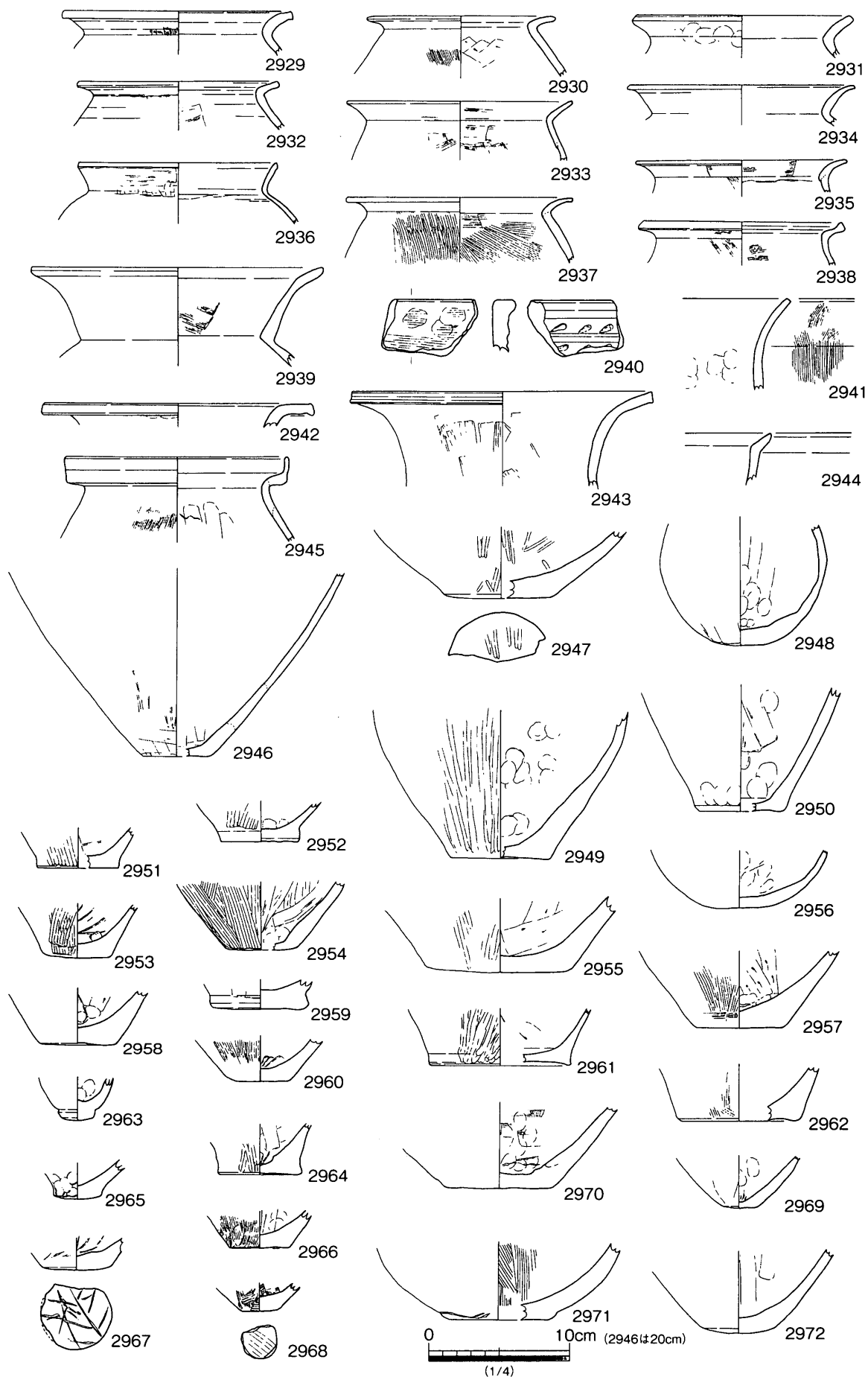
第 108 図 溝状遺構遺物実測図 50(2763 ~ 2803:SD56)



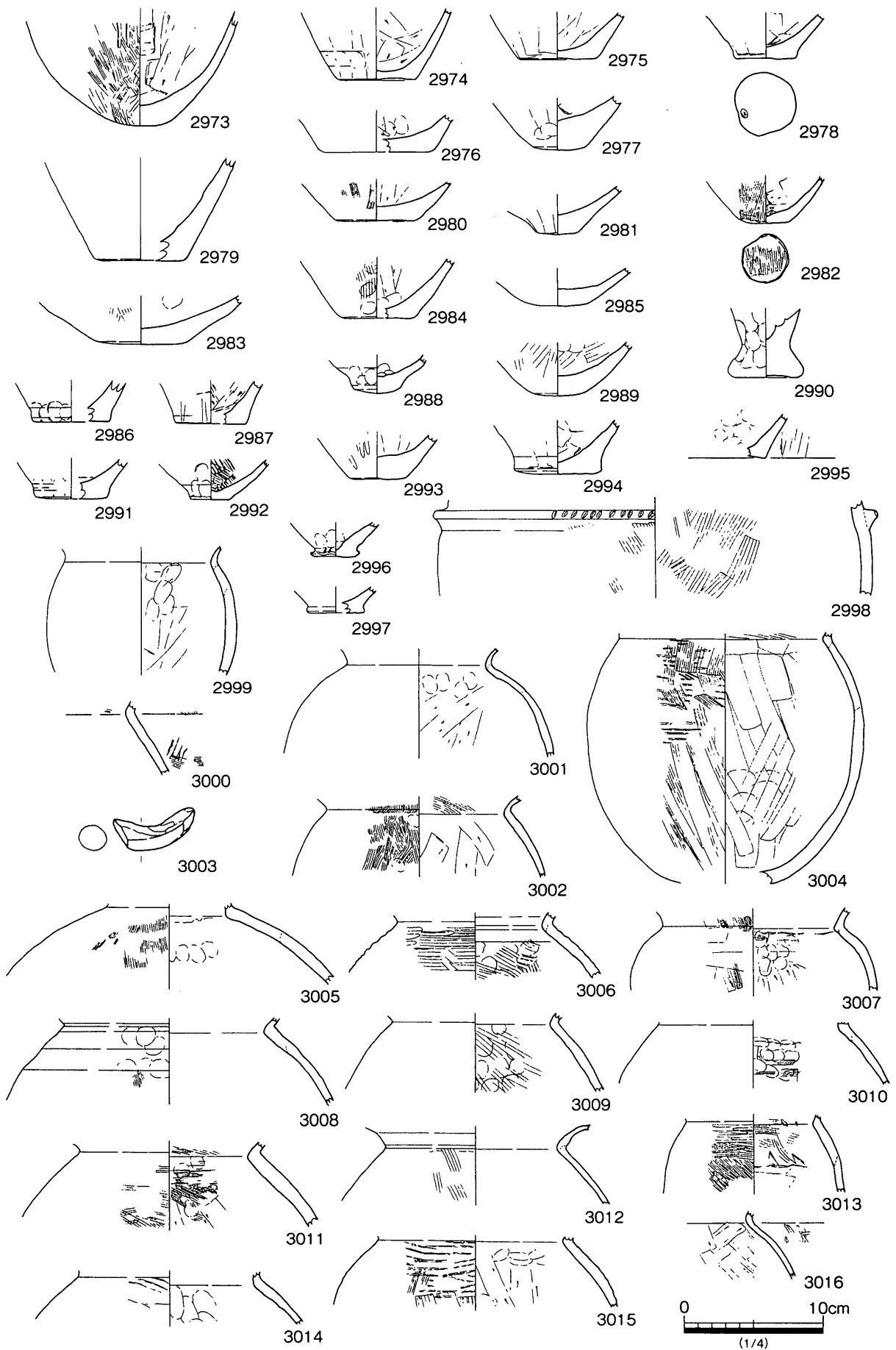
第 109 图 溝状遺構遺物実測図 51(2804 ~ 2862:SD56)



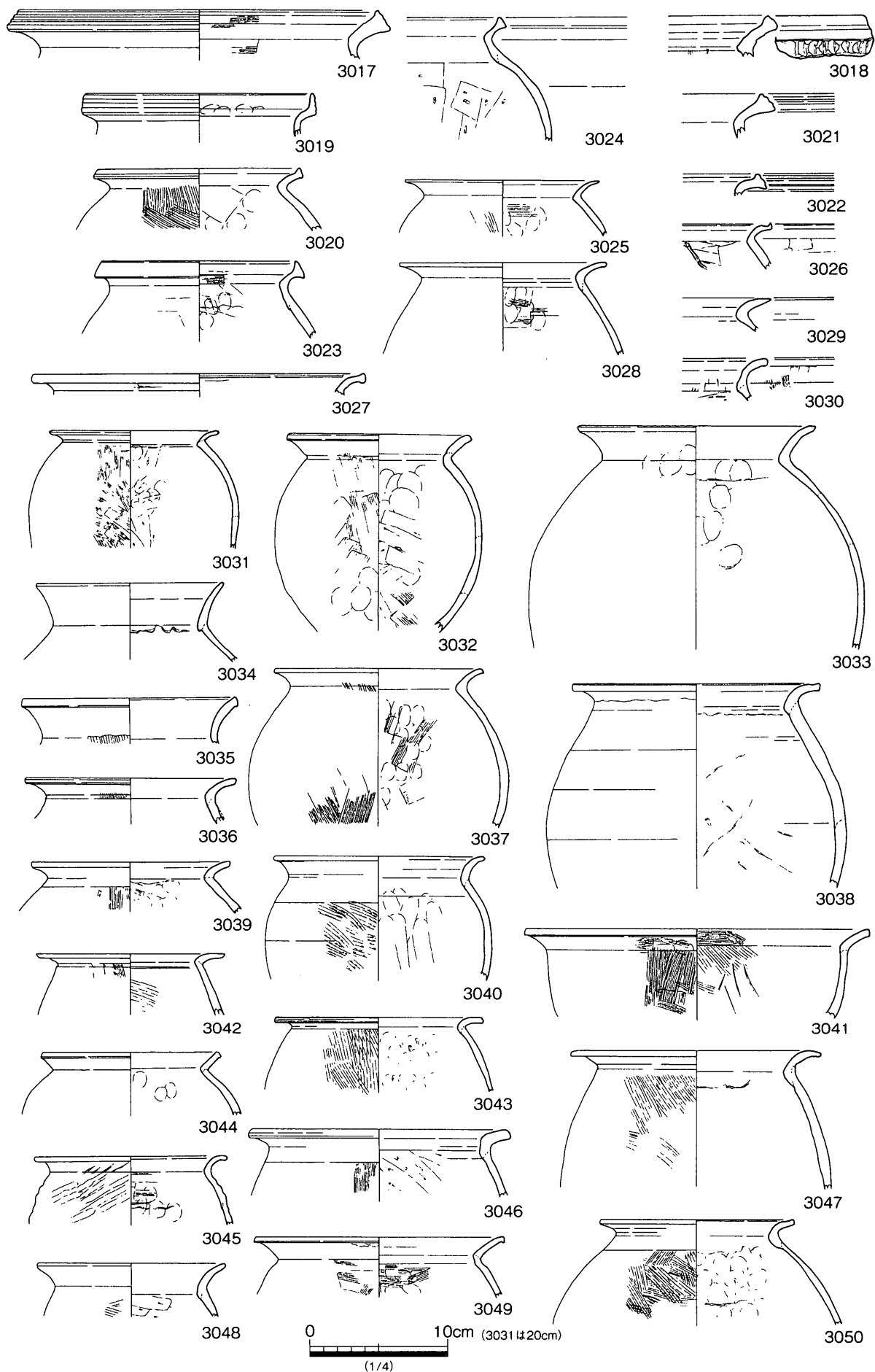
第 110 図 溝状遺構遺物実測図 52(2863 ~ 2928:SD56)



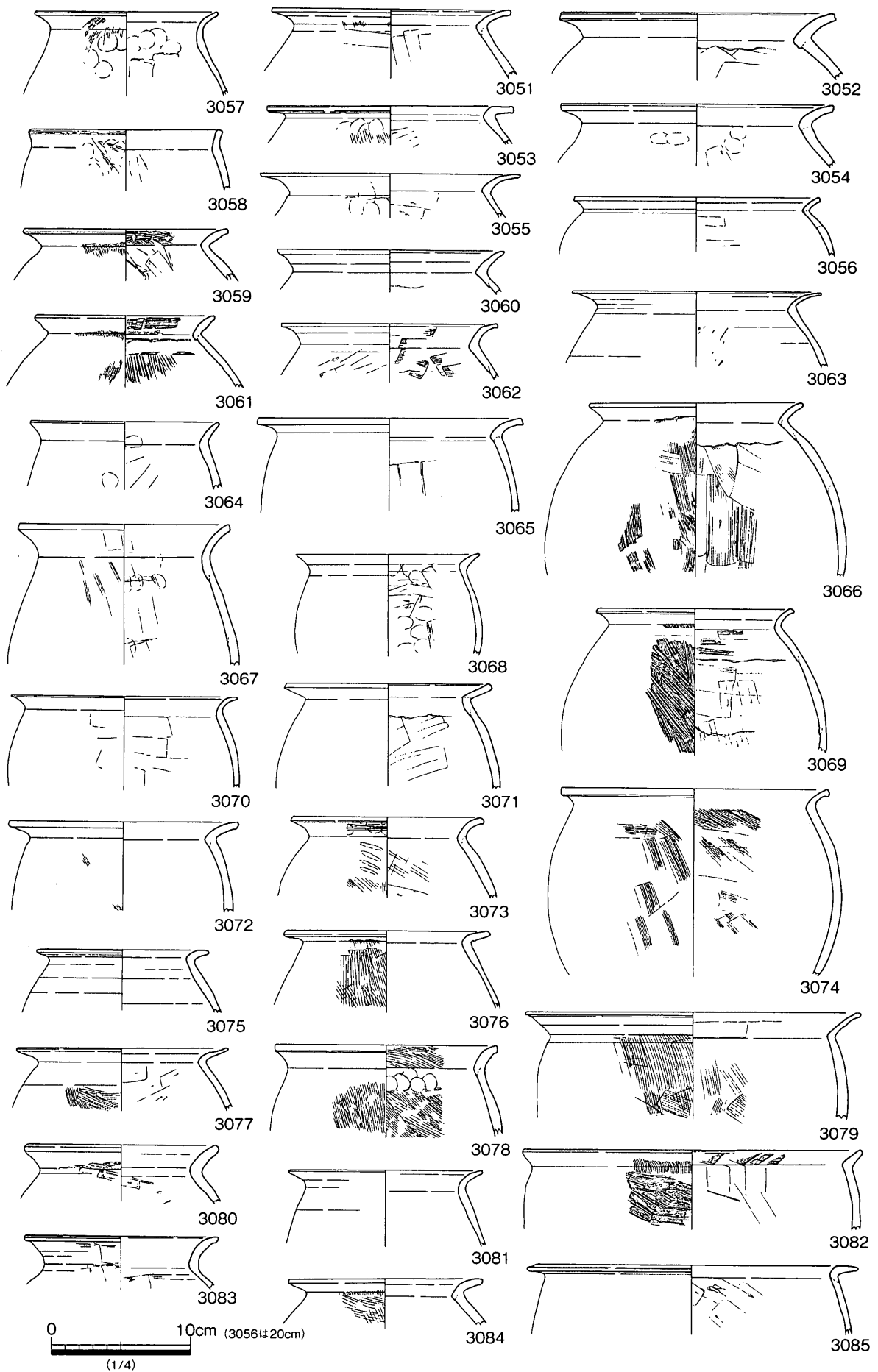
第 111 図 溝状遺構遺物実測図 53(2929 ~ 2972:SD56)



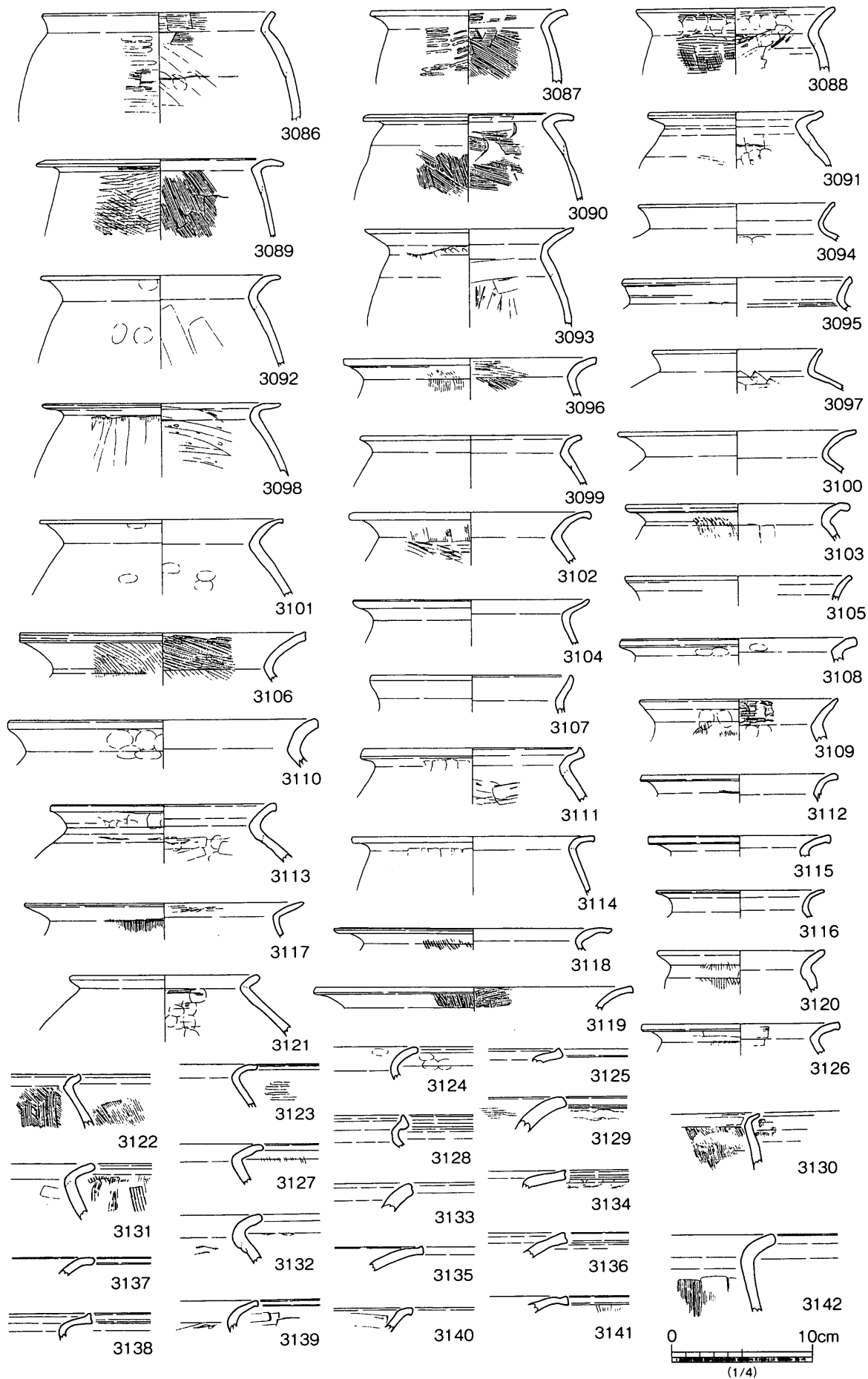
第 112 図 溝状遺構遺物実測図 54(2973 ~ 3016:SD56)



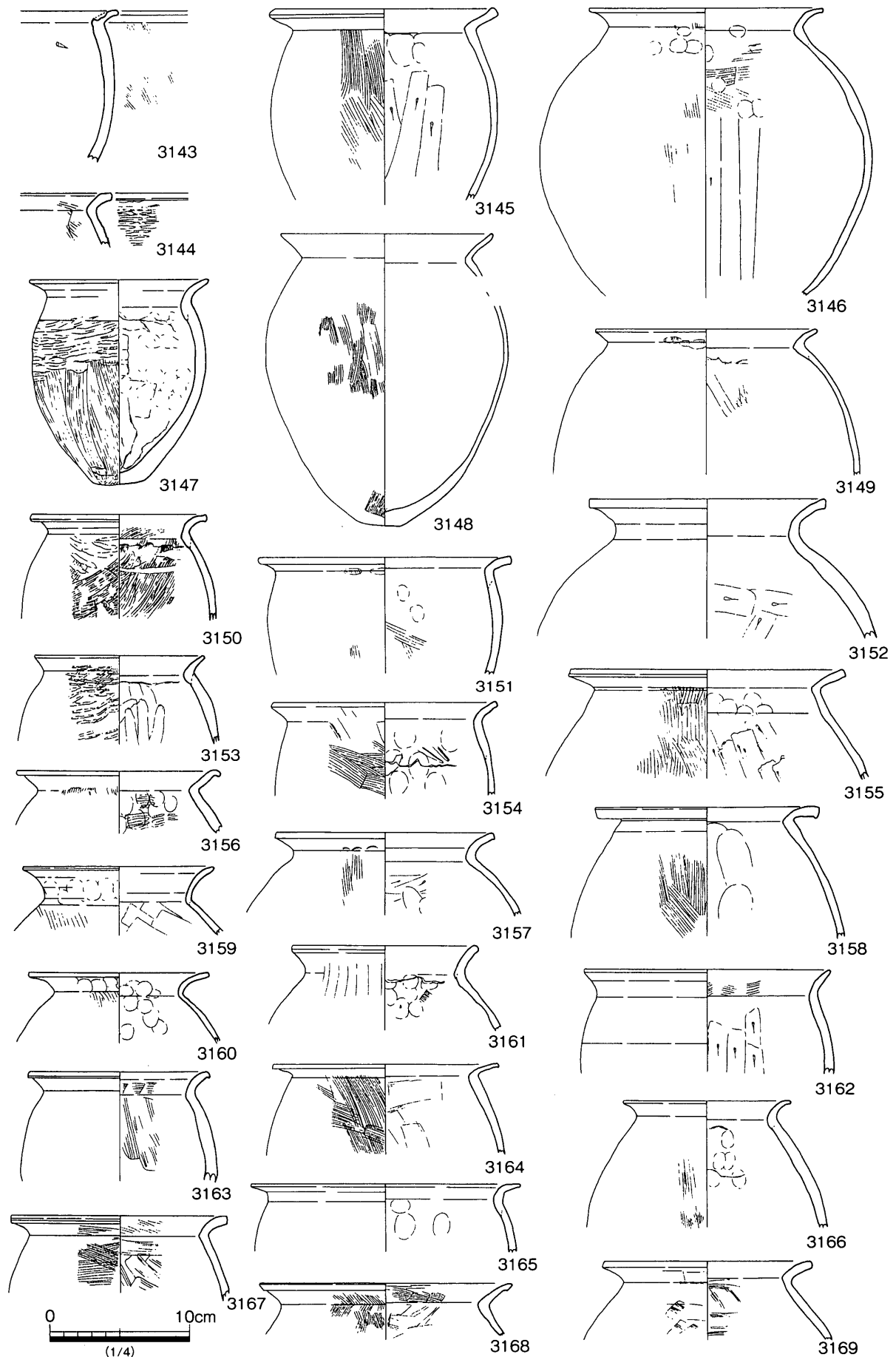
第113図 溝状遺構遺物実測図 55(3017~3050:SD56)



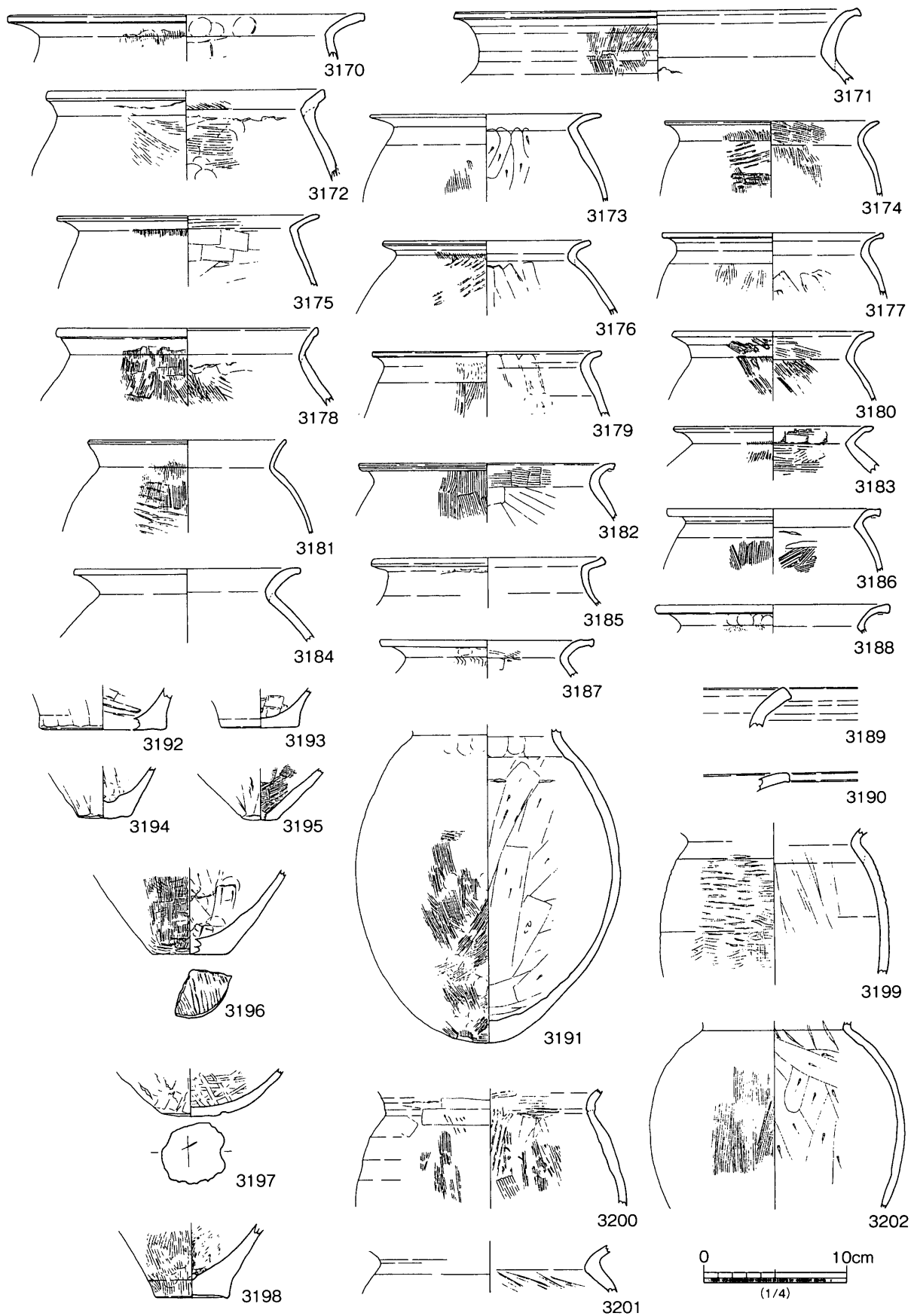
第 114 図 溝状遺構遺物実測図 56(3051 ~ 3085:SD56)



第 115 図 溝状遺構遺物実測図 57(3086 ~ 3142:SD56)



第 116 図 溝状遺構遺物実測図 58(3143 ~ 3169:SD56)



第 117 図 溝状遺構遺物実測図 59(3170 ~ 3202:SD56)



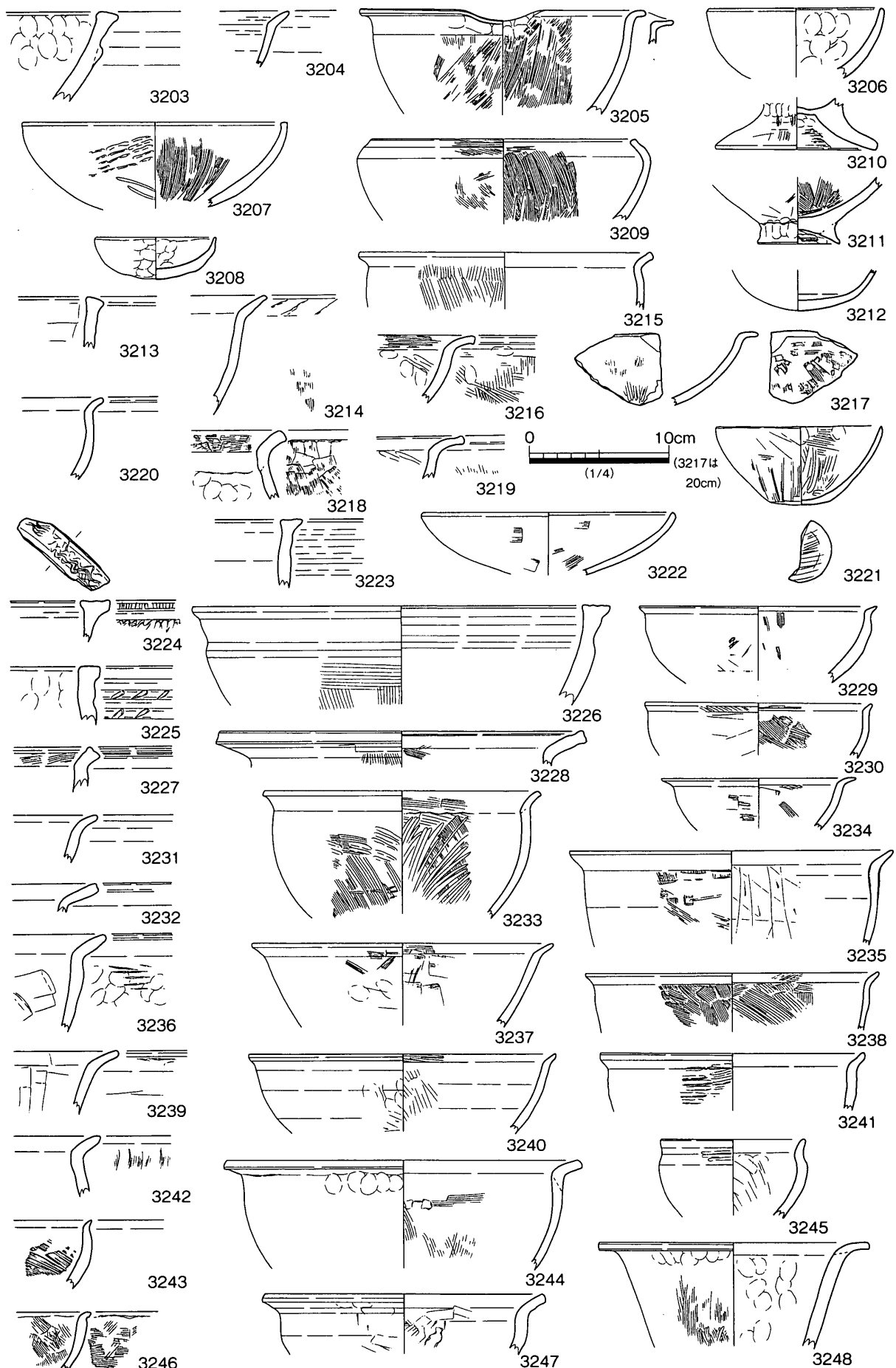
第 118 図 溝状遺構遺構実測図 8 (SD56)

a —

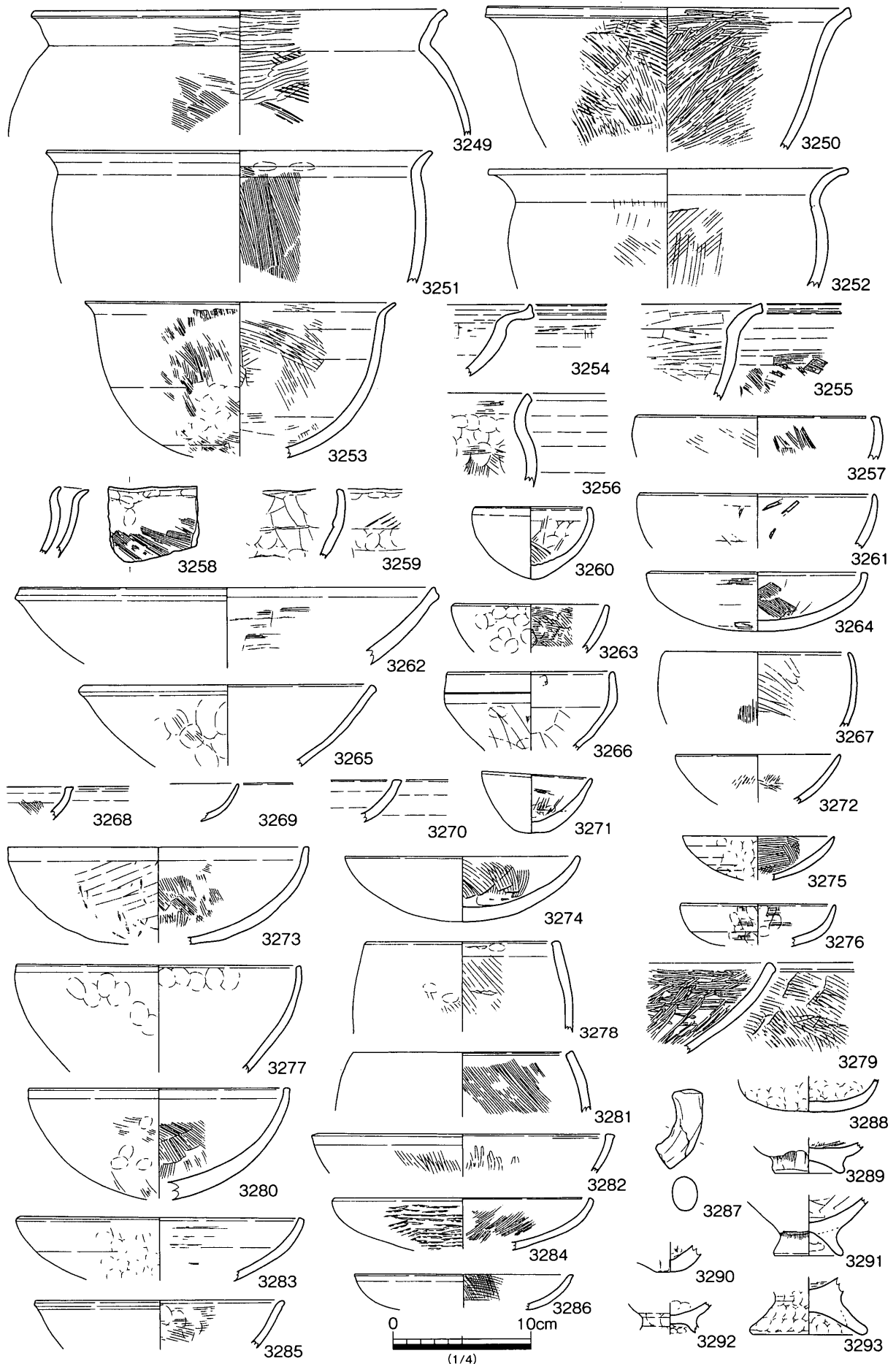
— b



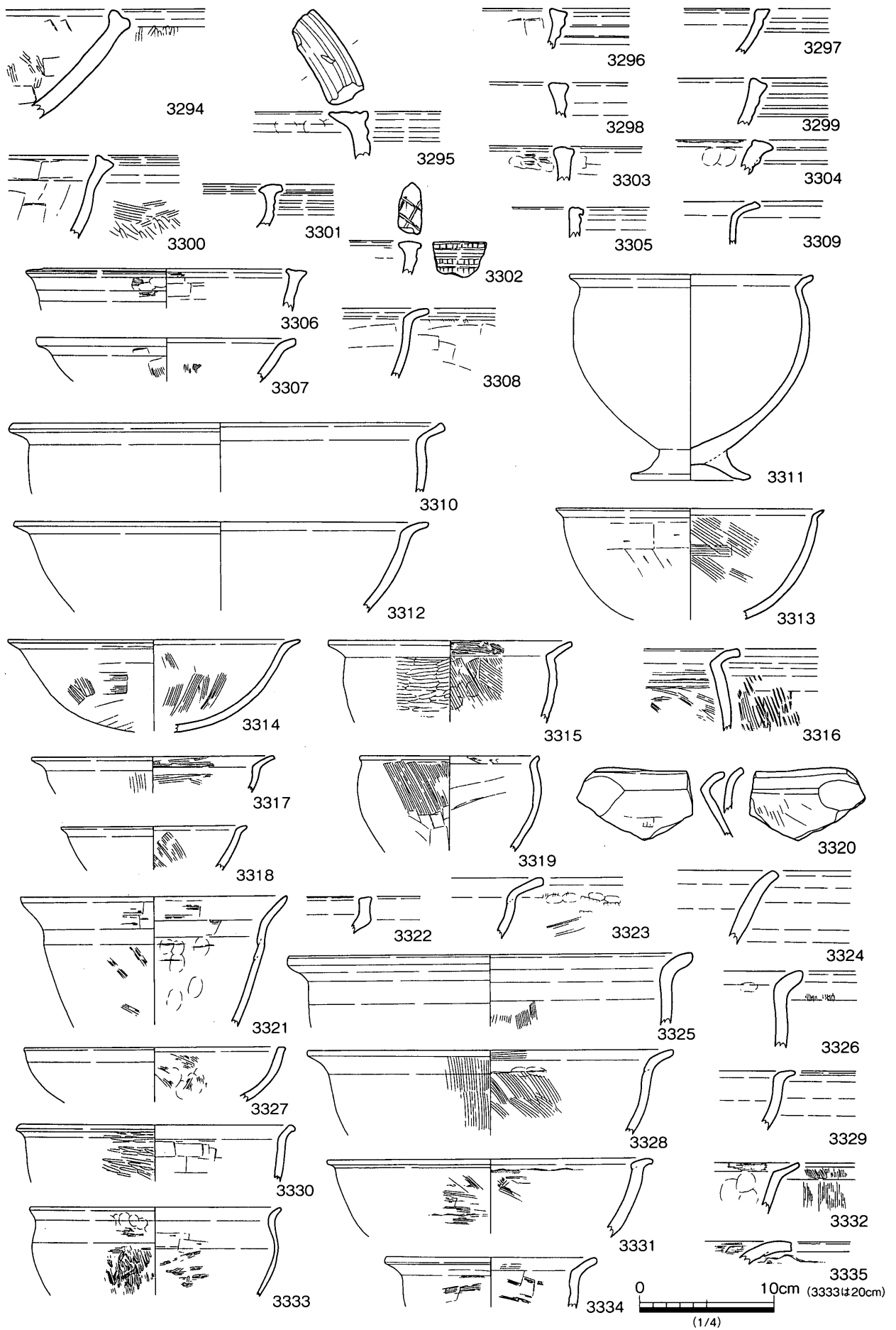
第 119 図 溝状遺構遺構実測図 9 (SD56)



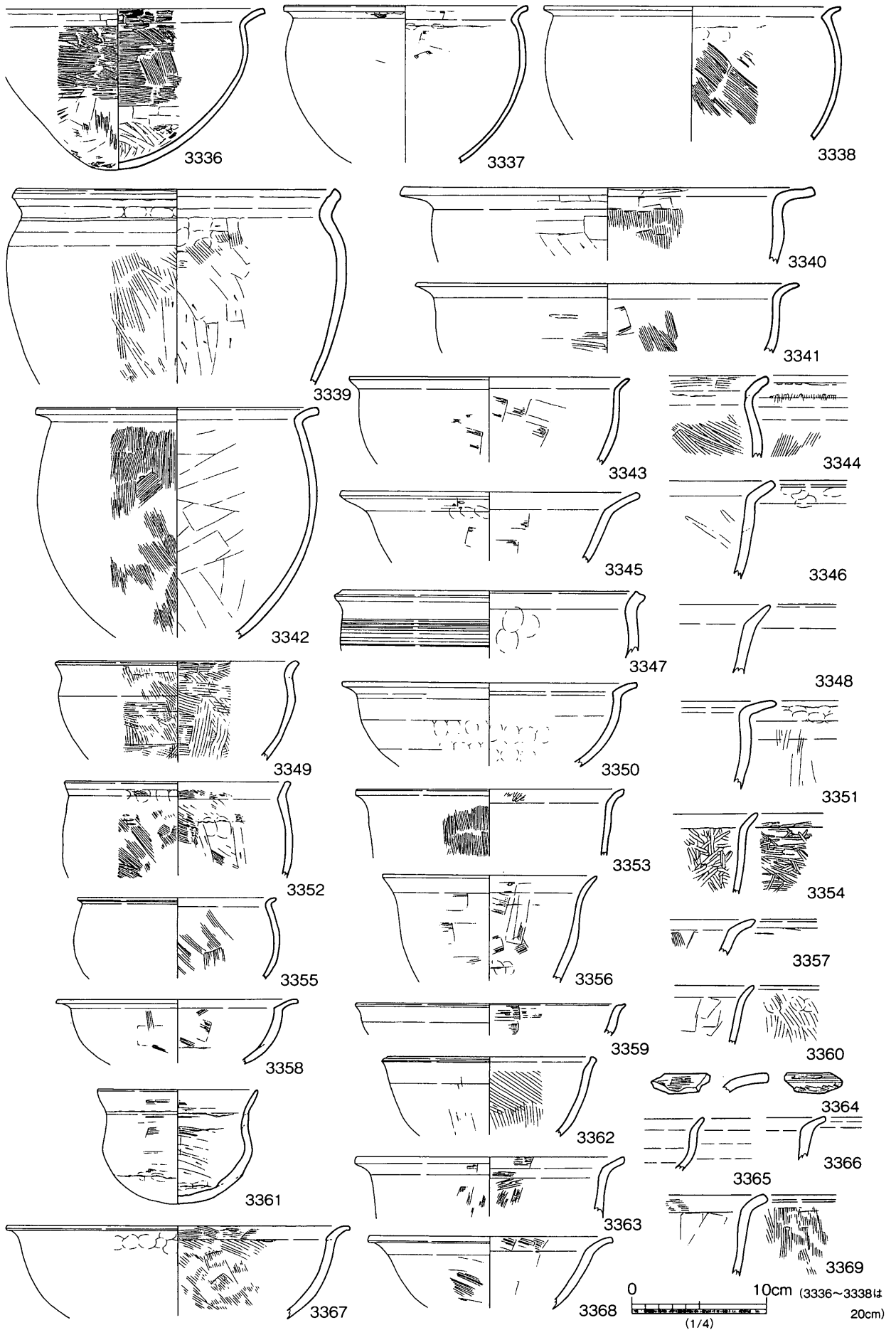
第 120 図 溝状遺構遺物実測図 60(3203 ~ 3248:SD56)



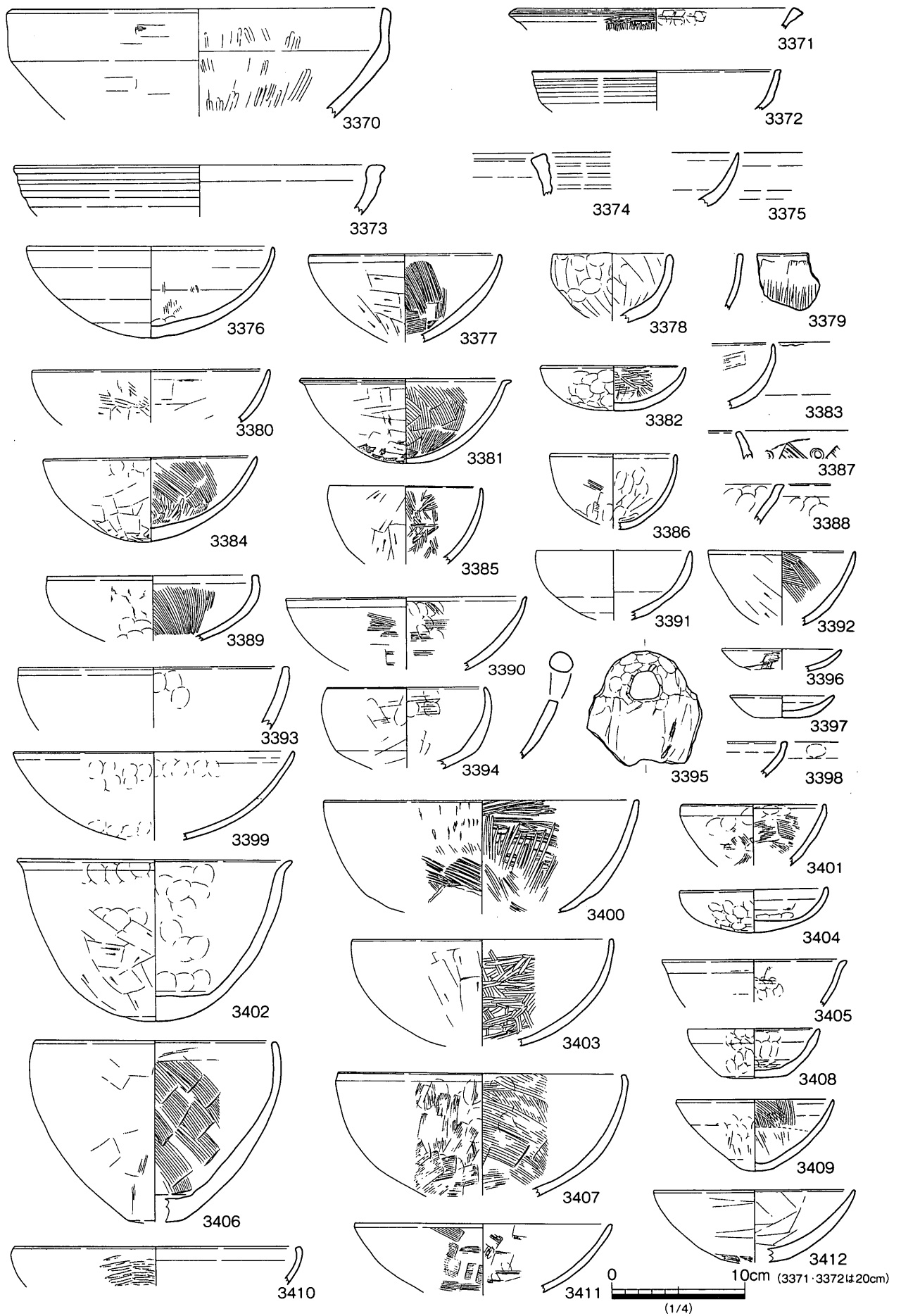
第121図 溝状遺構遺物実測図 61(3249～3293:SD56)



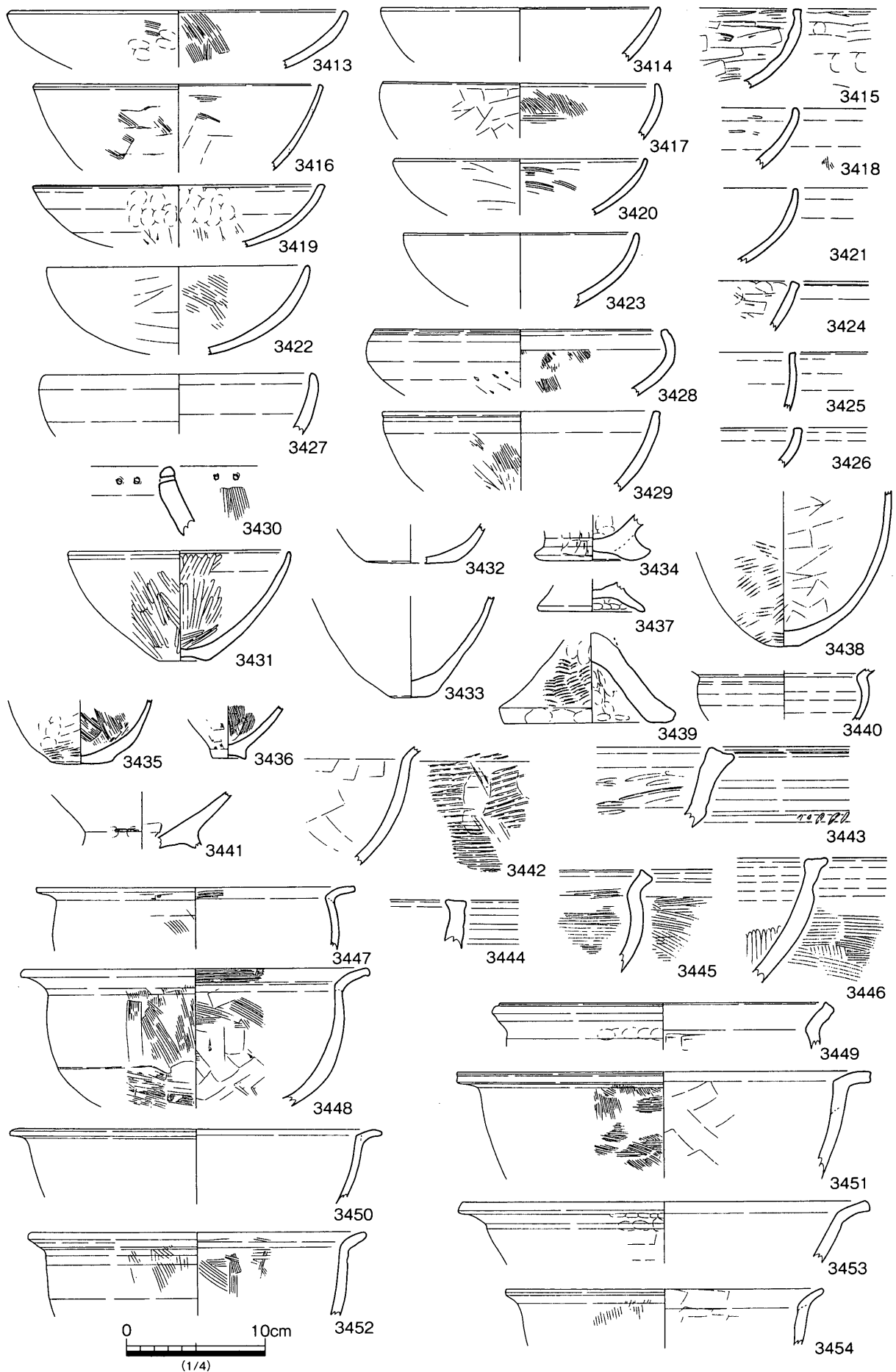
第 122 図 溝状遺構遺物実測図 62(3294 ~ 3335:SD56)



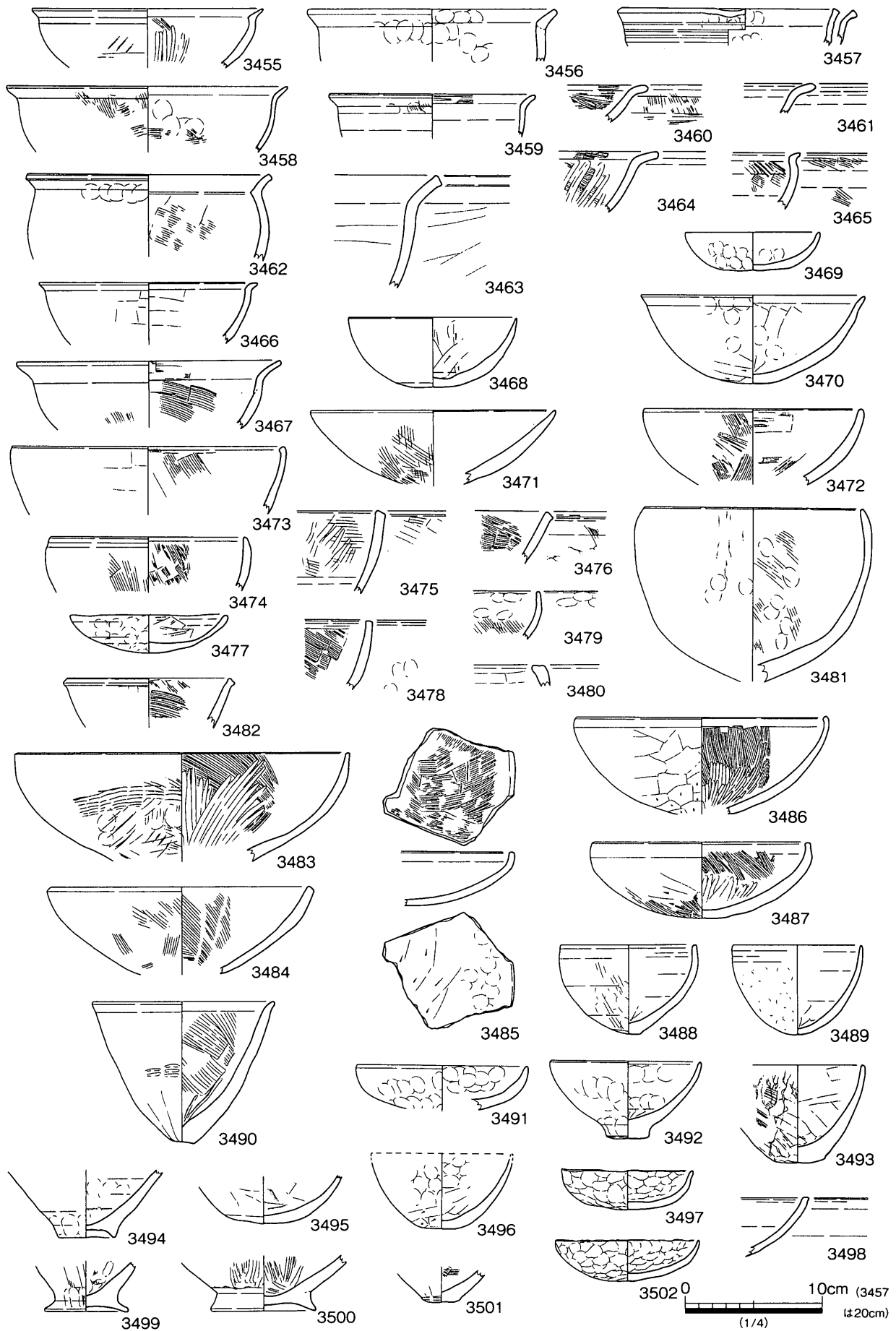
第 123 図 溝状遺構遺物実測図 63(3336 ~ 3369:SD56)



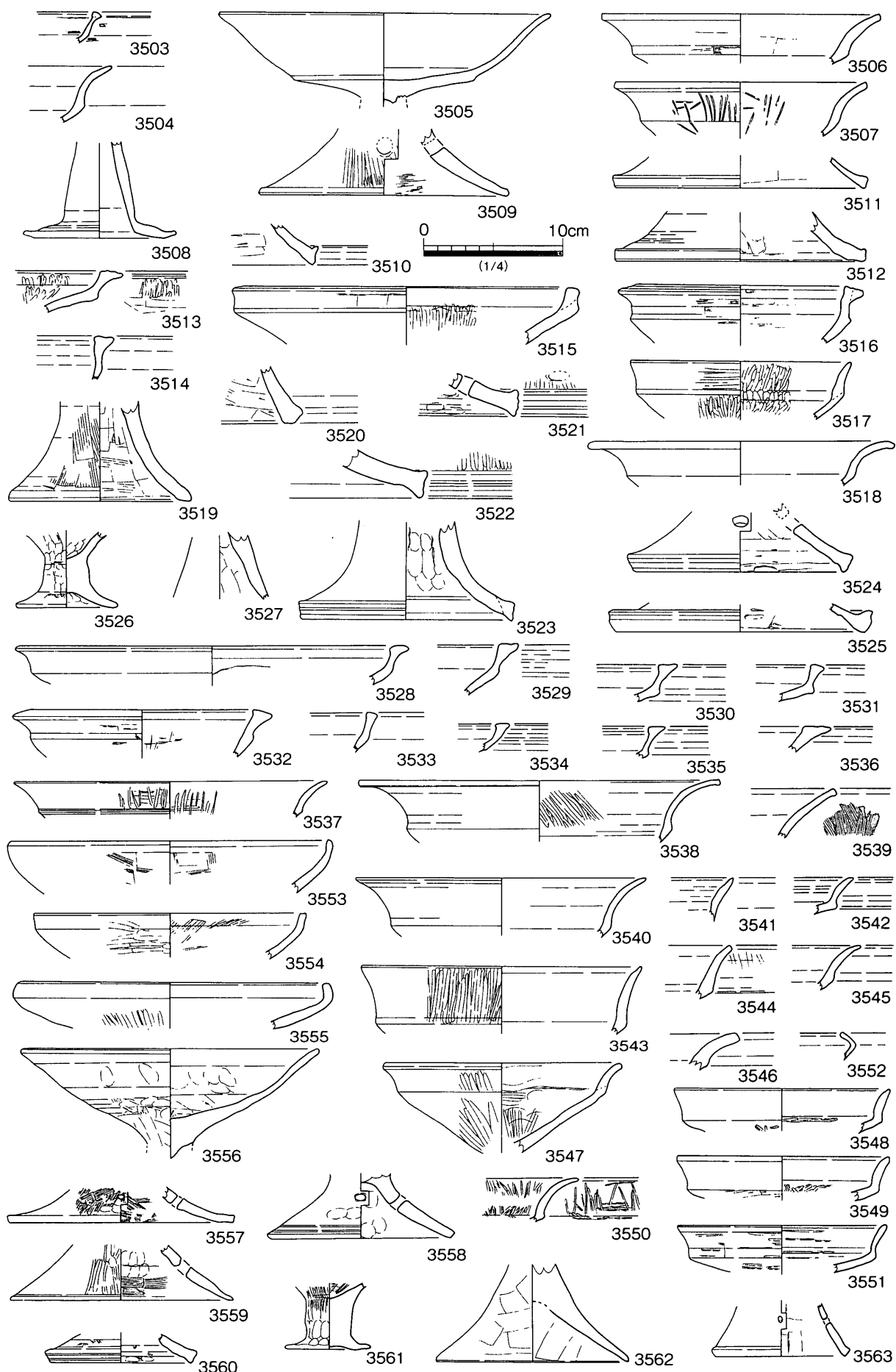
第 124 図 溝状遺構遺物実測図 64(3370 ~ 3412:SD56)



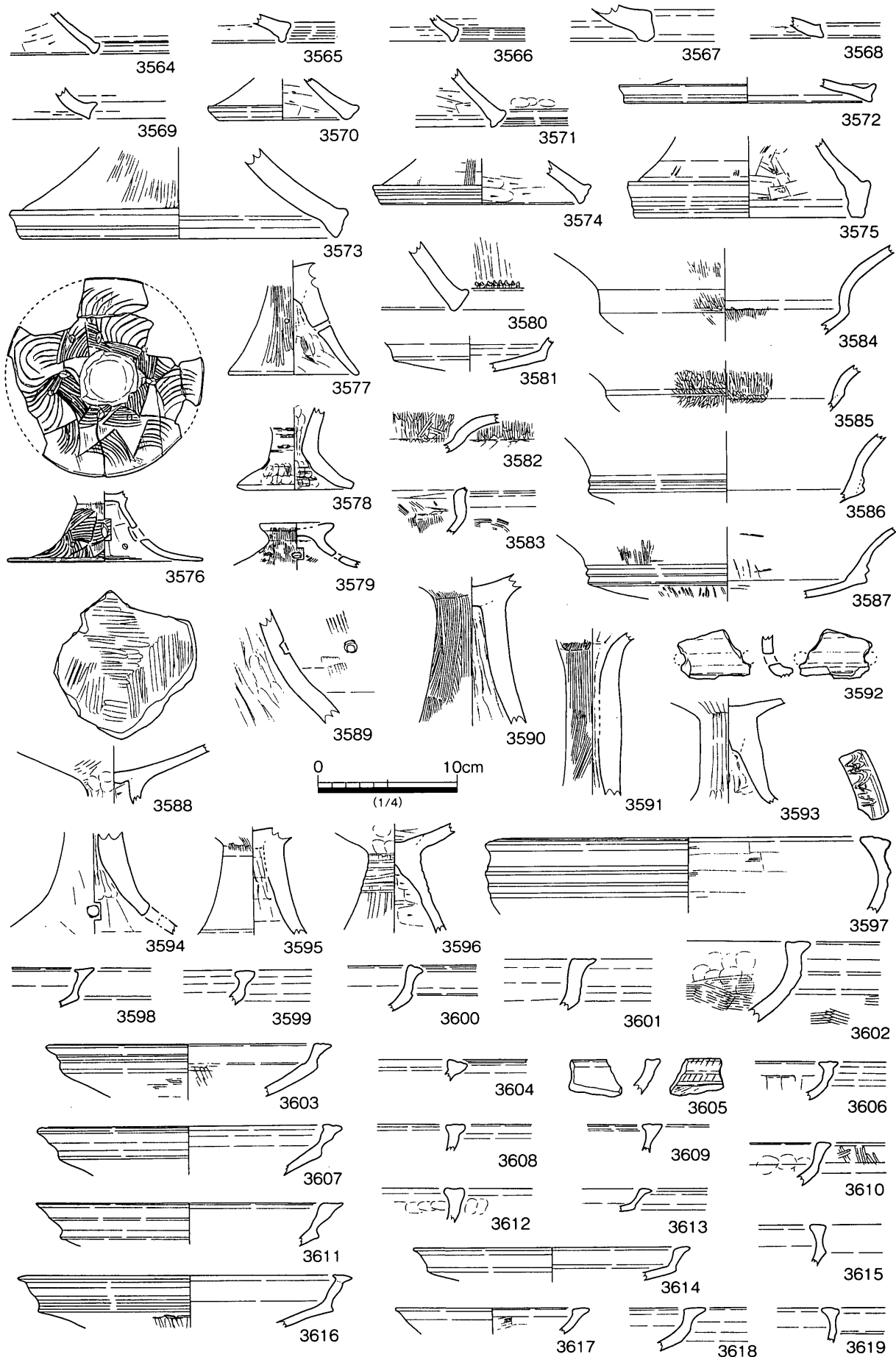
第 125 図 溝状遺構遺物実測図 65(3413 ~ 3454:SD56)



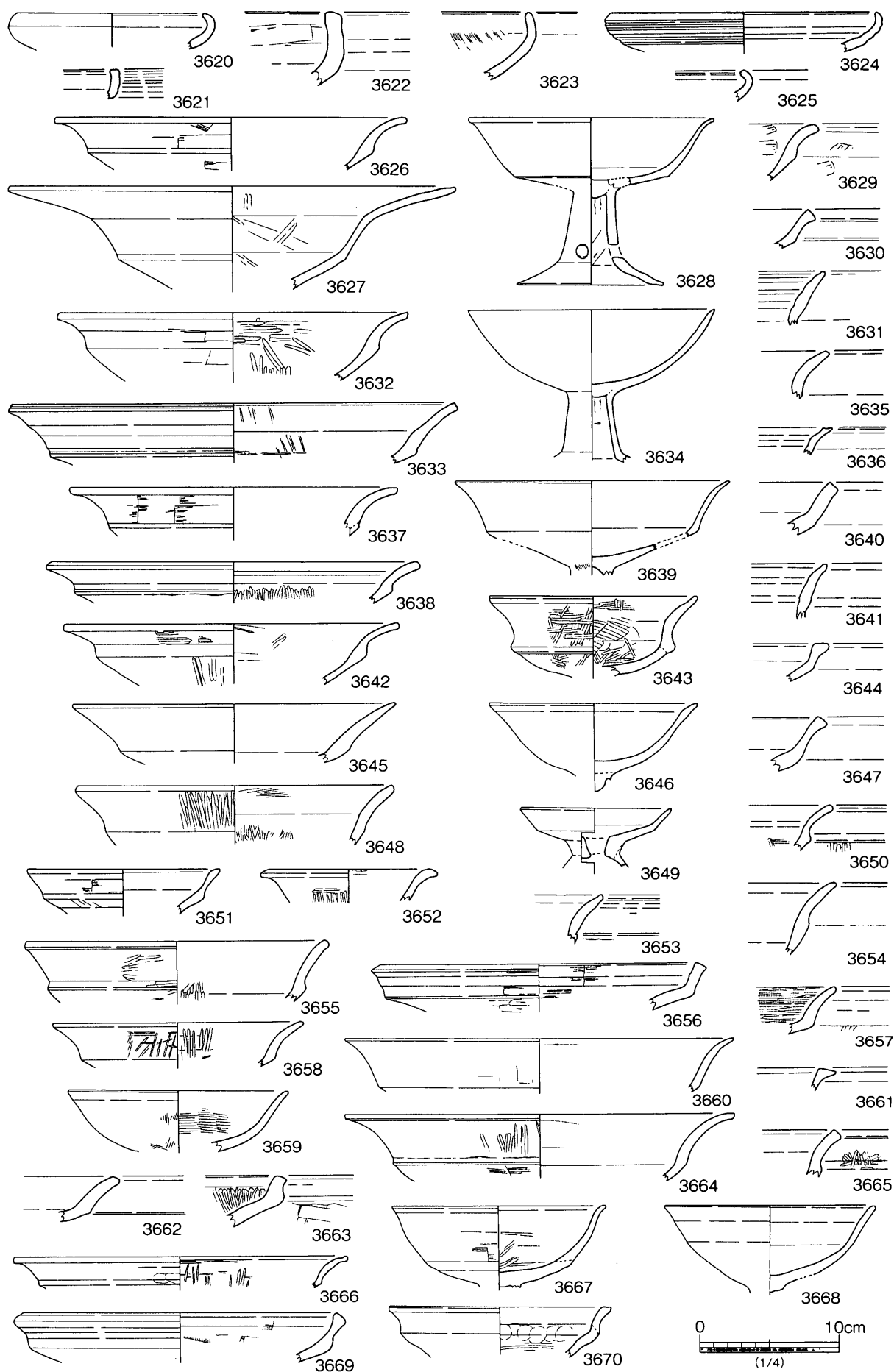
第 126 図 溝状遺構遺物実測図 66(3455 ~ 3502:SD56)



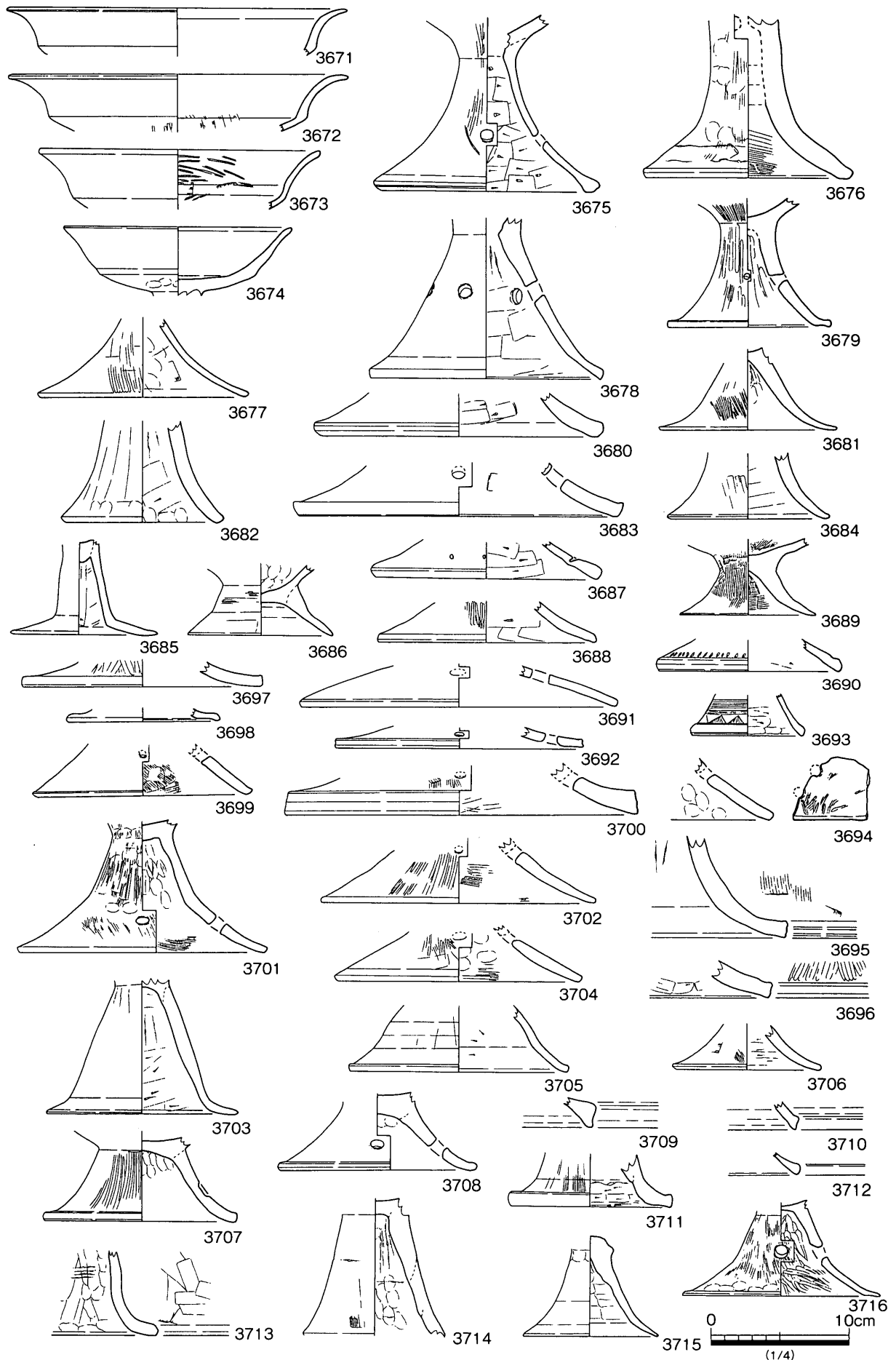
第 127 図 溝状遺構遺物実測図 67(3503 ~ 3563:SD56)



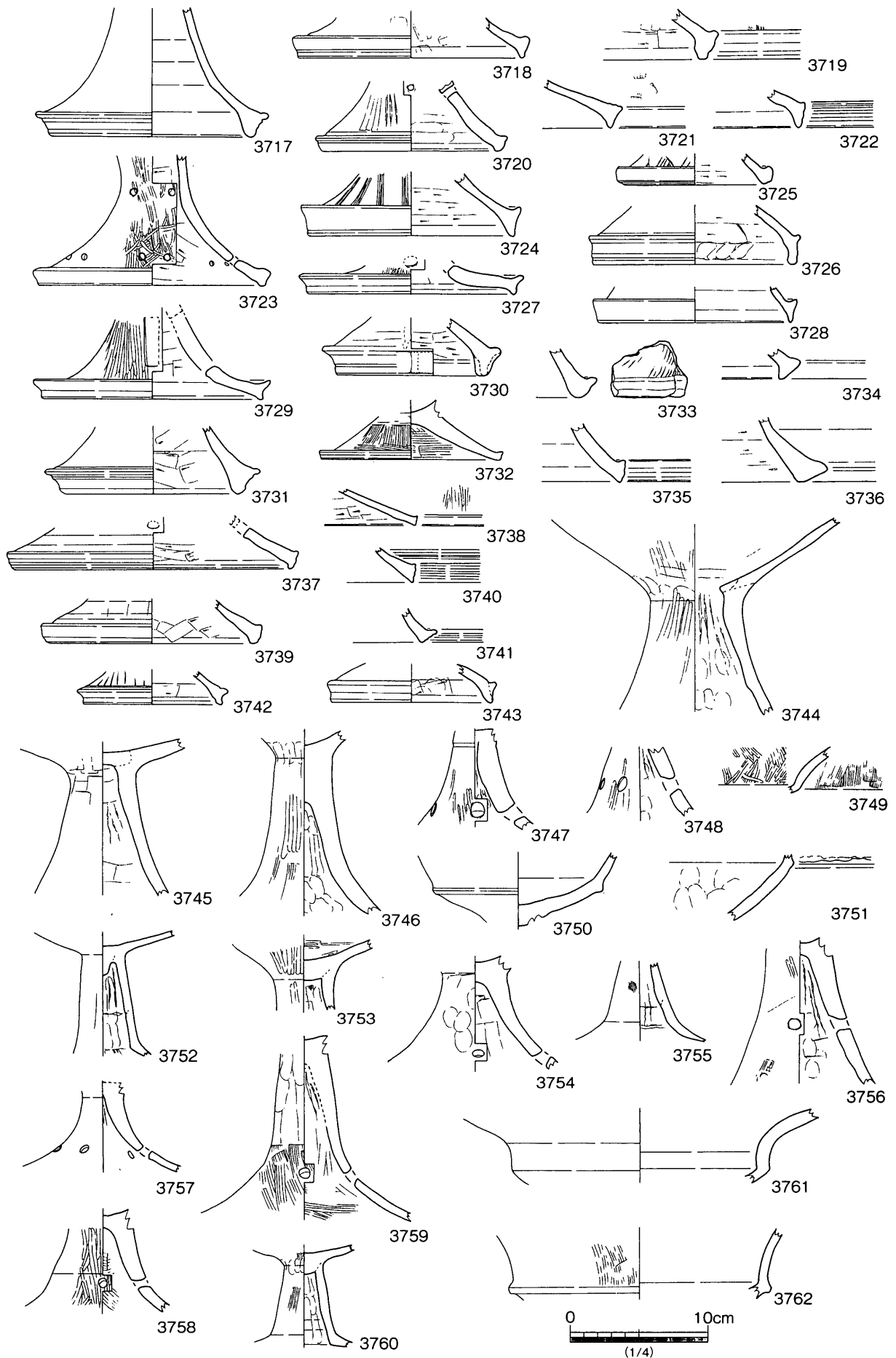
第 128 図 溝状遺構遺物実測図 68(3564 ~ 3619:SD56)



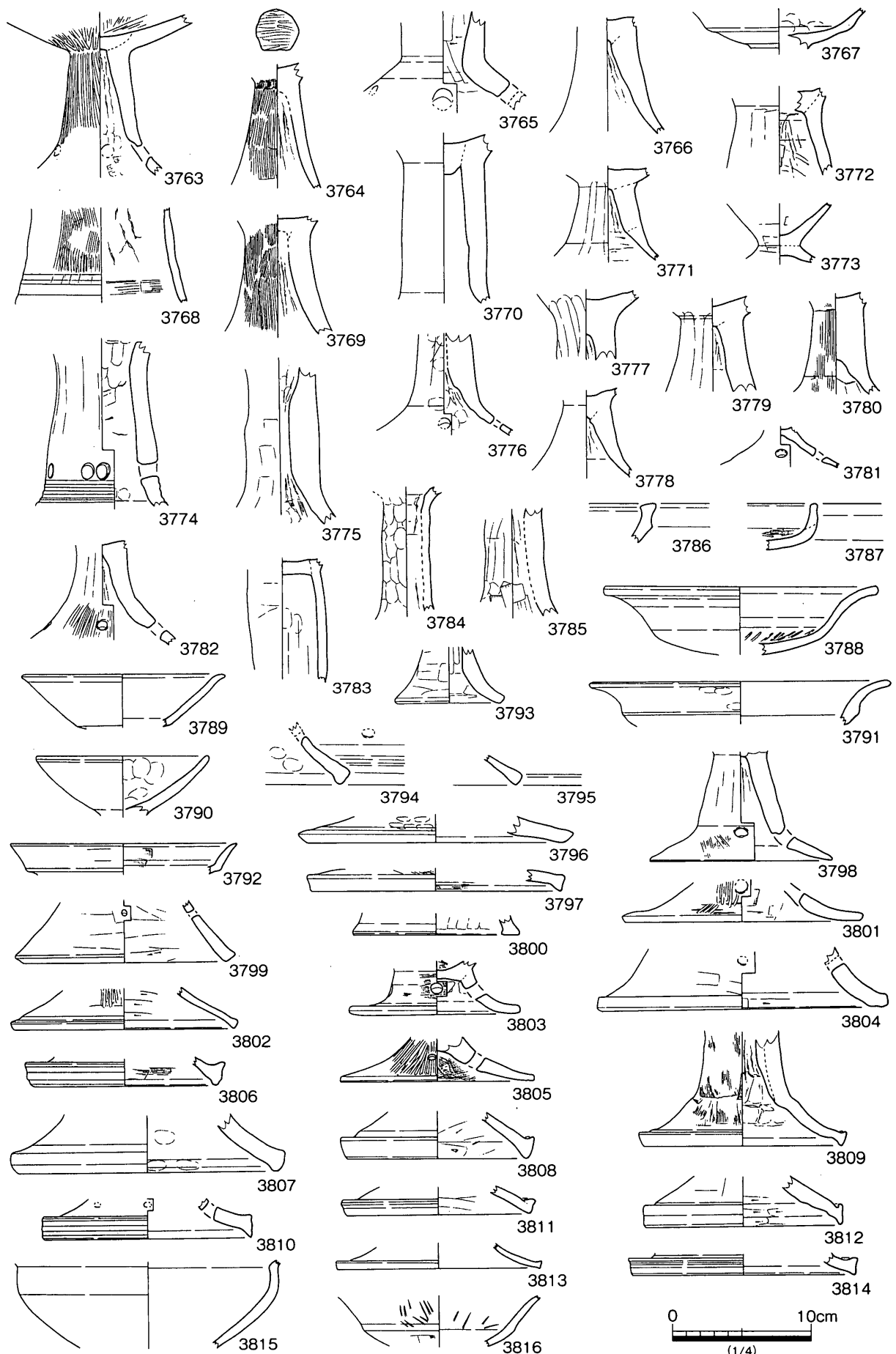
第 129 図 溝状遺構遺物実測図 69(3620 ~ 3670:SD56)



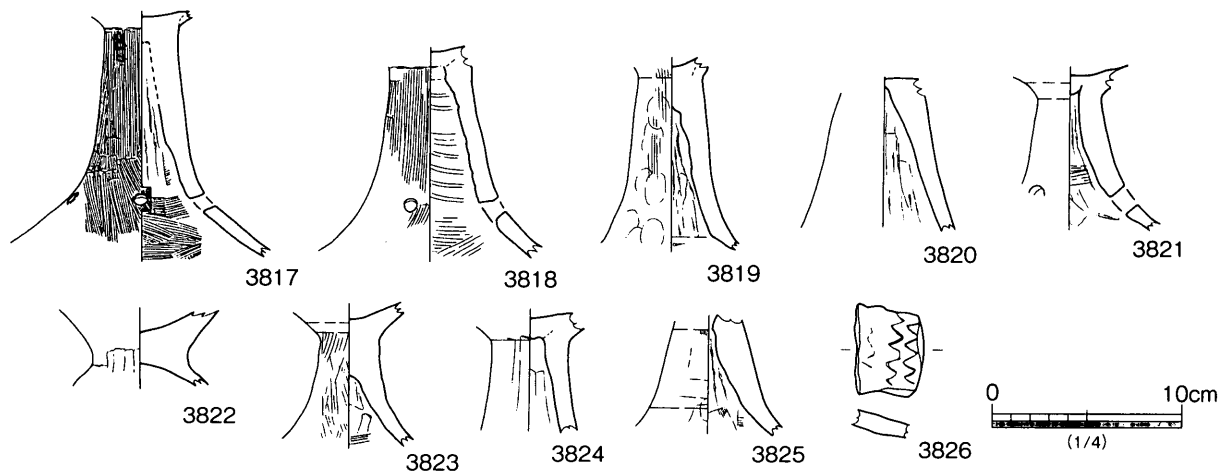
第 130 图 沟状遺構遺物実測図 70(3671 ~ 3716:SD56)



第 131 図 溝状遺構遺物実測図 71(3717 ~ 3762:SD56)



第 132 图 沟状遺構遺物実測図 72(3763 ~ 3816:SD56)



第 133 図 溝状遺構遺物実測図 73(3817 ~ 3826:SD56)

～ 3551 が「高杯 C」、3552 ~ 3555 が「高杯 B」、3557 ~ 3559 が「高杯 D」、3563 ~ 3575 が「高杯 E」である。3576 の外面の線刻画は、直線状の沈線文によって上下 2 段の鋸歯文が施文されて、画面が区分された後に、各鋸歯文の内部に同心円状の円弧文が施文されたものである。3597 ~ 3619 が「高杯 A」、3620 ~ 3625 が「高杯 B」、3626 ~ 3674 が「高杯 C」、3676 ~ 3716 が「高杯 D」、3717 ~ 3743 が「高杯 E」である。3826 は脚端部に近い部位で、稚拙なへら描き鋸歯文が認められる。

甑形土器は、完全な尖底か、丸底気味な尖底の器形が主体である。穿孔は大部分が単孔式であるが、3855 のような多孔式のものが存在する。また、穿孔の大きさは、直径が概ね 0.5 ~ 1.5cm の範囲内に収まるが、3837 のように 2cm 以上のものも混在する。

器台は、体部が直線状の形態を示す、円筒形の器形が主体である。口縁部は複合口縁の形態（3888、3890、3891）と、逆ハ字形の形態（3902）に分別される。

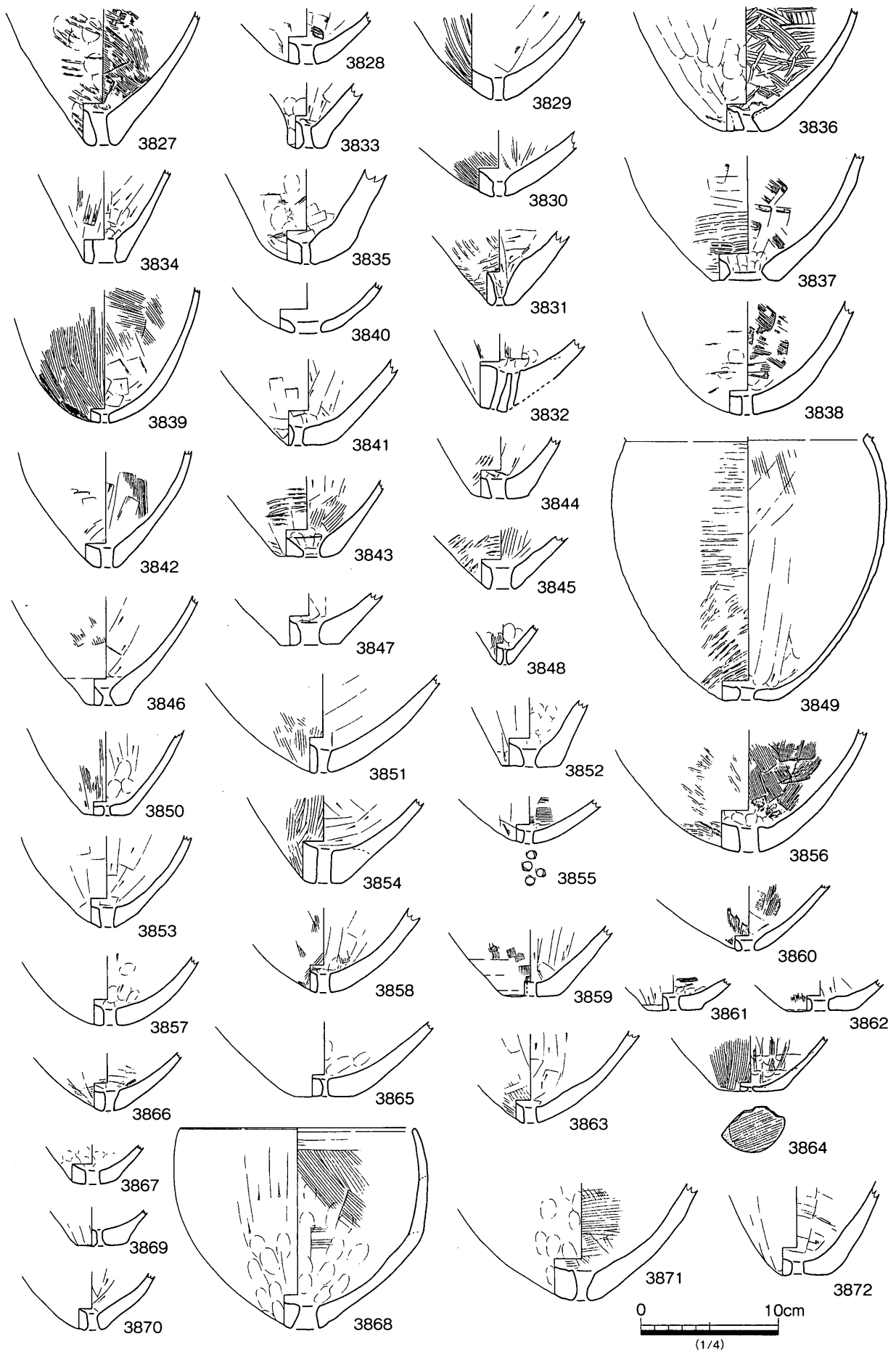
支脚は、円筒形の台形か、中空の鼓形の器形が主体であるが、2本の指状の突起が作り付けられた器形（3949）が混在する。前者は、現善通寺市域一帯で通有の器形であるが、後者は、三豊地域以西の地域での出土頻度が高い器形である。

3969 ~ 3983 は、壺、甕、鉢等の容器を、3984、3985 は蓋を模して製作されたものである。

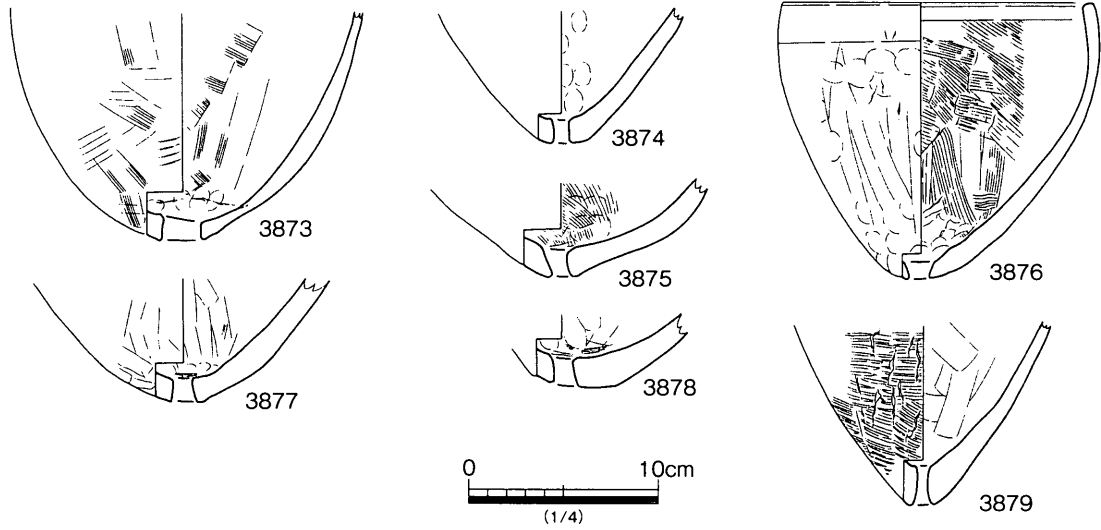
3993 は、先端部から基部にかけての中心軸上の稜線が明瞭な形態である。このため、横断面が菱形を示す。

3991 と 3992 については、イヌの臀部を模倣した土製品で、後足と尻尾が欠損しているものと判断した。しかしながら、頭部や四肢等の関連資料が未検出であることや、同一遺構内に、少量の指状の突起が作り付けられた支脚が包蔵されていたことから、支脚の可能性も残されている。

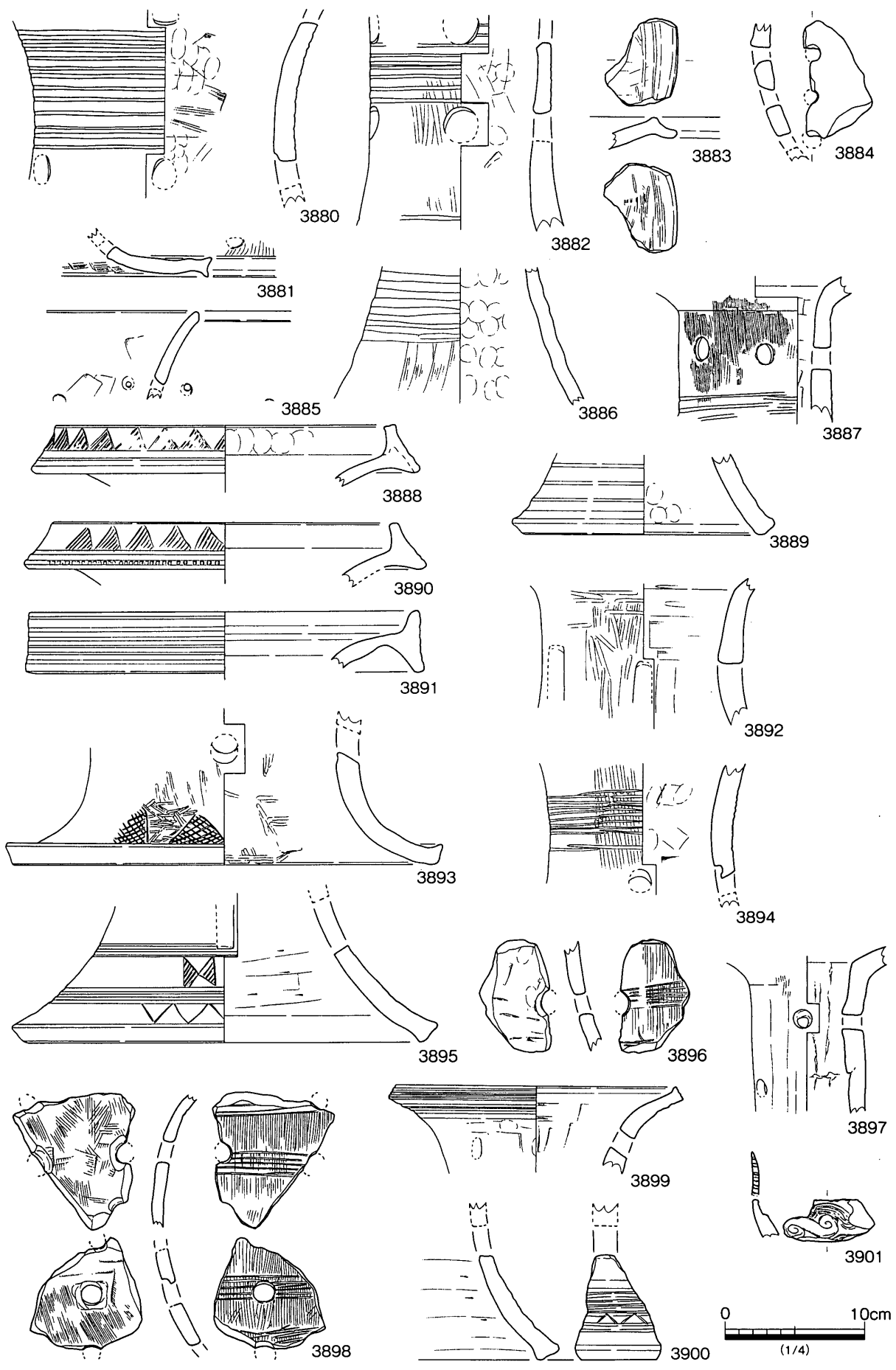
3996、3999、4000 は長軸方向に破断されており、破断面に使用痕が認められないことから、破断後に再利用された可能性は低い。4002 の右図に認められる斜め方向の使用痕が、本資料の使用時の入射角度を表すものと考えられる。



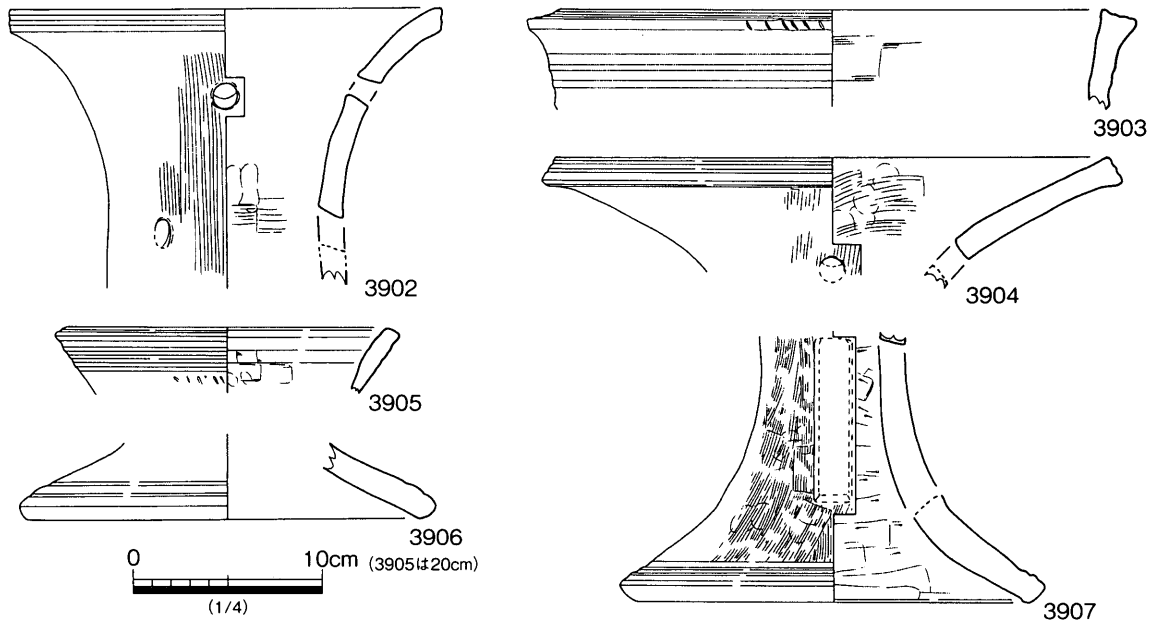
第 134 図 溝状遺構遺物実測図 74(3827 ~ 3872:SD56)



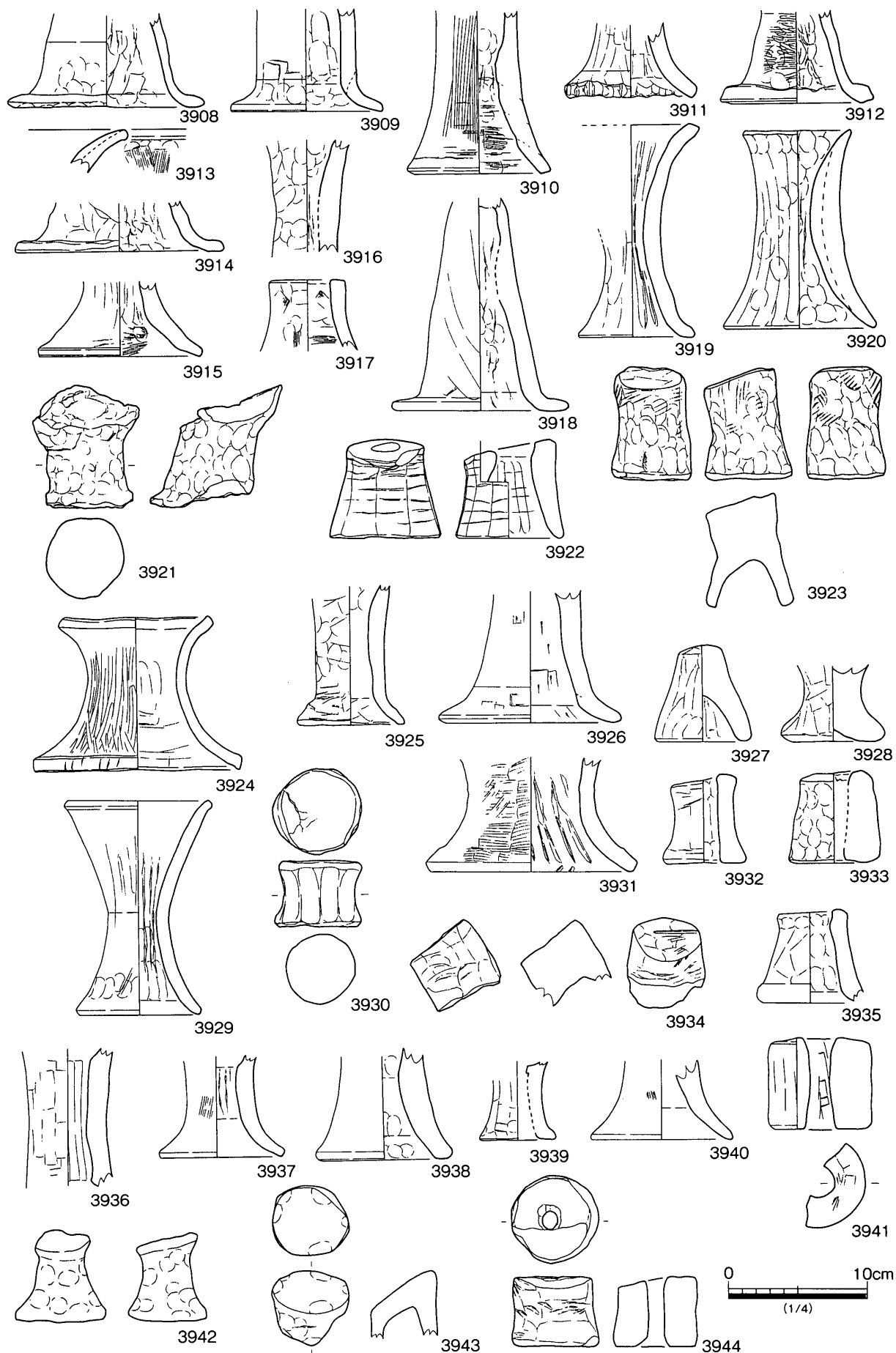
第 135 図 溝状遺構遺物実測図 75(3873 ~ 3879:SD56)



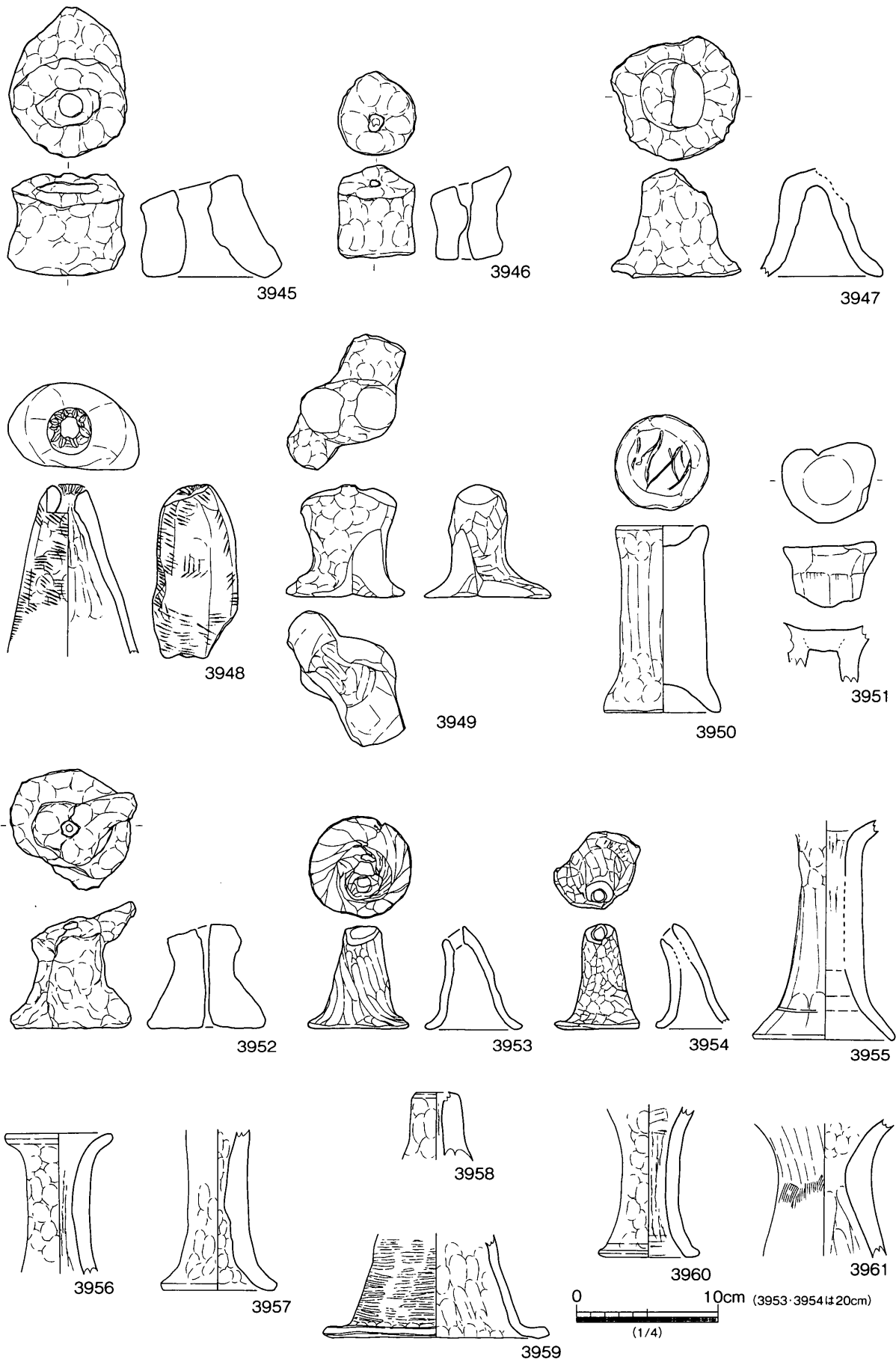
第 136 図 溝状遺構遺物実測図 76(3880 ~ 3901:SD56)



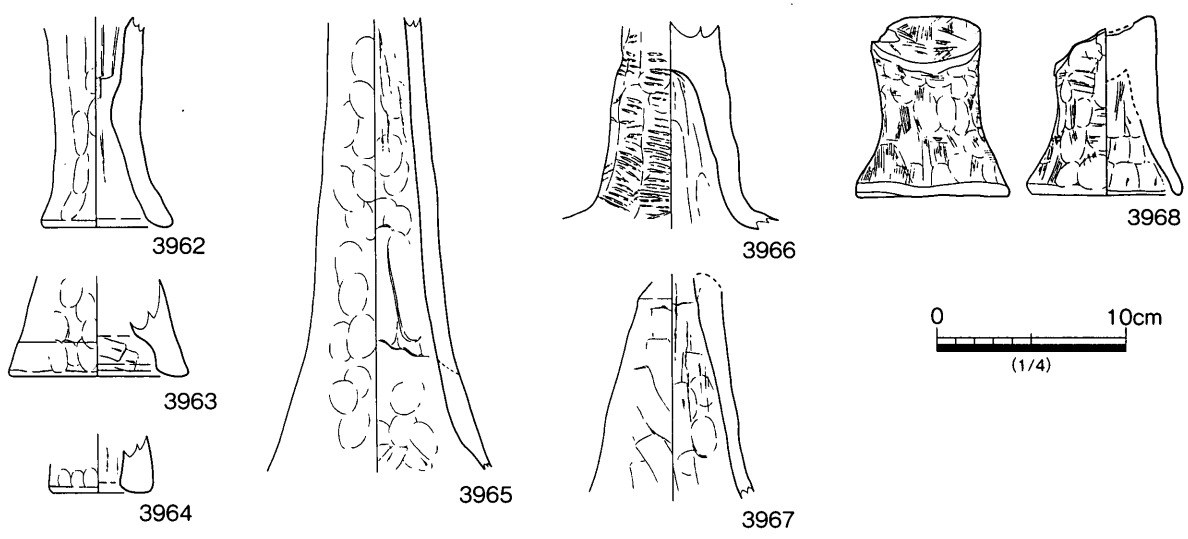
第 137 図 溝状遺構遺物実測図 77(3902 ~ 3907:SD56)



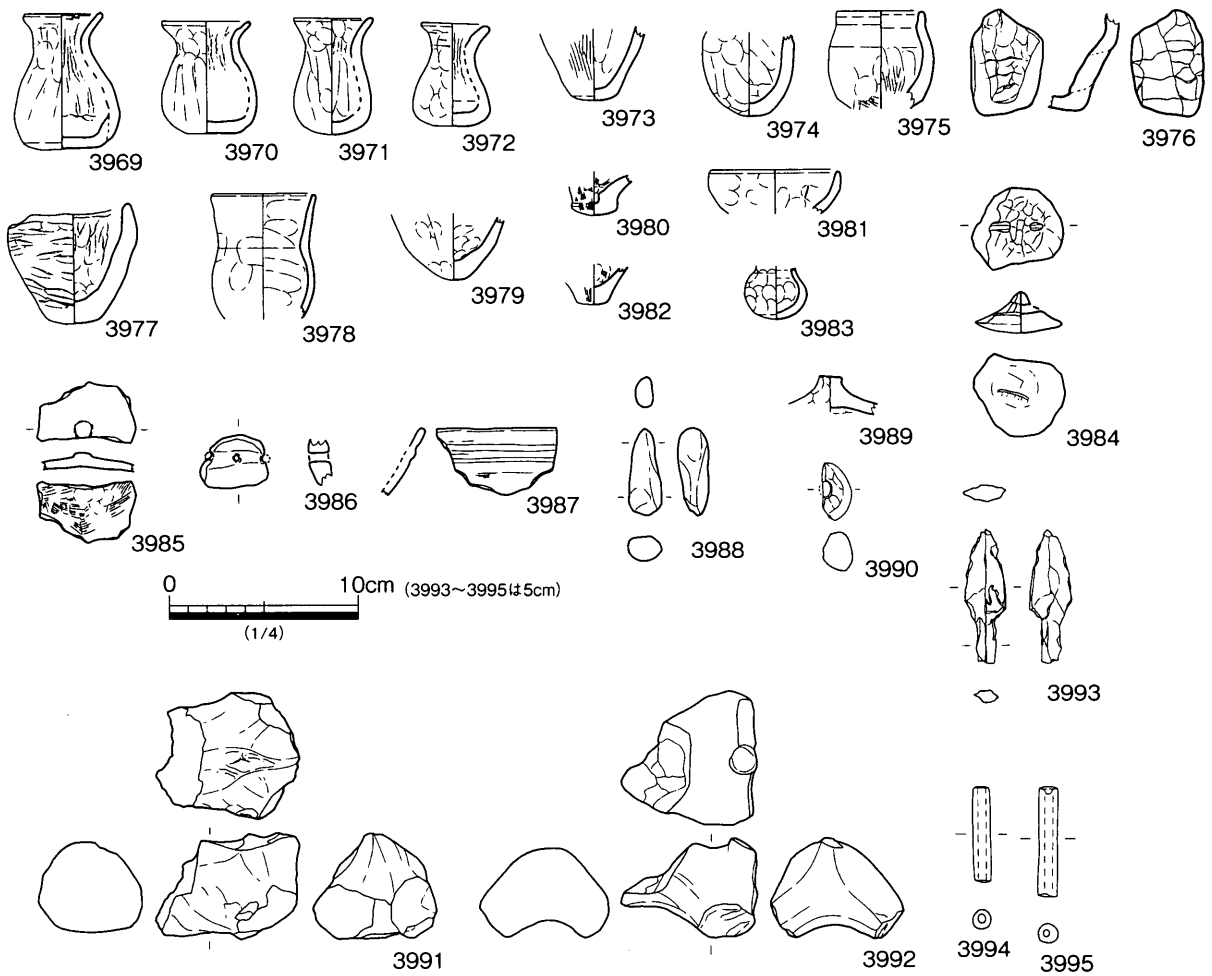
第 138 图 沟状遺構遺物実測图 78(3908 ~ 3944:SD56)



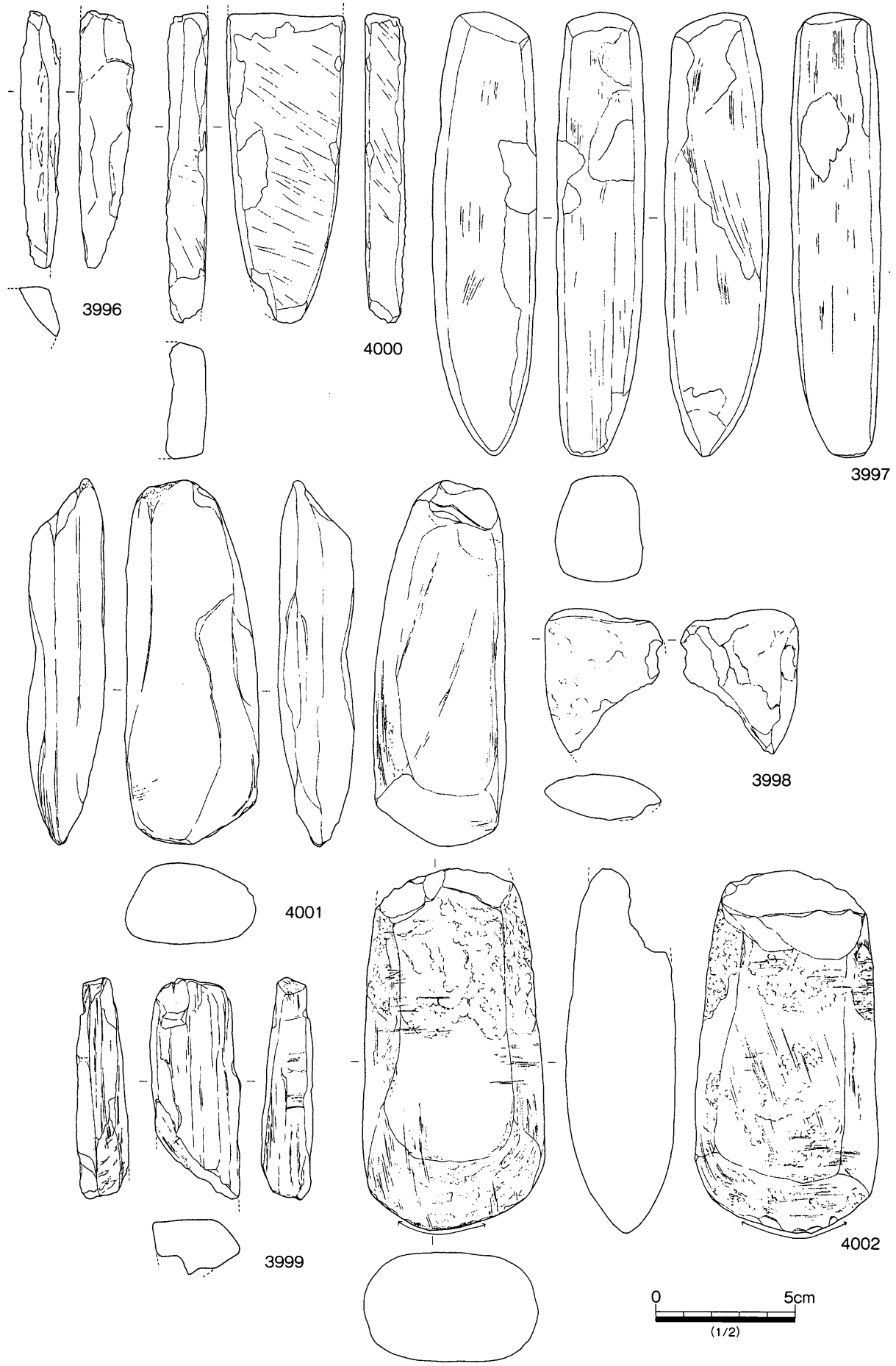
第 139 図 溝状遺構遺物実測図 79(3945 ~ 3961:SD56)



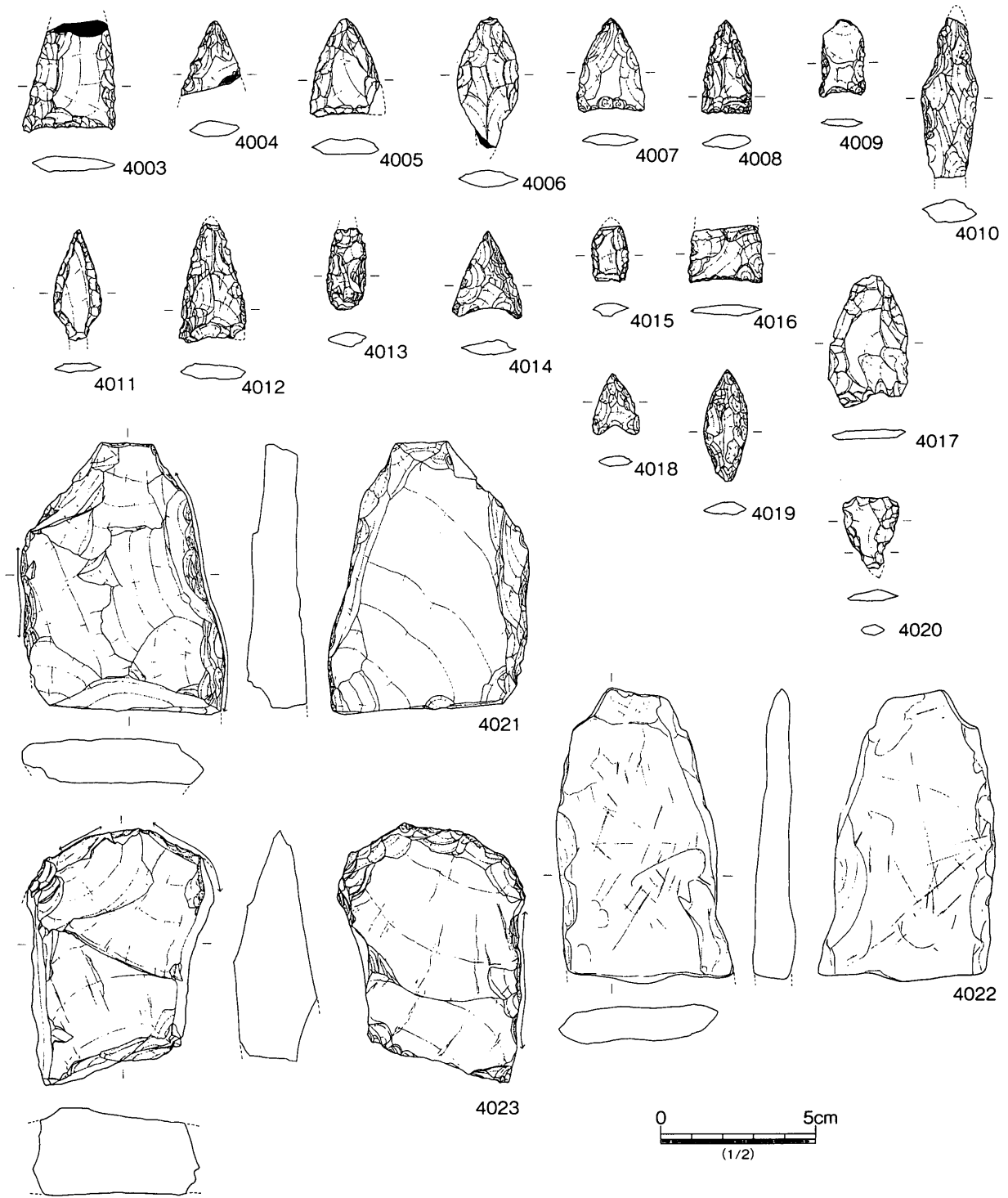
第 140 図 溝状遺構遺物実測図 80(3962 ~ 3968:SD56)



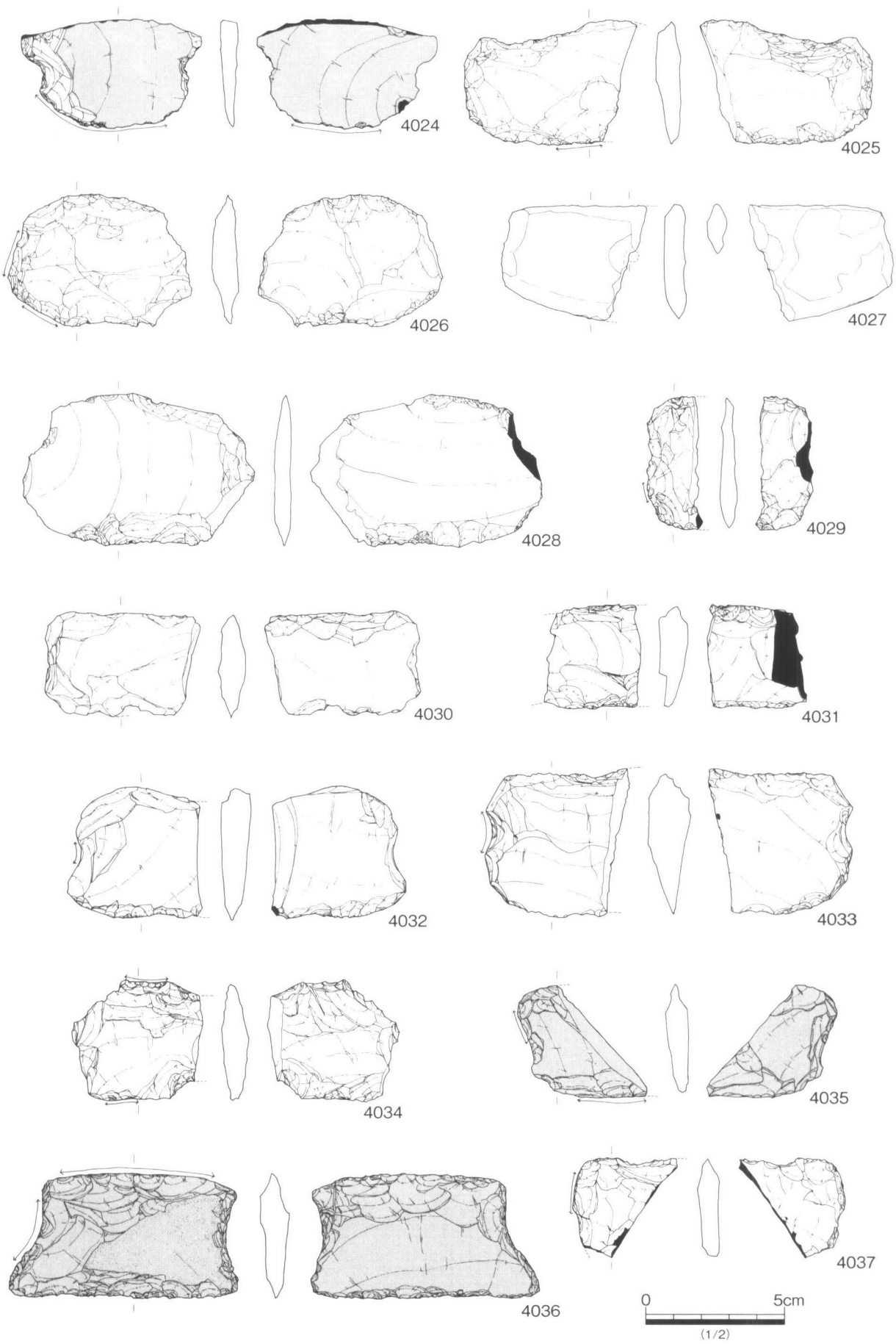
第 141 図 溝状遺構遺物実測図 81(3969 ~ 3995:SD56)



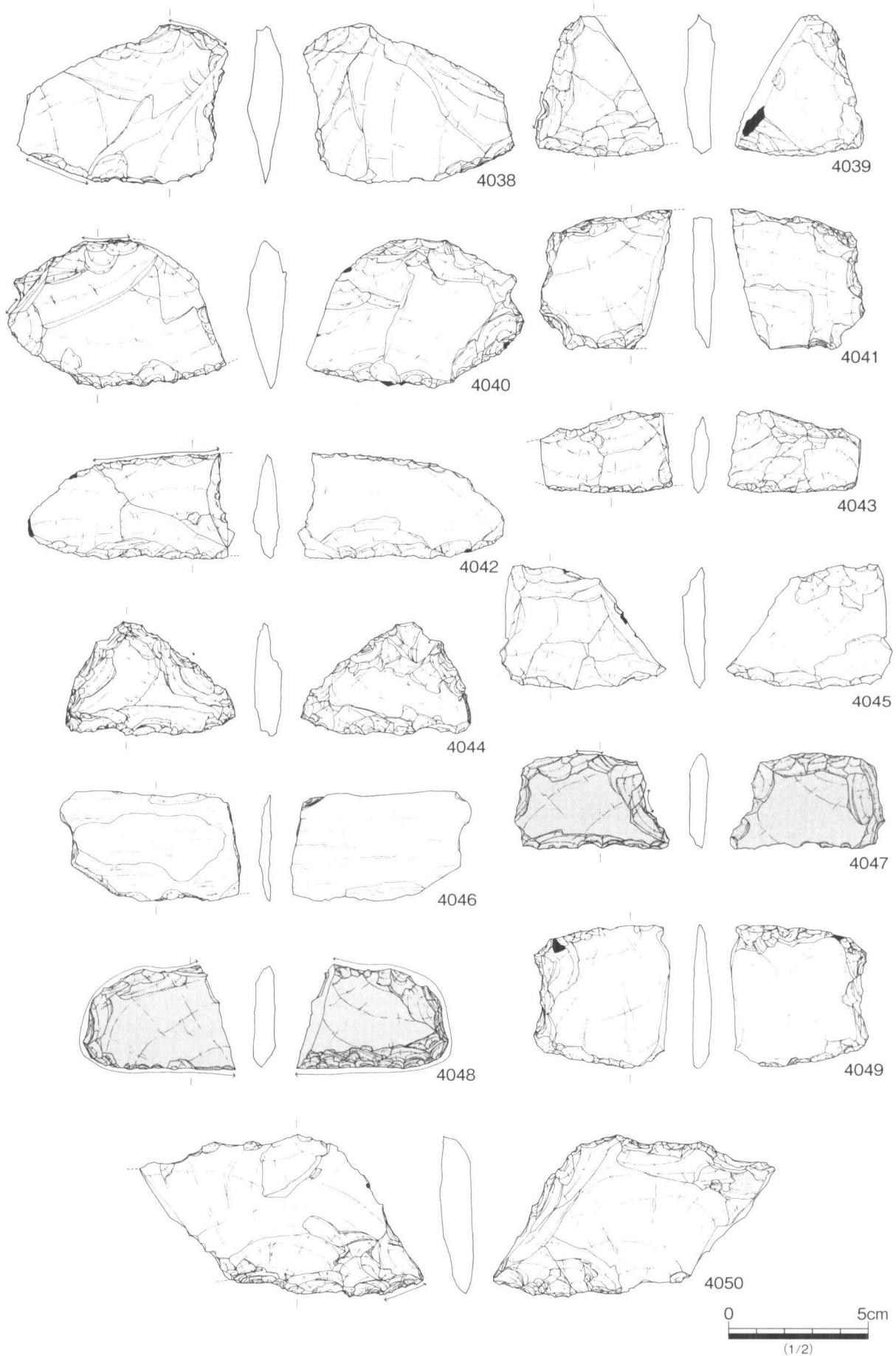
第 142 図 溝状遺構遺物実測図 82(3996 ~ 4002:SD56)



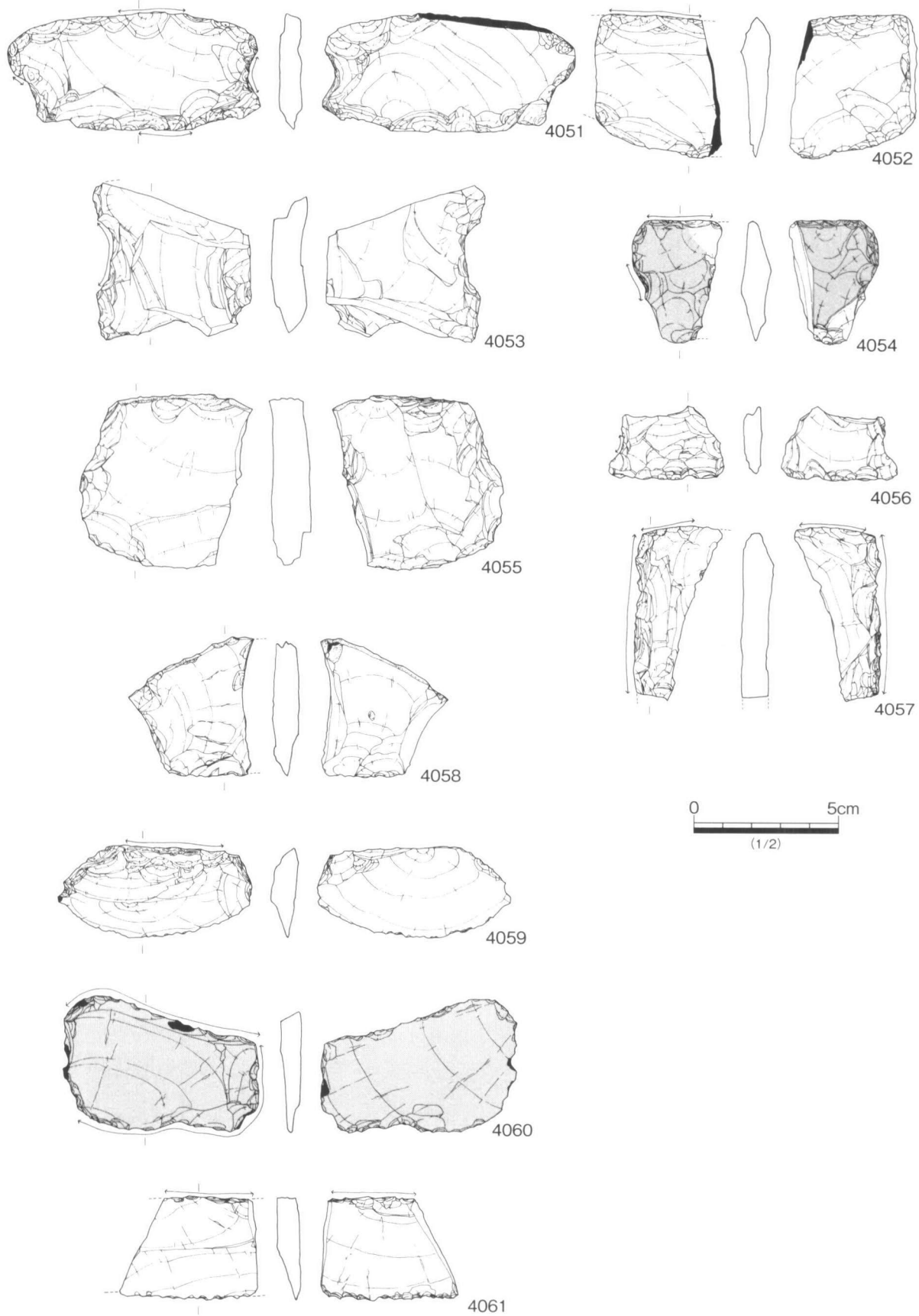
第 143 図 溝状遺構遺物実測図 83(4003 ~ 4023:SD56)



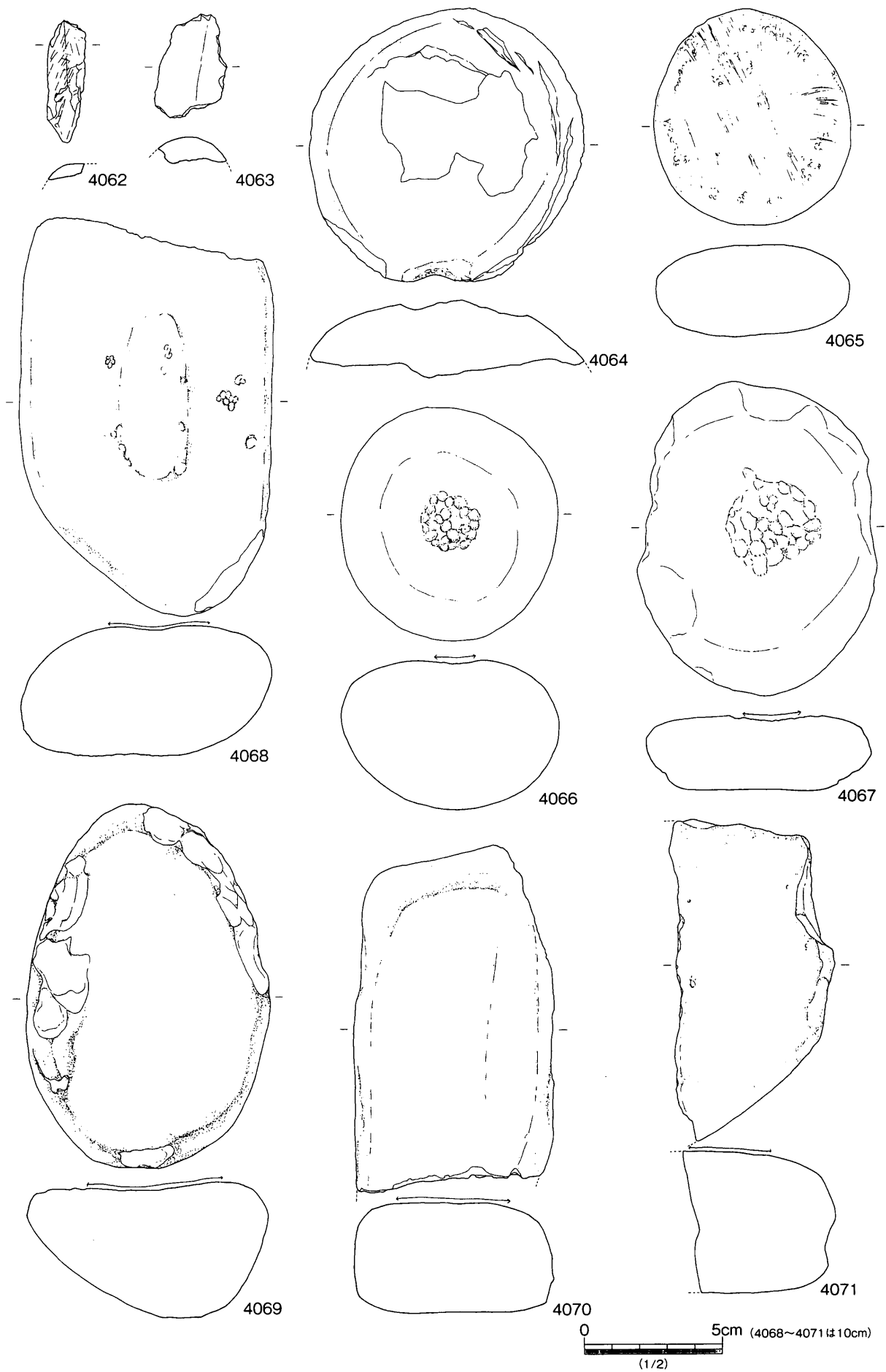
第 144 図 溝状遺構遺物実測図 84(4024 ~ 4037:SD56)



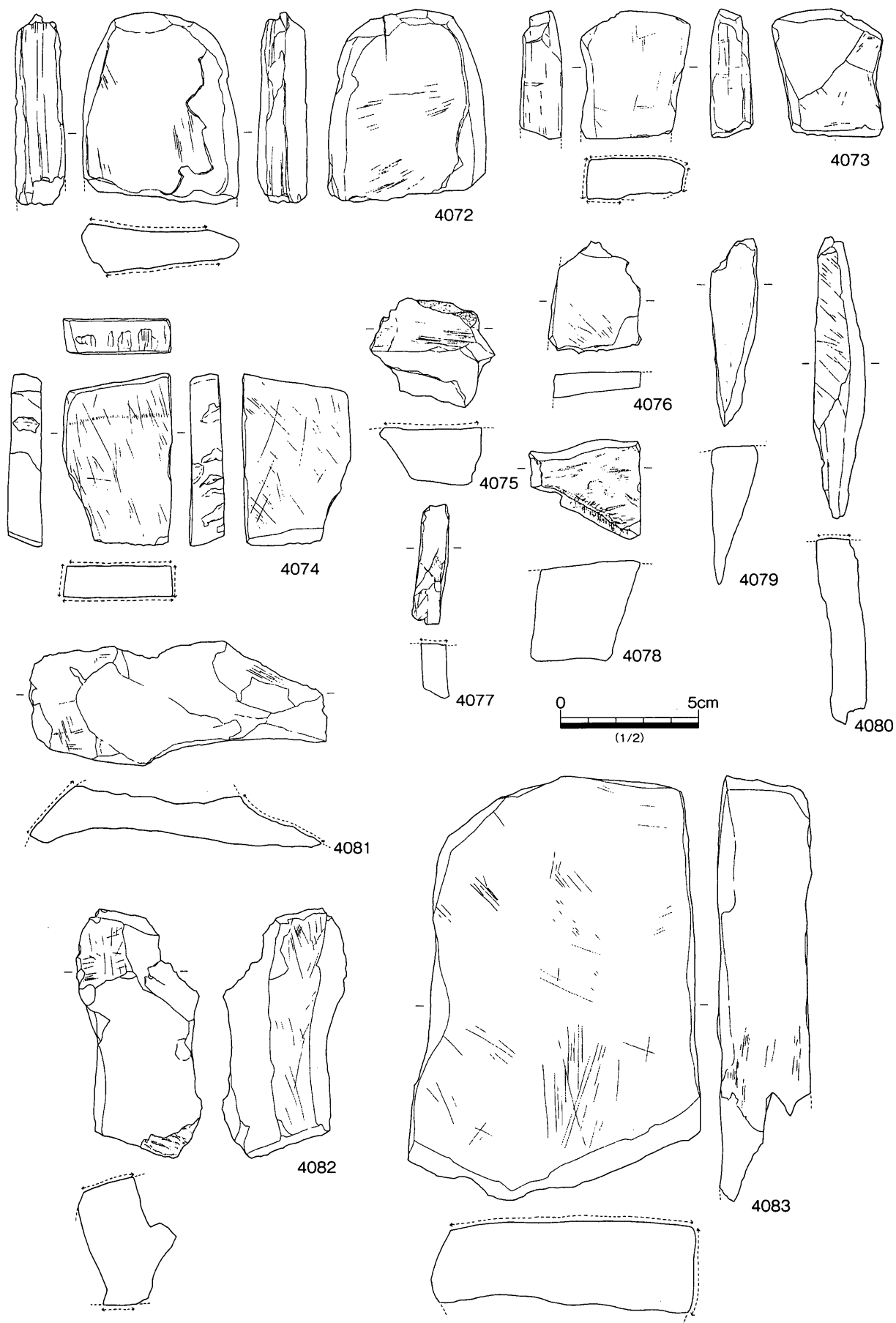
第 145 図 溝状遺構遺物実測図 85(4038 ~ 4050:SD56)



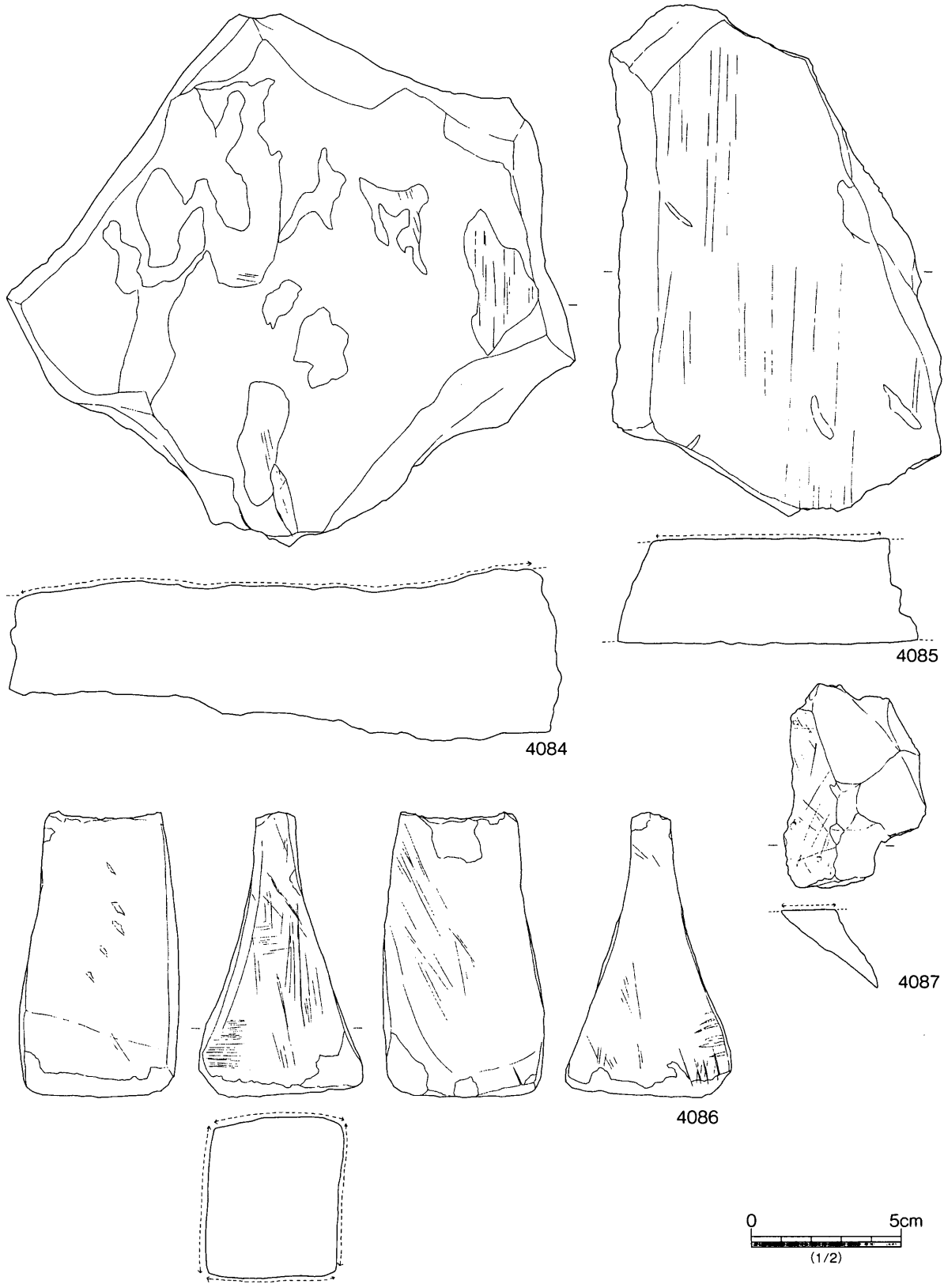
第 146 図 溝状遺構遺物実測図 86(4051 ~ 4061:SD56)



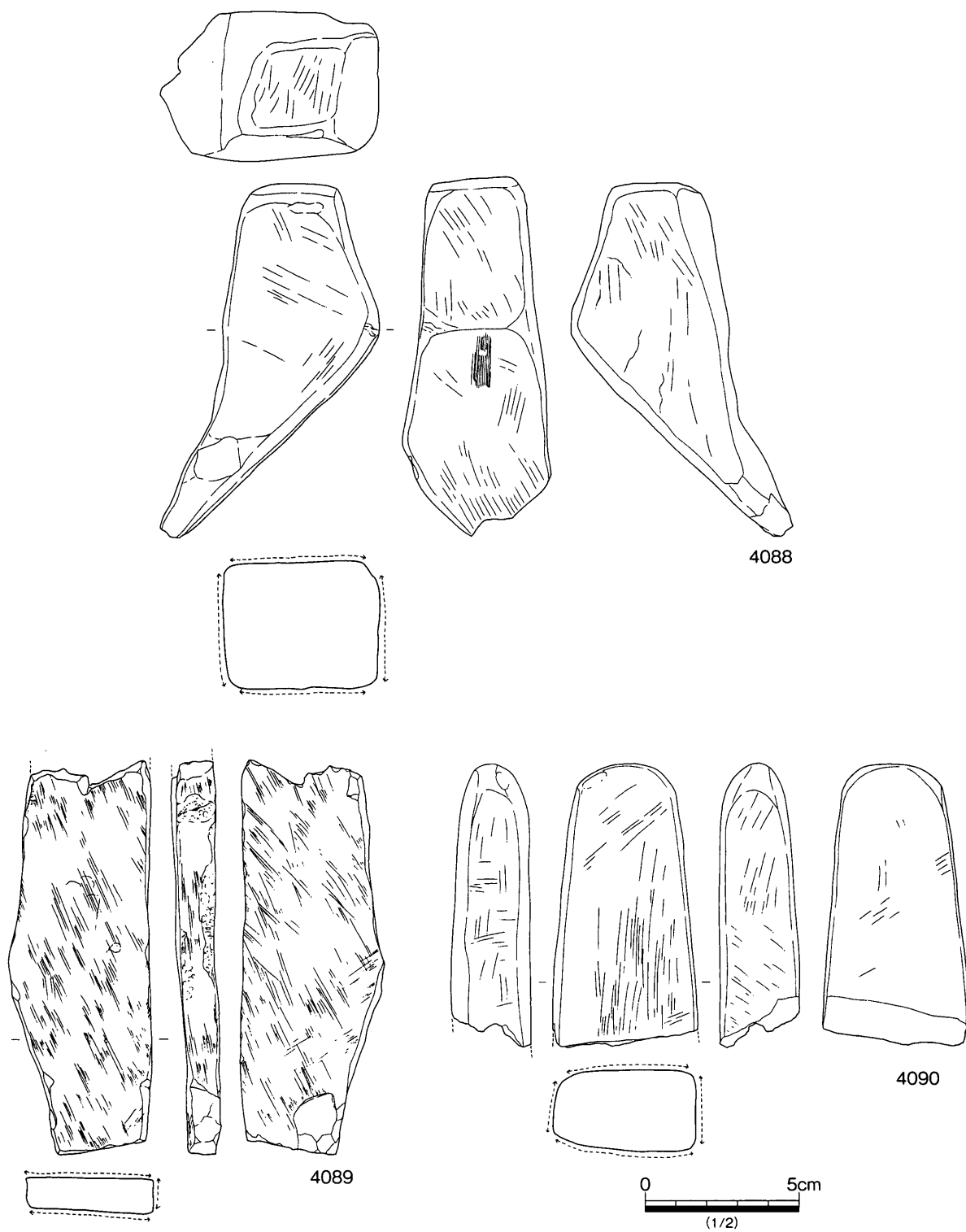
第 147 図 溝状遺構遺物実測図 87(4062 ~ 4071:SD56)



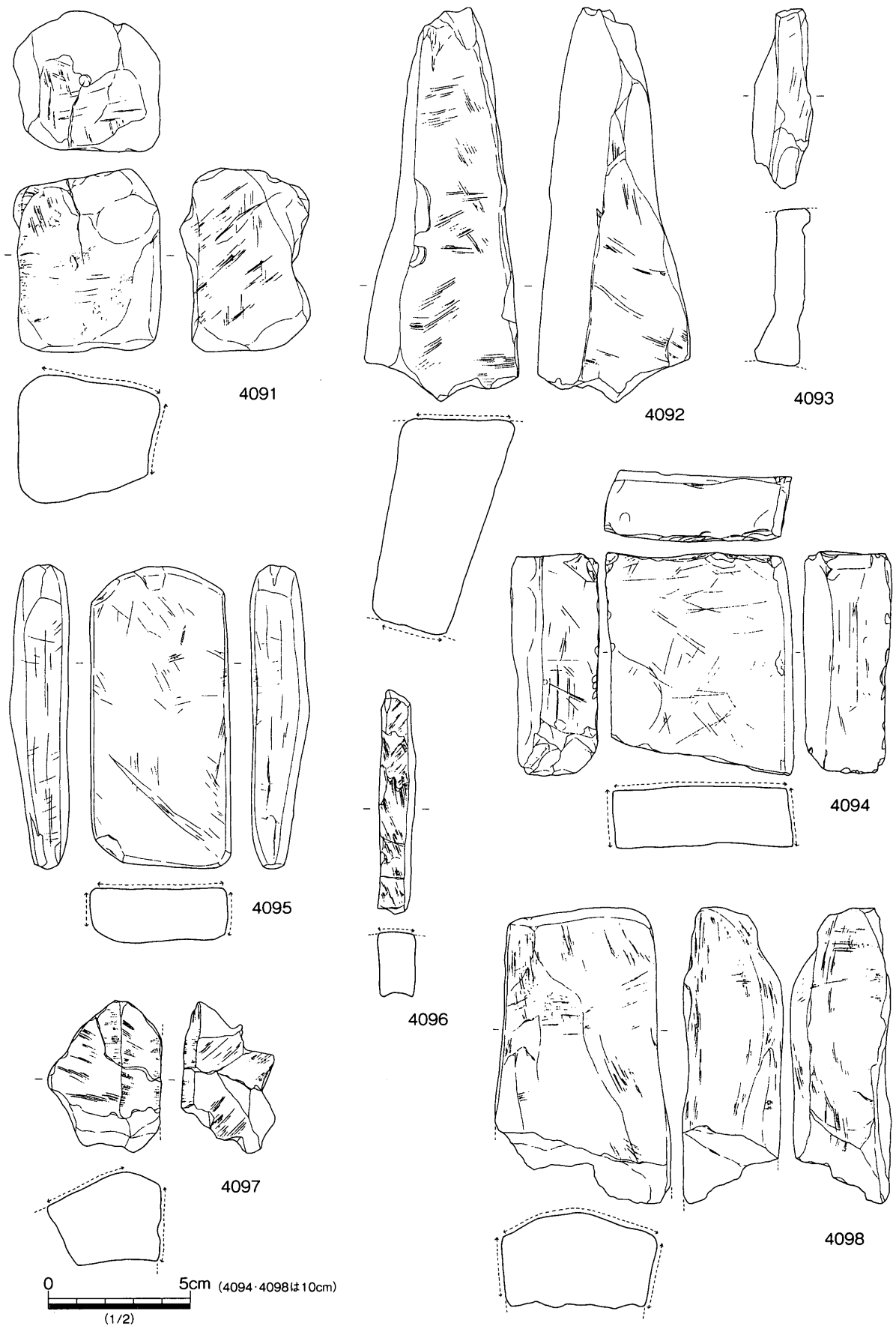
第 148 図 溝状遺構遺物実測図 88(4072 ~ 4083:SD56)



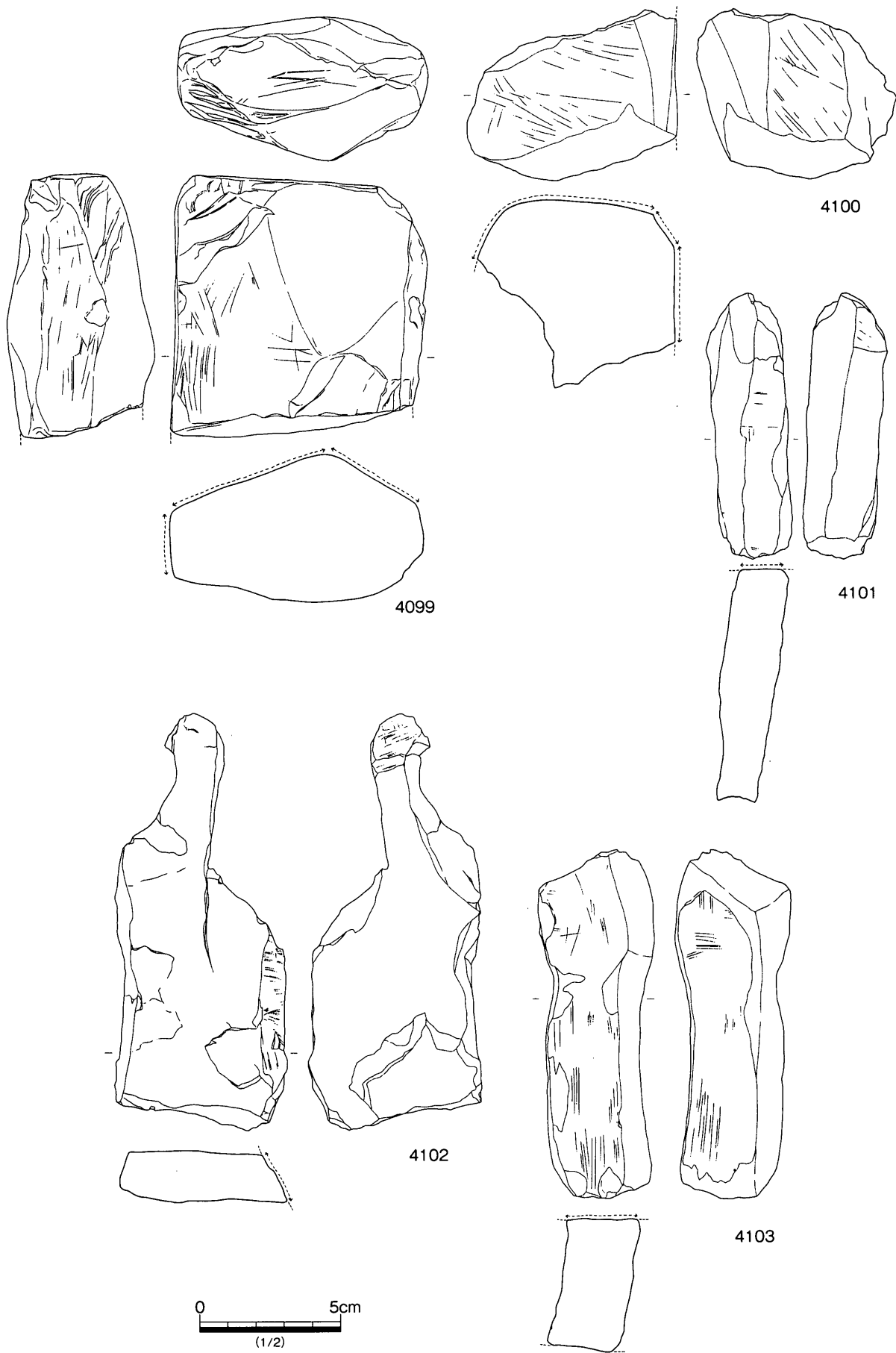
第 149 図 溝状遺構遺物実測図 89(4084 ~ 4087:SD56)



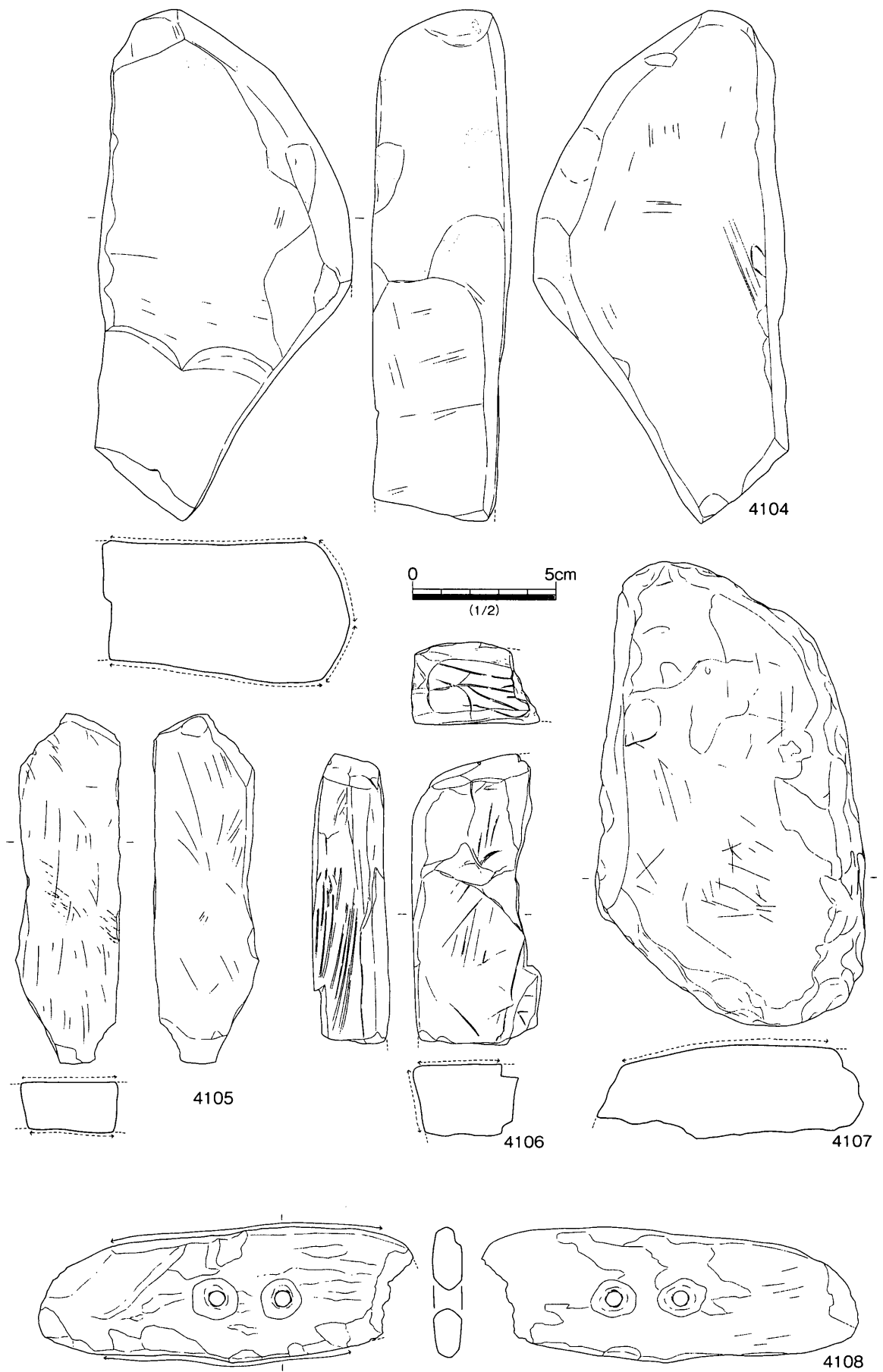
第 150 図 溝状遺構遺物実測図 90(4088 ~ 4090:SD56)



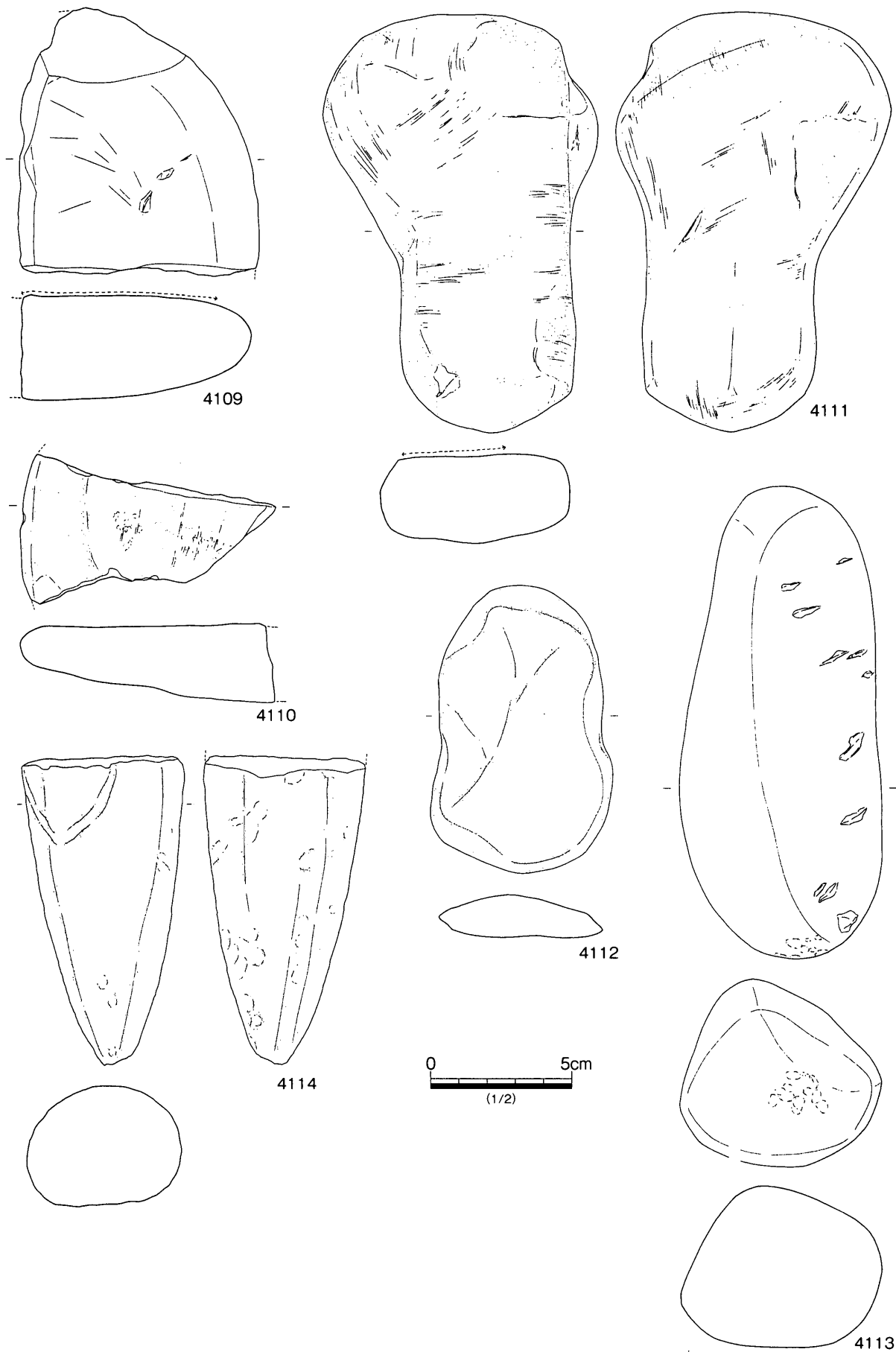
第 151 図 溝状遺構遺物実測図 91(4091 ~ 4098:SD56)



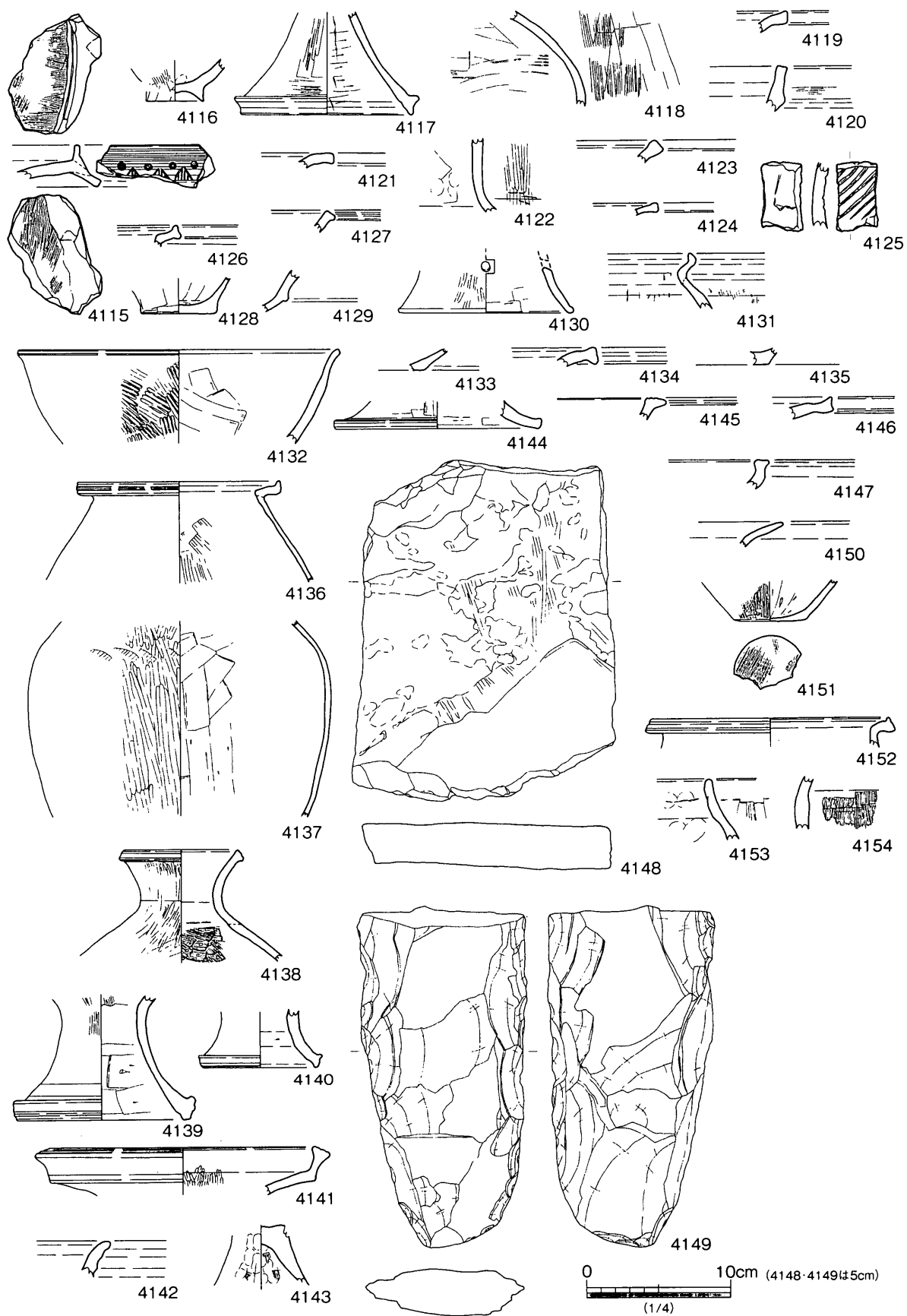
第 152 図 溝状遺構遺物実測図 92(4099 ~ 4103:SD56)



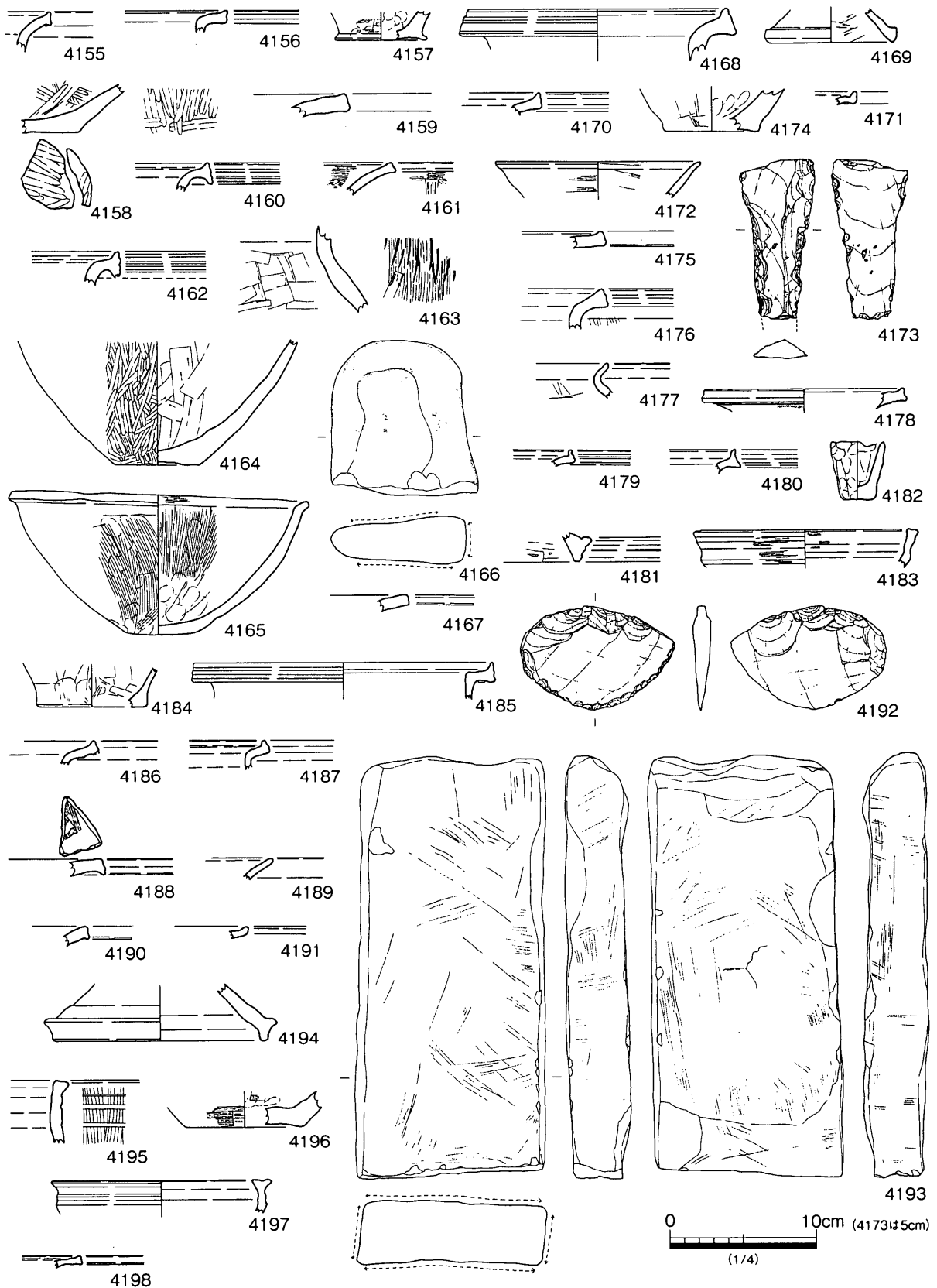
第 153 図 溝状遺構遺物実測図 93(4104 ~ 4108:SD56)



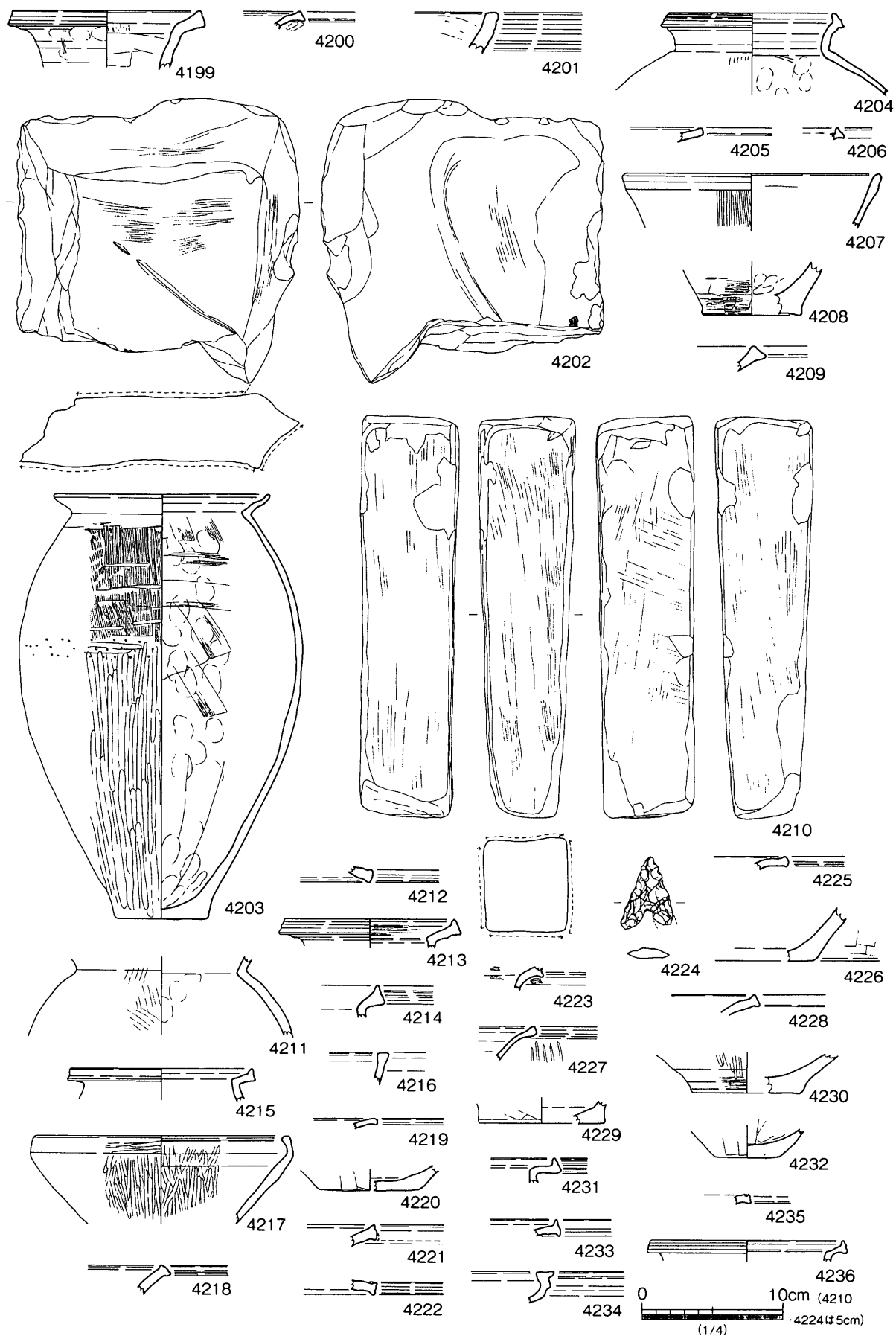
第 154 図 溝状遺構遺物実測図 94(4109 ~ 4114:SD56)



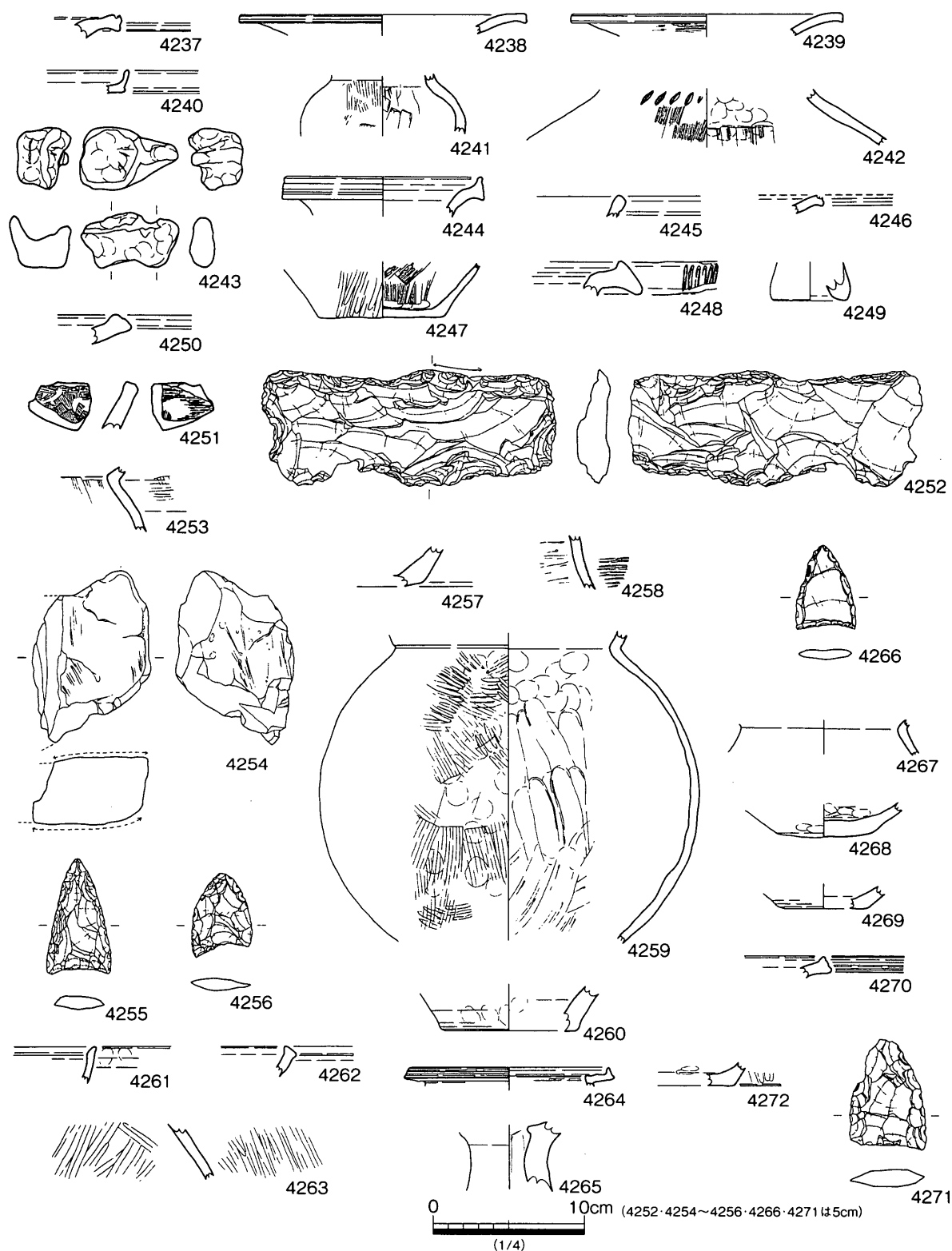
第 155 図 柱穴跡遺物実測図 1 (4115・4116:SP01,4117:SP474,4118・4119:SP09,4120:SP10,4121:
 SP14,4122・4123:SP23,4124:SP27,4125:SP34,4126:SP35,4127:SP39,4128:SP43,4129:SP45,4130:SP46,4131:
 SP48,4132:SP51,4133:SP52,4134:SP54,4135:SP63,4136 ~ 4140:SP69,4141・4142:SP71,4143:SP76,4144:
 SP84,4145:SP89,4146・4147:SP90,4148・4149:SP100,4150・4151:SP106,4152:SP586,4153:SP126,4154:SP136)



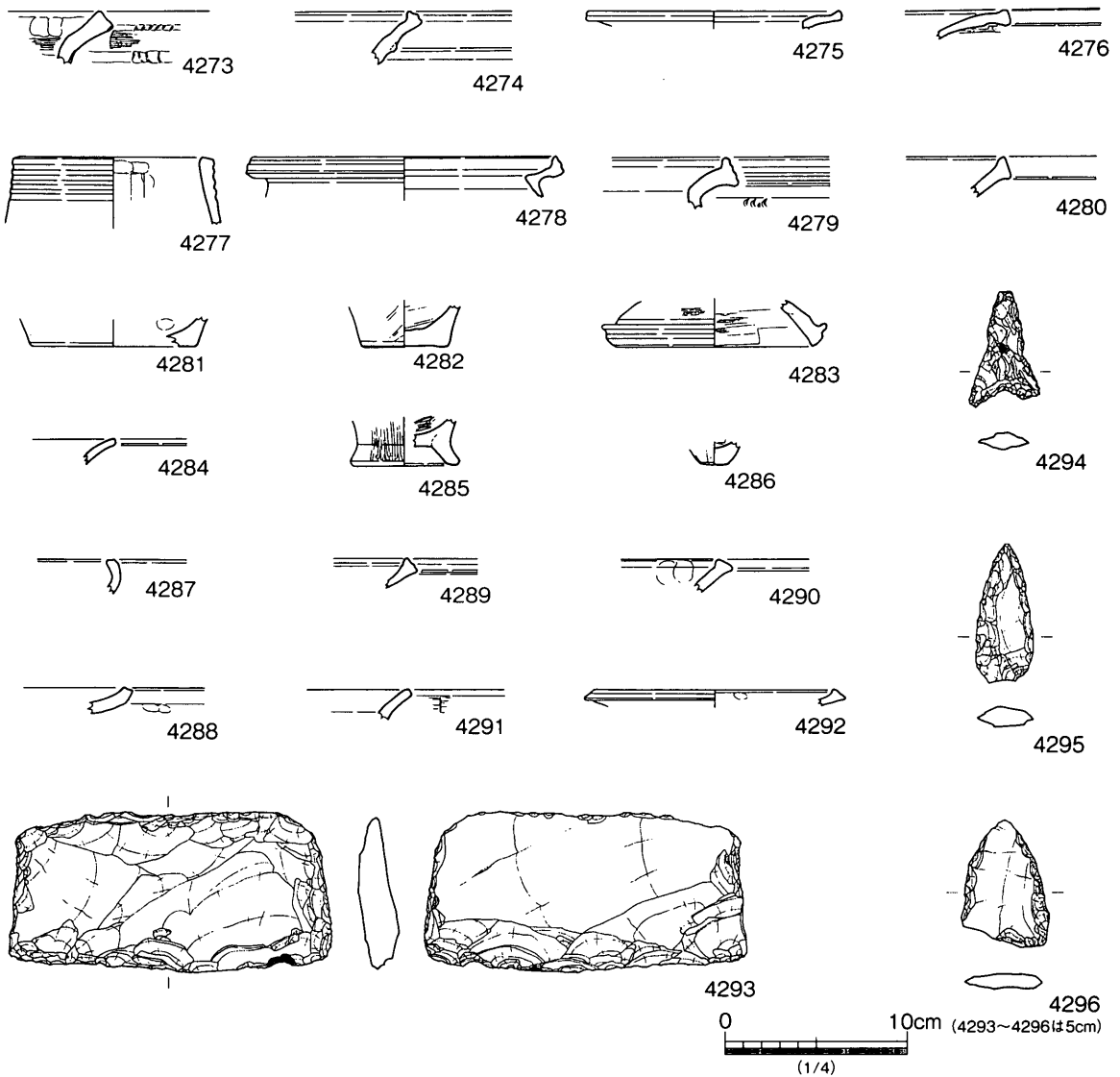
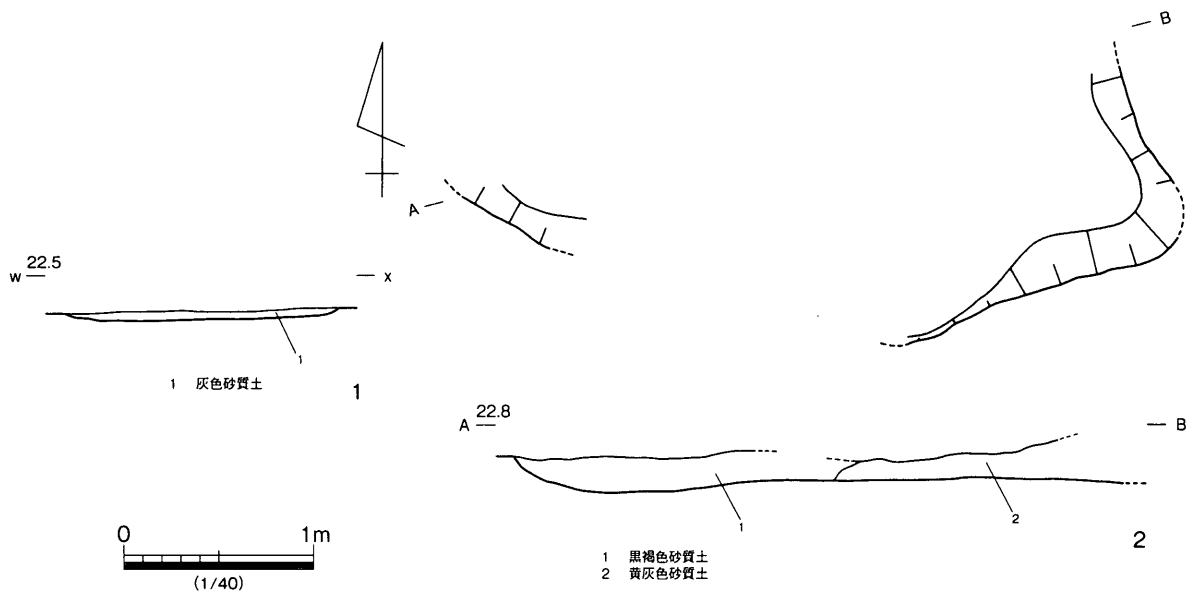
第 156 図 柱穴跡遺物実測図 2 (4155:SP156,4156:SP159,4157:SP160,4158:SP163,4159:SP169,4160:
 SP170,4161:SP171,4162 ~ 4166:SP172,4167:SP181,4168:SP196,4169:SP217,4170:SP222,4171:SP720,4172:
 SP730,4173:SP471,4174:SP731,4175:SP229,4176·4177:SP237,4178:SP243,4179 ~ 4181:SP247,4182:
 SP248,4183:SP251,4184:SP252,4185:SP256,4186 ~ 4189:SP766,4190:SP767,4191:SP260,4192·4193:
 SP262,4194:SP265,4195 ~ 4197:SP267,4198:SP272)



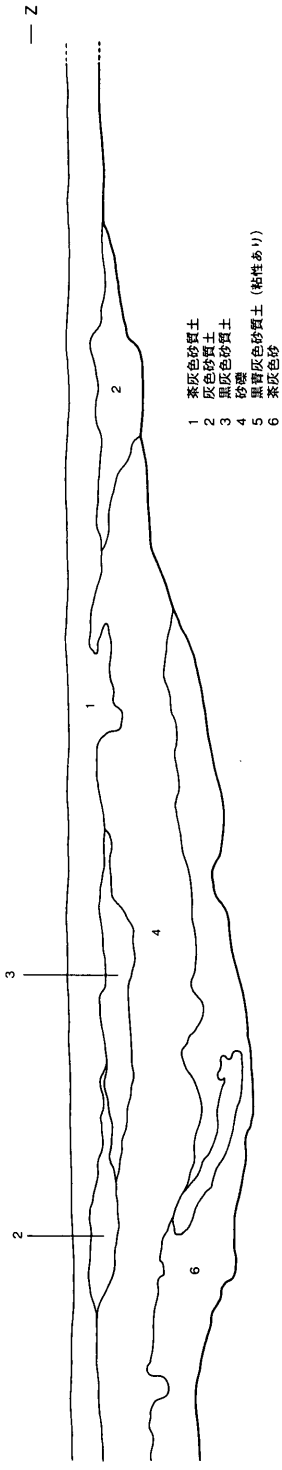
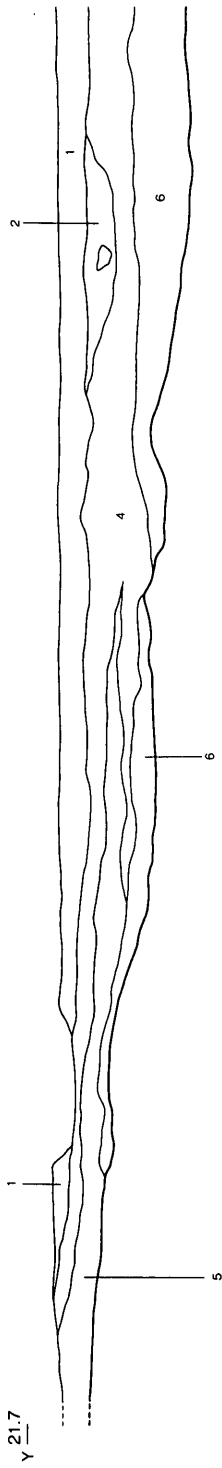
第 157 図 柱穴跡遺物実測図 3 (4199 ~ 4202:SP274,4203:SP276,4204:SP278,4205:SP281,4206·4207:SP291,4208 ~ 4210:
 SP780,4211:SP292,4212:SP293,4213 ~ 4215:SP296,4216:SP297,4217:SP302,4218:SP303,4219·4220:SP304,4221·4222:SP308,4223:
 SP315,4224:SP316,4225·4226:SP318,4227·4228:SP328,4229:SP333,4230·4231:SP337,4232:SP338,4233·4234:SP341,4235·4236:SP342)



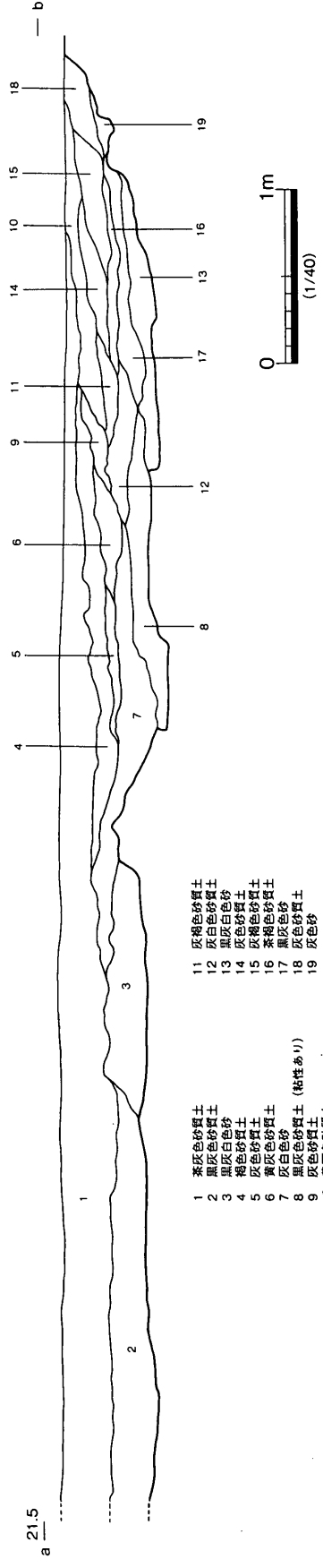
第 158 図 柱穴跡遺物実測図 4 (4237:SP357,4238:SP36,4239 ~ 4241:SP363,4242·4243:SP365,4244 ~ 4246:SP378,4247:SP380,4248:SP394,4249:SP395,4250:SP870,4251:SP397,4252:SP398,4253·4254:SP403,4255: SP411,4256:SP911,4257:SP412,4258:SP416,4259:SP421,4260:SP425,4261:SP1004,4262 ~ 4265:SP429,4266: SP1015,4267:SP445,4268·4269:SP1054,4270:SP454,4271:SP463,4272:SP467)



第159図 不明遺構遺構実測図1(1: SX01, 2: SX02)・遺物実測図1(4273~4278・4283・4286・4289・4294: SX02, 4279~4282・4284・4285・4287・4288・4293・4295: SX05, 4290: SX06, 4291・4292: SX07, 4296: SX10)



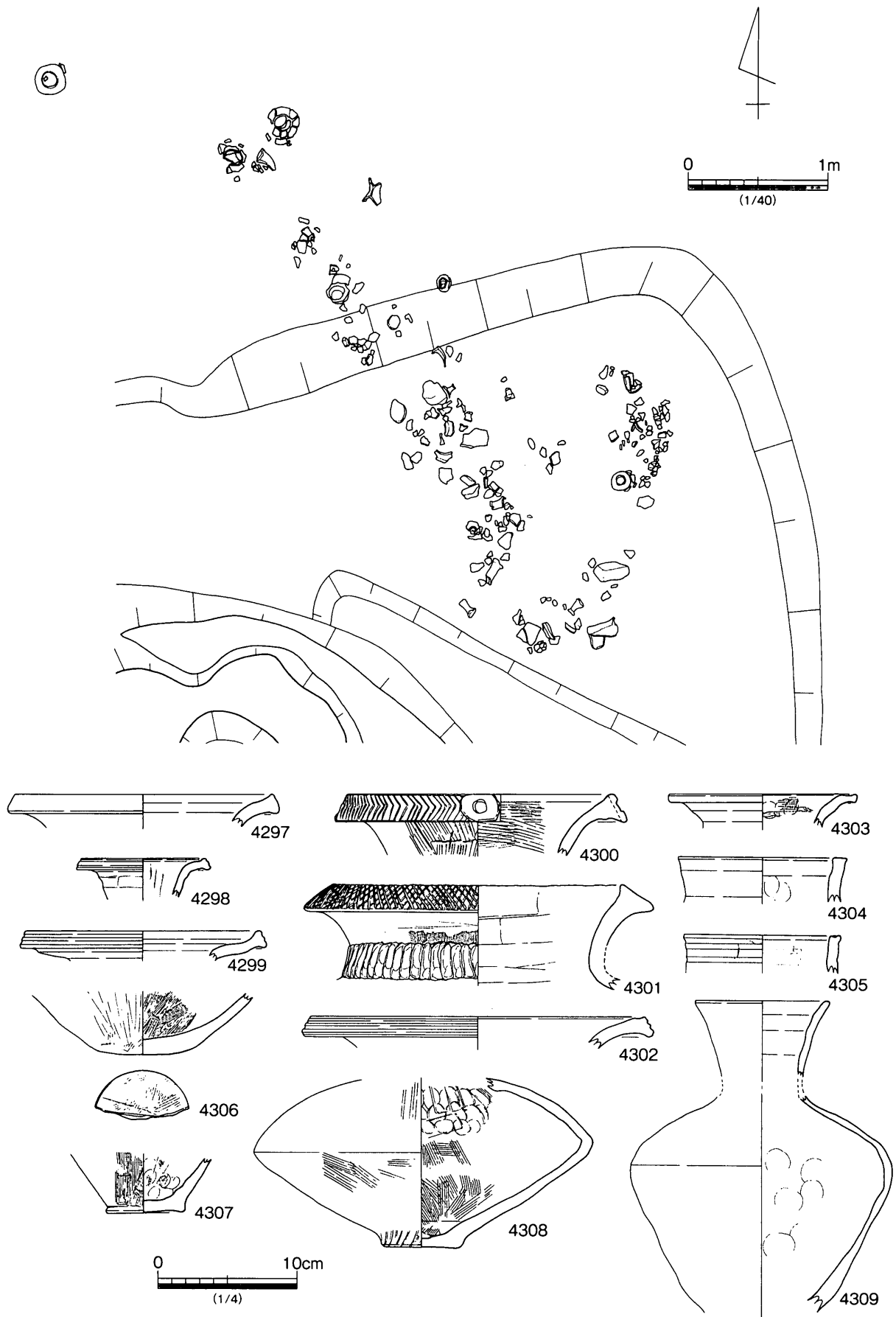
- 1 茶灰色砂質土
- 2 灰色砂質土
- 3 黒灰色砂質土
- 4 砂
- 5 黒褐色砂質土 (粘性あり)
- 6 茶灰色砂



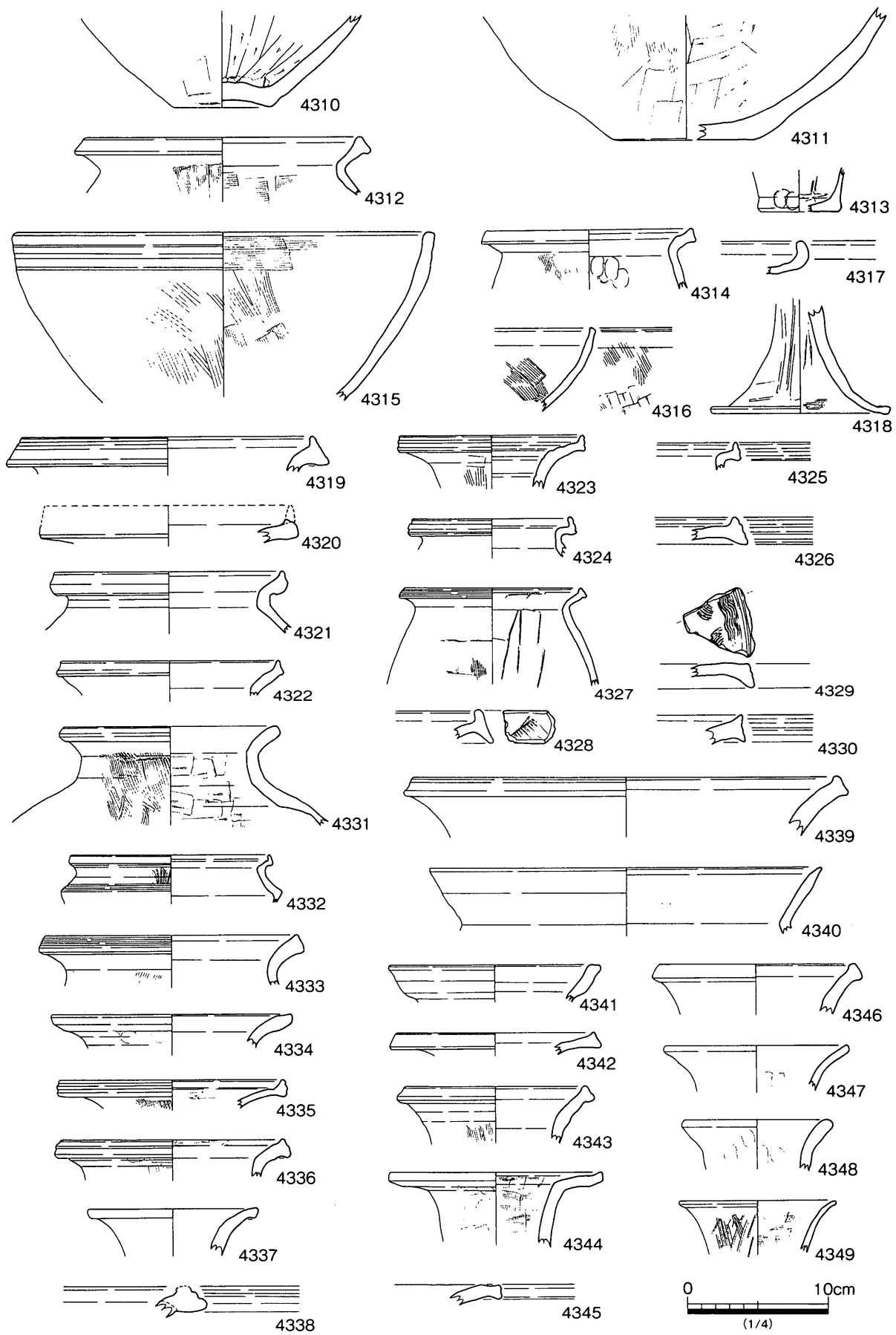
- 1 茶灰色砂質土
- 2 黒灰色砂質土
- 3 黒灰色砂
- 4 褐色砂質土
- 5 灰色砂質土
- 6 黒褐色砂質土
- 7 灰白色砂
- 8 灰白色砂質土 (粘性あり)
- 9 灰白色砂質土
- 10 灰白色砂質土
- 11 灰褐色砂質土
- 12 灰褐色砂質土
- 13 灰褐色砂
- 14 灰褐色砂質土
- 15 灰褐色砂質土
- 16 灰褐色砂質土
- 17 灰褐色砂
- 18 灰褐色砂質土
- 19 灰褐色砂



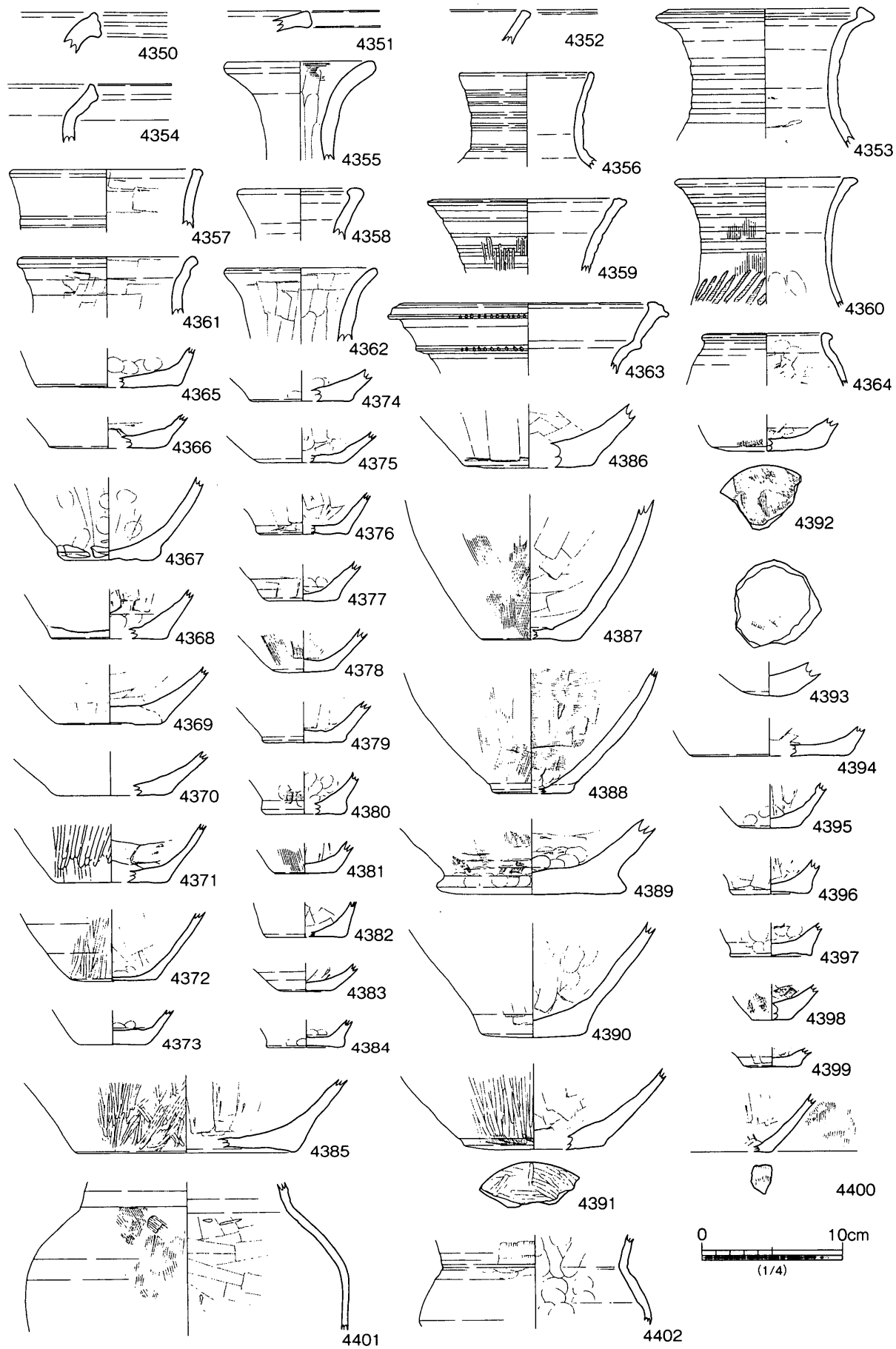
第 160 図 自然河川跡土層序美測図 (SR01)



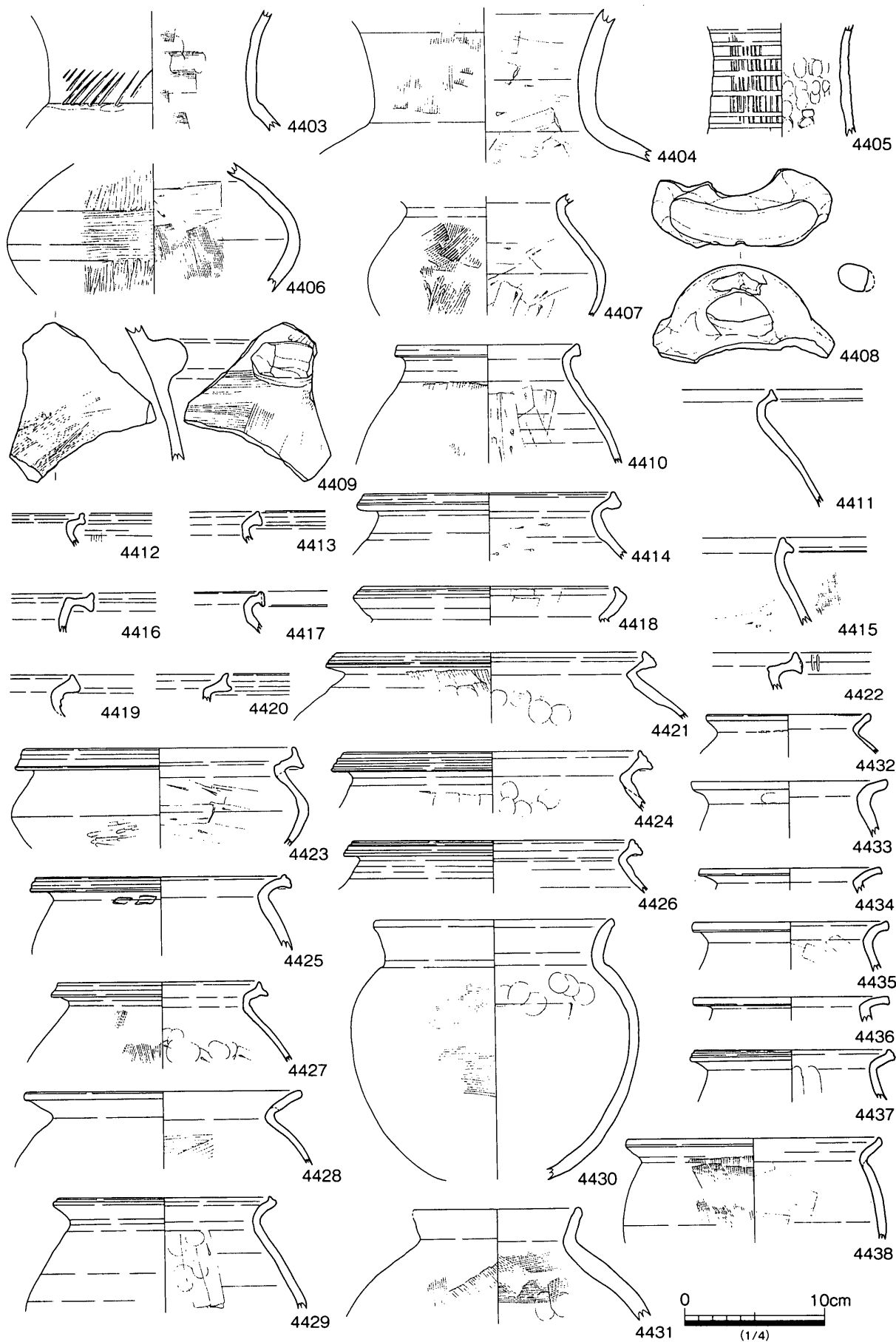
第 161 図 自然河川跡遺構実測図 1 (SR01)・遺物実測図 1 (4297 ~ 4309:SR01)



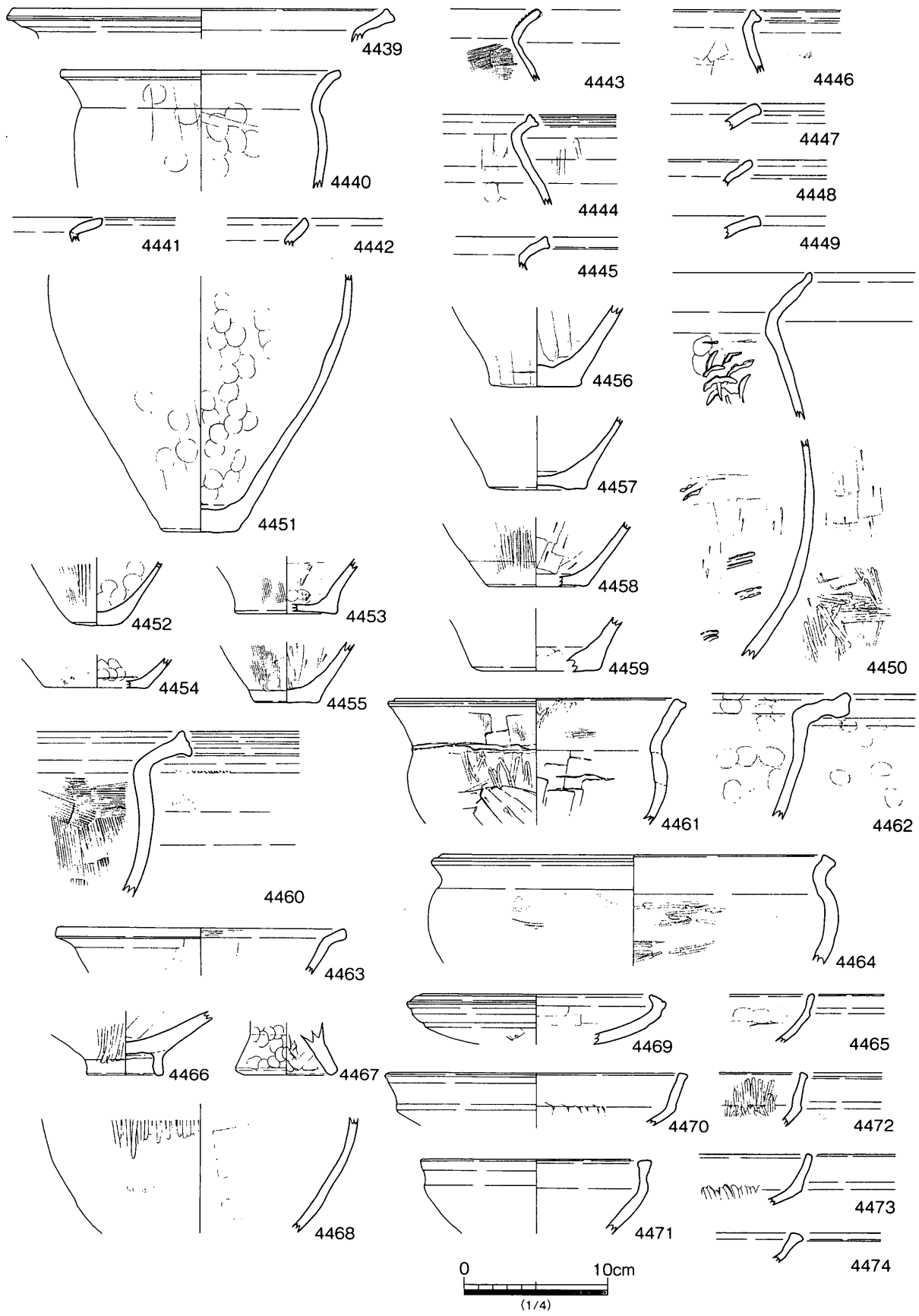
第 162 図 自然河川跡遺物実測図 2 (4310 ~ 4349:SR01)



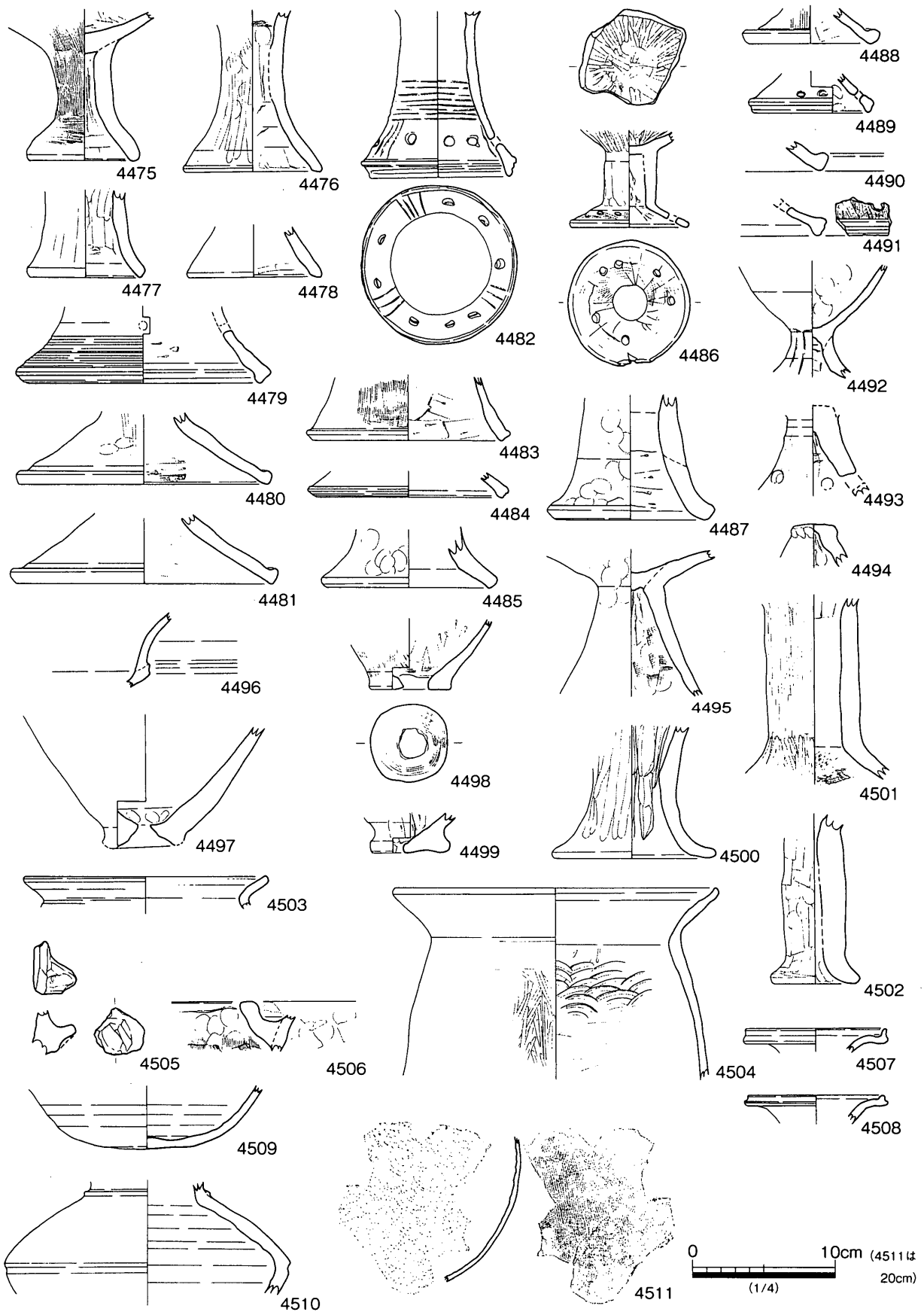
第 163 図 自然河川跡遺物実測図 3 (4350 ~ 4402:SR01)



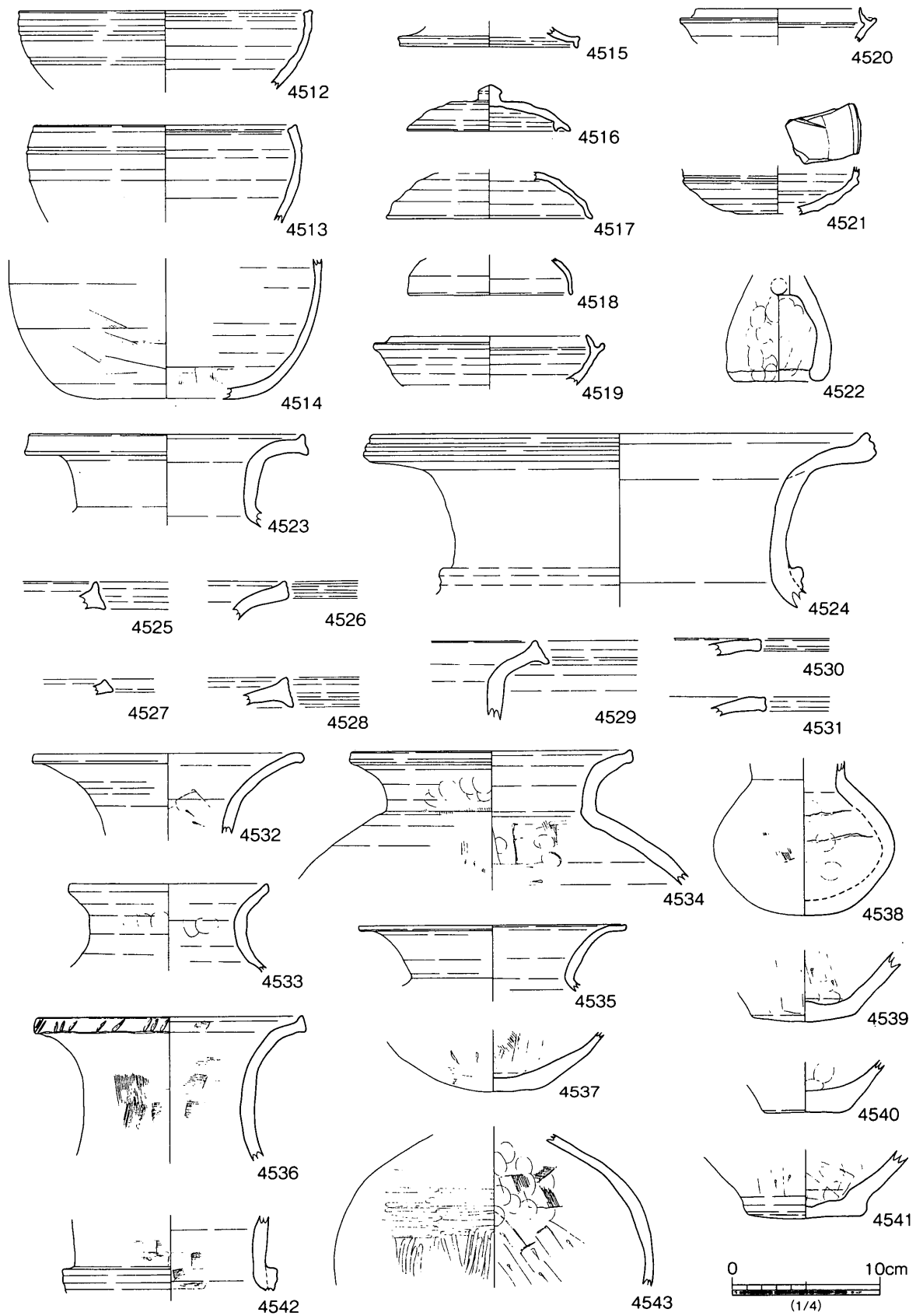
第 164 図 自然河川跡遺物実測図 4 (4403 ~ 4438:SR01)



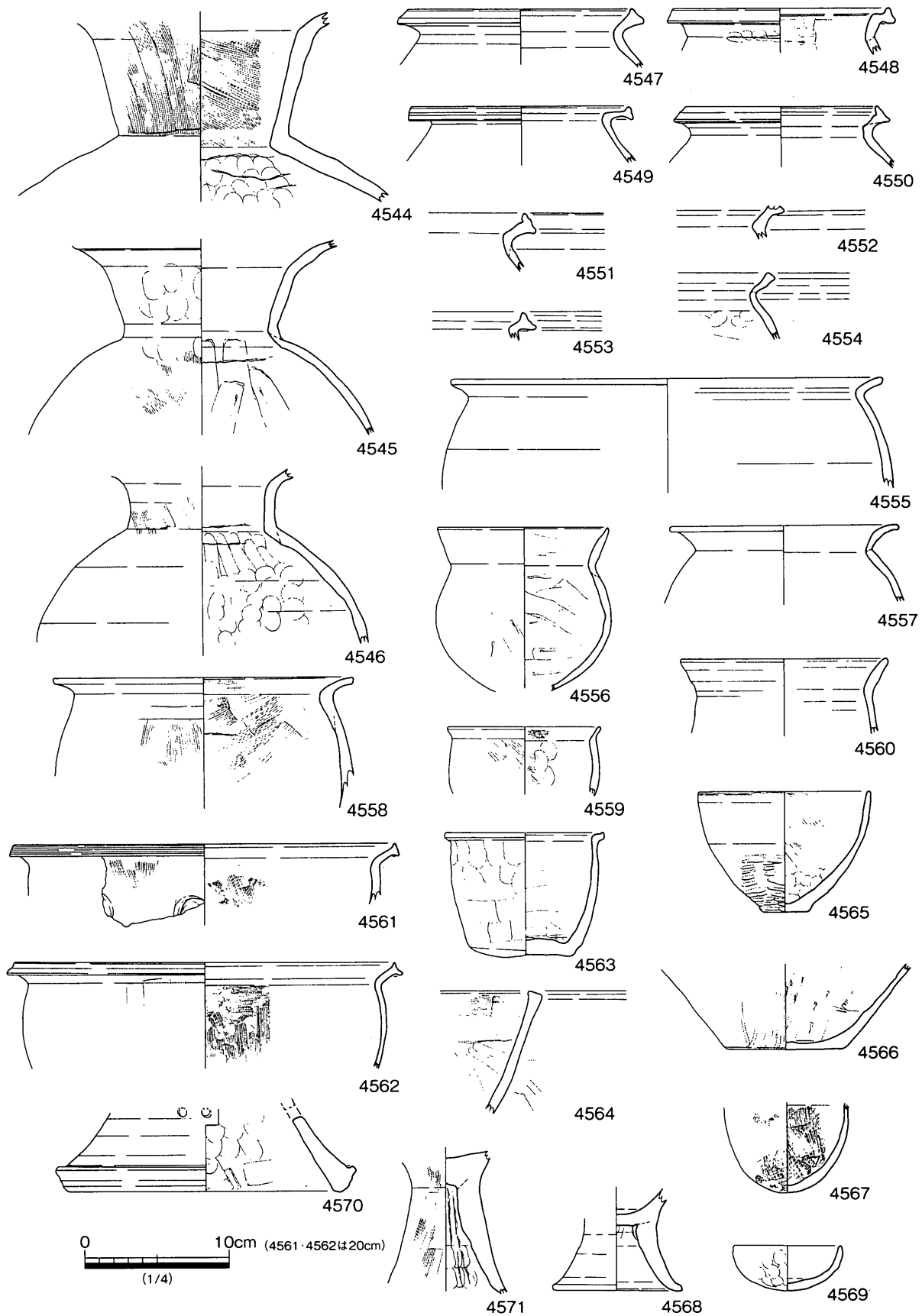
第 165 図 自然河川跡遺物実測図 5(4439 ~ 4474:SR01)



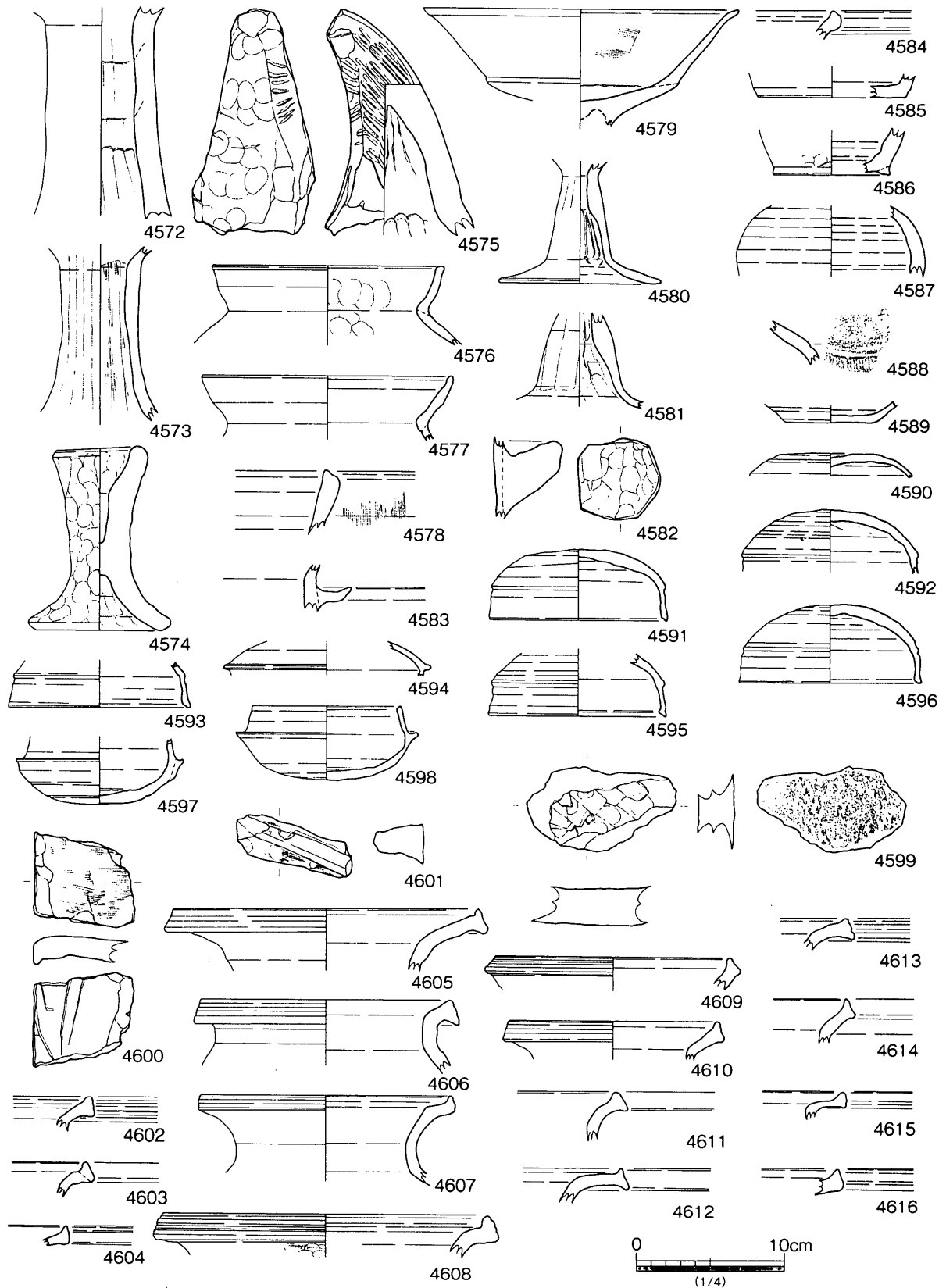
第 166 図 自然河川跡遺物実測図 6(4475 ~ 4511:SR01)



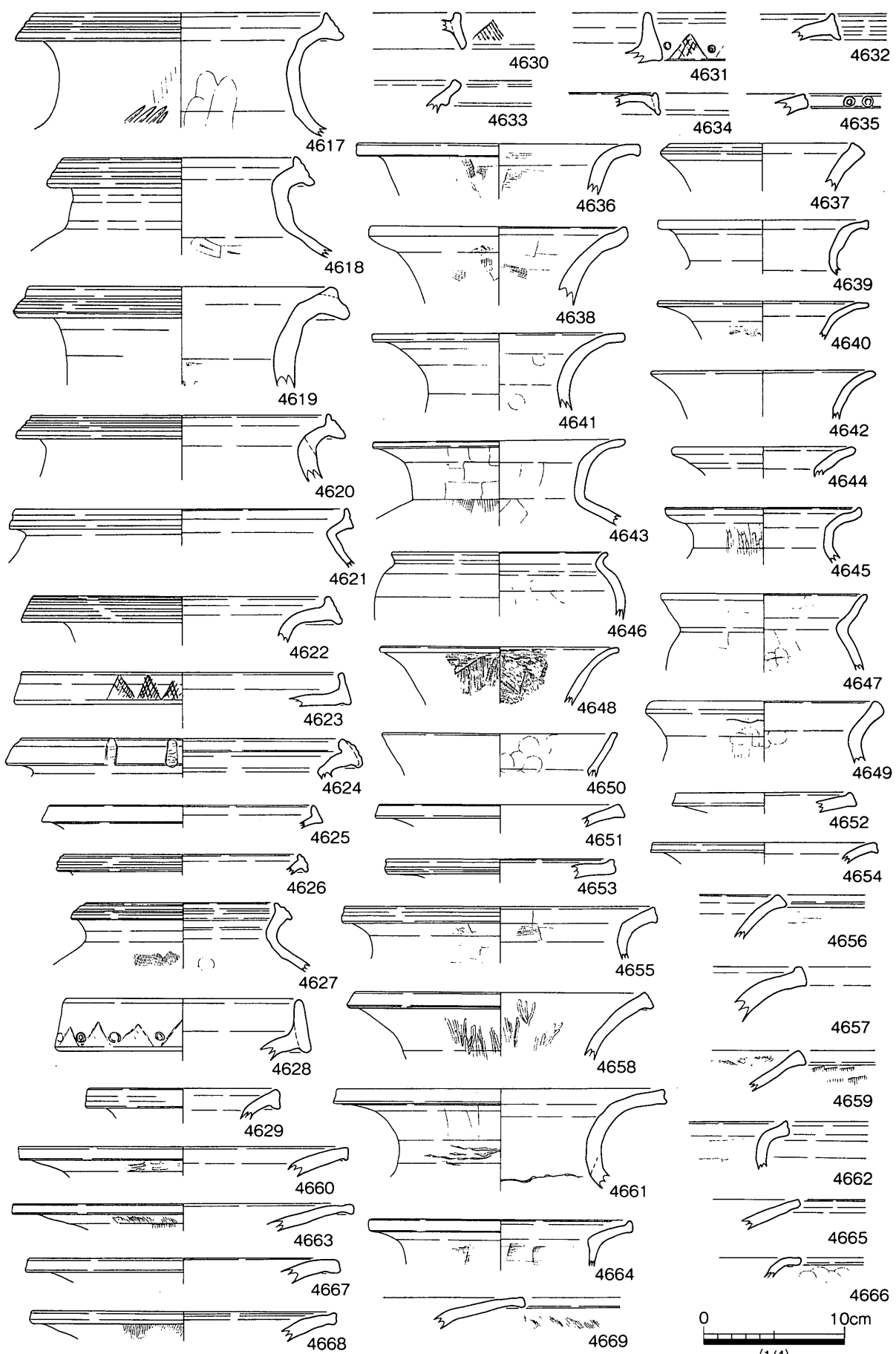
第 167 図 自然河川跡遺物実測図 7(4512 ~ 4543:SR01)



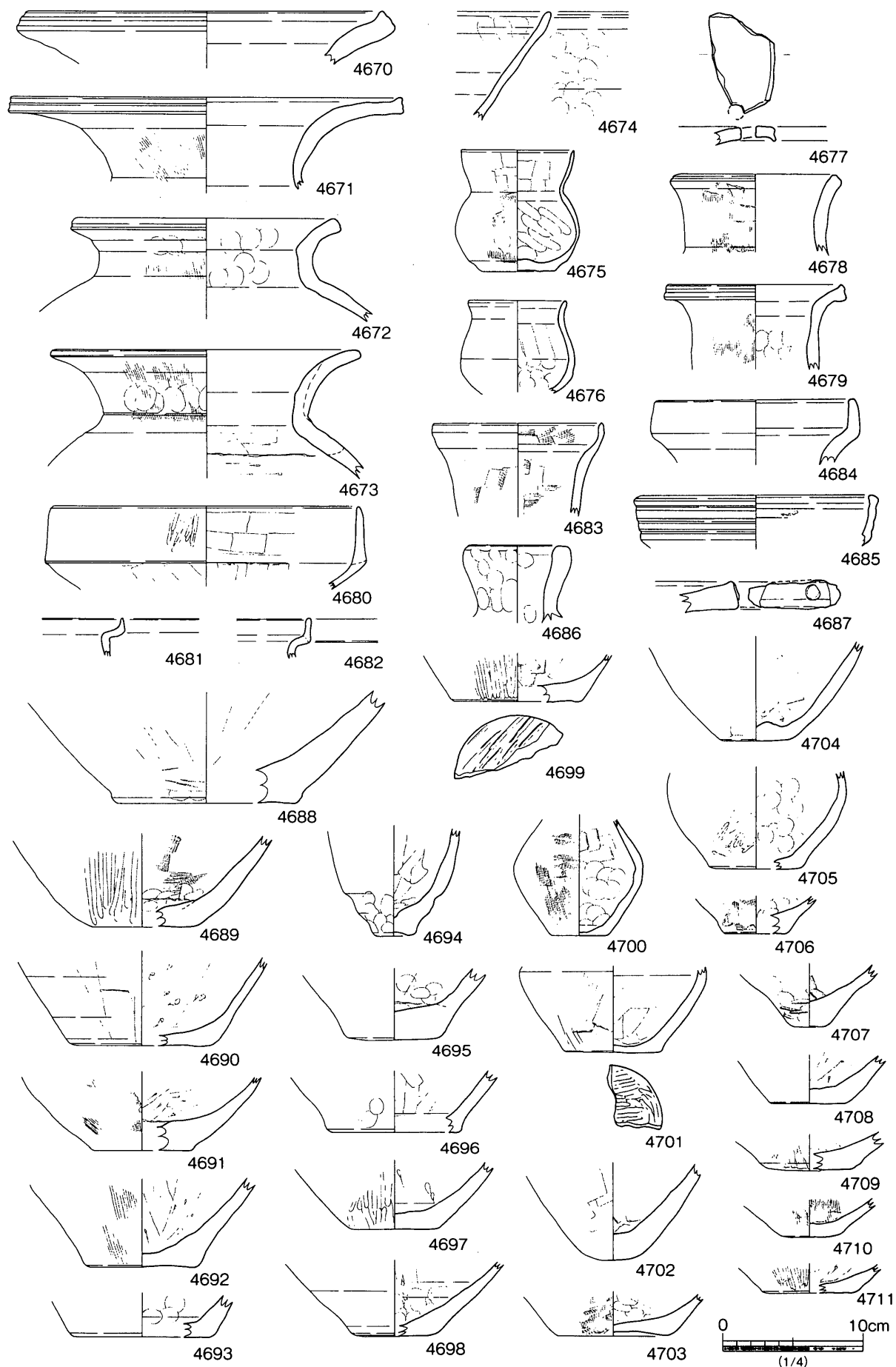
第 168 図 自然河川跡遺物実測図 8(4544 ~ 4571:SR01)



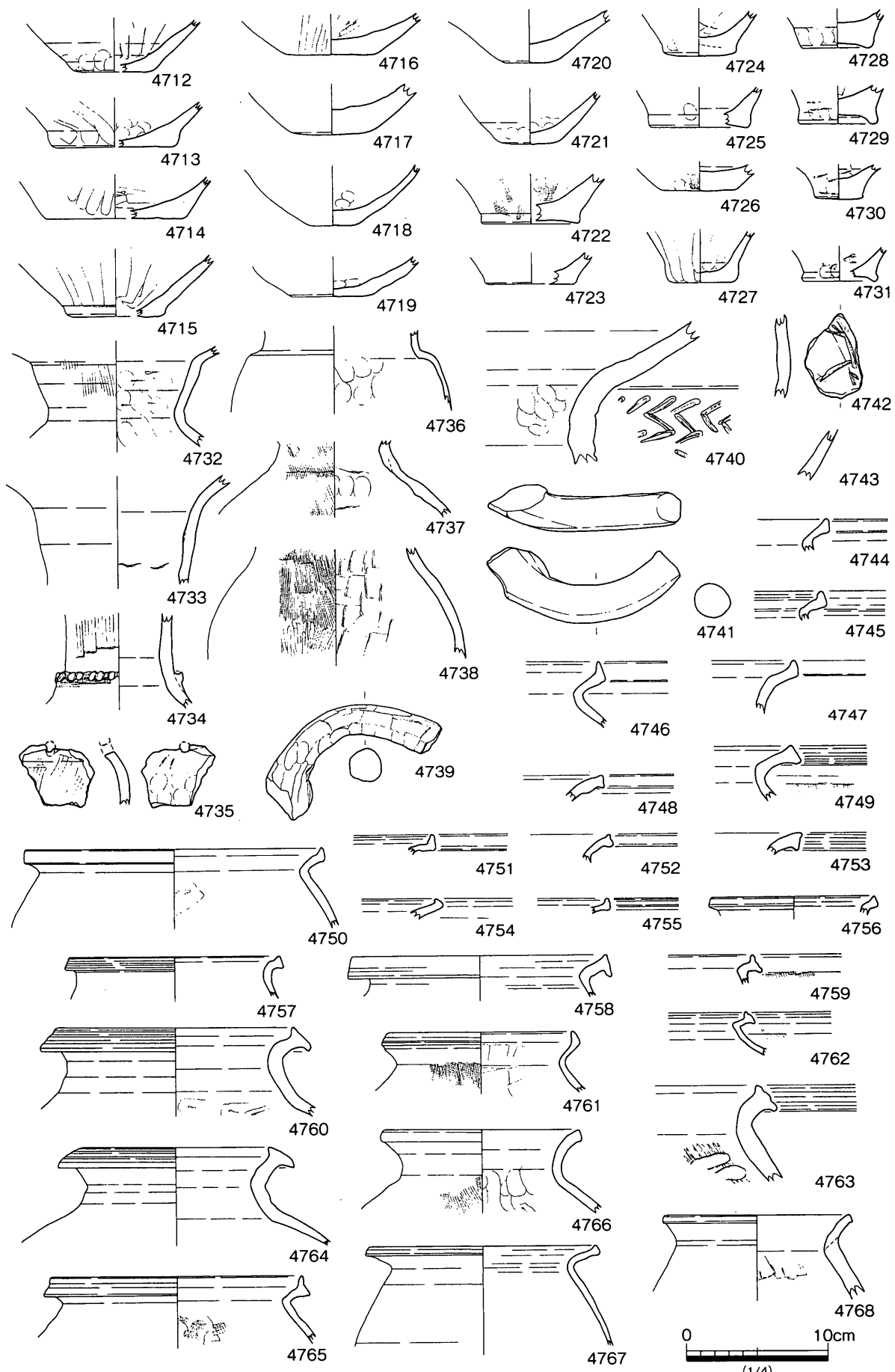
第 169 図 自然河川跡遺物実測図 9(4572 ~ 4616:SR01)



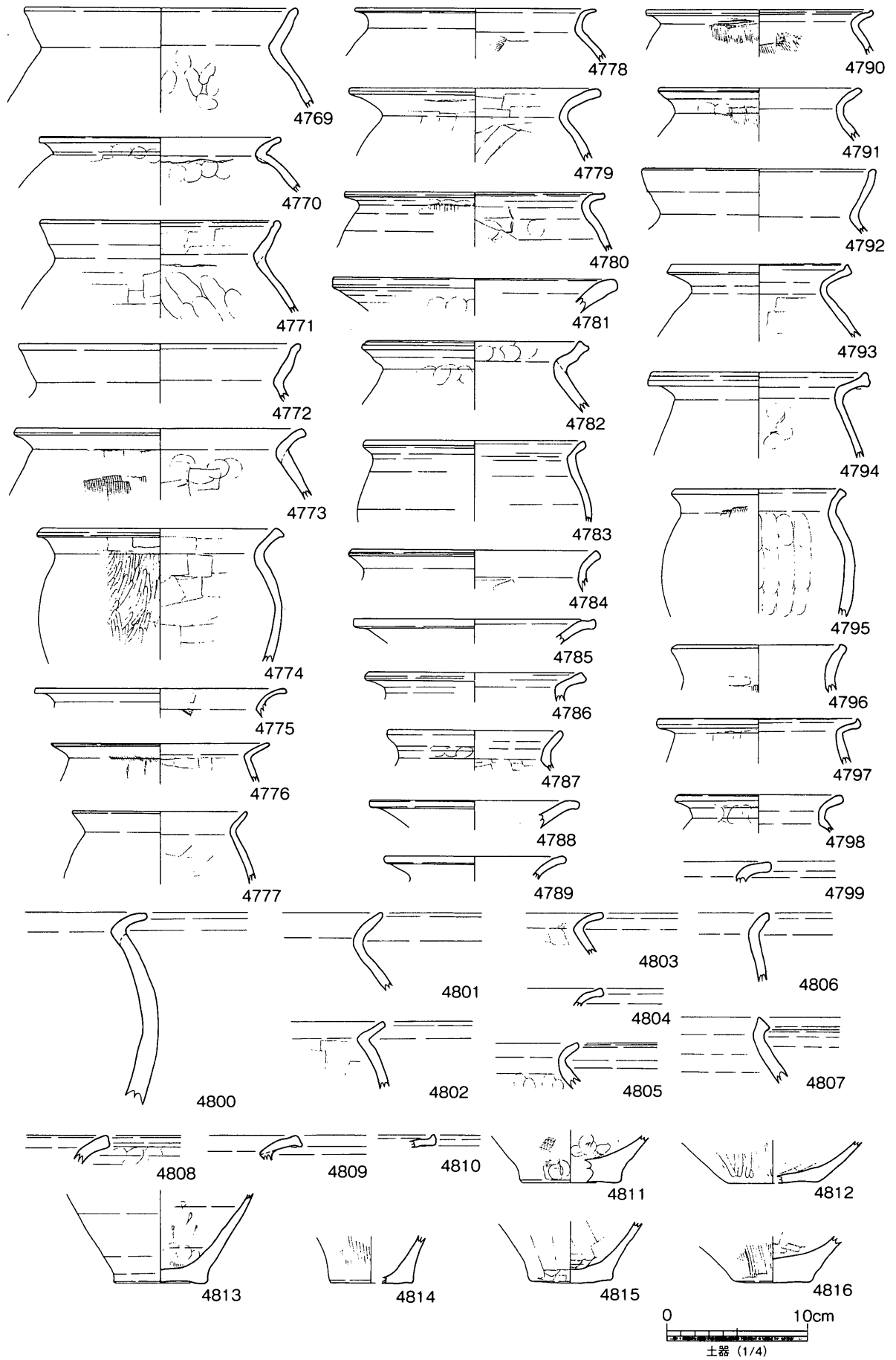
第 170 図 自然河川跡遺物実測図 10(4617 ~ 4669:SR01)



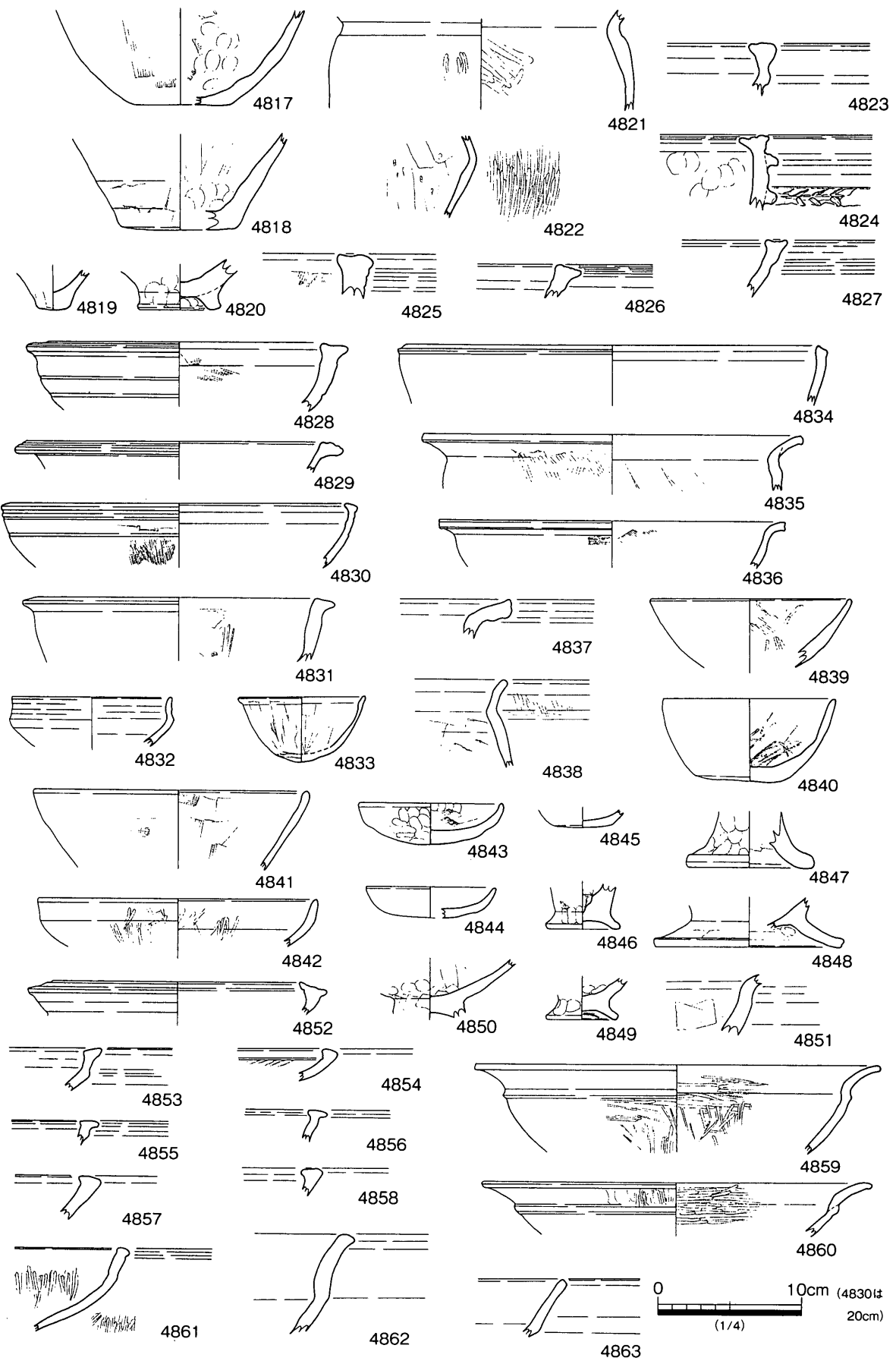
第 171 図 自然河川跡遺物実測図 11(4670 ~ 4711:SR01)



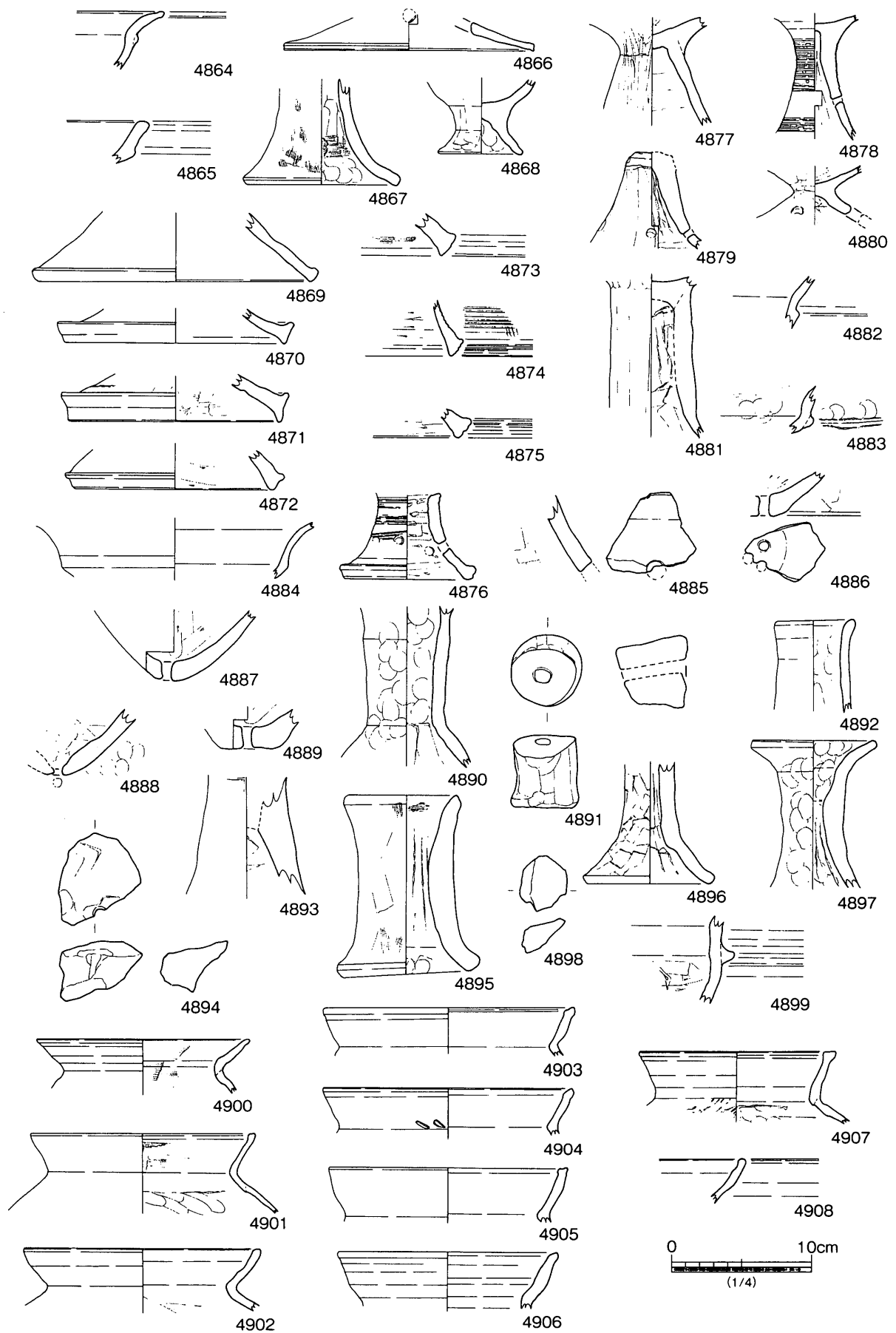
第 172 図 自然河川跡遺物実測図 12(4712 ~ 4768:SR01)



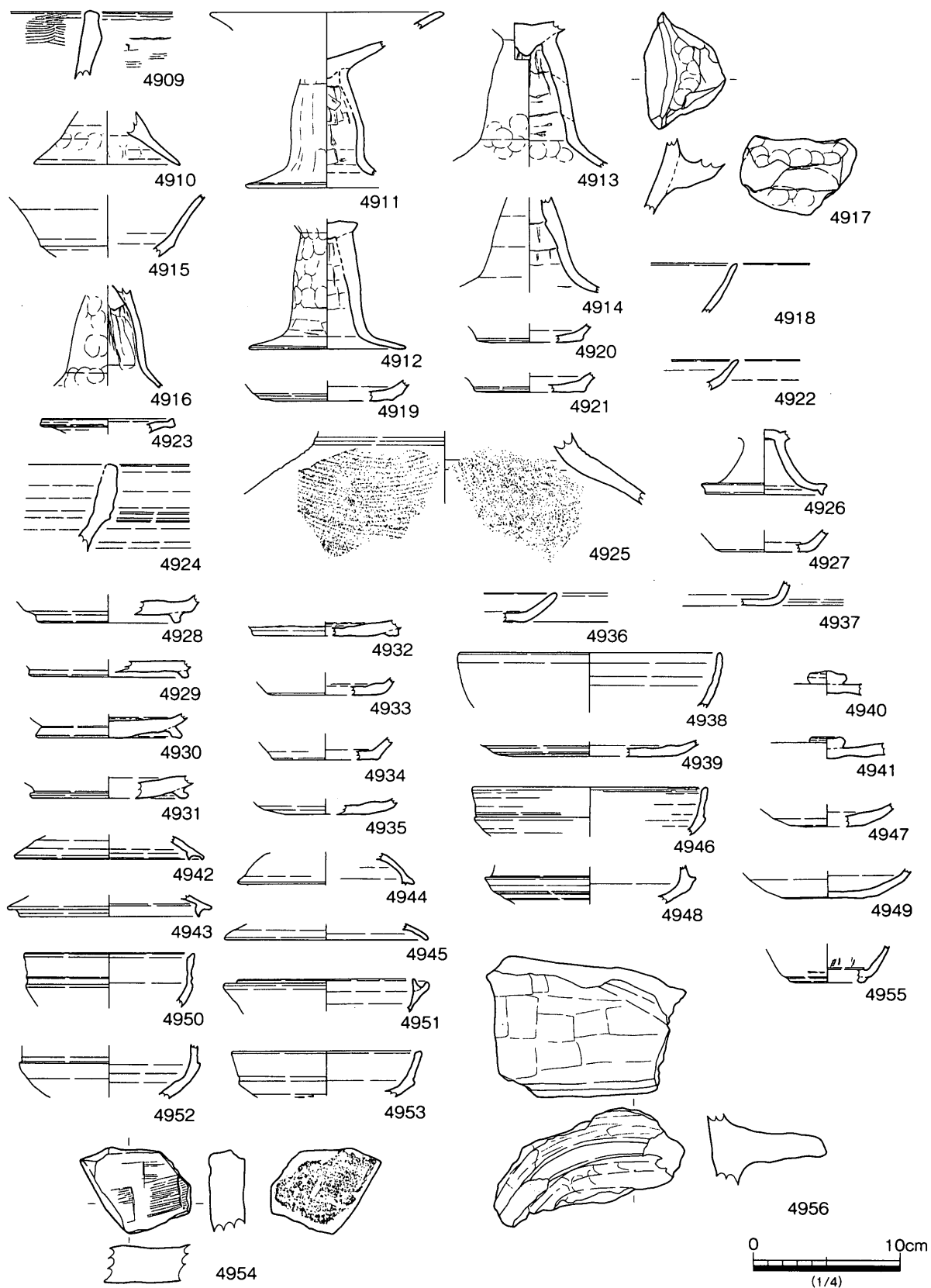
第 173 図 自然河川跡遺物実測図 13(4769 ~ 4816:SR01)



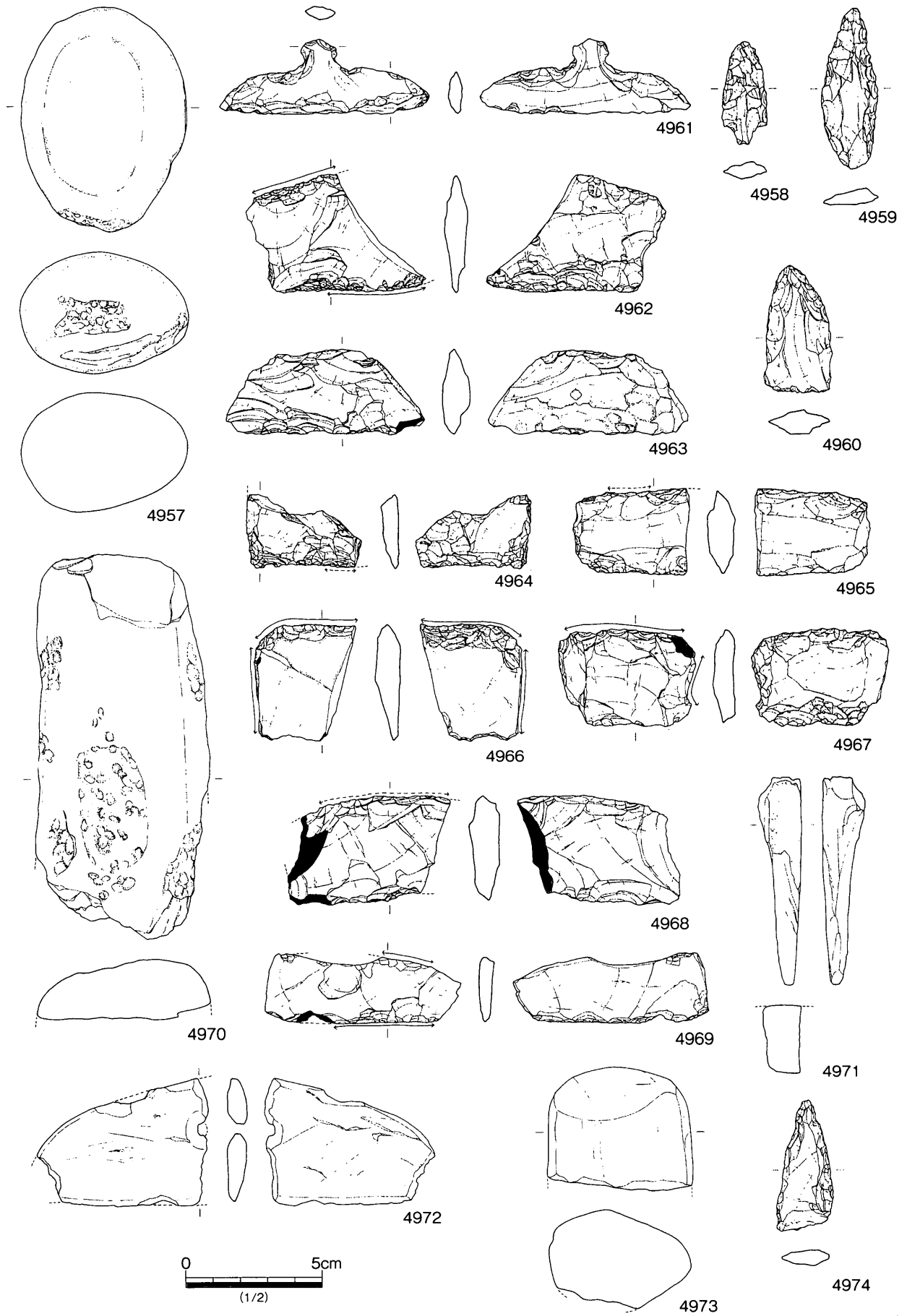
第 174 図 自然河川跡遺物実測図 14(4817 ~ 4863:SR01)



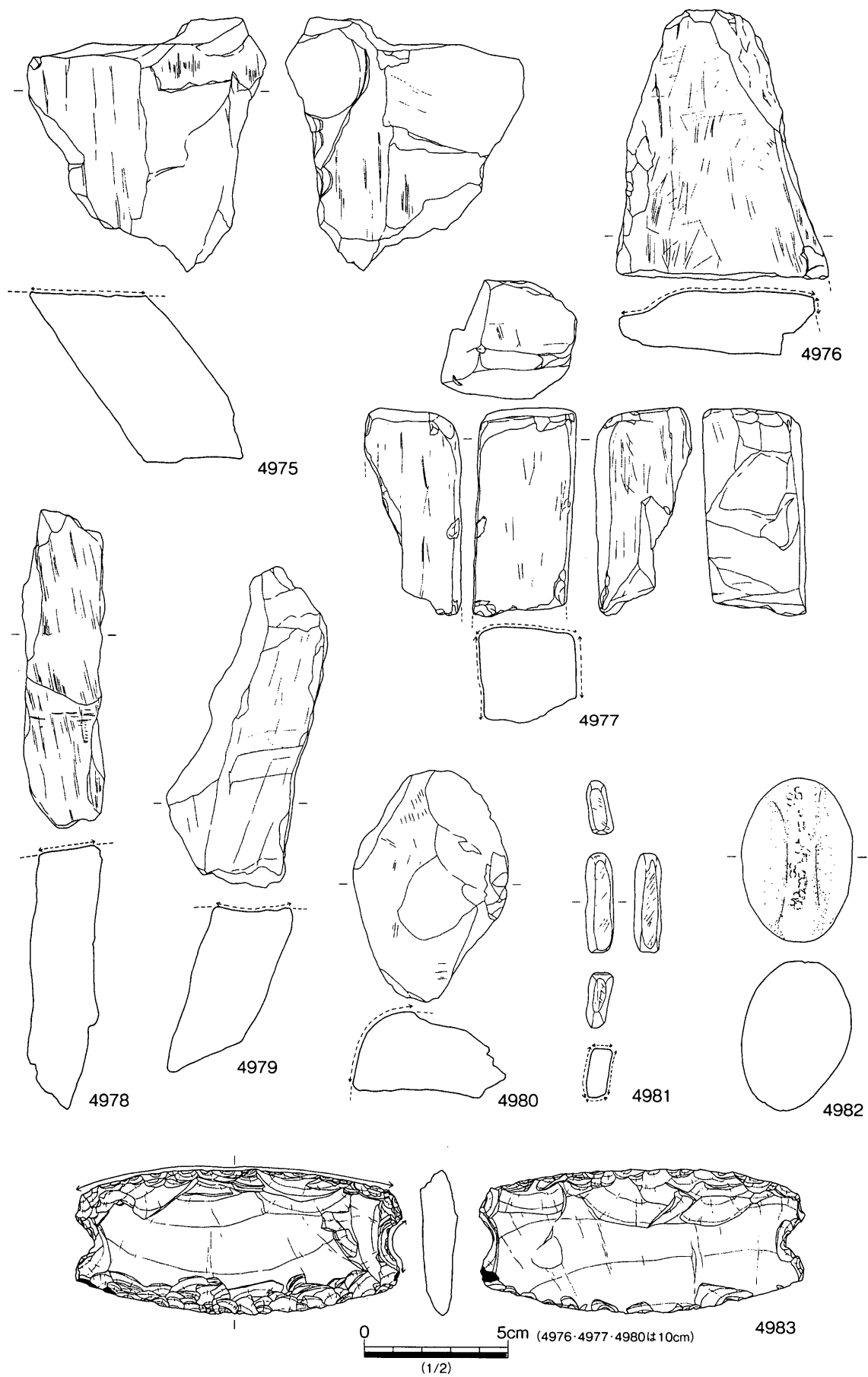
第 175 図 自然河川跡遺物実測図 15(4864 ~ 4908:SR01)



第 176 図 自然河川跡遺物実測図 16(4909 ~ 4956:SR01)



第 177 図 自然河川跡遺物実測図 17(4957 ~ 4974:SR01)



第 178 図 自然河川跡遺物実測図 18(4975 ~ 4983:SR01)

(6) 柱穴跡

[遺構] 当該時期の遺構は470基である。対象地の西半部を中心に分布することから、竪穴住居跡や掘立柱建物跡を構成したものが含まれていることが考えられる。

[遺物] 4148は表面の損傷が著しいために、使用痕が不明瞭である。4182はコップ形の器形で、器壁が厚いために容量が小さいことから、非実用品の可能性が高い。4195の頸部は直立する形態である。4203は最大径に比べて、器高が高い形態である。4243は1個の粘土塊から整形された器形で、受け部と柄部は簡単な造作である。

(7) 不明遺構

[遺構] 対象地の西半部に10基の遺構が存在するが、用途が判明したものはない。

[遺物] 4277の原形は、体部の最大径が器高を凌駕した算盤玉形を示すものである。4296は左側縁部の調整剥離が不完全なことから、未製品と考えられる。

(8) 自然河川跡

SR01

[遺構] Ⅲ②区からⅢ①区とⅢ③区を経て、V①区の北半部に至る。対象地の東半部のほぼ全域の面積を占める大型の自然遺構である。

対象地内では、本遺構の東方において住居跡が検出されていないことや、遺構密度が西半部に比べて低下することから、Ⅲ区を除いた西半部の地区にある集落跡の東側の境界線に相当していたことが考えられる。

埋土は、東西の両岸部の上位において、多くの細かい土層序が認められたが、全体としては、同色、同質の厚い土壌によって形成されていたことから、一時に埋積したと判断される。

なお、埋土中においては、水田耕作土に相当する土壌の存在は認められなかった。

[遺物] 埋土の上位から、後代に所属する土器群が検出されたが、ほぼ本遺構が埋積する最終段階の窪地形に投棄されたものと判断されたため、本項で報告する。

4308の体部は、扁平な算盤玉形を示し、最大径が位置する部位の器壁が鋭角状に屈曲した形態である。原形は長頸壺の器形が復元される。4319～4339は「壺・甕A」、4347～4362は「壺・甕D」である。4408は水差し形の壺の把手部分である。4410～4420は「壺・甕A」、4421～4427は「壺・甕B」、4428～4449は「壺・甕C」である。

4504は、内面に青海波文が認められることから、須恵器の製法で製作されたことがわかる。4516は、扁平なつまみ部と低いかえし部の形態から、飛鳥Ⅳ型式に所属すると判断される。4563は、口縁部について、各角部が直角を示す、逆L字形の縦断面の形態に成形されていることと、下体部の内外面が、横方向のヘラケズリによって成形されていることから、韓式土器に分類される器種である。4591～4593、4595、4596は、肩部の屈曲箇所の外方向への突出が小さいことから、陶邑MT15型式に所属すると判断される。4598についても、かえし部の傾斜角度が低いことと、同部の先端部が平坦に成形されていることから、同型式に所属すると判断される。4600は、ひさし部の頂部に近い部位である。

4602～4616は「壺・甕A」、4617～4629は「壺・甕B」、4636～4673は「壺・甕C」、4680～4682は「壺・甕E」である。4744～4757は「壺・甕A」、4758～4765は「壺・甕B」、4766～4810は「壺・甕C」

である。4823～4831は「鉢A」、4835～4838は「鉢B」、4839～4841は「鉢C」である。4852～4858は「高杯A」、4859と4860は「高杯C」、4869～4875は「高杯E」である。

4900～4914は、古墳時代初期に所属する器種である。甕(4900～4908)は、直立気味の長い口縁部と、同端部の凹面が特徴的である。高杯の脚部(4911、4913、4916)は、中位が膨らむ形態が特徴である。

2 古墳時代中期から奈良時代の遺構

(1) 土 坑

① SK11

[遺構] II区の中央部から南西寄りの位置に所在する。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

② SK12

[遺構] III②区の南東隅部に所在する。

[遺物] 626は未加工の自然石を利用したものである。使用面が浅いことから、使用頻度は低かったことがわかる。627は偶然成形された広い面が使用面とされたものである。

③ SK13

[遺構] IV②区の中央部に所在する。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

④ SK14

[遺構] II区の北部に所在し、SH07と重複した位置関係にあると考えられるが、先後関係については不明である。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

⑤ SK15

[遺構] III②区の中央部に所在する。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

⑥ SK16

[遺構] III②区の中央部に所在する。

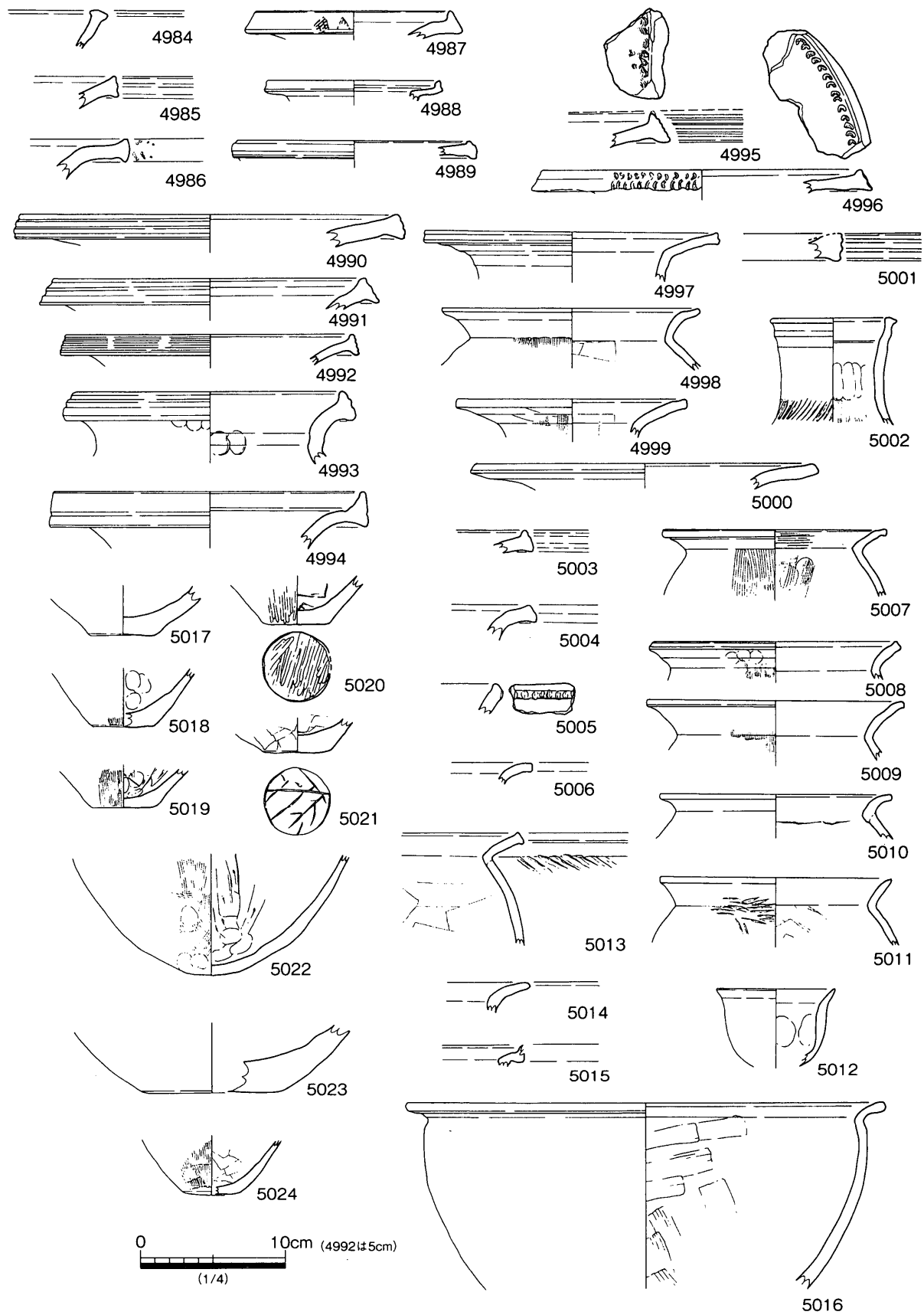
[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

(2) 溝状遺構

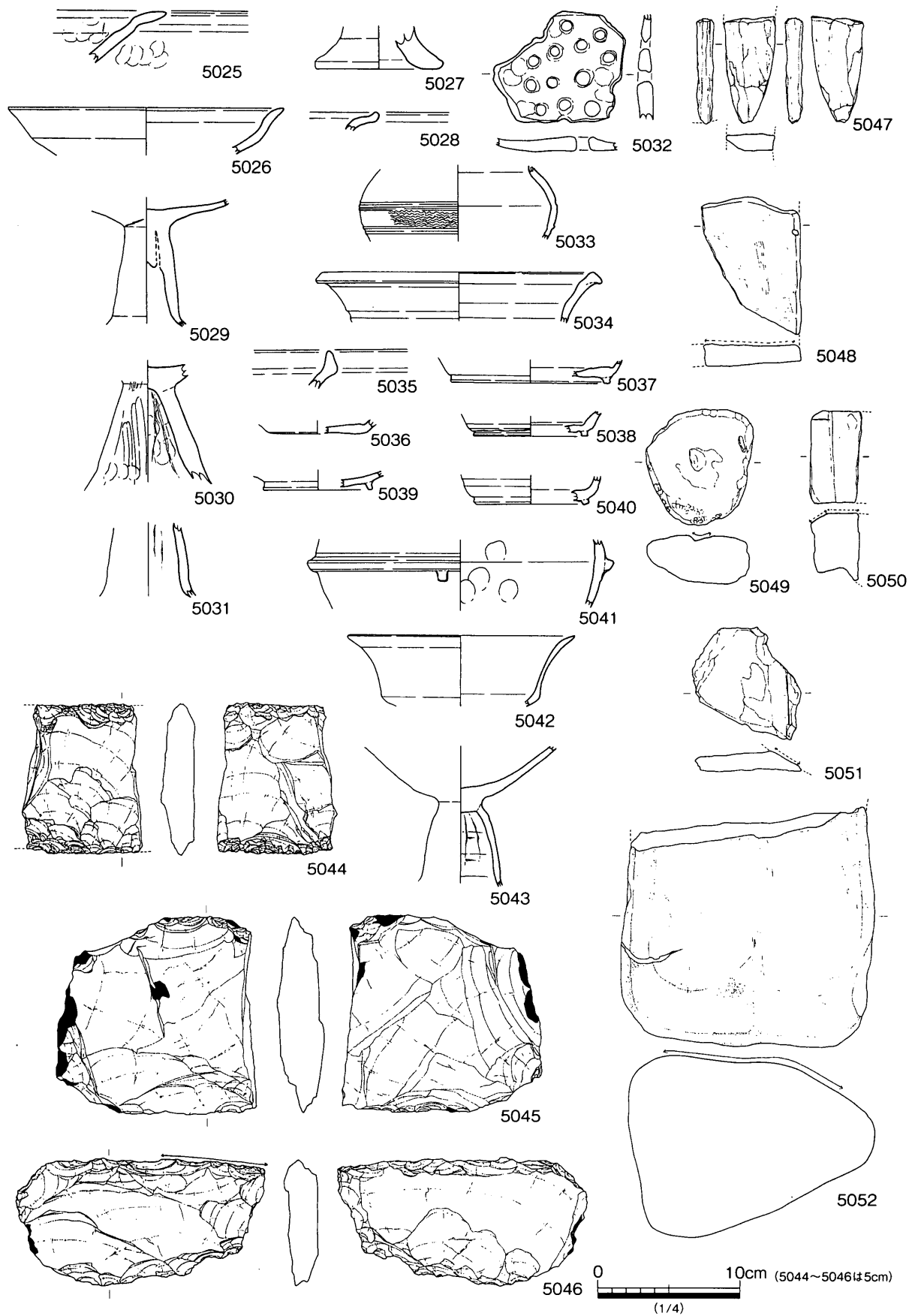
SD56

[遺物] 前代の流路跡が埋積する過程において、浅い凹地形として存在した時期に投棄された一群の資料である。前代の資料との区別を明確にするために、本項で報告する。

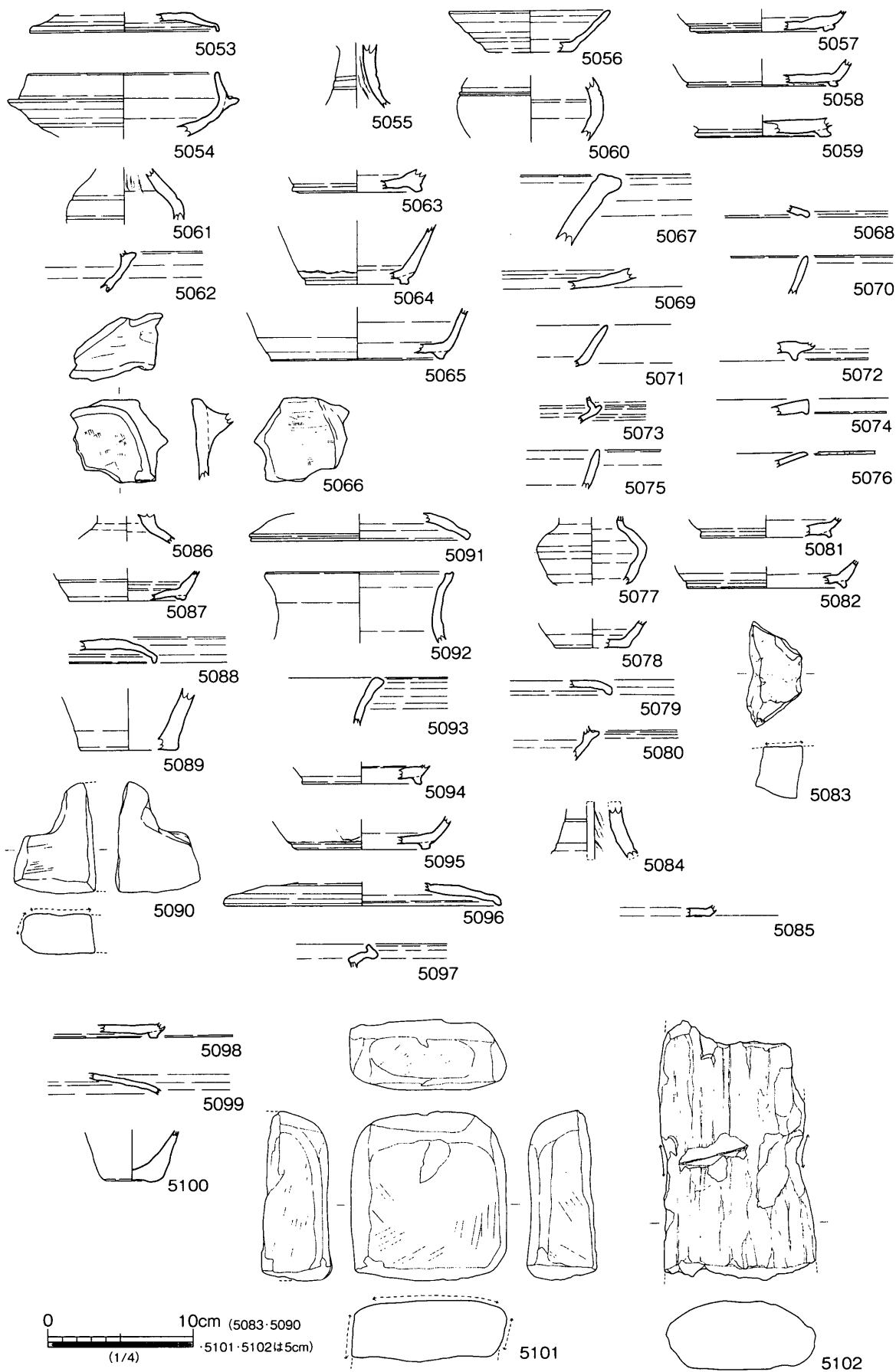
5191は複合口縁の器形で、口縁部に蓋の装着用か、吊下げ用の2個単位の穿孔がある。5205～5210、5217～5219の口縁部は、受け口状の形態で、外面に屈曲箇所があることから、布留式の特徴を備えたものであると考えられる。5223～5227、5230は、口縁部外面の屈曲箇所が明瞭な複合口縁の器形である。5236の脚部は、直線的にハ字形に開脚した形態である。5248～5252、5254、5257、5258、5263～5270は、口縁部外面に屈曲箇所が存在する、受け口状の器形であることから、布留式に所属することが考えられる。5283～5289は、複合口縁の器形である。高杯は、杯部の屈曲箇所から口縁部に



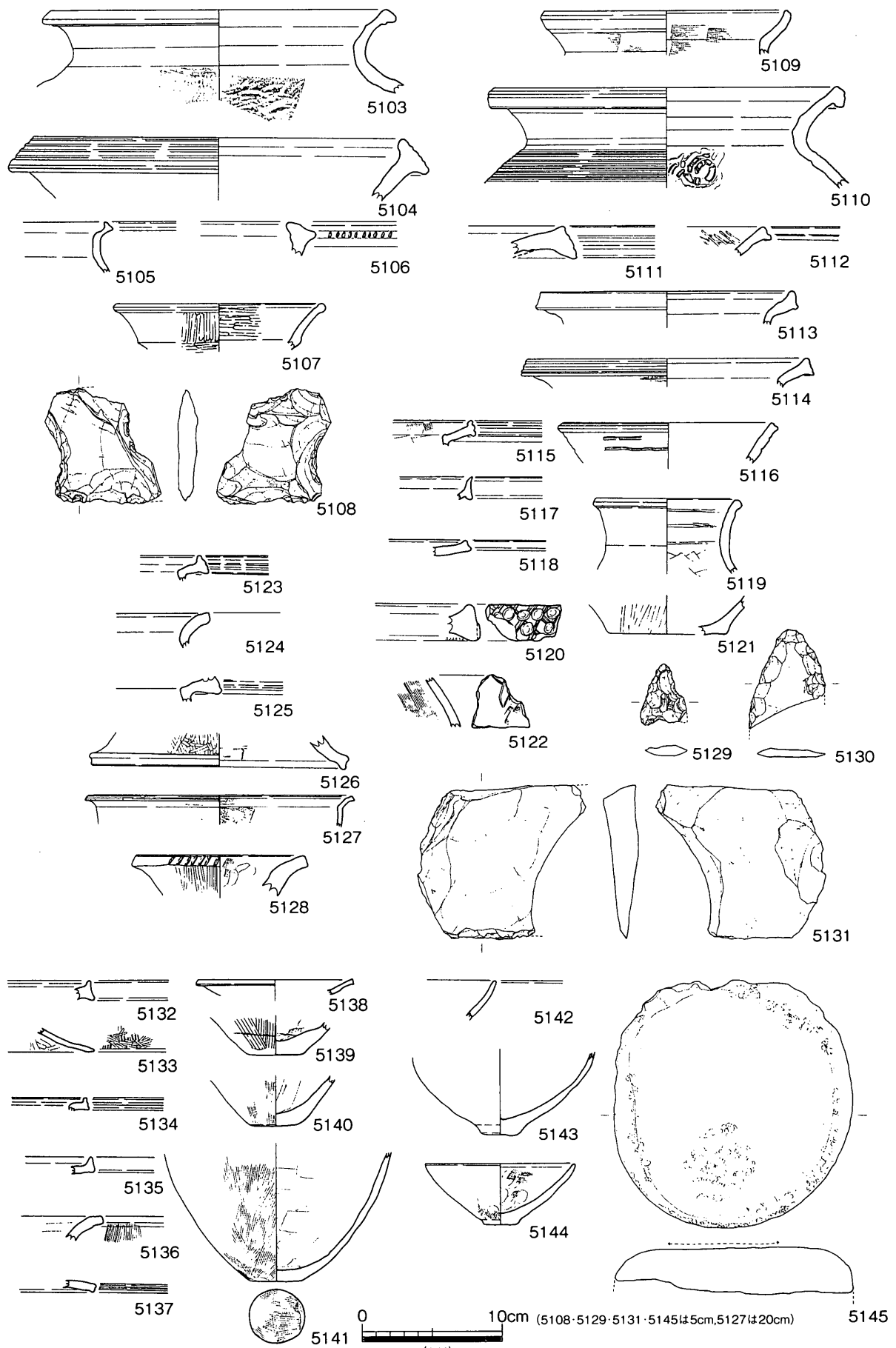
第 179 図 溝状遺構遺物実測図 95(4984 ~ 5016:SD57)



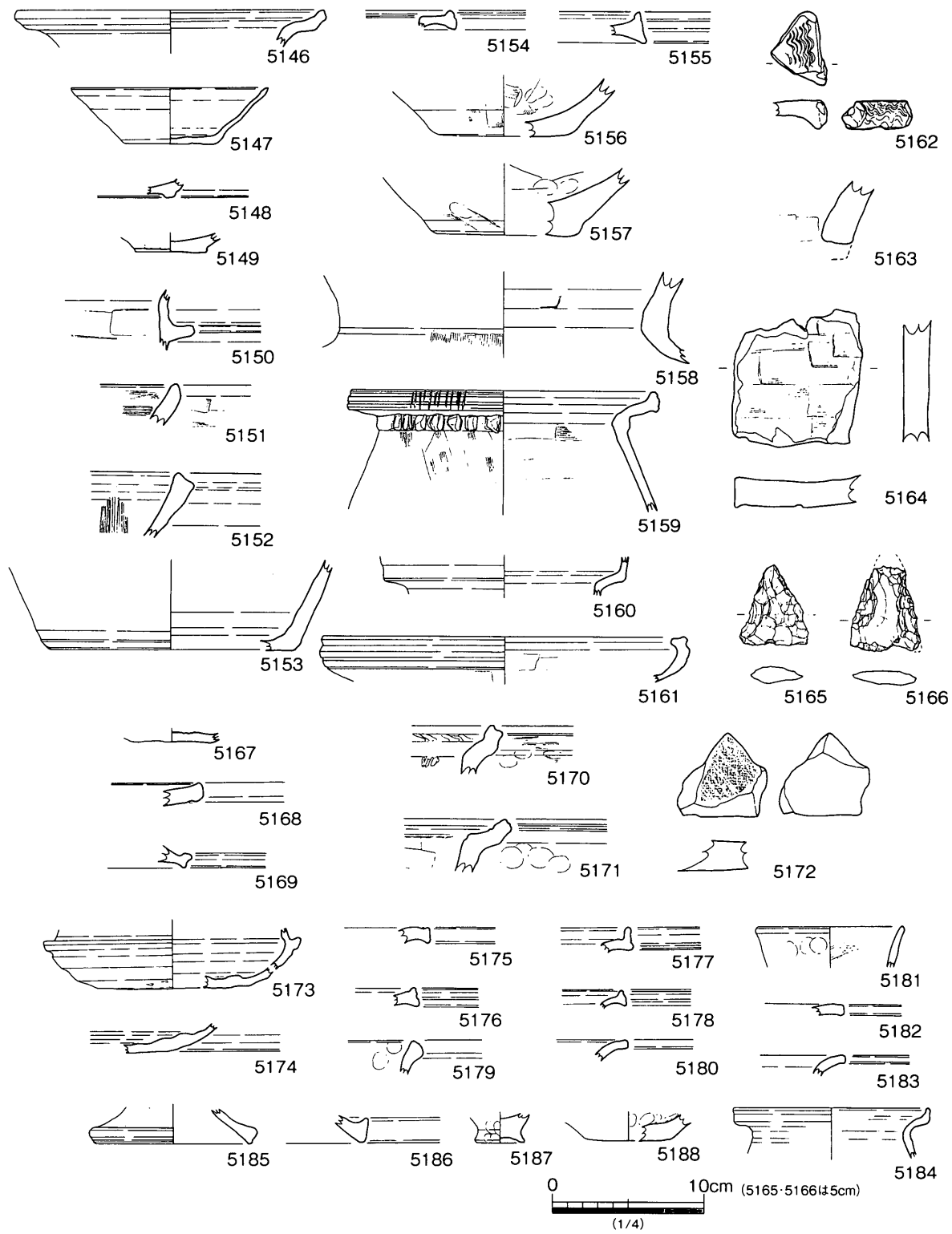
第 180 図 溝状遺構遺物実測図 96(5025 ~ 5052:SD57)



第 181 図 溝状遺構遺物実測図 97(5053・5054:SD71,5055・5056:SD58,5057 ~ 5060:SD59,5061 ~ 5066:SD105,5067:SD60,5068:SD61,5069:SD62,5070:SD63,5071・5072:SD64,5073・5074:SD65,5075・5076:SD66,5077 ~ 5084:SD67,5085:SD68,5086 ~ 5090:SD69,5091 ~ 5093:SD87,5094 ~ 5097:SD70,5098 ~ 5102:SD72)

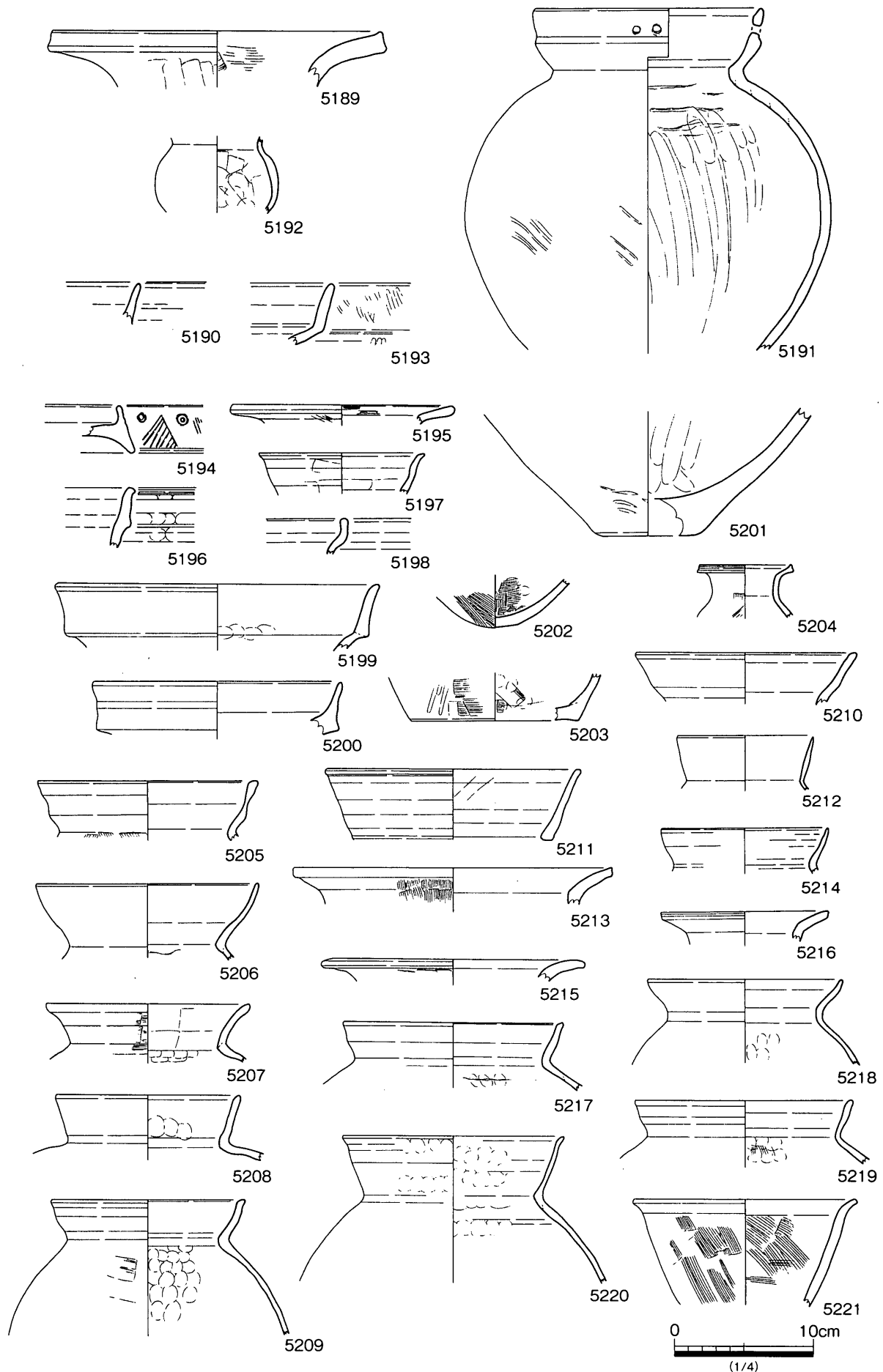


第 182 図 溝状遺構遺物実測図 98(5103 ~ 5108:SD73, 5109 ~ 5131:SD74, 5132 ~ 5145:SD75)

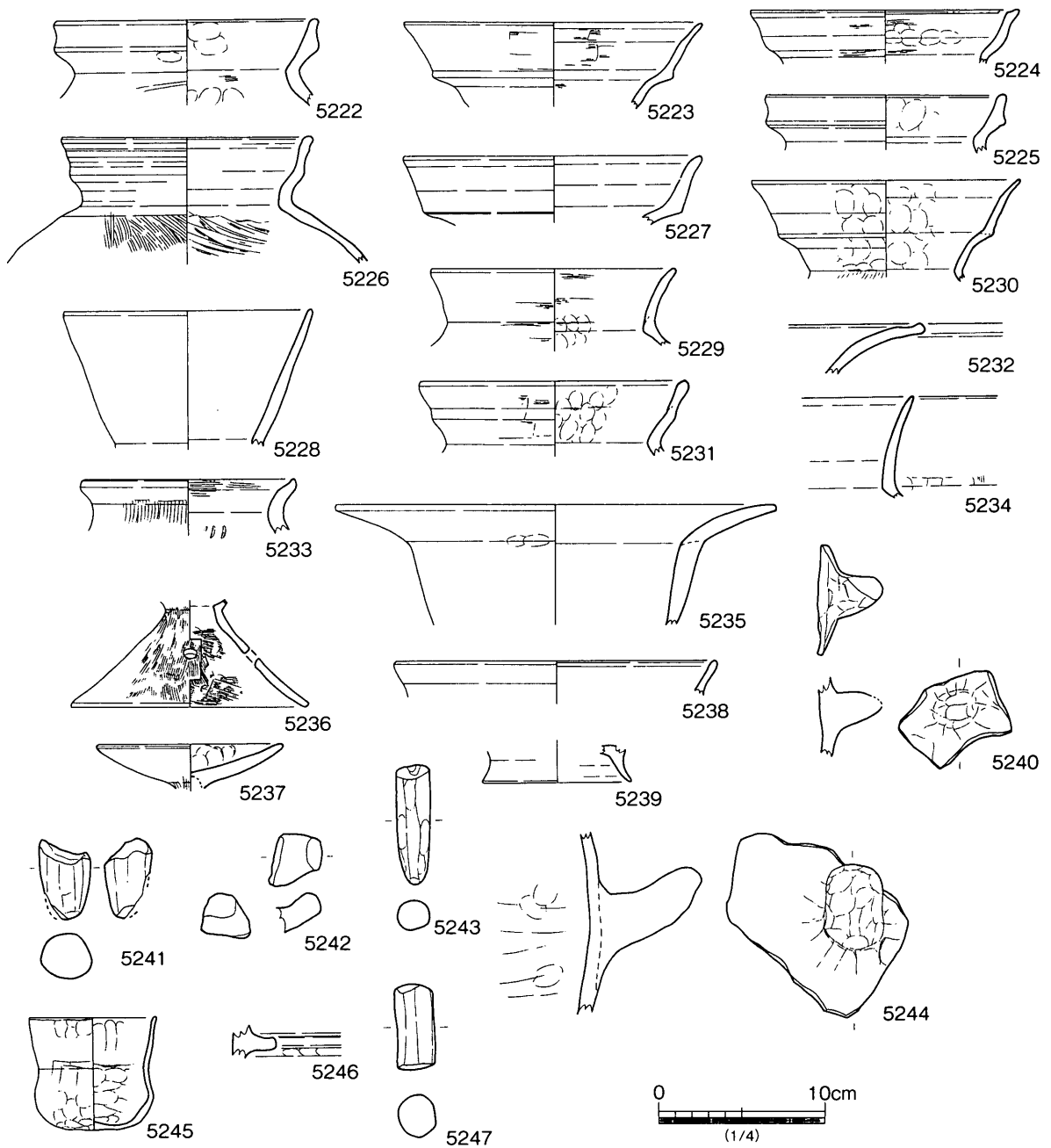


第 183 図 溝状遺構遺物実測図 99

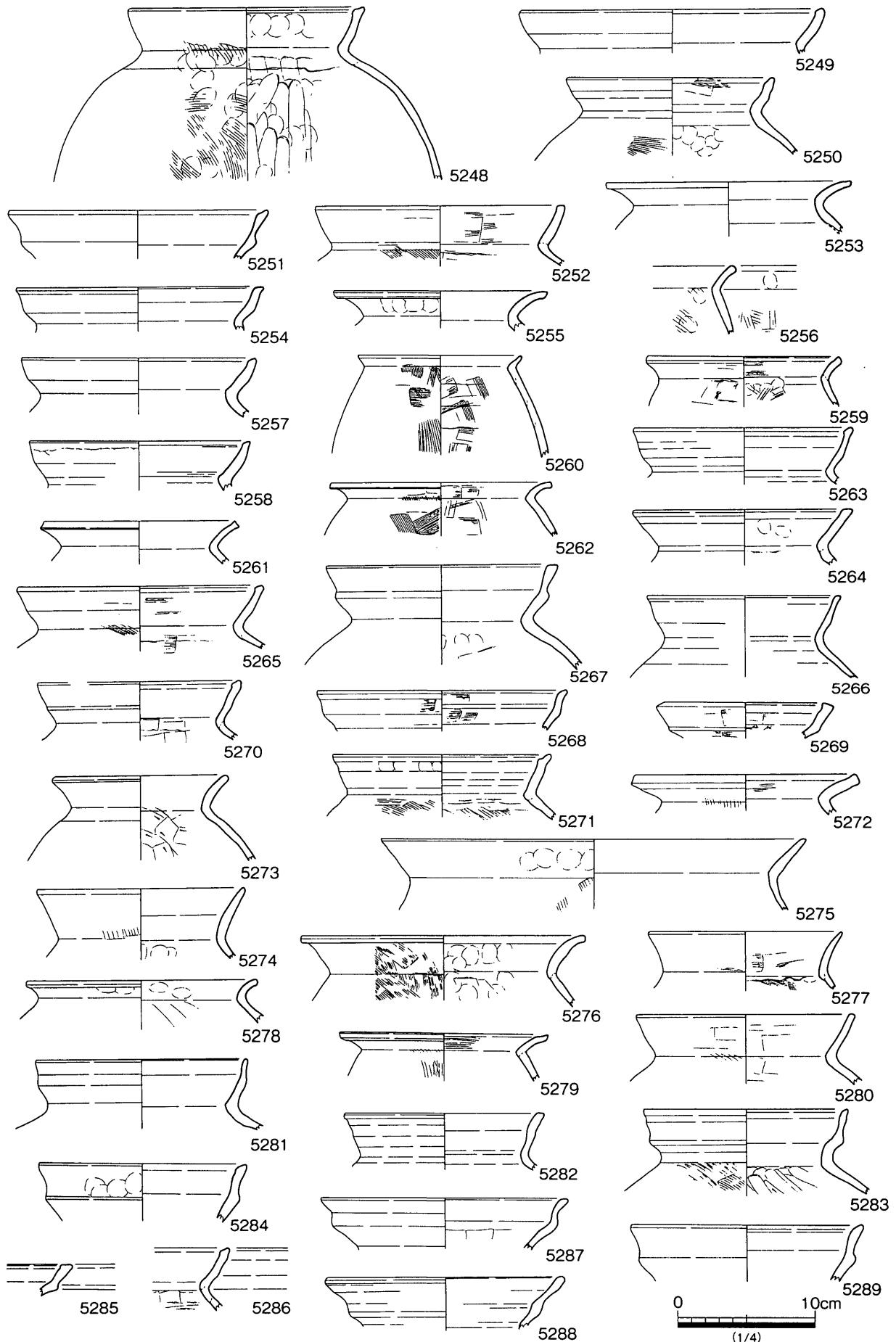
(5146 ~ 5166:SD76, 5167 ~ 5172:SD77, 5173 ~ 5188:SD177)



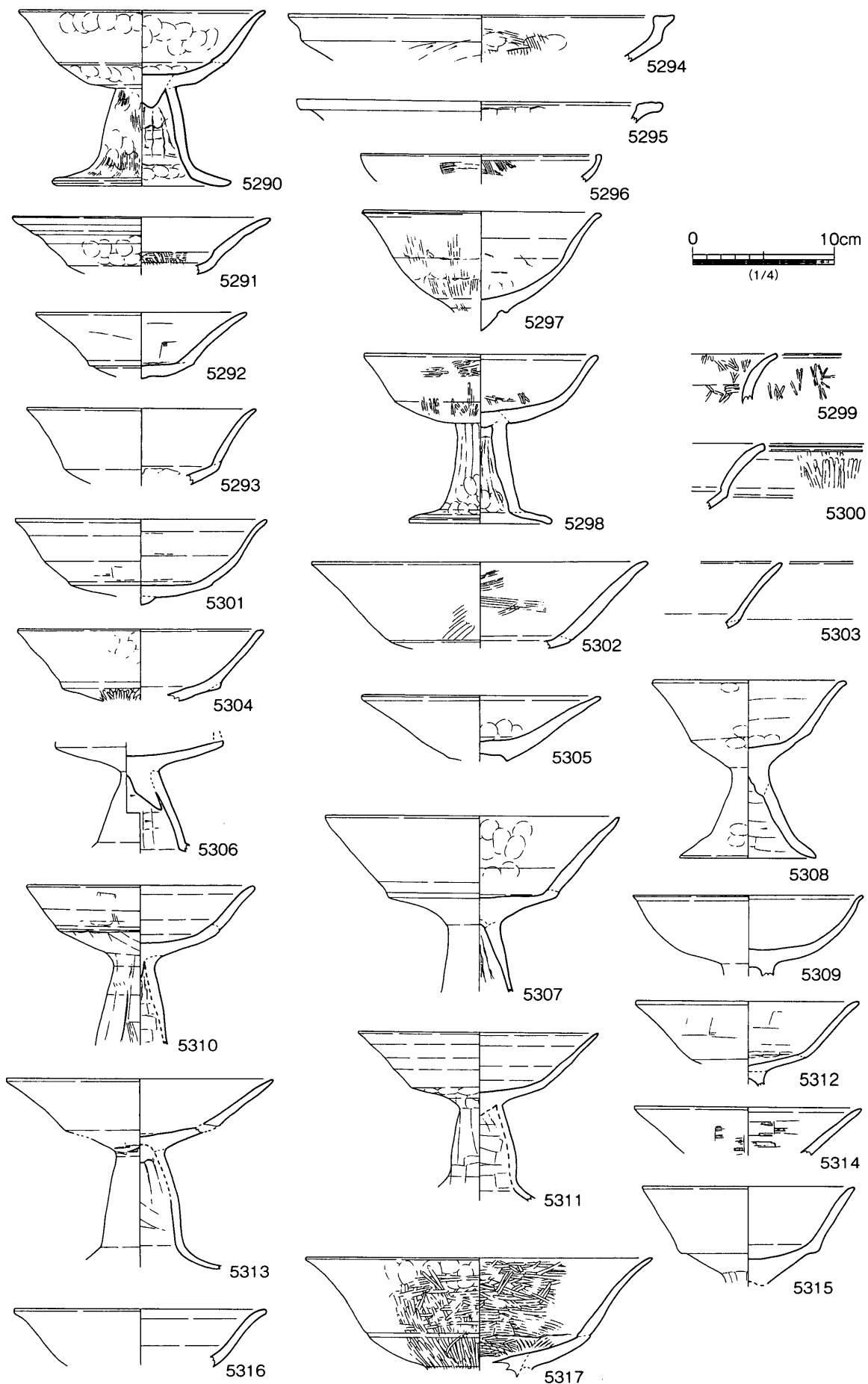
第 184 図 溝状遺構遺物実測図 100(5189 ~ 5221:SD56)



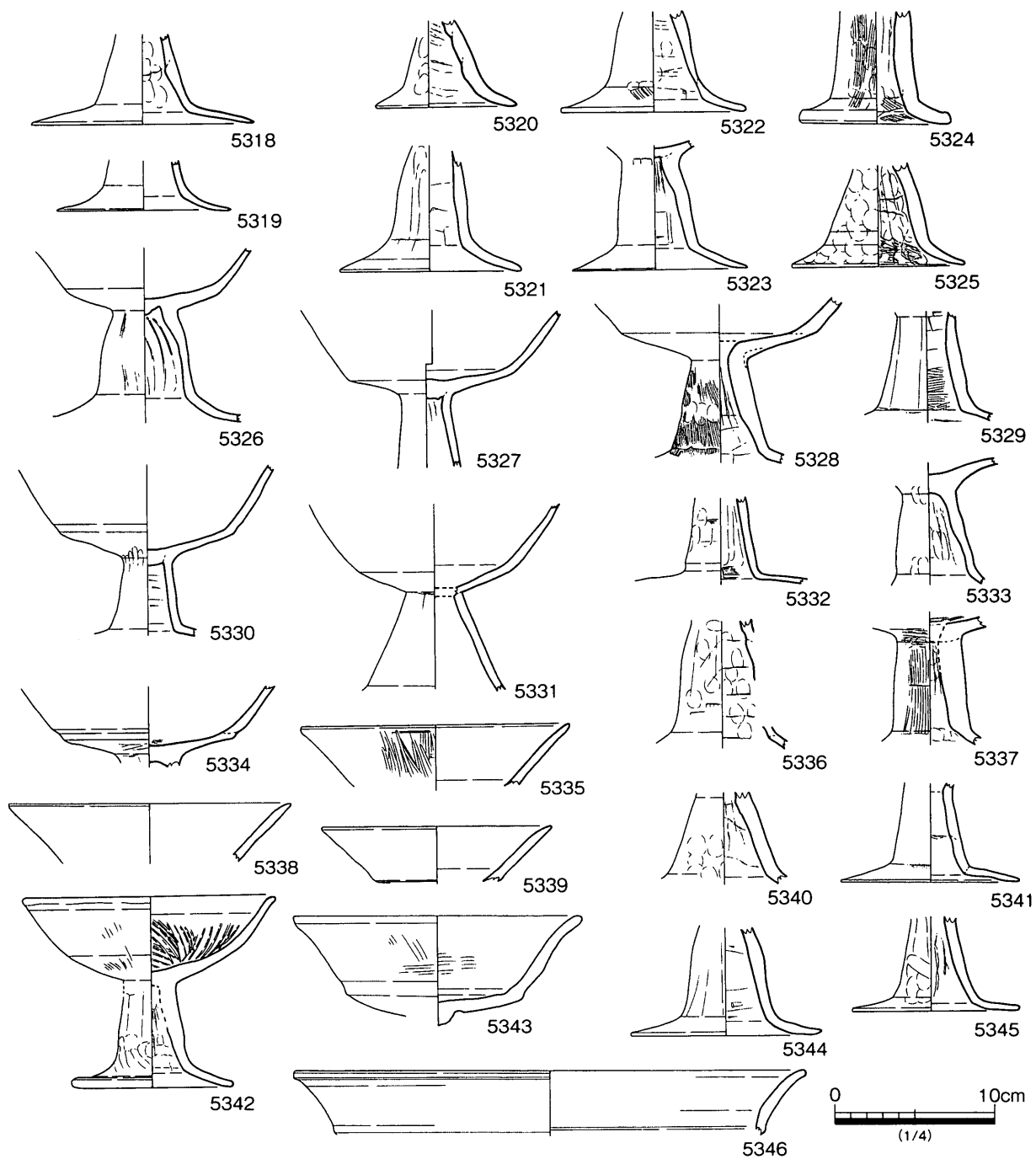
第 185 図 溝状遺構遺物実測図 101(5222 ~ 5247:SD56)



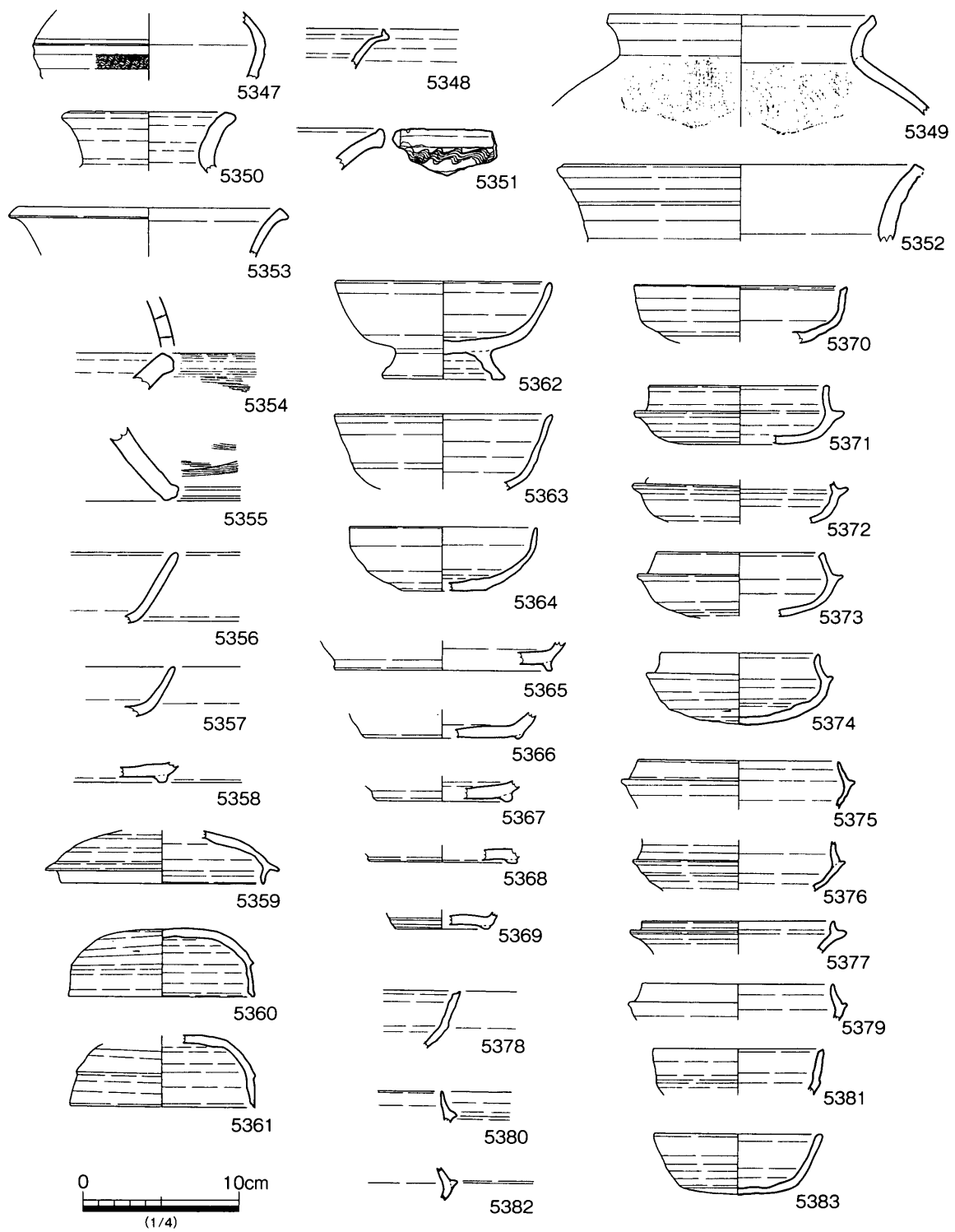
第 186 図 溝状遺構遺物実測図 102(5248 ~ 5289:SD56)



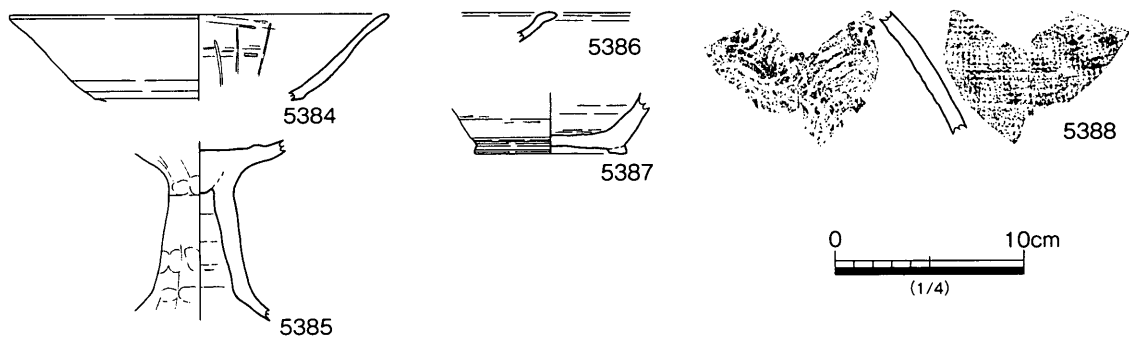
第 187 図 溝状遺構遺物実測図 103(5290 ~ 5317:SD56)



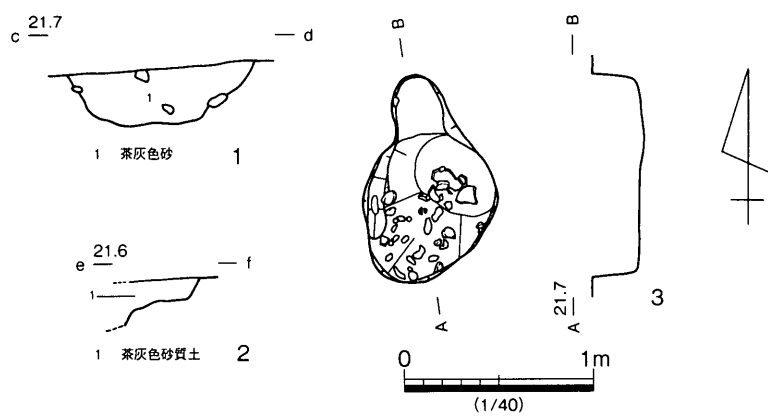
第 188 図 溝状遺構遺物実測図 104(5318 ~ 5346:SD56)



第 189 図 溝状遺構遺物実測図 105(5347 ~ 5383:SD56)



第 190 図 柱穴跡遺物実測図 5 (5384・5385:SP471,5386・5387:SP472,5388:SP473)



第 191 図 土坑遺構実測図 2 (1:SK12,2:SK15,3:SK16)

かけての部位が直線状の形態を示す器形が主体で、5398、5309、5342のような、浅い皿形の器形が少数含まれる。同器種の脚部は、軸部の中央部が膨らみ気味の形態を示し、端部が外方向に広く開脚する形態である点に特徴が見られる。

5359は、扁平な器形であり、かえし部が直立気味の形態であることから、飛鳥Ⅰ型式に所属する。5360と5361は、外面の屈曲箇所突出が小さいことと、かえし部が直立気味であることから、陶邑MT15型式に所属するものである。5362は、杯部が深い器形であることと、脚部が短く、外方向に直線状に開脚することから、飛鳥Ⅰ型式に所属するものである。5371～5374は、かえし部の造作が精巧であり、内傾気味の形態を示すことから、陶邑TK10型式に所属することがわかる。

(3) 柱穴跡

[遺構] 当該時期の遺構は3基で、分散して所在するため、建物跡や柵列跡等の建築物や工作物等が存在したことは考えられない。

3 平安時代後半期から鎌倉時代の遺構

(1) 溝状遺構

当該時期の遺構から出土した、前代に所属する遺物については、第179～183図にまとめた。

① SD57

[遺構] Ⅲ①区の東部に所在する。中心軸が直線的であることから、約1.5m離れた位置に所在するSD60の南端部と連結していたことが考えられる。

[遺物] 弥生時代に所属する資料が多く、4984～4988は「壺・甕A」、4989～4996は「壺・甕B」、4997～5000は「壺・甕C」、5002は「壺・甕D」、5007～5014は「壺・甕C」、5016は「鉢B」である。

5021の底面には、葉脈の痕跡が認められる。

5032は、多孔式の甑の底部と推定される。

② SD58

[遺構] Ⅲ①区の東部に所在する。小型の遺構であるが、中心軸は直線的である。

③ SD59

[遺構] Ⅲ①区の東部に所在する。小型の遺構であるが、中心軸は直線的である。

[遺物] 5057～5059は、高台部の器高が低く、下端部が外方向に開く形態であることから、飛鳥Ⅳ型式に所属すると判断される。

④ SD60

[遺構] Ⅲ①区の東部に所在する。中心軸が直線的で、東端部が南方向へ直角に屈曲する。SD57との関連から、原形は矩形の平面形態であったことが推察される。

⑤ SD61

[遺構] Ⅲ①区の北部の中央部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。

⑥ SD62

[遺構] Ⅲ①区の北部の中央部に所在する。SD82の東端部が北方へ分岐した遺構で、SD118と連結していた可能性がある。

⑦ SD63

[遺構] Ⅲ①区の西部に所在する。遺構の北半部が存在しないが、SD126と連結することにより、中心軸が直線的な遺構であったと考えられる。

⑧ SD64

[遺構] Ⅲ①区の中央部に所在する。遺構の方向性と規模が、下位のSD65と共通することから、同遺構と同じ目的で開削されたことが想像される。

⑨ SD65

[遺構] Ⅲ①区の中央部に所在する。中心軸が直線的であることから、約1.2m離れた位置に所在するSD144の北端部と連結していたことが考えられる。

⑩ SD66

[遺構] Ⅲ①区の中央部に所在する。中心軸が直線的であることから、SD140、SD141と同一の流路の可能性はある。

⑪ SD67

[遺構] Ⅲ①区の中央部に所在する。北部ほど幅が広がる傾向があることから、自然遺構の可能性はある。
[遺物] 5081と5082は、高台部の器高が低く、下端部が外方向に開く形態であることから、飛鳥Ⅳ型式に所属すると判断される。

⑫ SD68

[遺構] Ⅲ①区の西部に所在する。歪曲した平面形態を示すことから、自然遺構と判断される。

⑬ SD69

[遺構] Ⅲ②区の北部の中央部に所在する。SD85と同一遺構であった可能性が高い。
[遺物] 5088は扁平な器高で、末端部の折り返しが小さいことから、飛鳥Ⅴ型式に所属することが考えられる。

⑭ SD70

[遺構] Ⅲ②区の北西隅部に所在する。SD56に合流する箇所と、同遺構の一部を掘削した箇所が共存することから、SD56の最終の埋没段階で発生した地割れ状の自然遺構と考えられる。
[遺物] 5096は扁平な器高で、末端部の折り返しが小さいことから、飛鳥Ⅴ型式に所属することが考えられる。

⑮ SD71 (SD08 上部)

[遺構] Ⅲ③区の西部に所在する。SD08が埋没した後に、同一箇所において再開削された遺構である。
[遺物] 5053は扁平な器高で、末端部が外方向へ開く形態であることから、飛鳥Ⅴ型式に所属すると判断される。5054のかえし部は、短かく内傾することから、陶邑MT85型式に所属すると考えられる。

⑯ SD72

[遺構] Ⅲ③区の西部に所在する。SD71の位置に完全に合致するため、直線的な平面形態であるが、遺構の東南部がSD121に連結することから、南部は東方向へ大きく湾曲していた可能性がある。

⑰ SD73

[遺構] Ⅳ①区の南部に所在する。調査範囲が狭小なために、検出部分は少ないが、中心軸が直線的なありかたを示す。

⑱ SD74

[遺構] IV①区の南部において、SD73に平行した位置関係を示す。当該時期に所属する周辺の同一遺構の中では、規模が大型である。

[遺物] J5122の外面には、1本の沈線で、花卉あるいは鱗状の三角形の線刻画が描かれている。

⑲ SD75

[遺構] IV②区の中央部に所在する。SH15が埋没した後の凹地状の地形を利用して開削されている。南半部が存在しないが、横断面が浅い皿型の形態を示す、大型の自然遺構であったと考えられる。

⑳ SD76

[遺構] IV③区の北端部に所在する。歪曲した平面形態であることと、横断面が浅い皿型の形態を示すことから、自然遺構と判断される。

㉑ SD77

[遺構] V①区の南東隅部に所在し、遺構の幅と深さは全体にわたって一定である。中心軸は直線的で、当該地域に認められる方形区画の東西方向の基軸に合致する。

㉒ SD78

[遺構] V②区の北端部に所在する。検出部分は少ないが、中心軸が直線的なありかたを示す。

㉓ SD79

[遺構] I②区からII区の北部を経て、V②区の北西部へ完全に連続した状態を示す遺構である。遺構の幅と深さは全体にわたって一定で、本対象地内では最大規模である。

中心軸は直線的で、当該地域に認められる方形区画の東西方向の基軸に合致する。

SD95の西岸部近くでは、病院関連の大型の掘削坑の下位で、遺構が完全に断絶している。さらに同坑の外郭線の外側には、延伸部分が認められないため、本遺構はSD95の位置で収束していたことがわかる。

[遺物] 土師器碗は、深い器形が多く、高台部の縦断面が逆三角形状のものが主体である。これらは、遺跡に近い場所で生産されたことが考えられるが、5404のように、口縁部や高台部が特徴的な形態を示し、全体が精巧に仕上げられた異質な器形については、遠隔地における生産品の可能性が高いと考えられる。

土師器杯の大部分は、広い底面に対して、口縁部が直線状で、短く仕上げられている点に特徴が見られる。

瓦器碗と皿は、和泉型が主体であるが、5539、5546、5554のように深い器形で、内外面に精密なヘラミガキが施されて精巧に仕上げられたものは、他の型式に所属する可能性がある。

5628と5629は、サイコロ状に再加工されたもので、遊具と考えられる。

5598～5624、5630～5643は混入品である。

㉔ SD80

[遺構] III①区の中央部に所在する、中心軸が直線的な遺構である。SD112、SD116、SD117、SD122と連結していたことが考えられる。

[遺物] J5644は小型品であるが、内耳が装着されていることから、吊下げられて使用されたものである。5660は、未加工の平坦な自然石の中央部が、円形に穿孔されたものである。香川県内の弥生時代の集落遺跡から、いくらか出土しているが、用途が決定されていない。5661は、鍬か鋤の先端部状の形態であることから、農耕具の可能性が高いと考えられる。5662は、1稜線上に連続した使用痕が認めら

れる。

㉔ SD81

[遺構] Ⅲ①区の中央部に所在する。原形は、SD128 に対して直角に合流していた可能性が高い。

中心軸は直線的で、当該地域に認められる方形区画の南北方向の基軸に合致する。

[遺物] 5663～5666 は、高台部が低く、平坦な形態であることから、平城ⅤあるいはⅥ型式に所属することが考えられる。

㉕ SD82

[遺構] Ⅲ①区の中央部に所在する、中心軸が直線的な遺構である。東端部がSD62とSD119に分岐する。

㉖ SD83

[遺構] Ⅲ①区の西部に所在する。平面形態は一見矩形を示すが、遺構の外郭線が著しく歪曲していること、横断面が浅い皿型であること、遺構の東部の幅が極端に狭くなっていることから、自然の凹地形と判断される。

[遺物] 5669と5670は、高台部が低く、平坦な形態であることから、平城ⅤあるいはⅥ型式に所属することが考えられる。

㉗ SD84

[遺構] Ⅲ①区の西部に所在する。遺構の外郭線が大きく湾曲することと、横断面が浅い皿形であることから、自然地形と考えられる。

[遺物] 5675は、板状の原体による長軸方向のナデ調整により、横断面が六角形状に仕上げられていることと、脚部の先端部が外方向に屈曲されて、接地し易い形態に成形されていることから、精巧な造作である。5676～5678は、壺か甗と考えられる。5687は、扁平な器形であることと、口縁端部が薄く、玉縁状に成形されていることから、平城Ⅵ型式に所属すると判断される。5689は、直径が小さい器形で、かえし部が垂直気味に折り曲げられていることから、陶邑TK209型式に所属すると考えられる。

㉘ SD85

[遺構] Ⅲ①区の西部に所在する。SD69と連結することにより、中心軸が東西方向を示す流路を形成していた可能性が高い。

[遺物] 5695～5698は、高台部が扁平な形態であることから、平城ⅤあるいはⅥ型式に所属するものである。

㉙ SD86

[遺構] Ⅲ①区の西部に所在する。SD84の上位に存在するが、両遺構の方向性が共通していることと、外郭線が著しく歪曲していることから、原形は同一遺構であったことが推測される。

[遺物] 5700～5708は、高台部が扁平な形態であることから、平城ⅤあるいはⅥ型式に所属するものである。5709～5712についても、口縁部が薄い器形で、同端部の下方への屈曲が小さいことから、上記の型式に所属するものと判断される。

㊱ SD87

[遺構] Ⅲ②区の南東隅部に所在する。調査時は、SD153と異なる遺構として認識したが、西端部がSD153の屈曲部の平面形態に酷似するため、原形は同一遺構であったと考えられる。

㊲ SD88

[遺構] Ⅲ②区の中央部に所在する。遺構の北半部の中心軸は直線的で、南半部は東方向へ直角に屈曲

している。さらに、東端部は南方向へ直角に屈曲していた状態を示す。

[遺物]5724のつまみ部が扁平な形態であることや、5721や5722のような大型品が含まれることから、IV期に所属する資料が多いことがわかる。

③ SD89

[遺構]Ⅲ②区の南西隅部に所在し、自然の亀裂跡と考えられる。

[遺物]5731の瓦当面の唐草文は、右から左方向へ蔓を伸ばした状態を示す、偏向文様である。出土した瓦の中で、最も古い資料と判断される。

④ SD90

[遺構]Ⅴ①区の南東隅部に所在する。遺構の幅が、西部から東部にかけて狭くなるために、不定形な平面形態を示している。西端部の底面的一部分は、平面形態が不整形を示す凹地形である。

⑤ SD91

[遺構]Ⅴ①区の南東隅部に所在する。平面形態が著しく歪曲して、底面の凹凸が激しいことがわかる。

しかしながら、遺構の所在地がSD77とSD92に近接することと、中心軸の方向性が両流路跡に酷似することから、遺構の成因は、人工的な流路の開削により、広い範囲にわたって、東西方向の凹地形が形成されていたためと考えられる。

[遺物]5739～5740、5744、5745、5748、5749は、体部が長胴の形態を示す器種である。5752～5758は、口縁部が内湾気味に立ち上がる形態であるために、やや深い器形である。5769は、器壁が厚く、全体が扁平な器形の特殊な器種である。5770～5807は、短い口縁部が、横方向へ直線状に開口する形態であるために、浅い器形である。5812の底面には、ヘラ状の工具による、「井」字状の記号文が認められる。羽釜は、口縁部が屈曲して、斜め上方へ開口する器形が主体であるが、5814のように、同部が直立するものが混在する。5836～5838は、長脚が装着された器種で、口縁部と底部の屈曲箇所が明瞭な点特徴的である。5844の外面に貼り付けられた粘土塊は、把手様に機能していたことが考えられる。5845～5848の高台部は、縦断面が逆三角形を示す。5857～5881は大型品で、平城Ⅶ型式に所属することが考えられる。5901～5912の高台部は、扁平な形態であることから、平城ⅤあるいはⅥ型式に所属すると判断される。5930～5933についても、扁平な器形であることから、上記型式に所属することが考えられる。5959～5964の原形は、ひさしの上部の左右2隅部が、直角に屈曲する直線状の形態である。5939～5957、5974～5979は混入品である。

⑥ SD92

[遺構]Ⅴ①区の南東隅部に所在する。上位にSD77が開削されているが、同流路跡の方向性に合致することから、同一箇所において再掘削された遺構と判断される。

[遺物]5991～5999は混入品である。

⑦ SD93

[遺構]Ⅴ①区の南端部の中央部に所在する。検出部分が少ないために、詳細は不明である。

[遺物]6005は、口縁部と底面の屈曲箇所が明瞭な器種である。6007の高台部は、形骸化したものである。6015～6023は混入品である。

⑧ SD94

[遺構]Ⅴ②区の北西隅部に所在する。検出部分は少ないが、SD173に近接して、平行する位置関係にあることと、両遺構の埋土が共通することから、原形は同一流路であった可能性が高く、深い箇所だけ

が残存したものと判断される。

[遺物] 6030 及び 6031 は混入品である。

③⑨ SD95

[遺構] Ⅲ①区の北東隅部からⅢ③区の北部の中央部にかけて所在する。中心軸は南から北西方向へ緩く湾曲するもののほぼ直線的で、当該地域に認められる方形区画の南北方向の基軸に合致する。

④⑩ SD96

[遺構] Ⅲ③区の北東部に所在する。SD56 が埋没した後の浅い凹地形の縁辺部に発生した、亀裂状の遺構である。

[遺物] 6045 及び 6046 は混入品である。

④⑪ SD97

[遺構] Ⅲ②区の南部の中央部に所在する。検出部分が少ないため、方形区画の南北方向の基軸に合致した人工的な遺構か、SD91 に連結する凹地形の一部か判断が困難である。

[遺物] 6054 及び 6055 は、扁平な器形で、器壁が厚い点に特徴がある。6075～6089、6092～6121 のように、口縁部が直線状に広く開口する器形が、供膳具の主要な器種である。羽釜は、口縁部が外傾する器種が主体で、鏝部の先端部が、上方へ屈曲する形態のものが多く認められる。6174 の高台部と底面の接合箇所には、棒状工具の先端部の圧痕が、等間隔に施されている。

④⑫ SD98

[遺構] Ⅲ②区の南部の中央部に所在し、SD77 に連結する直線的な遺構である。

④⑬ SD99

[遺構] Ⅲ②区の南端部に所在する。断続的に検出されているが、SD92 に連結することが考えられる。

[遺物] 6255 は、口径に比べて器高が高い器形で、体部から口縁部にかけて、外反気味に開口する特殊な形態である。6264～6266 は、器高が極端に低い器形である。

④⑭ SD100

[遺構] Ⅰ①区の西端部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。

④⑮ SD101

[遺構] Ⅱ区の中央部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。

④⑯ SD102

[遺構] Ⅱ区の北部に所在する。検出部分は少ないが、中心軸が直線的なありかたを示す。

④⑰ SD103

[遺構] Ⅱ区の北部に所在し、SD79 に平行な位置関係にある。検出部分は少ないが、中心軸が直線的なありかたを示す。

④⑱ SD104

[遺構] Ⅱ区の北部に所在し、SD102 に平行な位置関係にある。中心軸が直線的で、当該地域に認められる方形区画の南北方向の基軸に合致する。

④⑲ SD105

[遺構] Ⅲ①区の東部に所在する。中心軸の方向性にもとづくと、SD66、SD141、SD140 に連結していた可能性がある。

[遺物]5063～5065は、高台部の器高が低く、下端部が外方向に開く形態であることから、飛鳥Ⅳ型式に所属すると判断される。

⑩ SD106

[遺構]Ⅲ①区の東部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。

⑪ SD107

[遺構]Ⅲ①区の東部に所在する。遺構の規模は小さいが、遺構の幅と深さは全体にわたって一定で、中心軸は直線的である。同軸は当該地域に認められる方形区画の南北方向の基軸に合致する。

⑫ SD108

[遺構]Ⅲ①区の東部に所在する。中心軸は直線的で、当該地域に認められる方形区画の東西方向の基軸に合致するため、SD107と直角に交わった位置関係となっている。

⑬ SD111

[遺構]Ⅲ①区の東部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。同軸は当該地域に認められる方形区画の東西方向の基軸に合致する。

⑭ SD112

[遺構]Ⅲ①区の東部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。同軸は当該地域に認められる方形区画の東西方向の基軸に合致する。

⑮ SD113

[遺構]Ⅲ①区の東部に所在する。中心軸は直線的で、当該地域に認められる方形区画の東西方向の基軸に合致する。同軸の方向性と遺構の規模から、SD115と同一の流路跡と考えられる。

⑯ SD114

[遺構]Ⅲ①区の東部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。

⑰ SD115

[遺構]Ⅲ①区の東部に所在する。中心軸は直線的で、当該地域に認められる方形区画の東西方向の基軸に合致する。

⑱ SD117

[遺構]Ⅲ①区の中央部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。

⑲ SD118

[遺構]Ⅲ①区の中央部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。同軸の方向性と遺構の規模から、SD62と同一の流路跡と考えられる。

⑳ SD124

[遺構]Ⅲ①区の西部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。

㉑ SD125

[遺構]Ⅲ①区の西部に所在する。検出した箇所は少ないが、SD126に連結していたことが考えられる。

㉒ SD127

[遺構]Ⅲ①区の西部に所在する。中心軸が直線的な東西、南北の2方向の流路跡が、直角に連結して、平面形態が転倒したL字形を示す遺構である。全体の規模は小型であるが、各流路跡の中心軸の方向性は、当該地域に認められる方形区画の東西、南北の2方向の基軸に合致する。

⑥③ SD128

[遺構]Ⅲ①区の西部に所在する。遺構の東部の幅が広く、SD62との連結部分は、南部の外郭線が不整な曲線を示す平面形態である。

⑥④ SD129

[遺構]Ⅲ①区の西部に所在する。遺構の東部ほど、幅が狭くなる平面形態である。中心軸は直線的である。

⑥⑤ SD130

[遺構]Ⅲ①区の西部に所在する。遺構の東部ほど、幅が狭くなる平面形態である。中心軸は直線的である。

⑥⑥ SD133、SD134

[遺構]Ⅲ①区の中央部に所在する。東西、南北の2方向の流路跡が交差して、ト字形の平面形態を示す。各流路跡の中心軸は直線的で、南北方向の遺構の中心軸が当該地域に認められる方形区画の南北方向の基軸に合致する。

⑥⑦ SD140

[遺構]Ⅲ①区の西部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。

⑥⑧ SD141

[遺構]Ⅲ①区の西部に所在する。中心軸の方向性と規模から、SD140と同一流路跡の可能性が高い。

⑥⑨ SD147、SD149

[遺構]Ⅲ①区の西部に所在する。両流路跡の中心軸は直線的で、直角に連結するために、平面形態は逆L字形を示す。

⑦⑩ SD150

[遺構]Ⅲ②区の東南隅部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。

⑦⑪ SD151

[遺構]Ⅲ②区の東南隅部に所在する。平面形態は、整然とした半円形を示すが、遺構の幅が一定でないことから、自然遺構の可能性が高い。

⑦⑫ SD152

[遺構]Ⅲ②区の東南隅部に所在し、遺構の幅と深さは全体にわたって一定である。

⑦⑬ SD153

[遺構]Ⅲ②区の東南隅部に所在する。東西、南北の2方向に分岐した平面形態を示し、各流路跡の中心軸は直線的である。各流路跡の幅と深さは全体にわたって一定である。

⑦⑭ SD154

[遺構]Ⅲ②区の中央部に所在し、遺構の幅と深さは全体にわたって一定である。全体の平面形態は緩やかなS字形で、中心軸は概ね東西方向を示す。

⑦⑮ SD157、SD158、SD159

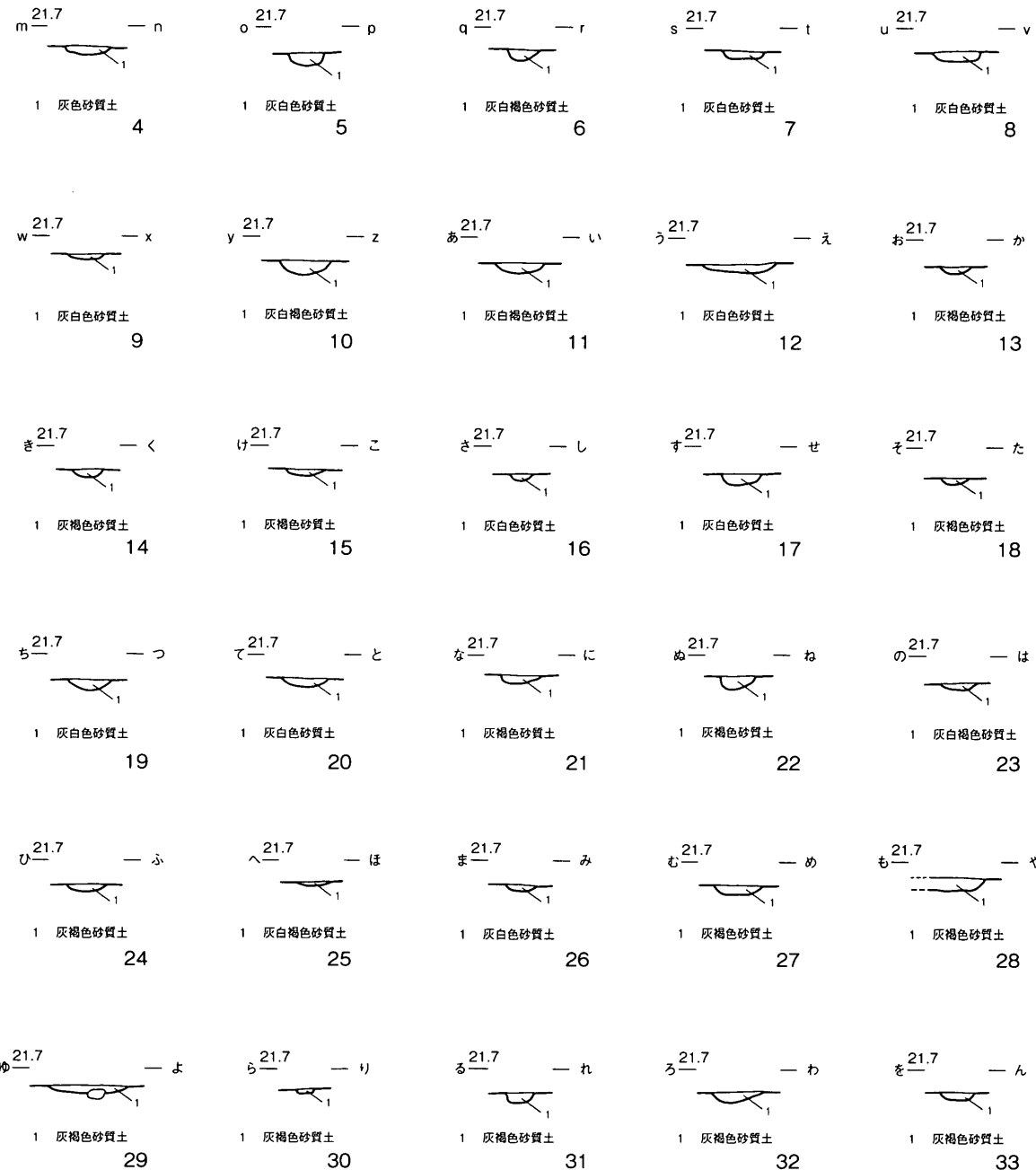
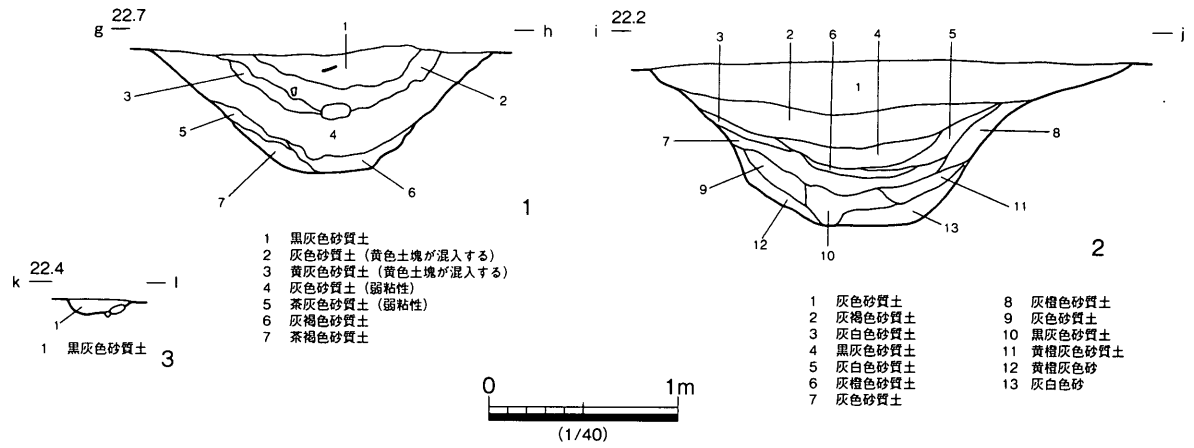
[遺構]Ⅲ②区の南西隅部に所在し、SD89と同様の自然の亀裂跡と考えられる。

⑦⑯ SD161

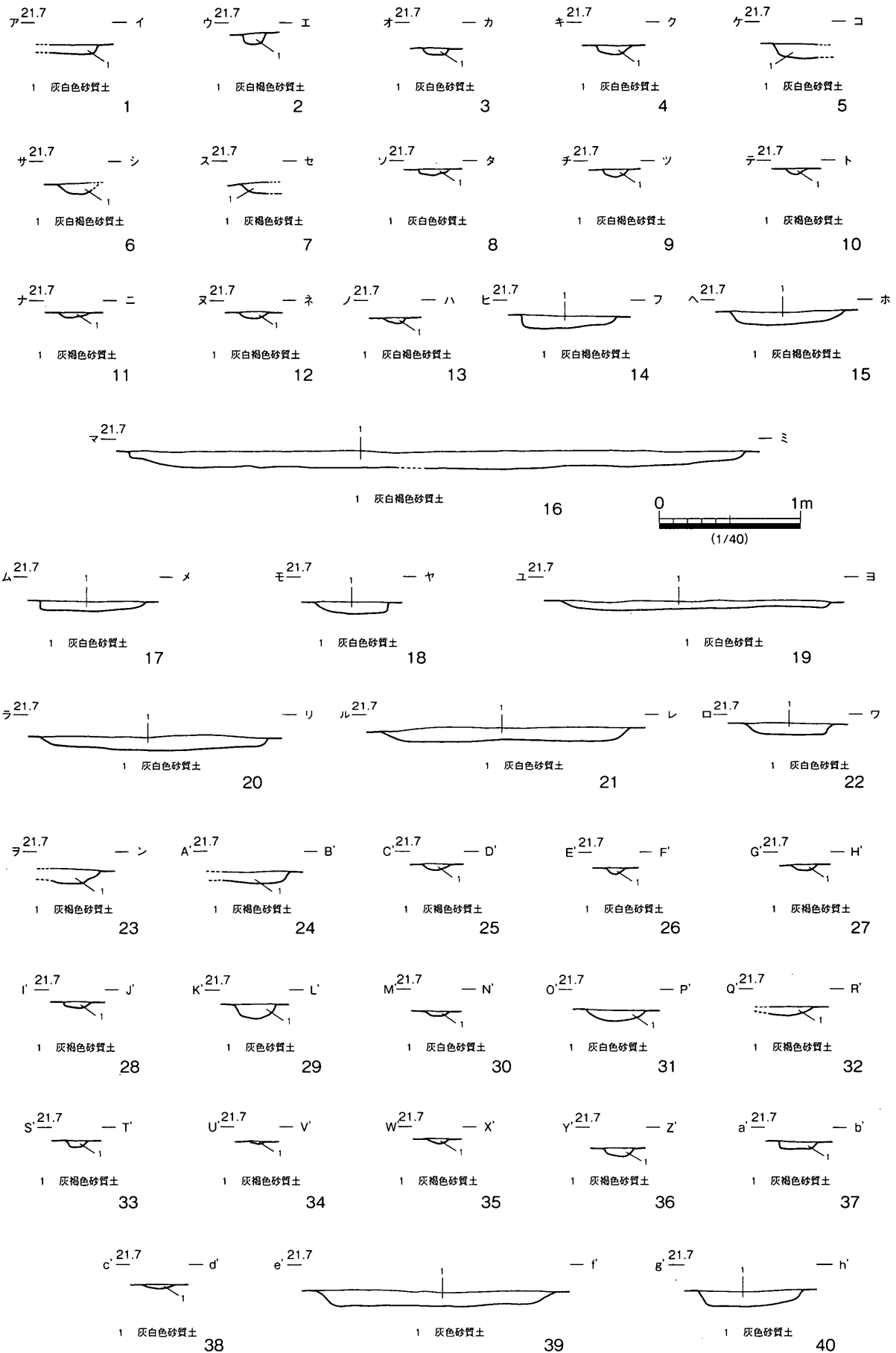
[遺構]Ⅳ①区の中央部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定で、中心軸は直線的である。

⑦⑰ SD162

[遺構]Ⅳ③区の南端部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定で、中心軸は直線的である。



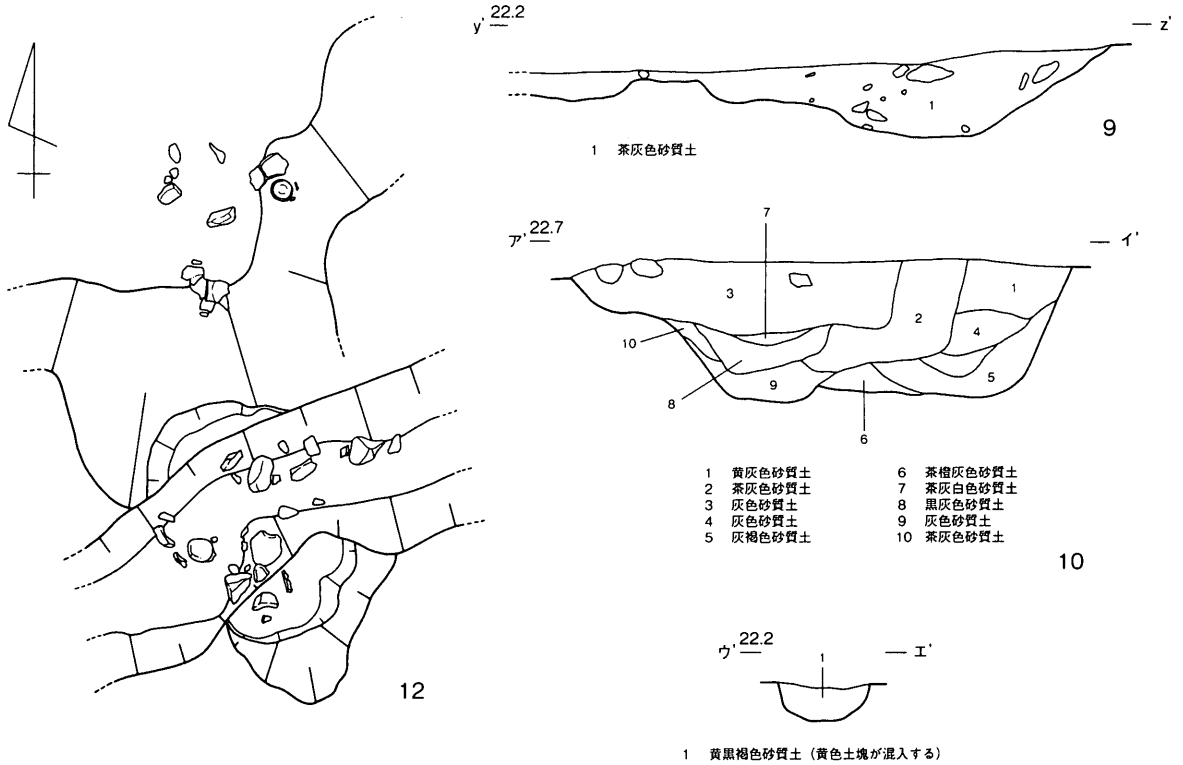
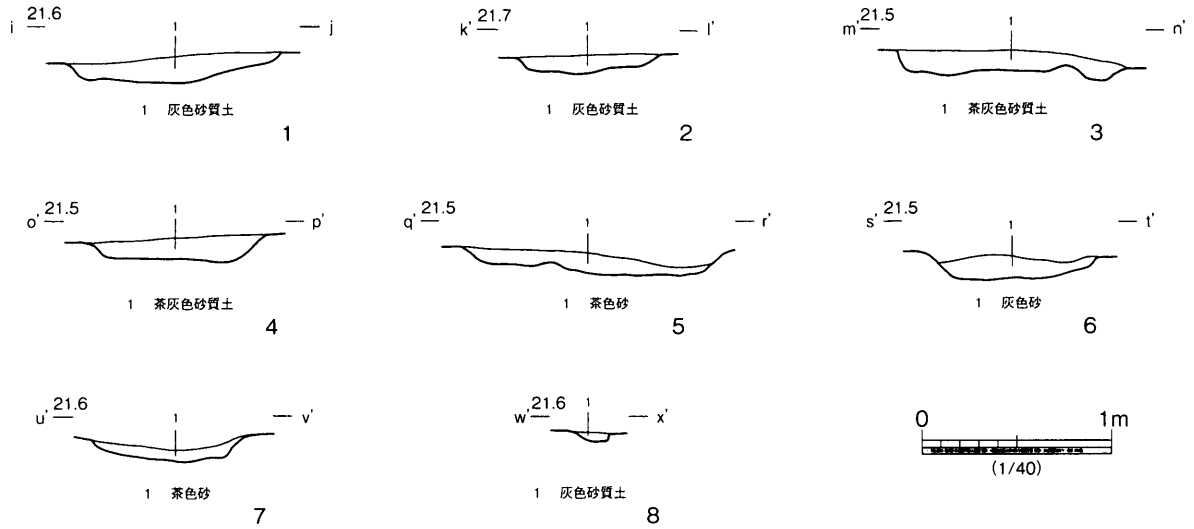
第 192 図 溝状遺構遺構実測図 10(1:SD79,2:SD79,3:SD100,4:SD57,5:SD58,6:SD59,7:SD105,8:SD105,9:SD80,10:SD60,11:SD60,12:SD60,13:SD106,14:SD107,15:SD108,16:SD109,17:SD110,18:SD111,19:SD112,20:SD113,21:SD114,22:SD115,23:SD116,24:SD117,25:SD61,26:SD118,27:SD81,28:SD81,29:SD81,30:SD119,31:SD62,32:SD82,33:SD120)



第 193 図 溝状遺構遺構実測図 11 (1:SD121,2:SD122,3:SD123,4:SD124,5:SD125,6:SD126,7:SD63,8:SD64,9:SD65,10:SD66,11:SD66,12:

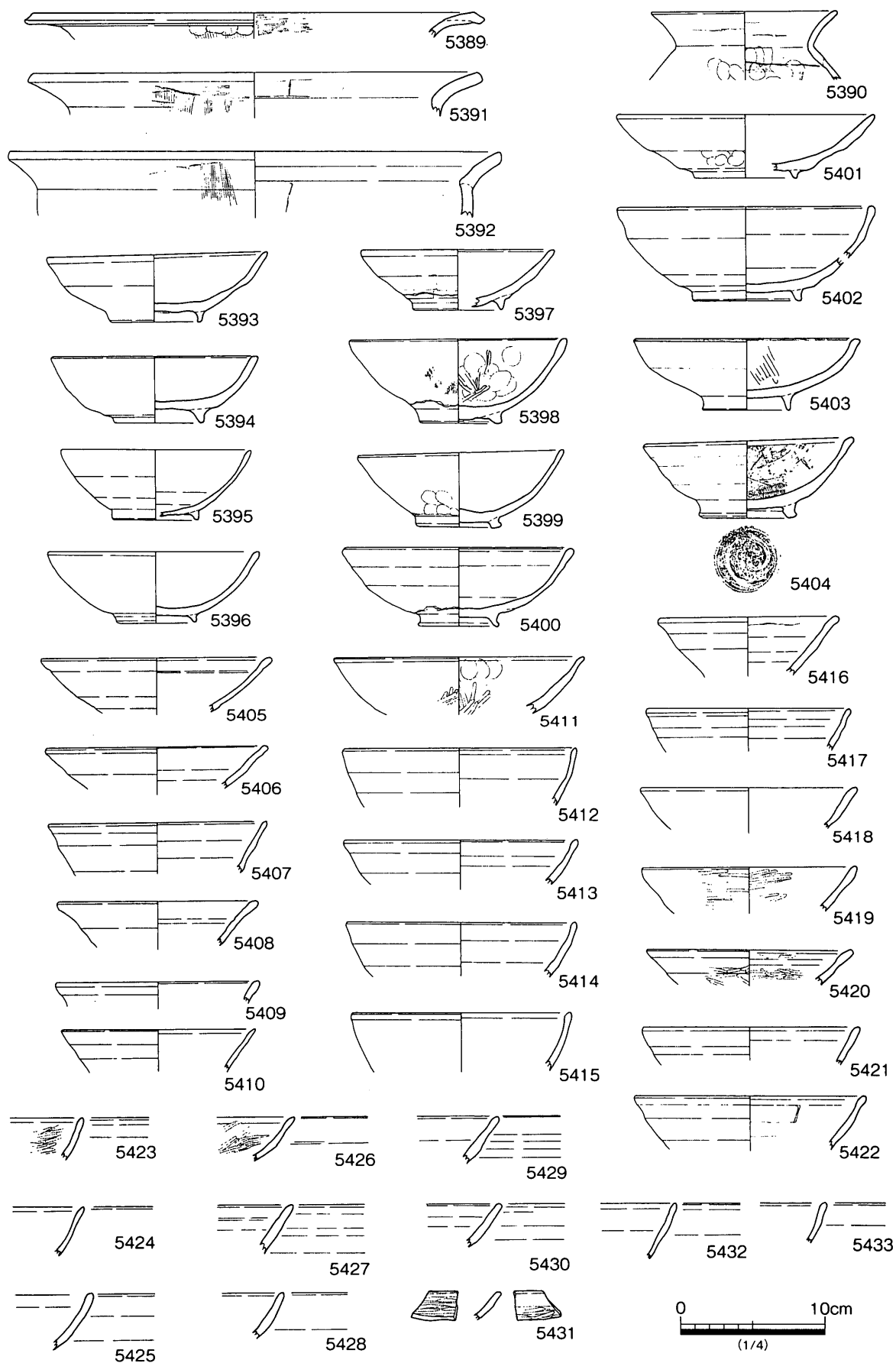
SD127,13:SD127,14:SD67,15:SD67,16:SD67,17:SD68,18:SD68,19:SD83,20:SD83,21:SD83,22:SD83,23:SD69,24:SD85,25:SD131,26:SD132,27:SD133,28:SD134,29:

SD135,30:SD136,31:SD137,32:SD139,33:SD140,34:SD142,35:SD143,36:SD147,37:SD148,38:SD149,39:SD86,40:SD86)

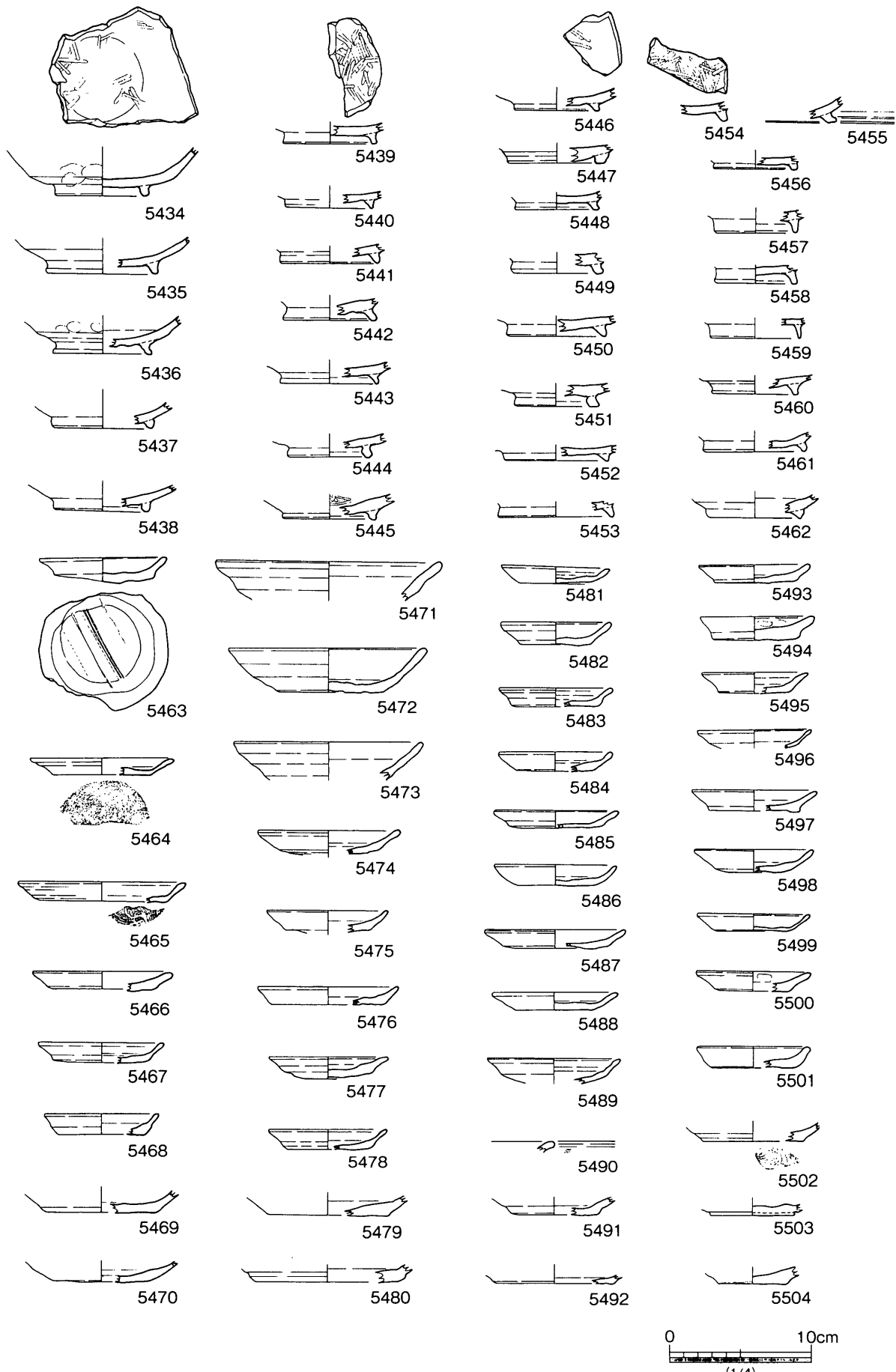


第 194 図 溝状遺構遺構実測図 12

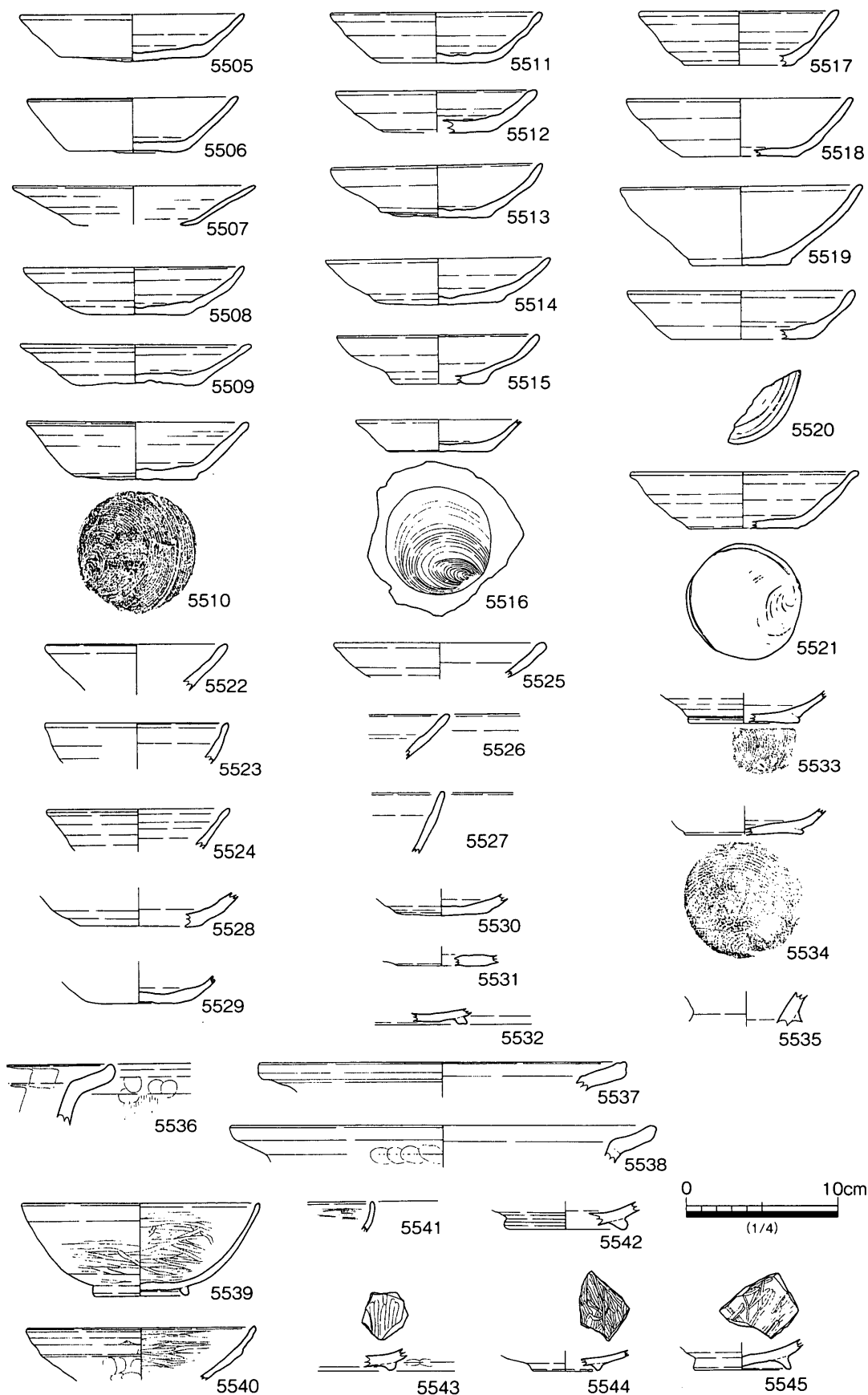
(1:SD150,2:SD150,3:SD151,4:SD151,5:SD152,6:SD153,7:SD153,8:SD87,9:SD91,10:SD91,11:SD77,12:SD77・SD91)



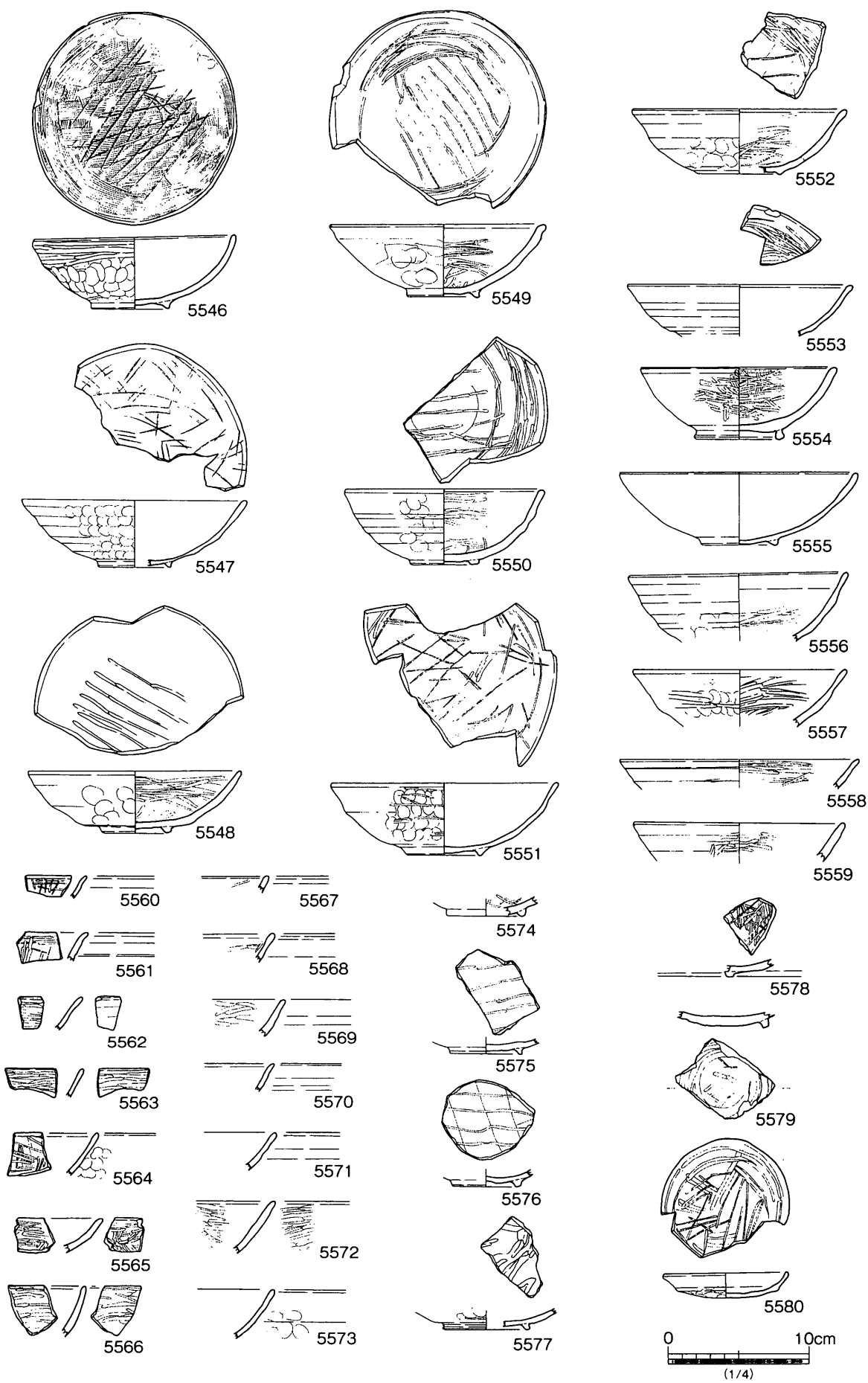
第 195 図 溝状遺構遺物実測図 106(5389 ~ 5433:SD79)



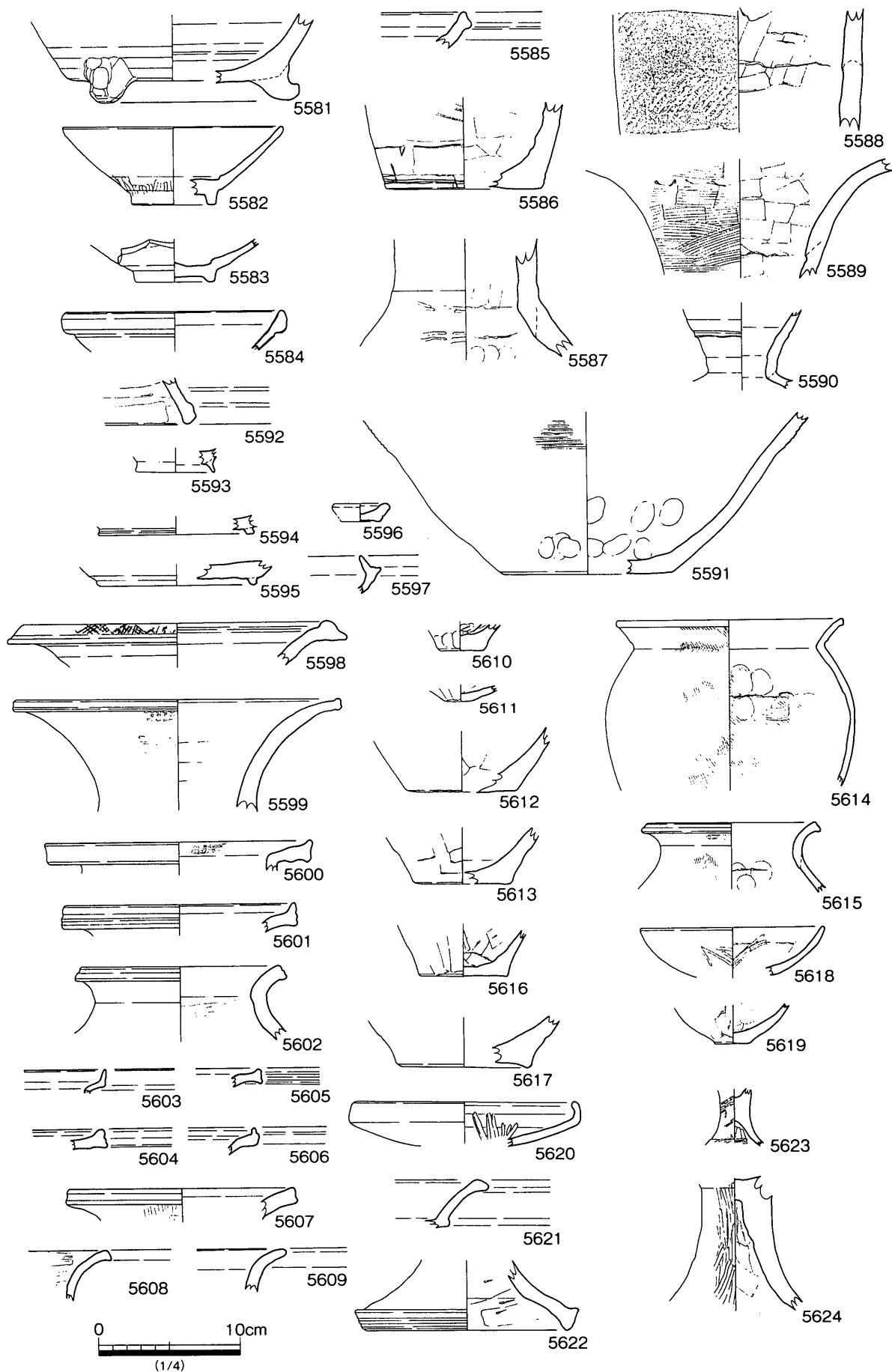
第 196 図 溝状遺構遺物実測図 107(5434 ~ 5504:SD79)



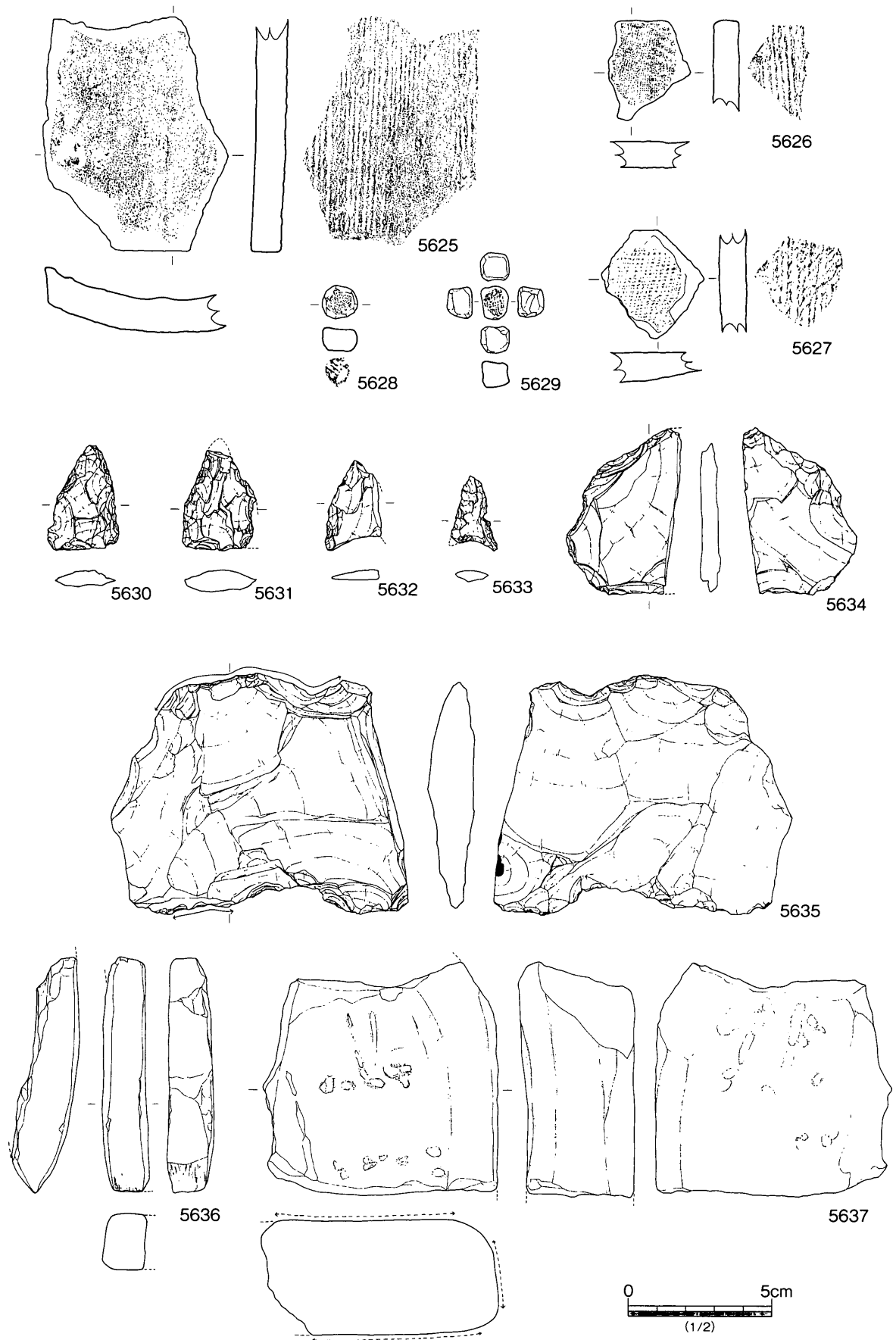
第 197 図 溝状遺構遺物実測図 108(5505 ~ 5545:SD79)



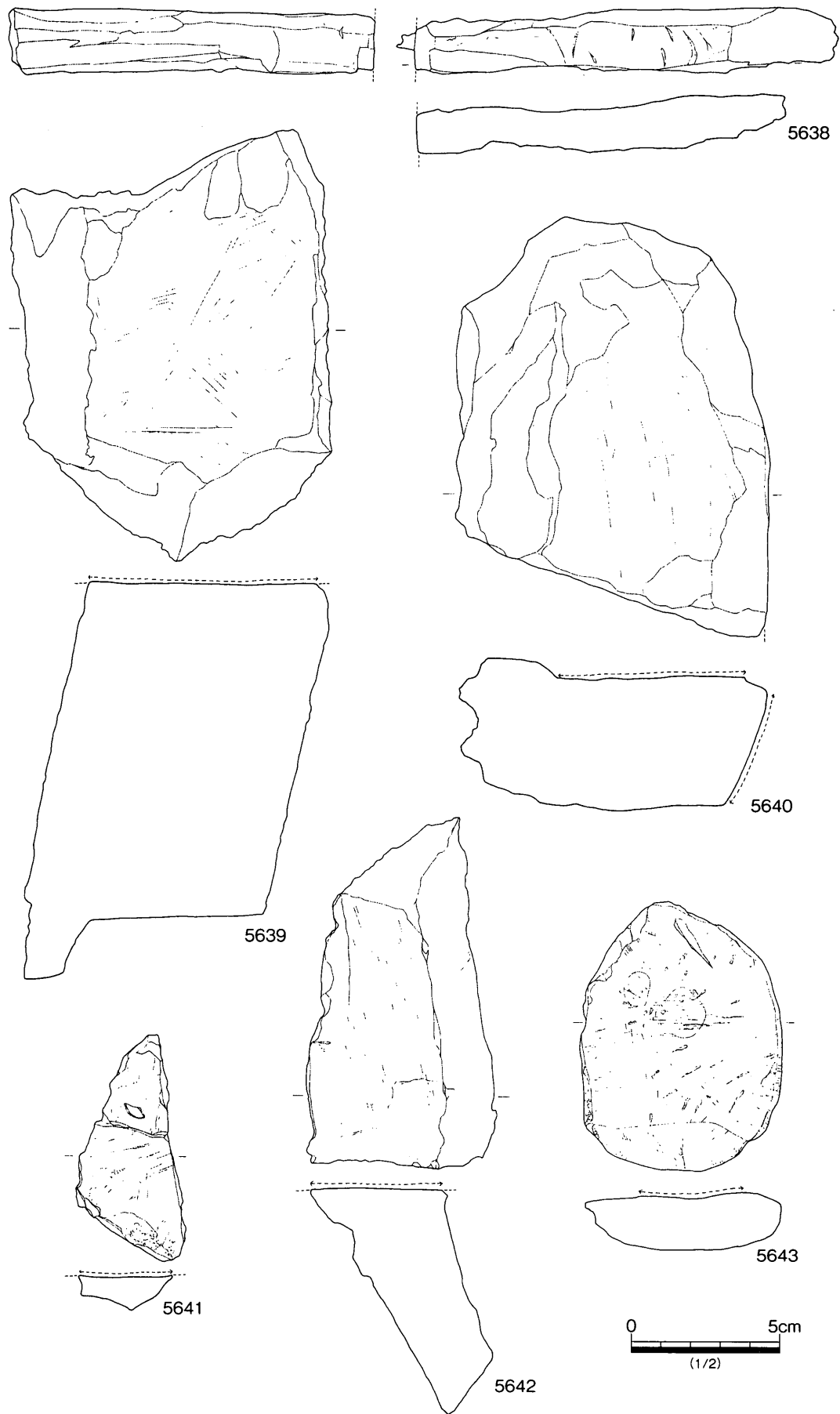
第 198 図 溝状遺構遺物実測図 109(5546 ~ 5580:SD79)



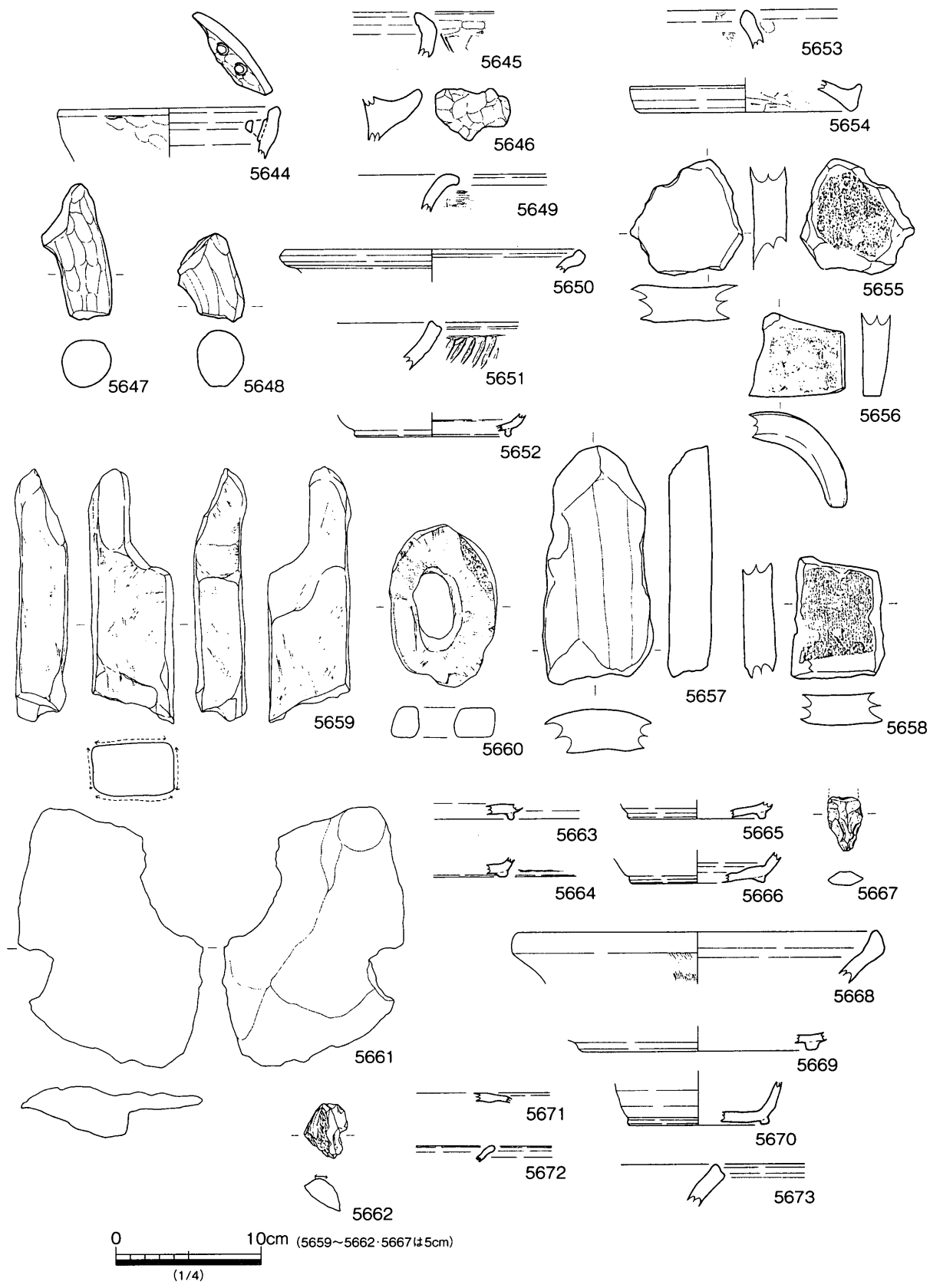
第 199 図 溝状遺構遺物実測図 110(5581 ~ 5624:SD79)



第 200 図 溝状遺構遺物実測図 111(5625 ~ 5637:SD79)

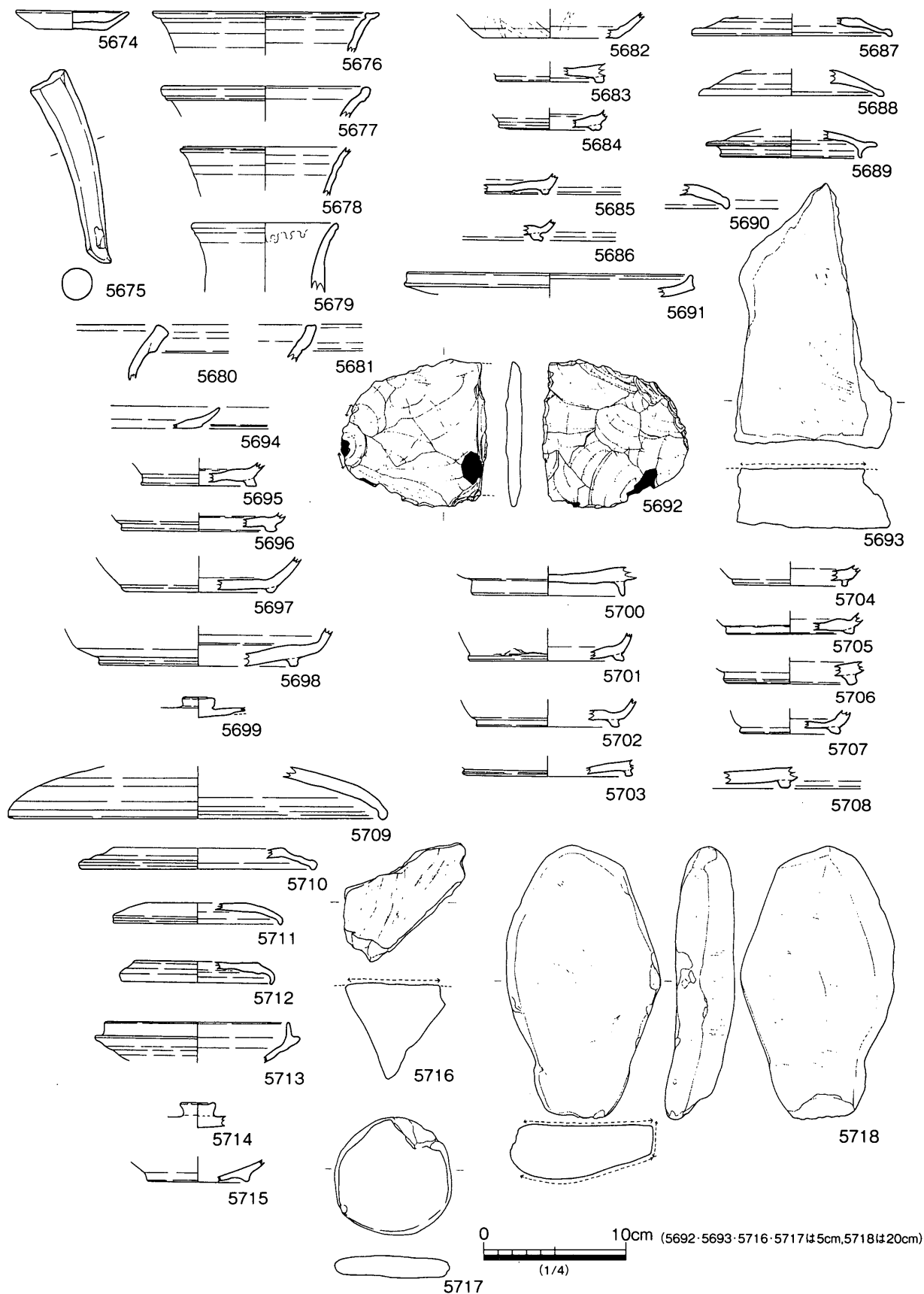


第 201 図 溝状遺構遺物実測図 112(5638 ~ 5643:SD79)



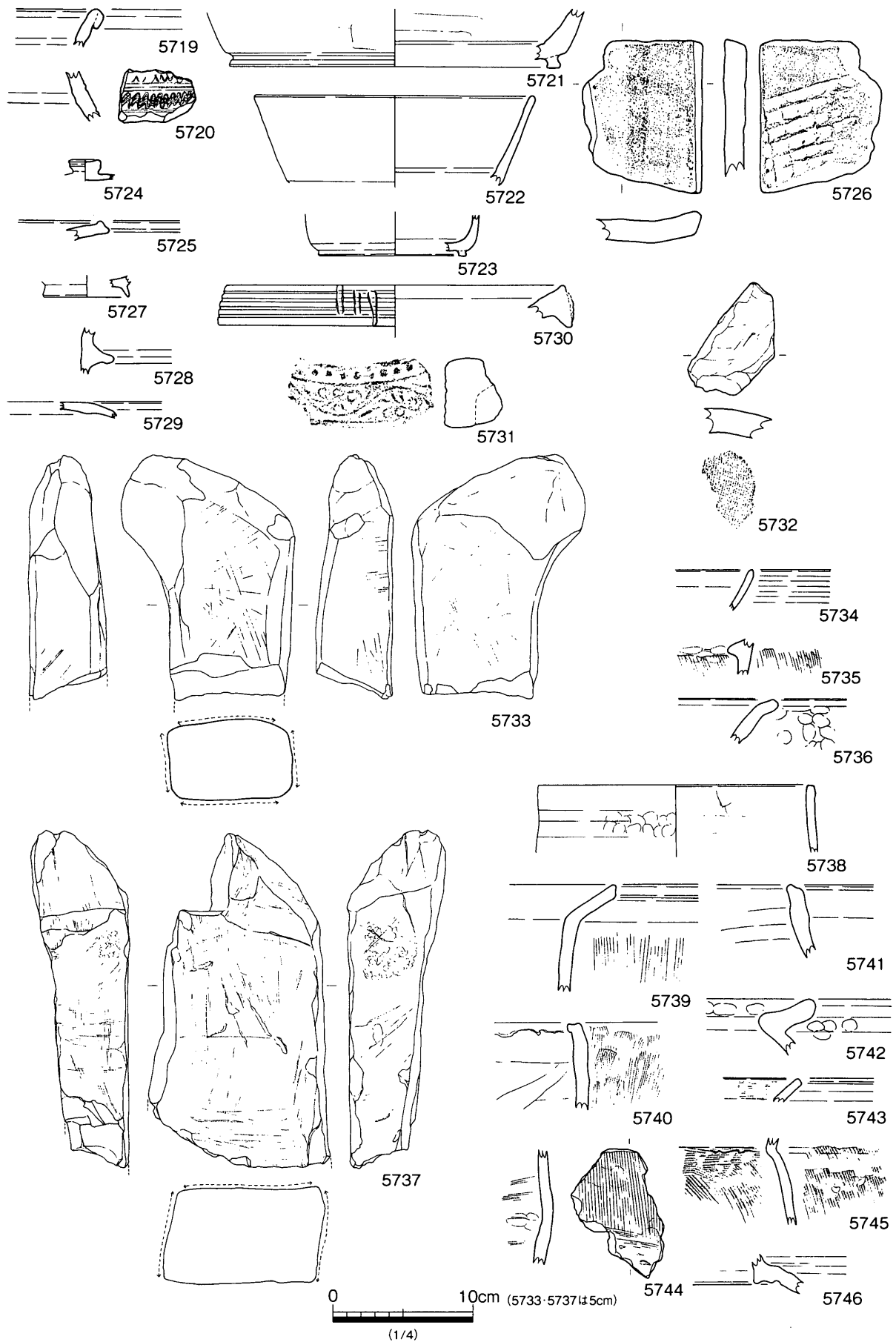
第 202 図 溝状遺構遺物実測図 113

(5644 ~ 5662:SD80,5663 ~ 5666:SD81,5667:SD82,5668 ~ 5673:SD83)



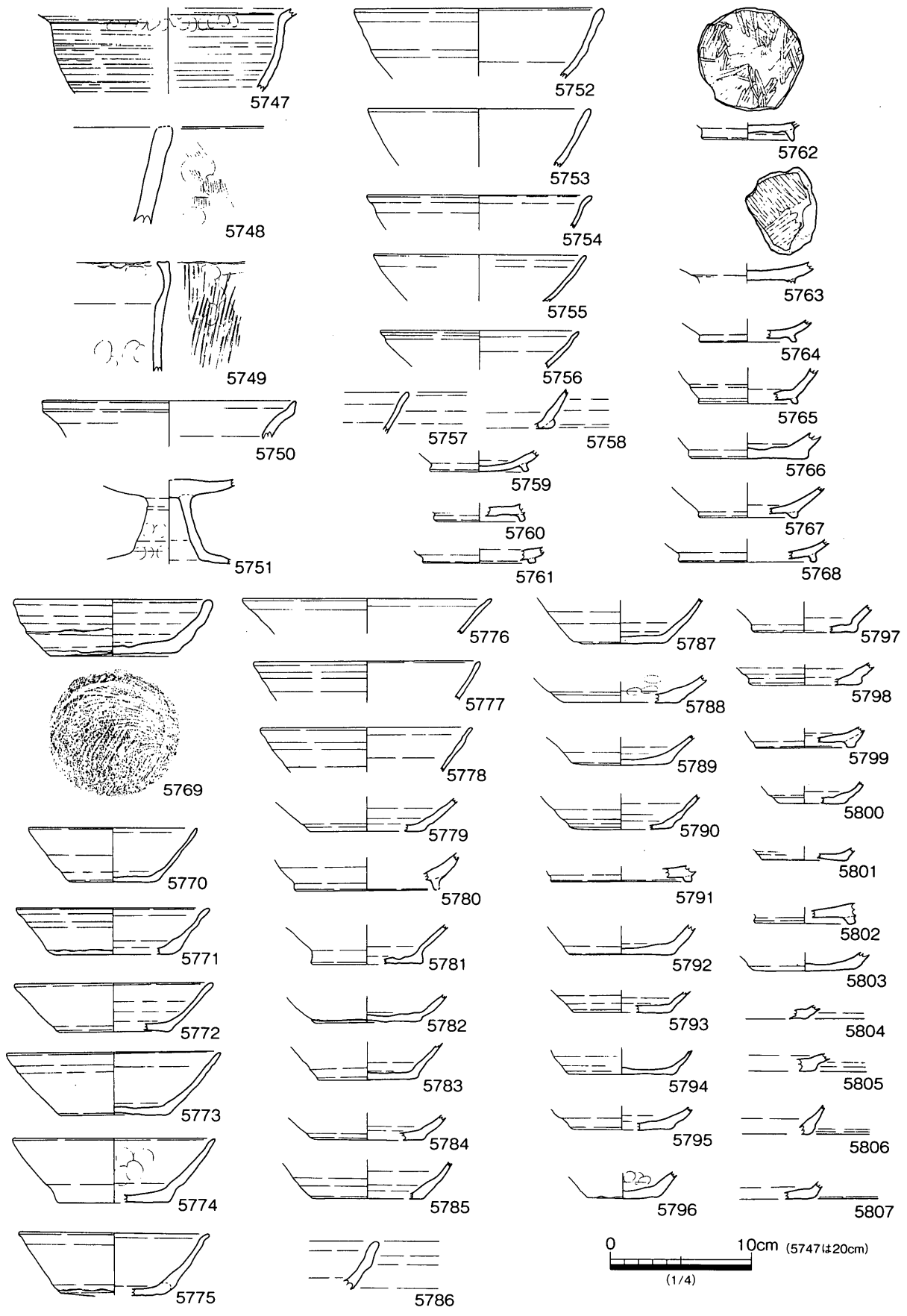
第 203 図 溝状遺構遺物実測図 114

(5674 ~ 5693:SD84, 5694 ~ 5699:SD85, 5700 ~ 5717:SD86, 5718:SD08)

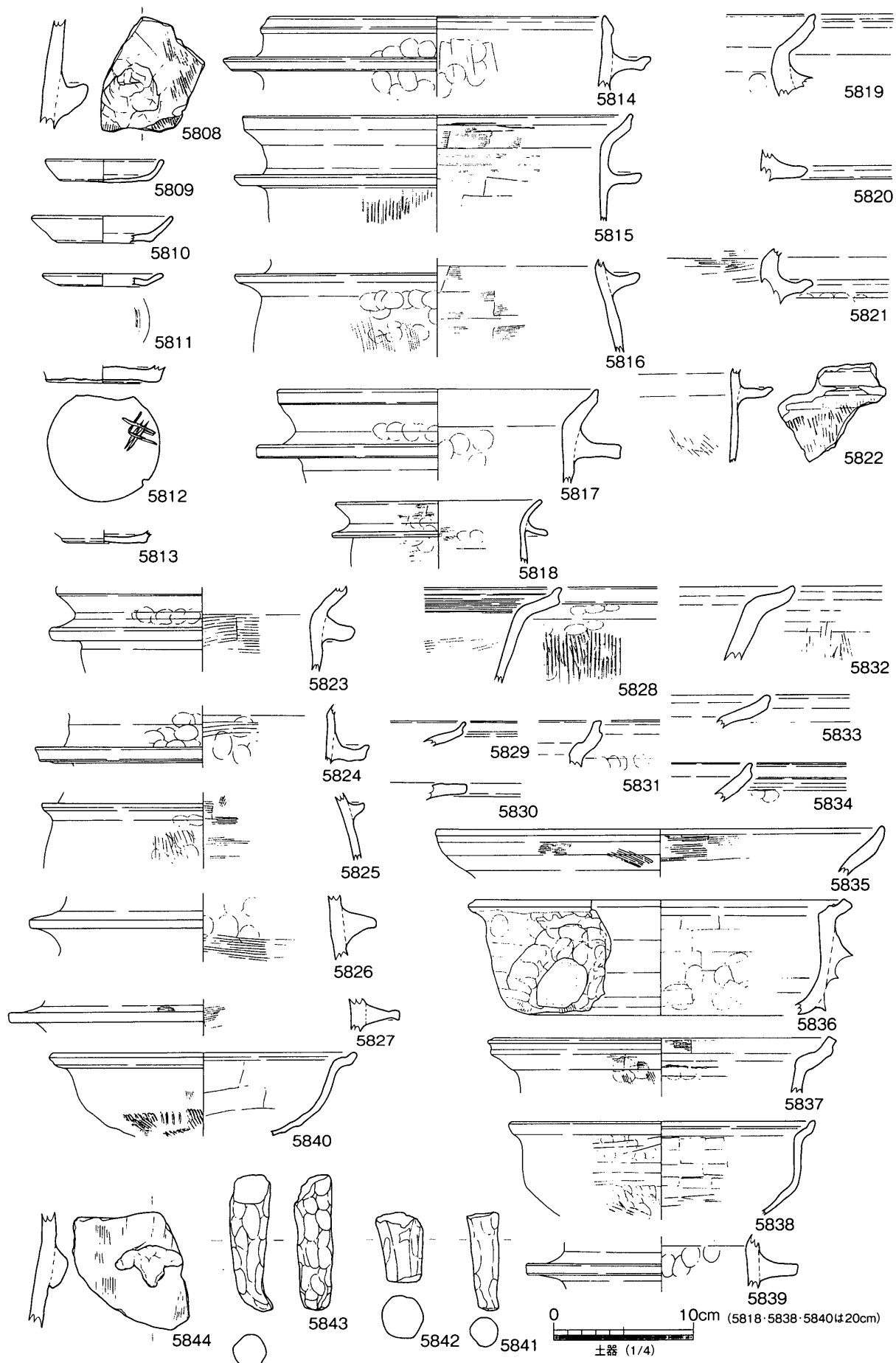


第 204 図 溝状遺構遺物実測図 115

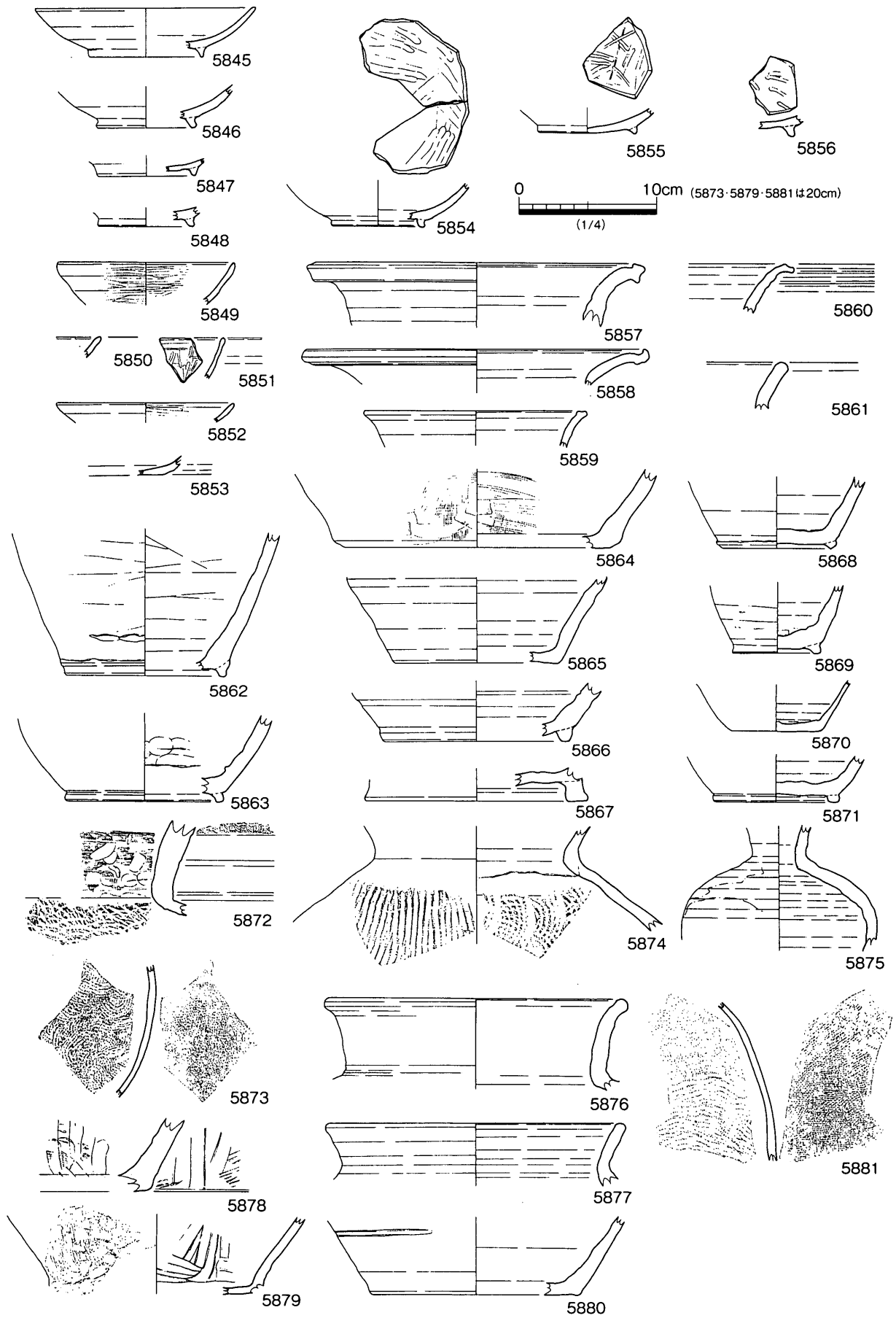
(5719 ~ 5726:SD88, 5727 ~ 5733:SD89, 5734 ~ 5736:SD90, 5737:SD18, 5738 ~ 5746:SD91)



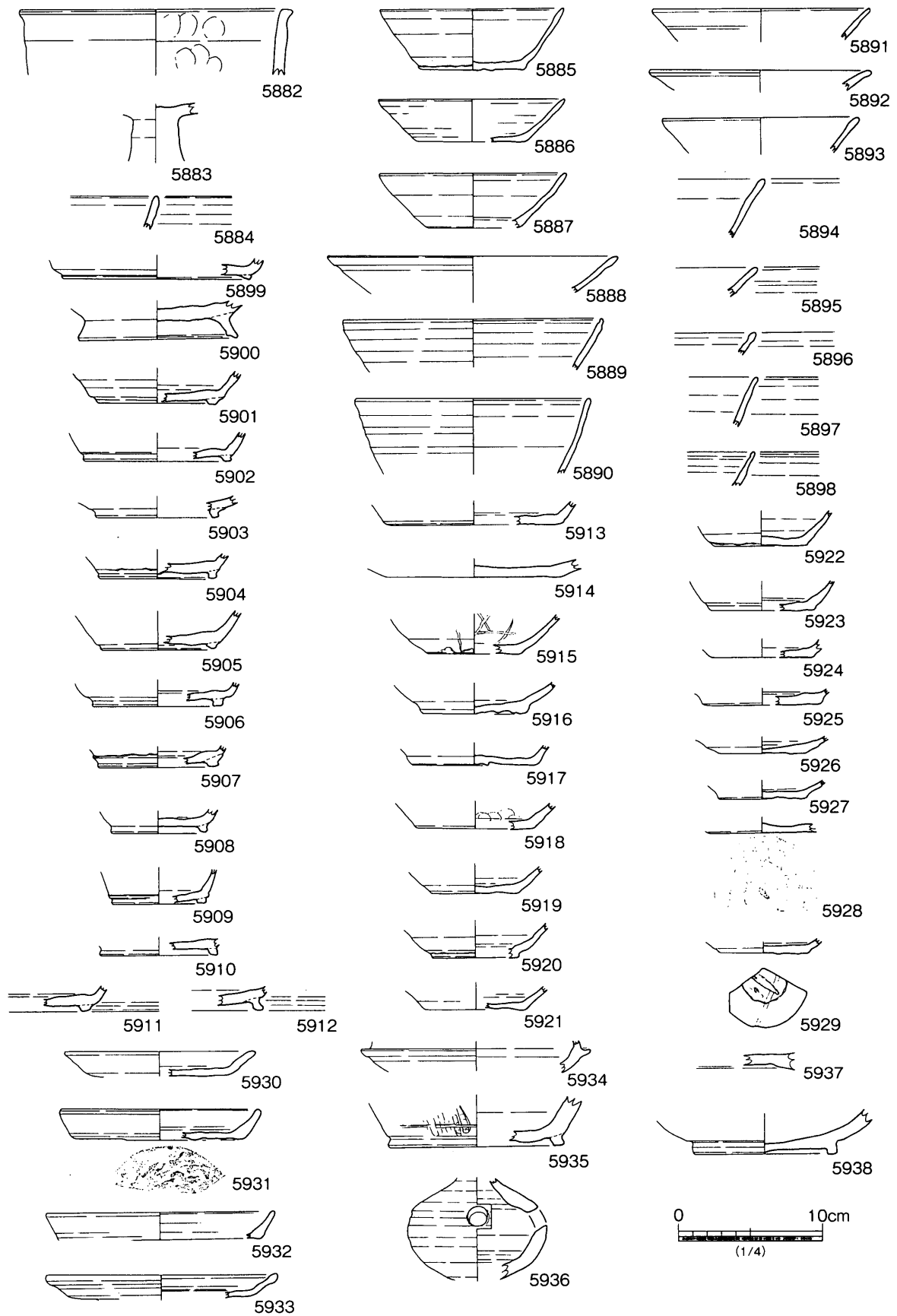
第 205 図 溝状遺構遺物実測図 116(5747 ~ 5807:SD91)



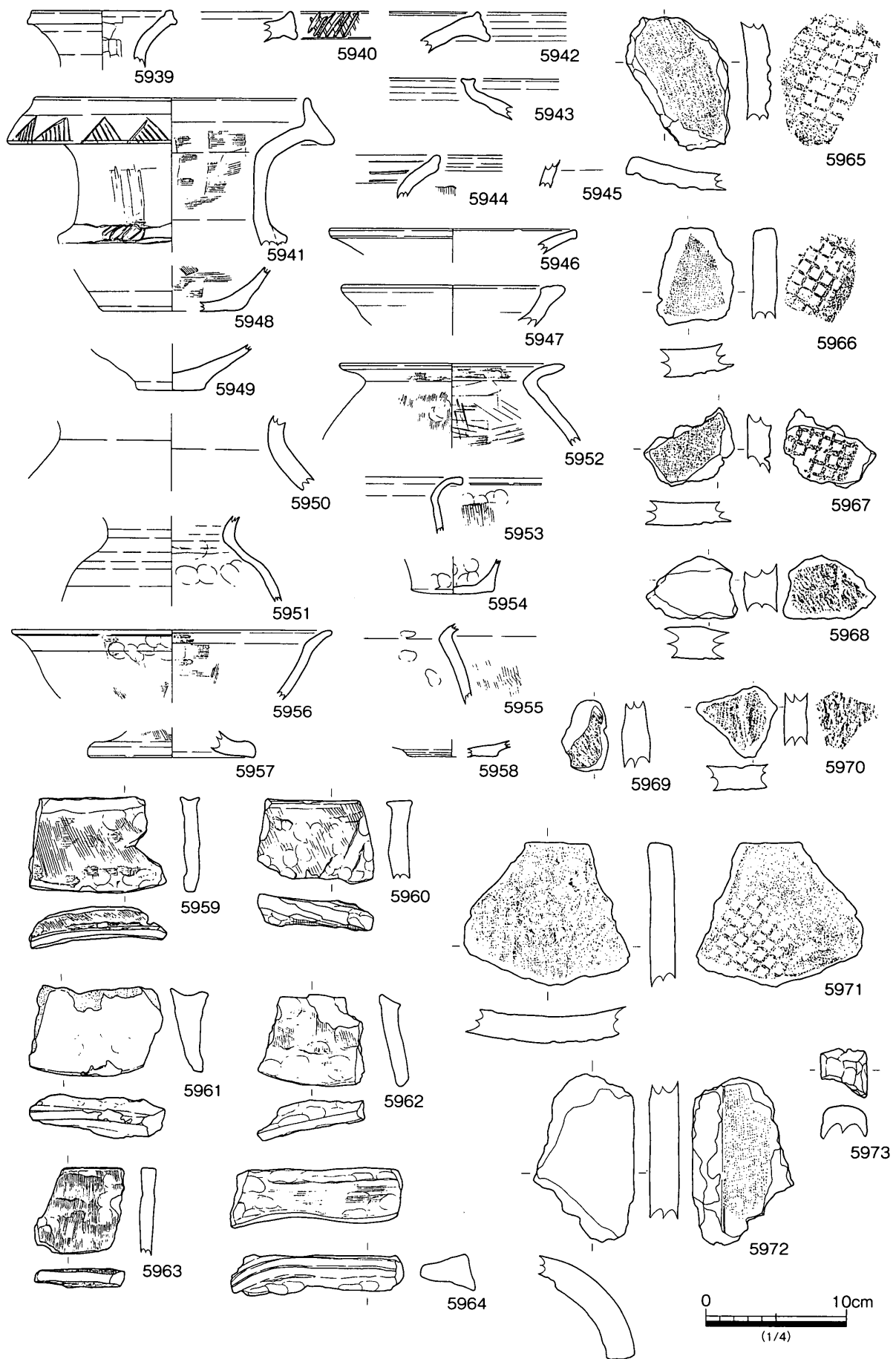
第 206 図 溝状遺構遺物実測図 117(5808 ~ 5839:SD91)



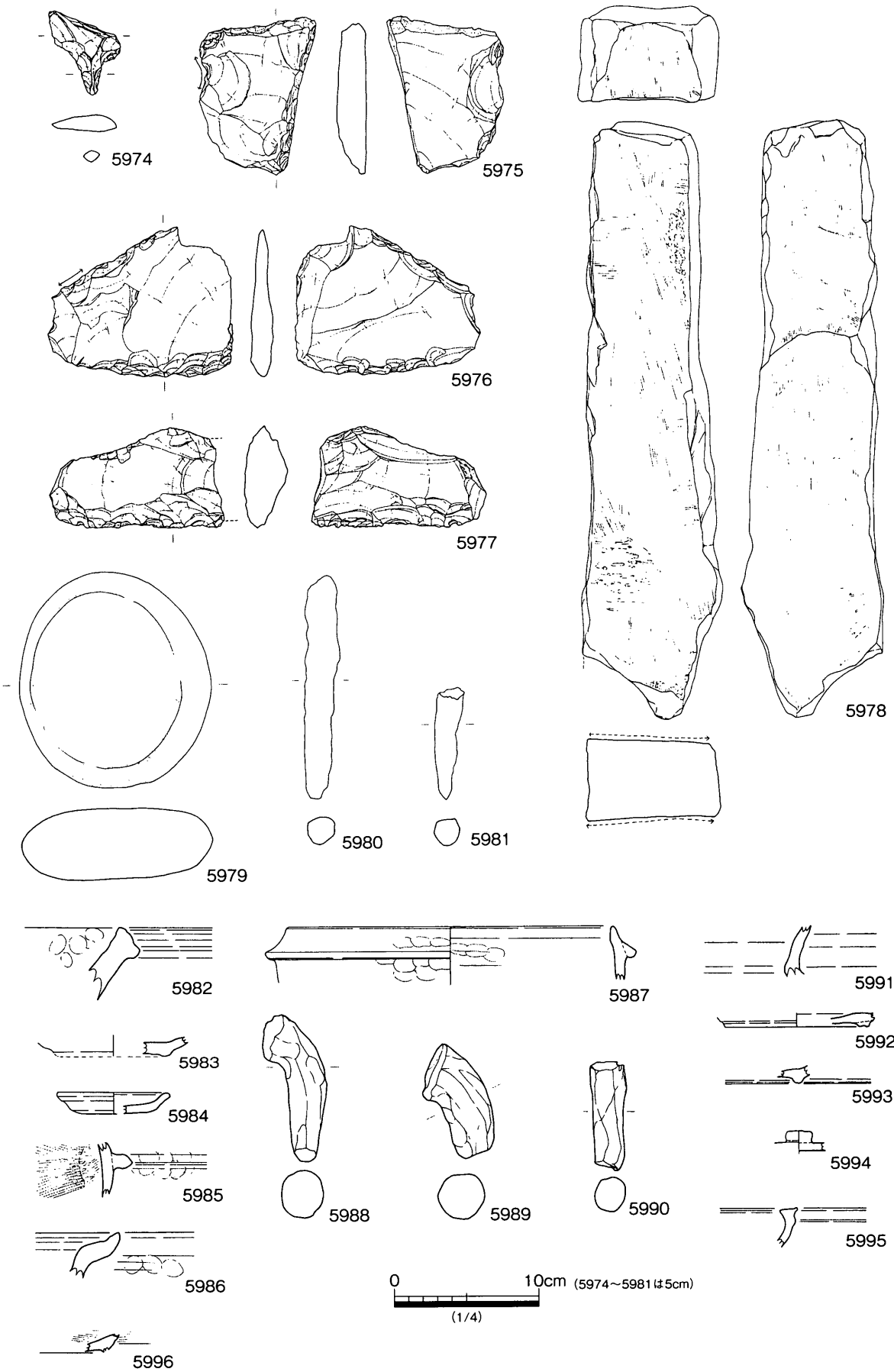
第 207 图 沟状遺構遺物実測図 118(5845 ~ 5881:SD91)



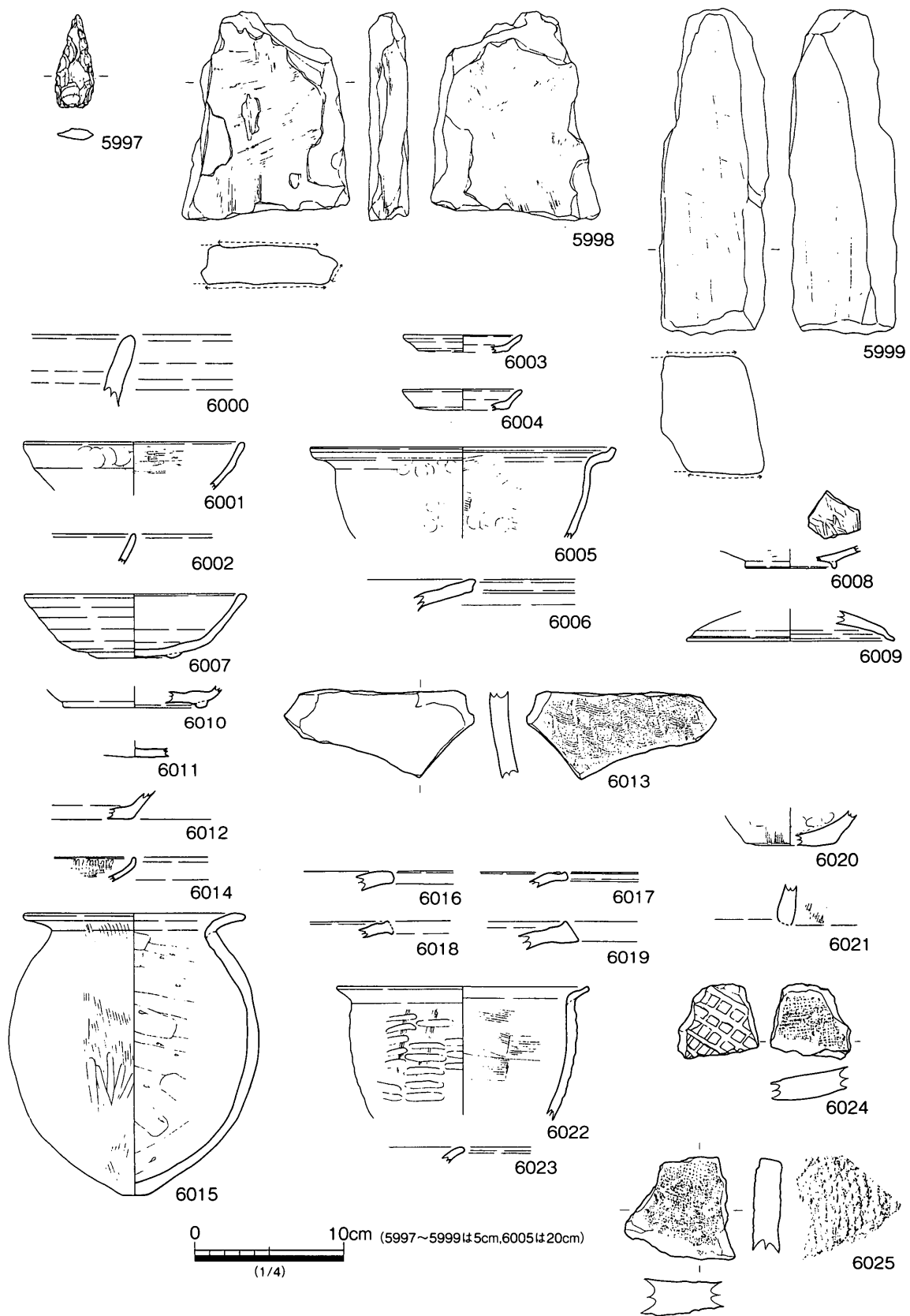
第 208 図 溝状遺構遺物実測図 119(5882 ~ 5938:SD91)



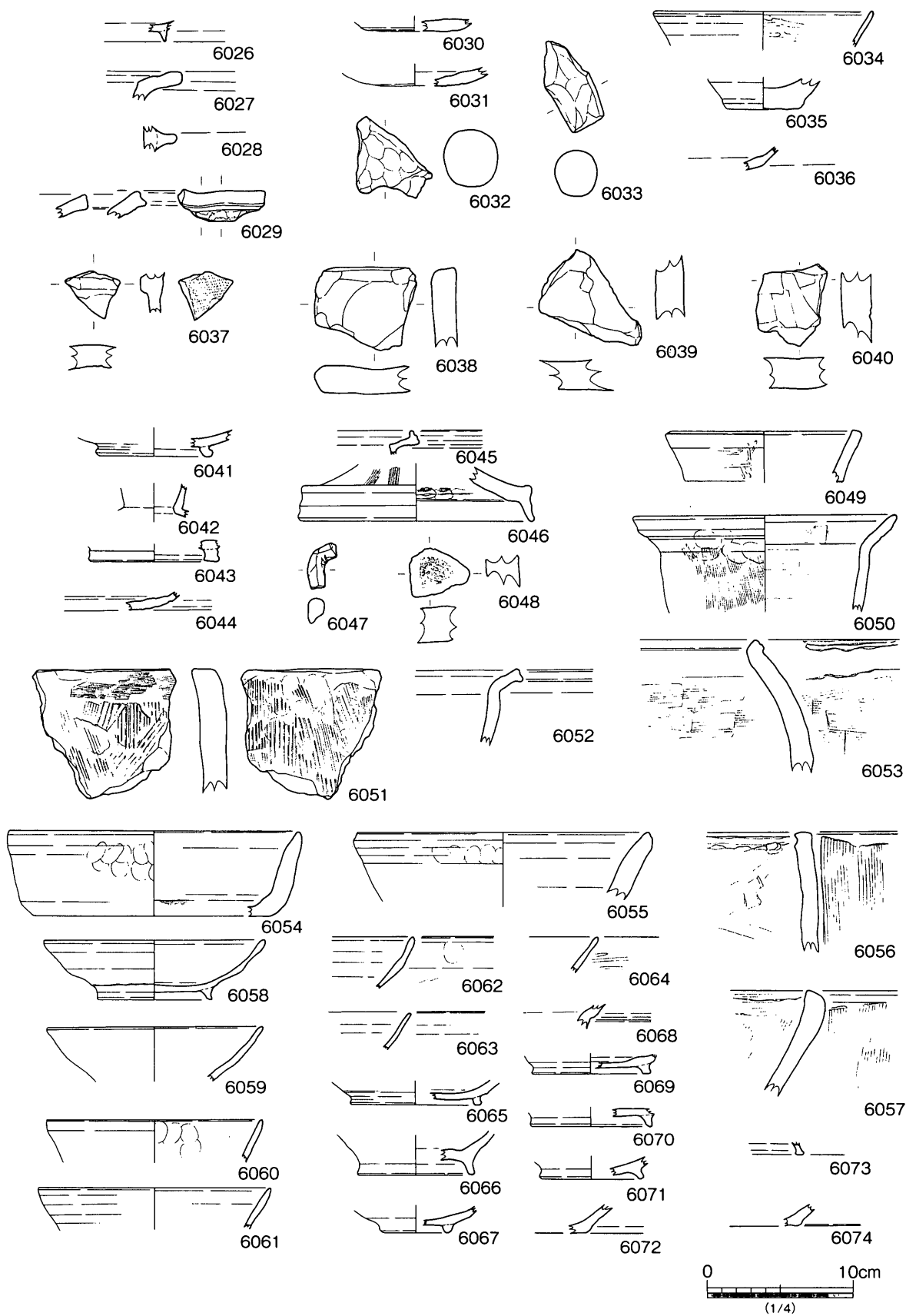
第 209 図 溝状遺構遺物実測図 120(5939 ~ 5973:SD91)



第 210 図 溝状遺構遺物実測図 121(5974 ~ 5981:SD91,5982 ~ 5996:SD92)

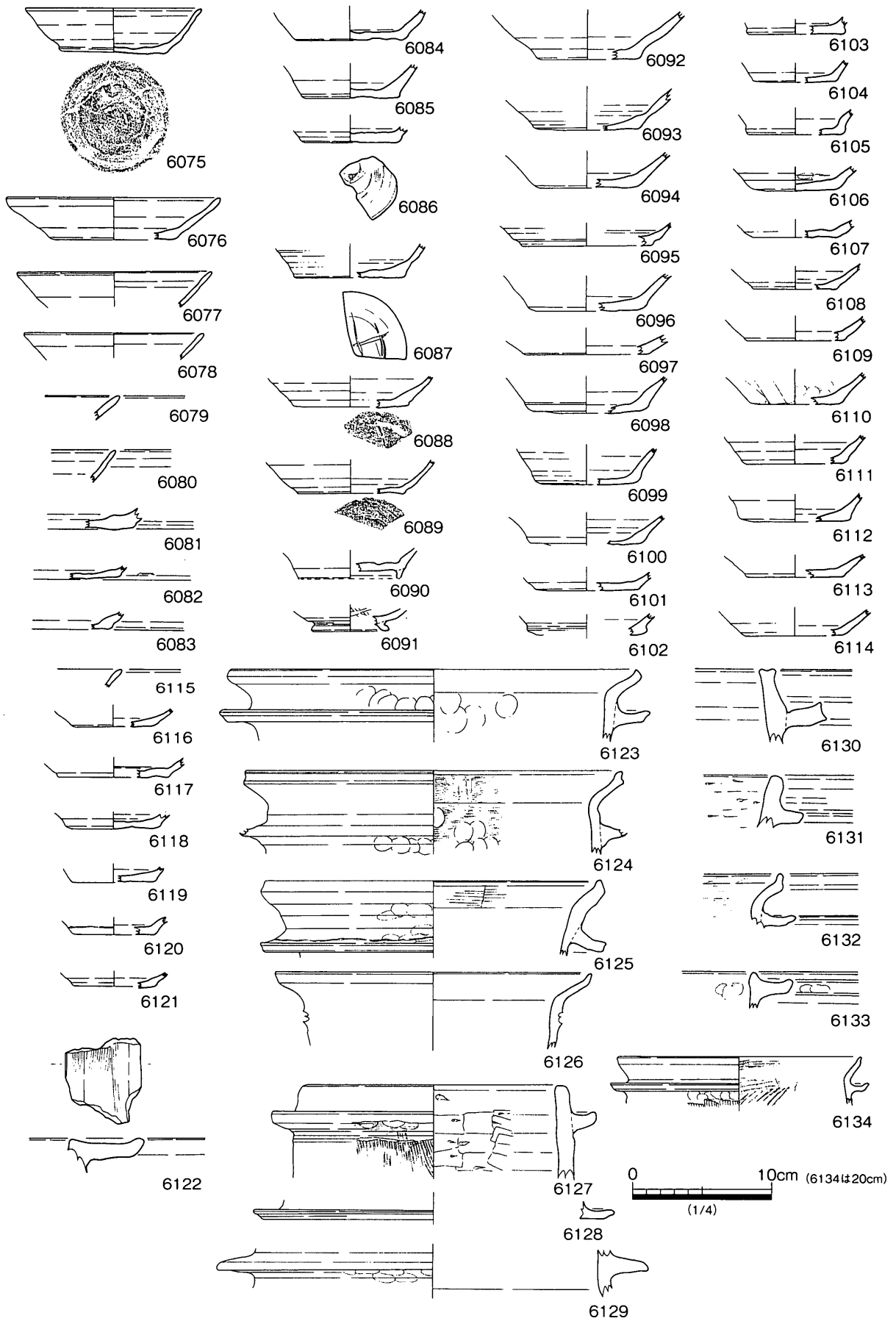


第 211 図 溝状遺構遺物実測図 122(5997 ~ 5999:SD92,6000 ~ 6025:SD93)

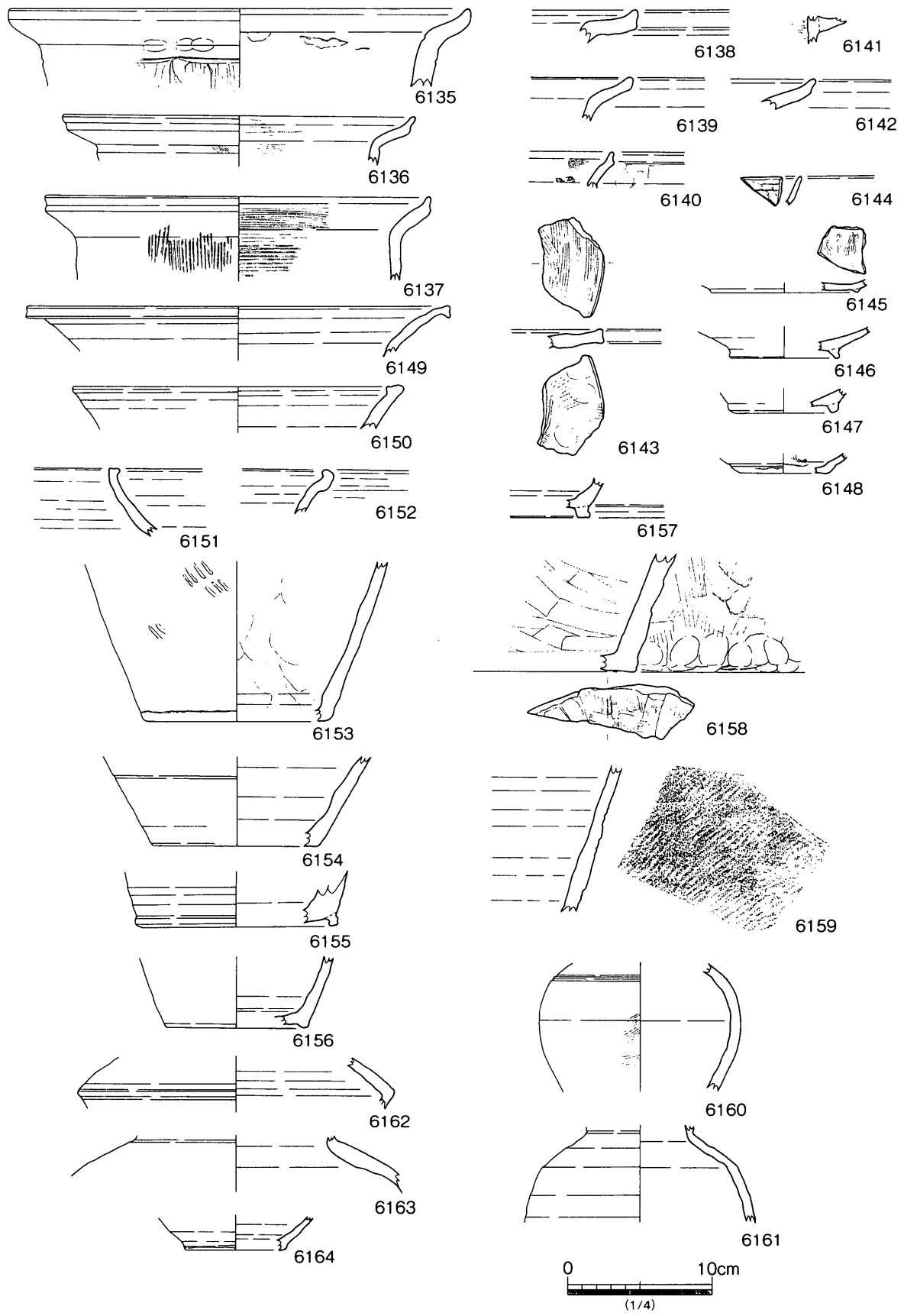


第 212 図 溝状遺構遺物実測図 123

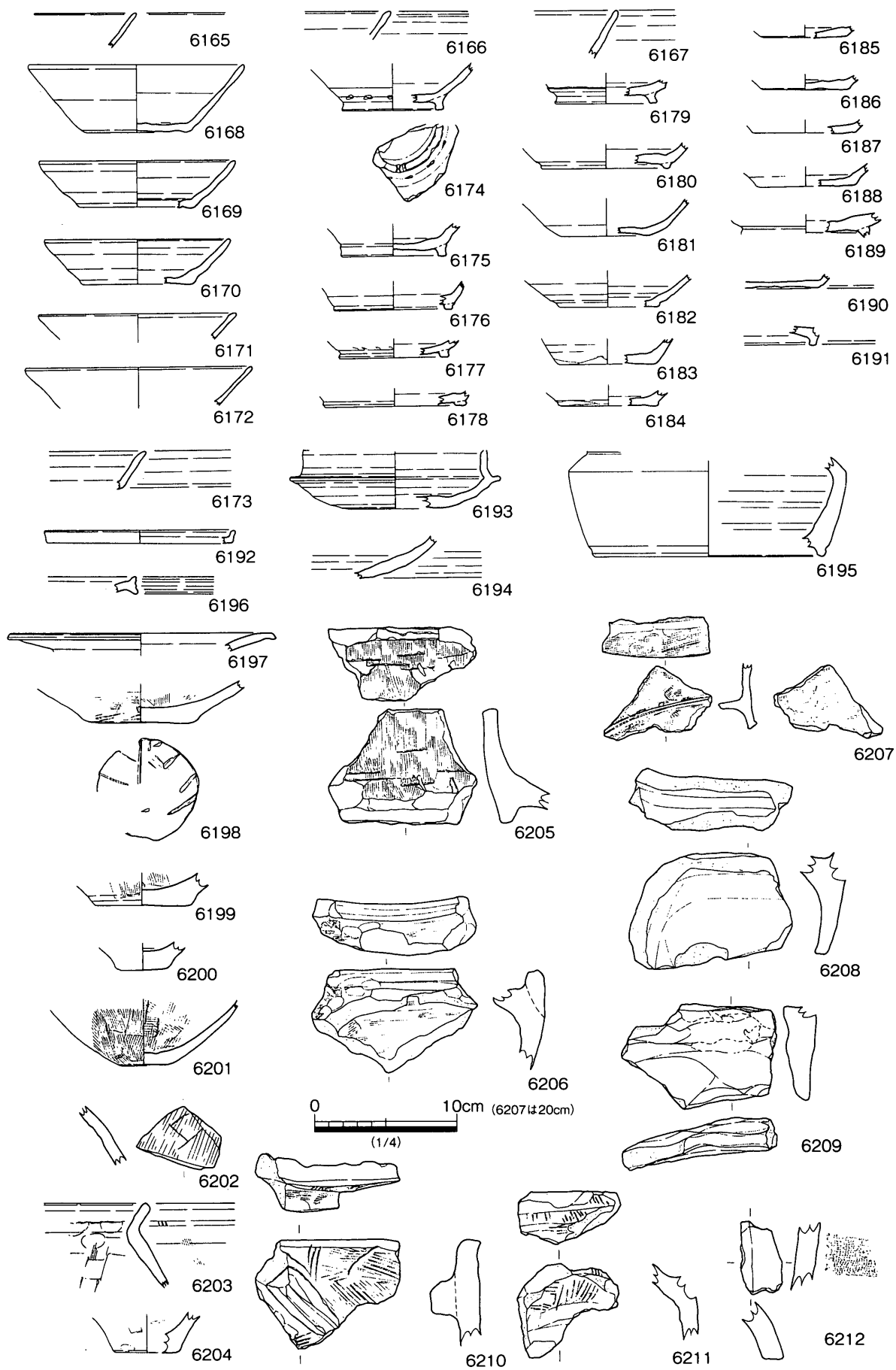
(6026 ~ 6029:SD94,6030 ~ 6040:SD95,6041 ~ 6048:SD96,6049 ~ 6074:SD97)



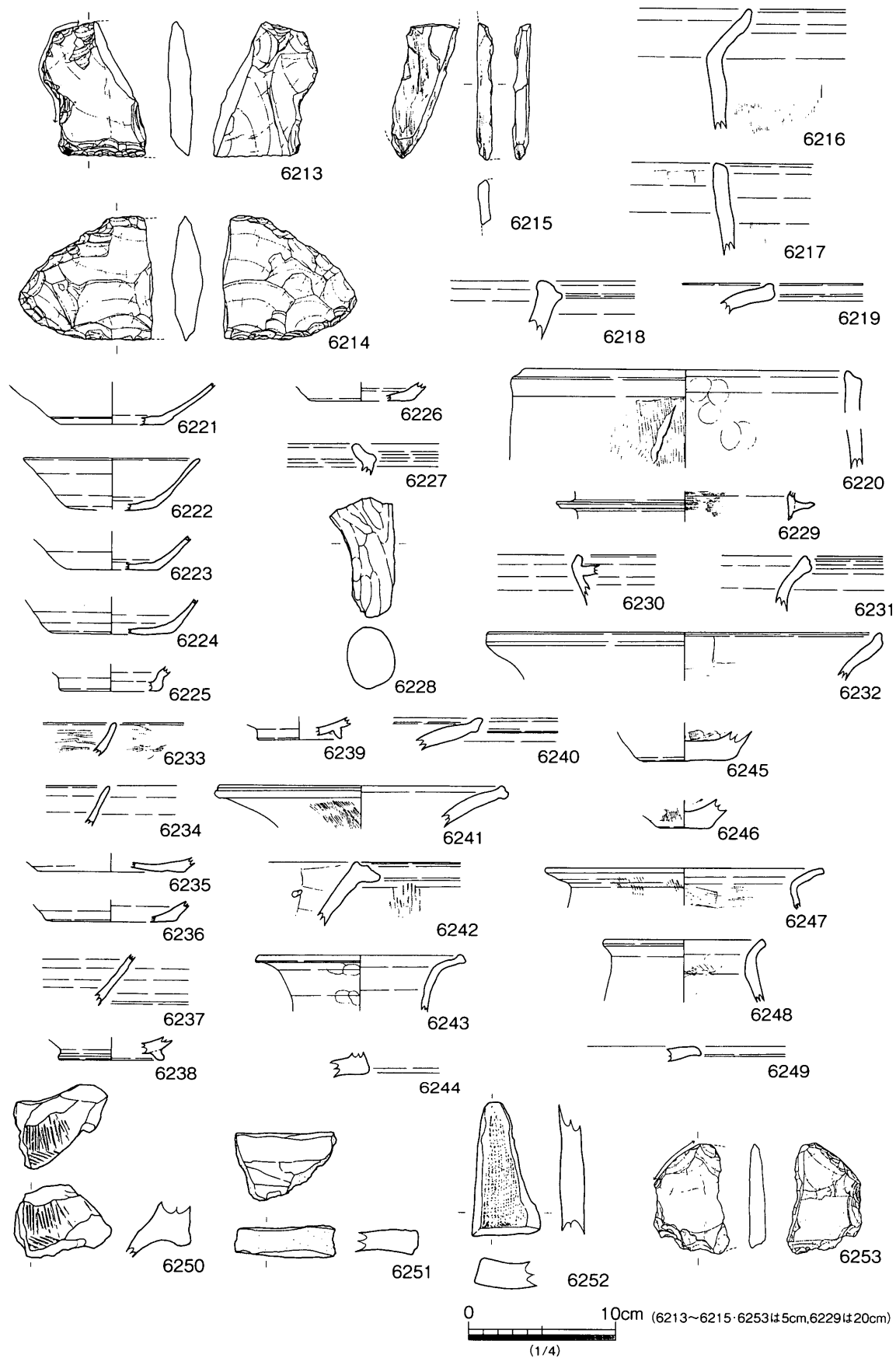
第 213 図 溝状遺構遺物実測図 124(6075 ~ 6134:SD97)



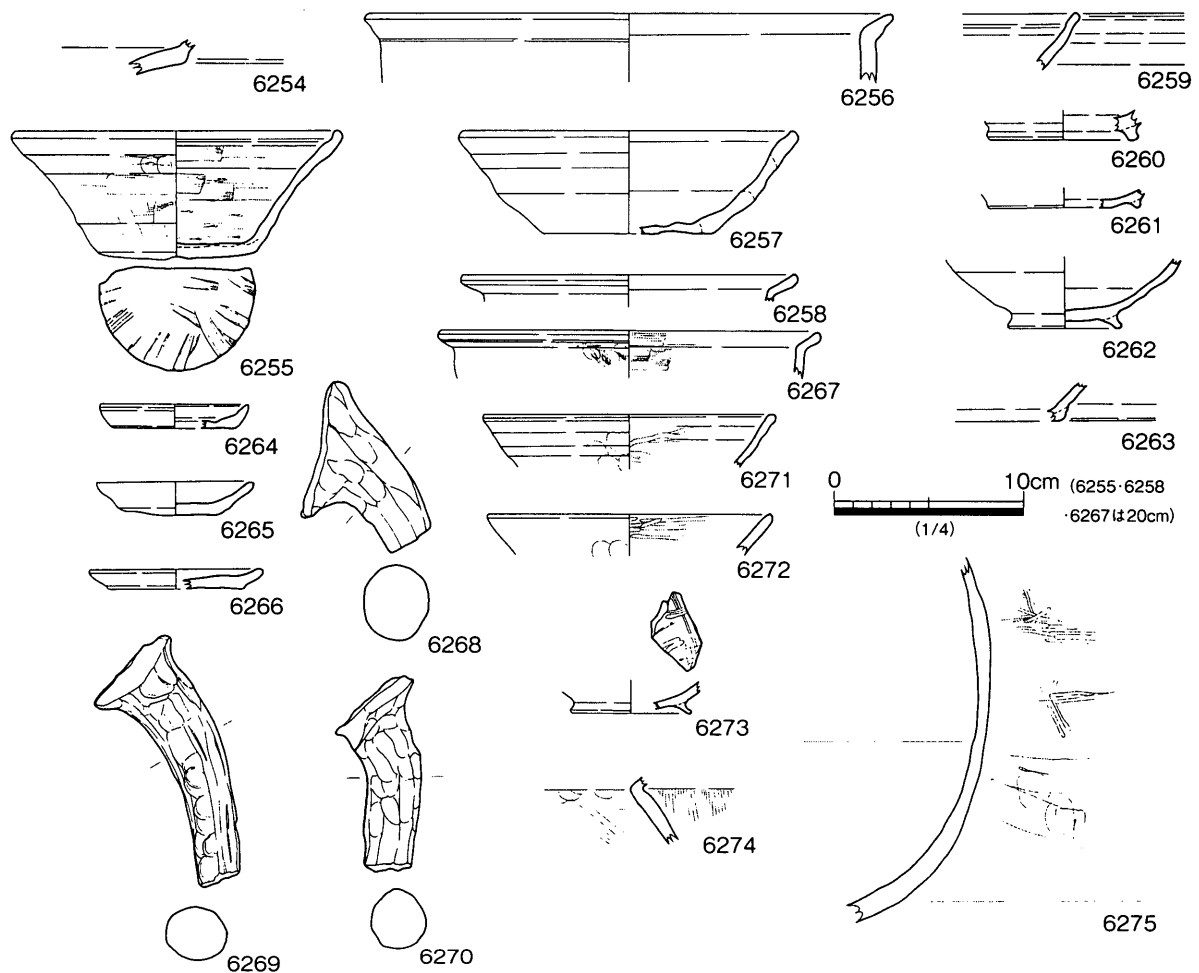
第 214 図 溝状遺構遺物実測図 125(6135 ~ 6161:SD97)



第 215 図 溝状遺構遺物実測図 126(6165 ~ 6212:SD97)



第 216 図 溝状遺構遺物実測図 127(6213 ~ 6215:SD97,6216 ~ 6253:SD98)



第 217 図 溝状遺構遺物実測図 128(6254 ~ 6275:SD99)

同軸は、当該地域に認められる方形区画の南北方向の基軸に合致する。

㉘ SD168

[遺構] IV②区の中央部に所在する。検出部分は少ないが、中心軸は南方向へ湾曲した状態を示すことから、原形が円弧状の平面形態であった可能性がある。

㉙ SD169

[遺構] IV②区の南端部に所在する。中心軸が北東から南北方向に変化するために、く字形の平面形態を示す。

㉚ SD171

[遺構] I①区の南部に所在する。外郭線の歪曲が著しいことと、横断面が浅い皿形を示すことから、自然の凹地形と判断される。

㉛ SD176

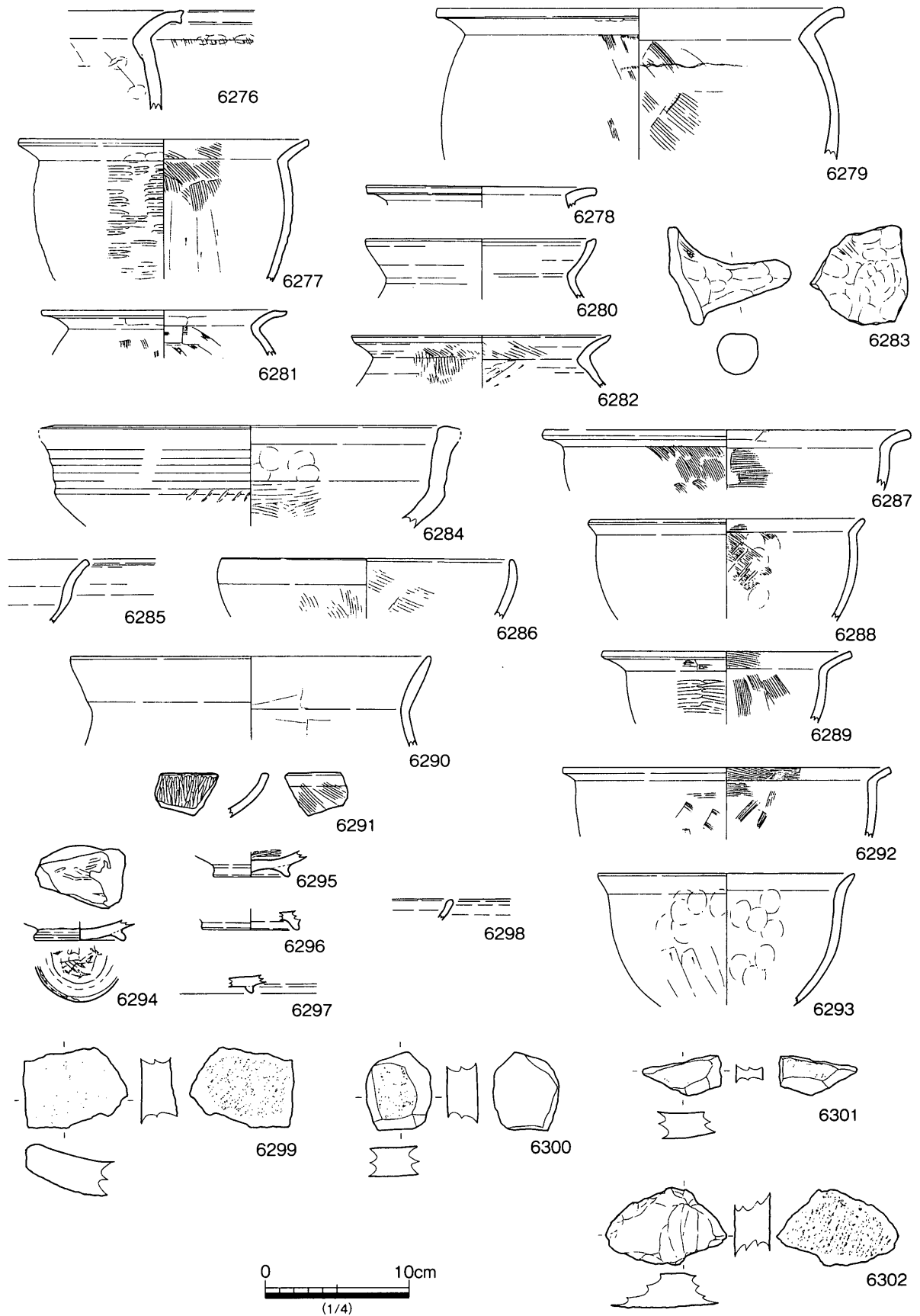
[遺構] V③区の西部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定で、中心軸は直線的である。

㉜ SD177

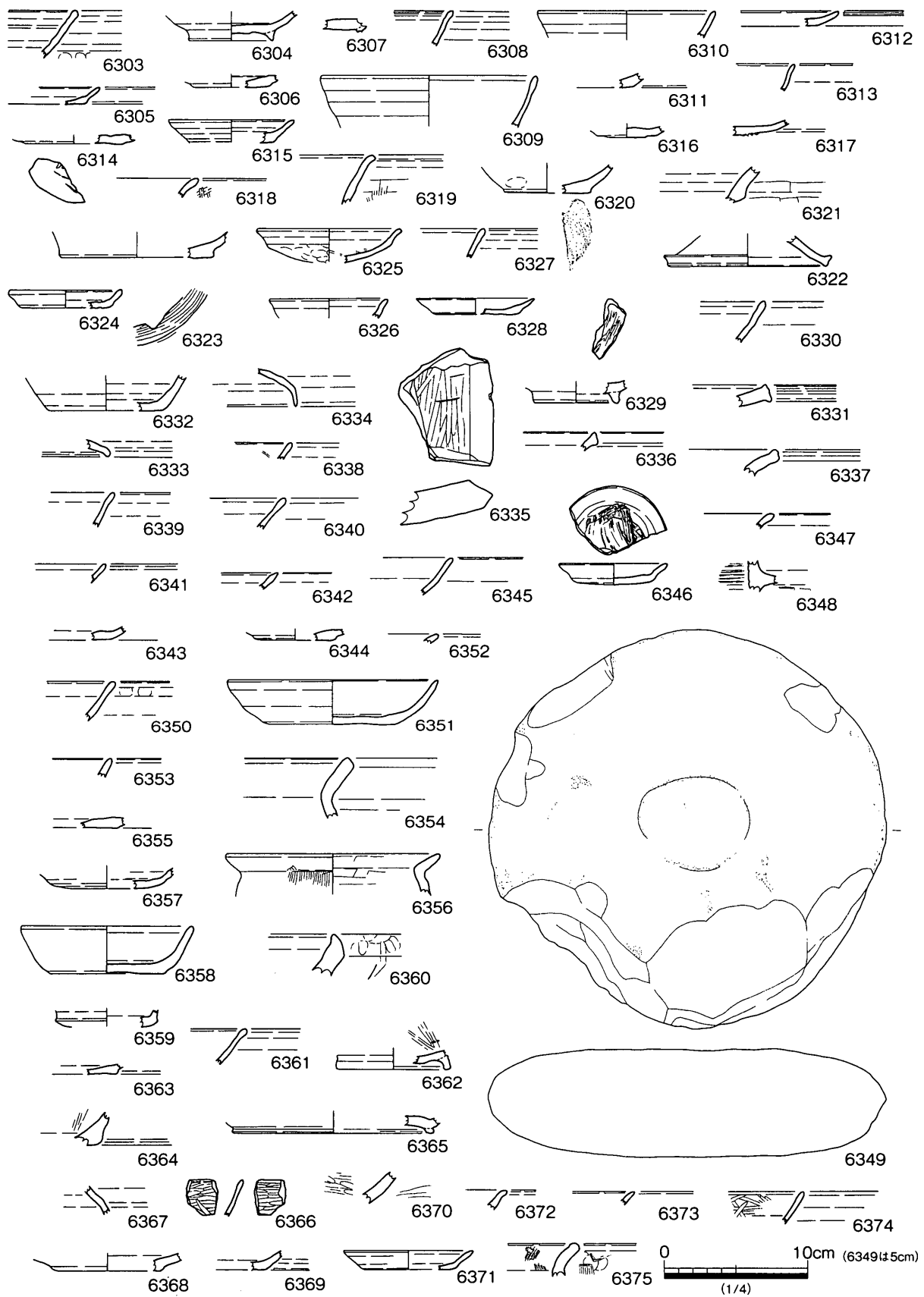
[遺構] V②区の南西隅部に所在する。遺構の幅は東部が広く、中心軸は北方向への円弧を描く状態を示す。

㉝ SD179

[遺構] II 区の北端部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定で、中心軸は直線的である。原形は SD180 に連結していたことが考えられる。



第 218 図 溝状遺構遺物実測図 129(6276 ~ 6302:SD56)



第 219 図 柱穴跡遺物実測図 6 (6303:SP474,6304 ~ 6306:SP475,6307 ~ 6313:SP476,6314 · 6315:SP477,6316:SP478,6317:

SP479,6318 · 6319:SP480,6320 ~ 6322:SP481,6323:SP482,6324:SP483,6325:SP484,6326:SP485,6327:SP182,6328:SP487,6329:

SP488,6330 · 6331:SP719,6332 · 6333:SP489,6334:SP490,6335 ~ 6337:SP491,6338:SP492,6339 ~ 6344:SP493,6345 ~ 6349:SP494,6350 · 6351:

SP495,6352:SP496,6353 · 6354:SP497,6355 · 6356:SP498,6357:SP499,6358 · 6359:SP500,6360 · 6361:SP501,6362:SP502,6363 · 6364:

SP503,6365 · 6366:SP504,6367 · 6368:SP505,6369:SP506,6370:SP507,6371:SP508,6372 ~ 6374:SP509,6375:SP510)

㊦ SD181

[遺構] II 区の北端部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定で、中心軸は直線的である。原形は SD179 と SD180 に合流していたことが考えられる。

㊧ SD182

[遺構] II 区の北端部に所在する。中心軸は西方向へ湾曲した状態を示すが、原形は SD182 に連結していたことが考えられる。

㊨ SD183

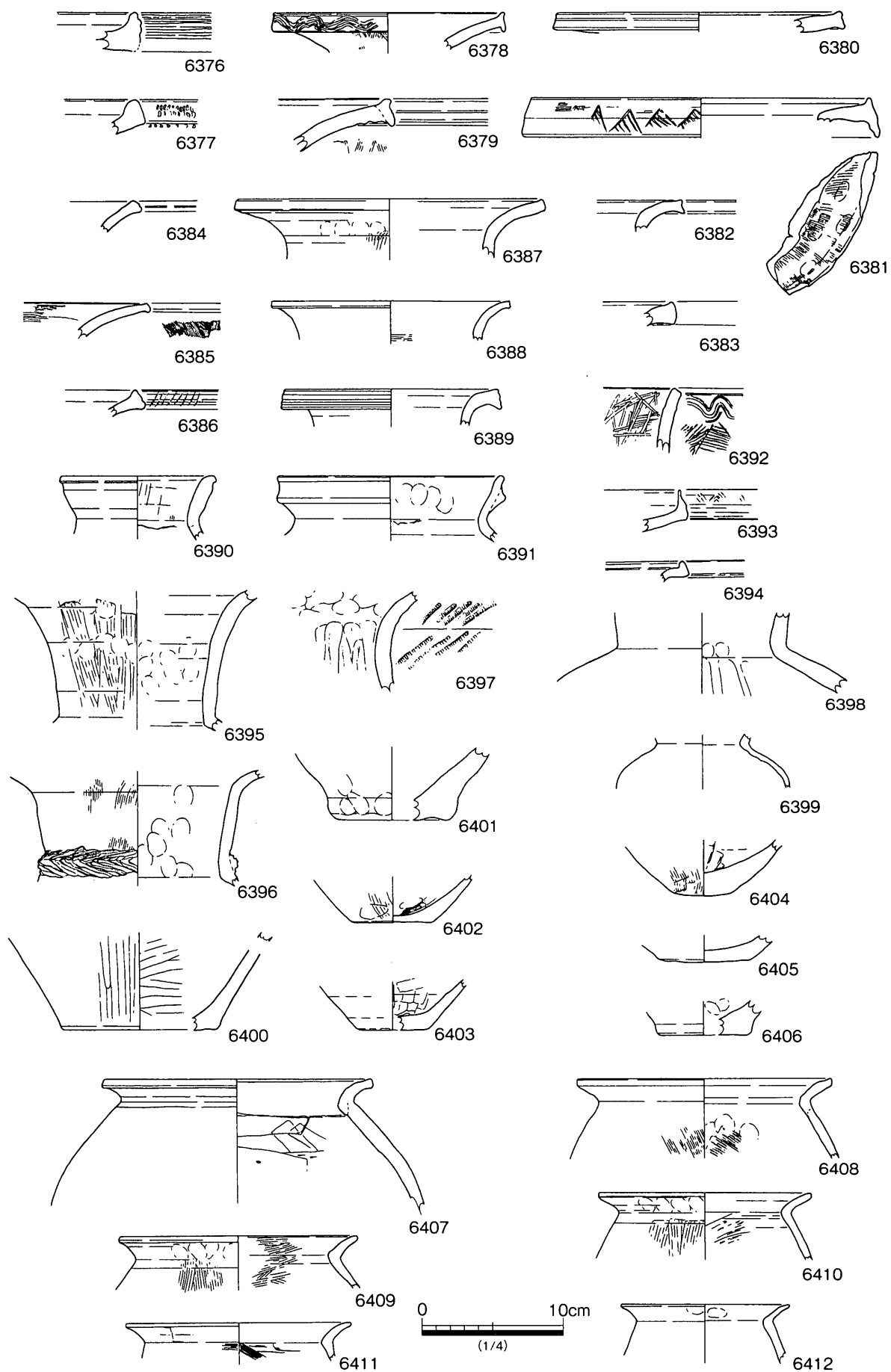
[遺構] II 区の北端部に所在する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定で、中心軸は直線的である。

(2) 柱穴跡

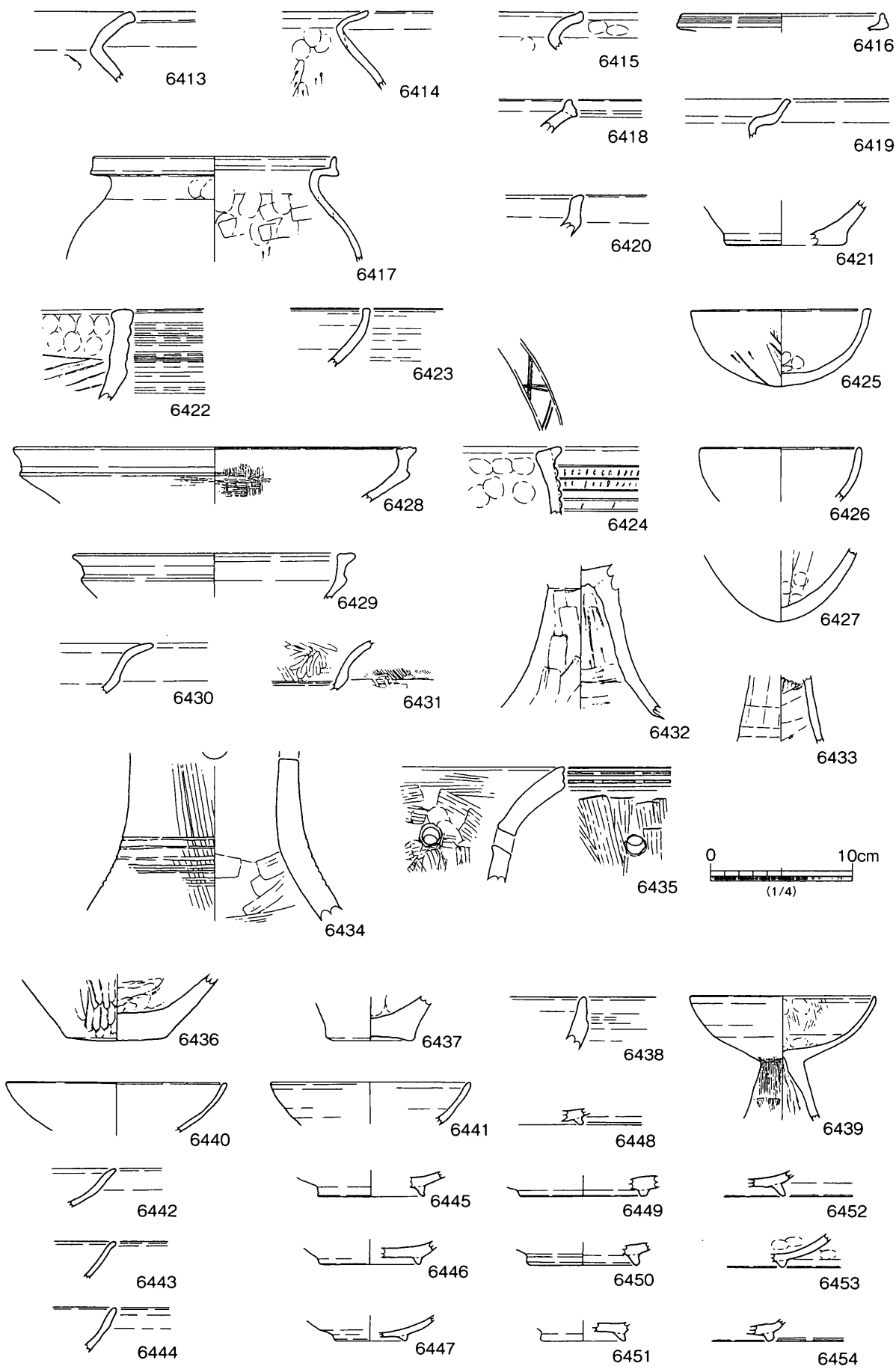
[遺構] 当該時期の遺構は 620 基である。対象地の西半部を中心に高密度で分布することから、建物跡を構成したものが多く含まれていることが考えられる。

4 遺物包含層

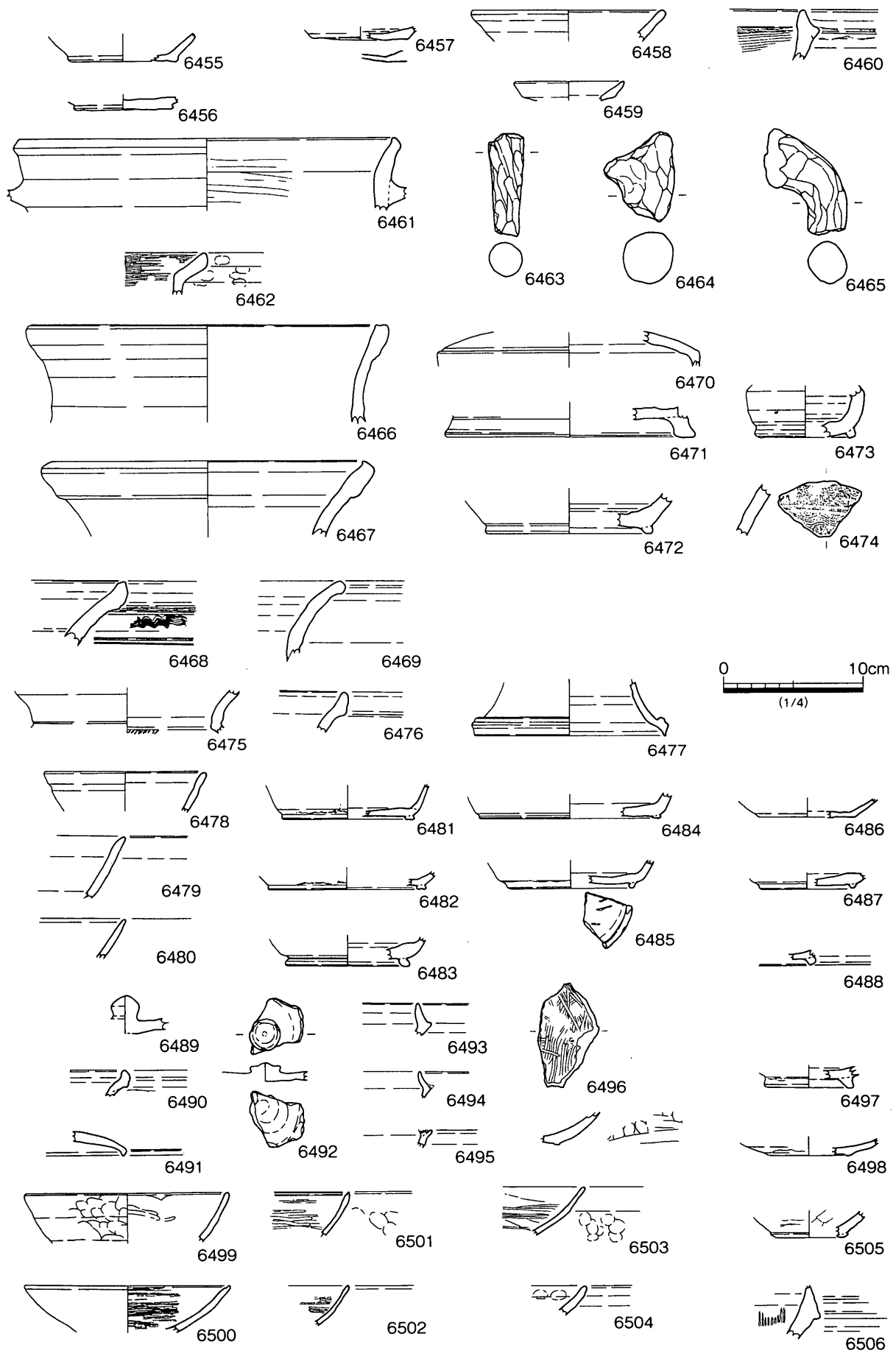
6391 は、口縁部外面に粘土紐が全周するように貼付されているために、外見は複合口縁の器形である。6439 の杯部は、浅い半球状の形態である。6519 は、稜線が交差することで形成された頂部に、小規模な使用痕が認められる。6549 及び 6550 は、複合口縁の形態の大型品である。6566 の体部は、扁平な形態が想定される。6625、6626、6665 は土器の一部が円形に加工されたもので、製作途上の紡錘車の可能性がある。6630 の複合口縁状の形態と、6631 の脚端部が横方向へ屈曲した形態は、古墳時代初期の特徴を示す。6680 には、明瞭な使用痕が認められない。6704 は小型の粗製品である。6706 は、杯部と高台部の接合箇所が横方向に突出するために、平坦な底面が成形された器形に、高台部が装着されたように看取される。6707 は把手様の器種である。6721 の外面には、縦方向の長い直線と、斜め方向の短い直線による、木葉状の線刻画が認められる。6832 は粗製の小型品である。6845 は把手様の用途が考えられる。6878 の外面には、異なる 2 個体分の容器の断片が癒着している。対象地における須恵器生産の事実がないことから、未完成品が搬入されて、使用されていたことがわかる。6905 は口径が大きく、きわめて扁平な器形であることから、平城Ⅲ型式に所属すると判断される。6939 は、図面左側側縁部に調整剥離が施されていないことと、中心軸が同部側へ傾くことから、未完成品の可能性がある。6946 は、最も広い面のみが、被熱により黒色に変色している。したがって、砥石として使用される以前には、1 面のみが加熱される、他の用途があったことが推測される。7040 の底面には、1 本線による、十字状のヘラ記号が認められる。7095 は、龍泉窯系の製品で、外面に鎬蓮弁文が施文されている。7103 は、長方形に加工された用途不明の資料である。7186 の頸部外面の沈線文は、施文時の原体の上下動が著しかったために、不均整な平行線を示していない。7203 の口縁端部外面には、稚雑なヘラ描き鋸歯文が認められる。7204 の頸部外面の沈線文は、不均整な平行線であるために、一部が交差する状態を示す。7217 の底面には、稲粃の粒子形の圧痕が認められる。7251 及び 7252 は、弥生時代前期に所属する資料である。各体部外面のヘラ描き沈線文は、平行する箇所が少ない、稚雑な施文状態である。7274 の 4 箇所の穿孔は、非対称な位置に施されている。7278 の凸帯は、1 本の粘土紐が、上下 2 段の縦断面が矩形の凸帯に分割成形された精巧な造作である。7282 の外面には、縦方向の 2 本の平行な沈線文によって成形された長方形の区画内に、縦方向に 2 列に施された山形文による文様帯が存在



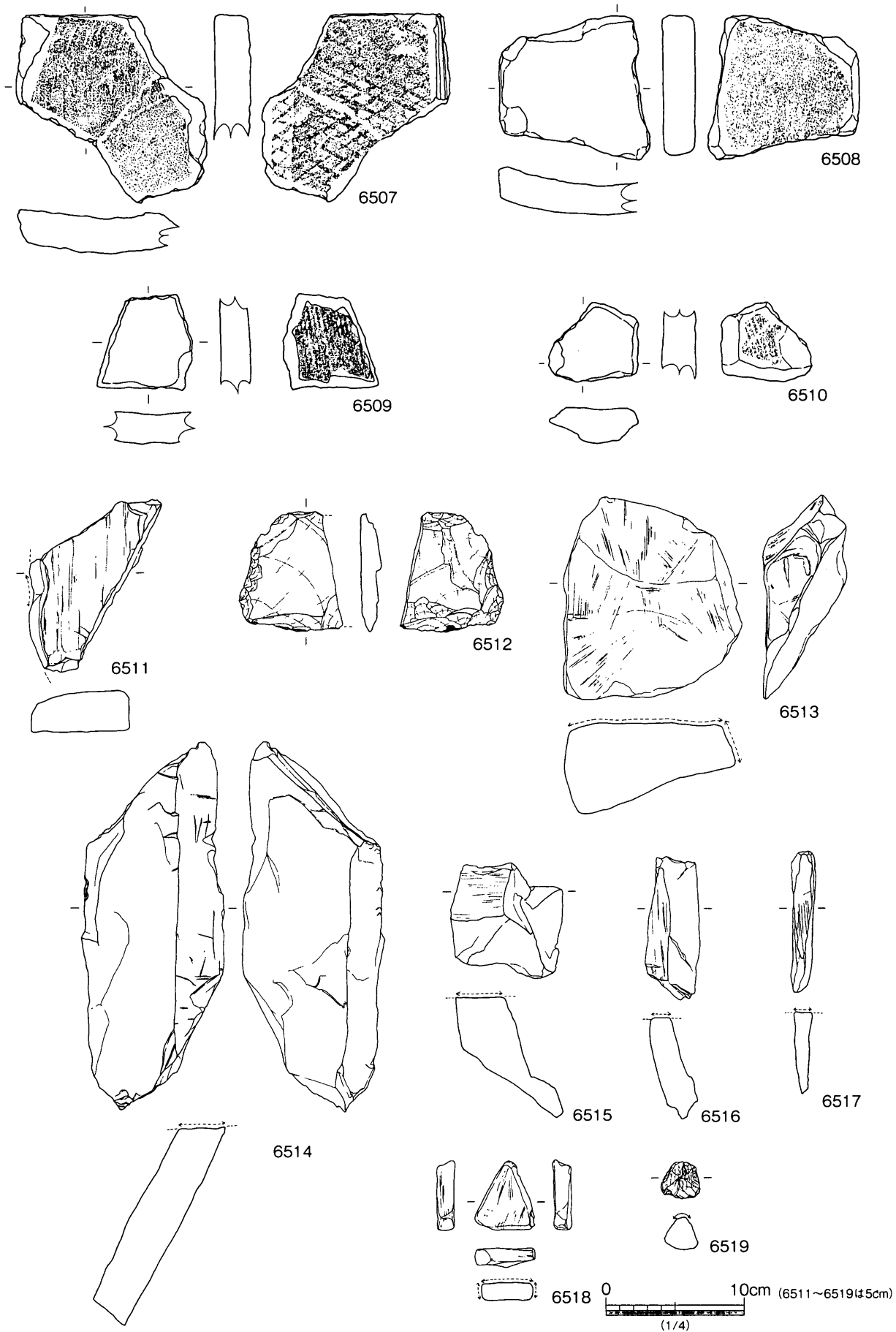
第 220 図 遺物包含層遺物実測図 1



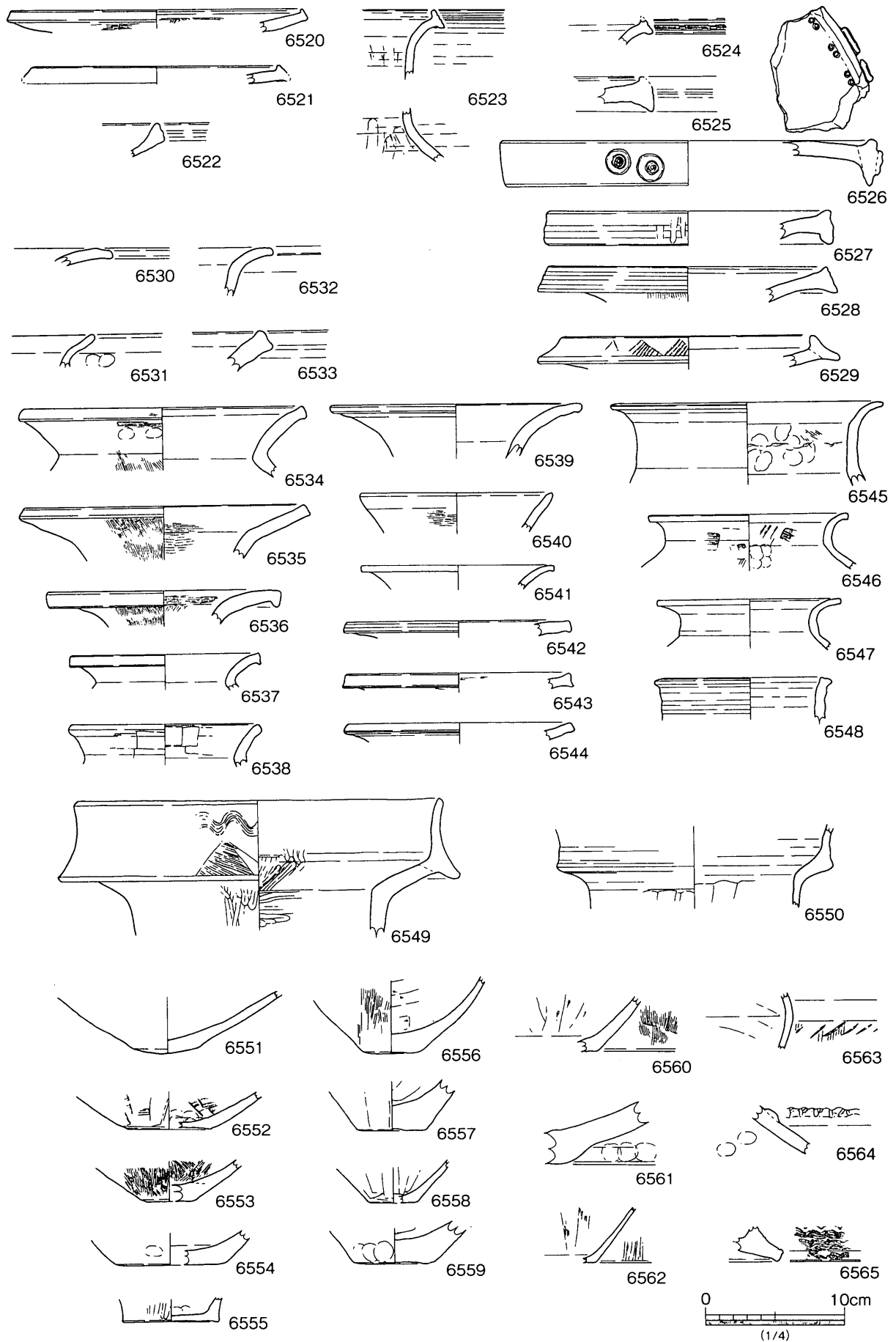
第 221 图 遺物包含層遺物実測図 2



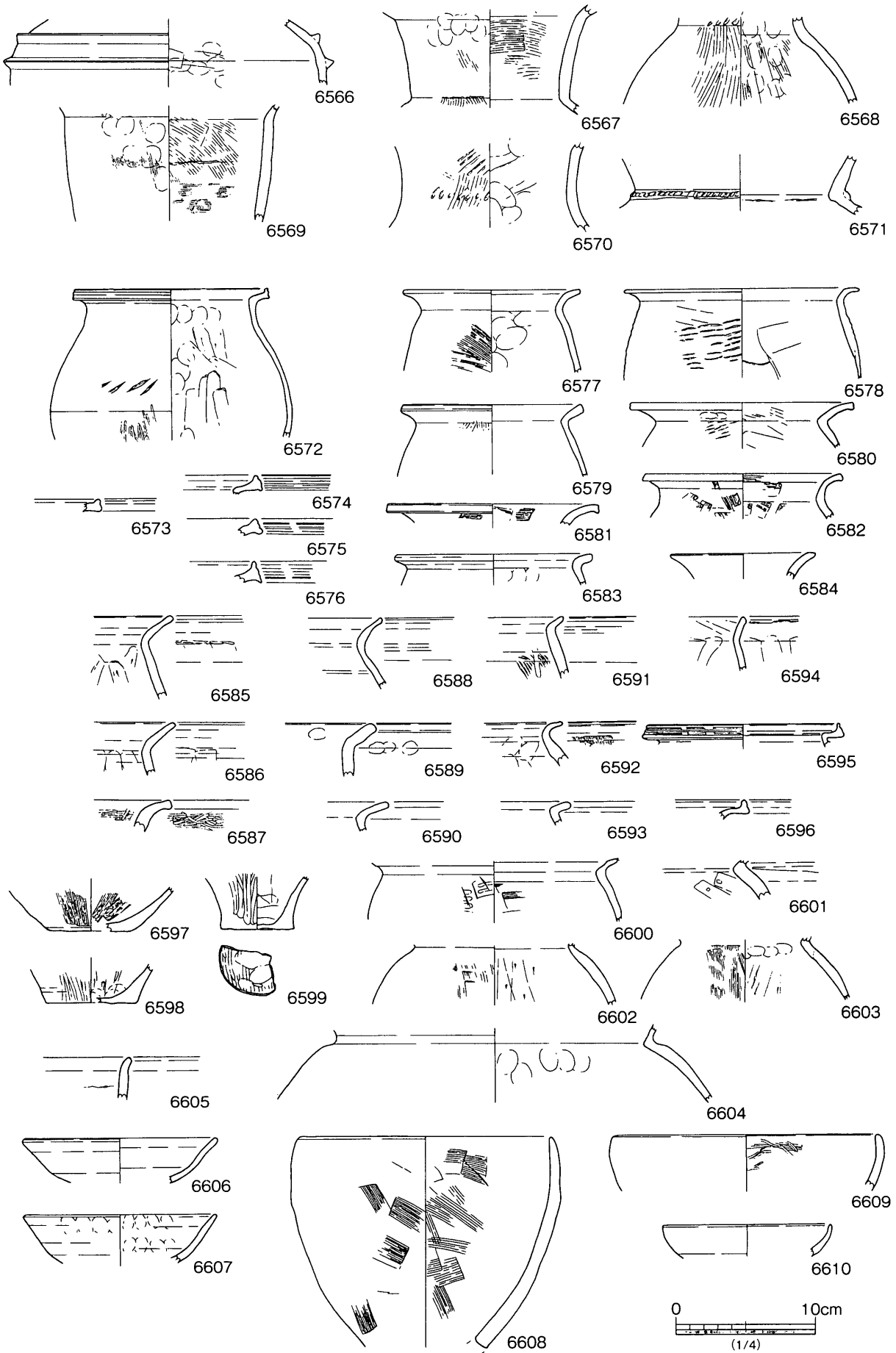
第 222 图 遺物包含層遺物実測図 3



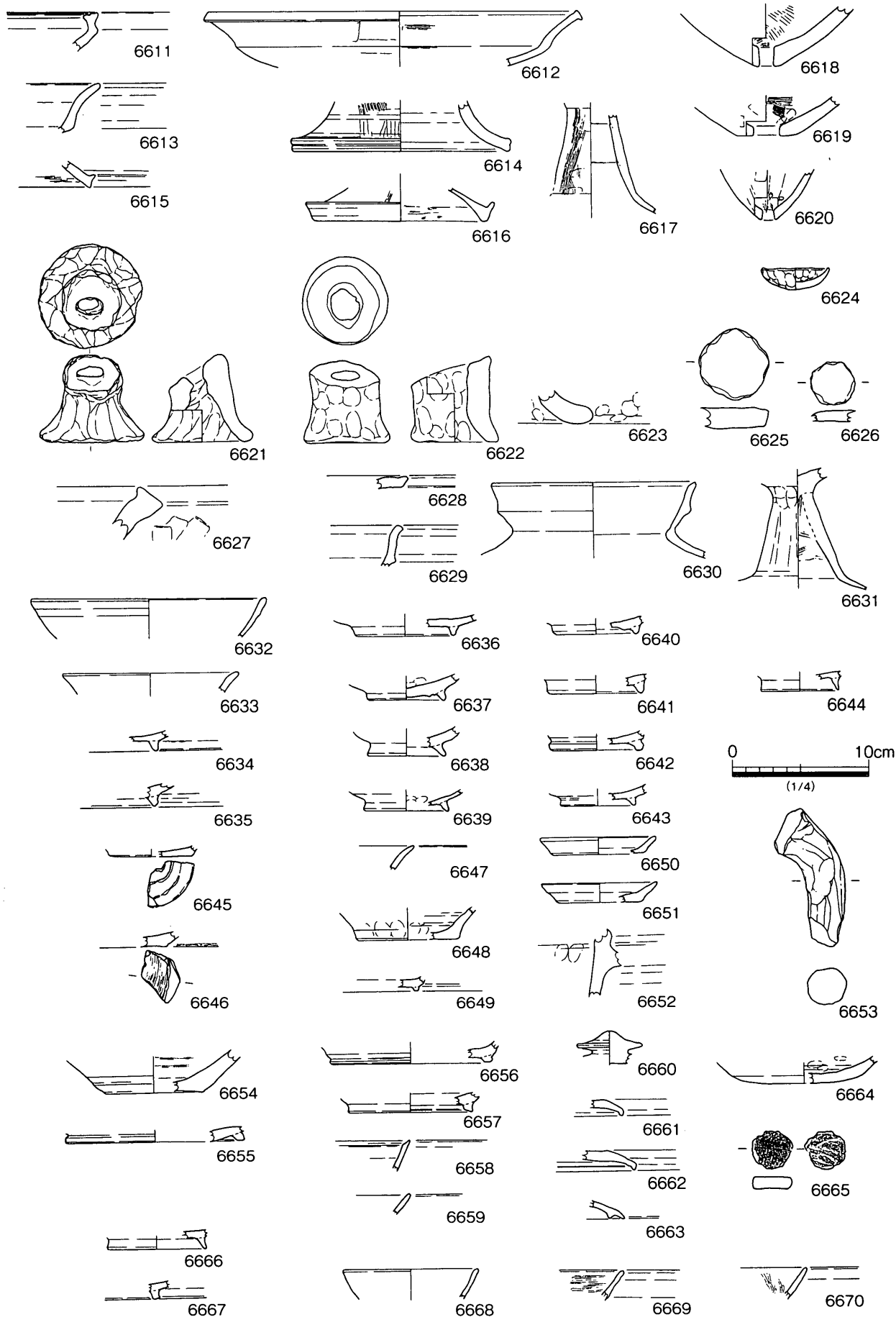
第 223 図 遺物包含層遺物実測図 4



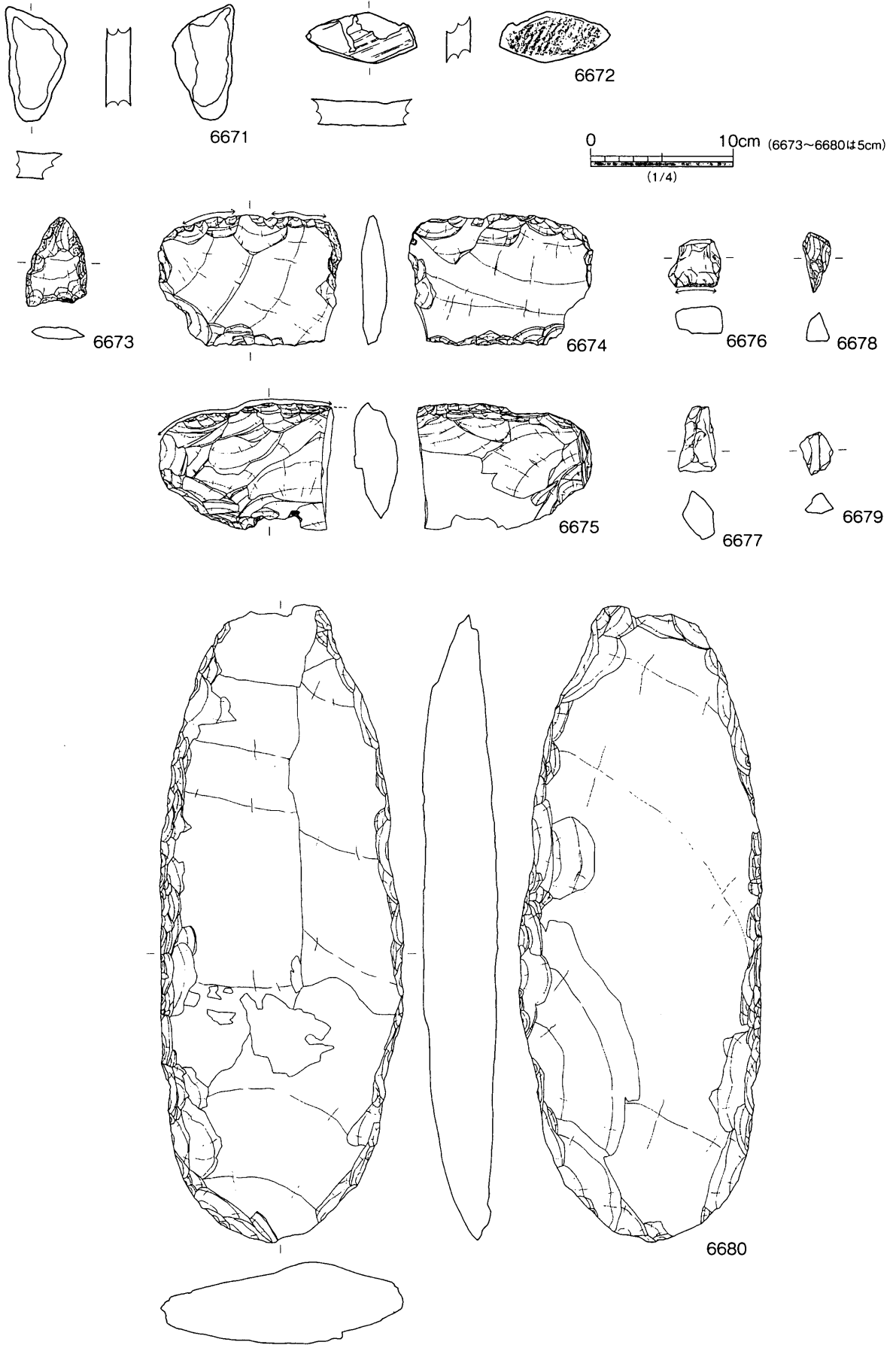
第 224 图 遺物包含層遺物実測図 5



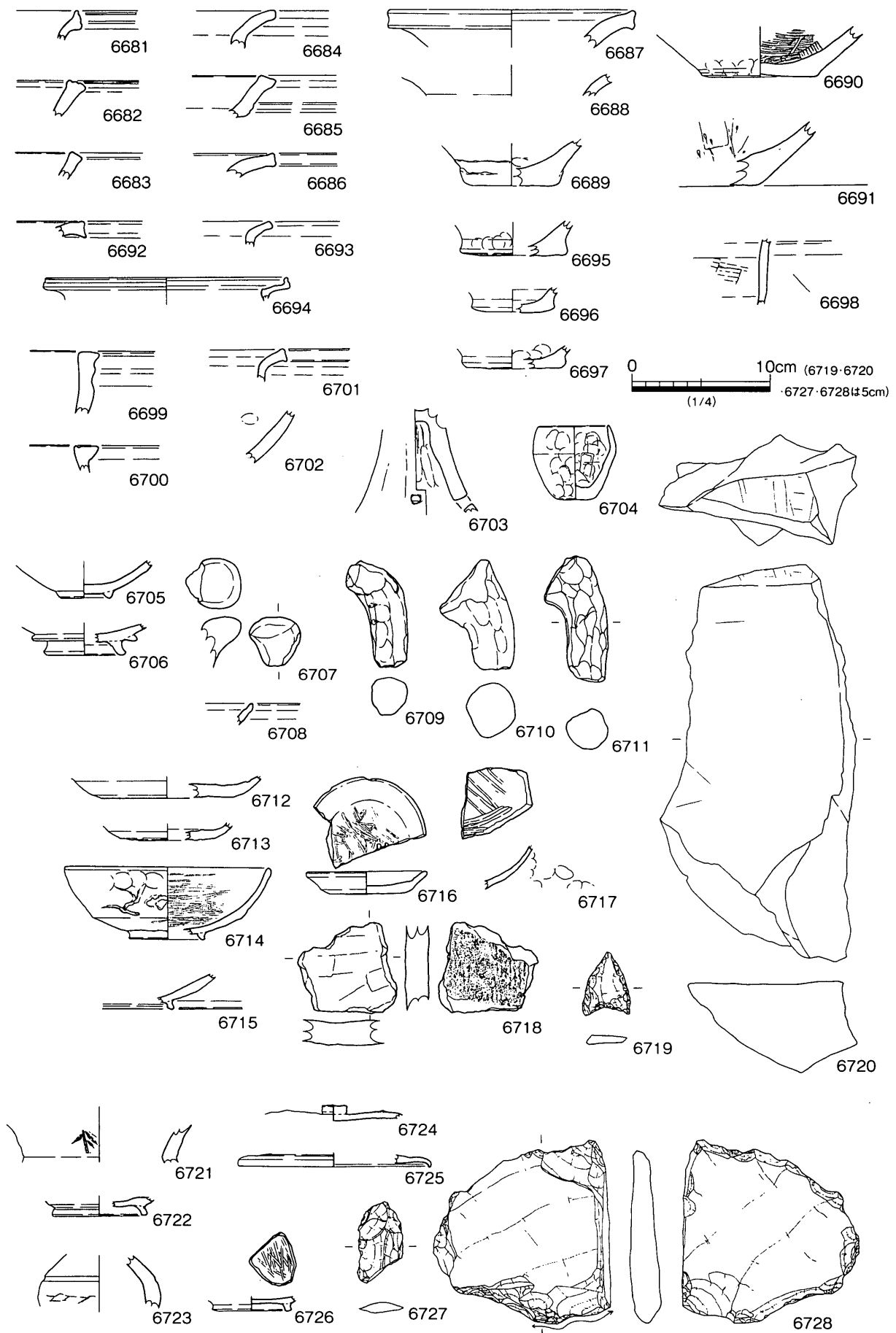
第 225 図 遺物包含層遺物実測図 6



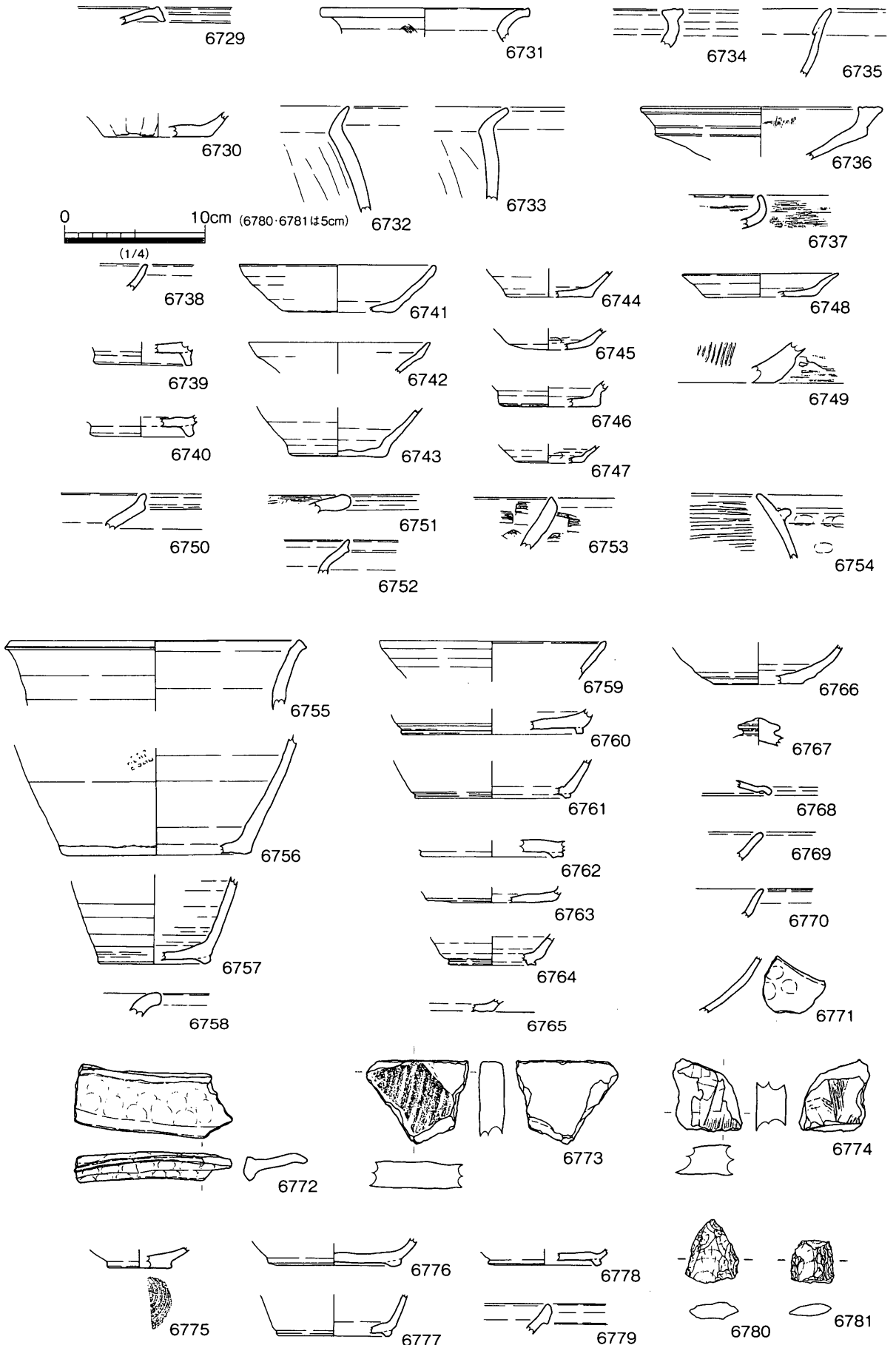
第 226 図 遺物包含層遺物実測図 7



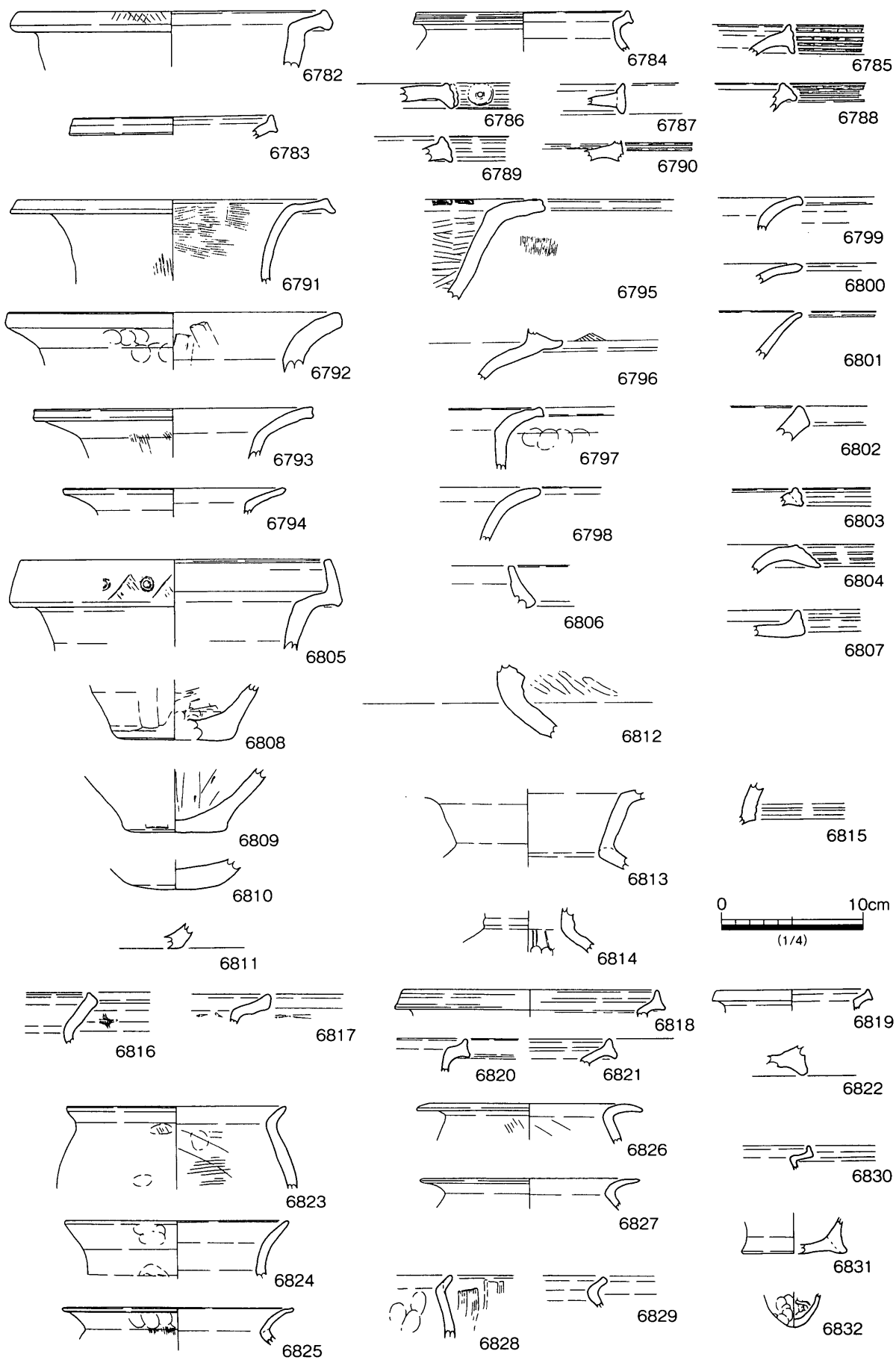
第 227 図 遺物包含層遺物実測図 8



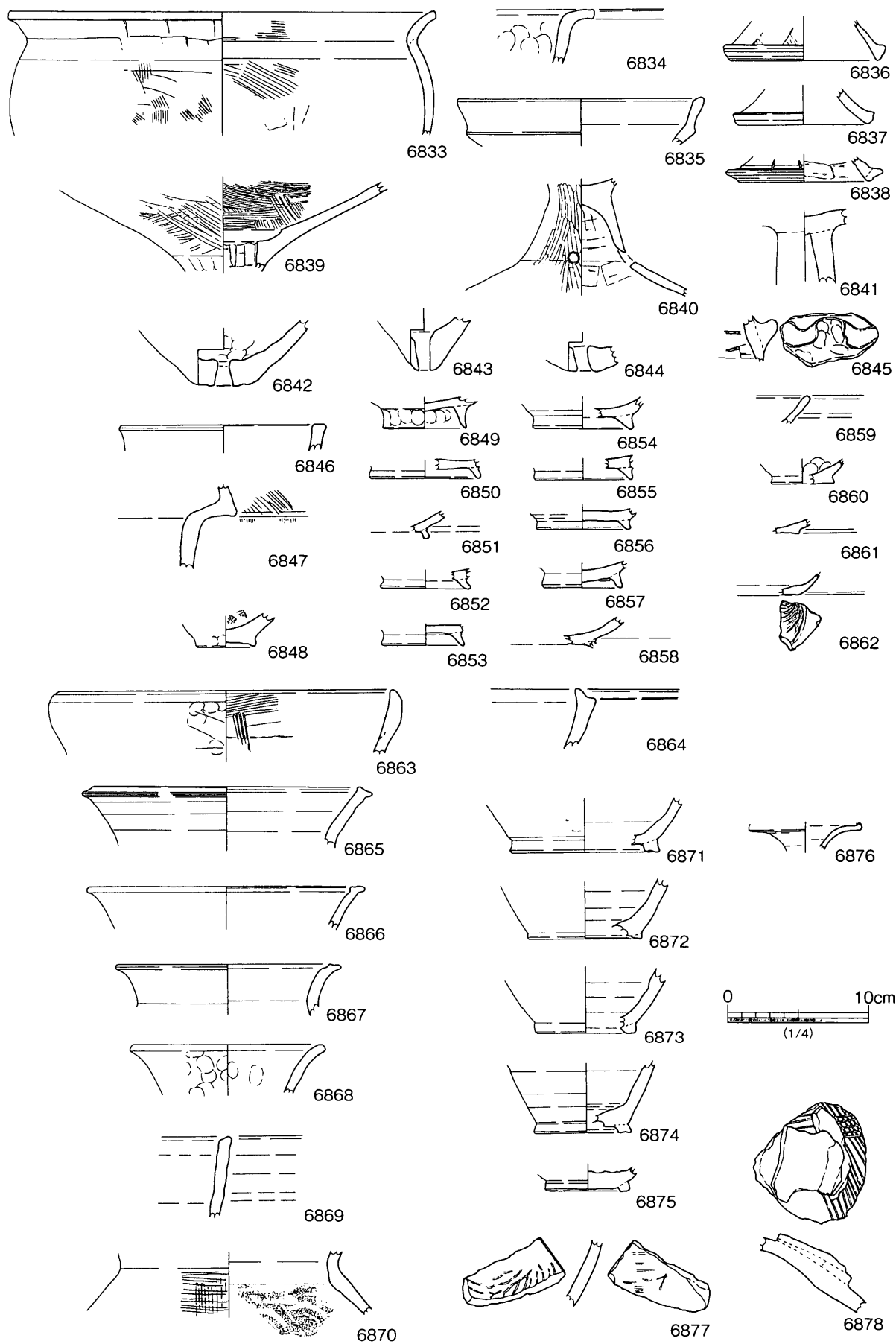
第 228 图 遺物包含層遺物実測図 9



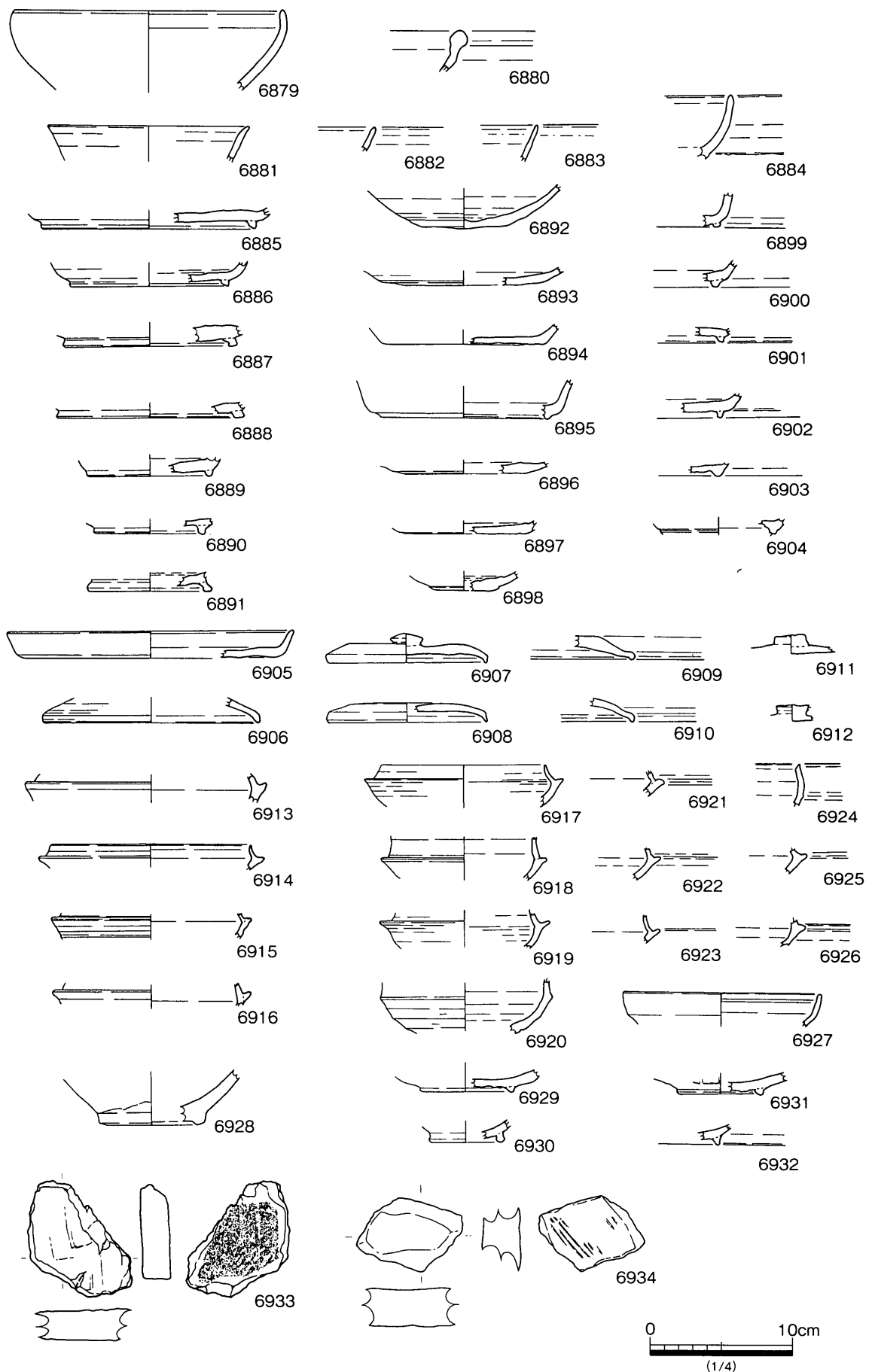
第 229 図 遺物包含層遺物実測図 10



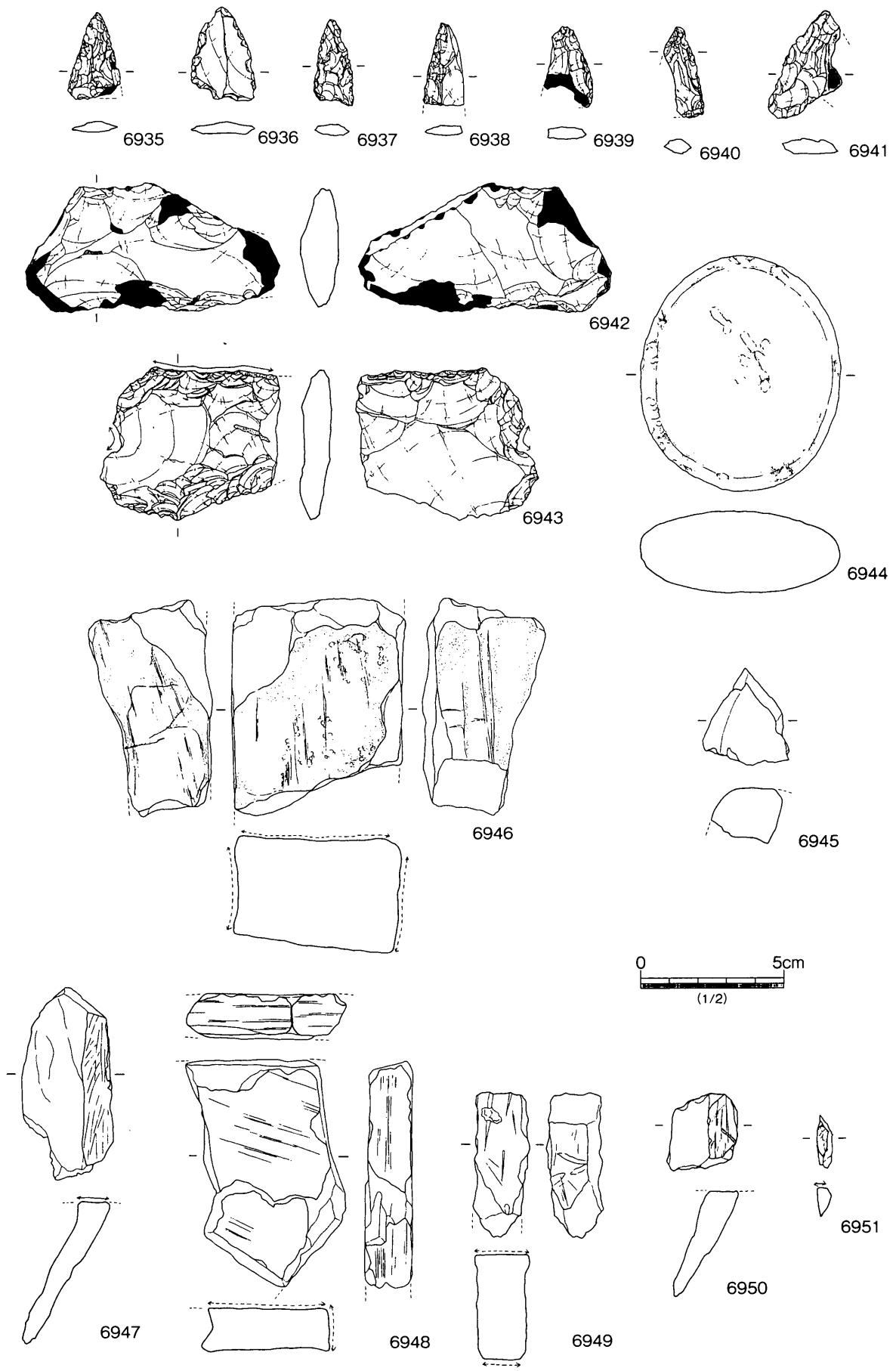
第 230 図 遺物包含層遺物実測図 11



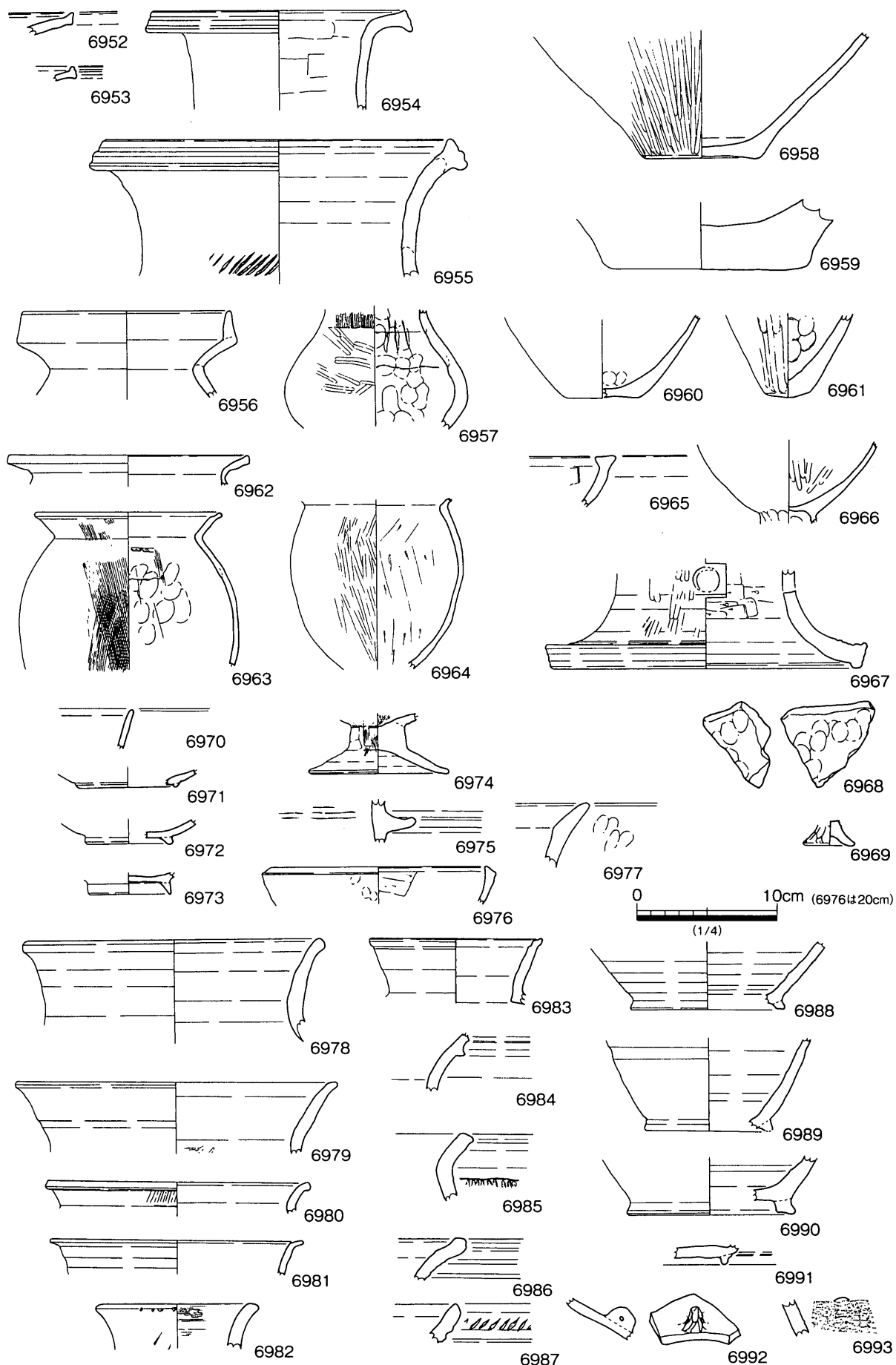
第 231 图 遺物包含層遺物実測图 12



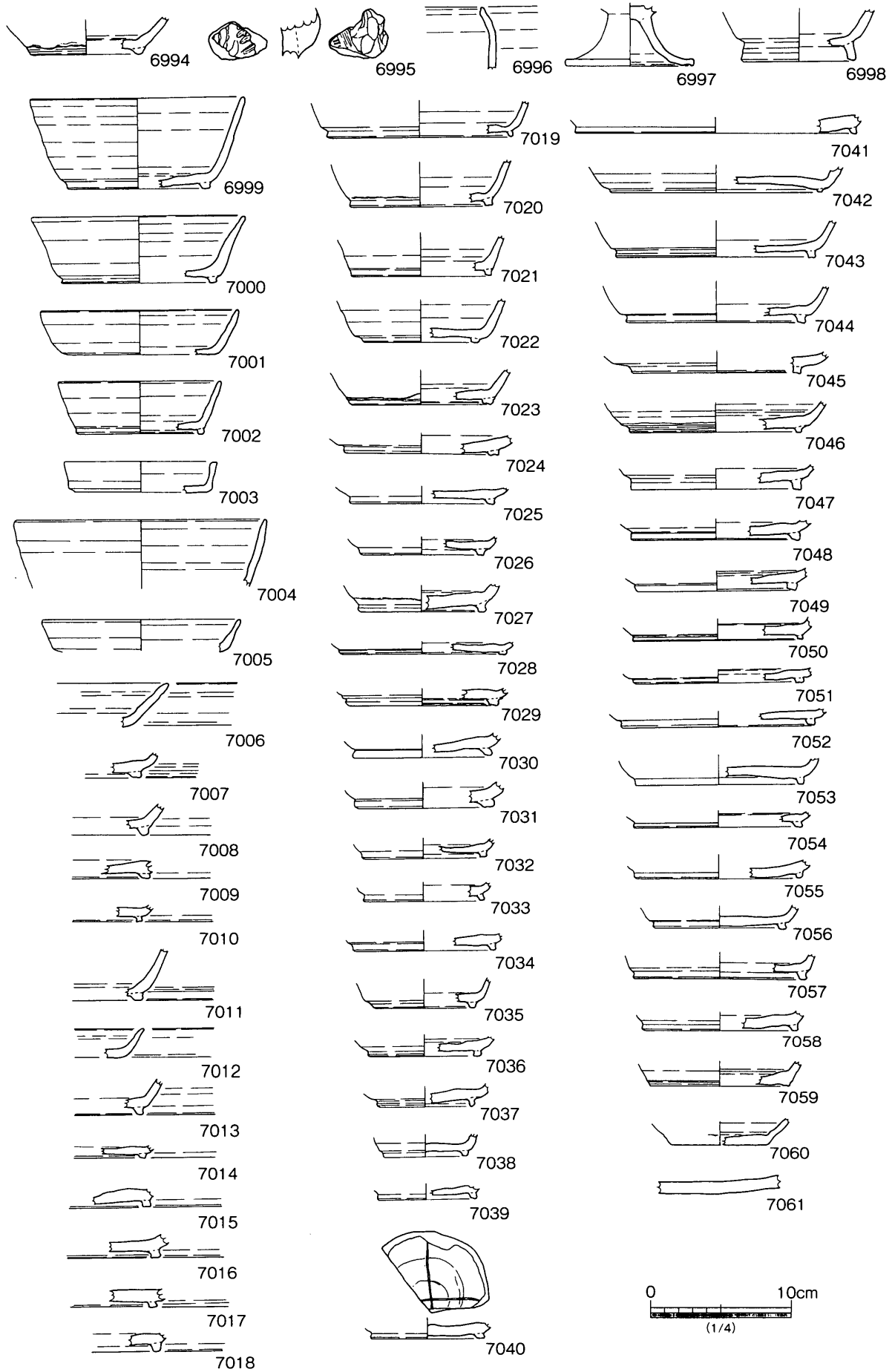
第 232 図 遺物包含層遺物実測図 13



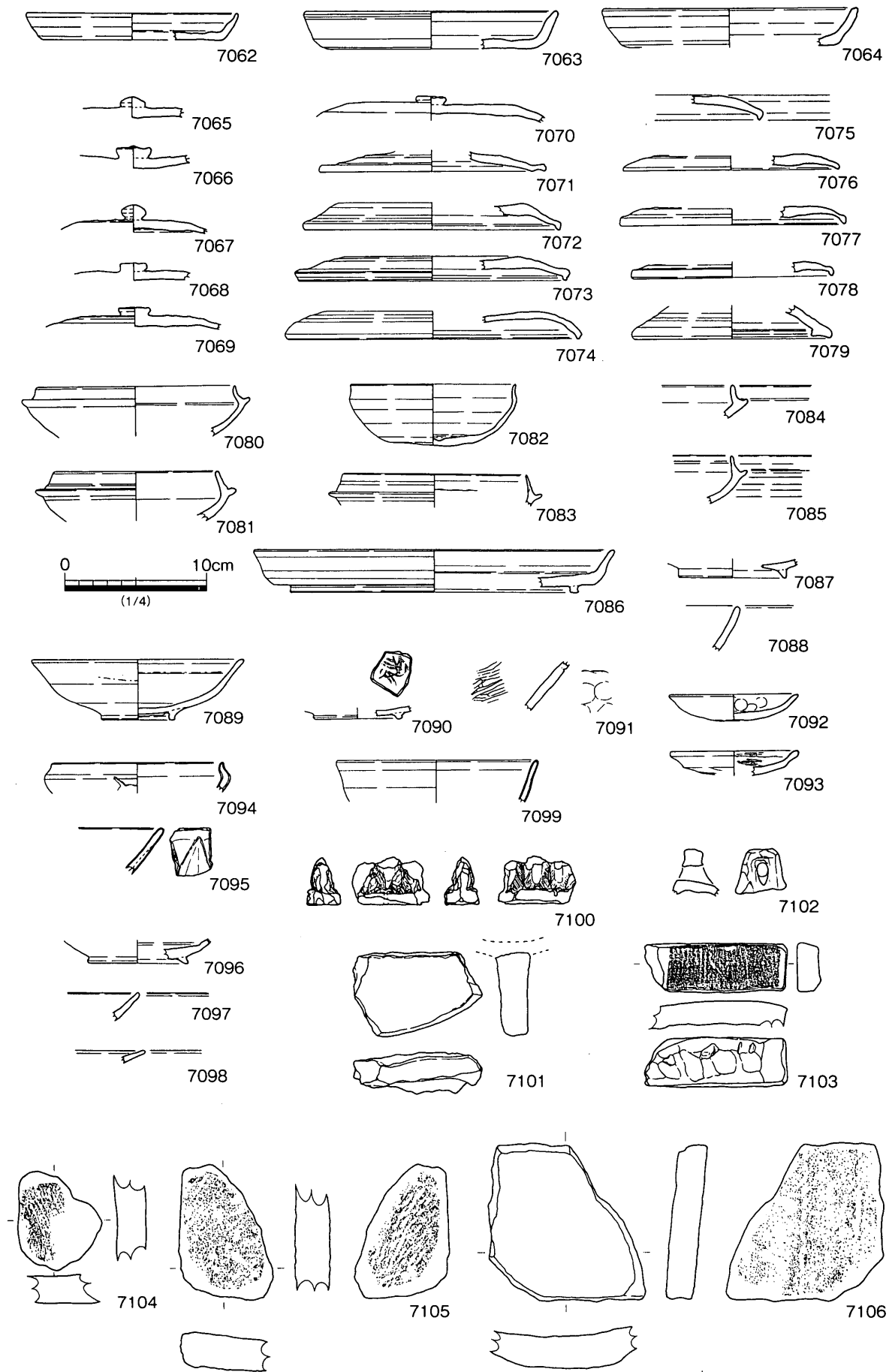
第 233 图 遺物包含層遺物実測図 14



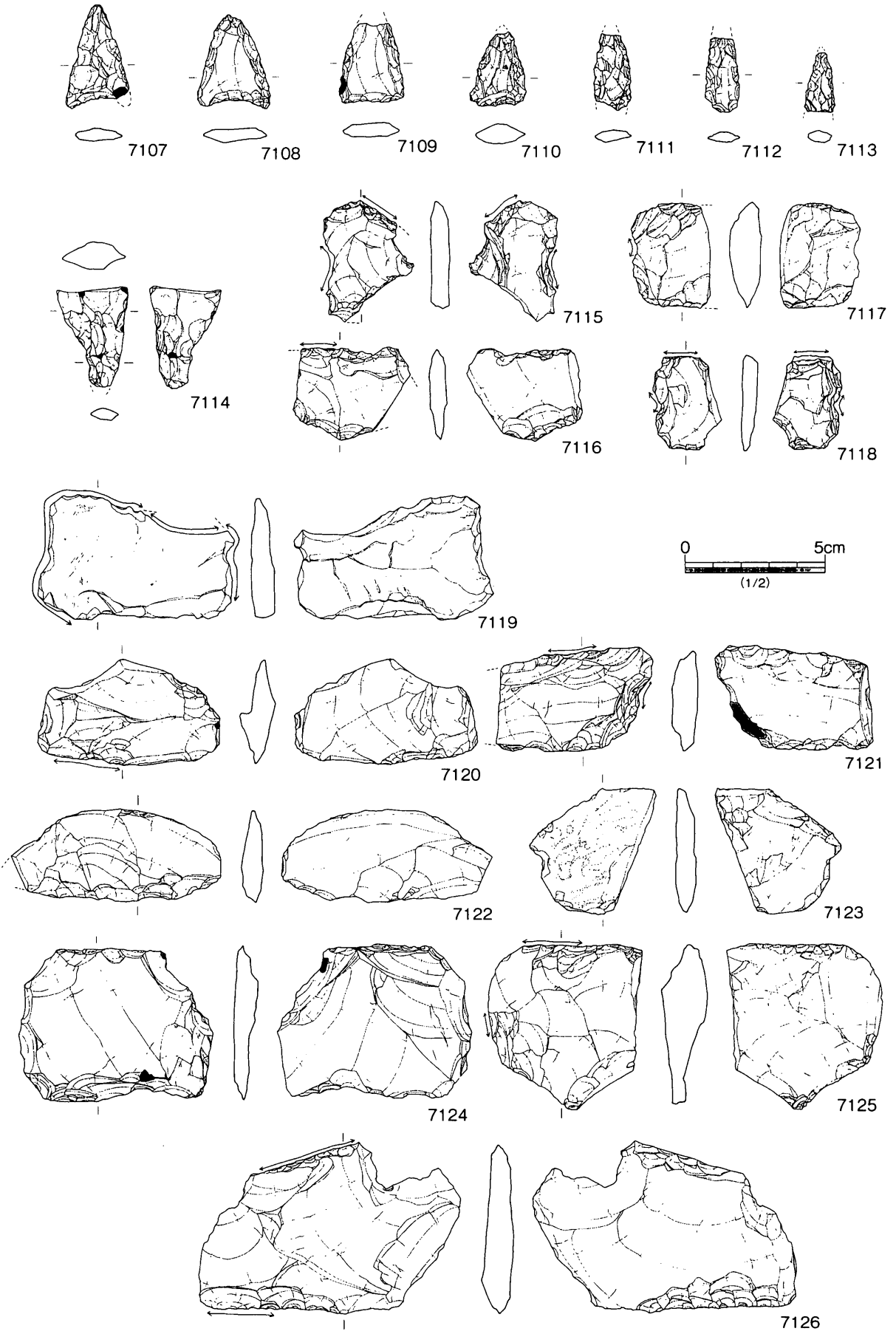
第 234 図 遺物包含層遺物実測図 15



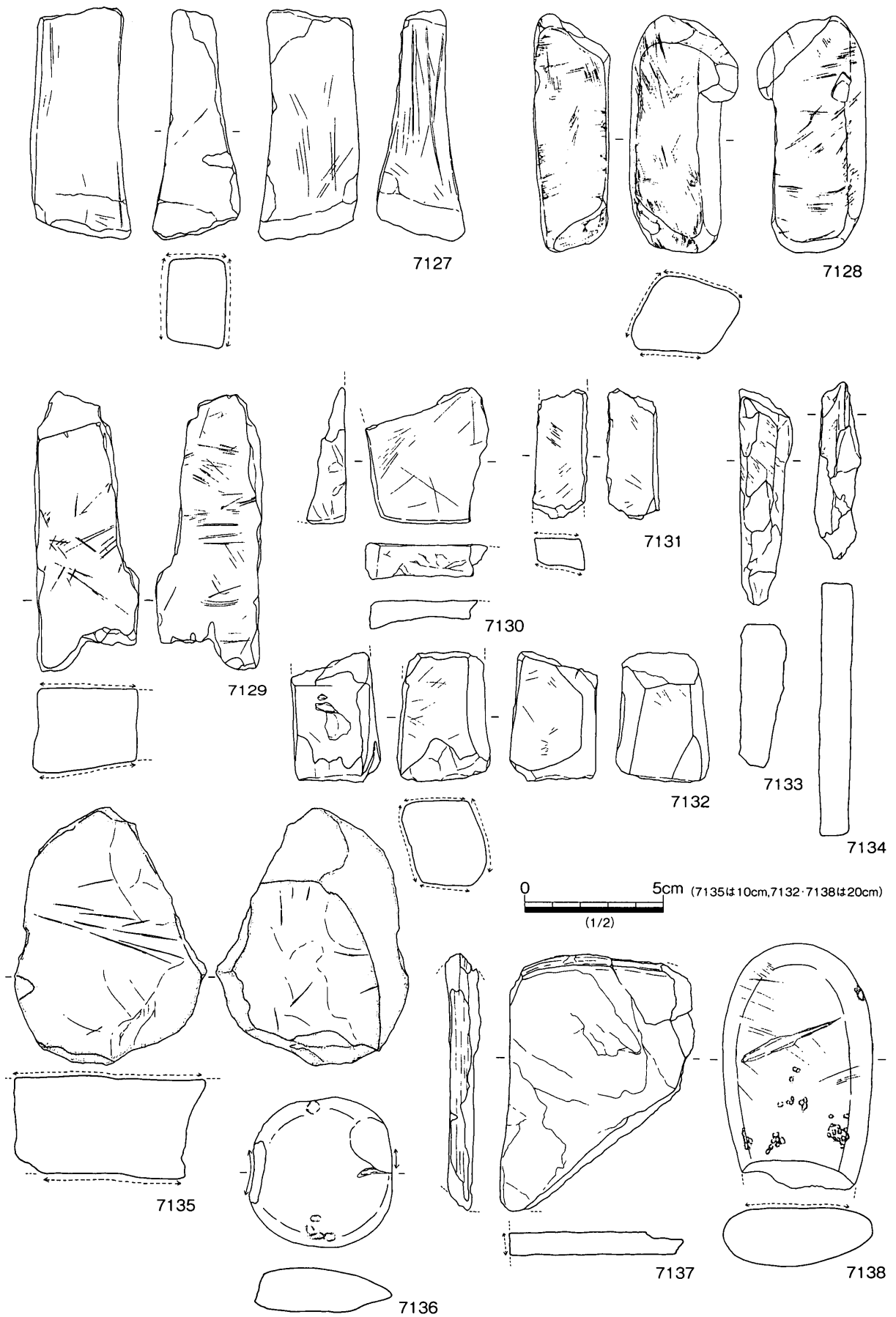
第 235 図 遺物包含層遺物実測図 16



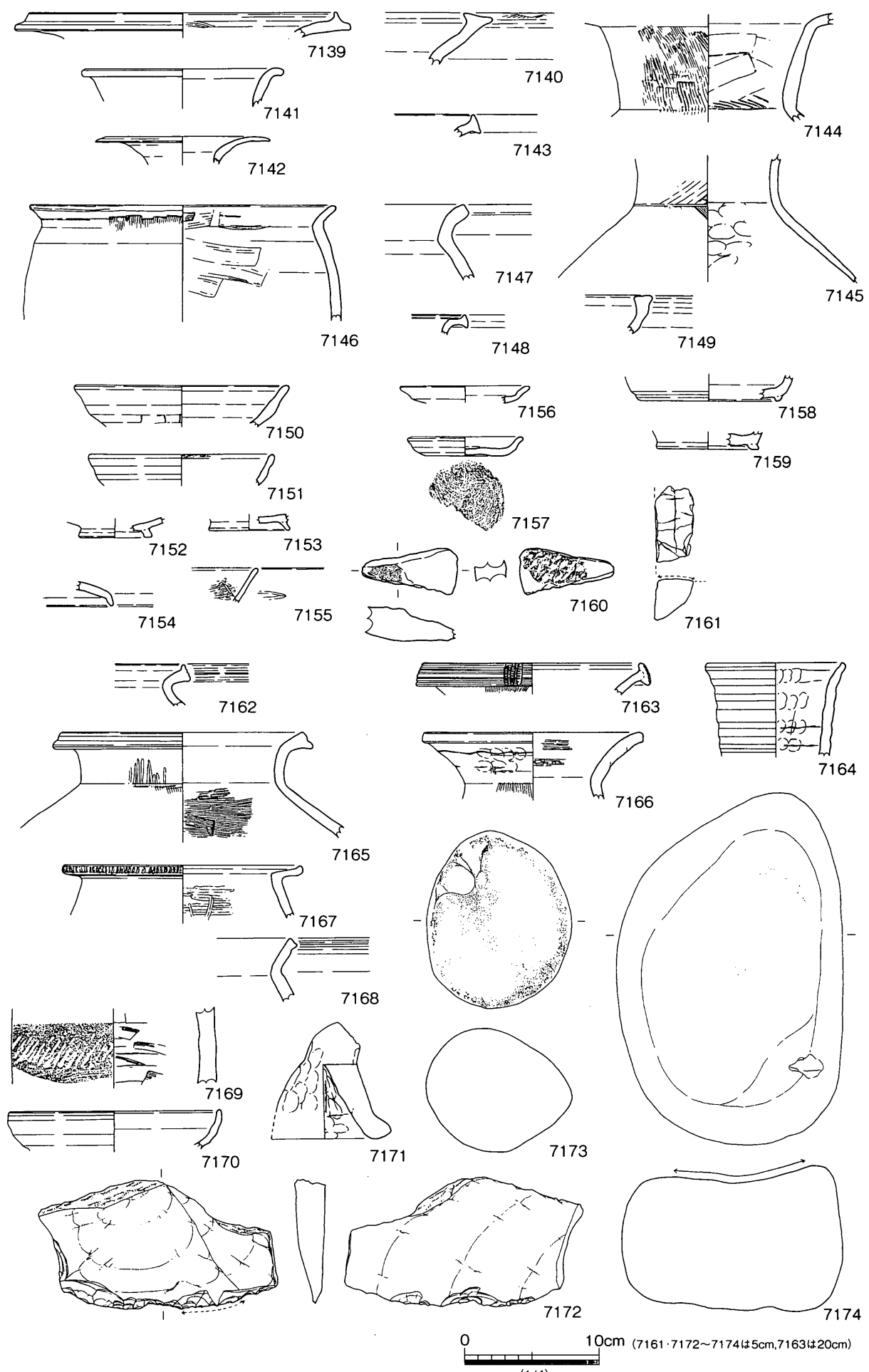
第 236 图 遺物包含層遺物実測图 17



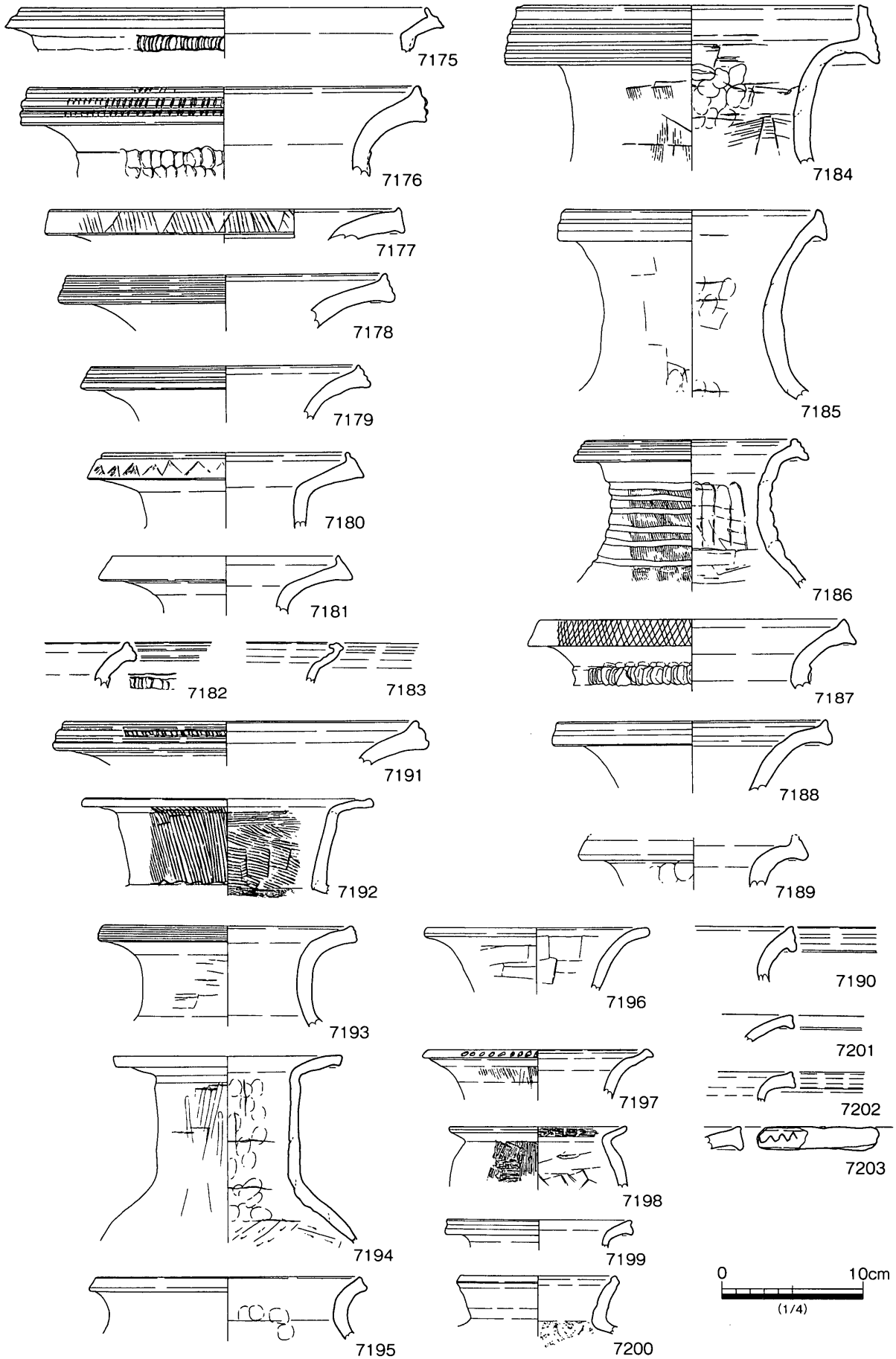
第 237 图 遺物包含層遺物実測图 18



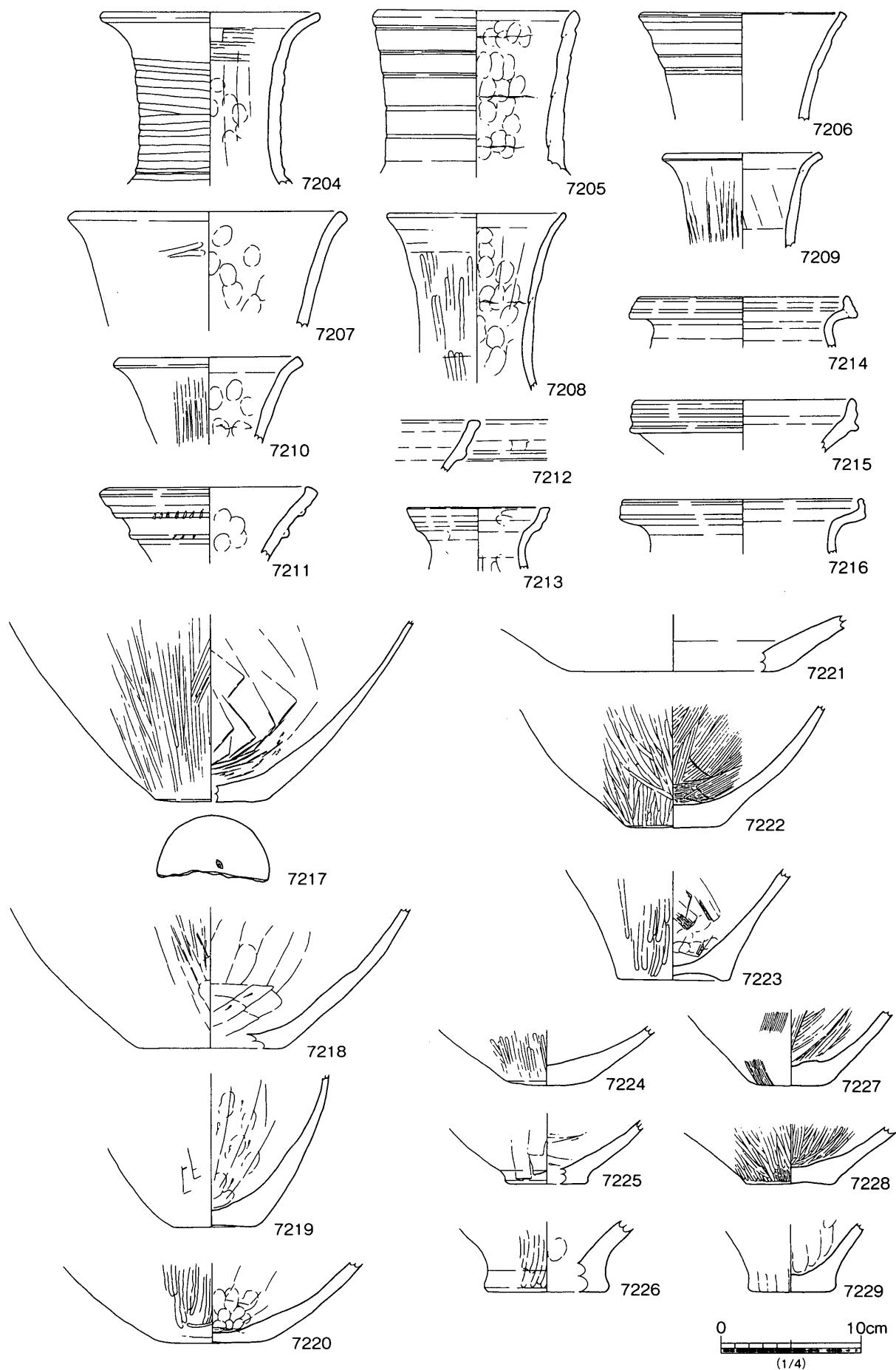
第 238 図 遺物包含層遺物実測図 19



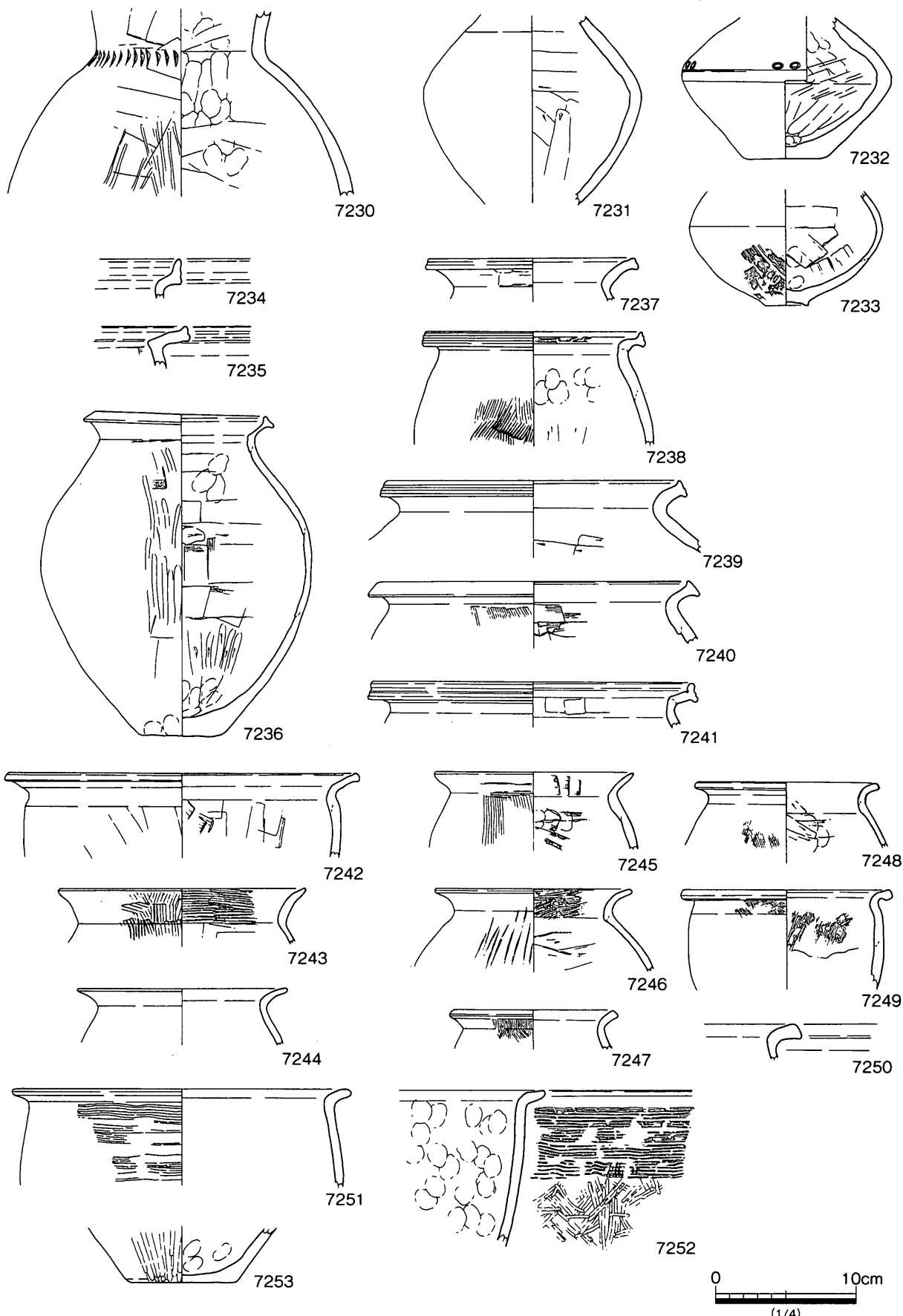
第 239 図 遺物包含層遺物実測図 20



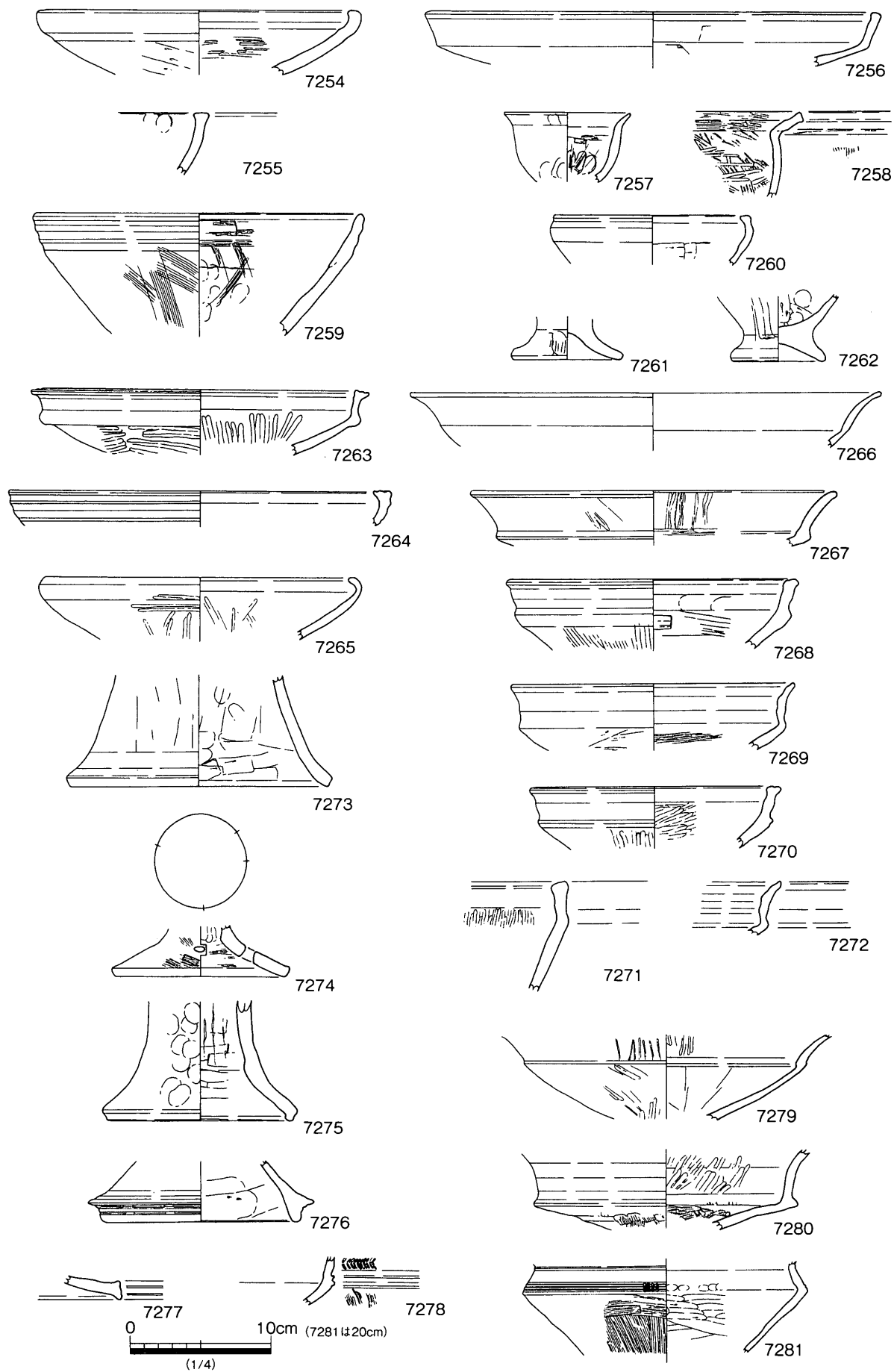
第 240 图 遺物包含層遺物実測図 21



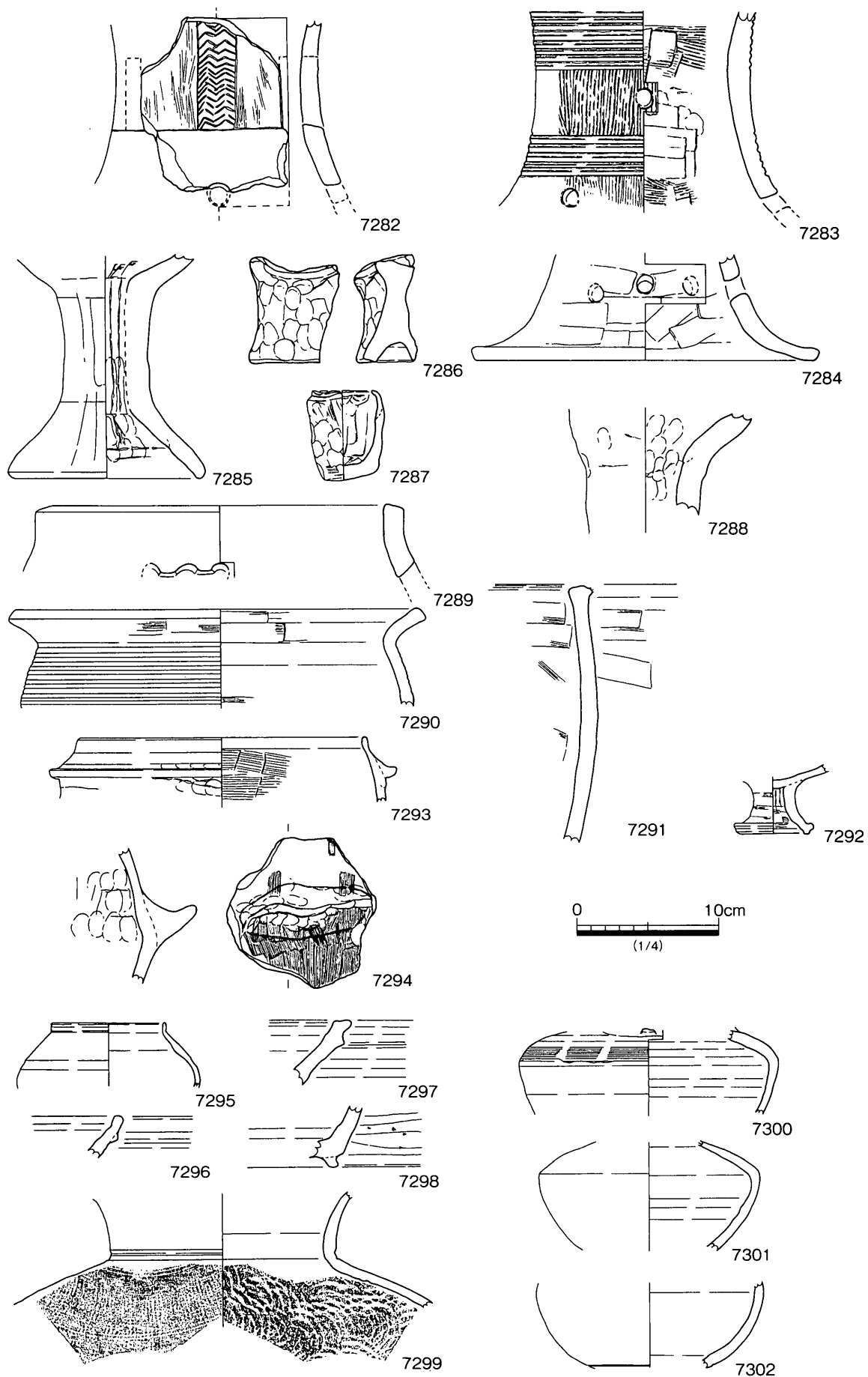
第 241 图 遺物包含層遺物実測図 22



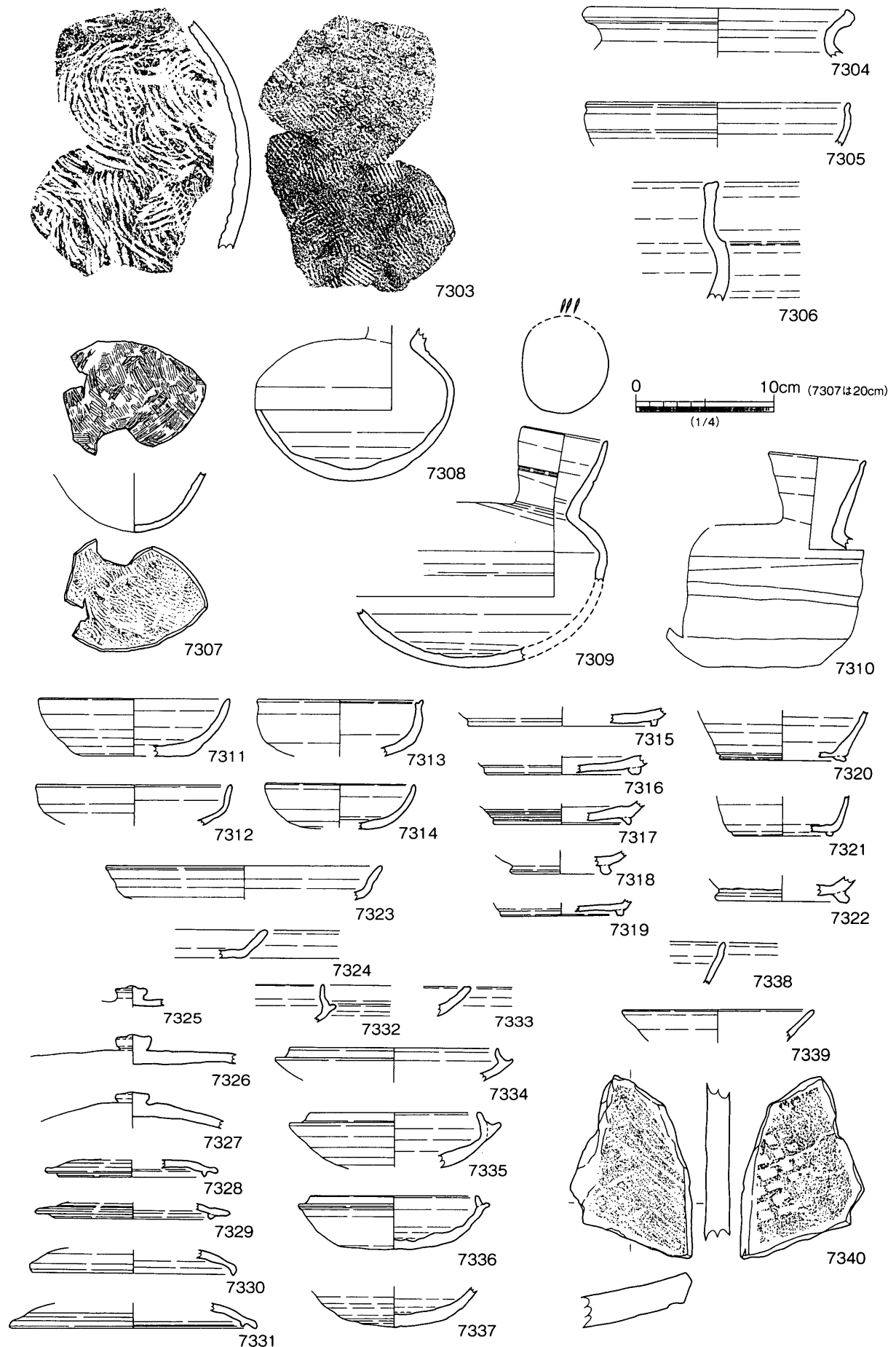
第 242 図 遺物包含層遺物実測図 23



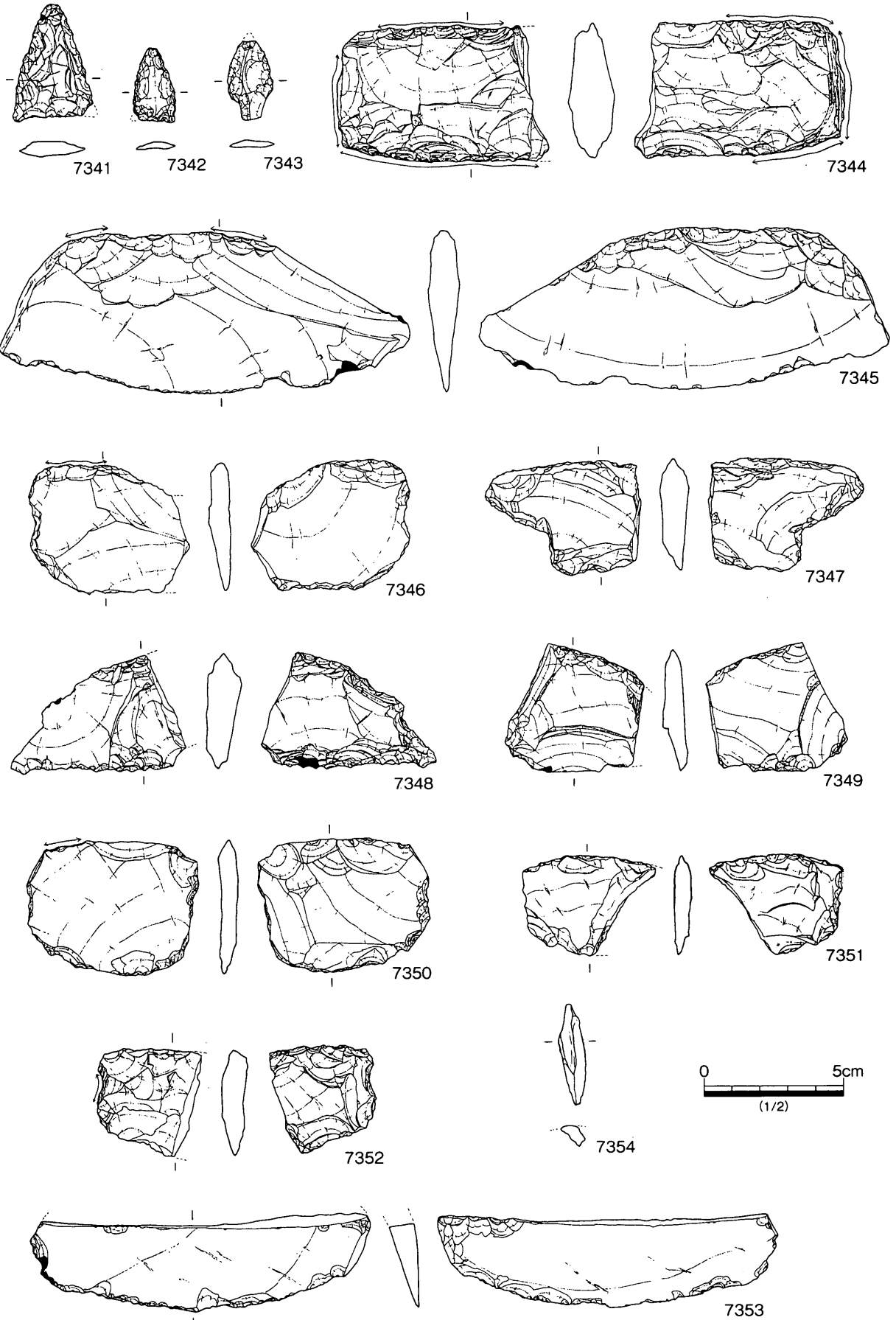
第243図 遺物包含層遺物実測図24



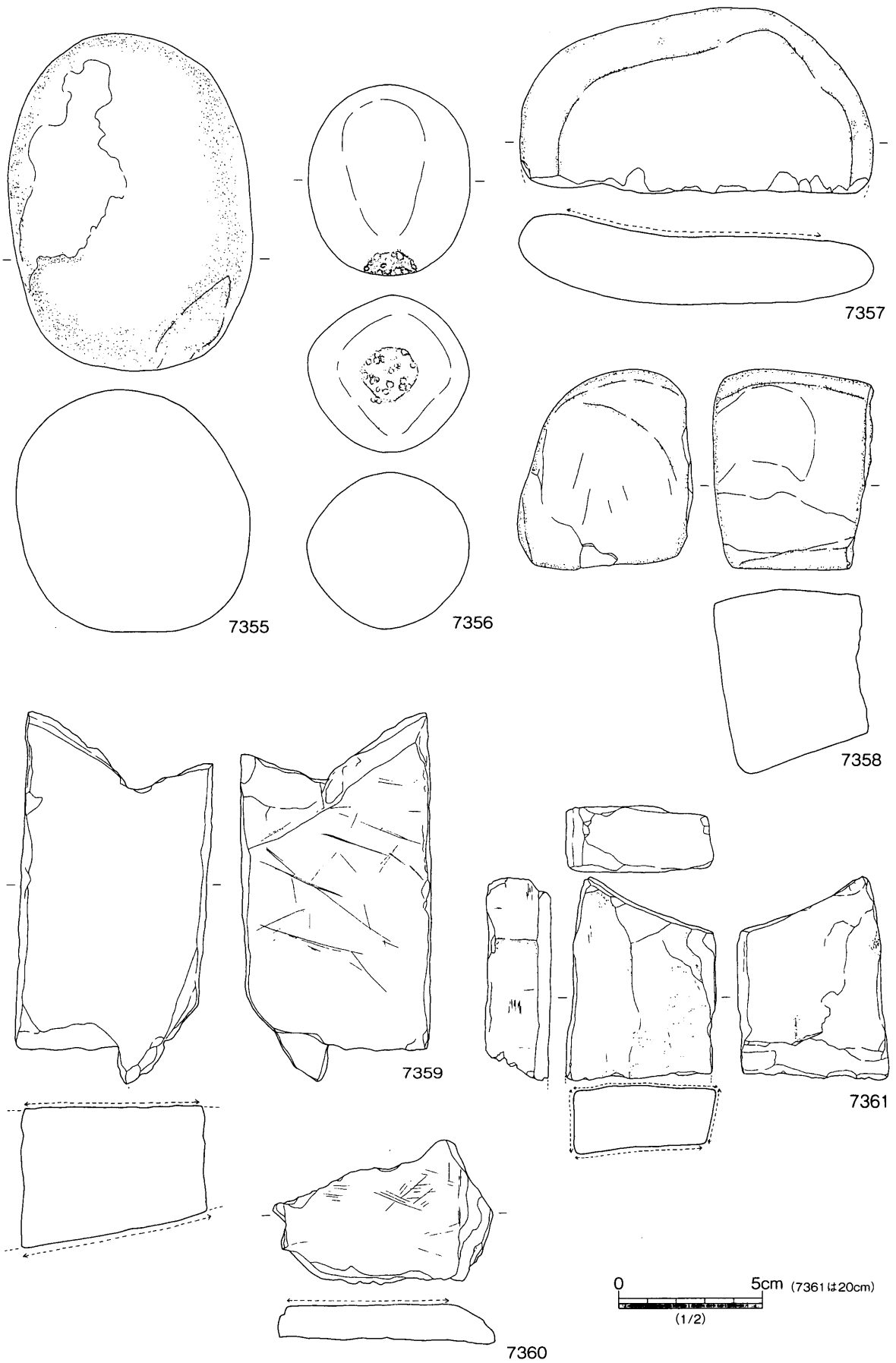
第 244 图 遺物包含層遺物実測图 25



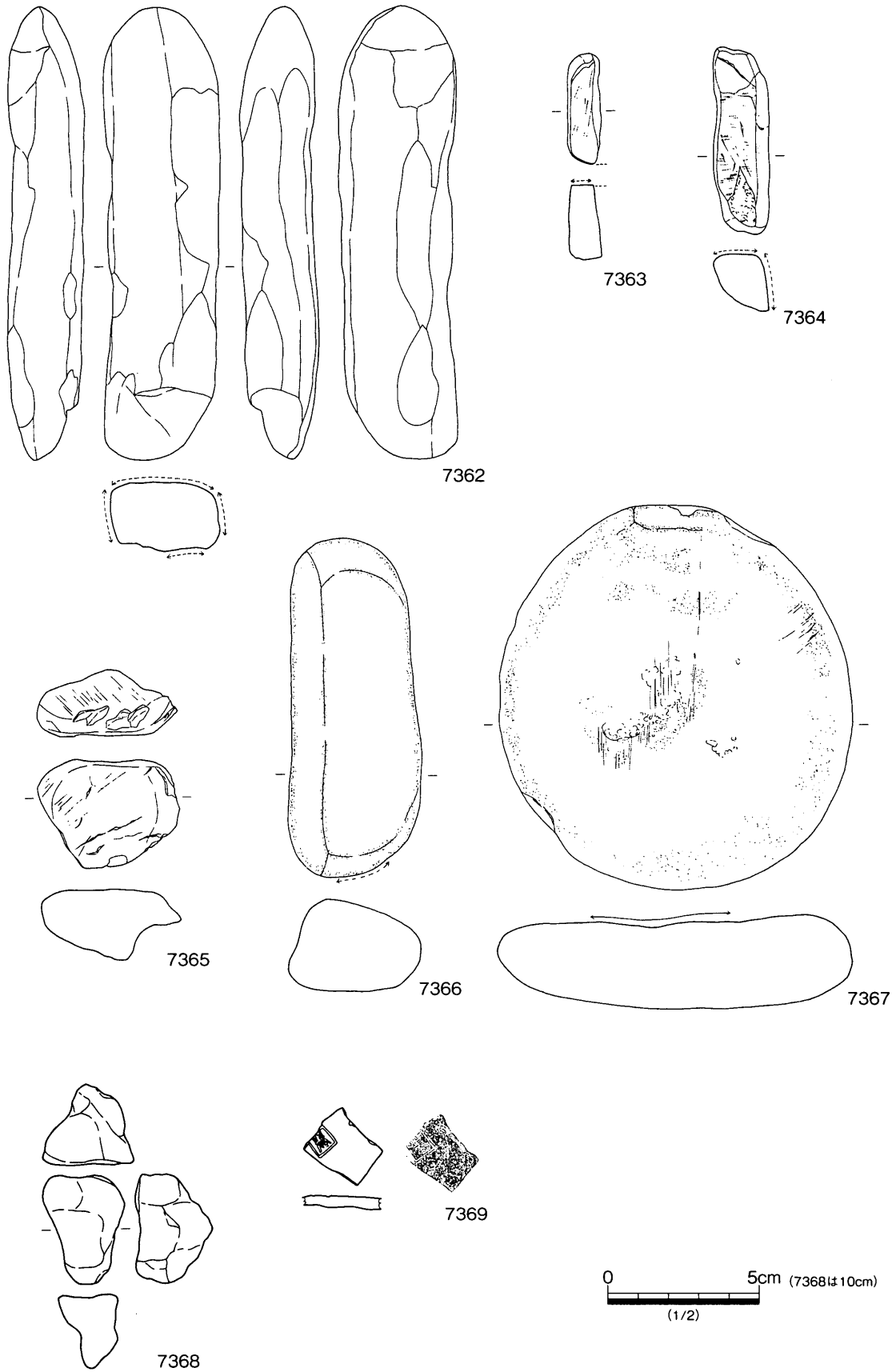
第 245 図 遺物包含層遺物実測図 26



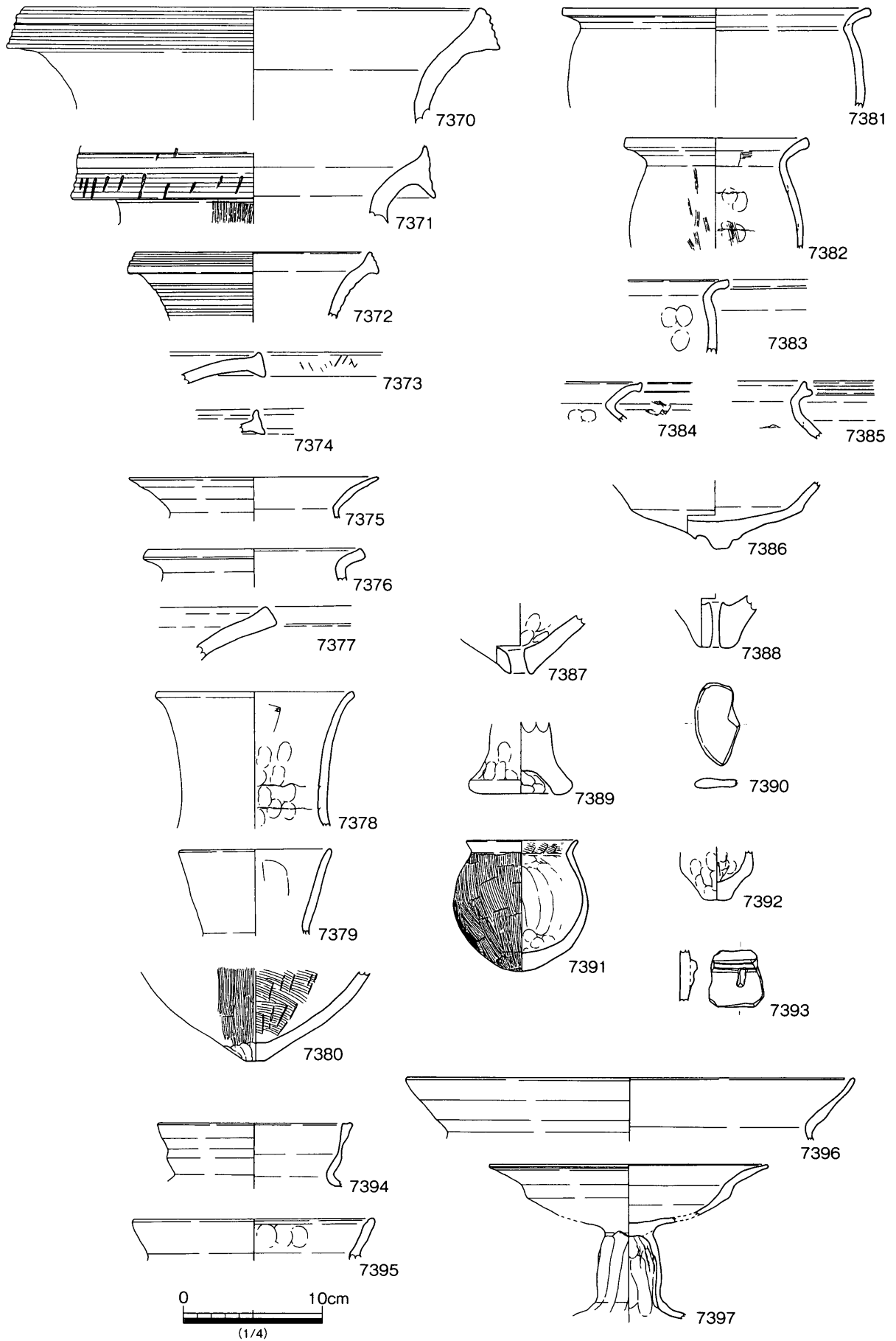
第 246 図 遺物包含層遺物実測図 27



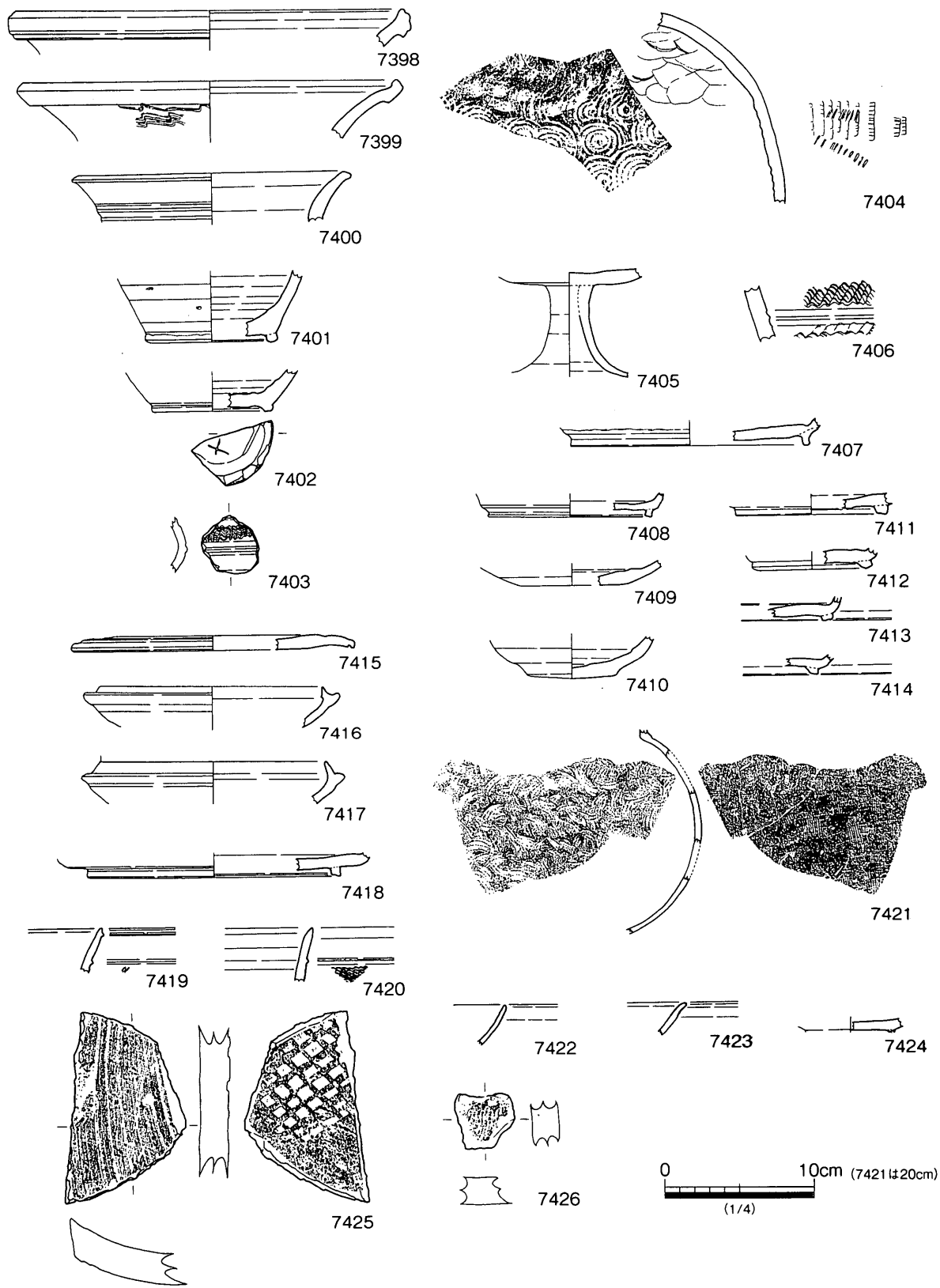
第 247 図 遺物包含層遺物実測図 28



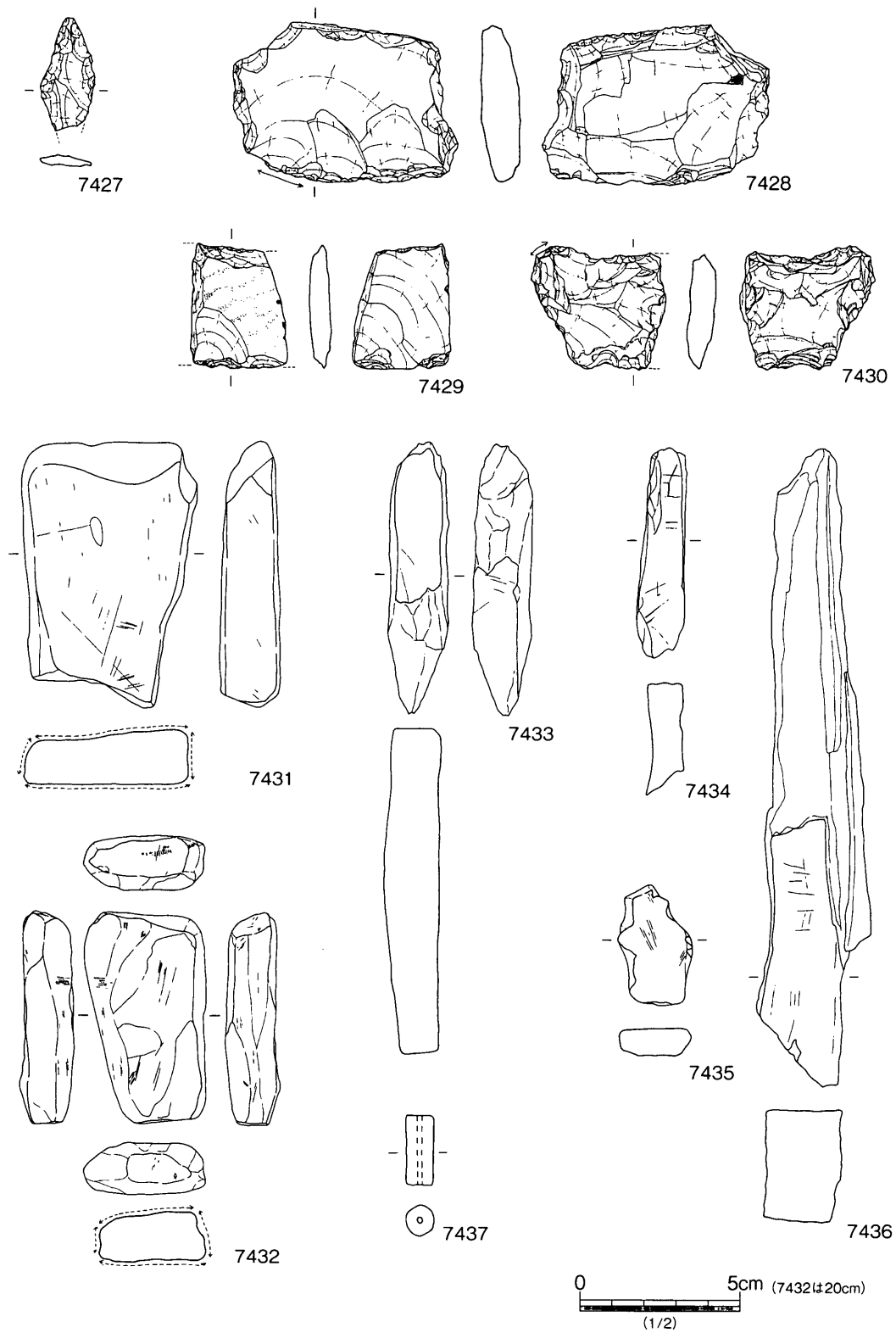
第 248 図 遺物包含層遺物実測図 29



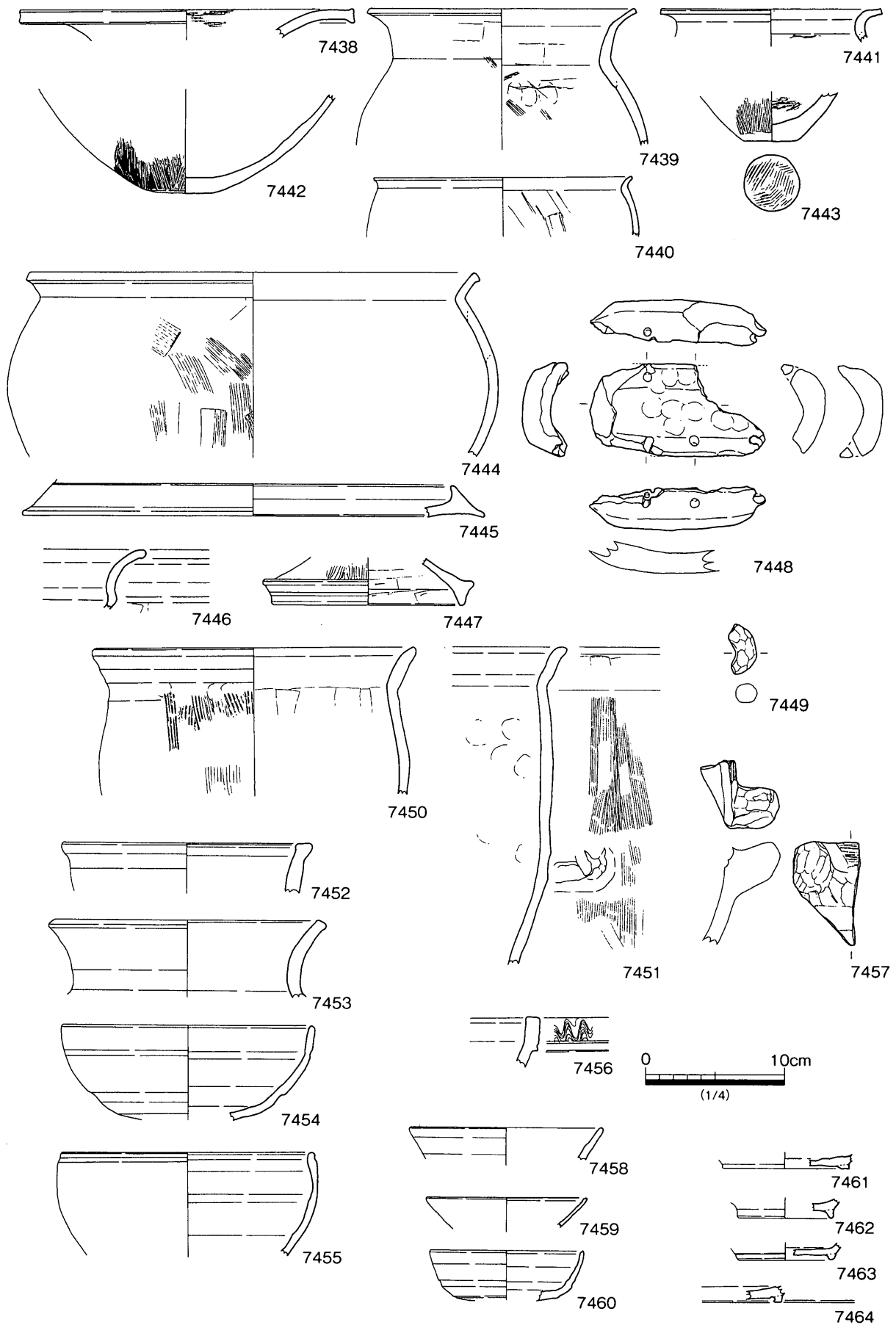
第 249 図 遺物包含層遺物実測図 30



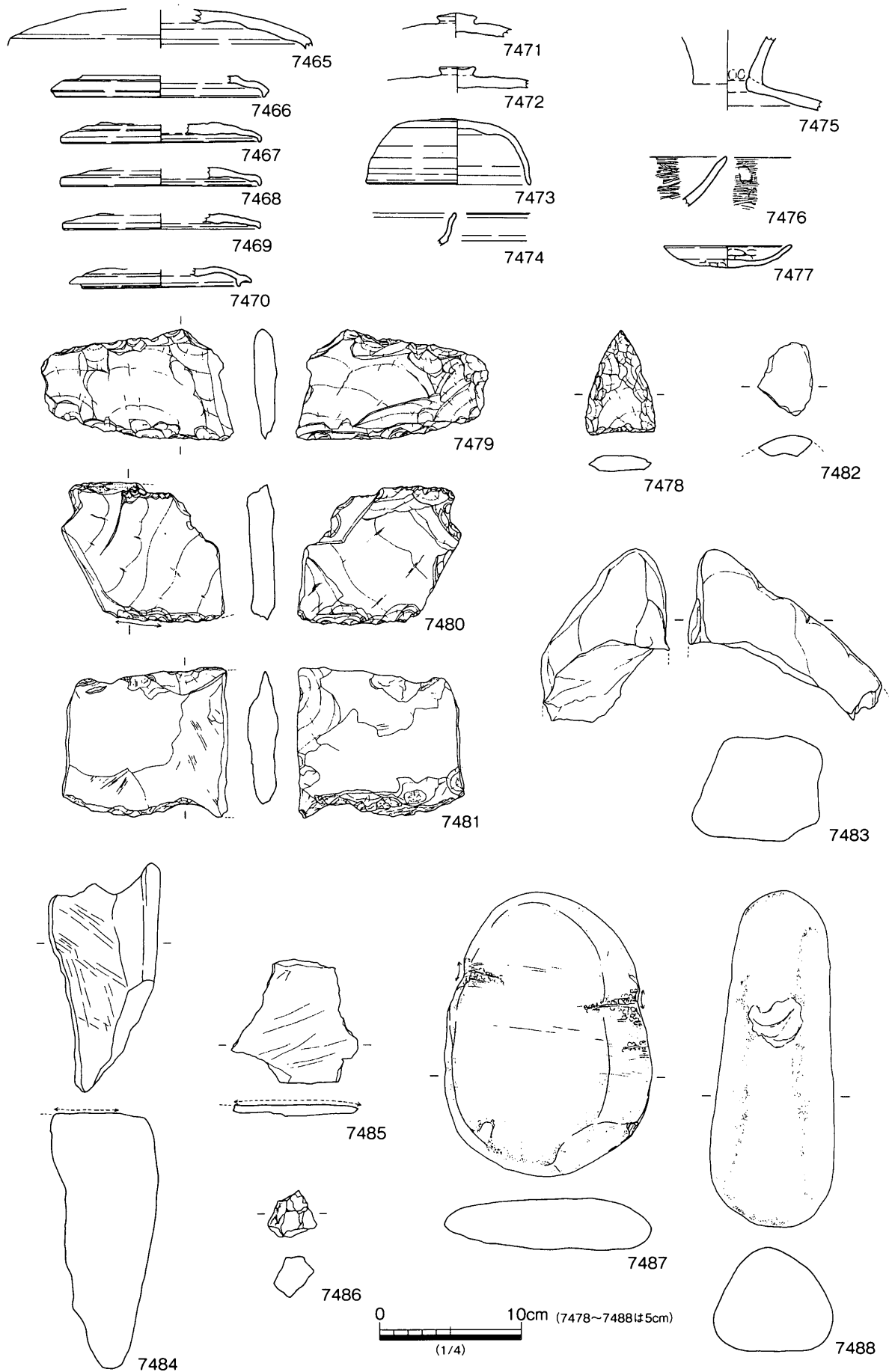
第250图 遺物包含層遺物実測图 31



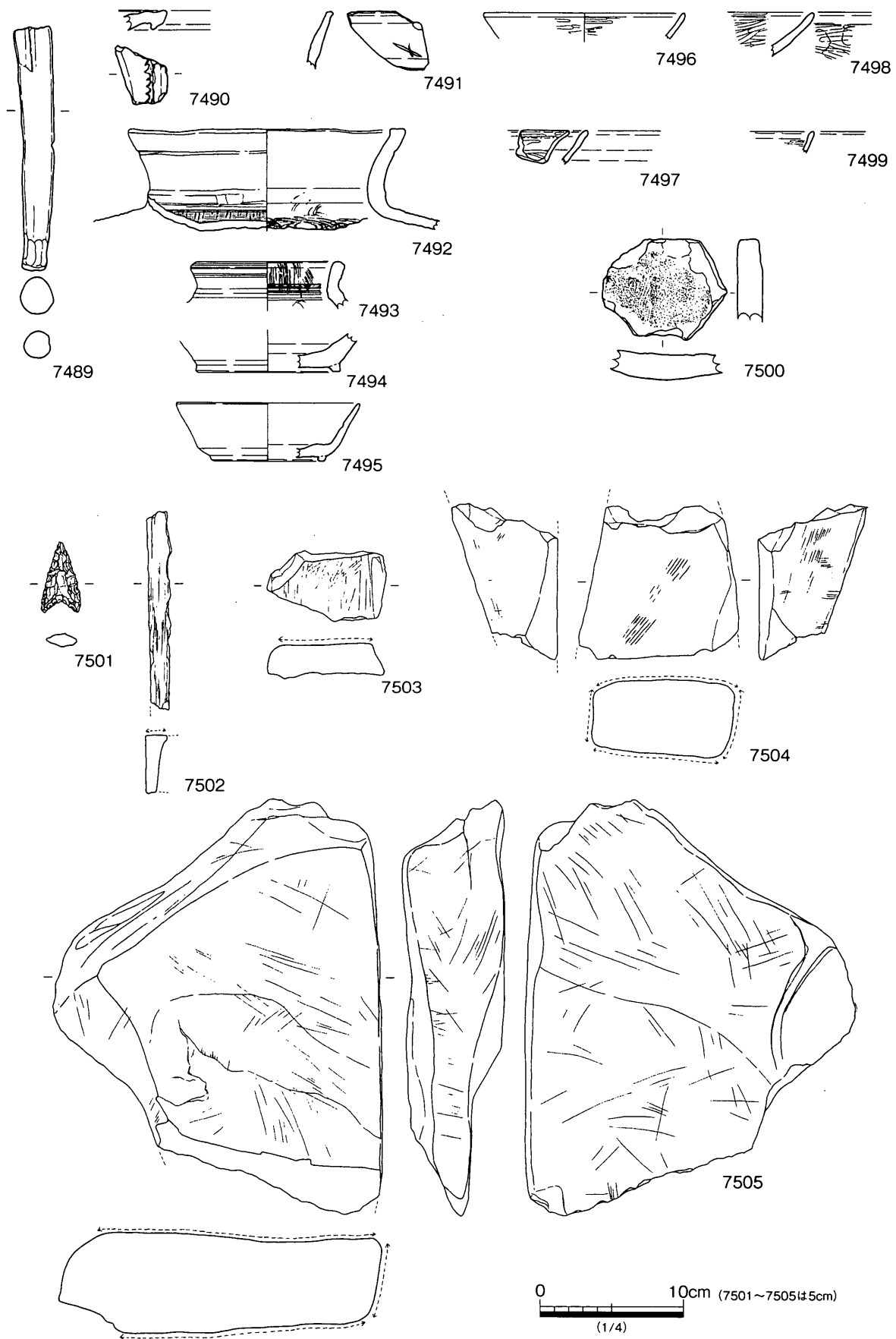
第 251 図 遺物包含層遺物実測図 32



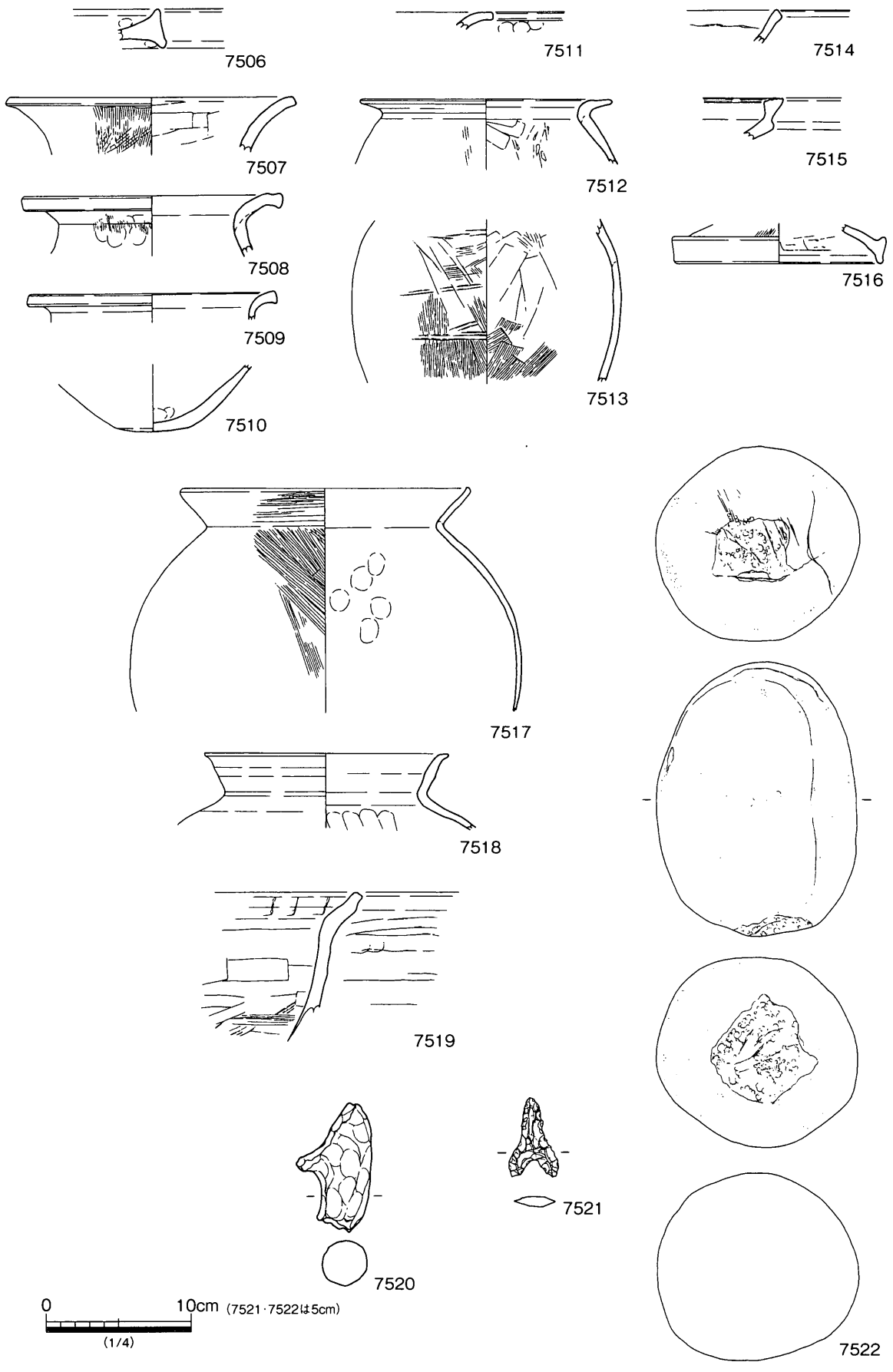
第 252 図 遺物包含層遺物実測図 33



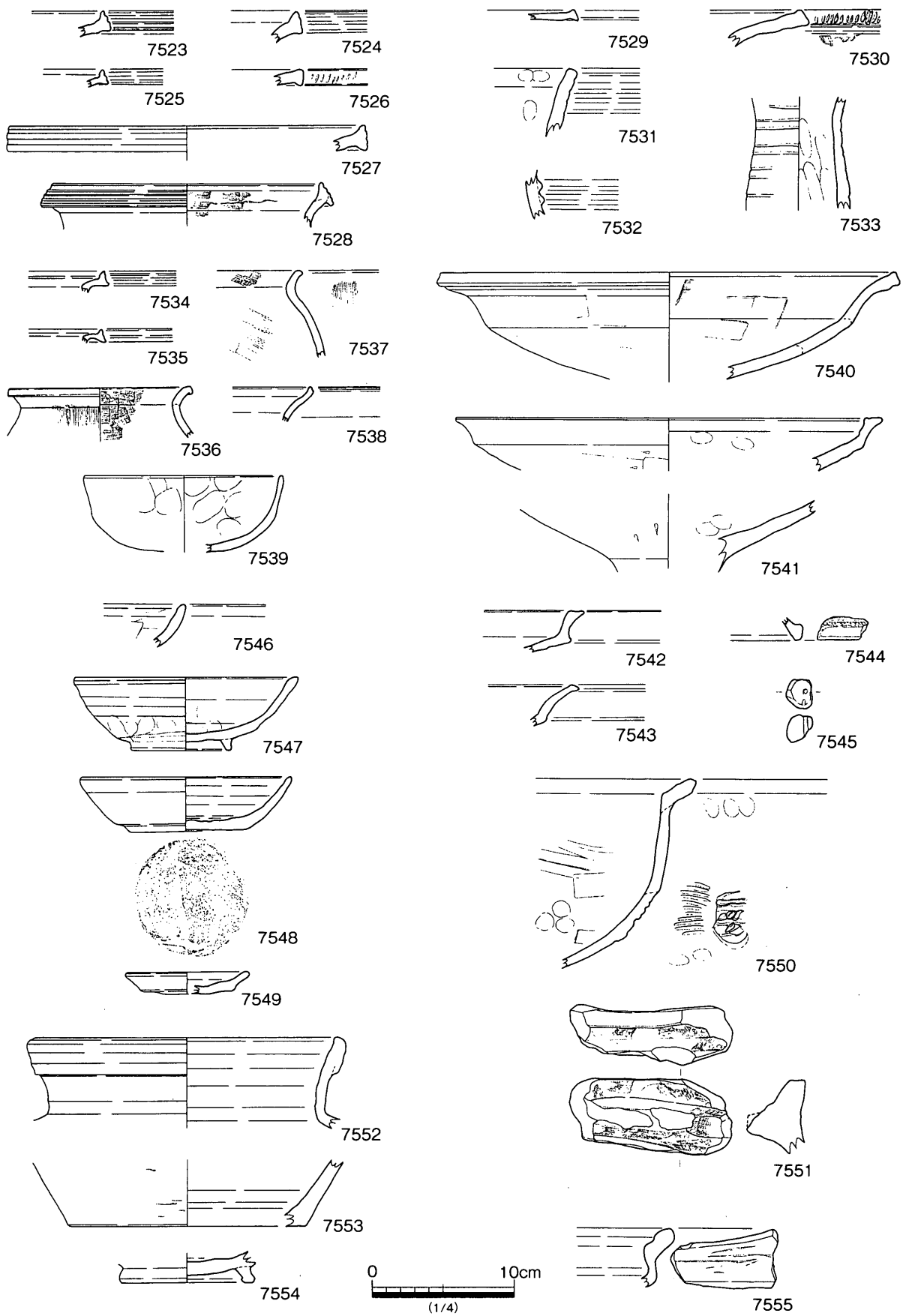
第 253 図 遺物包含層遺物実測図 34



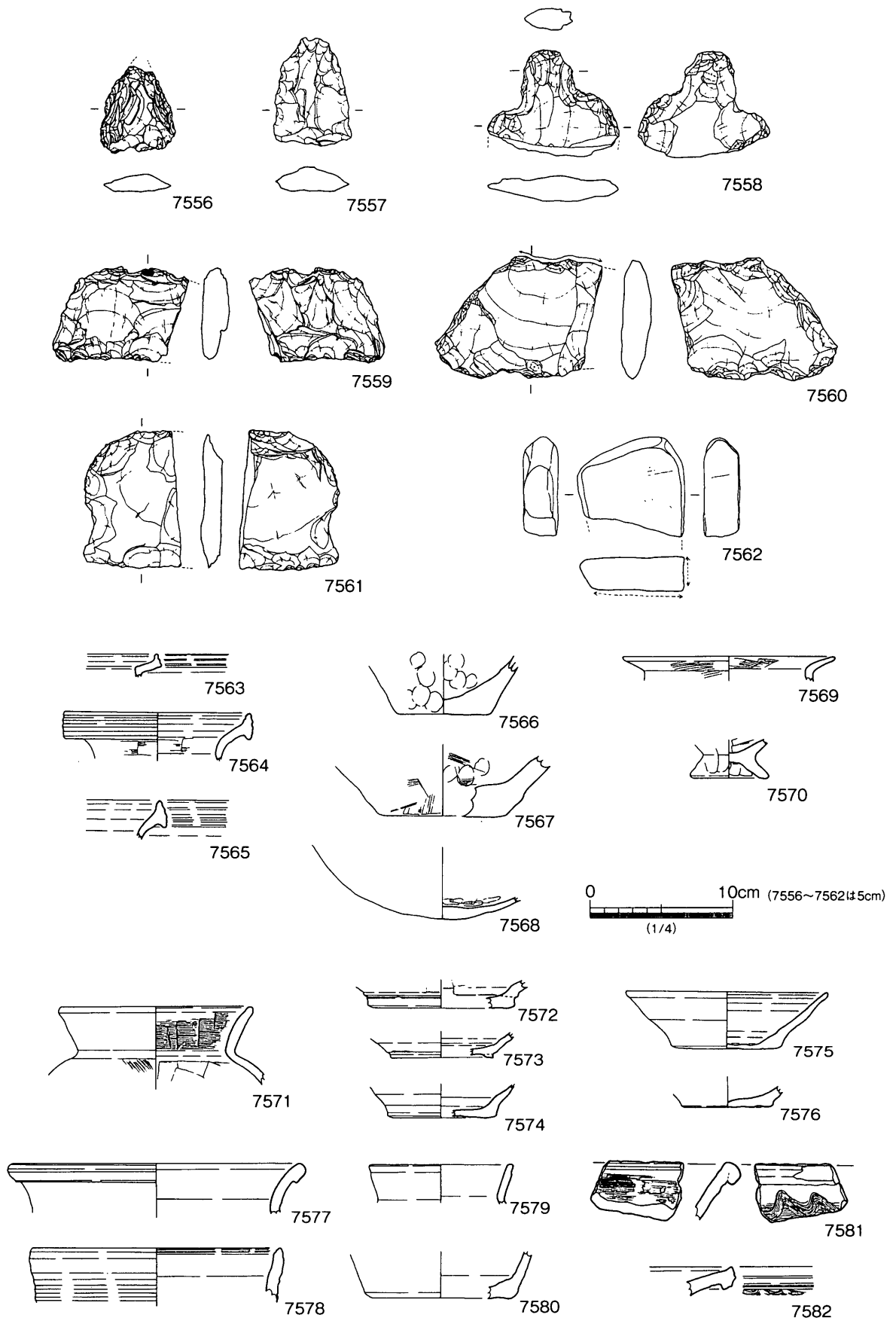
第 254 図 遺物包含層遺物実測図 35



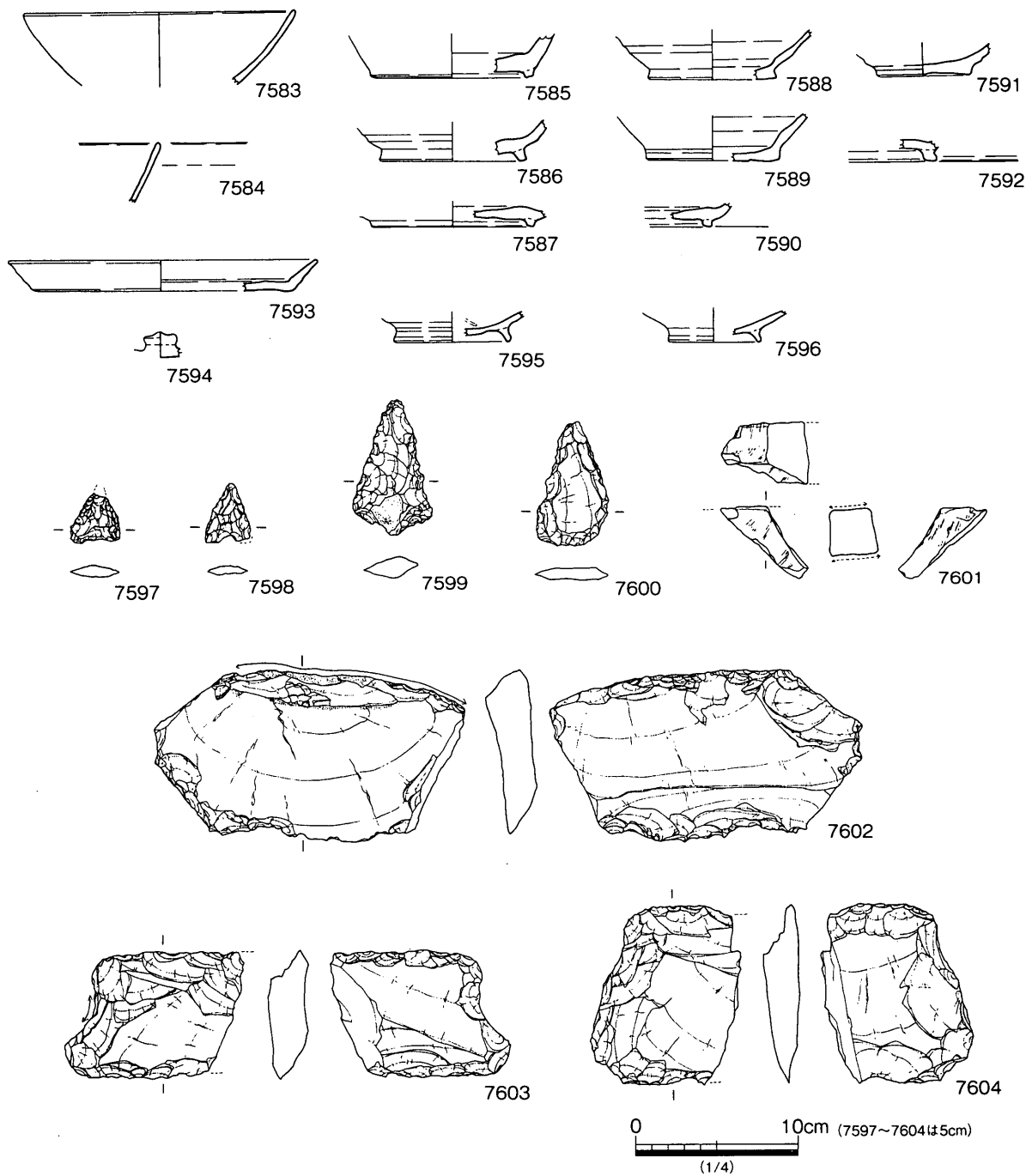
第 255 図 遺物包含層遺物実測図 36



第 256 图 遺物包含層遺物実測図 37



第257図 遺物包含層遺物実測図 38



第 258 図 遺物包含層遺物実測図 39

する。しかしながら、山形文の施文状態が不均整なために、稚雑な印象を受ける資料である。7285は、上部と脚部の形態が似通った鼓形の資料である。7309の口頸部の基部に近い箇所には、平行な3本線のヘラ記号が認められる。7369の外表面には、篆書の「奉」字の印が刻まれている。この資料については、国立歴史民俗博物館平川南館長から、日本の古代においては、「奉」字の篆書を記述することができたのは、文字に詳しい僧侶等の職種に限られていた可能性が高いことが教授された。7390は、中心部に原形の窪みを留めているために、容器の底面が転用されたものと判断される。7393の外表面には、粘土紐がT字状に貼り付けられている。7397の脚部には、中間部が膨らんだ古墳時代初期の特徴が見られる。7402の底面には、十字型のヘラ記号が認められる。7448は、長・短軸方向の断面形態が箱型を示すことから、構造船を模したものと考えられる。図面左側の底面が、端部に向かって斜め上方へ傾斜することから、船首あるいは船尾に近い箇所と判断される。左右の舷側に相当する部位の上端部には、長軸に対して対称な位置に、等間隔の穿孔があり、櫂の装着孔を表現したものと判断される。7491の外表面には、長短の沈線文を斜交させたヘラ記号が認められる。

第4章 統合事業に伴う発掘調査の成果

第1節 土層序

善通寺病院及び陸軍病院の建設に伴う造成土が厚く堆積しているために、遺構面は地表面から深い位置で検出されたが、基本的な土層序はⅠ～Ⅵ区と同様である。

当該地区は、上記の環境下にあることと、旧状が長期にわたって、平屋の木造建築が存在するのみの条件であったために、遺構の残存状態はきわめて良好である。

第2節 遺構と遺物

検出された遺構は、弥生時代に所属するものと、古墳時代以降の時期に所属するものに大別される。

報告に際しての留意点は、第3章と同様であるが、遺構名称については、所在地を明確にするために、遺構略称と遺構番号の間に、地区名を併記した。例えば、「SDx01」、「SHy01」等である。

1 弥生時代の遺構

(1) 竪穴住居跡

SHy01

[遺構] Y区の中央部に所在する。

後世に床面よりも深い位置まで掘削されたために、同面中央部の土坑(SHy01K01)と4個の支柱穴跡(SHy01P01～04)が残存するだけである。後者の位置関係から、原形は前者の周囲に支柱穴跡が円形に配列されていたことがわかる。

前者の底面には、投棄された土器が存在していた。

後者のうち、P04の柱痕跡から、柱材の最大径が約20cmであったことが判明した。

推測される住居跡全体の規模は、直径約5mである。

[遺物] 8007と8011の口縁部は、上端部が斜め上方へ摘み上げられた、受け口状の形態である。8008、8010、8012の口縁部の端面に見られる刻目は等間隔には施されていない。

(2) 掘立柱建物跡

① SBy01

[遺構] Y区の中央部から西寄りの位置に所在する。

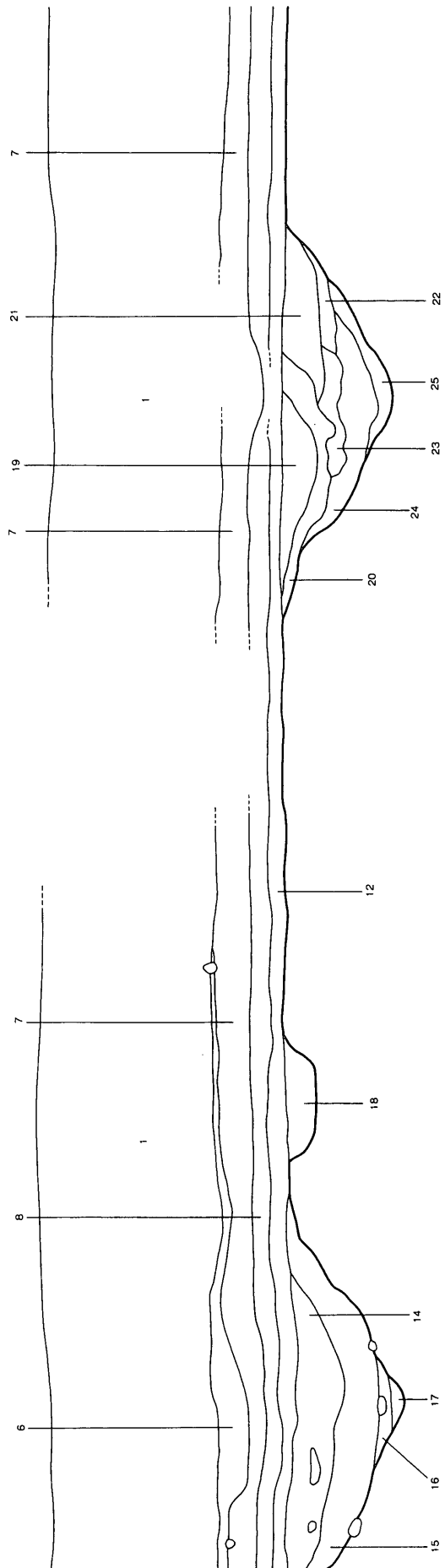
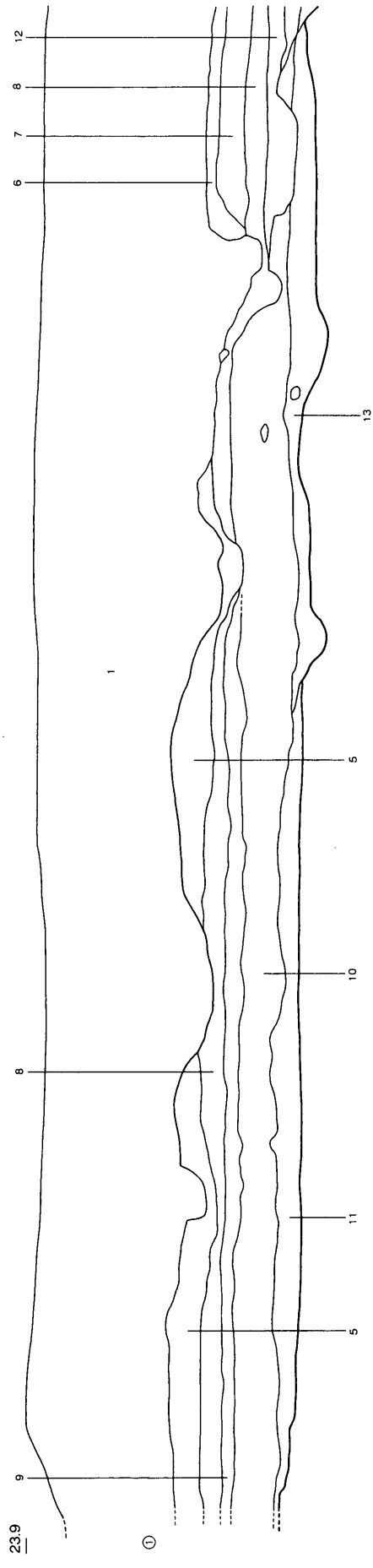
南側の桁行と西側の梁間の一部だけが存在する。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

② SBy02

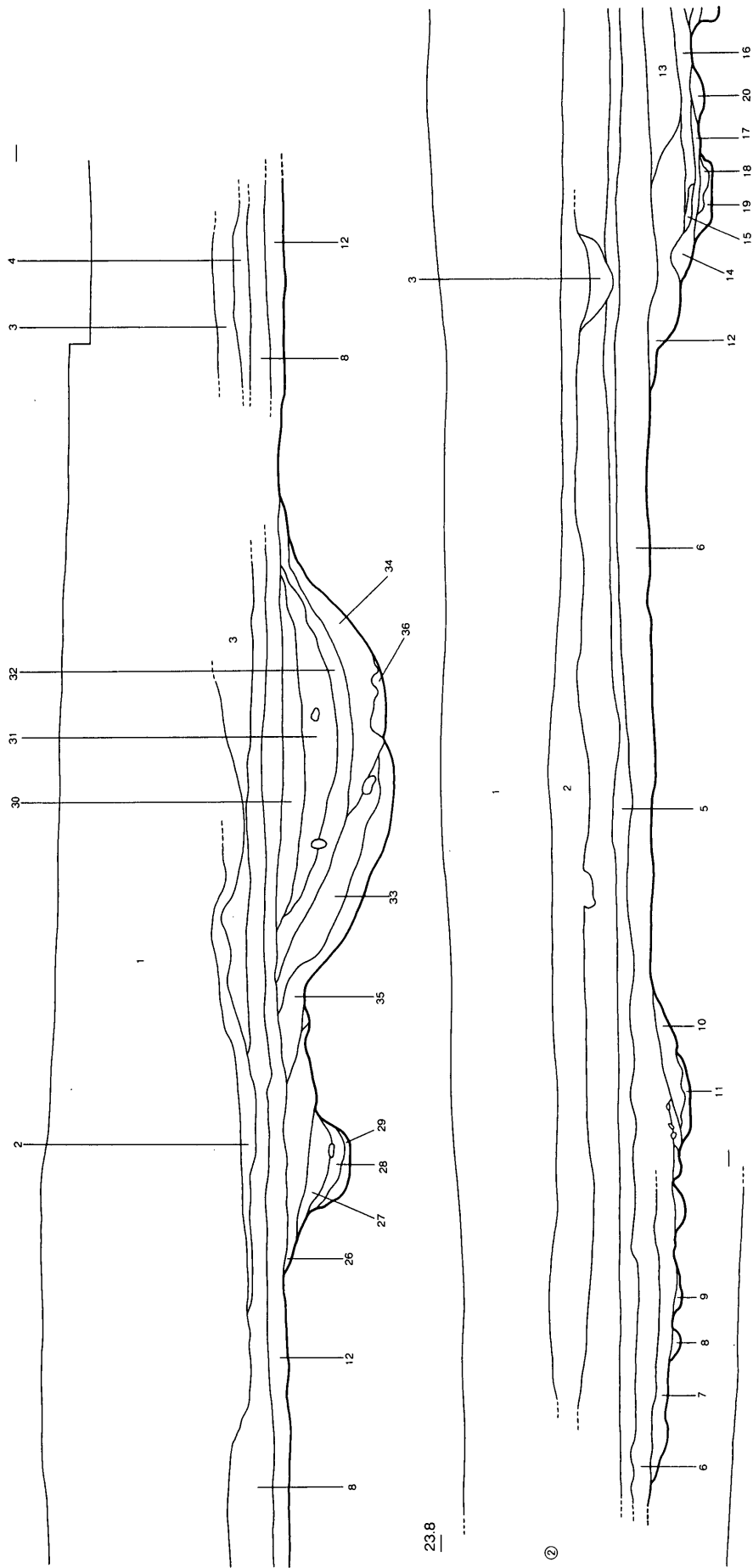
[遺構] Y区の南東部に所在する。

4個の柱穴跡は、概ね正方形の位置関係を示すように配列されており、個々の規模は最大径が90～110cmである。

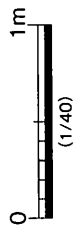


- | | | | | | |
|----|---------------|----|--------|----|---------------------|
| 1 | 普通等規模建設に伴う造成土 | 21 | 暗褐色シルト | 31 | 暗褐色シルト |
| 2 | 灰色シルト | 22 | 灰黄色細砂 | 32 | 褐色シルト |
| 3 | 淡灰色シルト | 23 | 黒褐色シルト | 33 | 淡灰色シルト |
| 4 | 黄褐色シルト | 24 | 黄褐色細砂 | 34 | 暗褐色シルト (暗灰色細砂が混入する) |
| 5 | 黄褐色シルト | 25 | 黒褐色質土 | 35 | 黒褐色シルト |
| 6 | 新灰色シルト | 26 | 暗褐色シルト | 36 | 明褐色極細砂 |
| 7 | 新灰色シルト | 27 | 暗褐色シルト | | |
| 8 | 新灰色質土 | 28 | 暗褐色シルト | | |
| 9 | 新灰色質土 | 29 | 暗褐色粗砂 | | |
| 10 | 灰色シルト | 30 | 褐色シルト | | |
| 11 | 暗褐色シルト | | | | |
| 12 | 淡灰色質土 | | | | |
| 13 | 暗褐色シルト | | | | |
| 14 | 淡灰色質土 | | | | |
| 15 | 暗褐色質土 | | | | |
| 16 | 暗褐色シルト | | | | |
| 17 | 暗褐色質土 | | | | |
| 18 | 暗褐色シルト | | | | |
| 19 | 暗褐色質土 | | | | |
| 20 | 明褐色極細砂 | | | | |

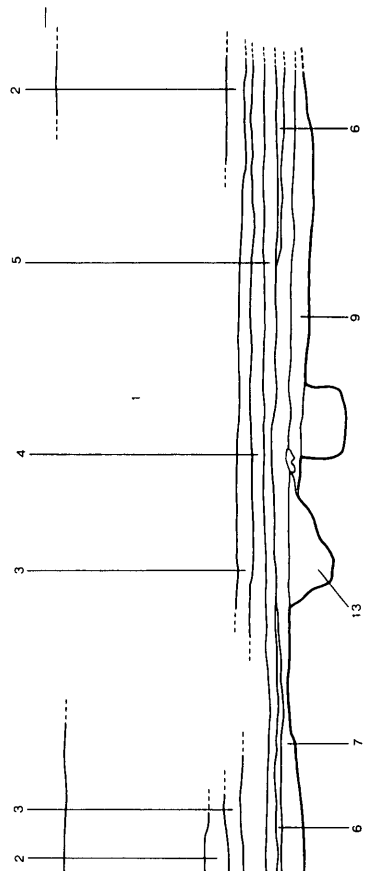
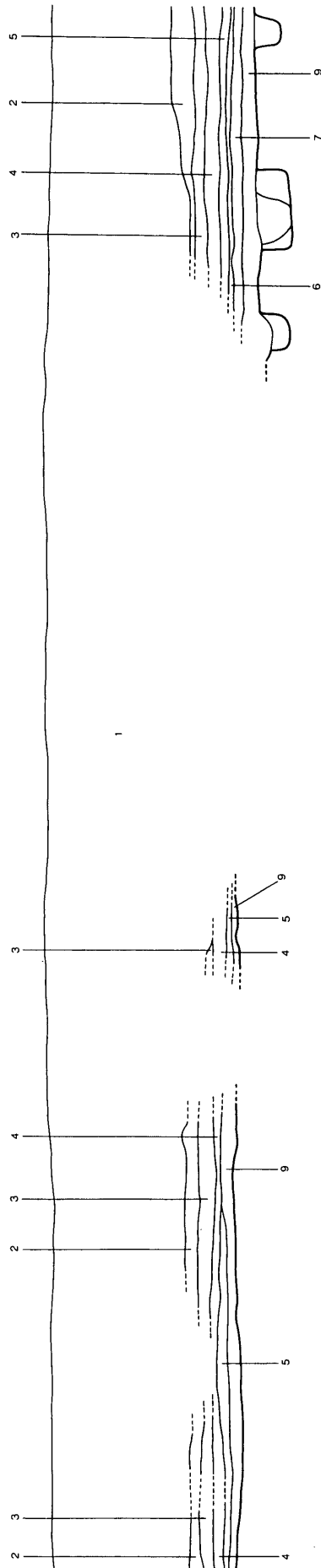
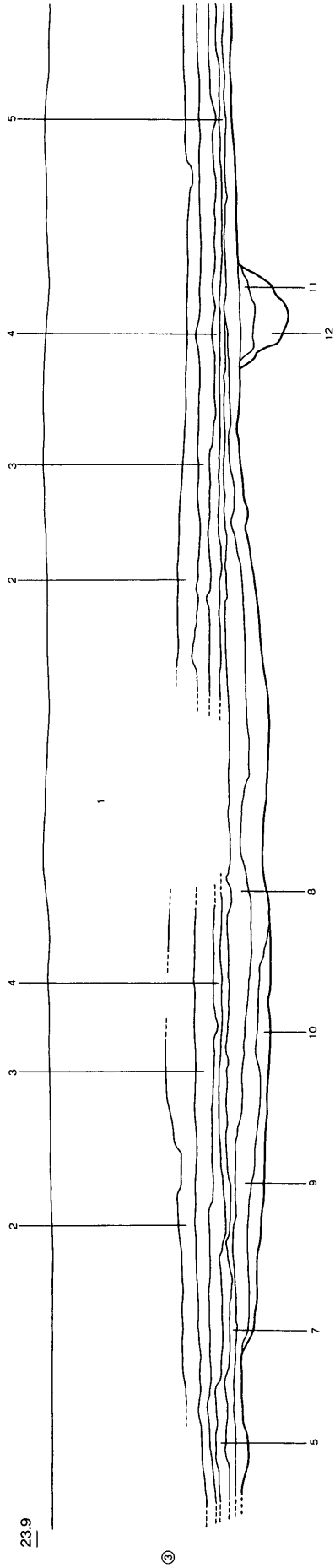
第 259 図 土層序断面実測図 9



- | | | | |
|----|--|----|-----------------------|
| 1 | 普通寺南院建設に伴う遊成土 | 12 | 暗褐色シルト |
| 2 | 濁灰黄色シルト | 13 | 灰色シルト |
| 3 | 暗灰色シルト | 14 | 深灰色シルト |
| 4 | 黄灰色シルト | 15 | 紫灰色シルト |
| 5 | 灰色シルト | 16 | 深灰色シルト |
| 6 | 灰褐色シルト | 17 | 灰色シルト |
| 7 | 暗灰色シルト | 18 | 灰褐色シルト |
| 8 | 暗灰色シルト (直径 0.5 ~ 1.0cm の基礎土塊が
少く混入する) | 19 | 暗灰色シルト |
| 9 | 暗灰色シルト (直径 0.5 ~ 1.0cm の基礎土塊が
多く混入する) | 20 | 暗灰色シルト (黄色土ブロックが混入する) |
| 10 | 暗灰色砂質シルト | 21 | 暗灰色シルト |
| 11 | 暗灰色砂質シルト (直径 1.0 ~ 3.0cm の基礎土
塊が少く混入する) | 22 | 暗灰色シルト |
| | | 23 | 暗灰色シルト |
| | | 24 | 暗褐色シルト |

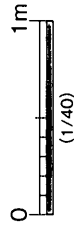


第 260 図 土層序断面実測図 10

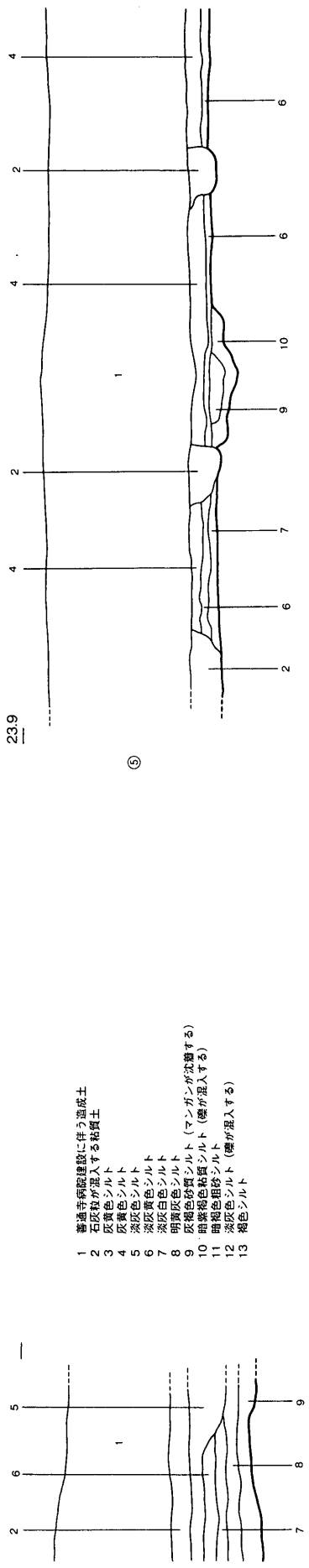
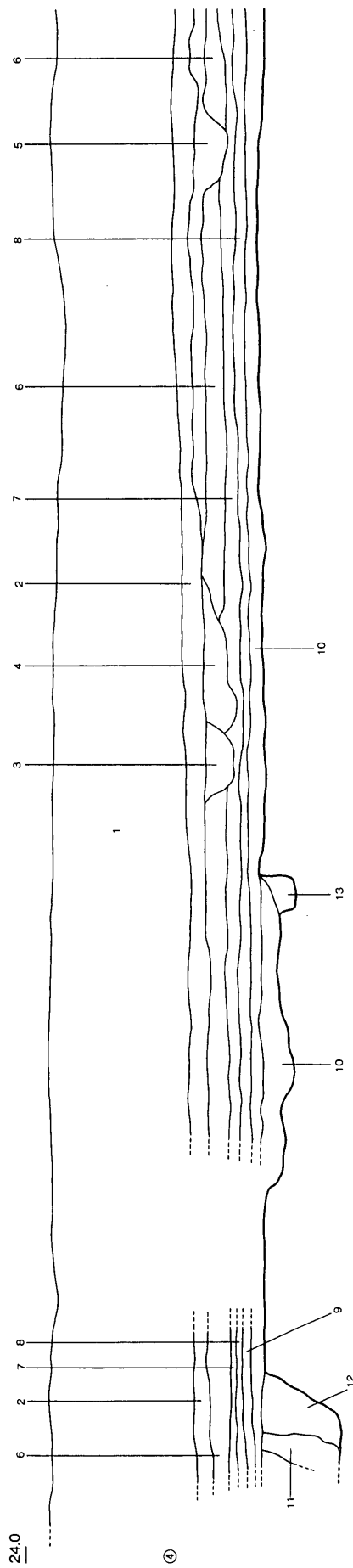


- 10 深褐色砂質シルト (礫が混入する)
- 11 深灰茶色硬面砂シルト
- 12 深灰茶色シルト (黄色土ブロックが混入する)
- 13 暗褐色粘質シルト

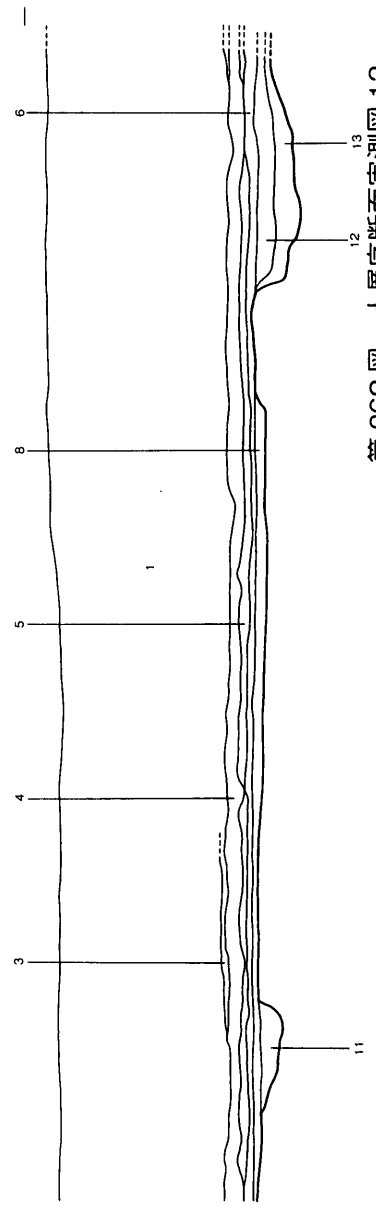
- 1 普通寺病院敷地に伴う造成土
- 2 灰オリーブ粘質シルト
- 3 灰シルト
- 4 深灰黄色シルト
- 5 明灰黄色シルト (白色砂が多く混入する)
- 6 明灰黄色シルト (マンガンが沈着する)
- 7 深灰褐色砂質シルト (マンガンが沈着する)
- 8 暗茶褐色粘質シルト
- 9 暗褐色粘質シルト



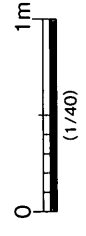
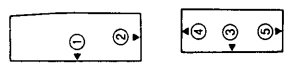
第261図 土層序断面実測図 11



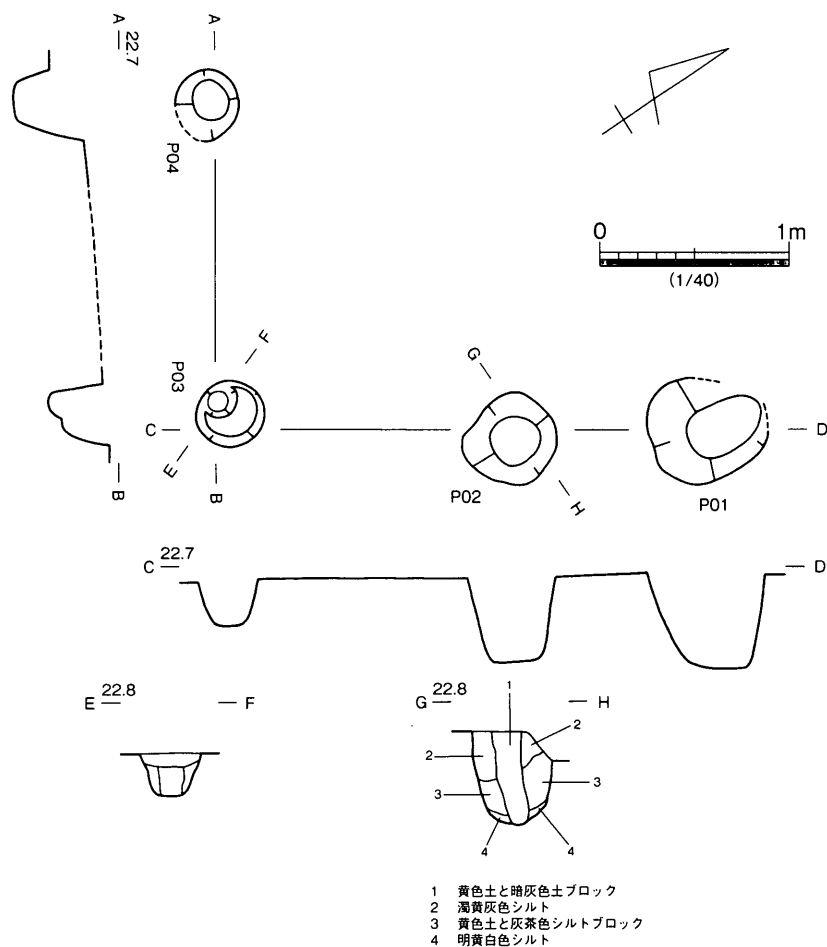
- 1 普通寺病院建設に伴う造成土
- 2 石灰石が混入する粘質シルト
- 3 灰黄色シルト
- 4 淡灰黄色シルト
- 5 明灰黄色シルト
- 6 淡灰白色シルト
- 7 明灰白色シルト
- 8 灰褐色粘質シルト (マンガンが沈着する)
- 9 灰褐色粘質シルト (礫が混入する)
- 10 暗褐色粗砂シルト
- 11 暗褐色粗砂 (礫が混入する)
- 12 暗褐色粘質シルト (礫が混入する)
- 13 褐色シルト



- 1 普通寺病院建設に伴う造成土
- 2 灰オリーブ色粘質シルト
- 3 灰黄色シルト
- 4 明灰黄色シルト
- 5 明灰白色粘質シルト
- 6 黄灰白色粘質シルト (マンガンが多く沈着する)
- 7 暗褐色粗砂シルト
- 8 暗褐色粗砂 (礫が混入する)
- 9 暗褐色粘質シルト (礫が混入する)
- 10 暗褐色粘質シルト (礫が混入する)
- 11 暗褐色粘質シルト (礫が混入する)
- 12 暗褐色粘質シルト (礫が混入する)
- 13 暗褐色粘質シルト (礫が混入する)



第 262 図 土層序断面実測図 12



第 263 図 掘立柱建物跡遺構実測図 2 (SBy01)

P03 で検出された柱痕の規模から、使用されていた柱材の直径は、最大で約 30cmであったことが推測できる。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

③ SBy03

[遺構] Y 区の南東部において、SBy02 とほぼ同一箇所にある。

4 個の柱穴跡は、概ね正方形の位置関係を示すように配列されており、想定される建物跡の主軸の方向性は、SBy02 の主軸と合致する。

個々の柱穴跡の最大径は 60～90cm で、P03 の柱痕の規模から推測される柱材の直径は、最大で約 20cm である。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

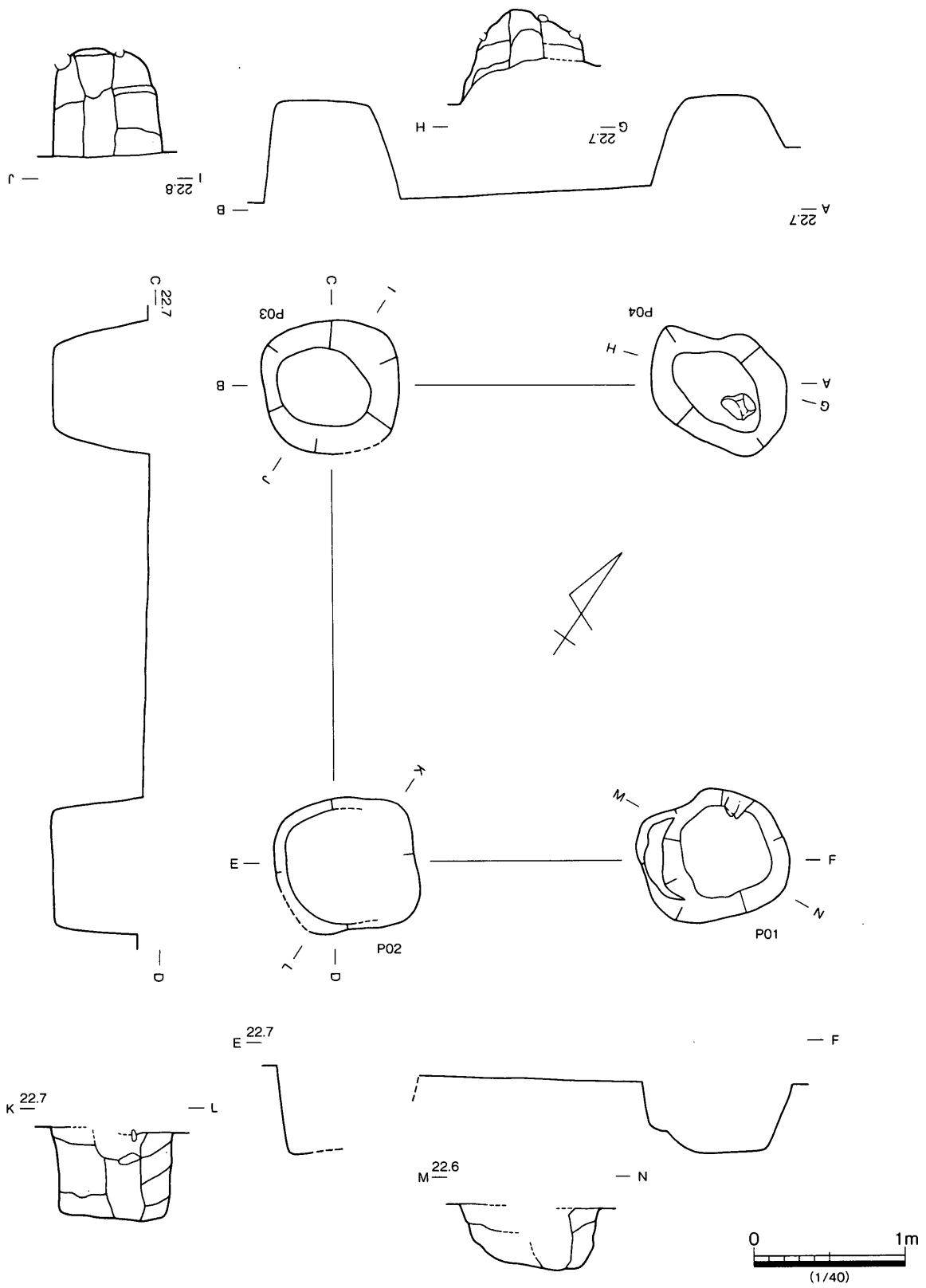
④ SBy04

[遺構] Y 区の南端部に所在する。

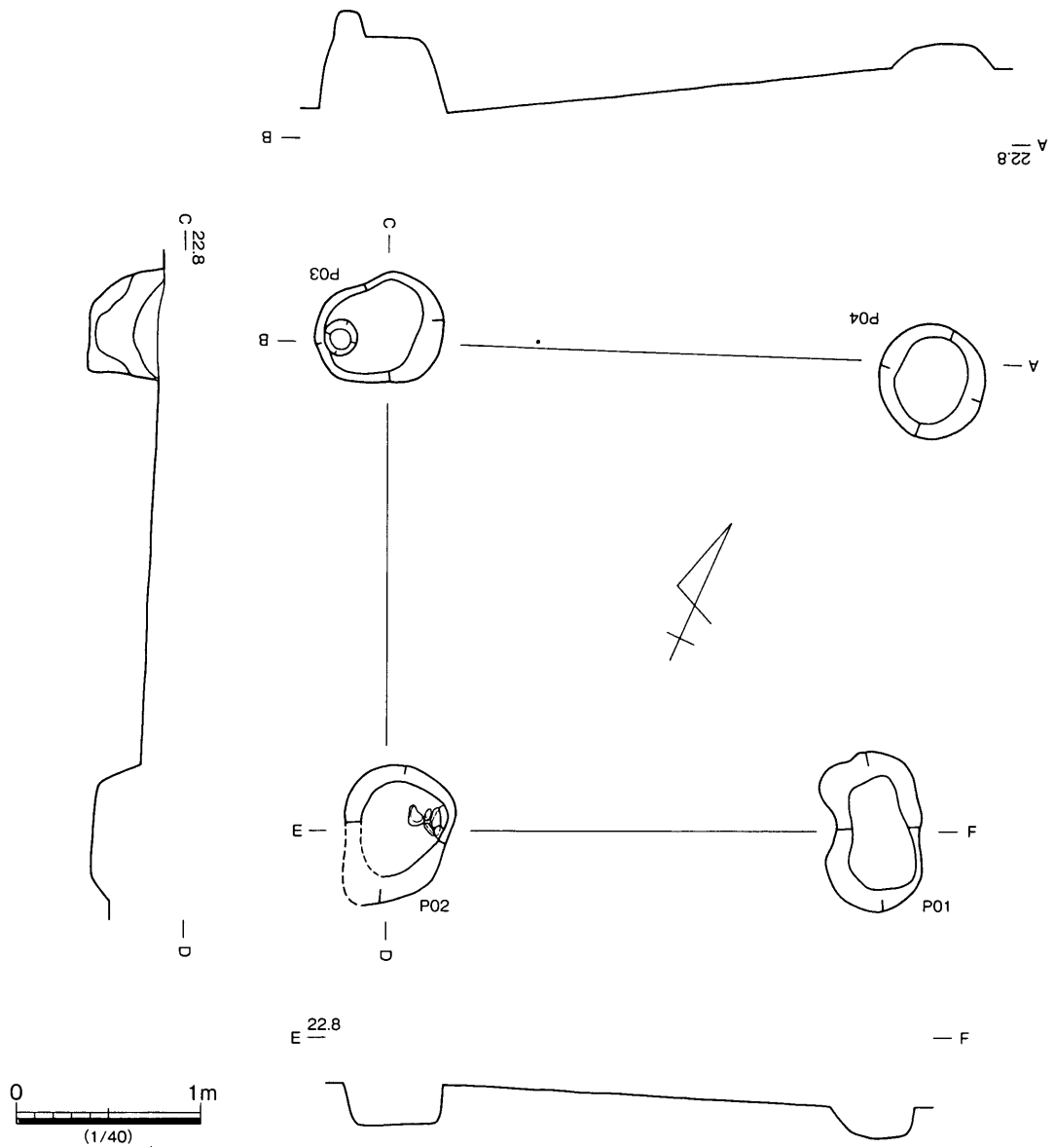
北側の桁行は 3 個の柱穴跡が確認されたが、南側は南西隅部に位置する遺構だけが残存する。

各柱穴跡の最大径は、60～110cm である。

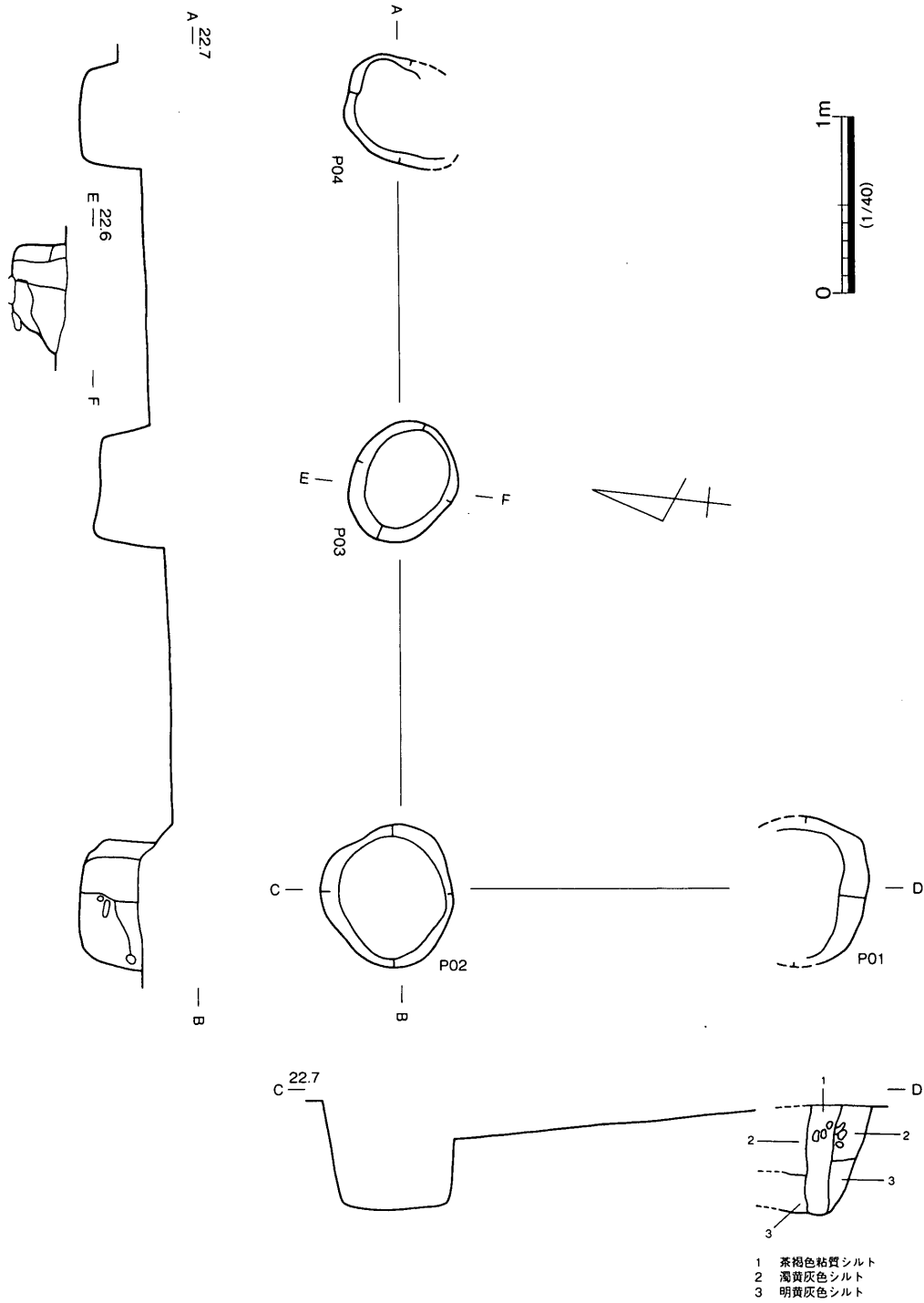
[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。



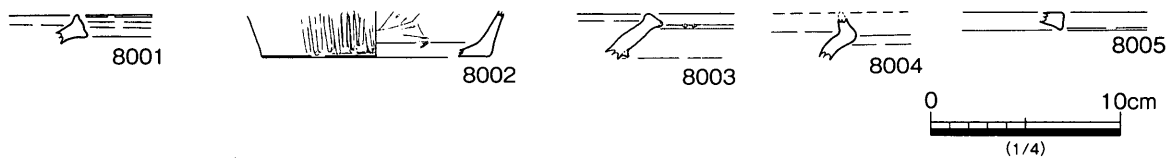
第 264 図 掘立柱建物跡遺構実測図 3 (SBy02)



第 265 図 掘立柱建物跡遺構実測図 4 (SBy03)

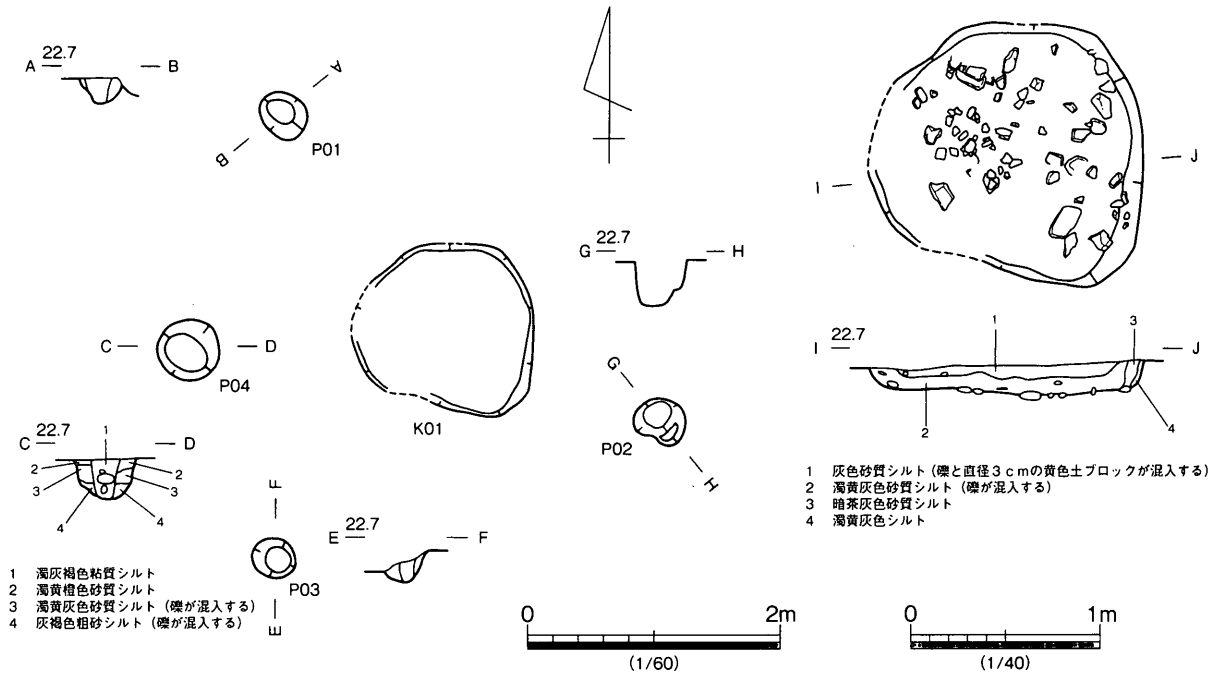


第 266 図 掘立柱建物跡遺構実測図 5 (SBy04)



第 267 図 掘立柱建物跡遺物実測図 2

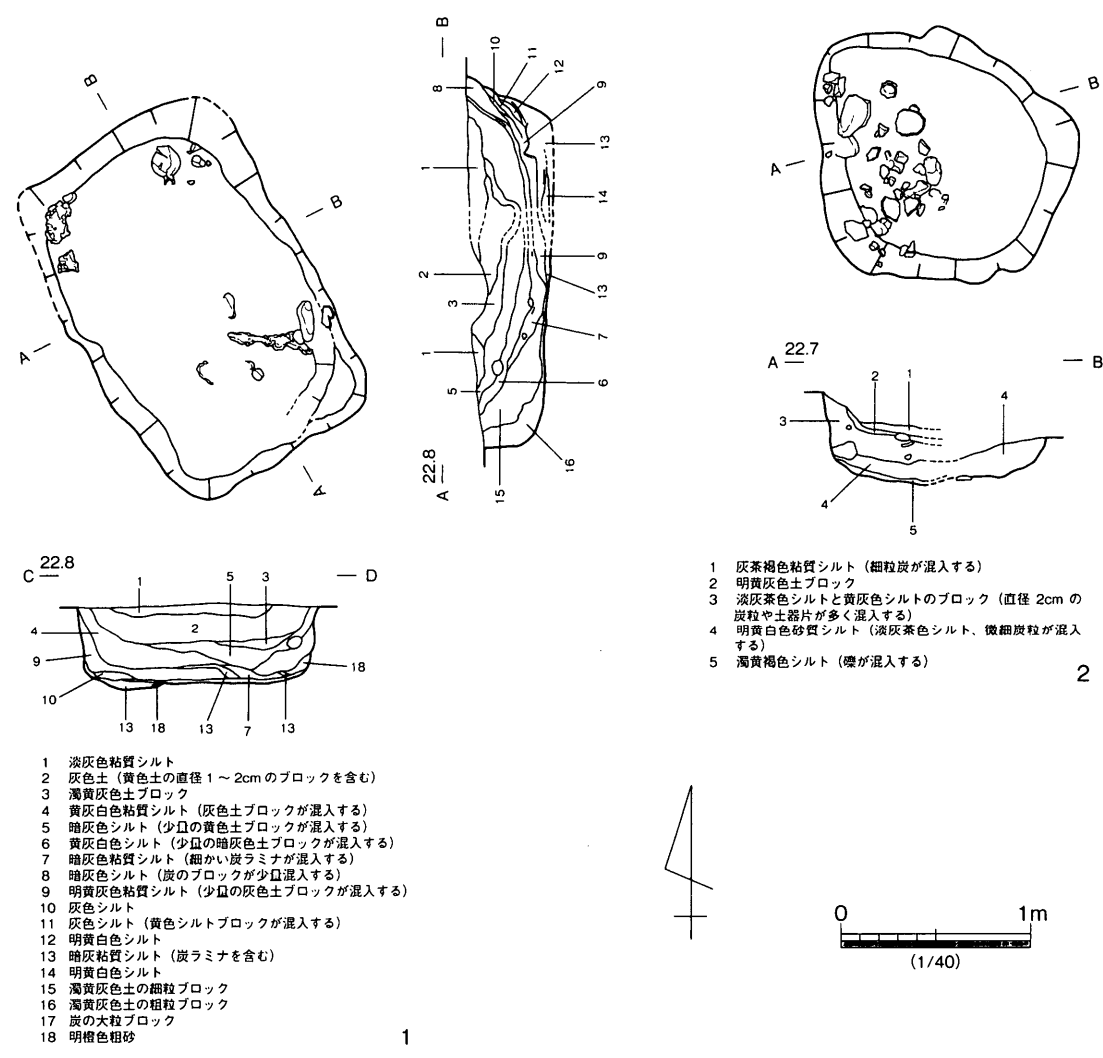
(8001:SBy01P01,8002:SBy02P02,8003・8004:SBy02P03,8005:SBy04P02)



- 1 濁灰褐色粘質シルト
- 2 濁黄褐色砂質シルト
- 3 濁黄灰色砂質シルト (礫が混入する)
- 4 灰褐色粗砂シルト (礫が混入する)

- 1 灰色砂質シルト (礫と直径3cmの黄色土ブロックが混入する)
- 2 濁黄灰色砂質シルト (礫が混入する)
- 3 暗茶灰色砂質シルト
- 4 濁黄灰色シルト

第 268 図 竪穴住居跡遺構実測図 23(SHy01)



- 1 淡灰色粘質シルト
- 2 灰色土 (黄色土の直径1~2cmのブロックを含む)
- 3 濁黄灰色土ブロック
- 4 黄灰白色粘質シルト (灰色土ブロックが混入する)
- 5 暗灰色シルト (少量の黄色土ブロックが混入する)
- 6 黄灰白色シルト (少量の暗灰色土ブロックが混入する)
- 7 暗灰色粘質シルト (細かい炭ラミナが混入する)
- 8 暗灰色シルト (炭のブロックが少量混入する)
- 9 明黄灰色粘質シルト (少量の灰色土ブロックが混入する)
- 10 灰色シルト
- 11 灰色シルト (黄色シルトブロックが混入する)
- 12 明黄白色シルト
- 13 暗灰粘質シルト (炭ラミナを含む)
- 14 明黄白色シルト
- 15 濁黄灰色土の細粒ブロック
- 16 濁黄灰色土の粗粒ブロック
- 17 炭の大粒ブロック
- 18 明褐色粗砂

- 1 灰茶褐色粘質シルト (細粒炭が混入する)
- 2 明黄灰色土ブロック
- 3 淡灰茶色シルトと黄灰色シルトのブロック (直径2cmの炭粒や土器片が多く混入する)
- 4 明黄白色砂質シルト (淡灰茶色シルト、微細炭粒が混入する)
- 5 濁黄褐色シルト (礫が混入する)

第 269 図 土坑遺構実測図 3 (1:SKy01,2:SKy02)

(3) 土 坑

① SKy01

[遺構] Y区の南東部に所在する。

ほりかた上面が整然とした平面形態である上に、壁面が垂直気味で、底面が平坦であることから、規格的に開削されたことが考えられる。

埋土の堆積状態から、自然堆積によって埋没したことがわかるが、埋土中には炭が含まれており、底面上には焼土塊が残存していた。

各壁面には、被熱の痕跡は認められない。

[遺物] 8014には使用痕が認められない。

② SKy02

[遺構] Y区の北東隅部に所在する。

平面形態は、全壁面の歪曲が著しいために不整形を示すが、特に北部において変形の程度が顕著である。

底面の西部を中心に、投棄された土器が確認された。

[遺物] 8020は混入品であるが、他は全て弥生時代前期前半期に所属するものである。8026の底面は、突出気味の形態である。8032の口縁部と体部の変化点には、明瞭な凸帯が貼り付けられている。8033～8035の口縁部は、下端部寄りに刻目が施されている点に特徴がある。8045と8046は自然石で、加工痕が認められない。

③ SKy03

[遺構] Y区の北東隅部に所在し、SKy02との直線距離は約1.3mである。

両遺構は規模が酷似していることから、同時期に同じ目的で開削されたことが考えられる。

本遺構は、全壁面が直線的に掘削されている。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

(4) 溝状遺構

① SDx01

[遺構] X区の南西隅部に所在する。

遺構の幅と深さは全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。

[遺物] 8047の口縁端部及び8048の脚端部は、端面の凹線文が明瞭である。

② SDx02

[遺構] X区の中央部に所在する。

遺構の南半部の幅が、北半部に比較して、極端に狭くなる形態である。

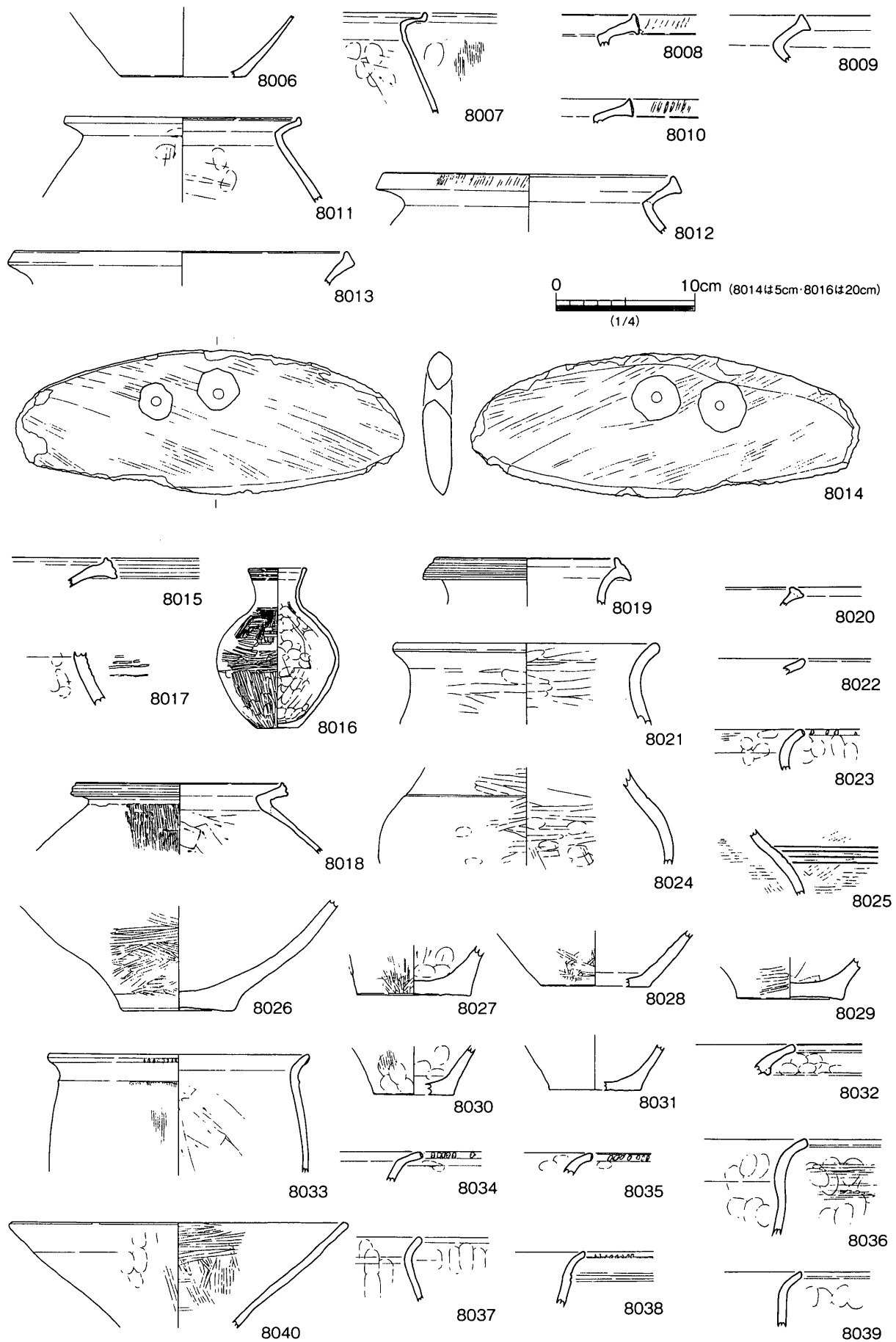
[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

③ SDy01

[遺構] Y区の中央部に所在する。

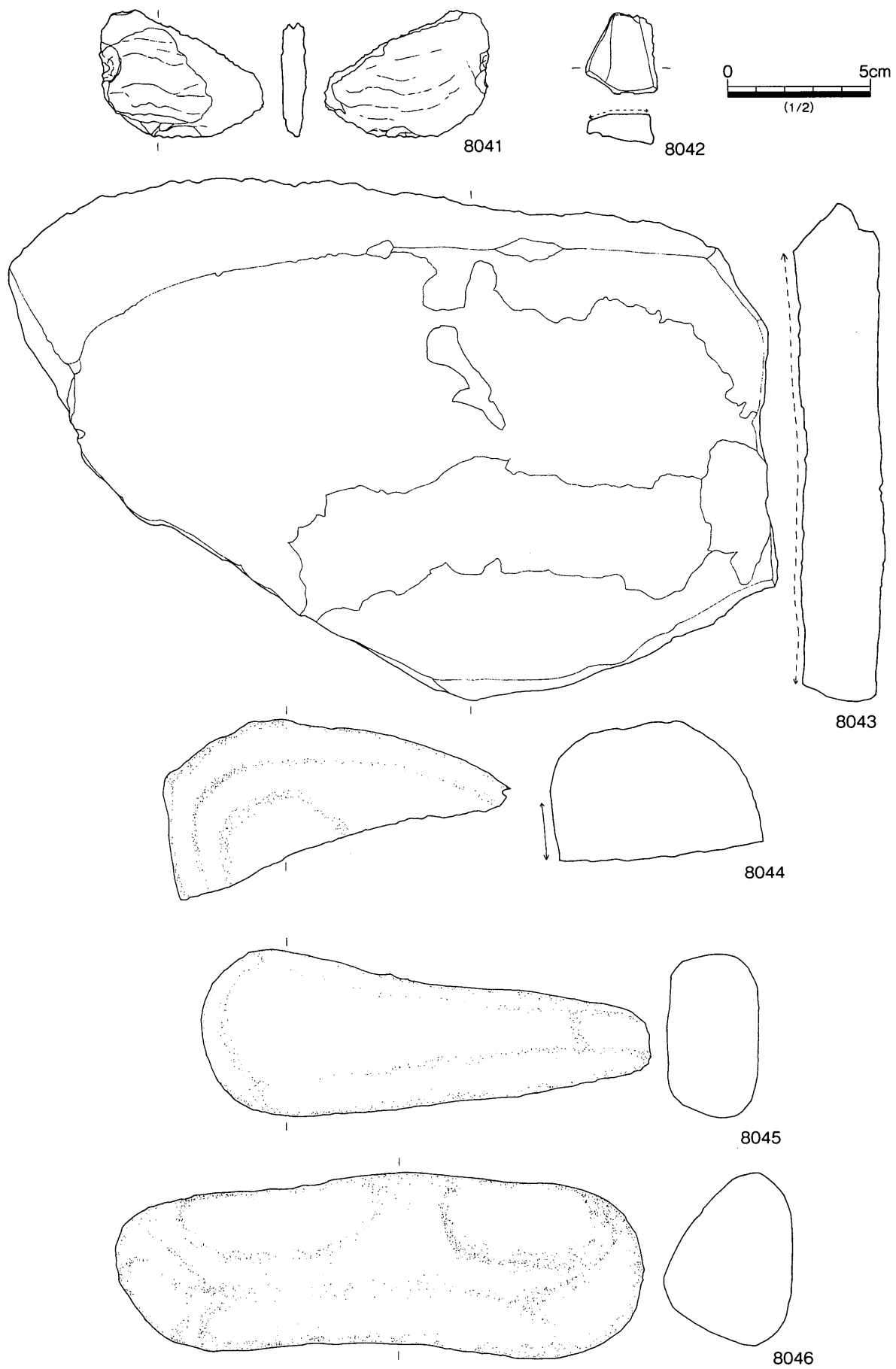
遺構の大部分がSDy13の開削によって損壊しているが、遺構の幅と深さは全体にわたって概ね一定で、中心軸は直線的であったと推測される。

[遺物] 8059の口縁端部は、狭い端面に複数の凹線文が施文されている。

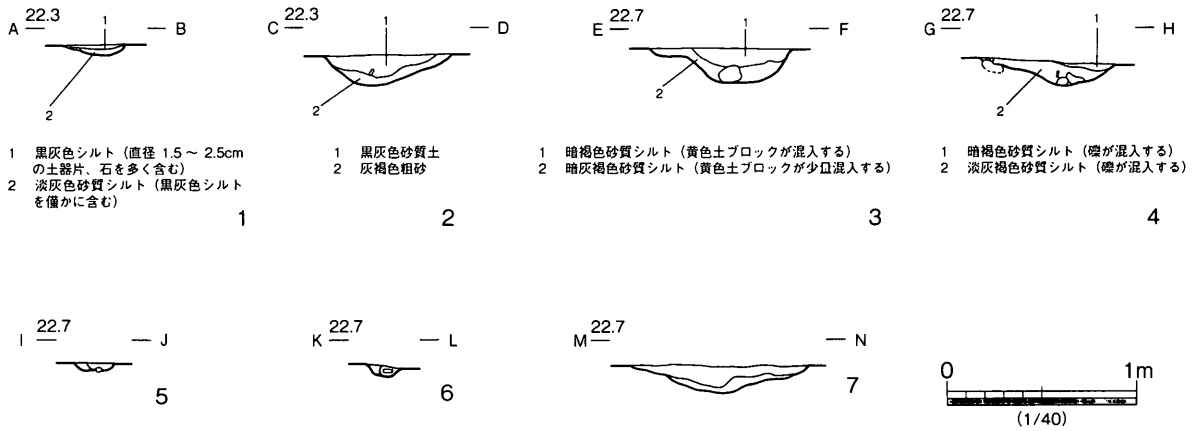


第270図 竪穴住居跡遺物実測図14・土坑遺物実測図2

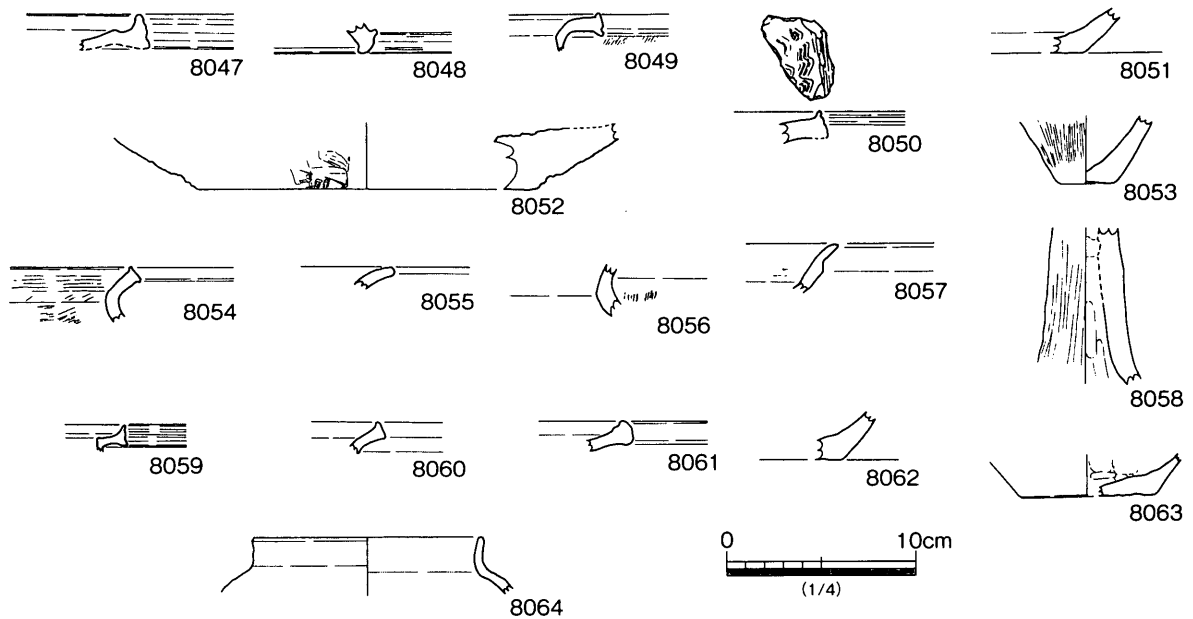
(8006 ~ 8013:SHy01K01,8014 ~ 8019:SKy01,8020 ~ 8040:SKy02)



第 271 図 土坑遺物実測図 3 (8041 ~ 8046:SKy02)

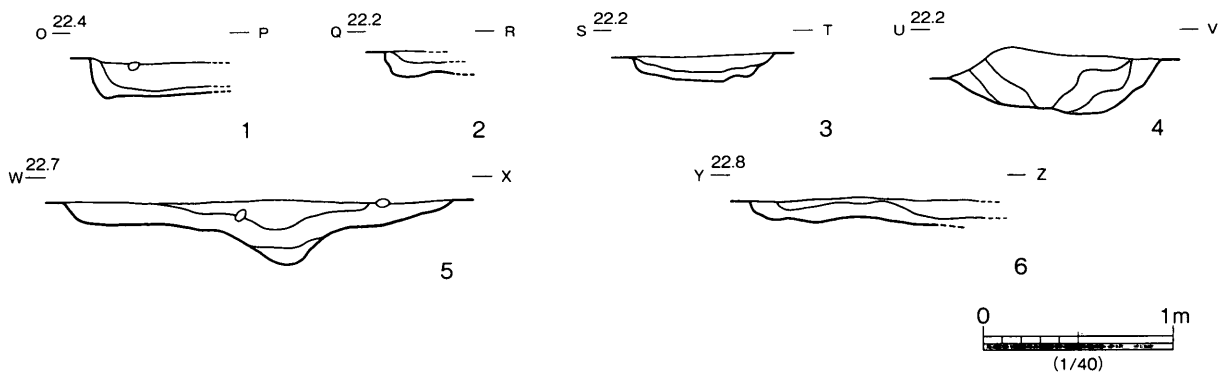


第 272 図 溝状遺構遺構実測図 13(1:SDy01,2:SDx02,3·4:SDy01,5·6:SDy02,7:SDy03)

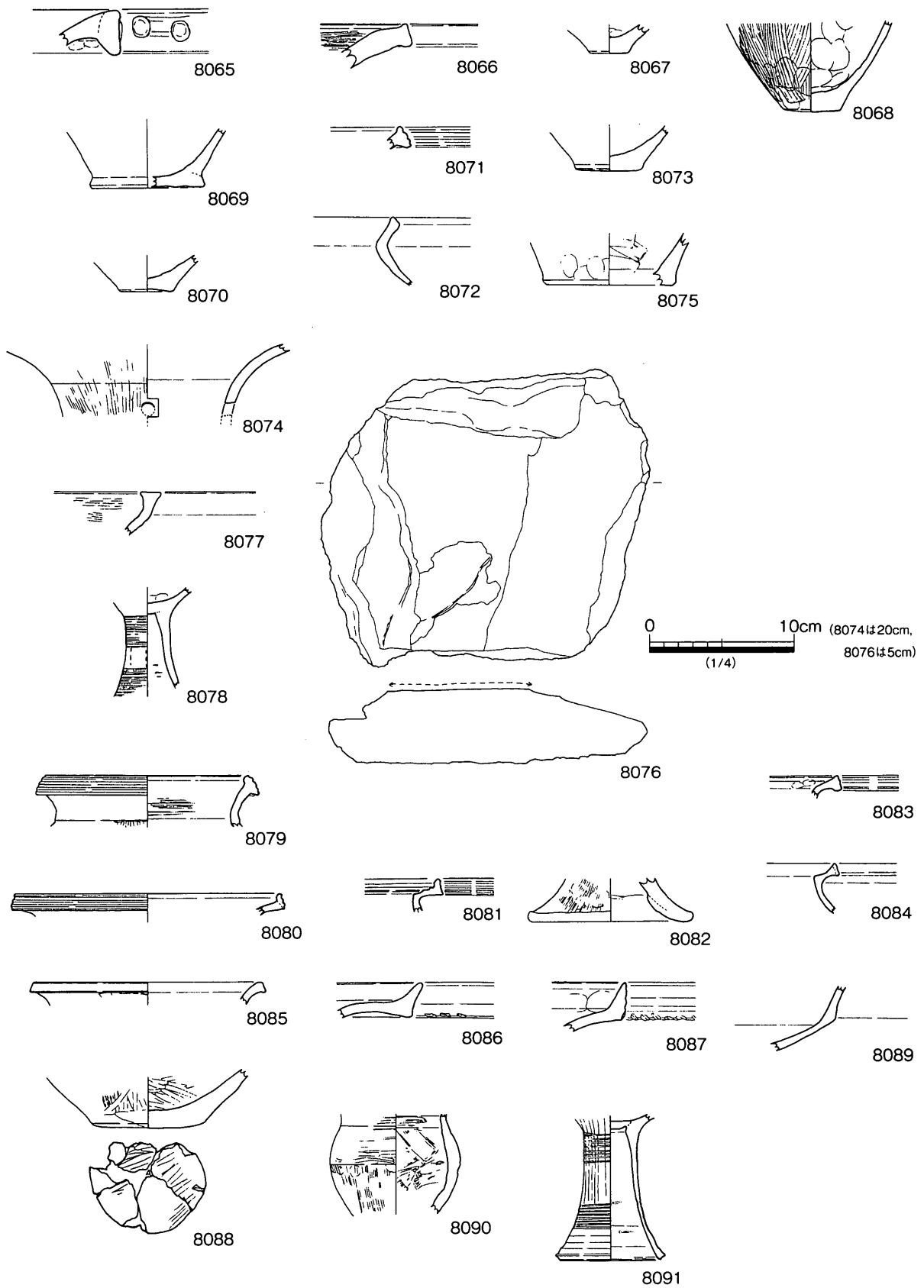


第 273 図 溝状遺構遺物実測図 130

(8047·8048:SDx01,8049 ~ 8058:SDy06,8059·8060:SDy01,8061 ~ 8063:SDy03,8064:SDy04)



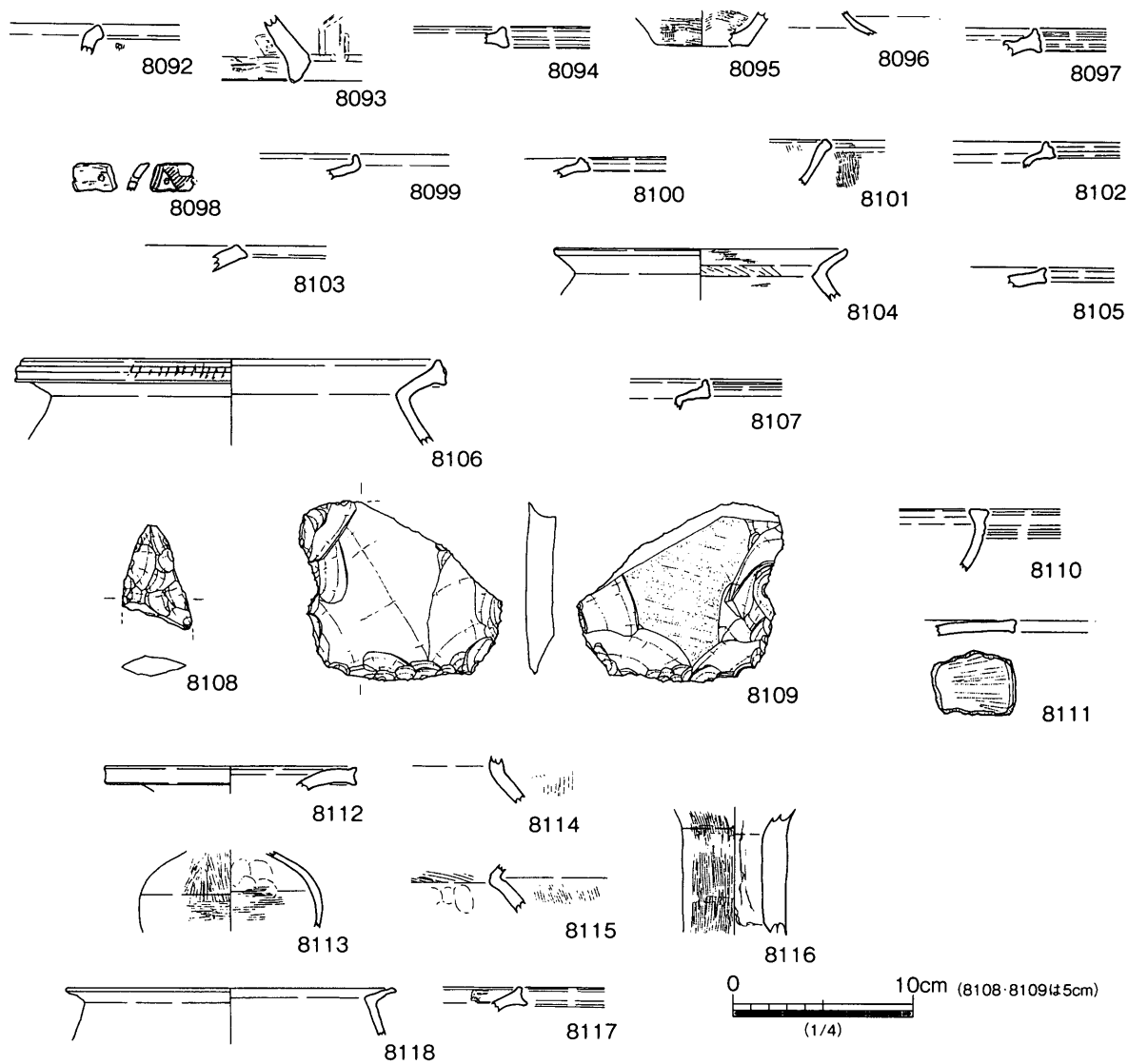
第 274 図 不明遺構遺構実測図 2 (1:SXx05,2:SXx07,3:SXx08,4:SXx09,5:SYy02,6:SYy04)



第 275 図 不明遺構遺物実測図 2

(8065 ~ 8068: SXx01, 8069 · 8070: SXx02, 8071 ~ 8076: SXx03, 8077 · 8078: SXx04, 8079 ~ 8082: SXx05, 8083:

SXx07, 8084: SXx09, 8085 ~ 8089: SXy02, 8090 · 8091: SXy04)



第276図 柱穴跡遺物実測図7

(8092:SPx02,8093:SPx03,8094:SPx13,8095:SPx28,8096:SPx24,8097:SPy01,8098:SPy02,8099:SPy07,8100:

SPy08,8101・8102・8103:SPy26,8104:SPy30,8105:SPy31,8106:SPy35,8107:SPy42,8108:SPy51,8109:

SPy53,8110・8111:SPy54,8112～8114:SPy65,8115:SPy66,8116:SPy99,8117:SPy68,8118:SPy69)

④ SDy02

[遺構] Y区の北東部に所在する。

遺構の平面形態は、湾曲の少ないし字形を示し、幅と深さは全体にわたって一定である。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

⑤ SDy03

[遺構] Y区の中央部から西寄りの位置に所在する。

外郭線の歪曲が著しいことから、自然の凹地形の可能性はある。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

(5) 柱穴跡

[遺構] 当該時期に所属する遺構は、X区に25個、Y区に75個が存在する。また、前者の大部分が同

区の南半部に所在することから、住居あるいは建物等は、Y区を中心とした地域に存在したことがわかる。

(6) 不明遺構

① SXx01、SXx02、SXx03

[遺構] X区の北端部に所在する。

遺構の中心軸の南西方向への延長線上に、SXx02とSXx03が存在することから、一体化した遺構群と考えられる。

[遺物] 8065は、口縁端部が太い粘土塊で整形されたことと、円形浮文が貼付されたことで、厚みのある形態を示す。8066は、口縁端部の器壁が厚い形態である。8069の体部は、底面の粘土盤の周縁部よりも内側に寄った位置に形成されている。8074は、器壁が薄い形態である。

② SXx04

[遺構] X区の南端部に所在する。

平面形態が円形を示す土坑状の遺構であるが、SDx14の開削によって、西半部が損壊しているために、原形は不明である。

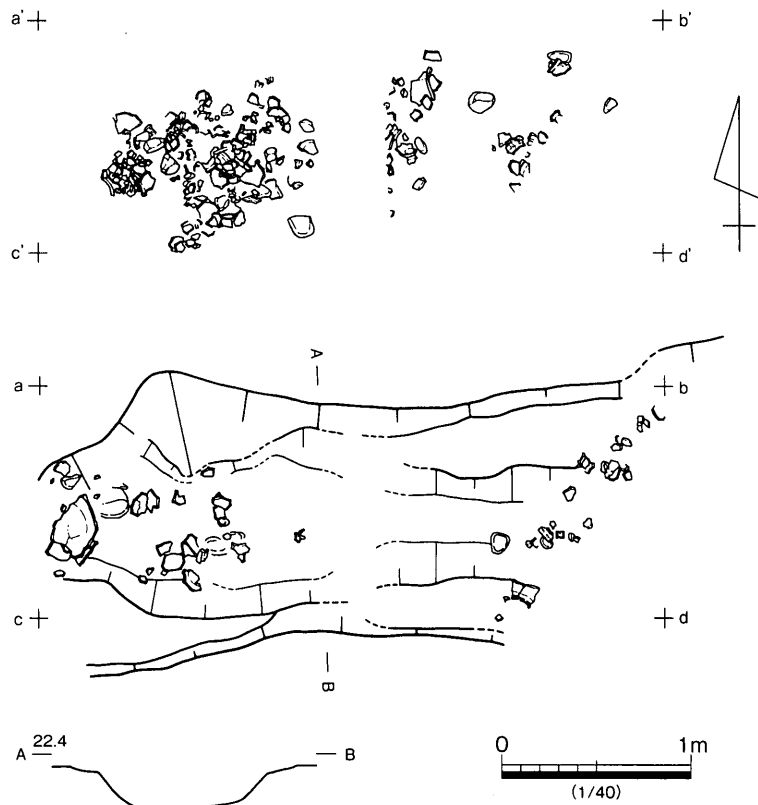
[遺物] 8077は、口縁端部に水平方向の平坦面が整形された形態である。

③ SXx05

[遺構] X区の南西隅部に所在する。

平面形態が長楕円形を示す大型の土坑状の遺構であるが、SDx01とSDx14の開削によって、西半部と東端部が損壊しているために、原形は不明である。

[遺物] 8079～8081は、口縁端部の複数の凹線文が明瞭な器種である。



第 277 図 自然河川跡遺構実測図 2 (SRx01)

④ SXx06

[遺構] X区の中央部の西壁面沿いに所在する。

平面形態が円形を示す土坑状の遺構であるが、遺構の大部分が対象地の外部に存在するために、原形は全く不明である。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

⑤ SXx08

[遺構] X区の北部の西壁面沿いに所在する。

中心軸が南北方向を示す大型の土坑状の遺構であるが、遺構の大部分が対象地の外部に存在するために、原形は判然としない。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

⑥ SXx09

[遺構] X区の北部に所在する。

SDx07の開削によって、南半部が損壊しているが、原形は整然とした円形の平面形態であったことが推察される。

遺構の内部は、東西の壁面に平坦な箇所が存在するために、階段状に掘削されていることがわかる。

[遺物] 8084は成形の最終段階で、口縁端部に粘土塊が貼付されて、端部が肥厚されている。

⑦ SXy01

[遺構] Y区の中央部から北東寄りの位置に所在する。

平面形態が楕円形を示す土坑状の遺構である。

[遺物] 数量は少なく、保存状態は不良である。

⑧ SXy02

[遺構] Y区の北部に所在する。

壁面の歪曲が著しいために、不整な平面形態を示す。底面に1個の柱穴跡状の遺構が存在する。

[遺物] 8086及び8087は、口縁部の下端部に横方向の刻目が施されている。

⑨ SXy04

[遺構] Y区の南端部に所在する。

平面形態が長楕円形を示す土坑状の遺構であるが、北半部が存在しないために、原形は不明である。

[遺物] 8090は、粗製の小型品である。8091は、精巧な仕上げが施された器種である。

(7) 自然河川跡

① SRx01

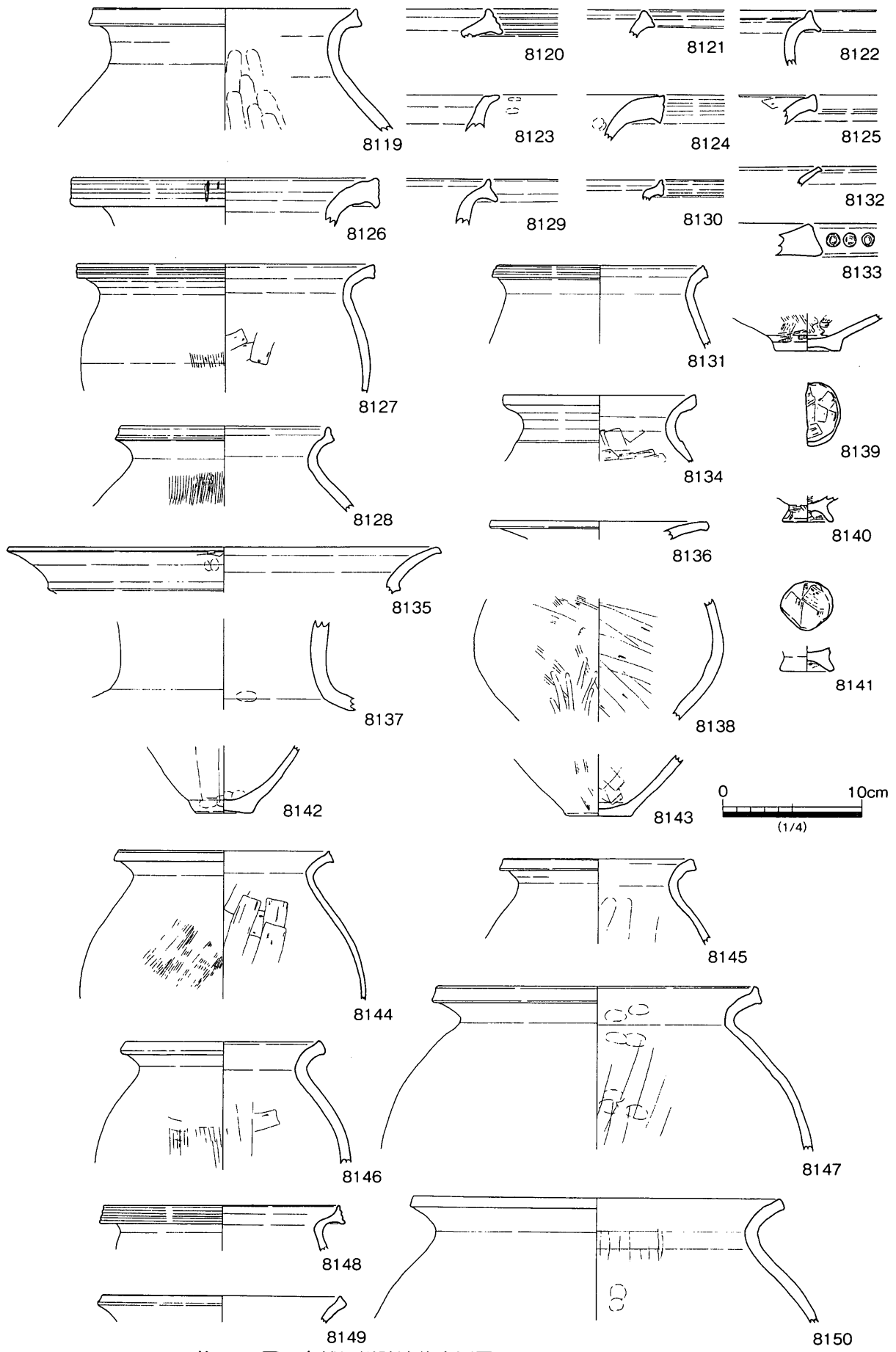
[遺構] X区の南東隅部に所在するが、SDx03とSDx14によって、遺構の大部分が損壊しているために、流路の方向性は不明である。

SRx03が完全に埋没した後に、その南岸部の上位に開削されている。

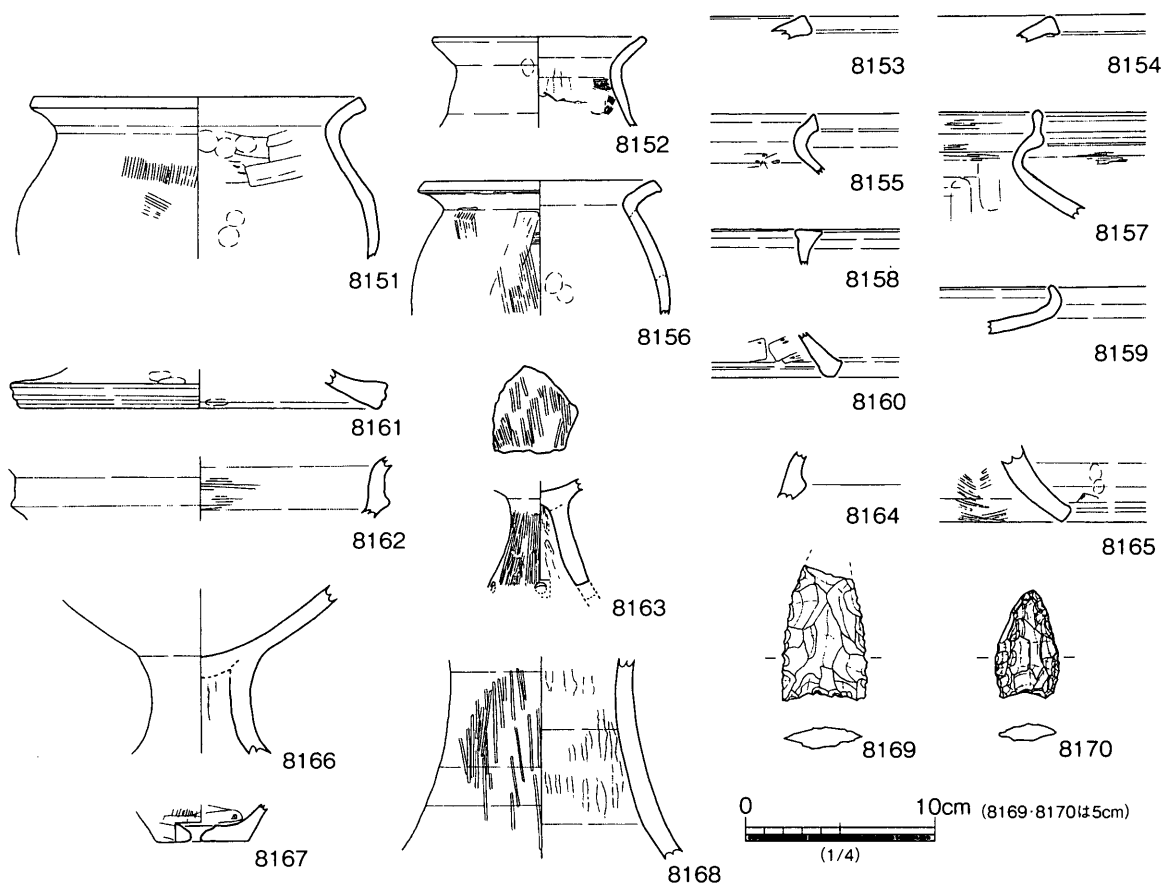
[遺物] 8119の口縁部は、短く外反する形態である。8124及び8126の口縁端部は、重厚な造作である。

8125の口縁端部の上面には、強い横ナデ調整による窪みが成形されている。8127は、口径が体部の最大径よりも大きいために、不安定感を示す。8131は、口縁部がほとんど外反しない器種である。8135

は複合口縁の器種で、直立した頸部が存在したことが推測される。



第 278 図 自然河川跡遺物実測図 19(8119 ~ 8150:SRx01)



第 279 図 自然河川跡遺物実測図 20(8151 ~ 8170:SRx01)

甕は、8148 の口縁端部に凹線文が認められる以外は、小さい端面が形成された器形が主体である。8152 は内傾気味の頸部が存在することと、頸部から肩部の接点に明瞭な変化点が存在することが特徴的である。

② SRx02

[遺構] X 区の北端部に所在し、対象地内を東西方向に横切る方向性を示す。

集落内部を貫流していた可能性が高いが、埋土の堆積状態からは、水田跡の存在は認められない。

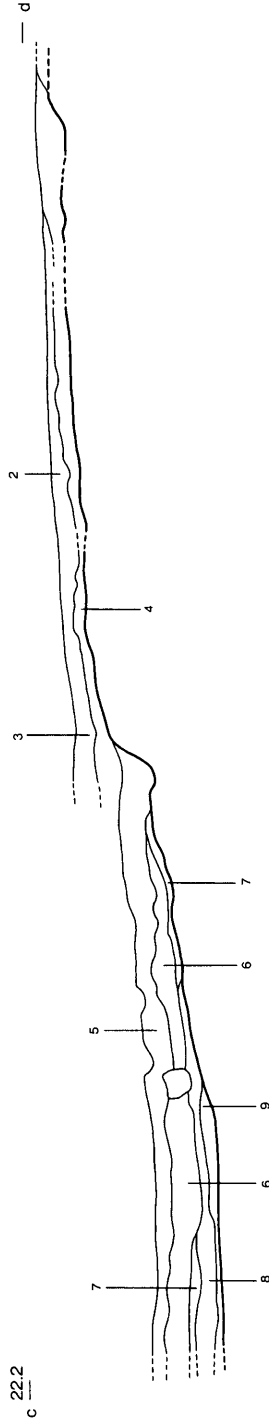
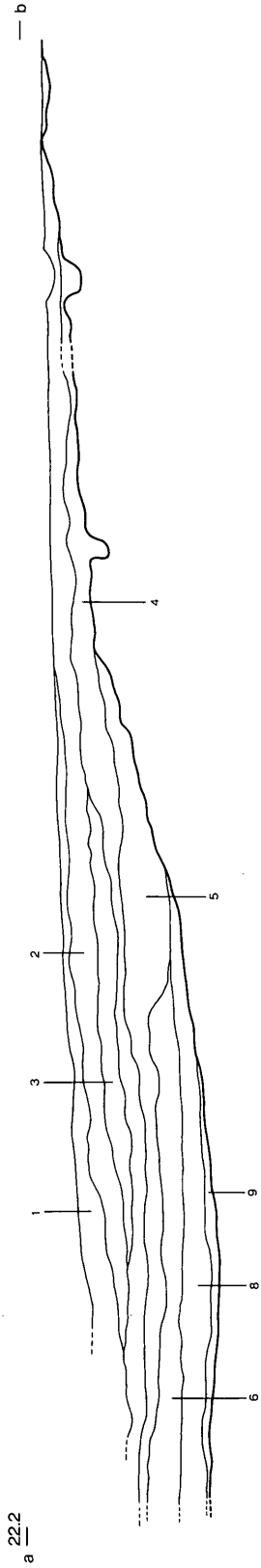
[遺物] 8176 は、肩部が鋭角的に屈曲する形態である。8183 は、体部が鋭角的に屈曲するために、箱形の縦断面形を示すことと、口縁部が水平方向に開口することが特徴である。8188 は、上端面が完全な水平面を示す。8195 の口縁部は、端部を肥厚して仕上げた後に、上端部に細い粘土紐が貼付されて、複合口縁が形成された資料である。8235 は、直線状の逆ハ字形の頸部と、短い口縁部が特徴である。8246 は、口縁部の加飾を目的として、端部に幅が広い粘土紐が貼付されることにより、広い端面が成形されている。8277 の底面の穿孔は、貫通していない。8290 は、口径が体部の最大径よりも大きい形態である。8306 は、直線状の体部の形態が特徴である。8323 は、直立気味の短い口縁部が特徴で、水平な小さい端面が成形されている。8354 については、2 本の角状の支え部がある支脚の支え部の一部分と考えられる。8355 と 8356 は、弥生時代前期に所属する資料である。8357 は、縦断面が完全な台形を示す。8386 の杯部は、縦断面が半球型を示す器形である。8390 の口縁部は、湾曲が緩やかで、直線的に開口する形態である。8395 の口縁部上面の沈線文と列点文は、求心的な方向性を示していない。8401 の口縁部は、屈曲部と端部の中間点が肥厚された形態である。8423 は、縦方向に使用されたこと



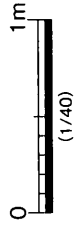
第280図 自然河川跡遺構実測図3 (SRx02)



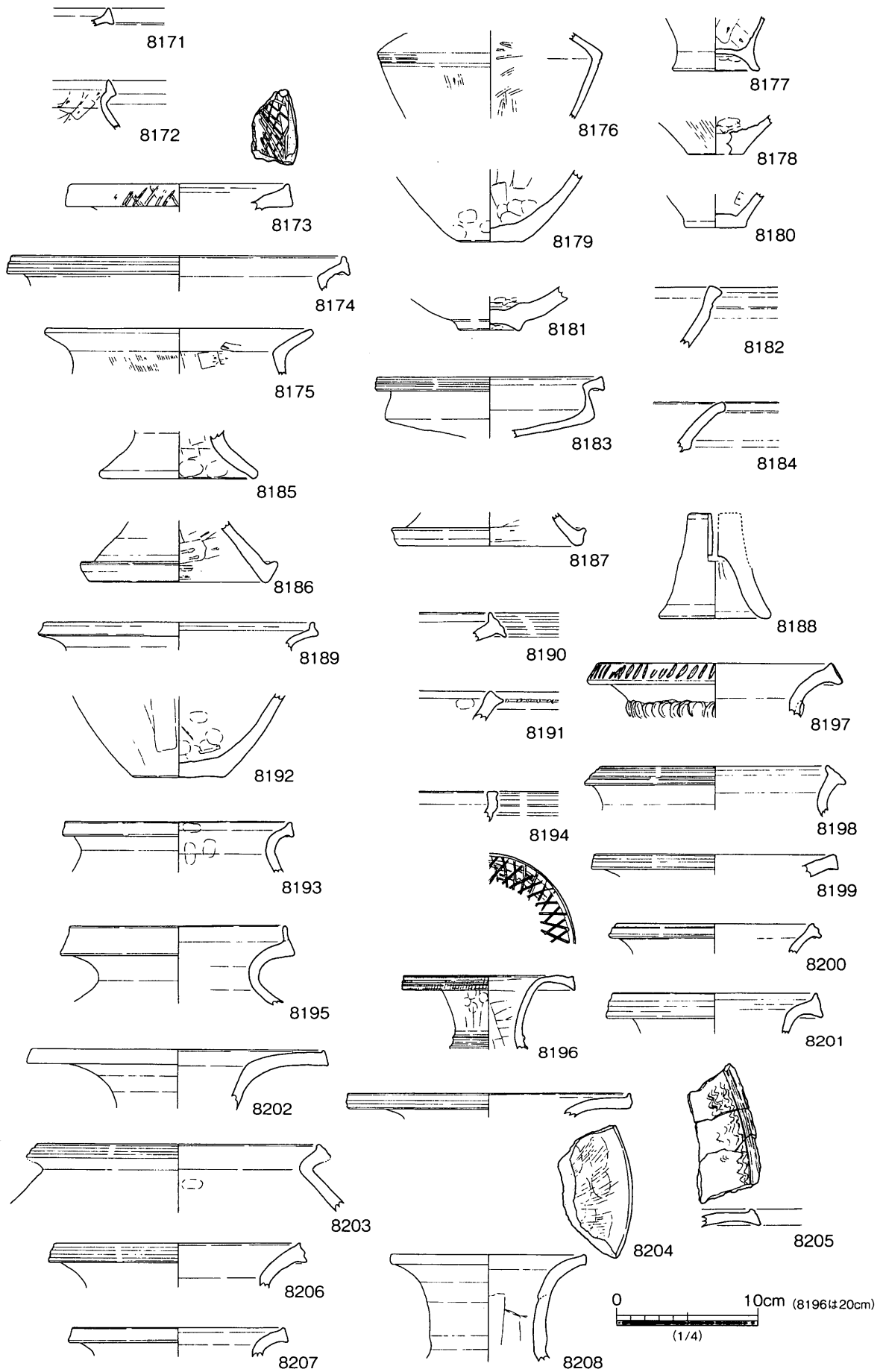
第 281 図 自然河川跡遺構実測図 4 (SRX02)



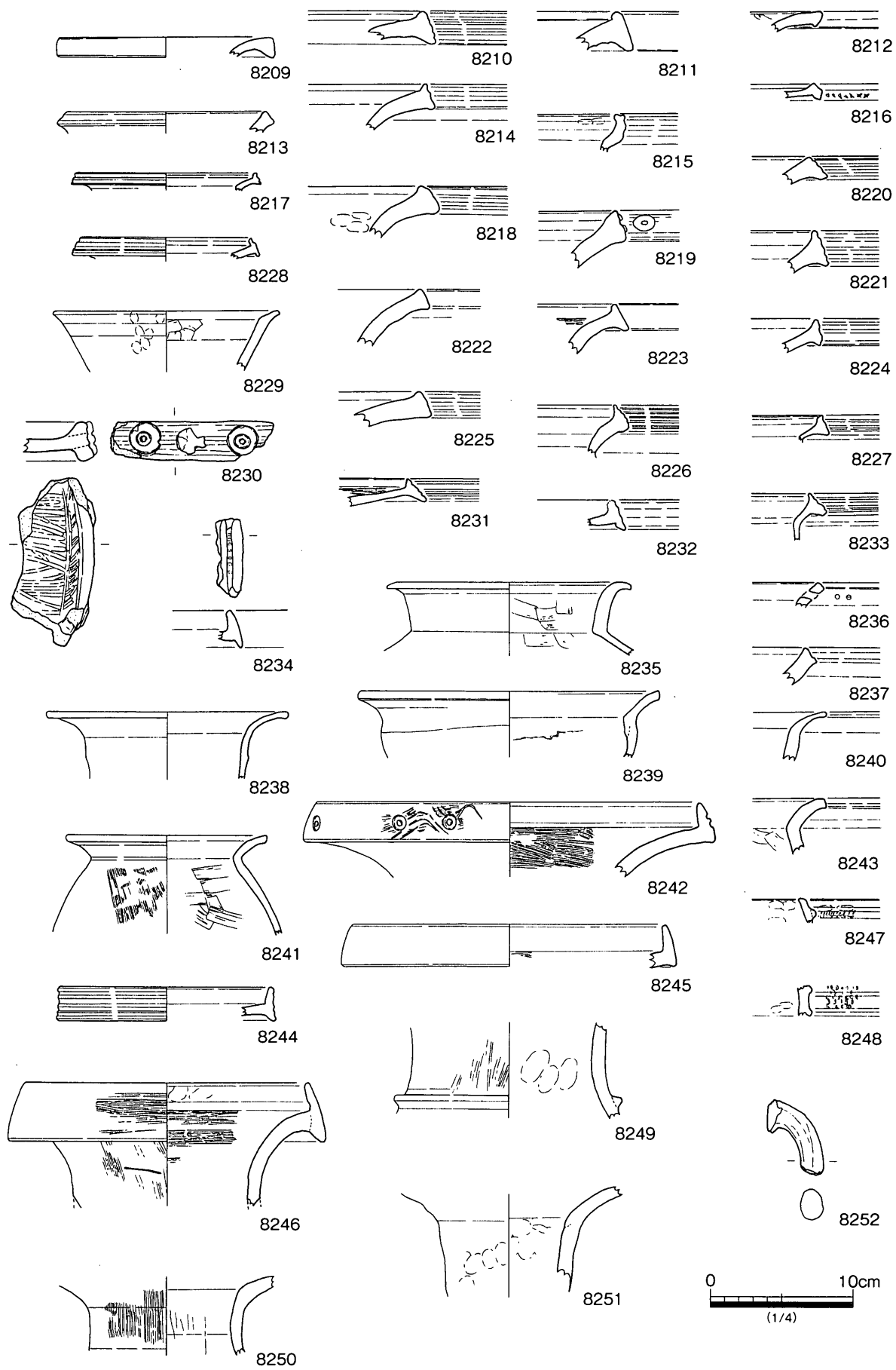
- 22.2
- 1 暗灰茶色細砂質シルト (粘性が強い)
 - 2 淡灰茶色細砂質シルト (シルト質、鉄分が含まれる)
 - 3 暗茶褐色細砂質シルト (砂が多く混入する)
 - 4 暗茶褐色細砂質シルト (上部は粘性が強い)
 - 5 暗茶褐色中粒砂質シルト (シルト質ブロックが混入する。直径0.5cmの炭粒が多く混入する)
 - 6 淡灰茶色中粒砂質シルト (黄白色砂ラミナが混入する)
 - 7 黄白色土ブロック
 - 8 暗灰褐色極細砂質シルト (下部に黄白色ラミナが混入する)
 - 9 暗茶褐色粗砂質シルト (粗砂粒が混入する)



第 282 図 自然河川跡遺構実測図 5 (SRx02)

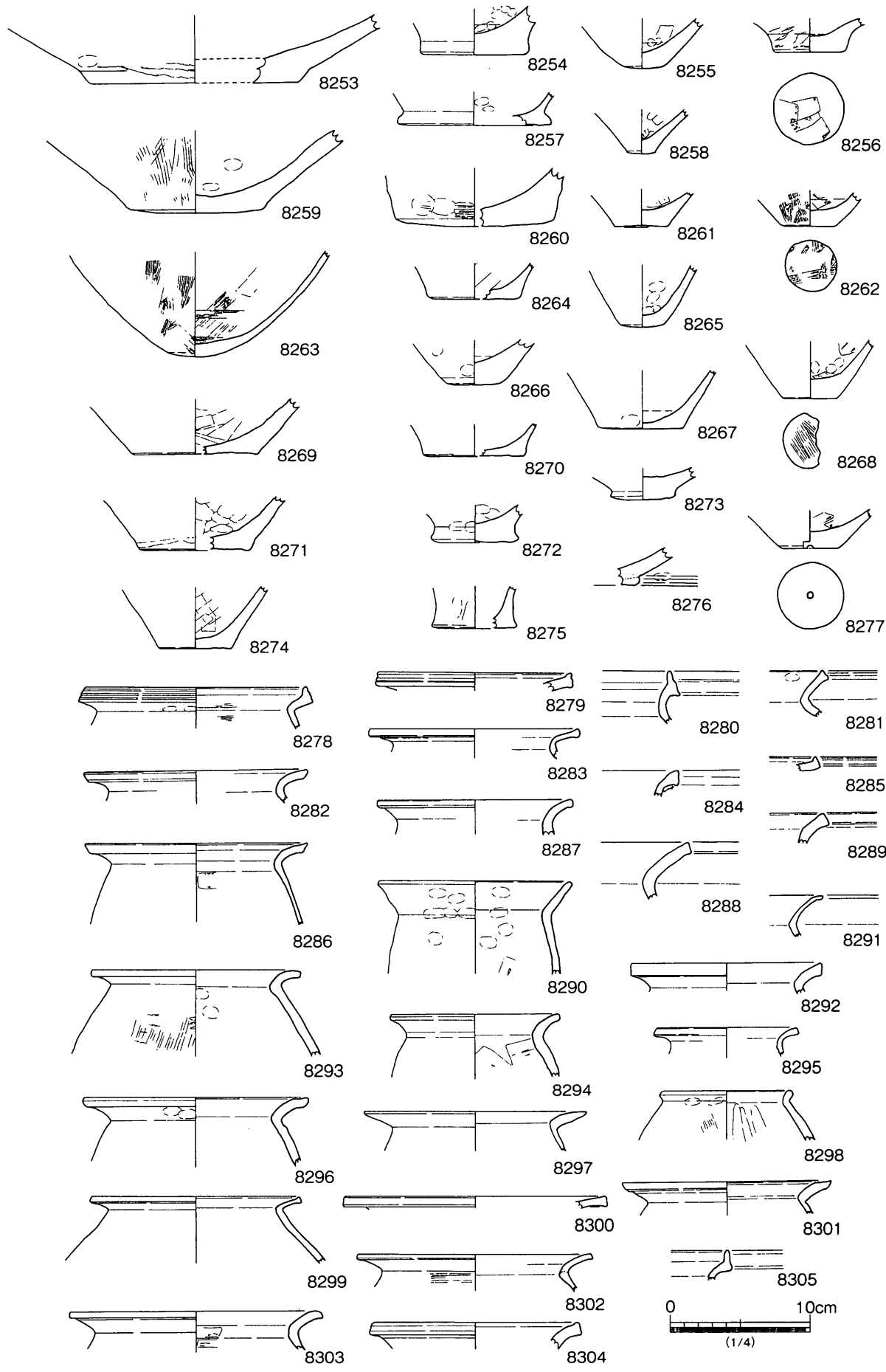


第 283 図 自然河川跡遺物実測図 21 (8171 ~ 8208:SRx02)

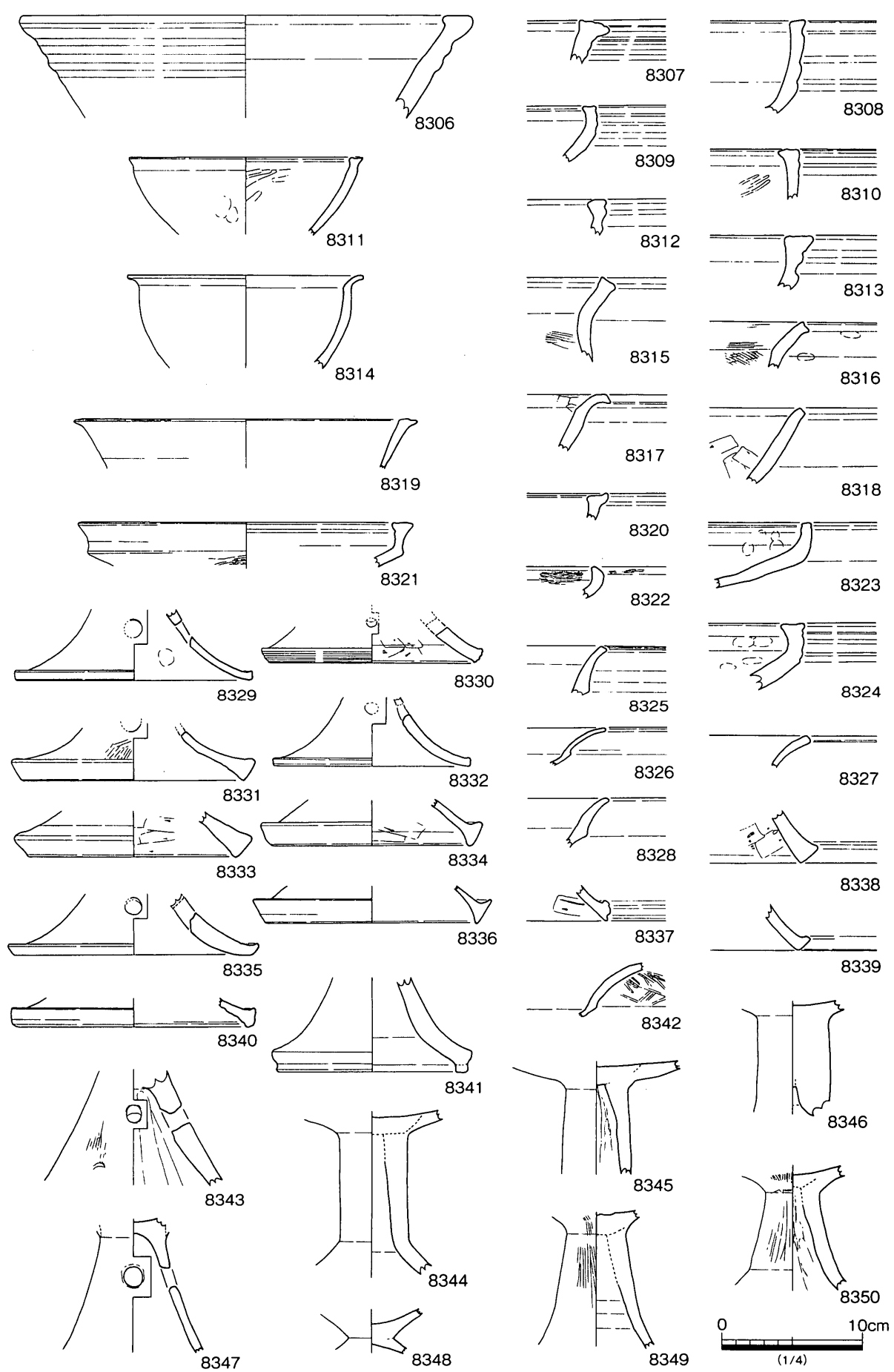


第 284 図

自然河川跡遺物実測図 22(8209 ~ 8252:SRx02)



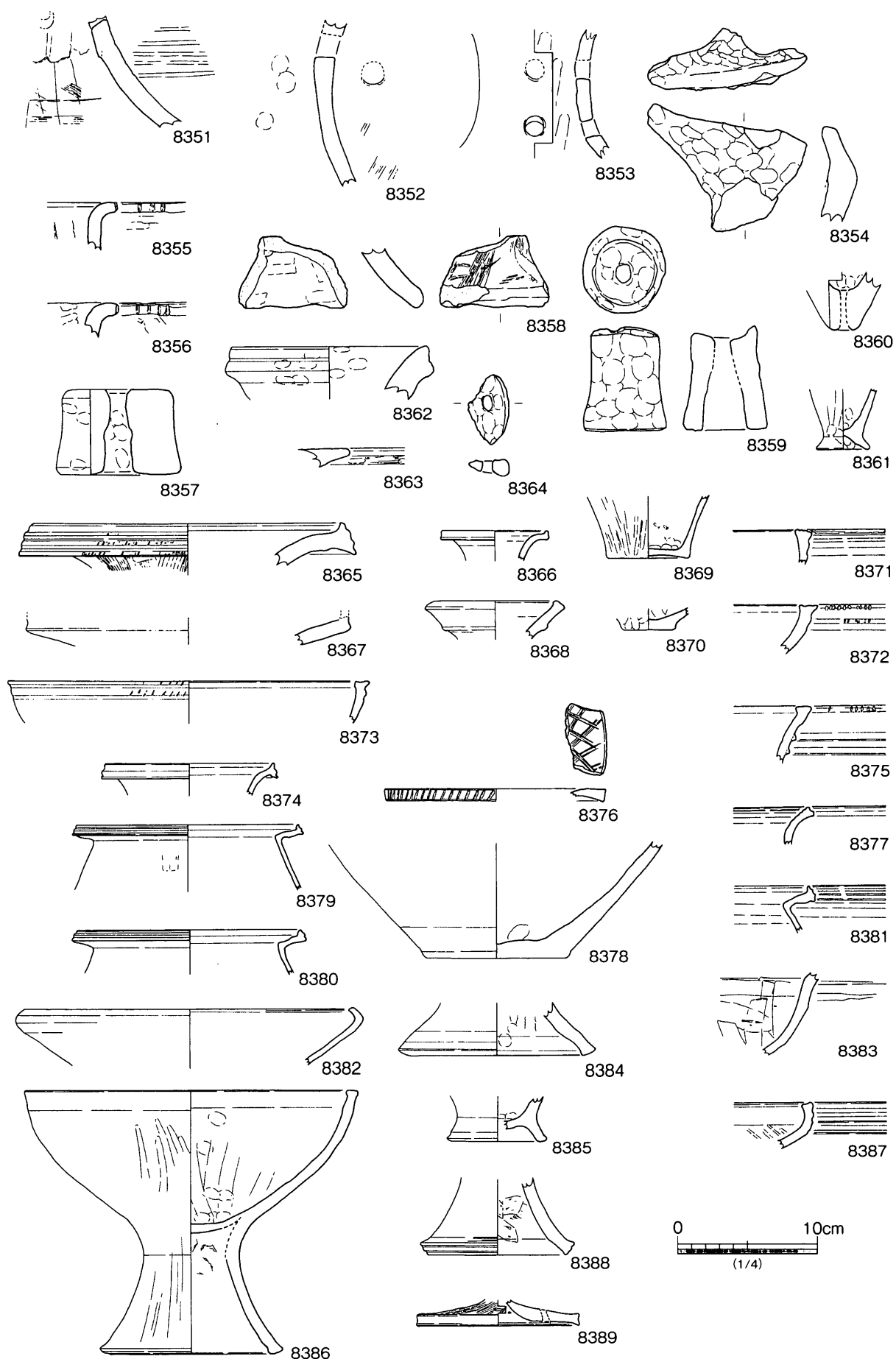
第 285 図 自然河川跡遺物実測図 23(8253 ~ 8305:SRx02)



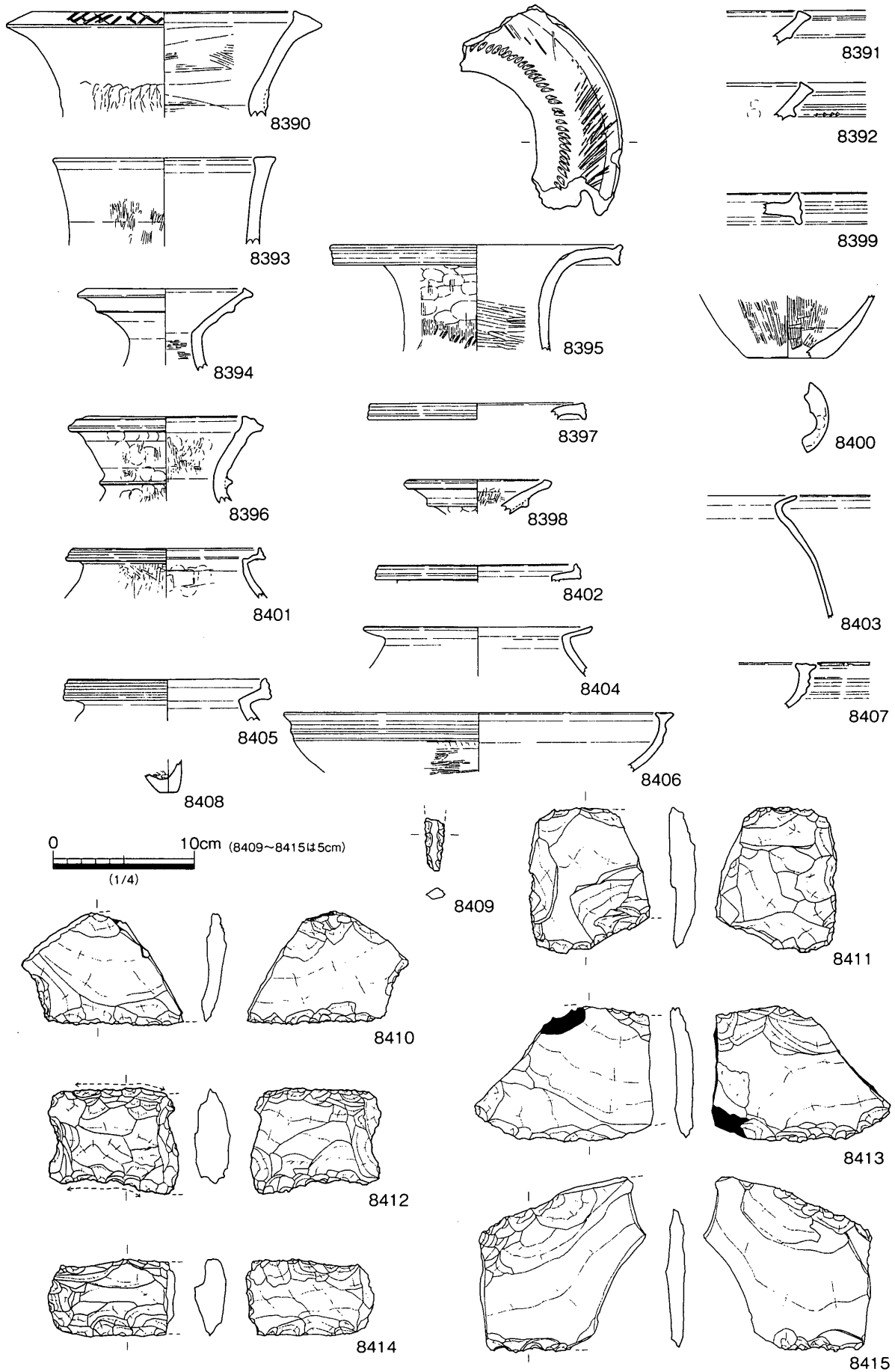
第 286 図

自然河川跡遺物実測図 24(8306 ~ 8350:SRx02)

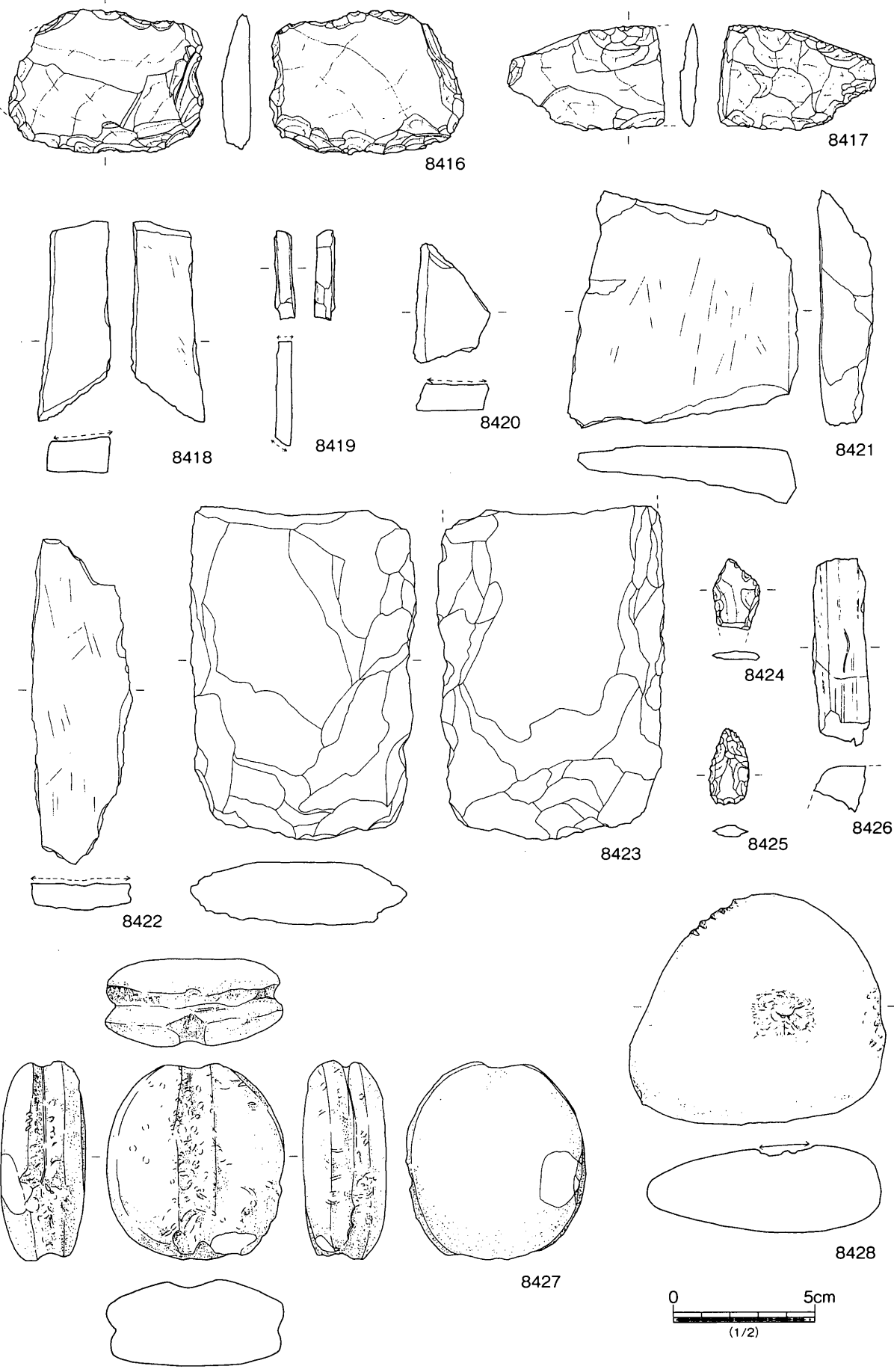
0 10cm
(1/4)



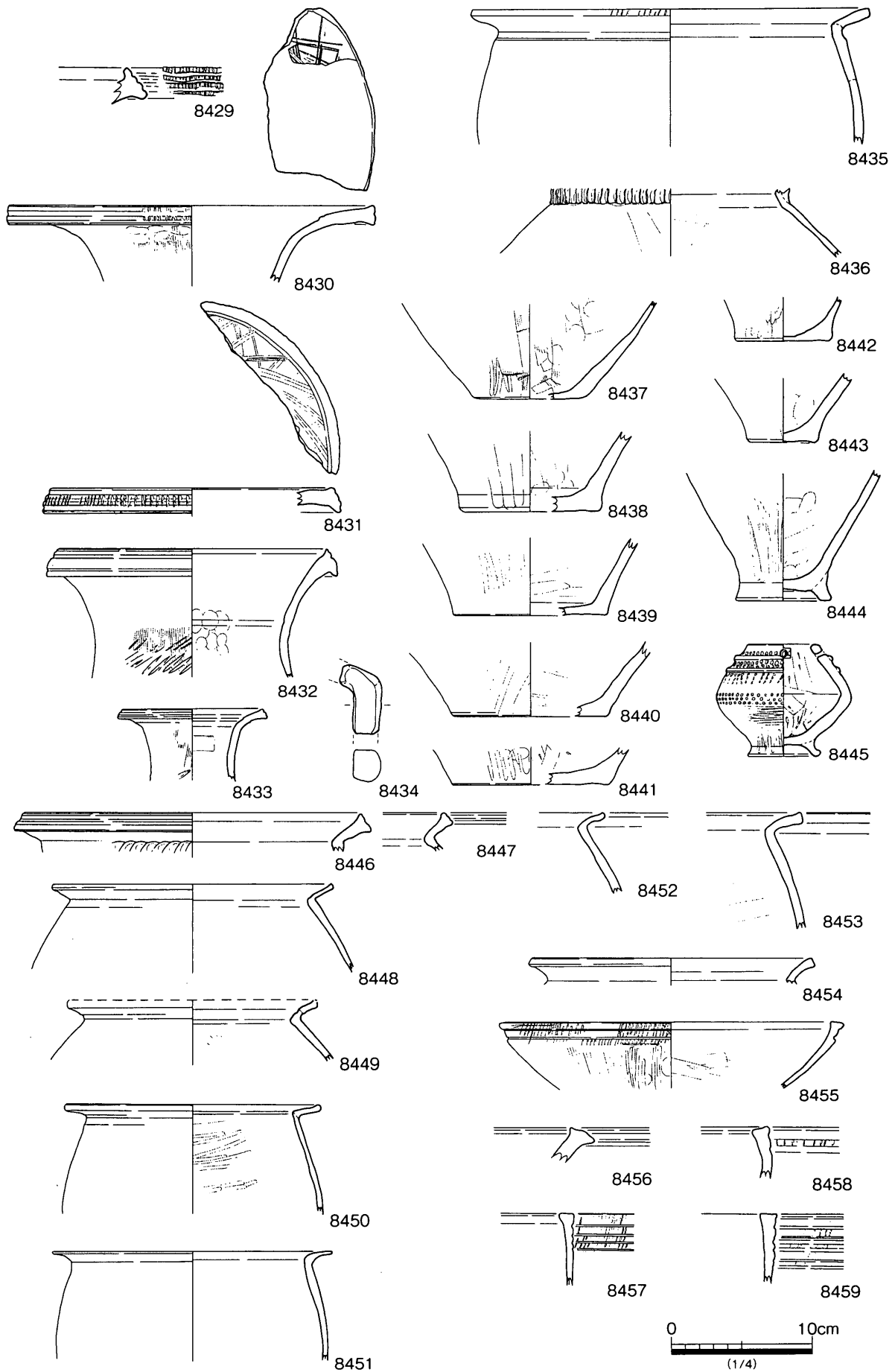
第 287 図 自然河川跡遺物実測図 25(8351 ~ 8389:SRx02)



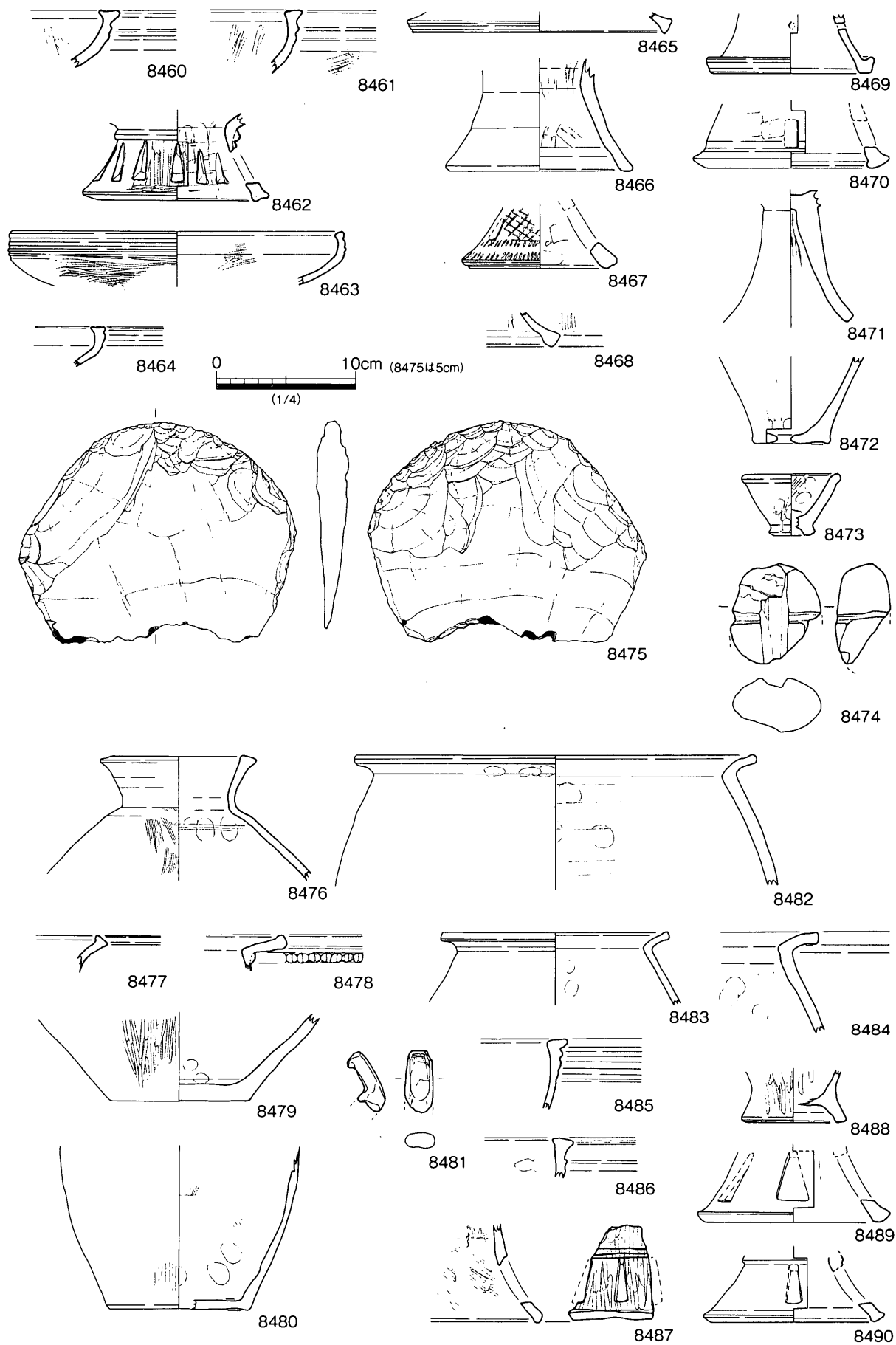
第288図 自然河川跡遺物実測図26(8390~8415:SRx02)



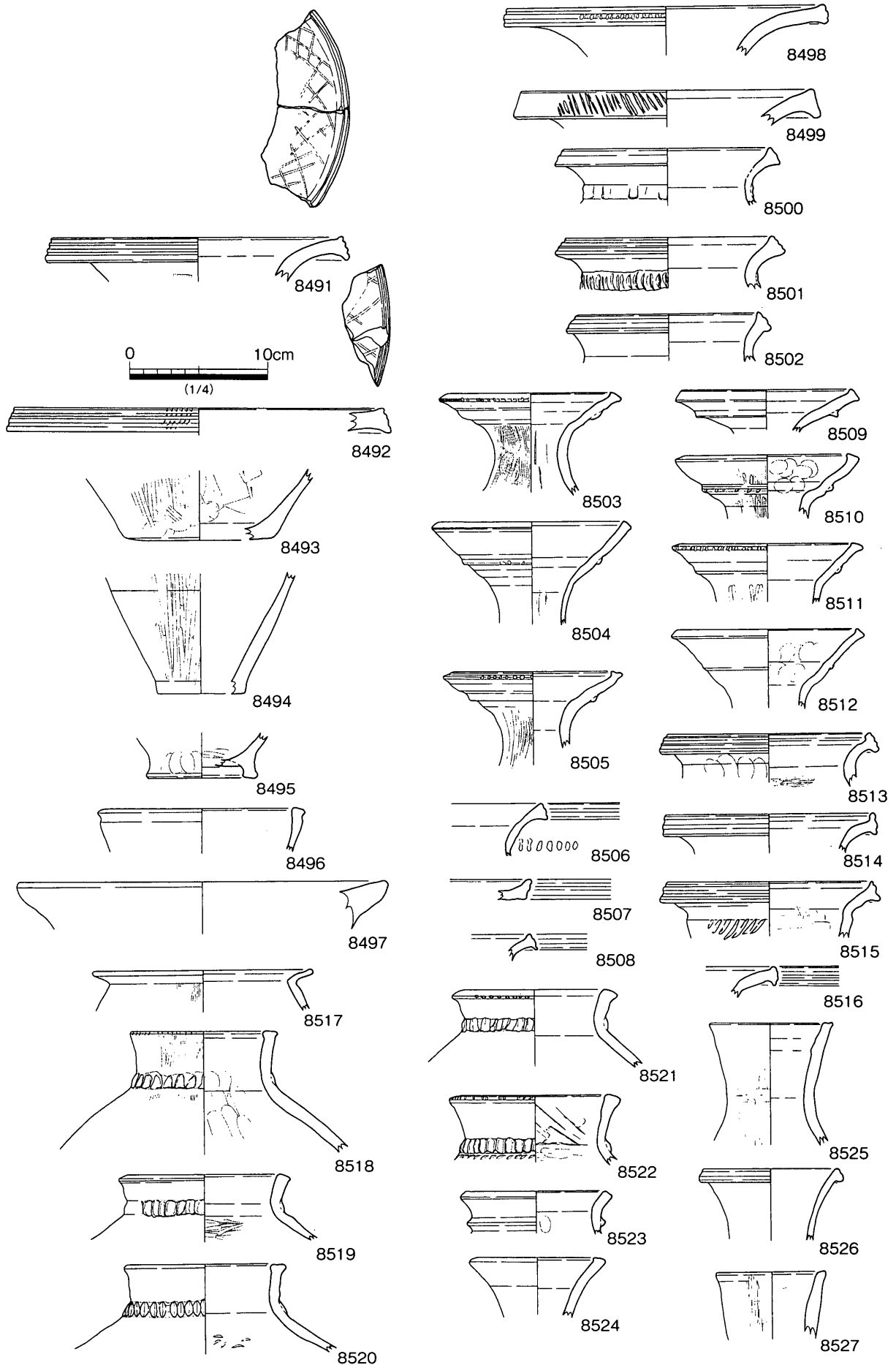
第 289 図 自然河川跡遺物実測図 27(8416 ~ 8428:SRx02)



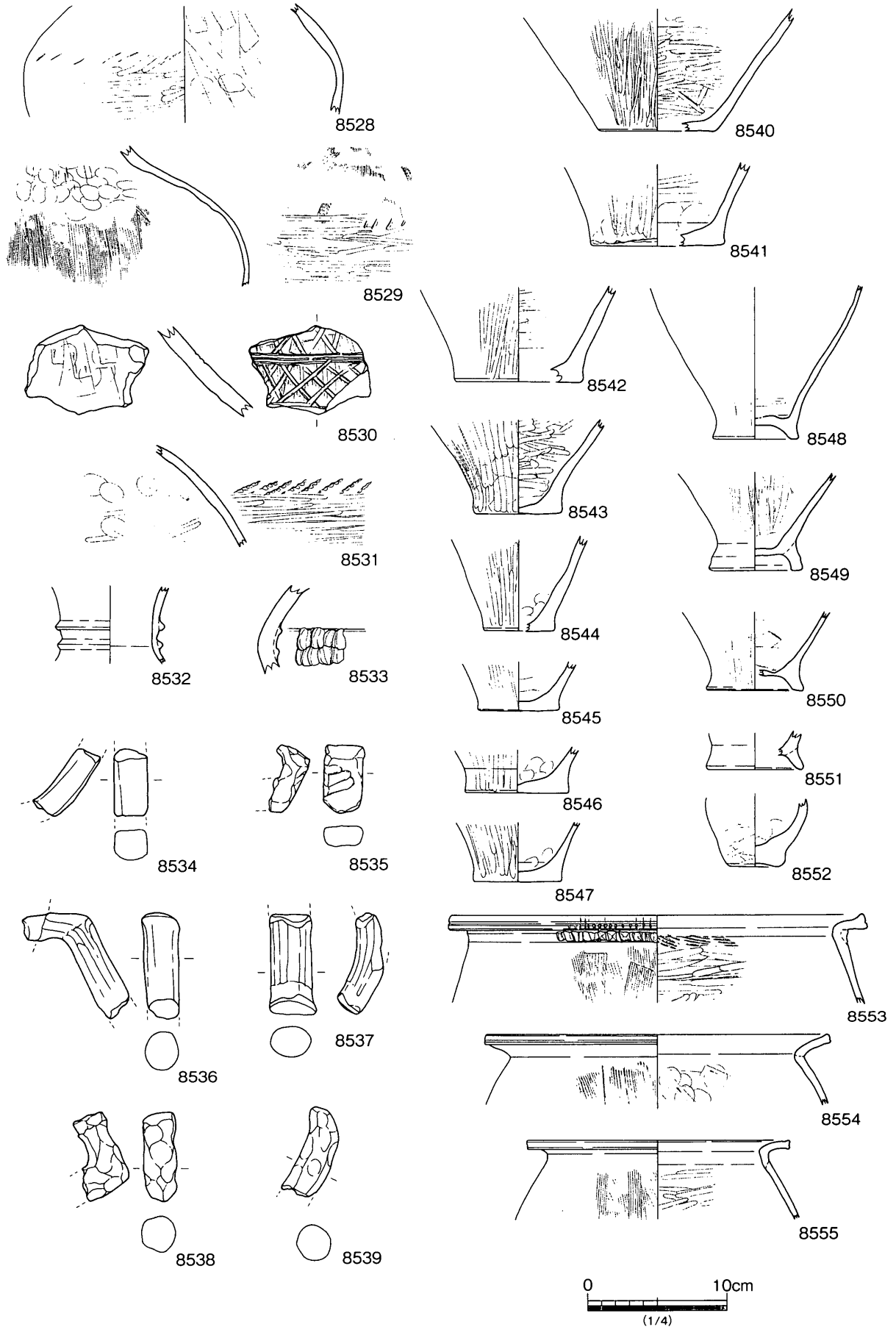
第290図 自然河川跡遺物実測図28(8429~8459:SRx02)



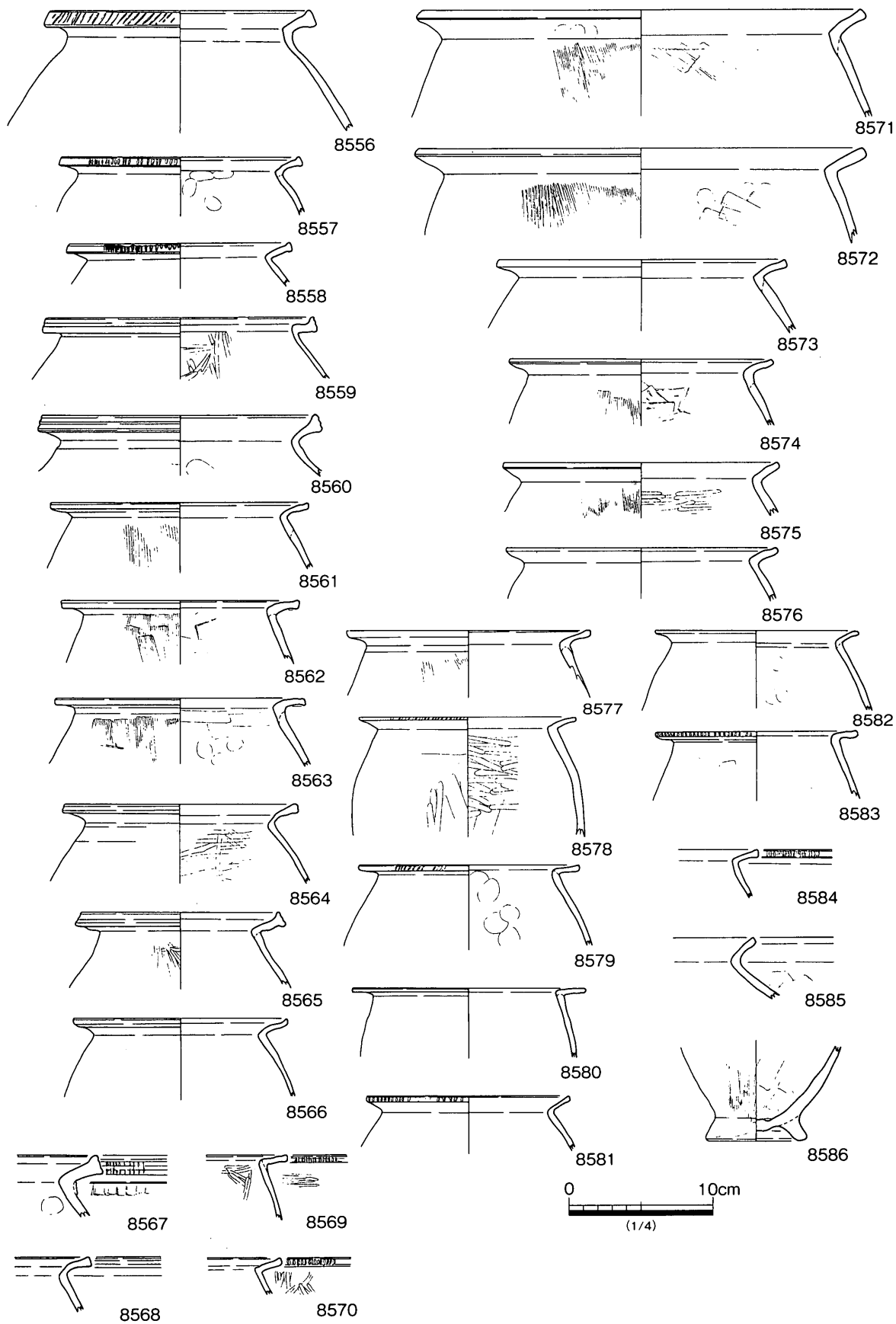
第 291 図 自然河川跡遺物実測図 29(8460 ~ 8490:SRx02)



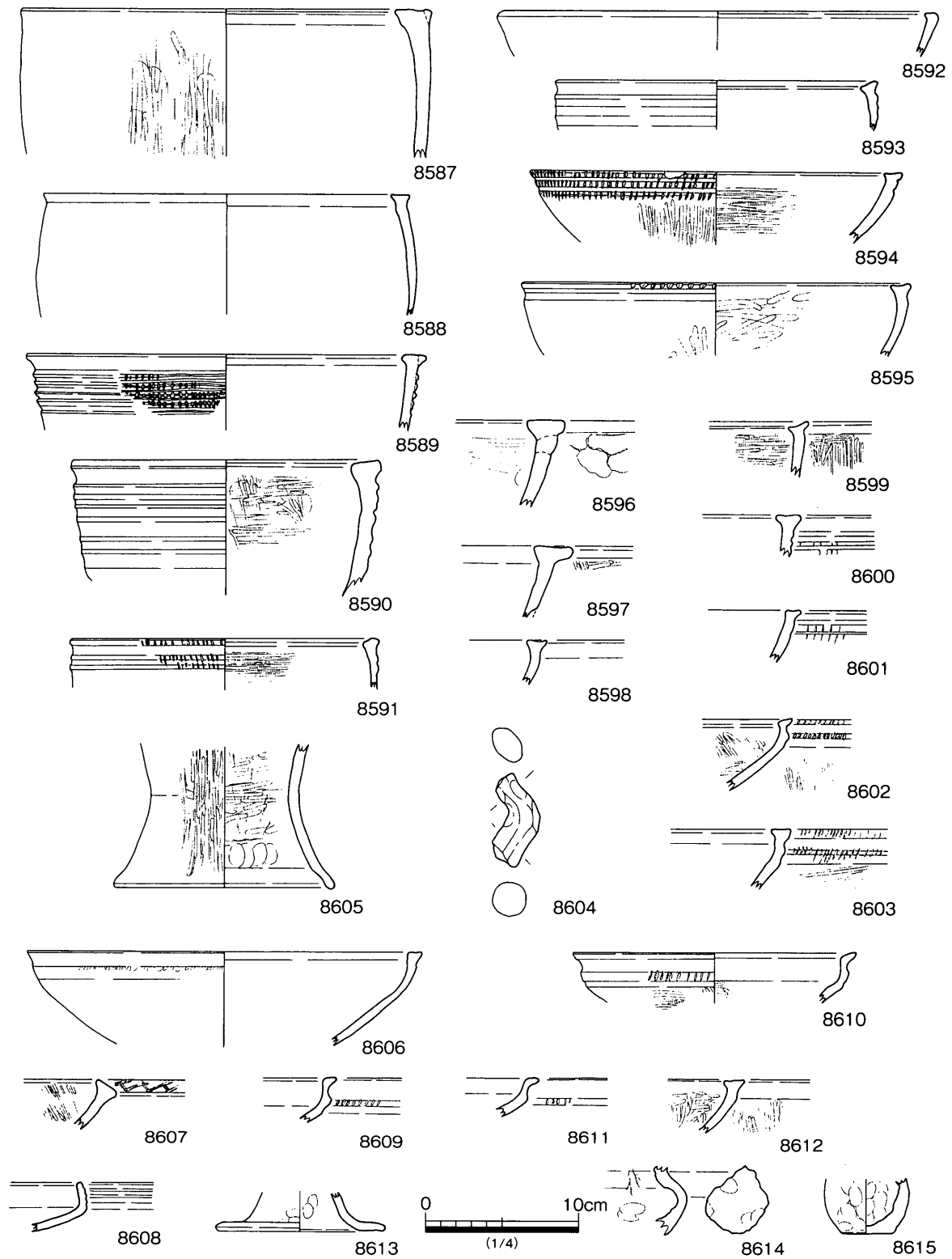
第 292 図 自然河川跡遺物実測図 30(8491 ~ 8527:SRx02)



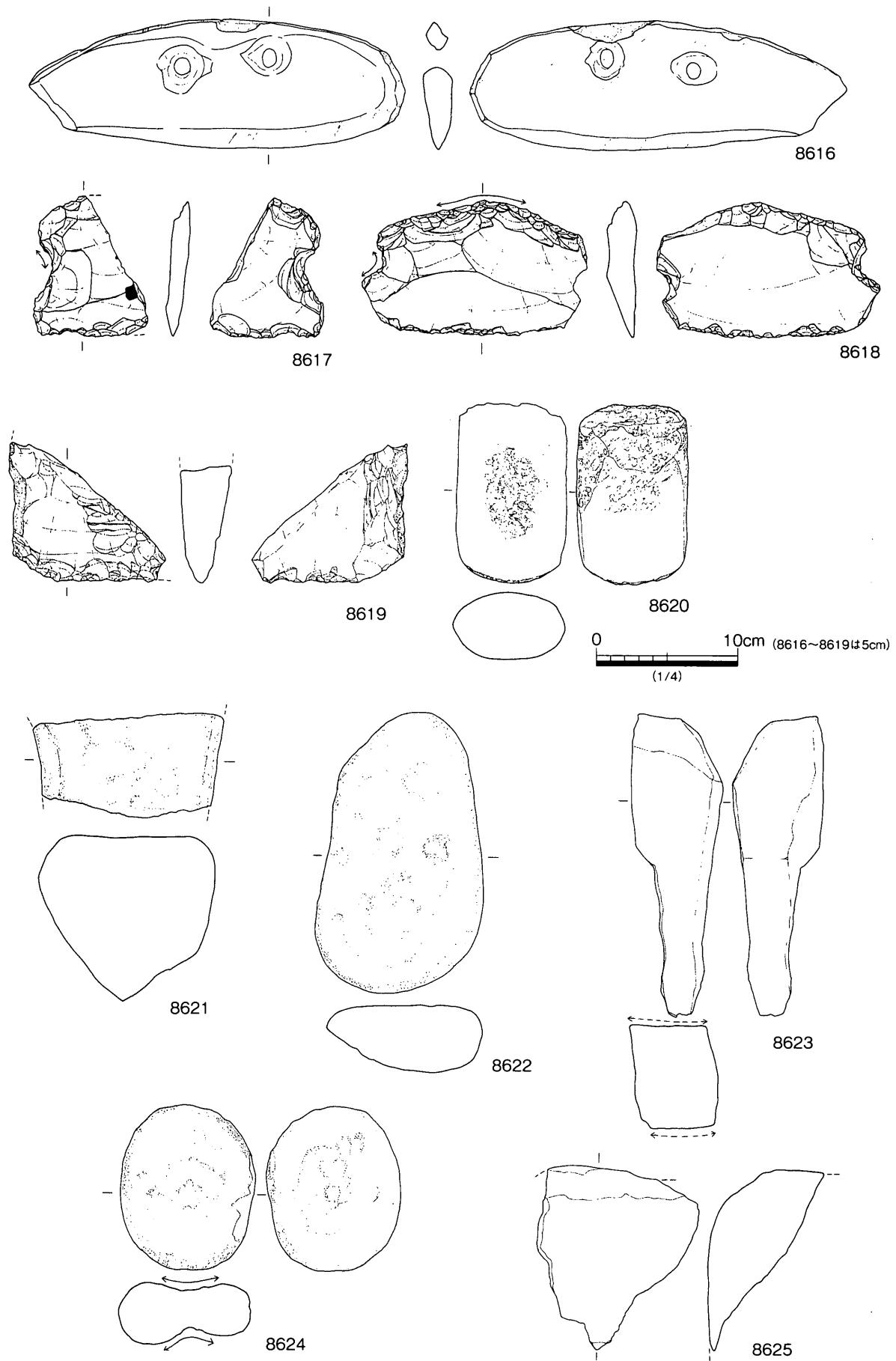
第 293 図 自然河川跡遺物実測図 31(8528 ~ 8555:SRx02)



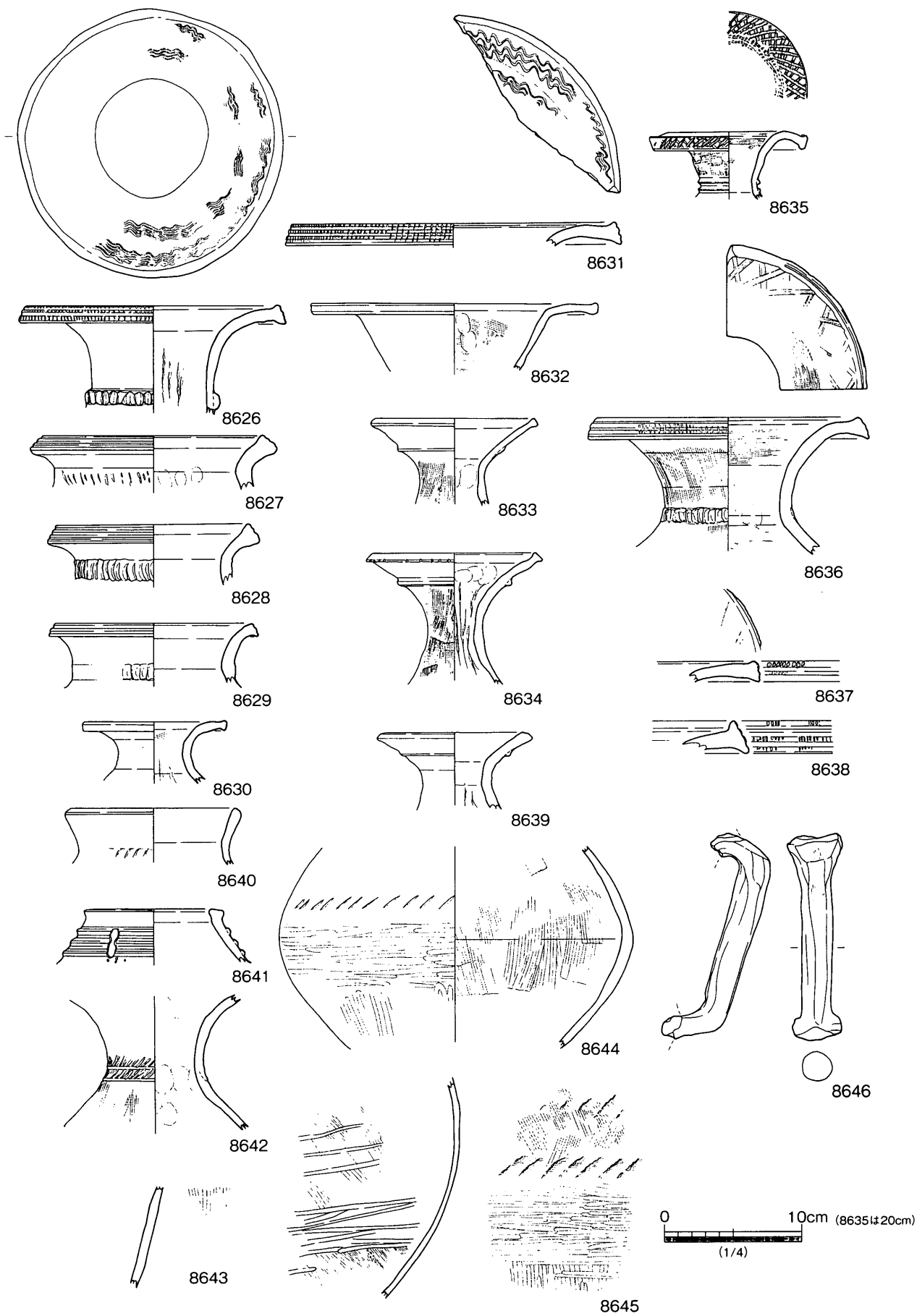
第 294 図 自然河川跡遺物実測図 32(8556 ~ 8586:SRx02)



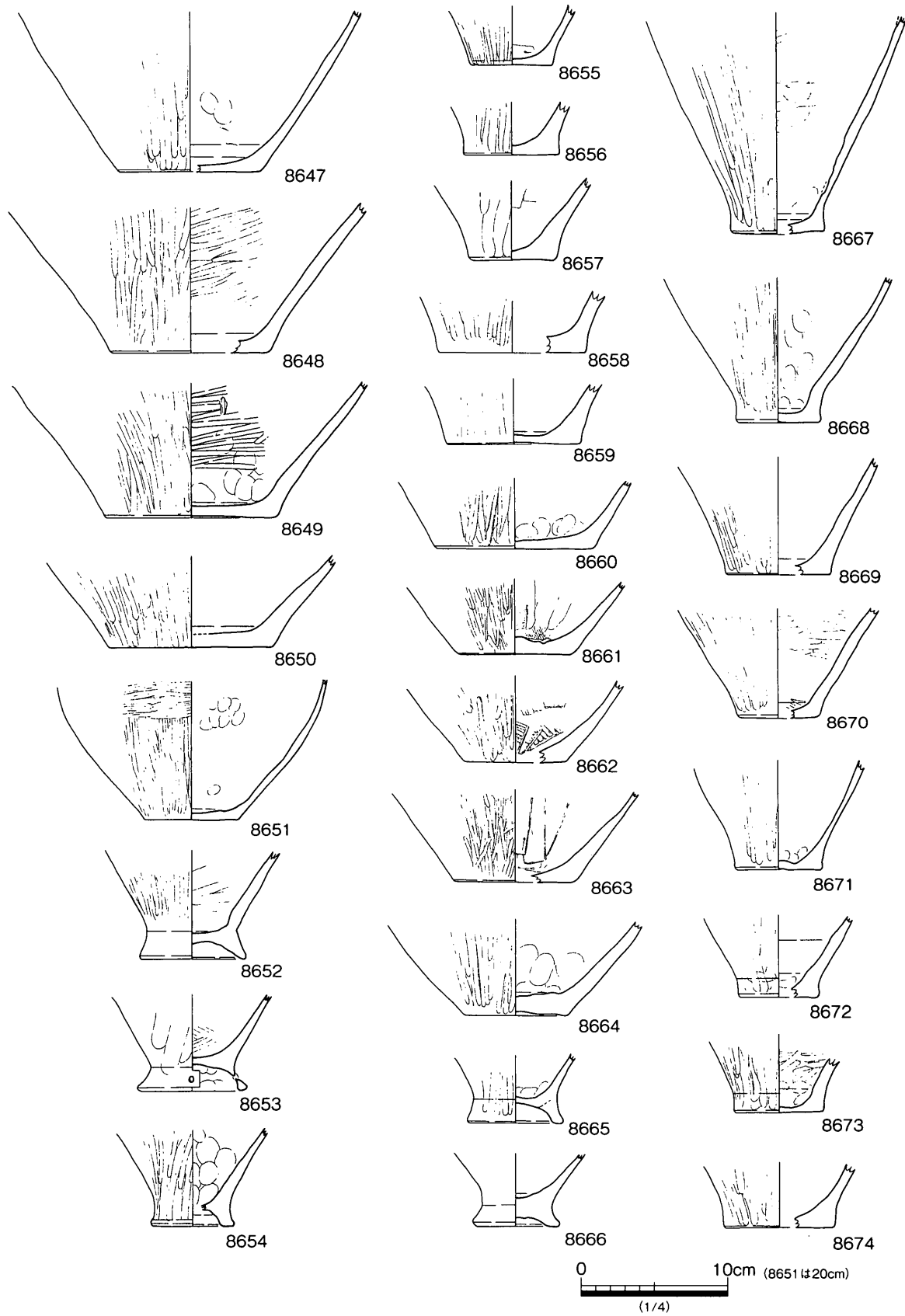
第 295 図 自然河川跡遺物実測図 33(8587 ~ 8615:SRx02)



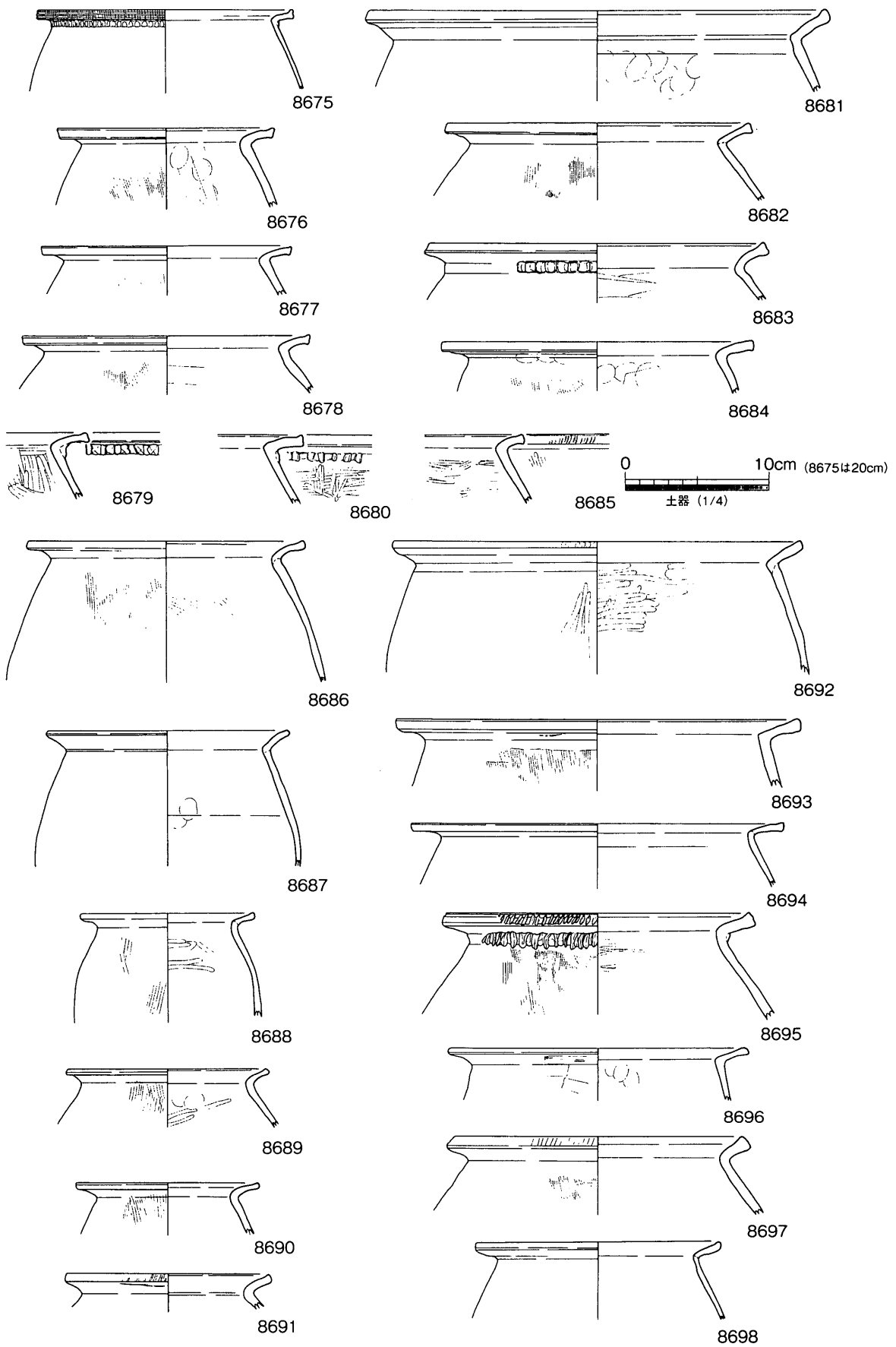
第 296 図 自然河川跡遺物実測図 34(8616 ~ 8625:SRx02)



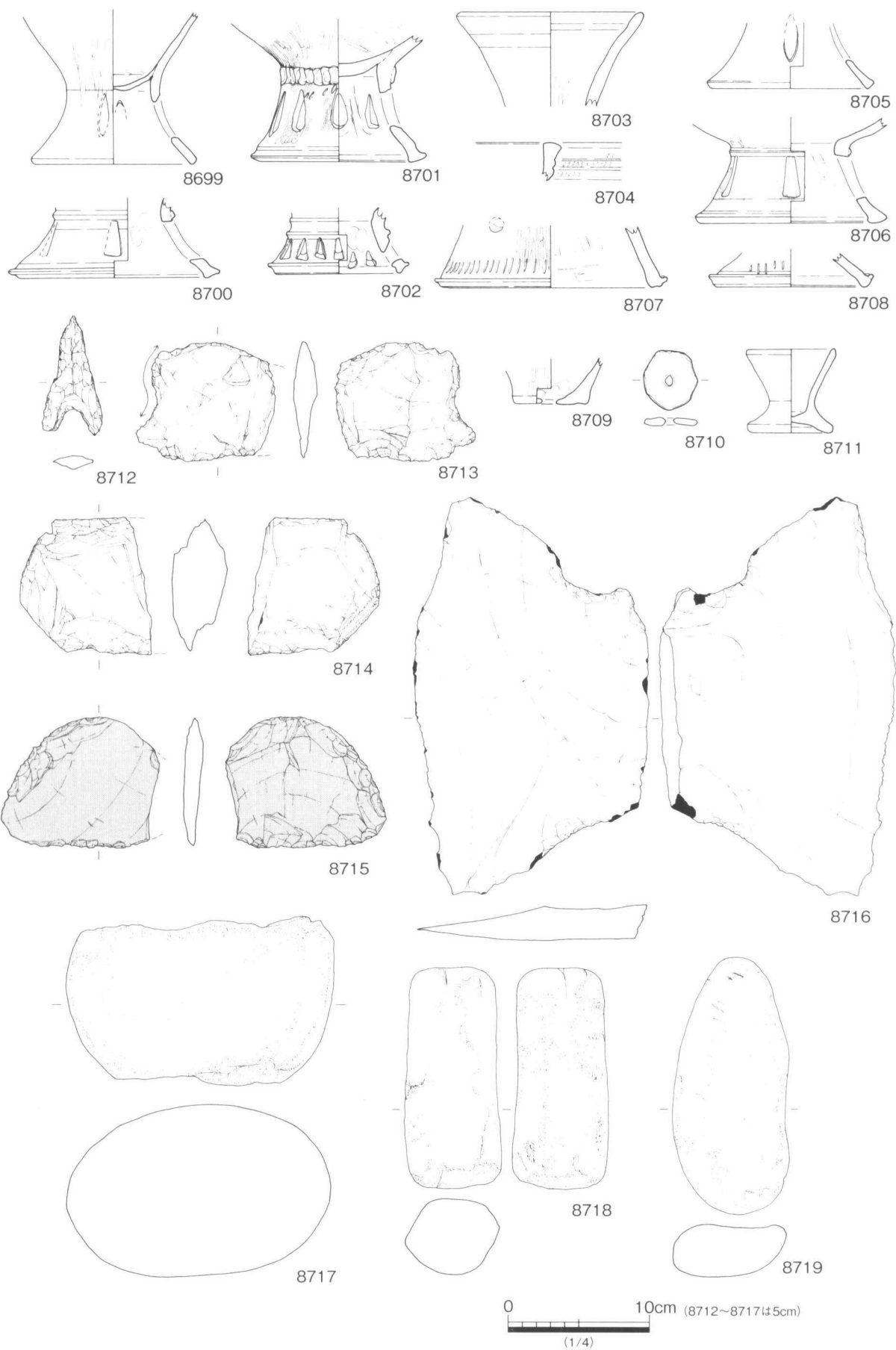
第 297 図 自然河川跡遺物実測図 35(8626 ~ 8646:SRx02)



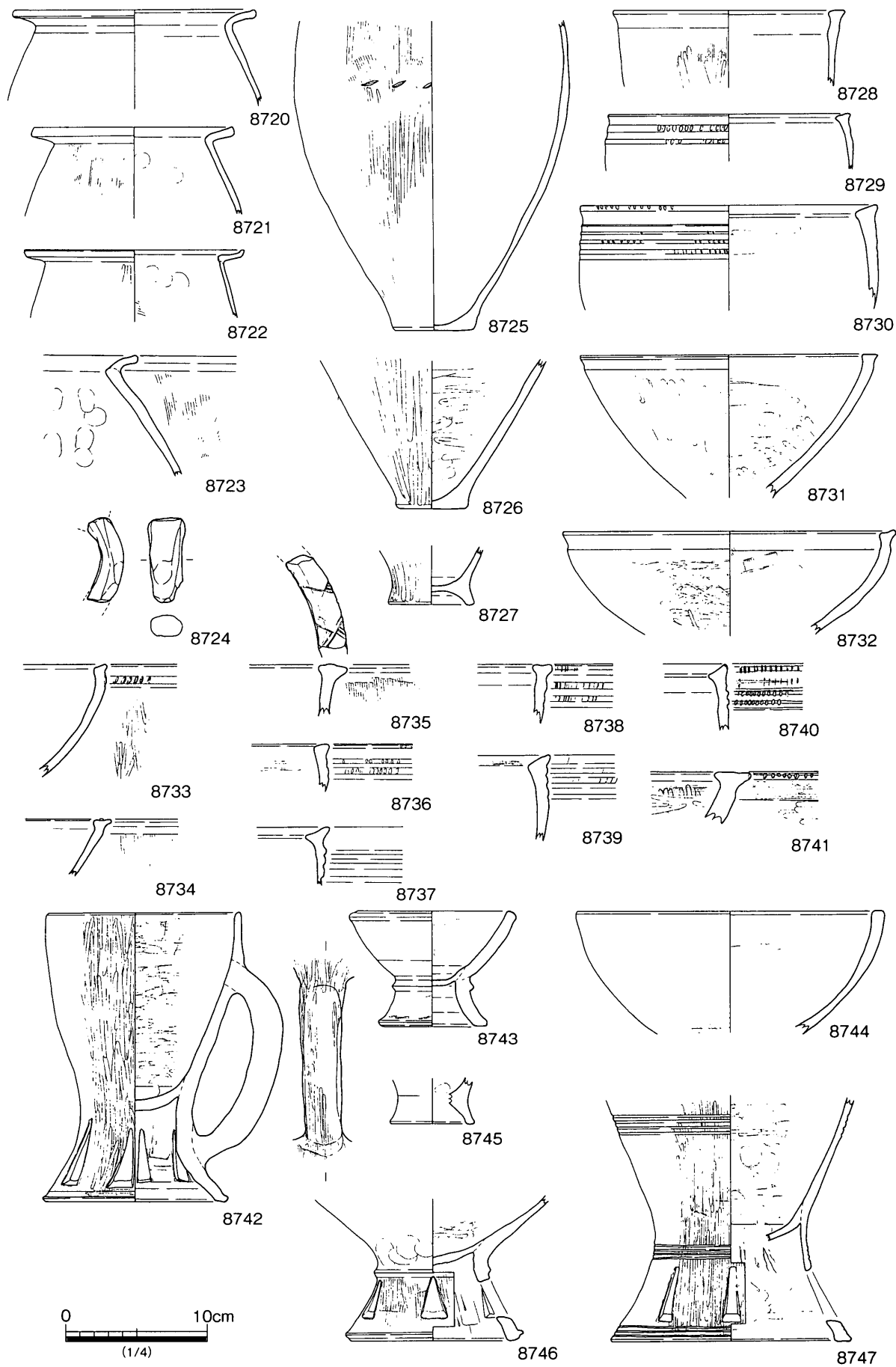
第 298 図 自然河川跡遺物実測図 36(8647 ~ 8674:SRx02)



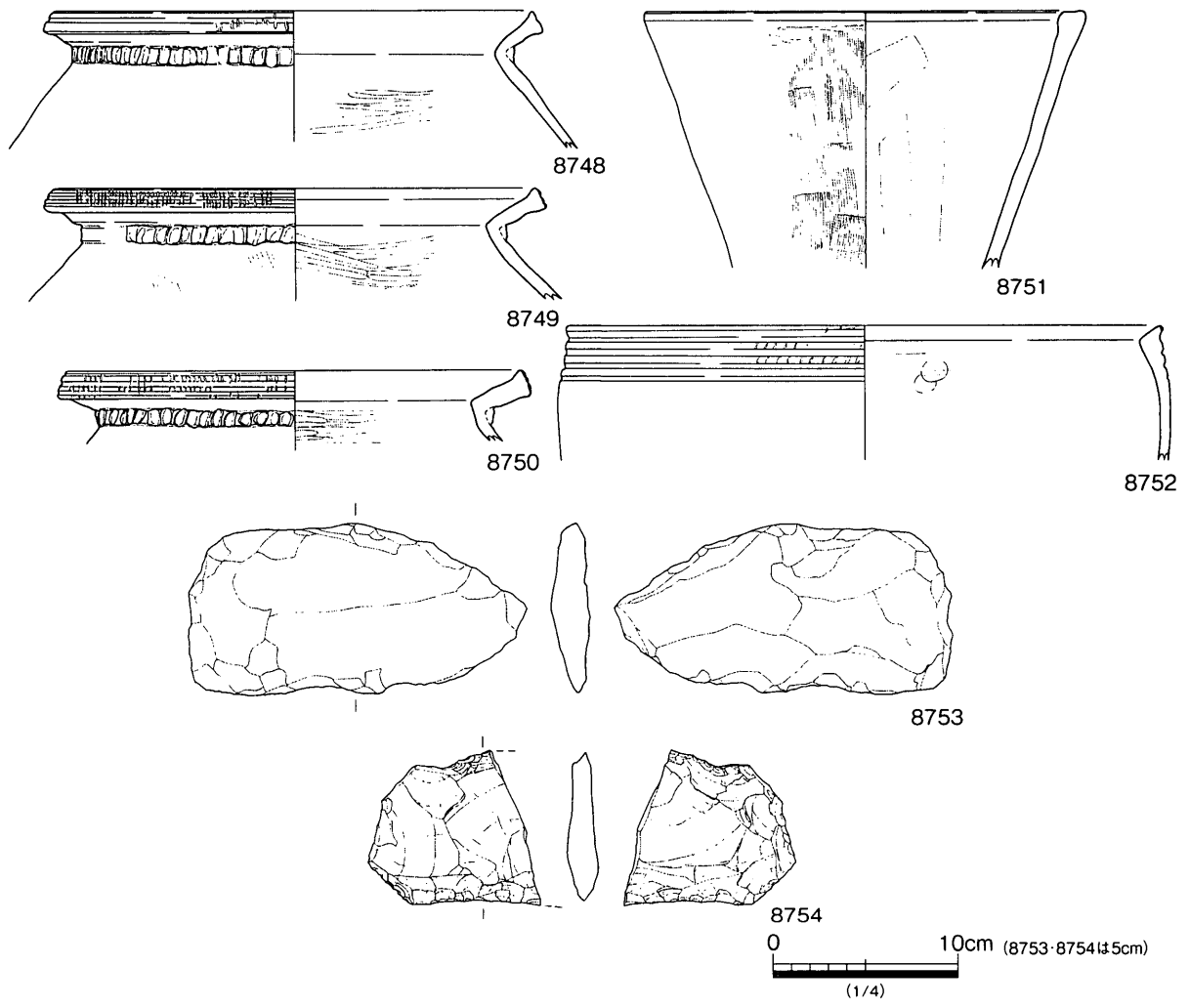
第 299 図 自然河川跡遺物実測図 37(8675 ~ 8698:SRx02)



第 300 図 自然河川跡遺物実測図 38(8699 ~ 8719:SRx02)



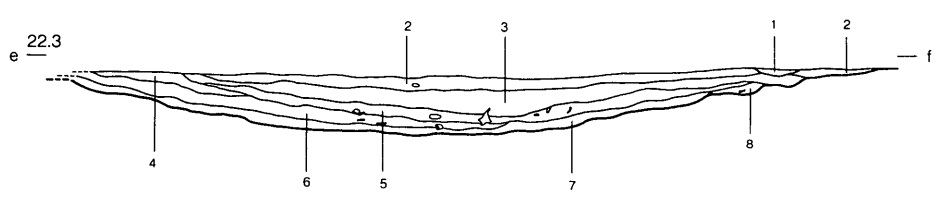
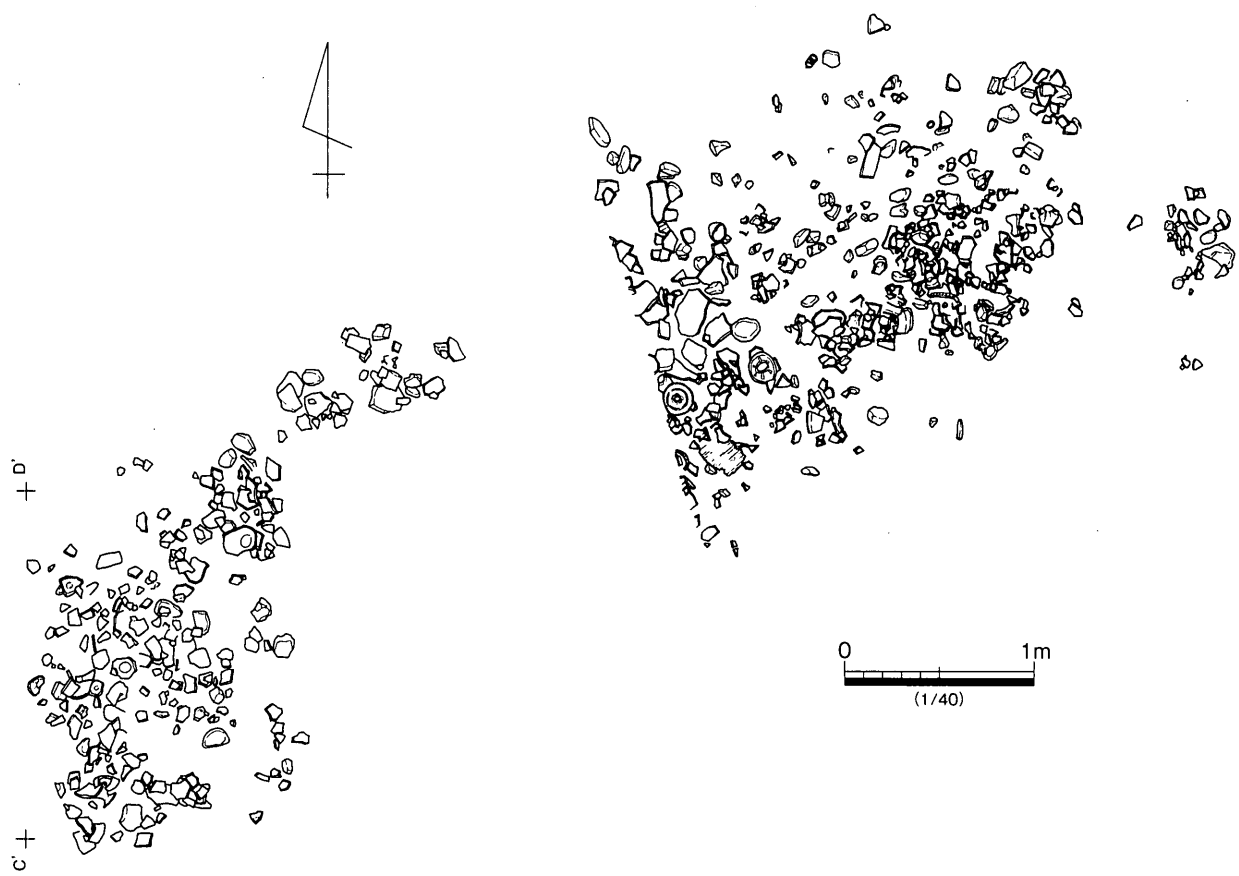
第 301 図 自然河川跡遺物実測図 39(8720 ~ 8747:SRx02)



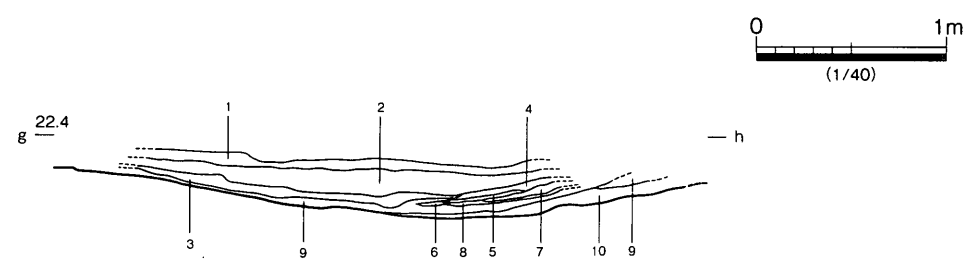
第 302 図 自然河川跡遺物実測図 40(8748 ~ 8754:SRx02)



第 303 図 自然河川跡遺構実測図 5 (SRx03)

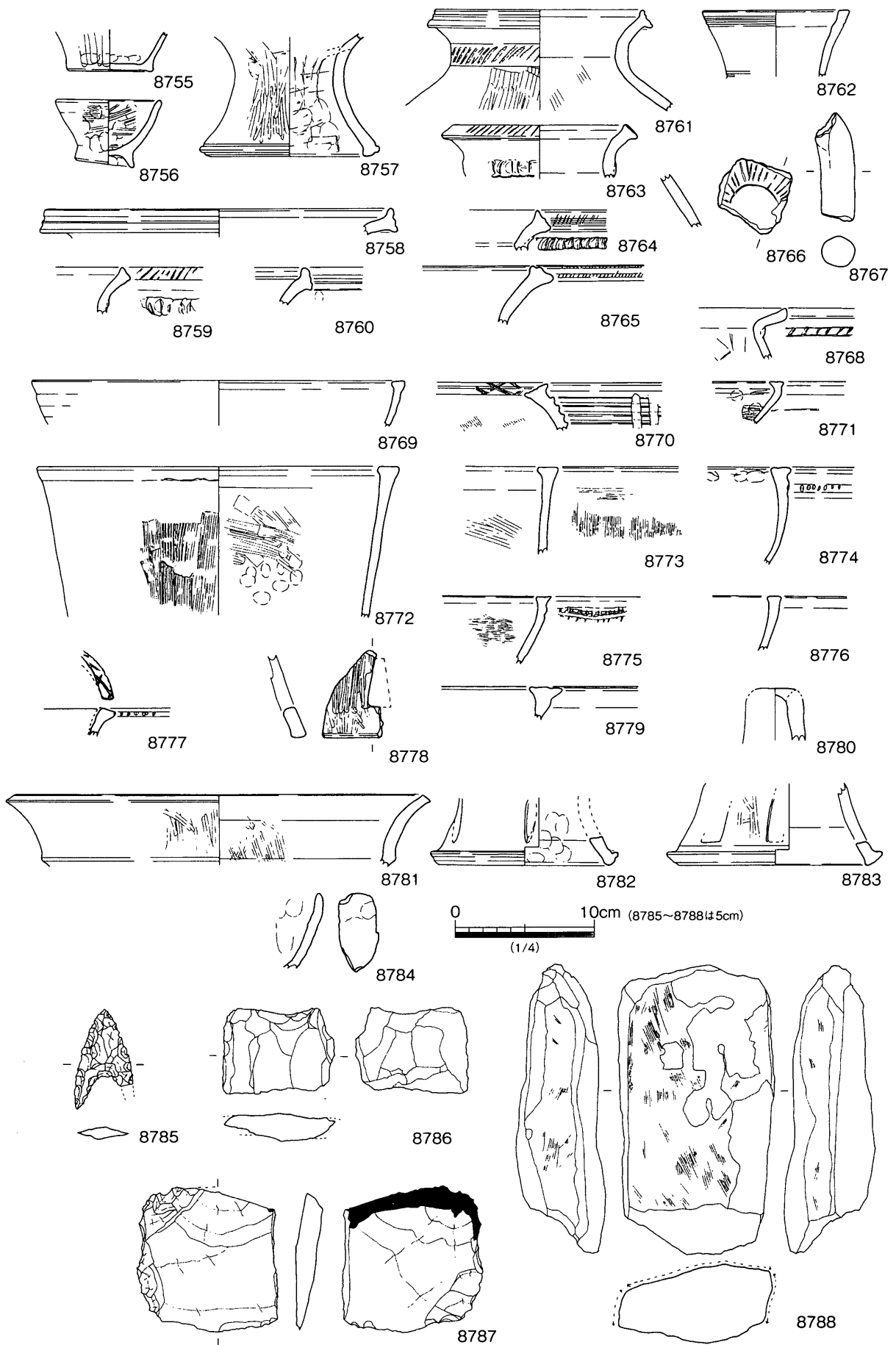


- 1 砂礫
- 2 暗灰茶色細砂質シルト (砂やや多く混入する)
- 3 明黄褐色粘質シルト (鉄分を多く含む)
- 4 明黄褐色砂質シルト (褐色土ブロックを多く含む)
- 5 暗灰色粗砂質シルト (明黄色砂ブロックが混入する)
- 6 明黄褐色粘質シルト (層の下位に黄白色細粒がブロックが多く混入する)
- 7 黒灰色粘質シルト
- 8 淡灰色と黄白色ブロック

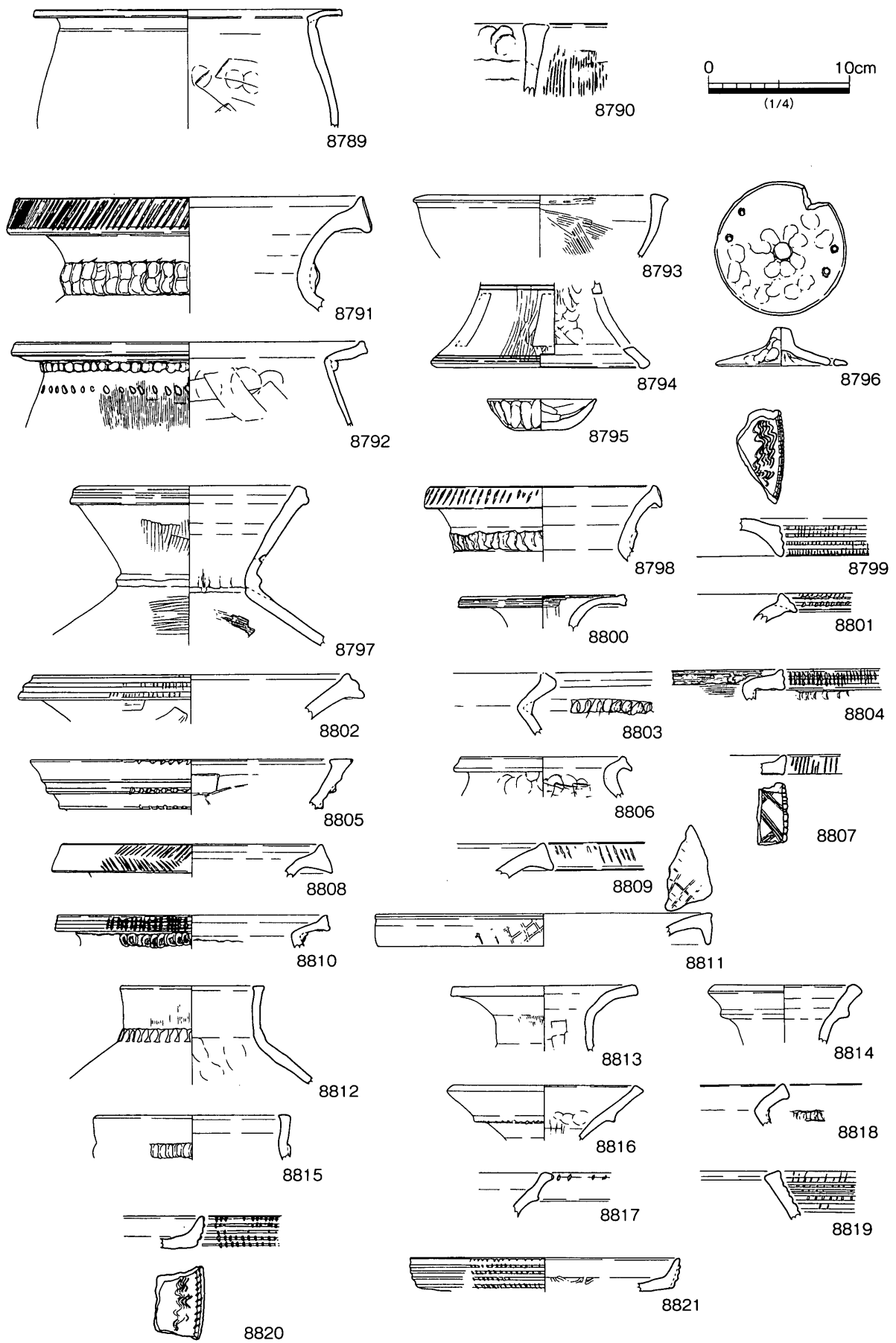


- 1 淡灰茶色砂質シルト (細、中砂)
- 2 暗黄褐色砂質シルト (鉄分を多く含む)
- 3 明黄褐色砂質シルト (鉄分を多く含む。暗灰色土ブロックを多く含む)
- 4 暗灰色、暗黒色粘質シルト (炭化物が少量混入する。やや固く締まる)
- 5 暗茶褐色粘質シルト (黄色シルトブロックが混入する。軟弱な土壌)
- 6 茶褐色粘質シルト (8より固い。黄色土ブロックは風化した岩石)
- 7 茶黒色粘質シルト (砂が多く混入する。直径1~2cmの黄色土、黒色土、明黄褐色土ブロックが混入する)
- 8 黄色土ブロックと明褐色土ブロック (軟弱な土壌)
- 9 灰色粘質シルト (細かい黄色土ブロックが少量混入する)
- 10 灰黒色粘質シルト (微細な黄白色土ブロックが混入する。北部は固く締まる)

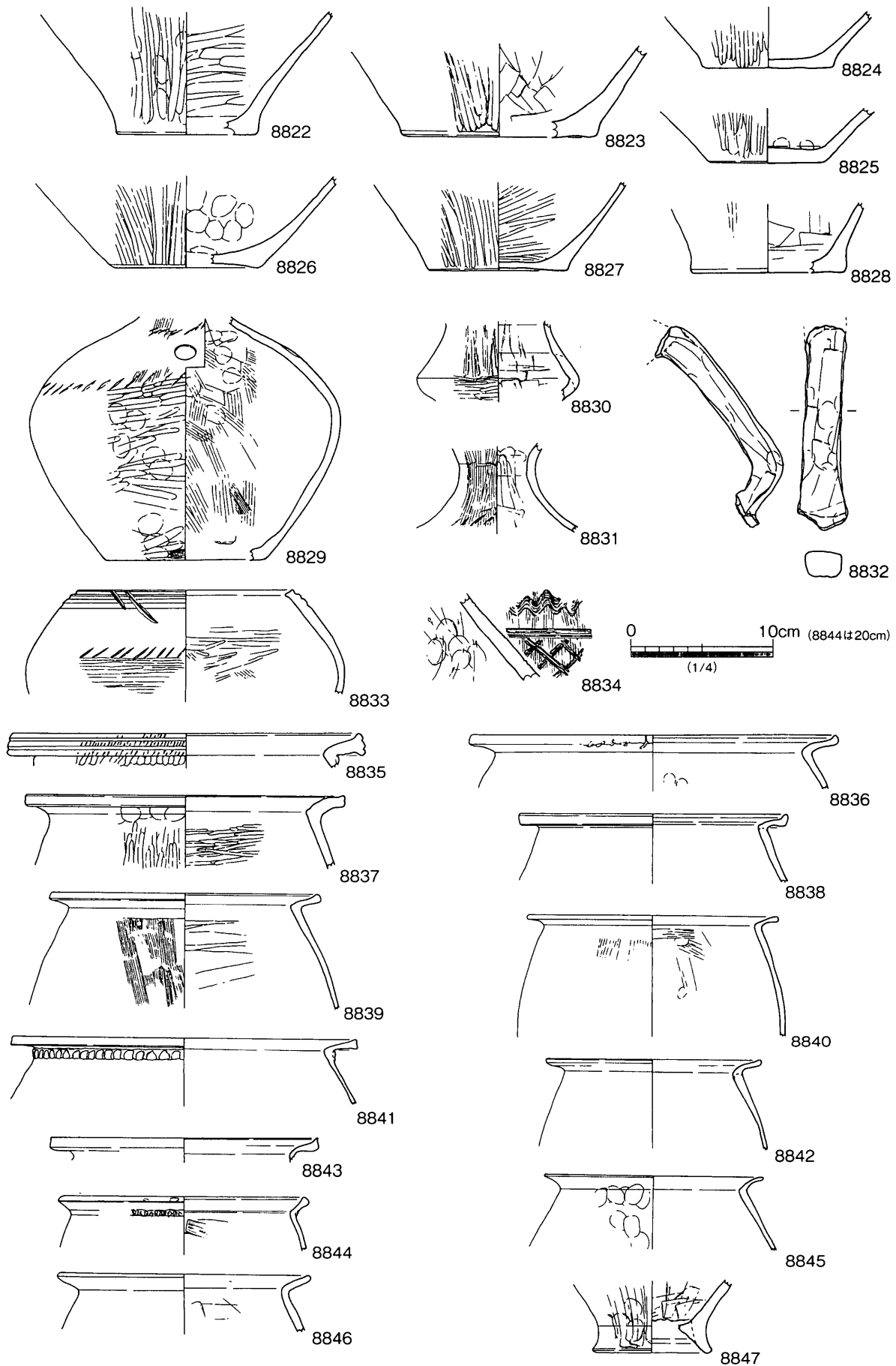
第 304 図 自然河川跡遺構実測図 6(SRx03)



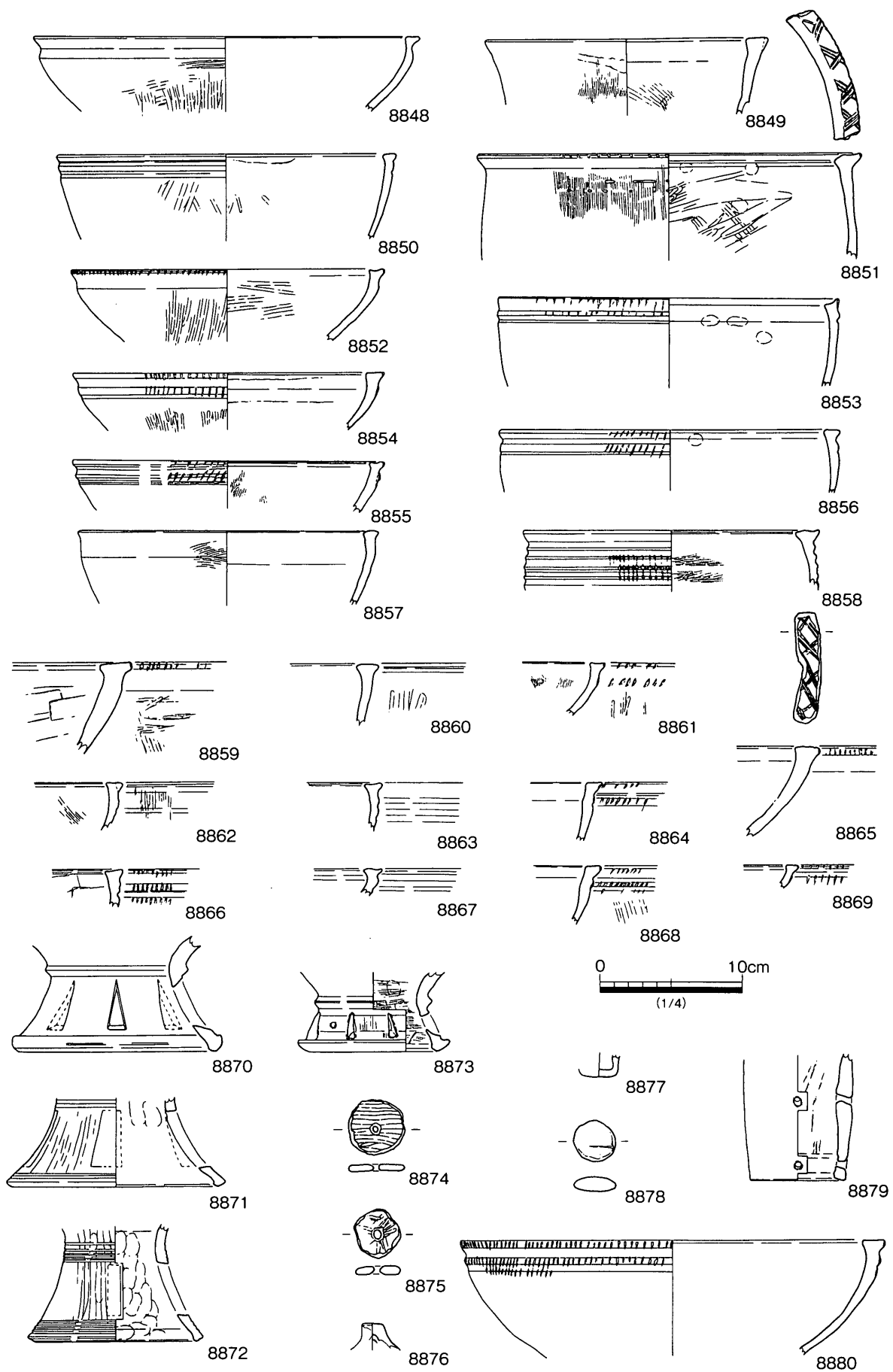
第 305 図 自然河川跡遺物実測図 41(8755 ~ 8788:SRx03)



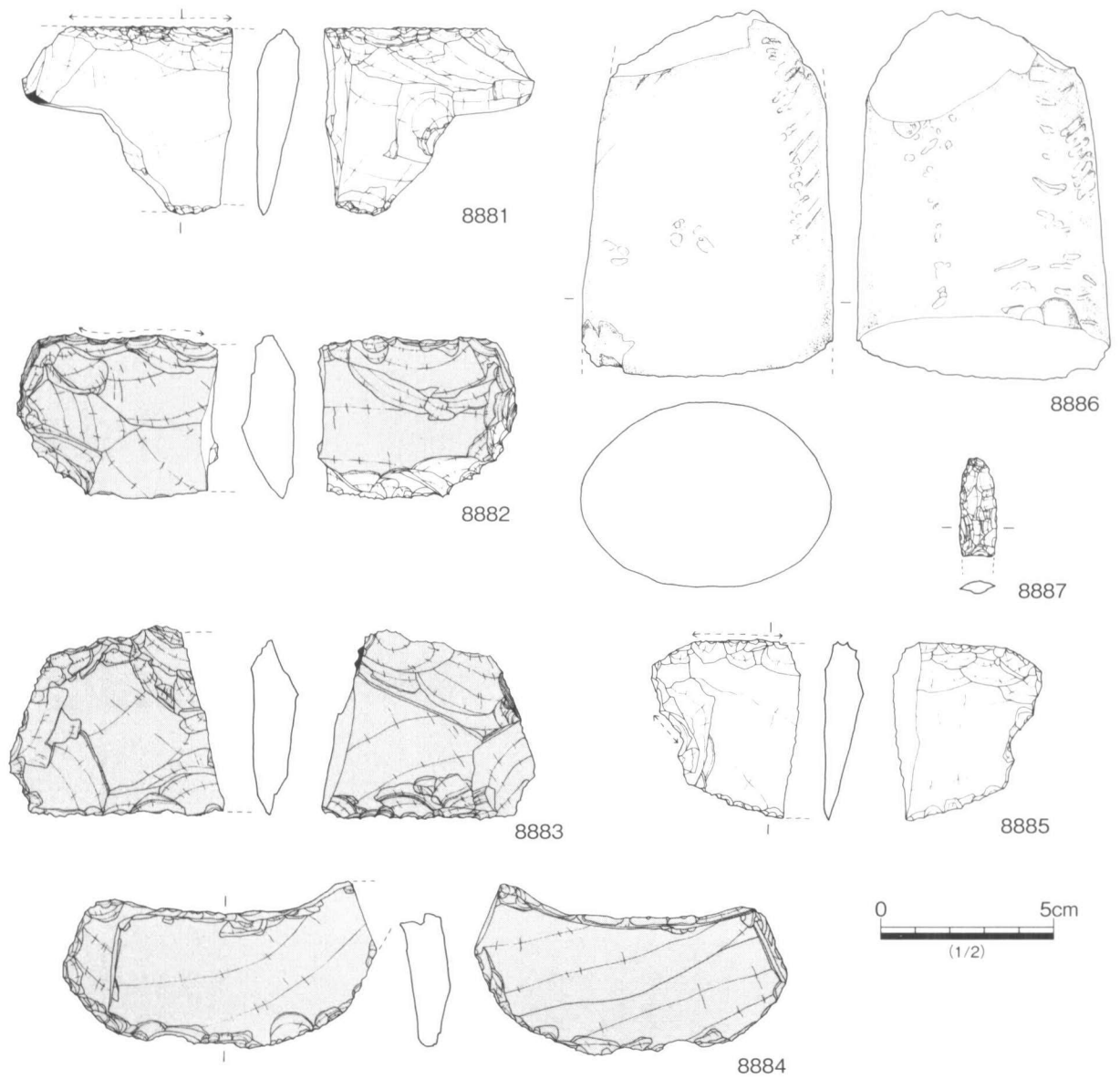
第 306 図 自然河川跡遺物実測図 42(8789 ~ 8821:SRx03)



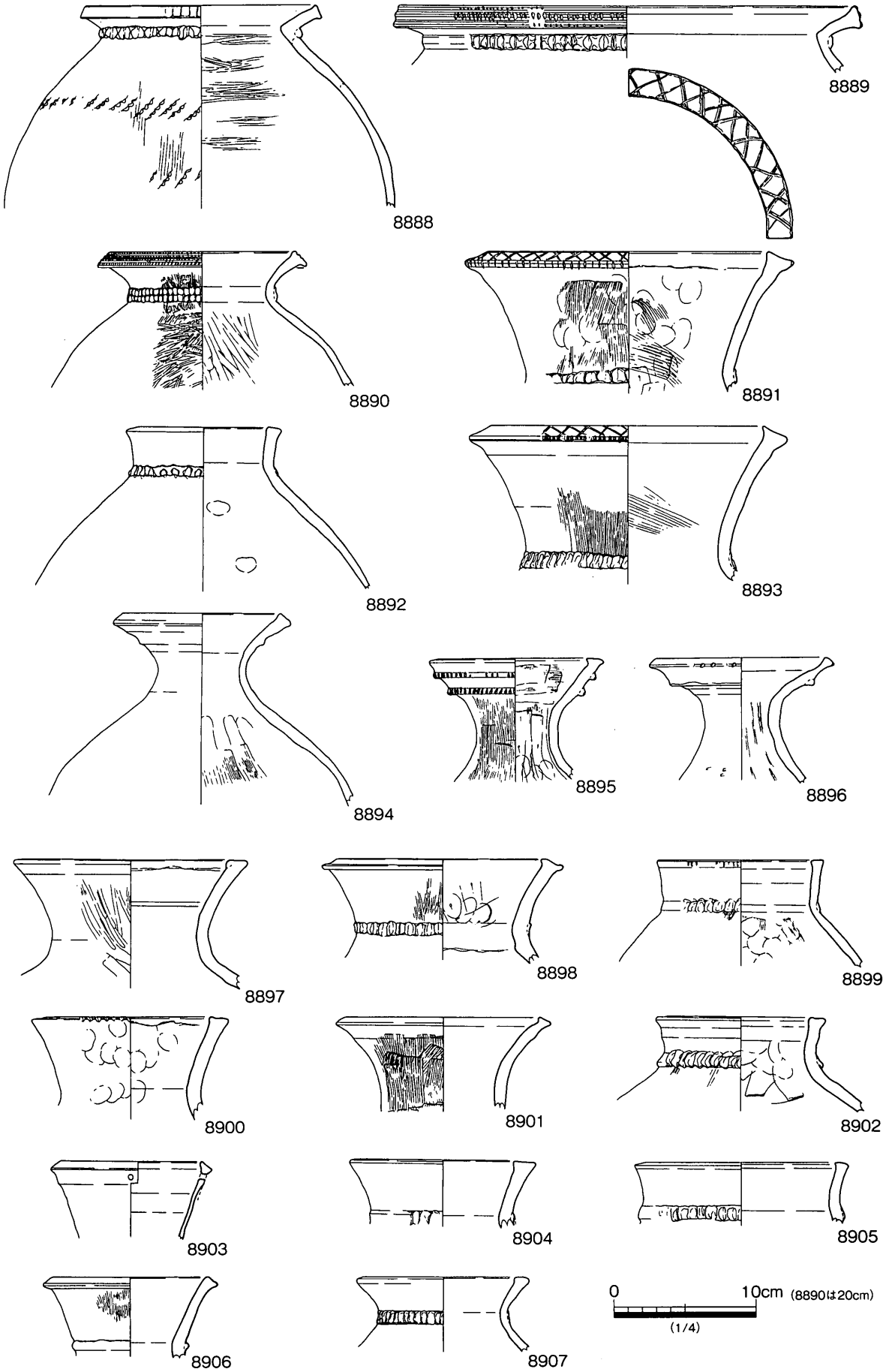
第 307 図 自然河川跡遺物実測図 43(8822 ~ 8847:SRx03)



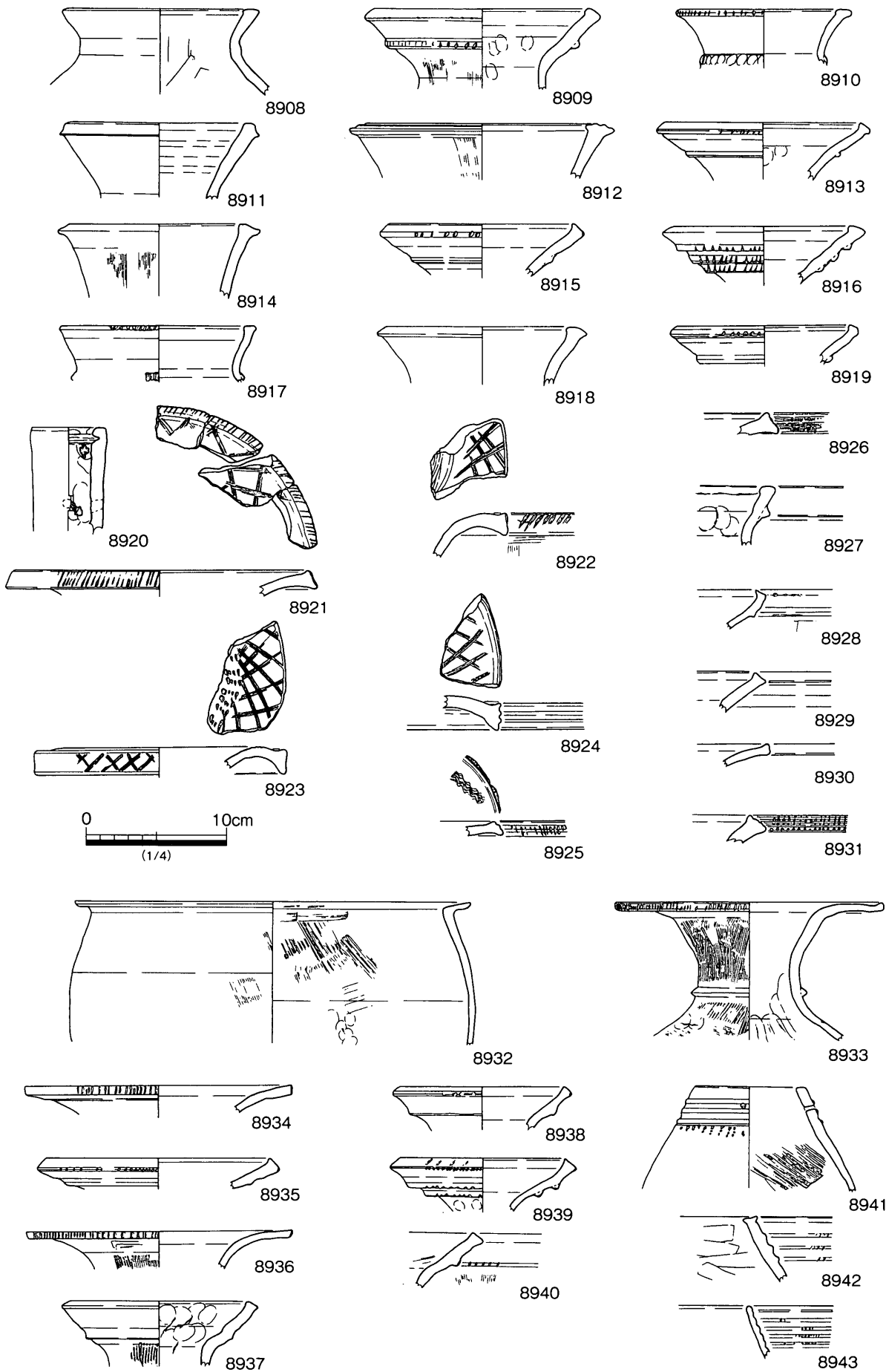
第 308 図 自然河川跡遺物実測図 44(8848 ~ 8880:SRx03)



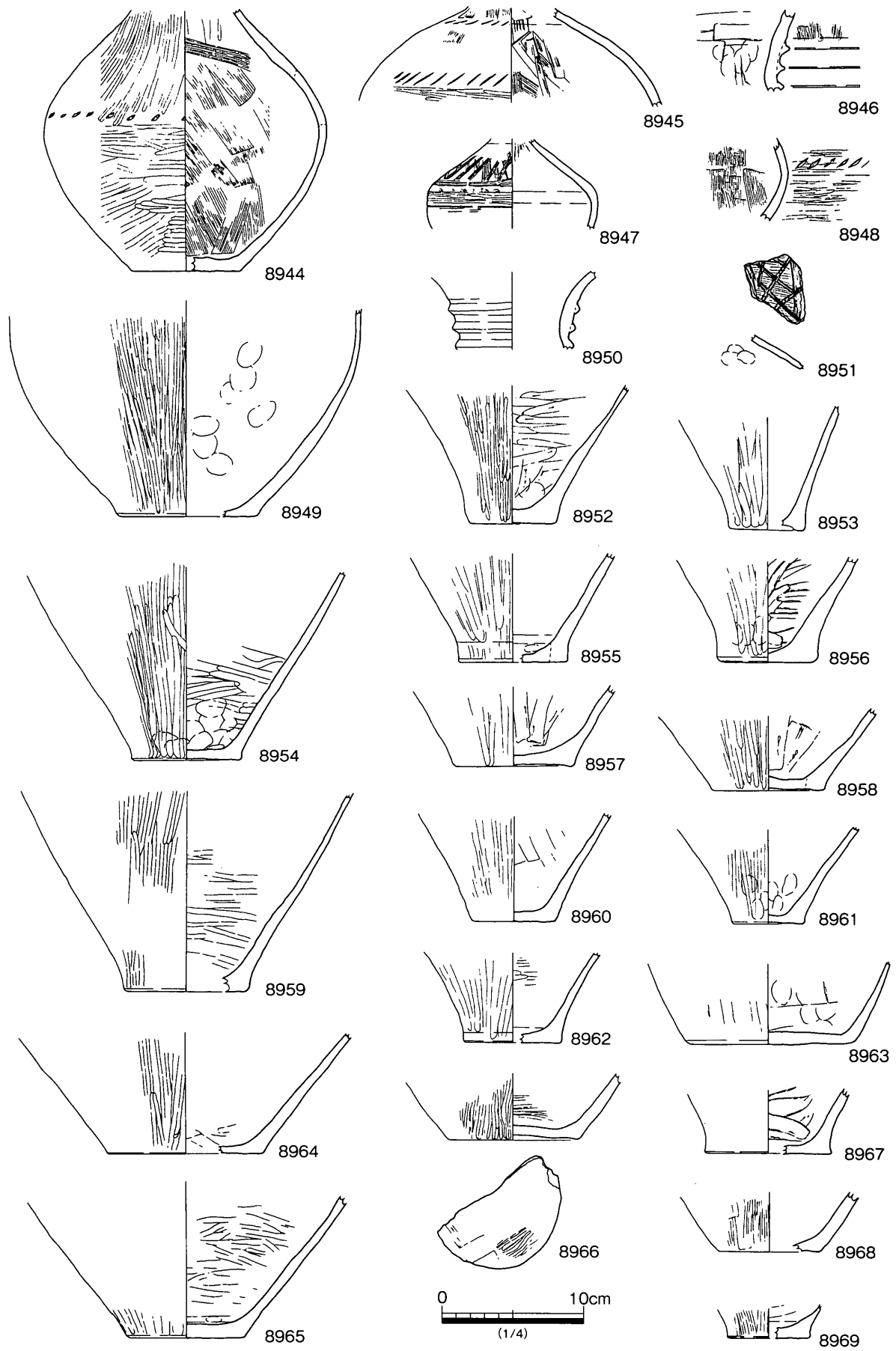
第 309 図 自然河川跡遺物実測図 45(8881 ~ 8887:SRx03)



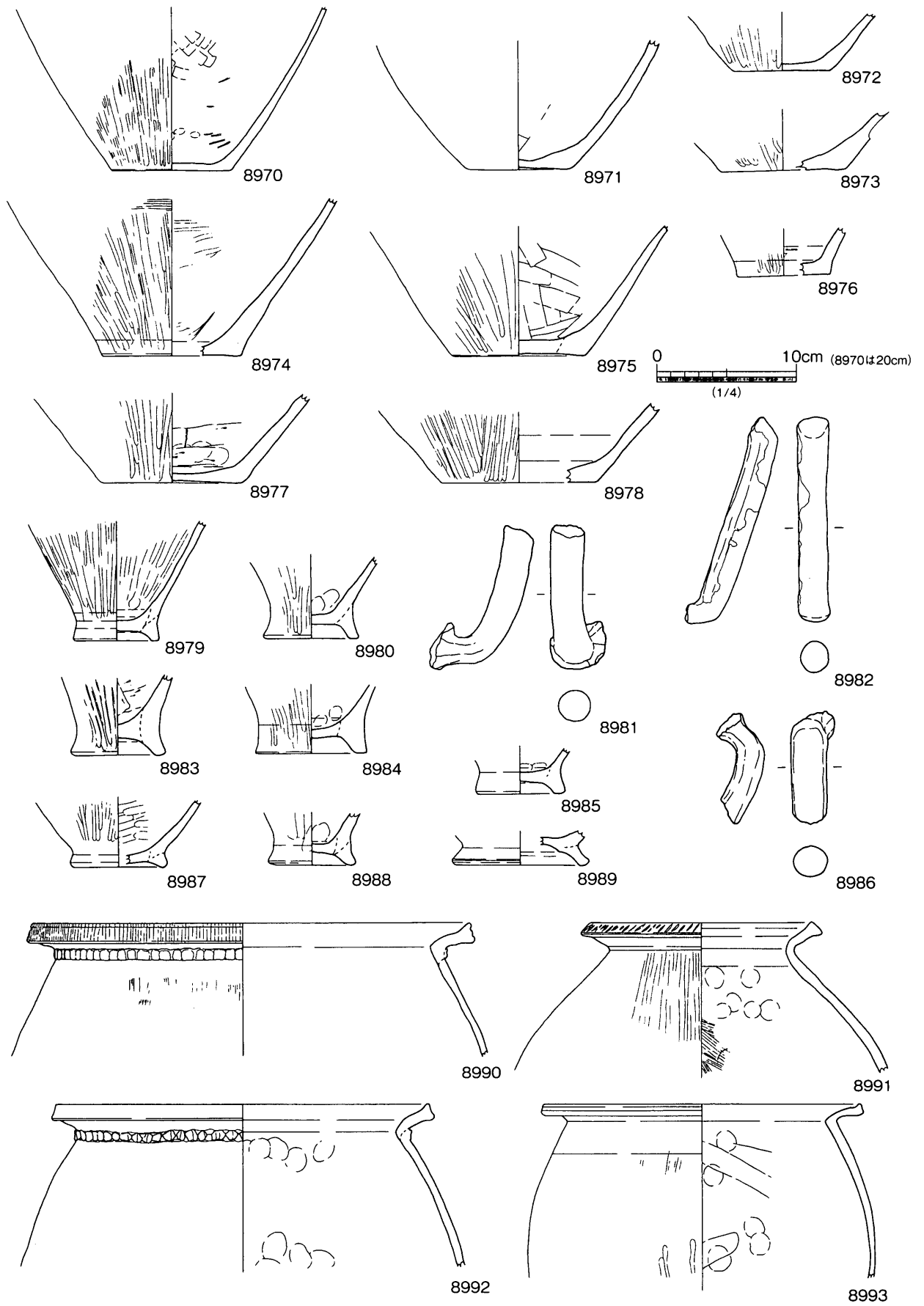
第310図 自然河川跡遺物実測図46(8888~8907:SRx03)



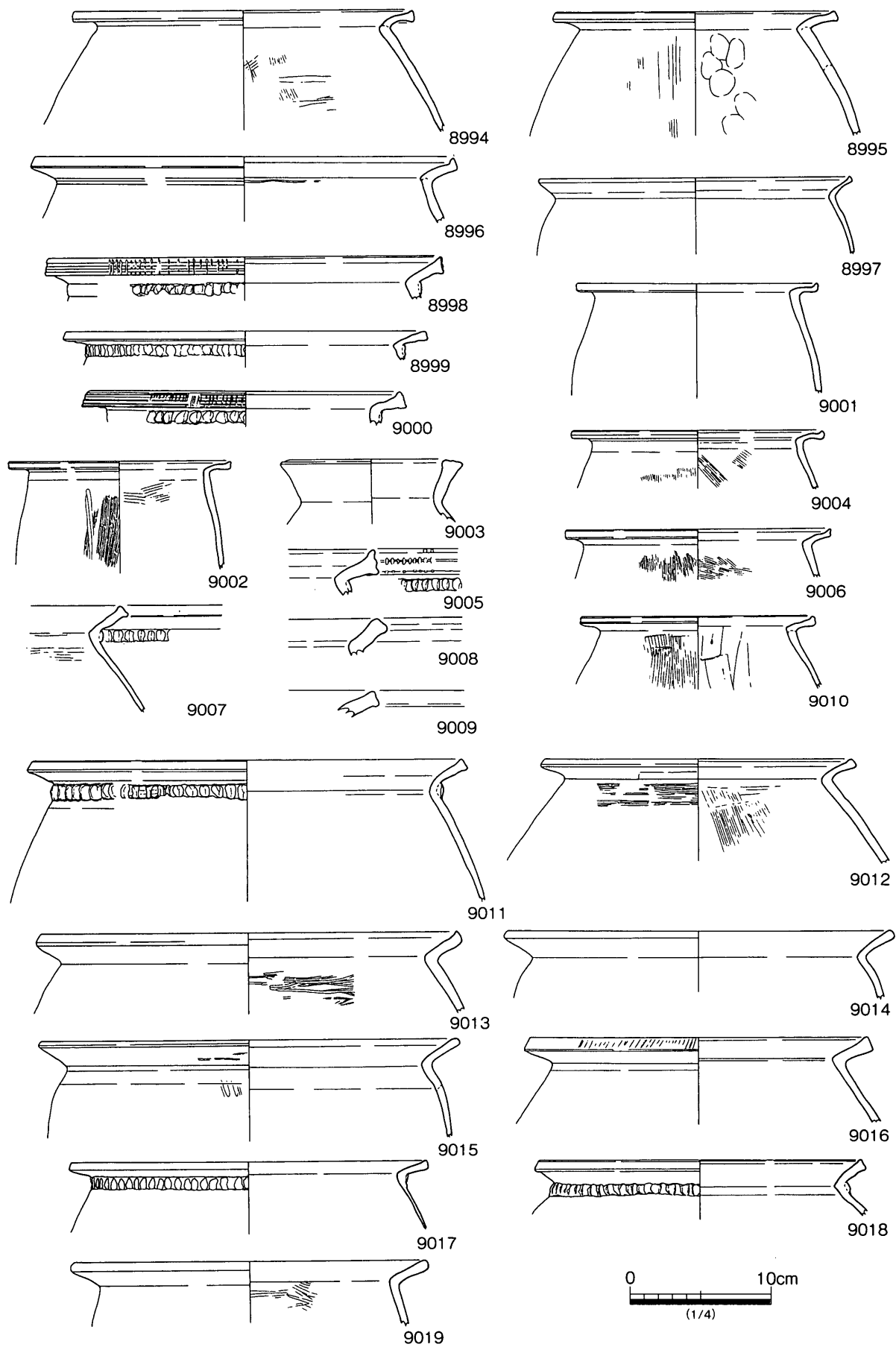
第 311 図 自然河川跡遺物実測図 47(8908 ~ 8943:SRx03)



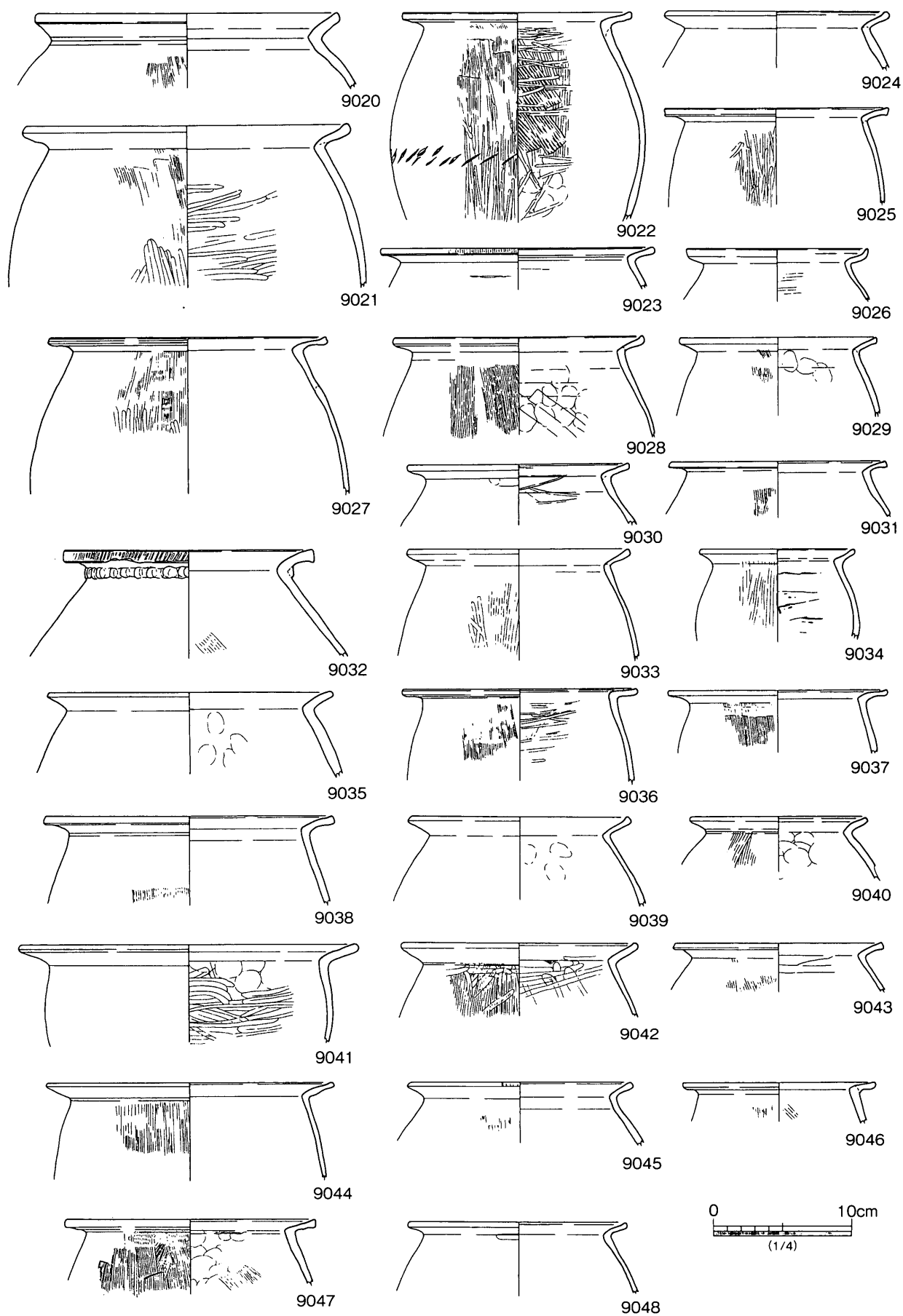
第 312 図 自然河川跡遺物実測図 48(8944 ~ 8969:SRx03)



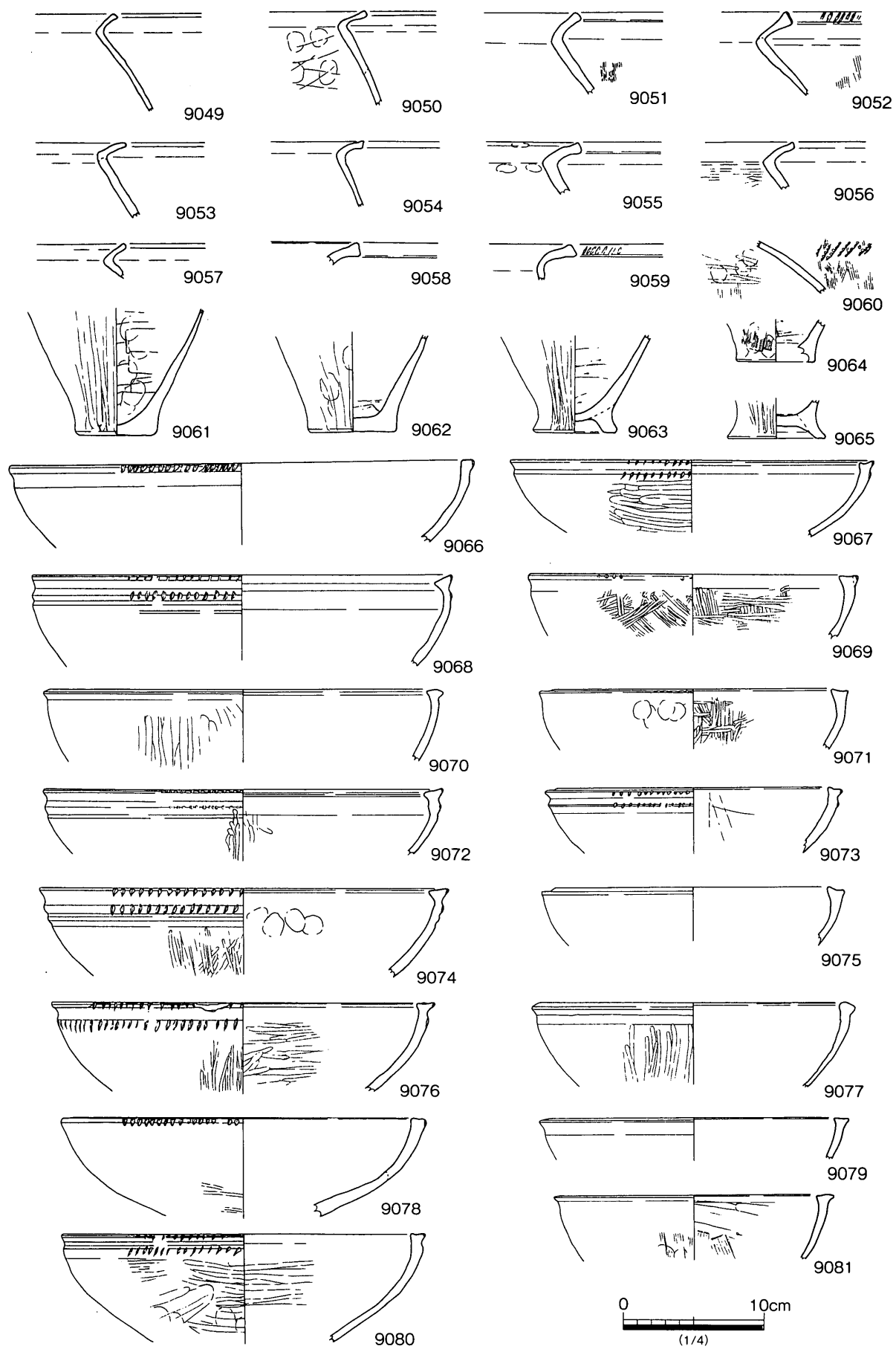
第 313 図 自然河川跡遺物実測図 49(8970 ~ 8993:SRx03)



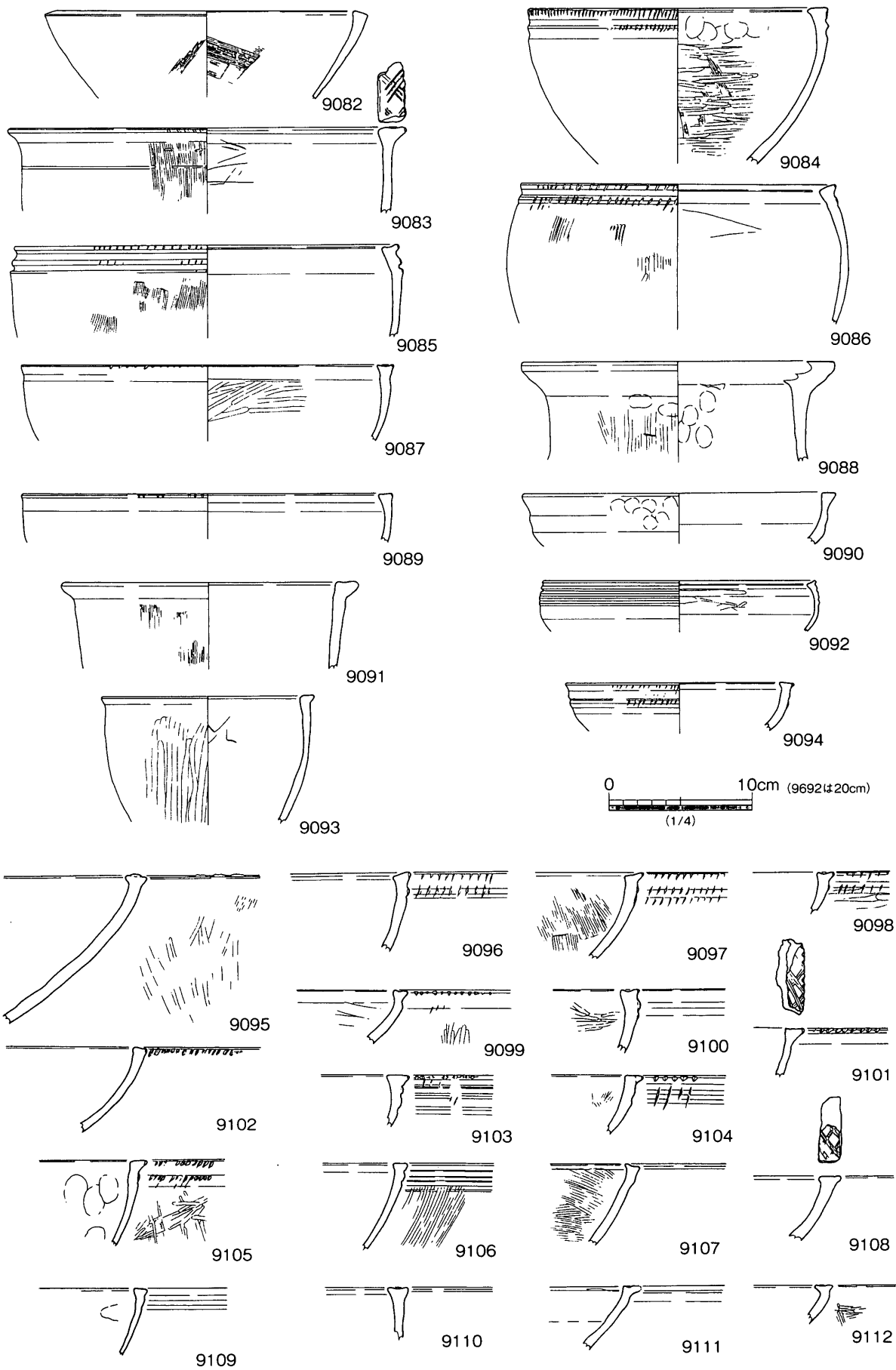
第 314 図 自然河川跡遺物実測図 50(8994 ~ 9019:SRx03)



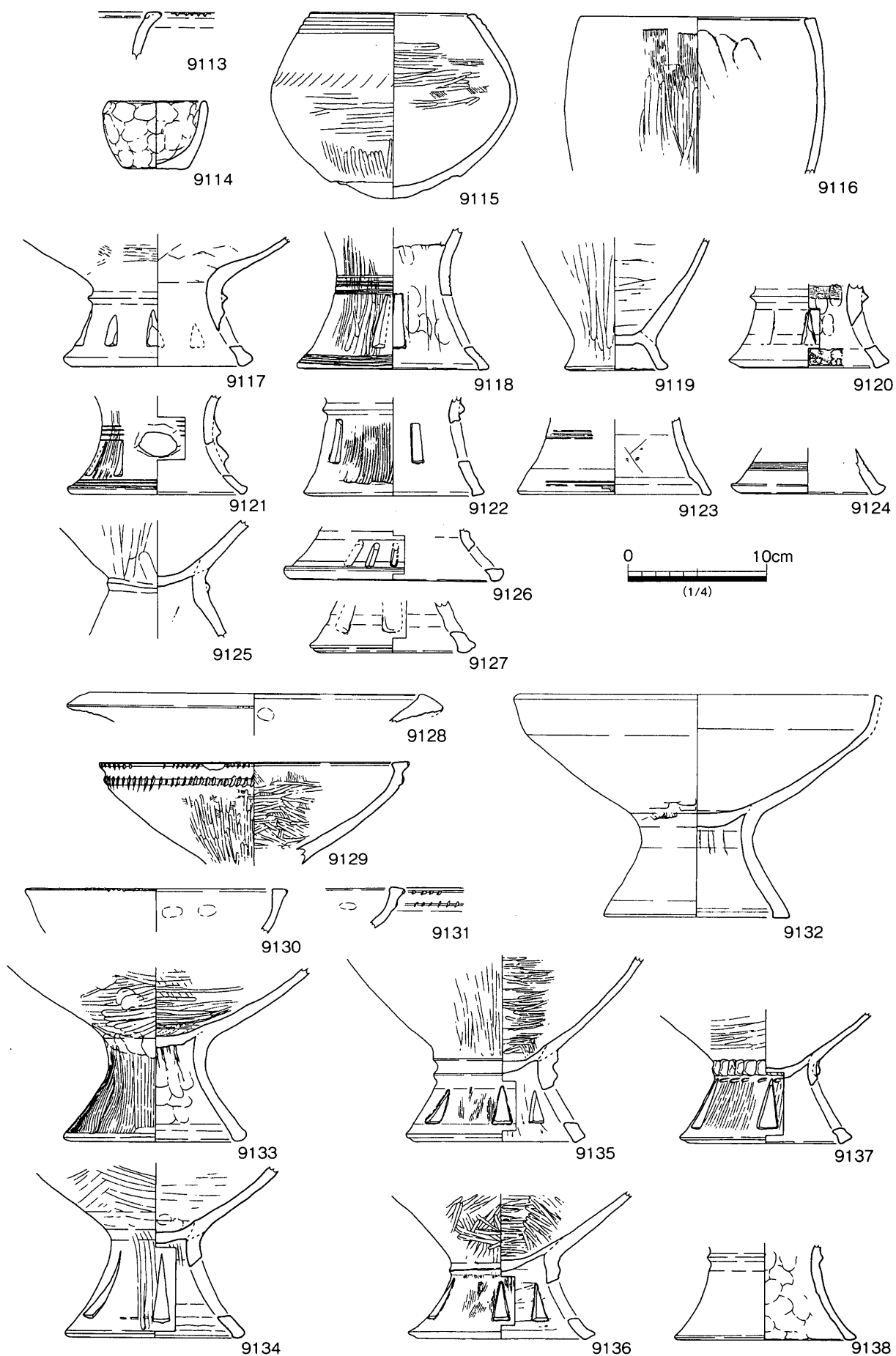
第 315 図 自然河川跡遺物実測図 51(9020 ~ 9048:SRx03)



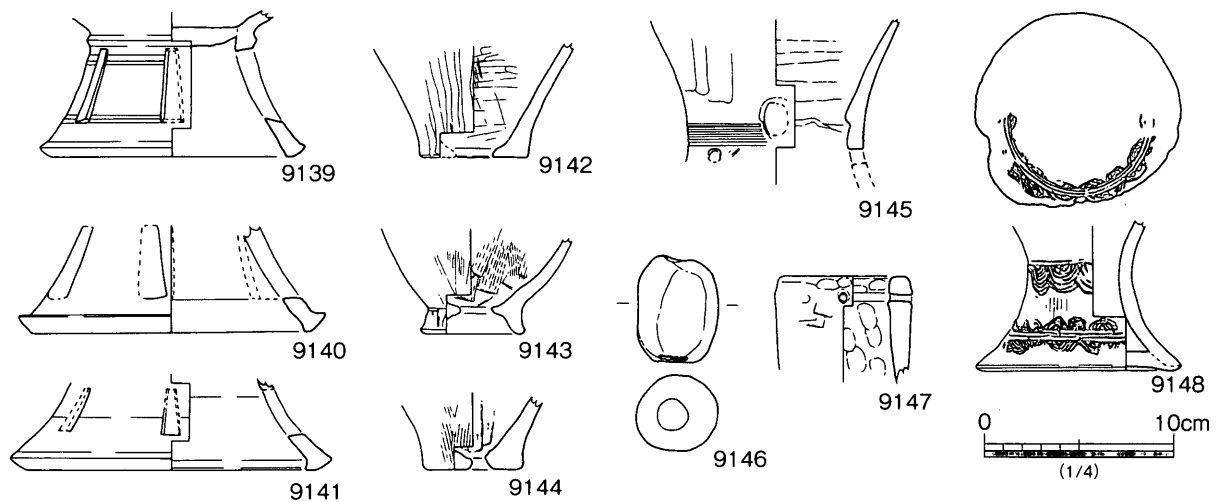
第 316 図 自然河川跡遺物実測図 52(9049 ~ 9681:SRx03)



第 317 図 自然河川跡遺物実測図 53(9682 ~ 9112 :SRx03)



第 318 図 自然河川跡遺物実測図 54(9113 ~ 9138 :SRx03)



第 319 図 自然河川跡遺物実測図 55(9139 ~ 9148:SRx03)

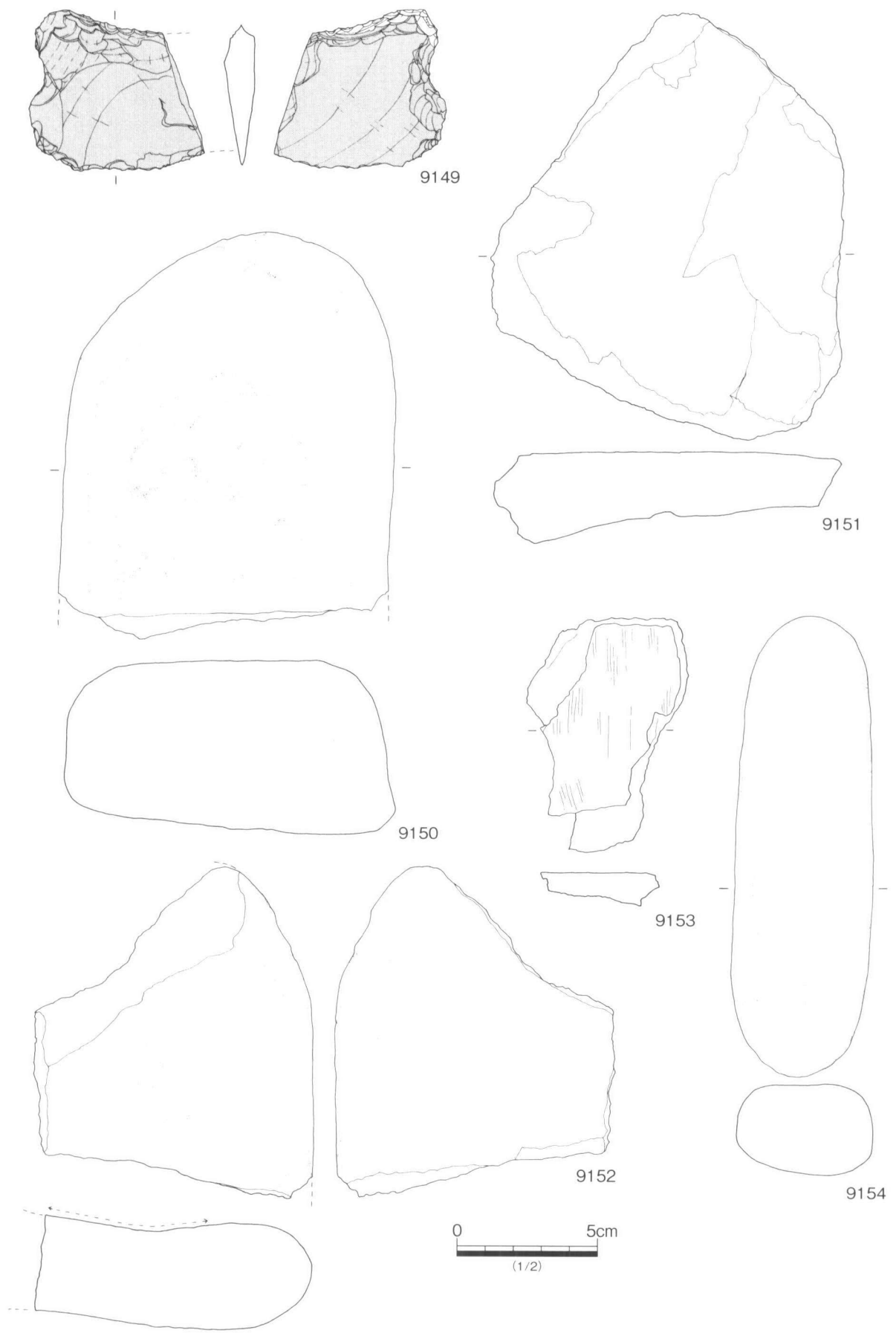
が想定されるが、使用痕は認められない。8424 は未製品の可能性がある。8427 は、広い 2 面のうちの片面だけに溝が成形された器形である。8428 の広い 1 面の中央部には、上下方向の敲打によって生じた使用痕が認められる。8445 の体部は、縦断面が算盤玉形の形態である。8474 の溝の幅は、短軸方向よりも長軸方向が広いことから、後者に主体となる紐が使用されたことがわかる。8475 の背部は、稜線の方に指を沿わせやすいように、半円形状に成形されている。8515 の頸部は、逆八字形に外反した、直線状の形態が想定される。8534 ~ 8539 は、台付鉢の把手である。8614 と 8615 は、非日常品と考えられる小型の粗製品である。8616 の刃部には、斜め方向の使用痕が認められる。8620 の刃部は、使用によって細かい刃毀れが生じている。8621 と 8622 には、人為的な加工痕が認められない。8641 の体部の縦断面は、算盤玉形の形態が想定される。8710 は、土器の一部を再加工して成形された資料である。8716 には、明確な使用痕が認められないが、長側縁部が刃部として使用されたことが推察される。8718 と 8719 には、人為的な加工痕が認められない。

③ SRx03

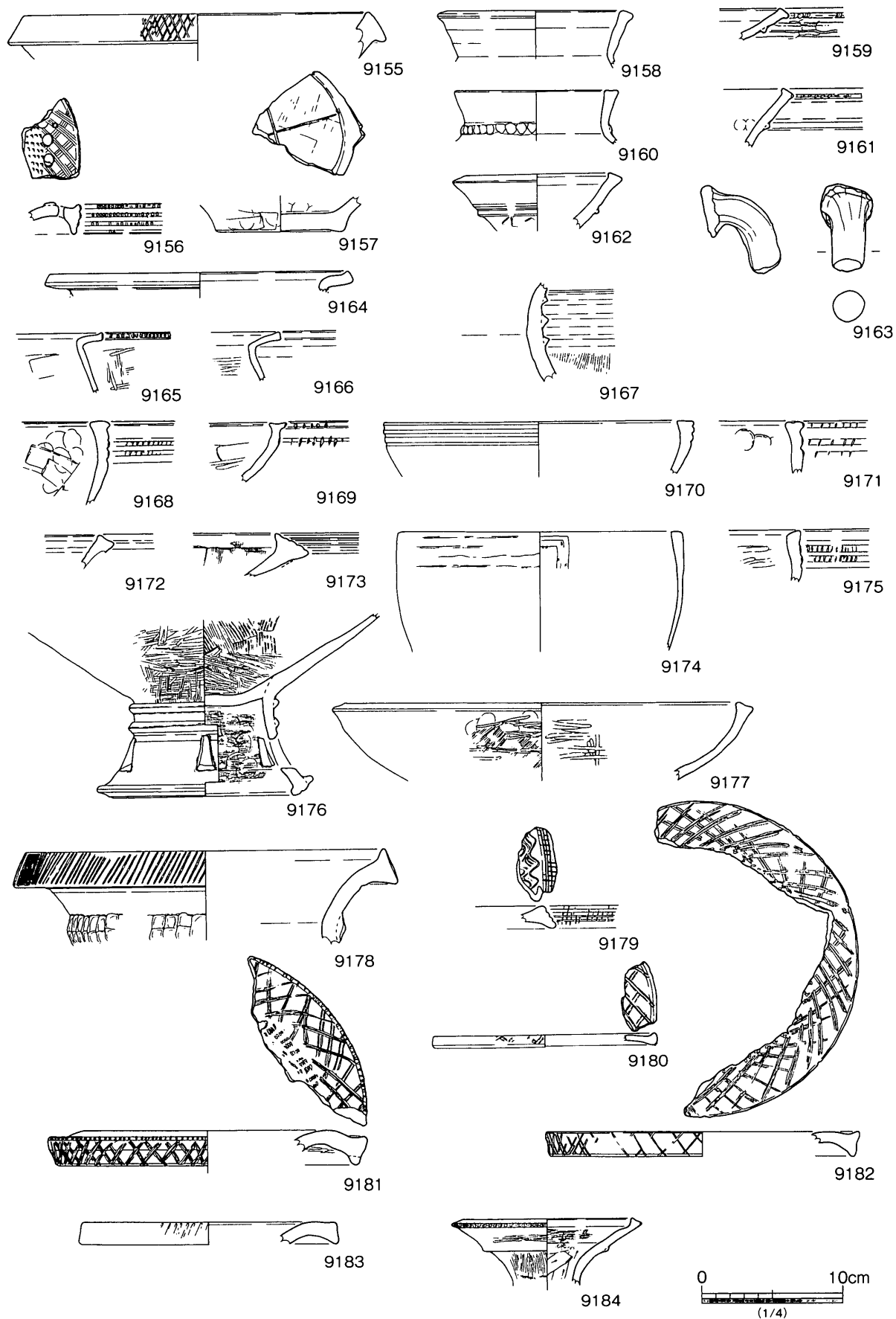
[遺構] X 区の南部に所在し、SRx02 と同様に、対象地内を東西方向に横切る方向性を示す。

やはり SRx02 と同様に、集落内部を貫流していたことが推測されるが、水田としての利用を示す資料は存在しない。

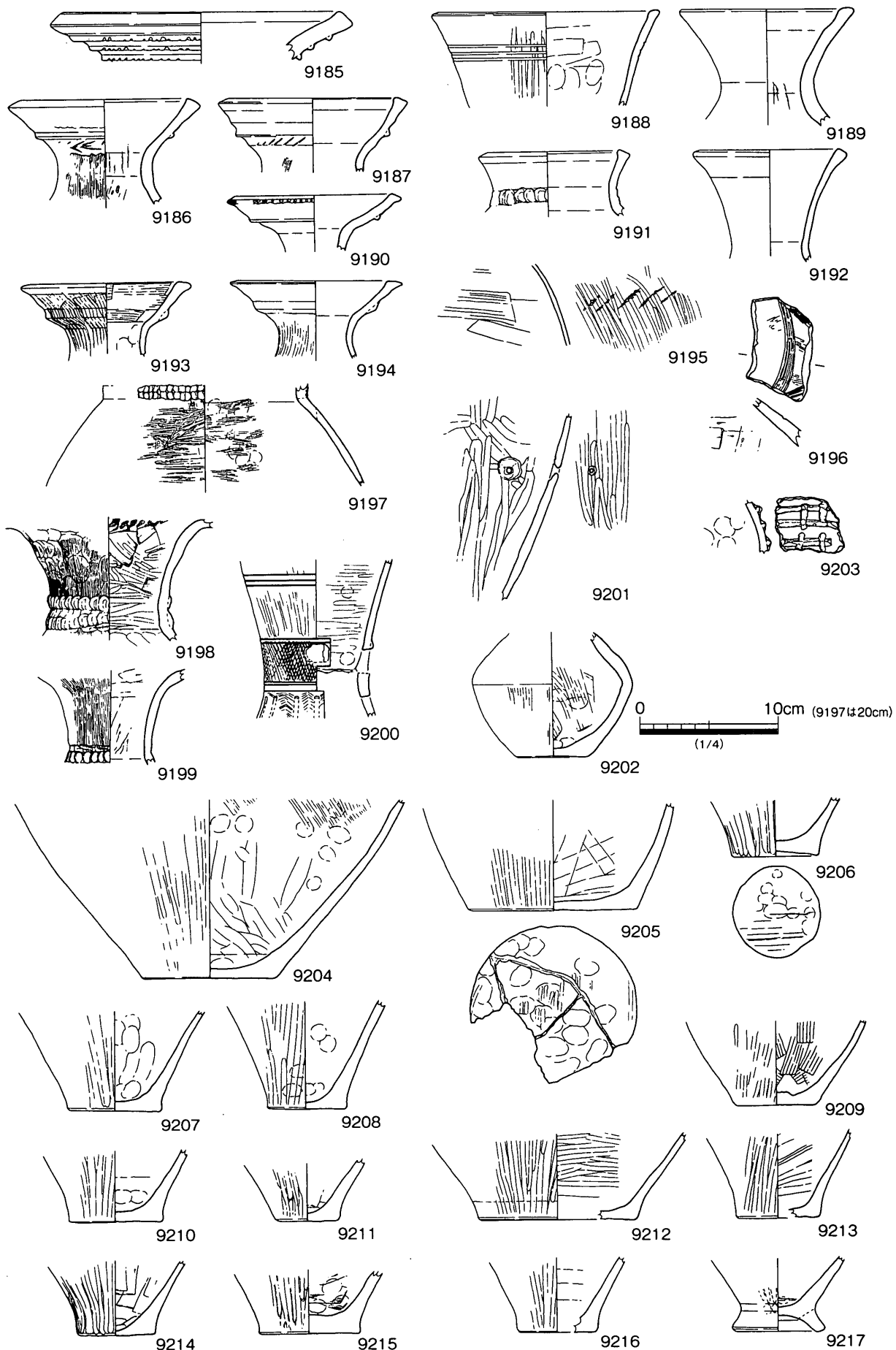
[遺物] 8766 の線刻文は、1 本線の半円形の周囲に、放射状の直線が描かれ、あたかも幼児が描く「太陽」のような造詣である。8769、8772、8773 は、体部が直線状の形態である。8784 は粗製の小型品である。8791、8799、8801、8804 の口縁部の刻目は、正確に等間隔に施されていることがわかる。8830 の原形は、台付きの器形が想定される。8874 と 8875 は、土器の一部が再加工されたものである。8941 ~ 8943 の原形は、算盤玉形の器形である。9273 は 1 個の粘土塊で成形された、掬い部が浅い形態である。



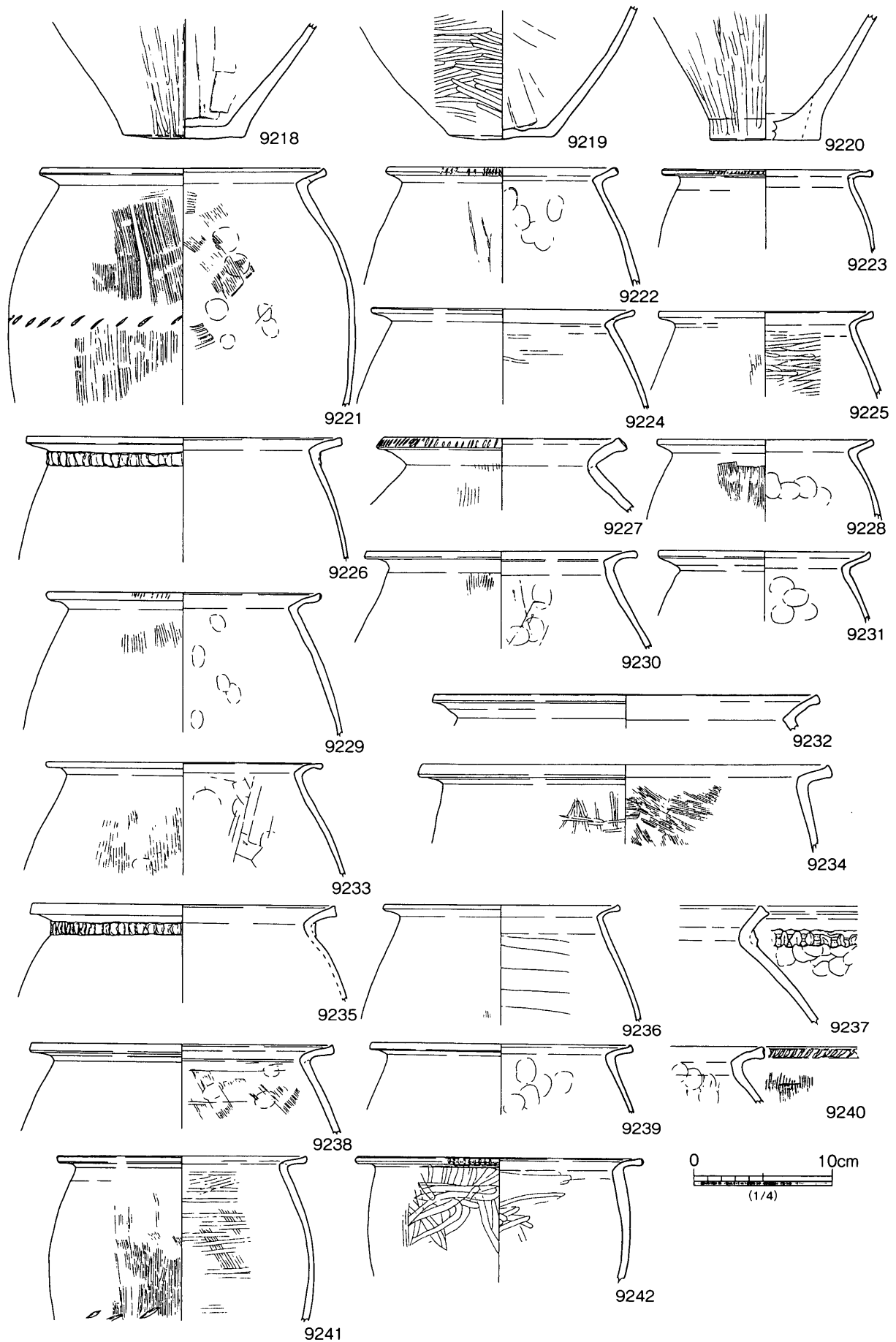
第 320 図 自然河川跡遺物実測図 56(9149 ~ 9154 :SRx03)



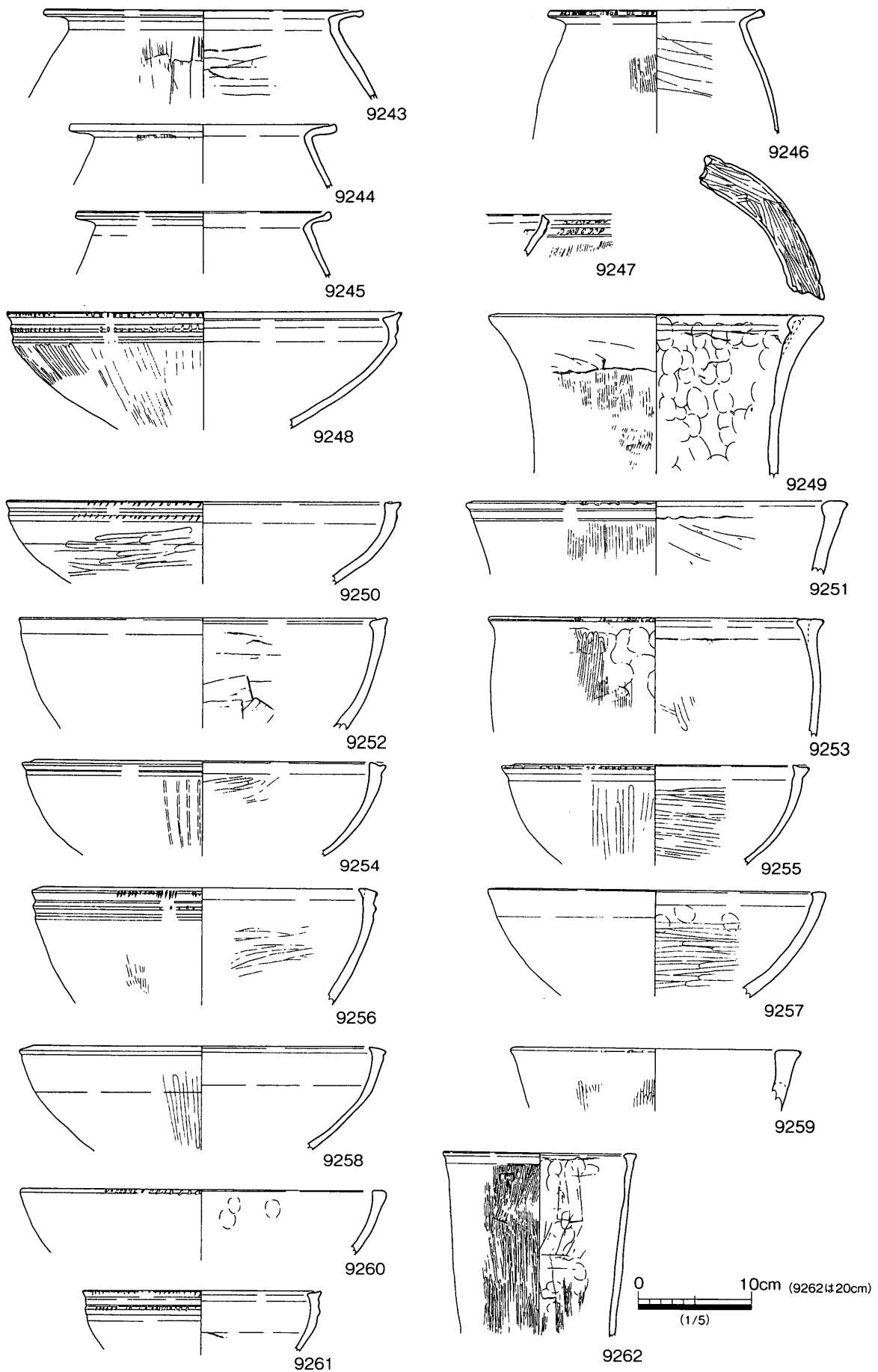
第 321 図 自然河川跡遺物実測図 57(9155 ~ 9184 :SRx03)



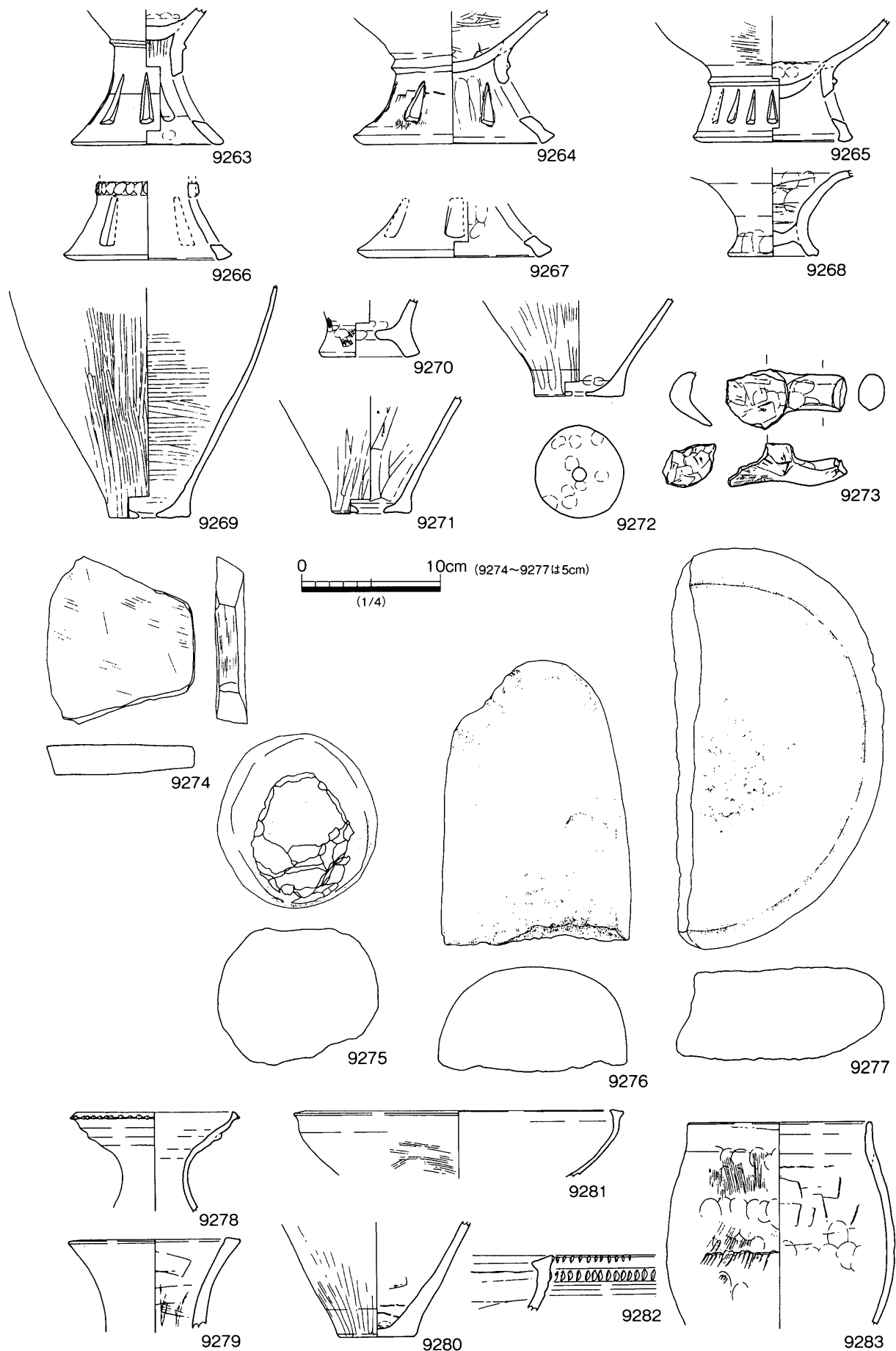
第 322 図 自然河川跡遺物実測図 58(9185 ~ 9217 :SRx03)



第 323 図 自然河川跡遺物実測図 59(9218 ~ 9242 :SRx03)



第 324 図 自然河川跡遺物実測図 60(9243 ~ 9262 :SRx03)



第 325 図 自然河川跡遺物実測図 61(9263 ~ 9283 :SRx03)

2 古墳時代以降の遺構

(1) 溝状遺構

① SDx03

[遺構] X区の南東隅部に所在する。

遺構の幅と深さは全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。

② SDx07

[遺構] X区の北部に所在する。

遺構の外郭線が歪曲した状態を示すが、中心軸は直線的で、横断面の形態はV字形を示す。遺構の幅と深さは全体にわたって概ね一定である。

③ SDx08

[遺構] X区の中央部から南寄りの位置に所在する。

遺構の幅と深さは全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。

流路跡の全体にわたって、底面の中心部が周囲よりも深く開削されているために、横断面は逆凸字形を示す。

[遺物] 9330は、庇部の高い位置に相当する箇所である。9337は口縁部が長い器形で、同端部が外反気味の形態を示すが、9338は口縁部が短い器形で、同端部は直線状に丸く成形されている。

④ SDx09

[遺構] X区の中央部から東寄りの位置に所在する。

遺構の南端部が細く収束するために、大型の土坑状を示す。

⑤ SDx10

[遺構] X区の中央部に所在し、SDx08と平行した位置関係を示す。

遺構の幅と深さは全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。この規模と方向性はSDx08に共通する。

⑥ SDx11

[遺構] X区の中央部に所在し、SDx08及びSDx10と平行した位置関係を示す。

遺構は東部ほど浅く、外郭線が著しく歪曲した平面形態を示すことから、廃絶直前まで維持管理されていた状況は認められない。

SDx08とSDx10の保存状態が良好なことから、これらの開削前に機能していた流路跡の可能性が高い。

[遺物] 9370と9371のつまみ部は、上部が平坦面化した形態である。

⑦ SDx12

[遺構] X区の南部に所在する。

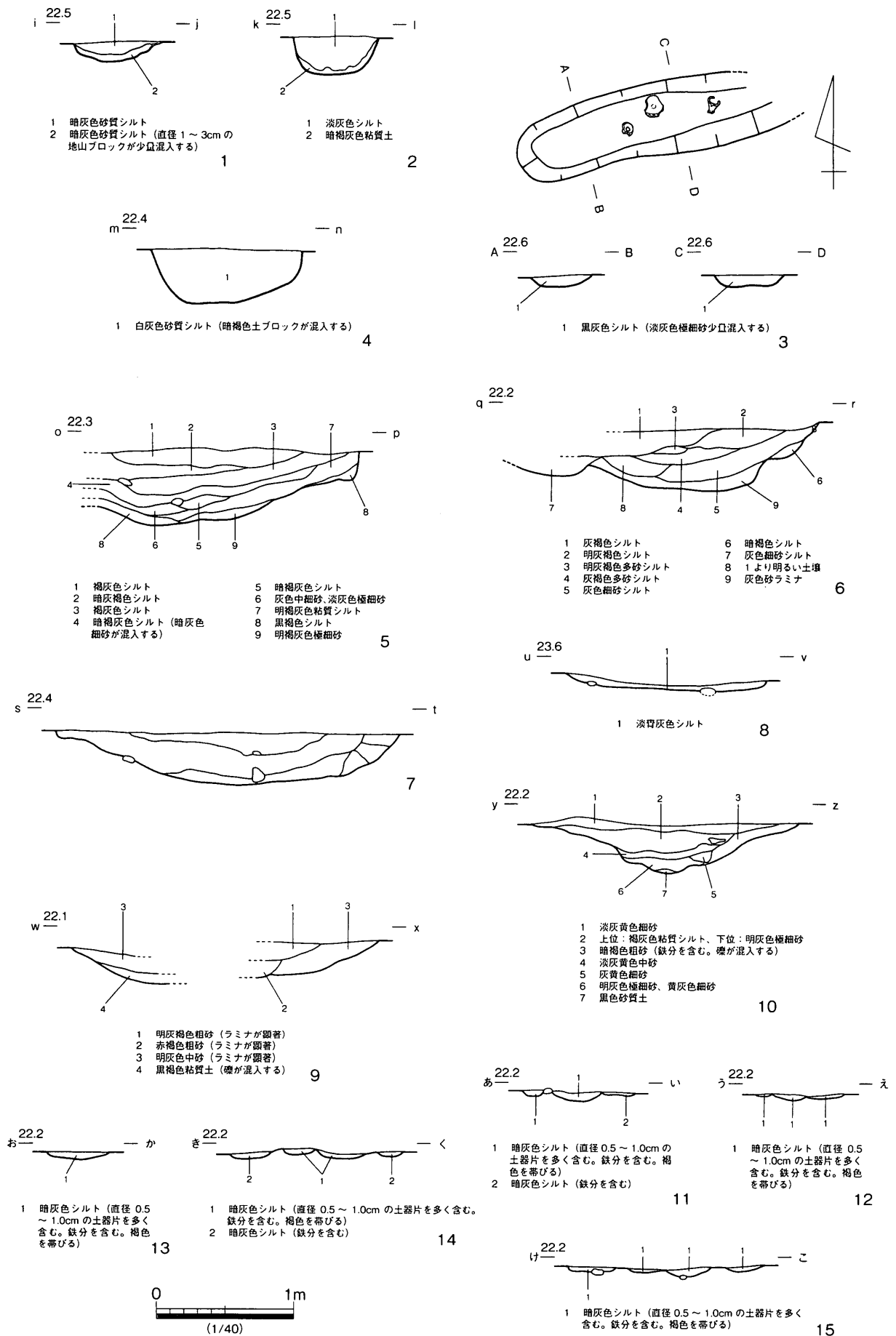
中心軸は南西から北東方向へ、概ね直線的な状態を示すが、東壁面に接する位置において、東方向へ緩く湾曲する。遺構の幅と深さは全体にわたって一定である。

⑧ SDx14

[遺構] X区の南部に所在し、SDx12と平行した位置関係を示す。

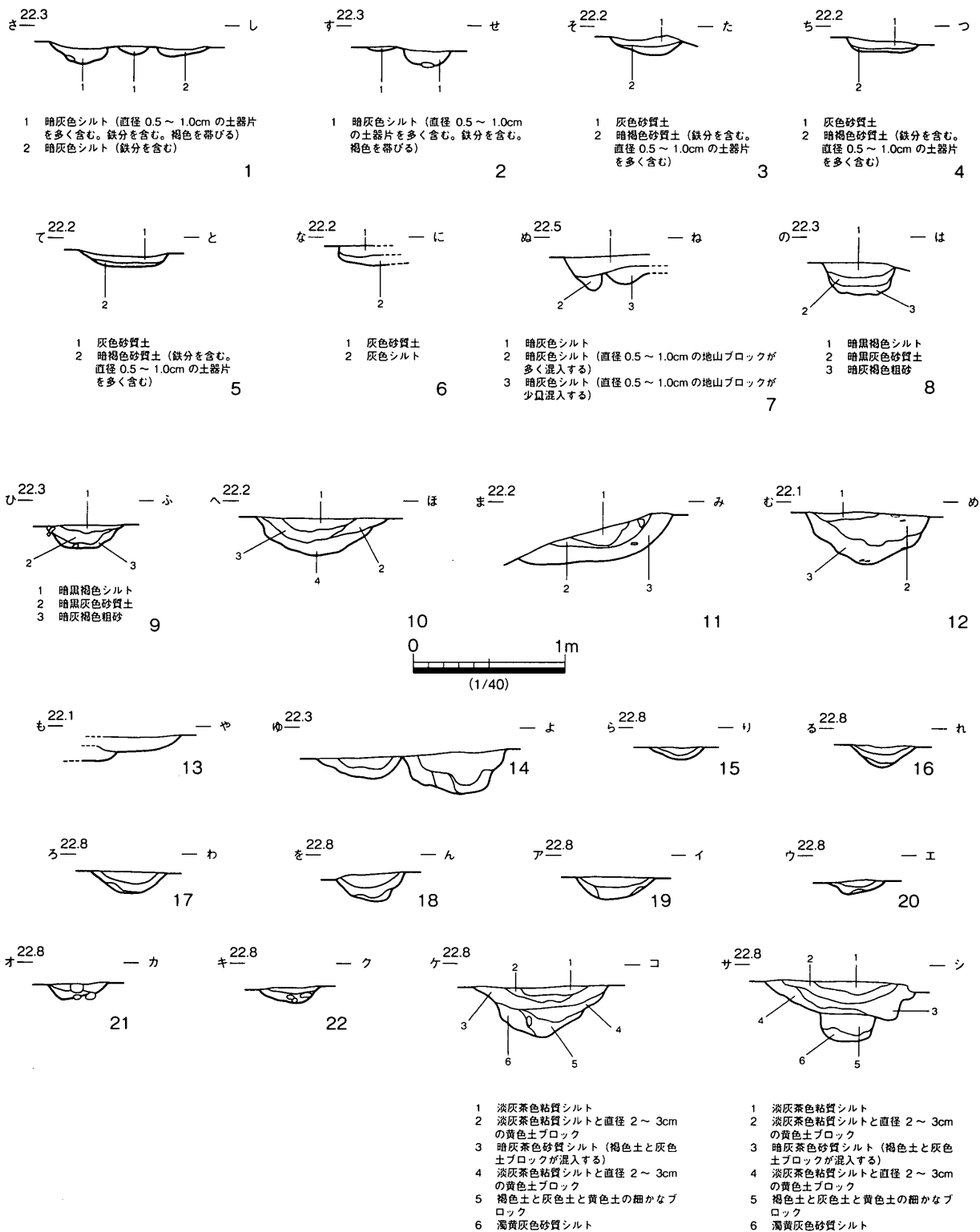
遺構の幅と深さは、全体にわたって一定であり、中心軸は直線的である。

SDx14の底面には、不定形な凹地が不均等な間隔で、連なっていることがわかる。これらは同流路



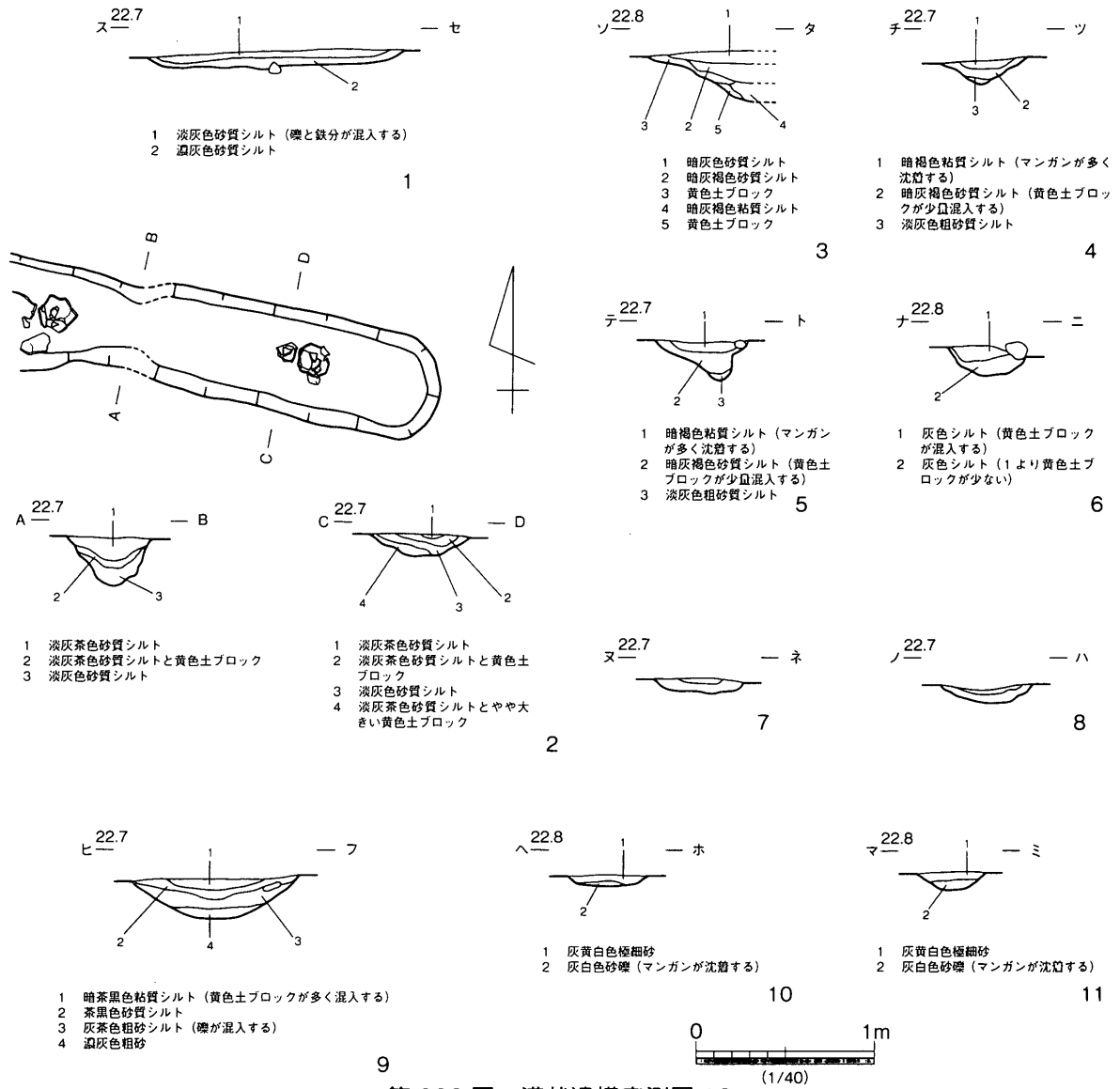
第 326 図 溝状遺構遺構実測図 14

(1:SDx03,2:SDx04,3:SDx05,4:SDx06,5・6:SDx07,7:SDx08,8:SDx09,9・10:SDx10,11・12・13・14・15:SDx14)



第 327 図 溝状遺構遺構実測図 15

(1・2・3・4・5・6:SDx14,7:SDx16,8・9:SDx17,10・11・12・13・14:SDx18,15・16・17・18・19・20:SDy05,21・22:SDy06,23・24:SDy07)



第 328 図 溝状遺構実測図 16

(1:SDy08,2:SDy10,3:SDy11,4・5:SDy12,6:SDy13,7・8:SDy14,9:SDy15,10・11:SDy16)

の開削の際に、先行して列状に掘削された遺構群と考えられる。

[遺物]9430の茎部は、基部が尖った形態で、横断面が菱形の形態を示す。

⑨ SDx15

[遺構] X区の中央部に所在する。

遺構の大部分は、SDx08と平行した位置関係を示し、遺構の幅と深さは、全体にわたって一定で、中心軸は直線的である。

⑩ SDx17

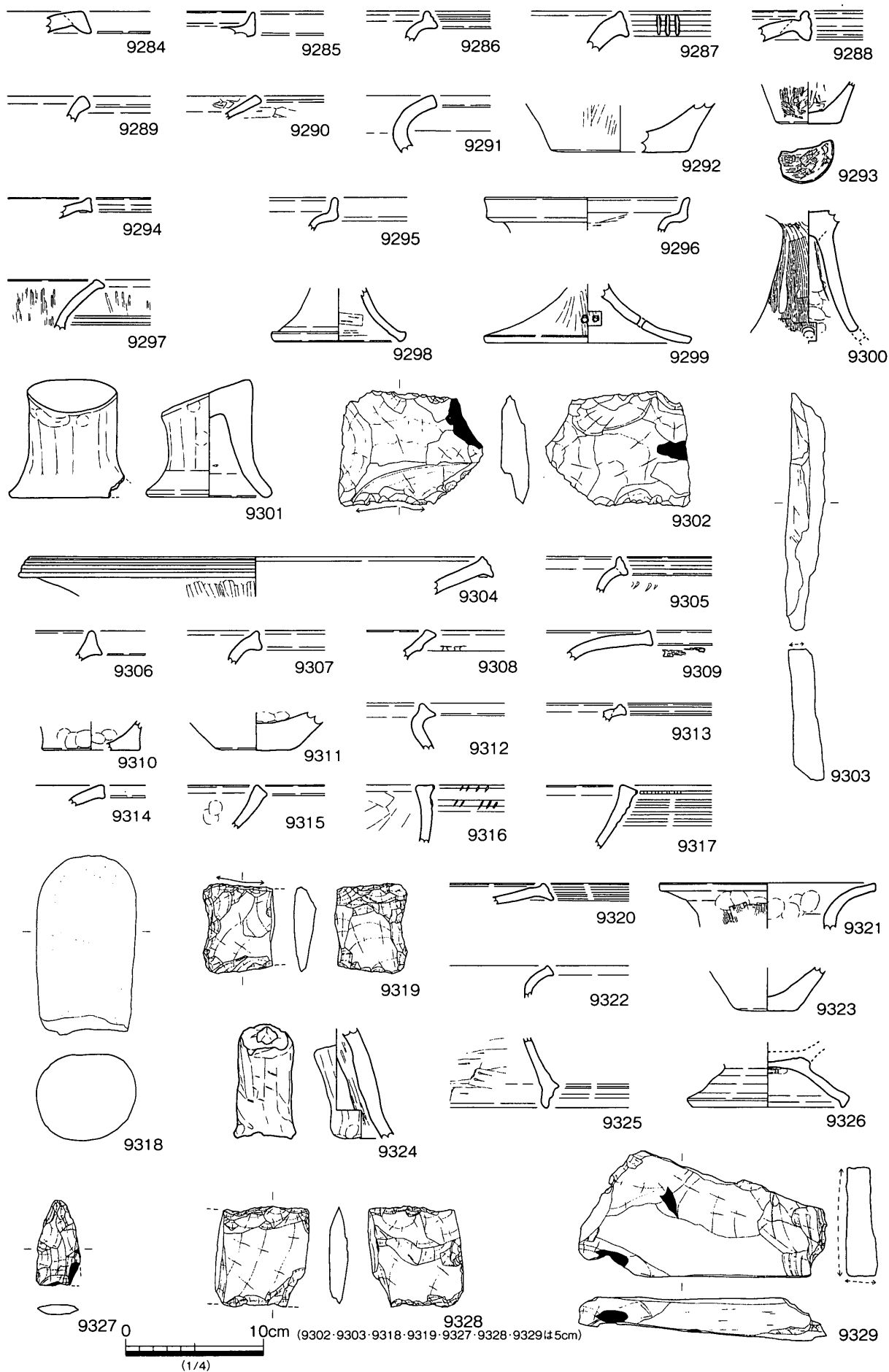
[遺構] X区の北部に所在する。

遺構の幅と深さは、全体にわたって一定で、中心軸は直線的である。

⑪ SDx18

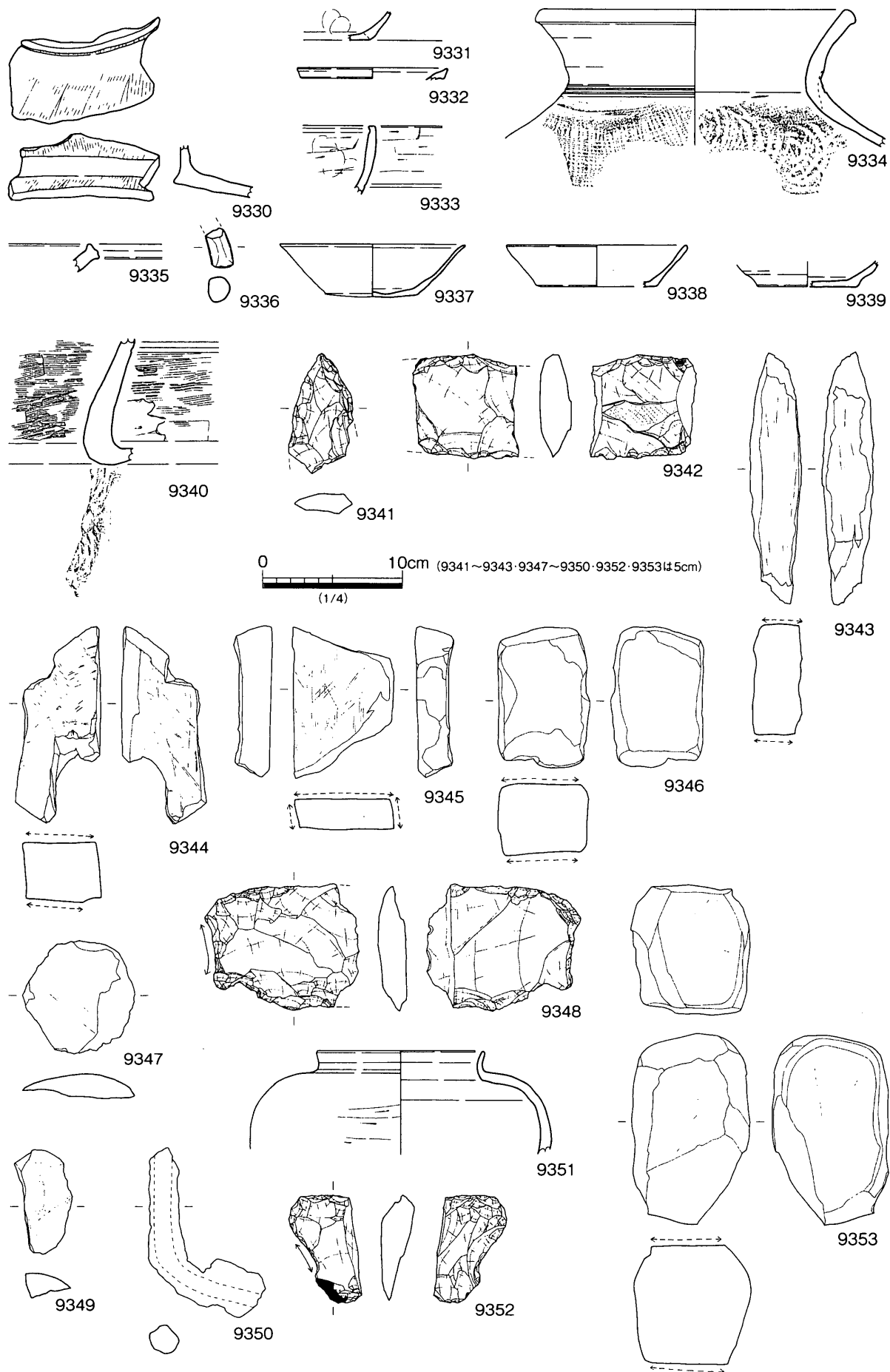
[遺構] X区の南部に所在する。

遺構の方向性は、対象地の南壁付近から北方へ約 11 mの範囲については、南南西から北北東へ向か

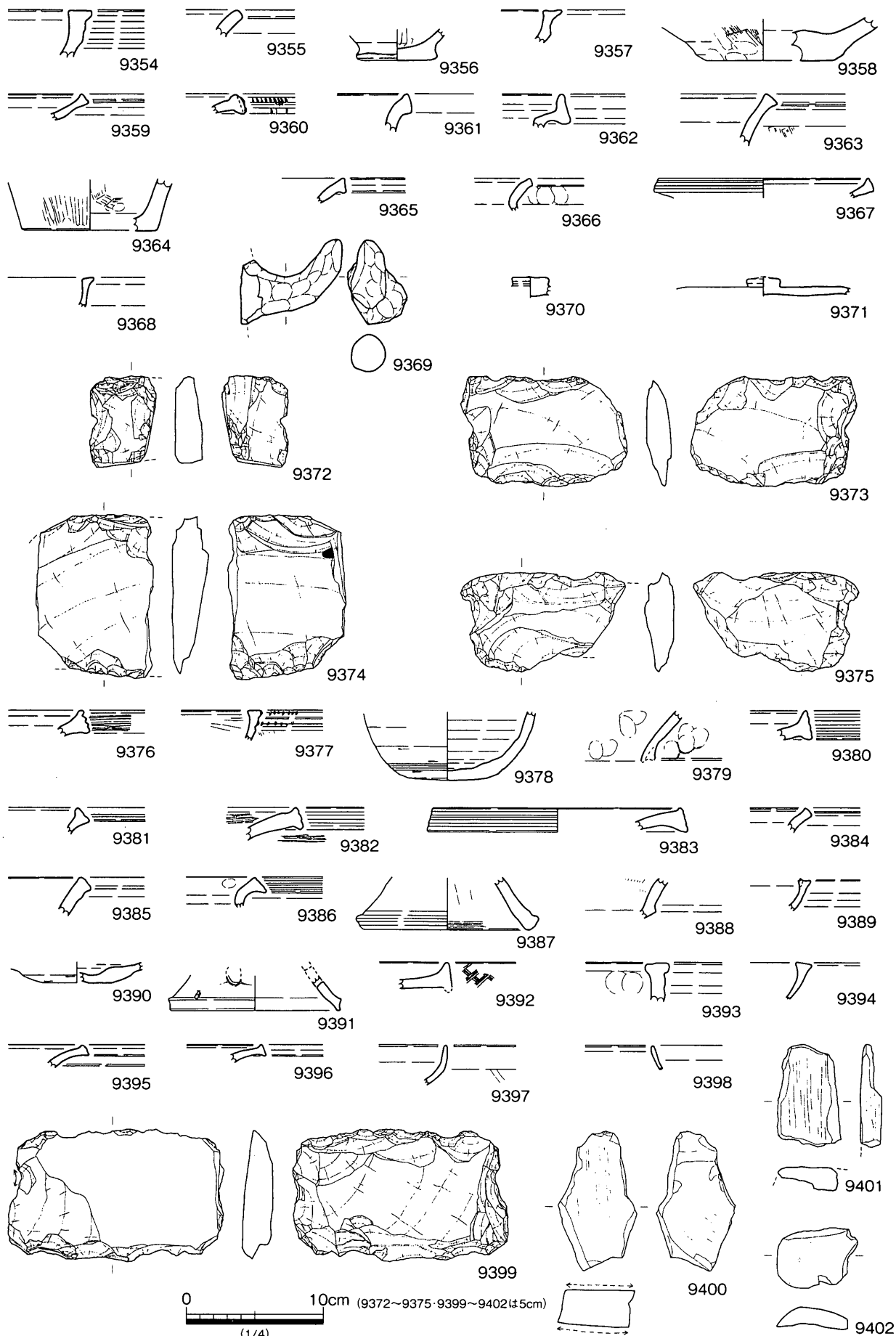


第 329 図 溝状遺構遺物実測図 131

(9284 ~ 9298:SDx03,9299 ~ 9303:SDx05,9304 ~ 9319:SDx06,9320 ~ 9329:SDx07)

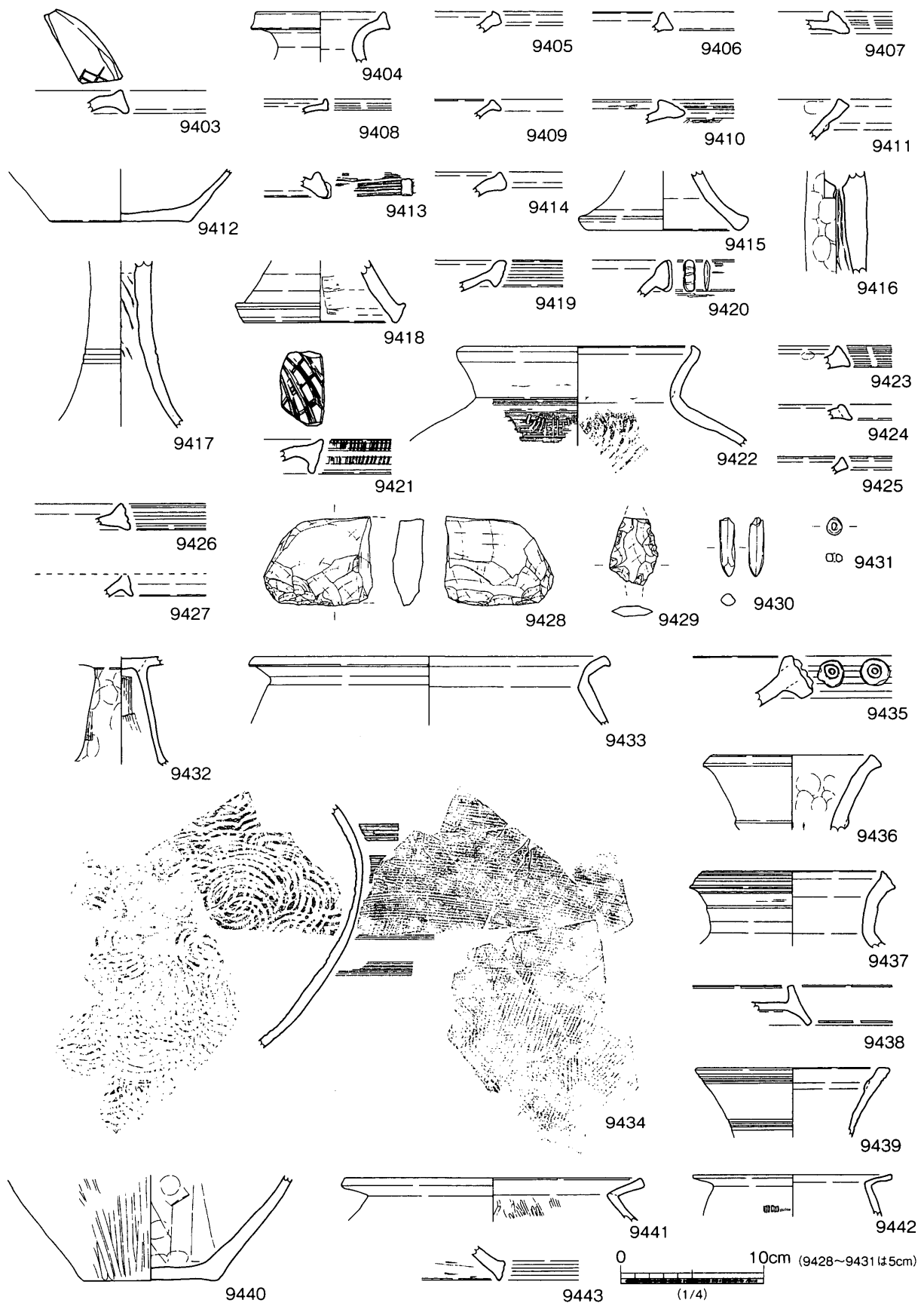


第 330 図 溝状遺構遺物実測図 132(9330 ~ 9350:SDx08,9351 ~ 9353:SDx09)



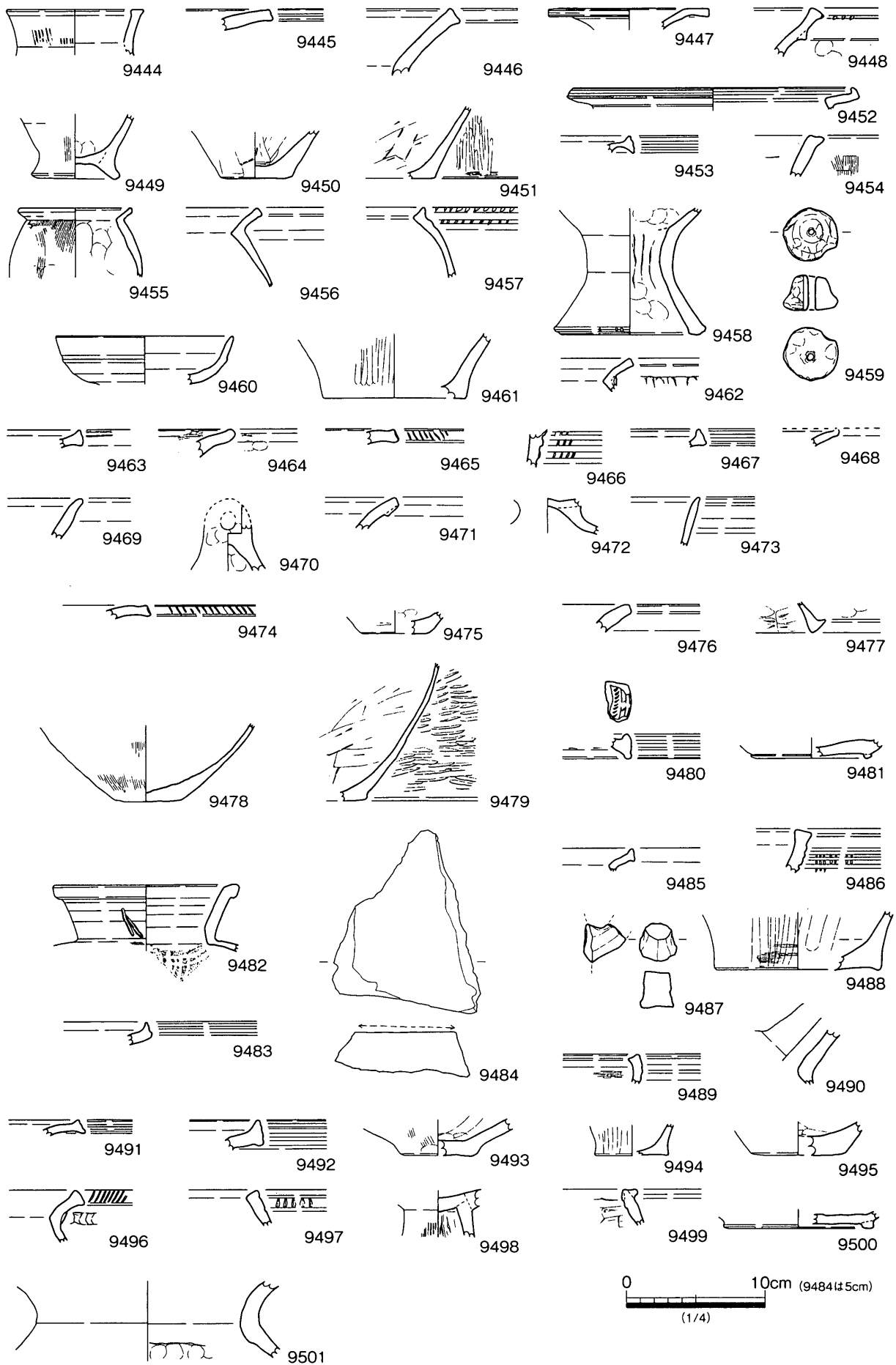
第 331 図 溝状遺構遺物実測図 133

(9354 ~ 9358:SDx10,9359 ~ 9375:SDx11,9376 ~ 9378:SDx12,9379 ~ 9402:SDx13)

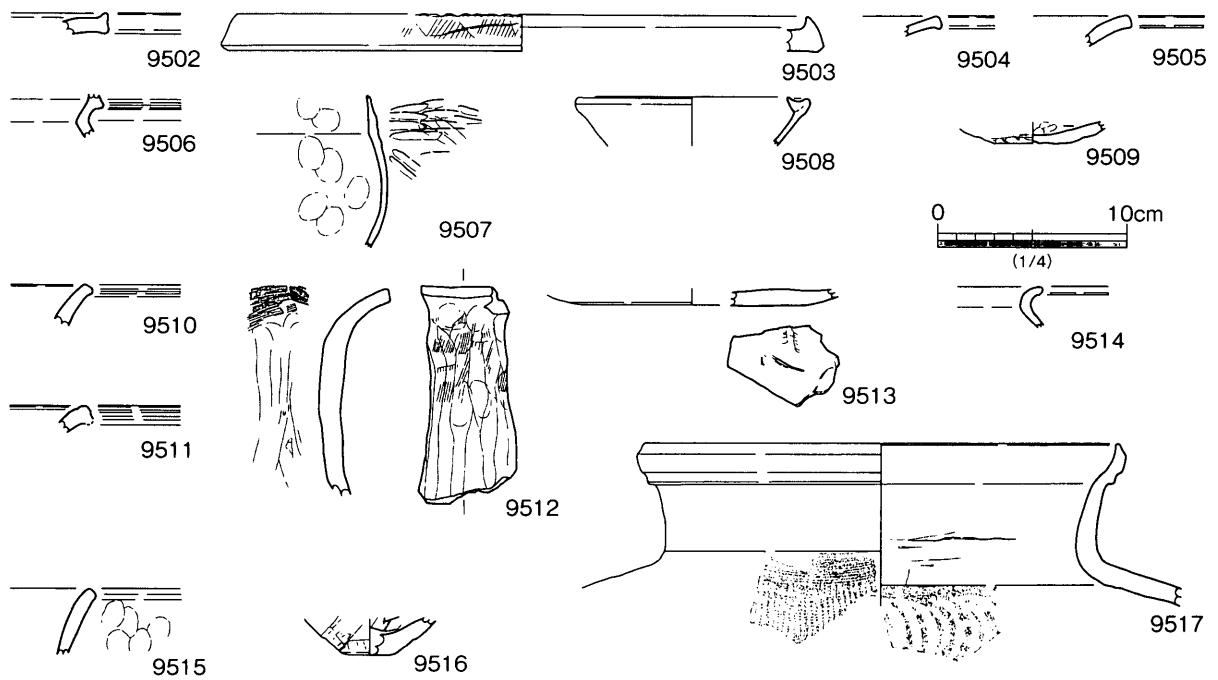


第 332 図 溝状遺構遺物実測図 134

(9403 ~ 9431:SDx14,9432:SDx15,9433-9434:SDx16,9435:SDx17,9436 ~ 9443:SDx18)

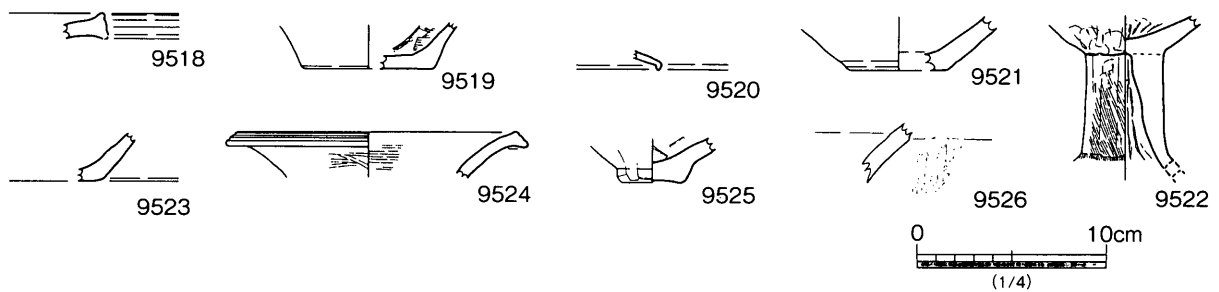


第 333 図 溝状遺構遺物実測図 135(9443 ~ 9462:SDx18,9463 ~ 9473:SDy05,9474 ~ 9477:SDy07,9478 ~ 9481:SDy08,9482 ~ 9484:SDy09,9485 ~ 9490:SDy10,9491 ~ 9501:SDy11)



第 334 図 溝状遺構遺物実測図 136

(9502 ~ 9509:SDy12, 9510 ~ 9513:SDy14, 9514 ~ 9517:SDy15)



第 335 図 柱穴跡遺物実測図 8

(9518・9519:SPy78, 9520:SPy76, 9521・9522:SPy81, 9523:SPy82, 9524・9525:SPy83, 9526:SPy91)

う状態を示し、その後の延伸部分は、約 120°の角度で屈曲して東方向へ向かう状態に変化している。

この急激な変化については、流路跡の中心軸が遺構全体にわたって、直線的であることから、恒常的に通水することを目的とする場合には不相当と判断されるため、土地区画を明確にした結果としての現象と捉えられる。

[遺物]9459の縦断面は、高い台形を示す。9460は、外面の稜線が明瞭な器形である。

⑫ SDy05

[遺構] Y区の南部に所在する。

遺構の幅と深さは、全体にわたって一定で、中心軸は直線的である。

[遺物]9470の原形は、釣鐘形の器形である。

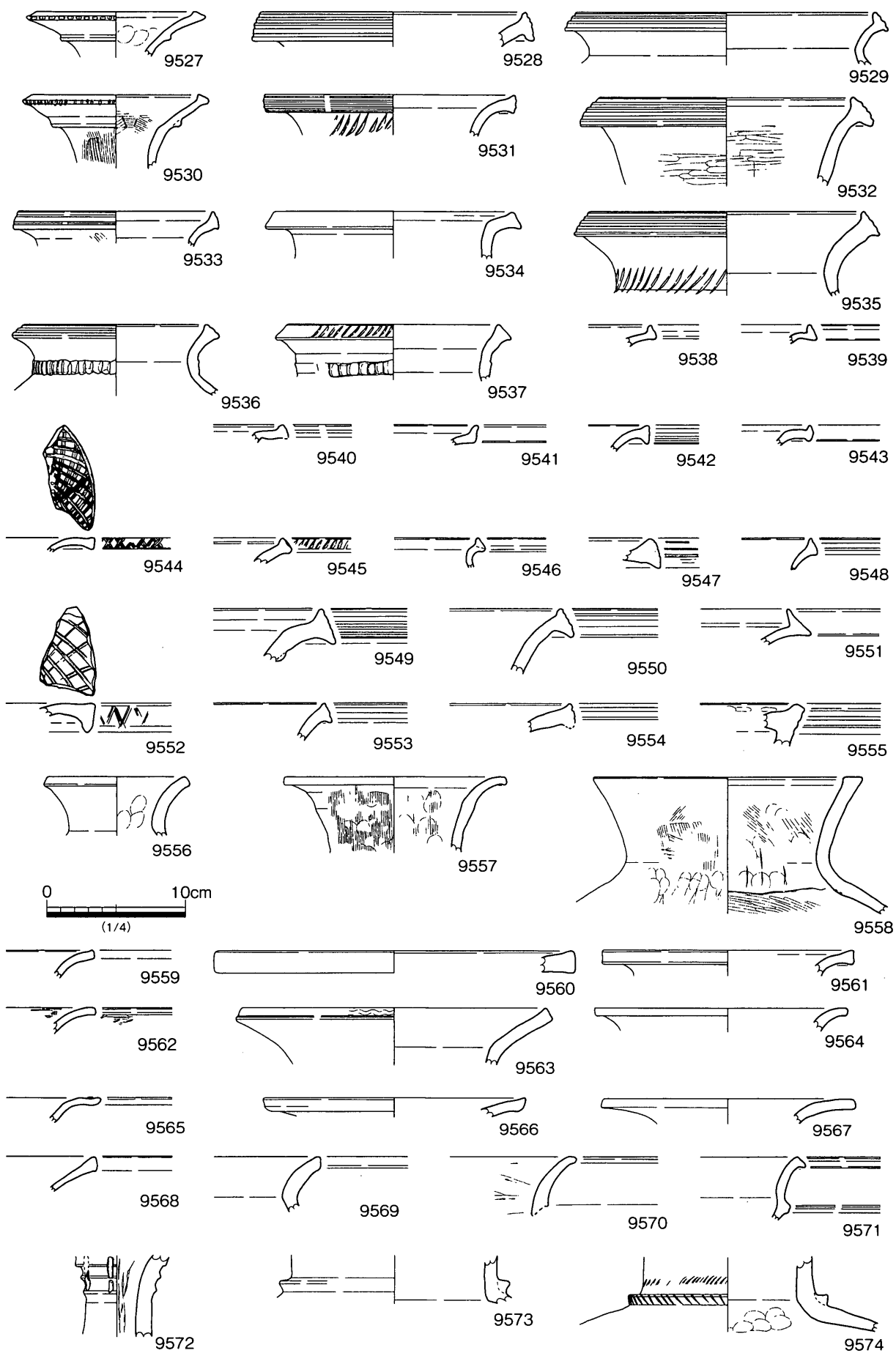
⑬ SDy08

[遺構] Y区の北部に所在する。

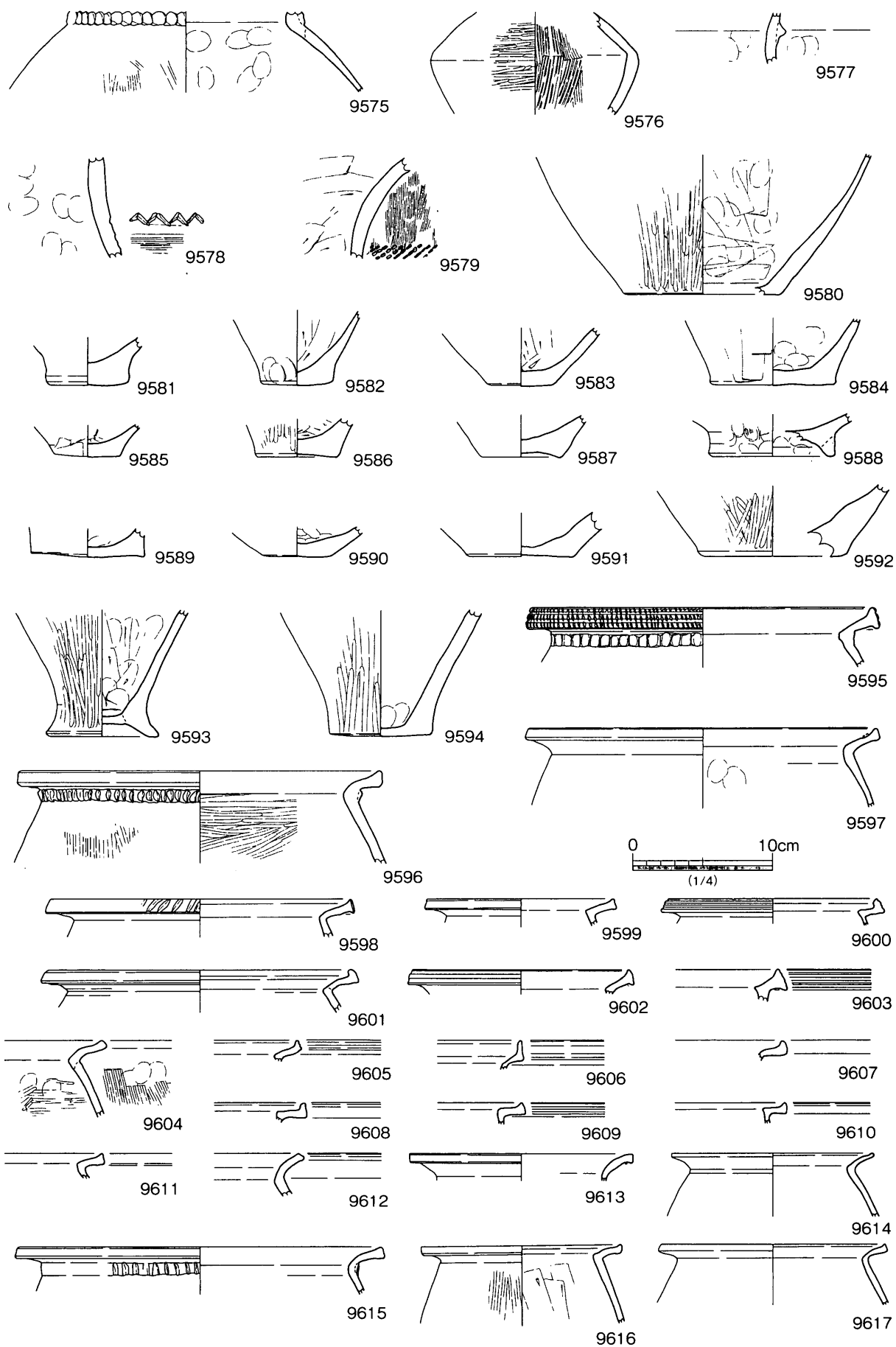
遺構の幅に比べて、深さが浅いことから、自然遺構の可能性が高い。

⑭ SDy09, SDy12, SDy13

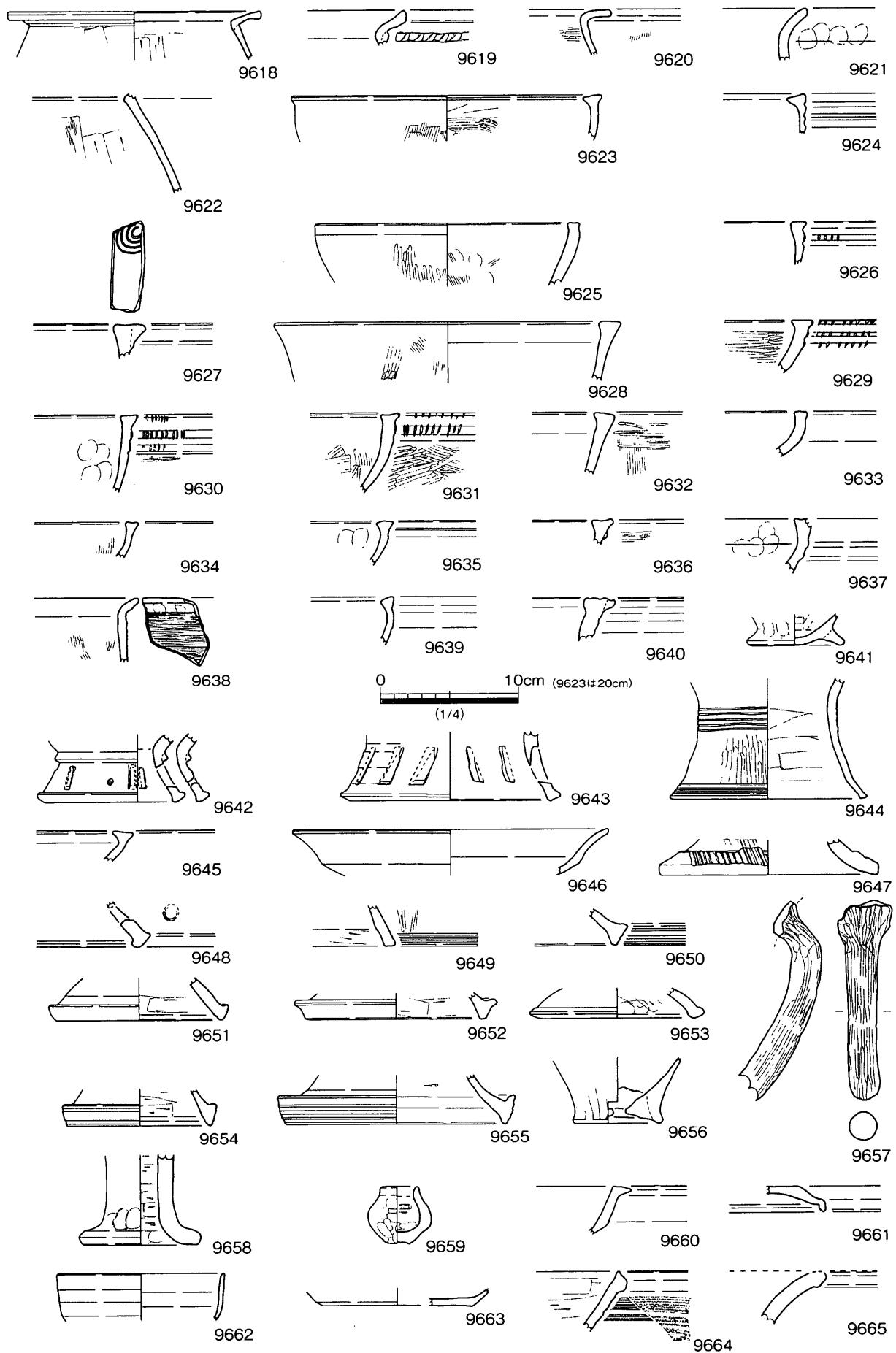
[遺構] Y区の中央部に所在する。各遺構について、個別の名称を与えたが、原形は同一の流路跡と判断される。



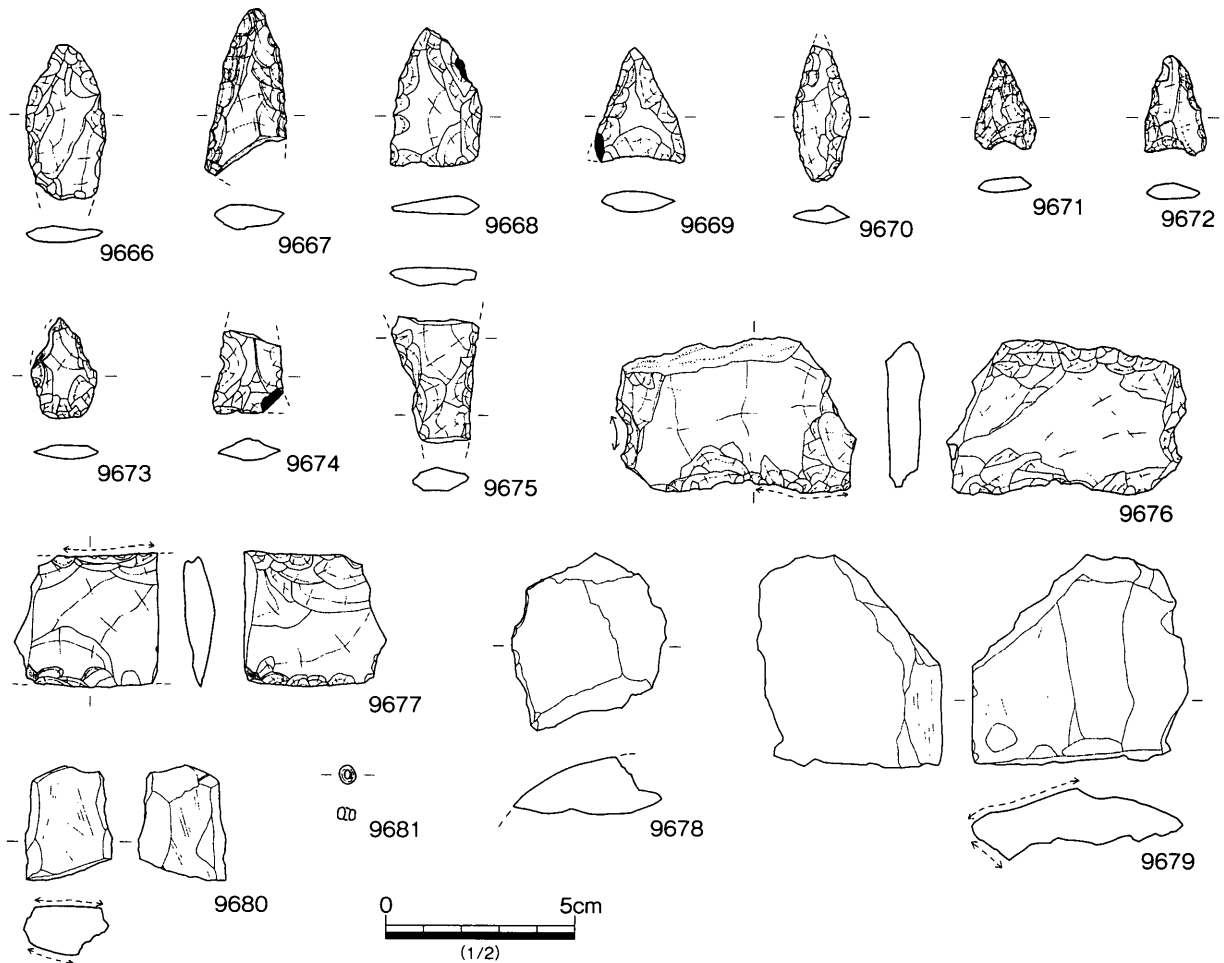
第 336 图 遺物包含層遺物実測図 40



第 337 图 遺物包含層遺物実測図 41



第 338 図 遺物包含層遺物実測図 42



第 339 図 遺物包含層遺物実測図 43

遺構の幅と深さは、全体にわたって一定で、中心軸は直線的であるが、方向性が対象地内の他の規格的な流路跡と全く異なることから、当該地域に認められる方形区画を無視して開削されたことがわかる。したがって、局所的な利水を目的とした遺構と判断される。

⑮ SDy15

[遺構] Y区の北西隅部に所在する。

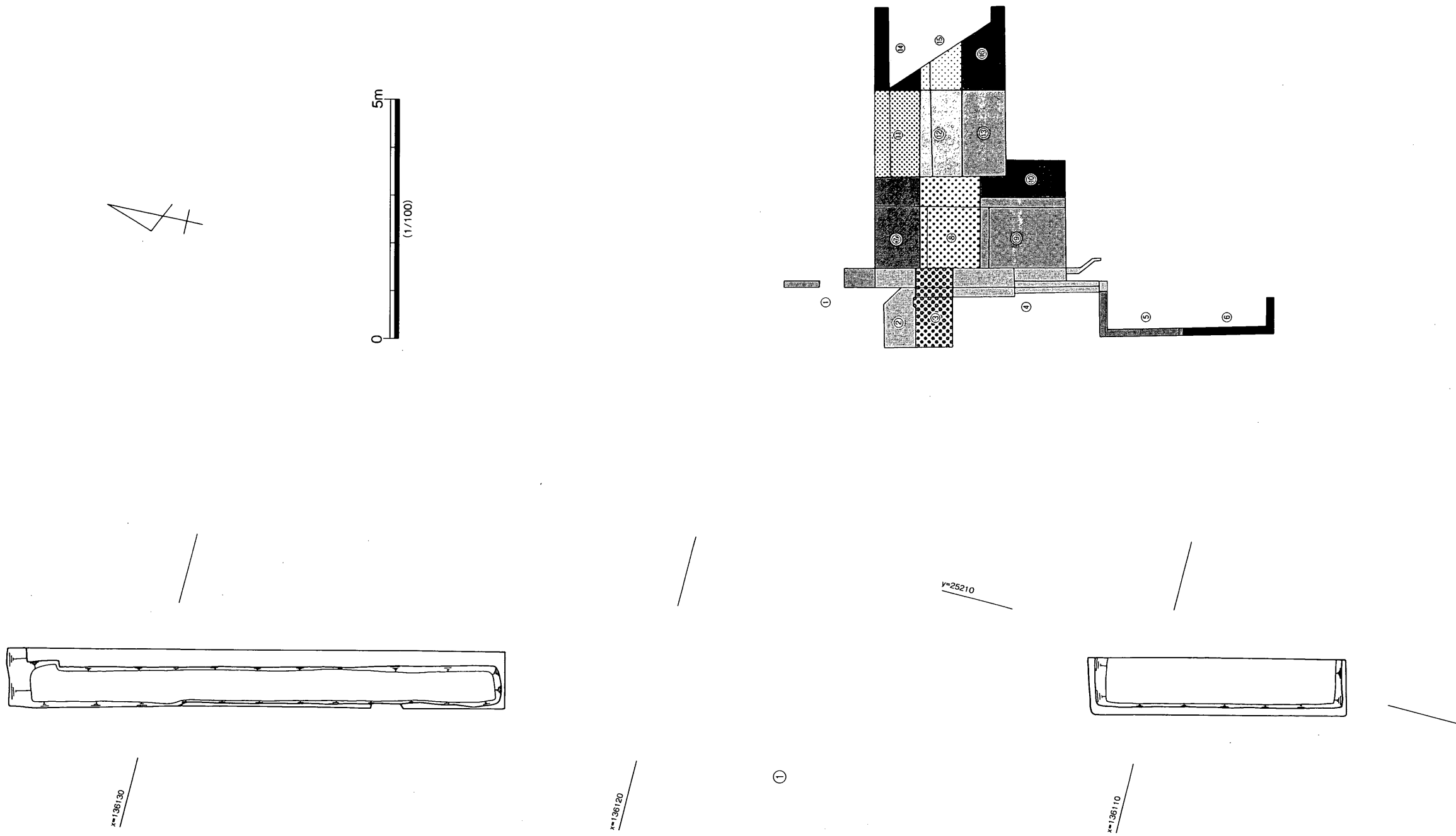
遺構の幅と深さは、全体にわたって一定で、中心軸は直線的である。

(2) 柱穴跡

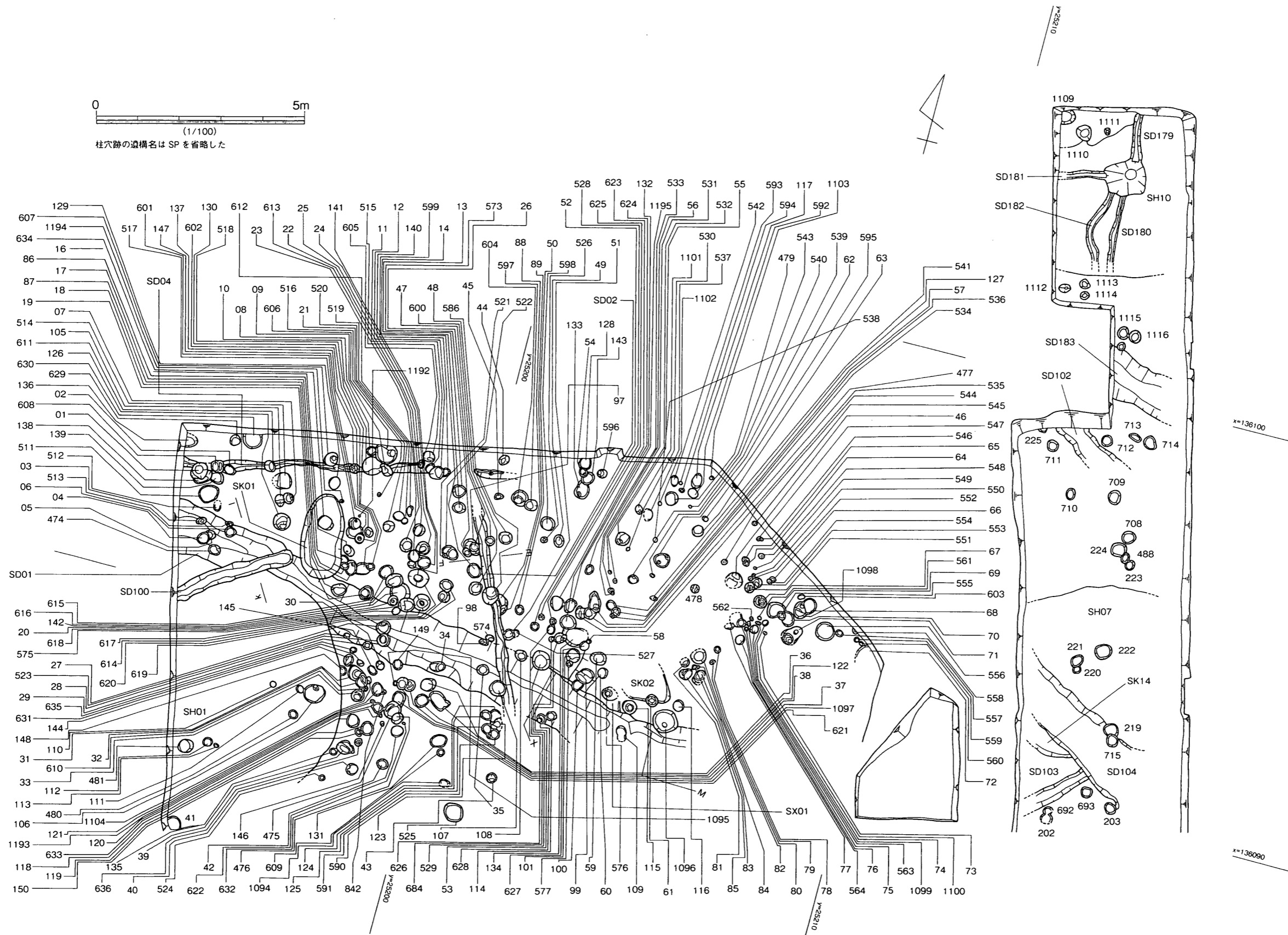
[遺構] 当該時期に所属する遺構は、X区に6個、Y区に15個が存在することから、住居あるいは建物等は、前代と同様にY区を中心とした地域に存在したことがわかる。

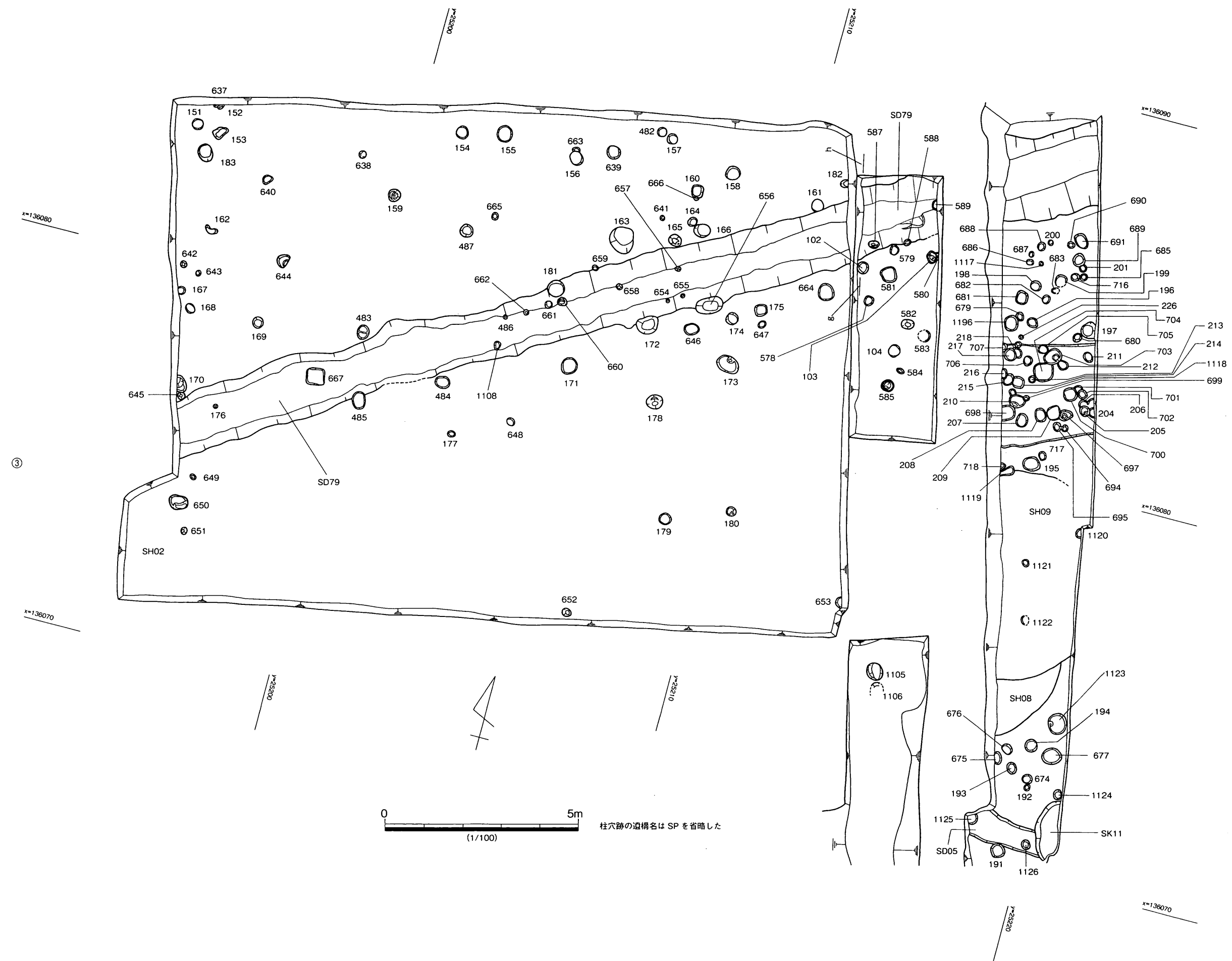
3 遺物包含層

9528、9529、9531、9532は、口縁端部の凹線文が明瞭な器形である。9536と9537の口縁部は、短く外反する形態である。後者の口縁部端面の沈線文は、均等な間隔で施されている。9558は、口縁部の端面が水平な平坦面に成形されている。9576は、肩部の屈曲が明瞭な器形である。9578の外面の鋸歯文は、横幅が広い棒状の工具によって施されたことがわかる。9595の口縁部の端面に施された縦方向の刻目は、均等な間隔で配列されていることがわかる。9659は粗製の小型品である。9666と9668は未製品の可能性がある。

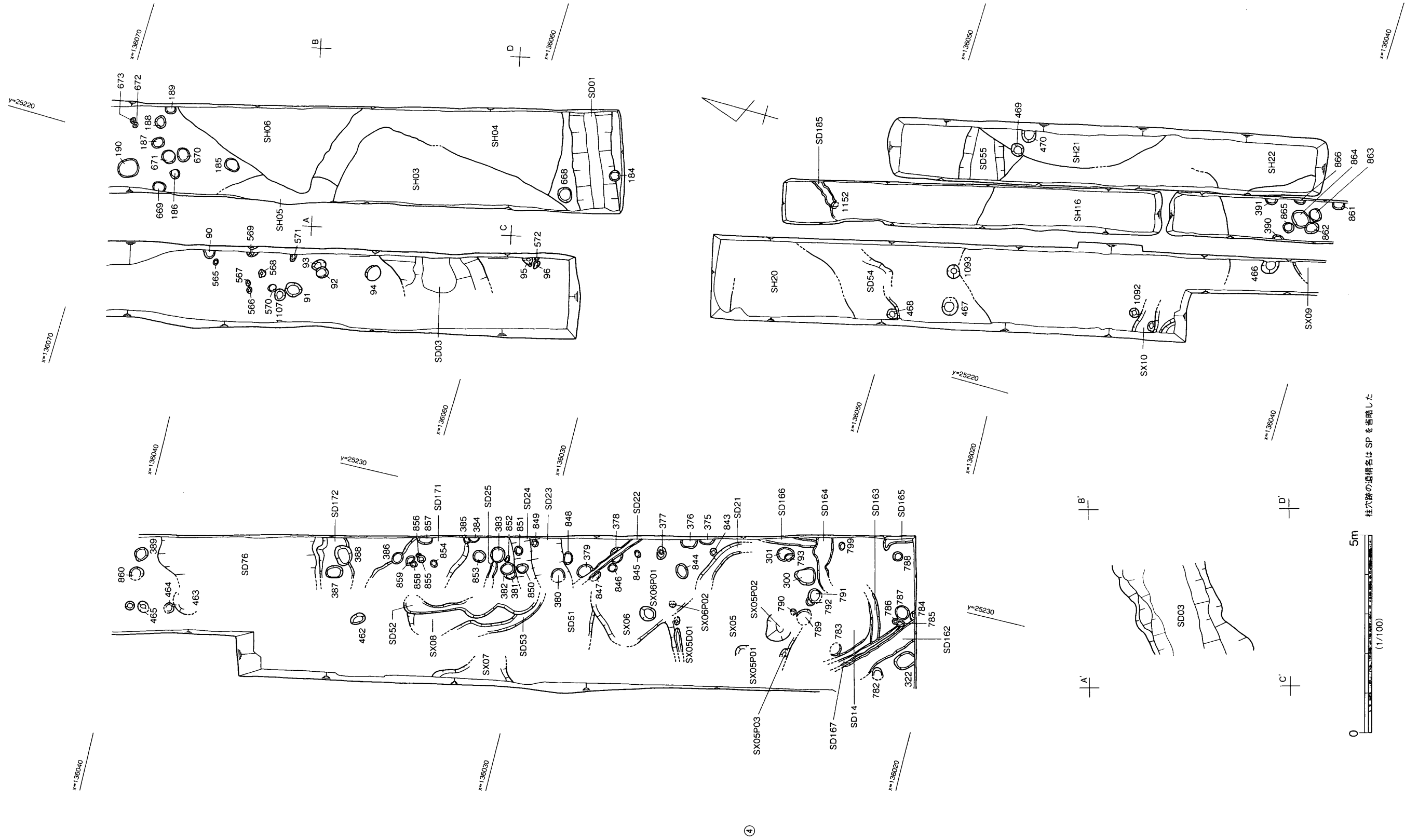


第 340 図 I ~ VI 区遺構配置図 1

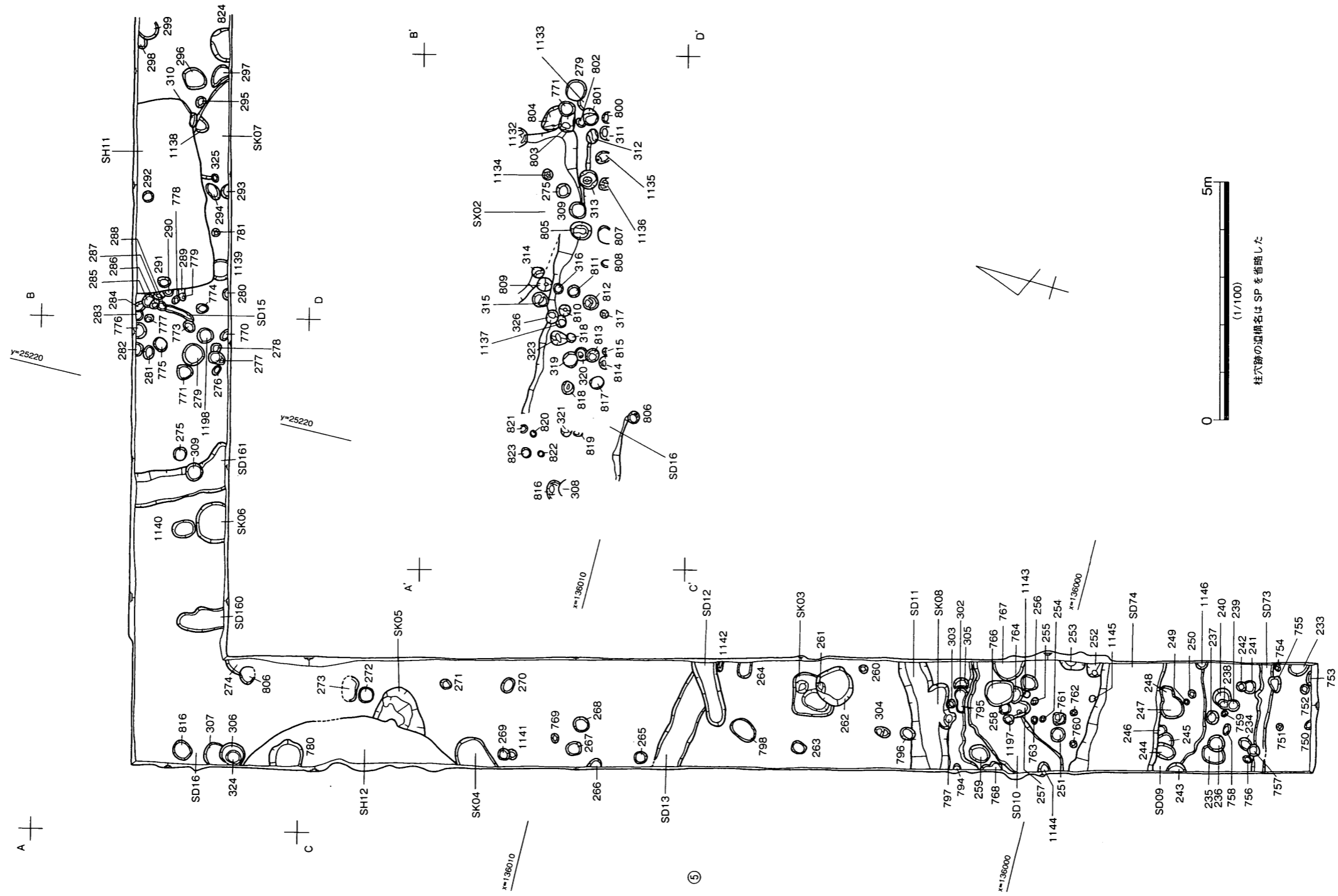




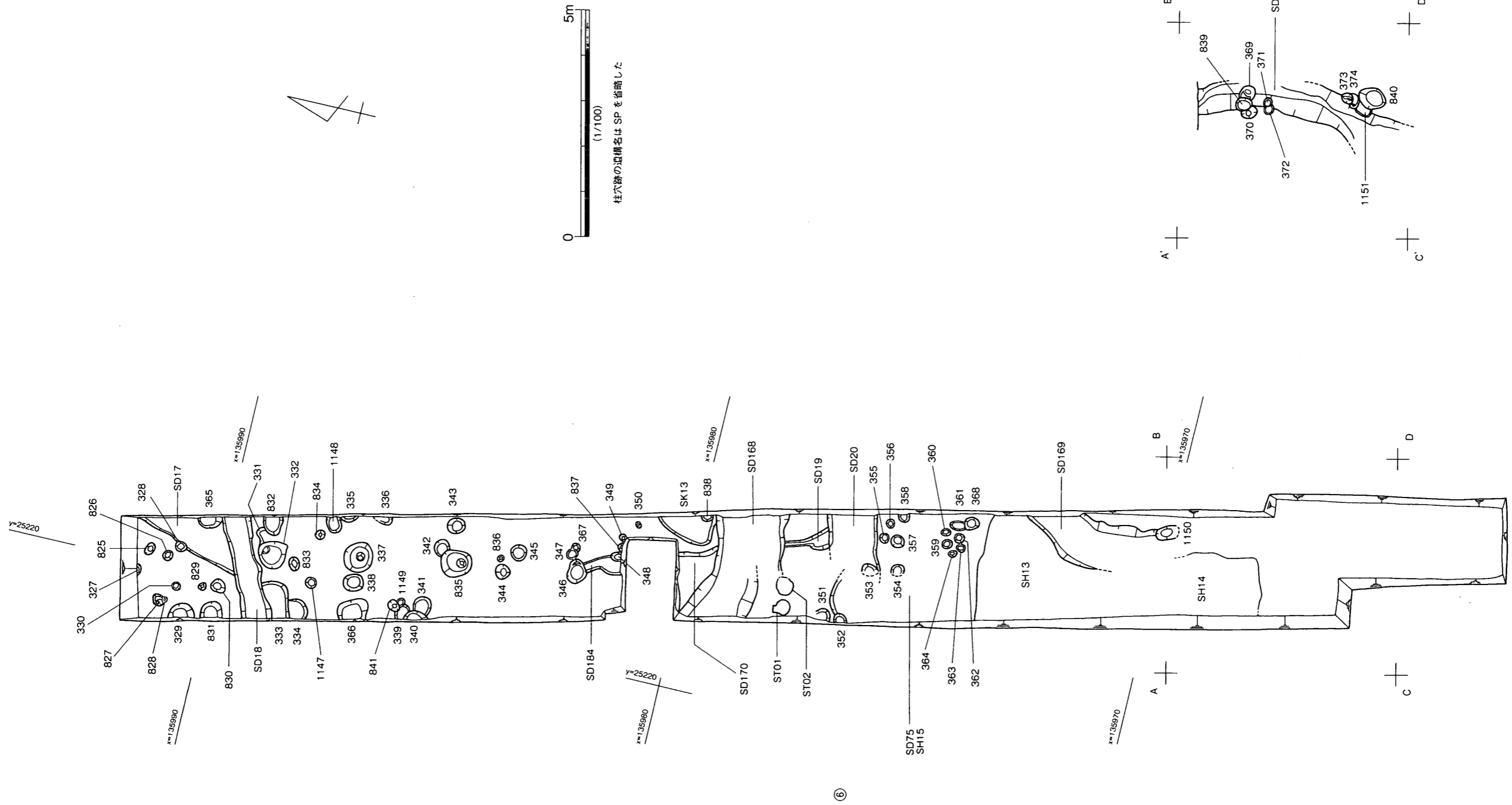
第 342 図 I ~ VI 区遺構配置図 3



第 343 図 I ~ VI 区遺構配置図 4

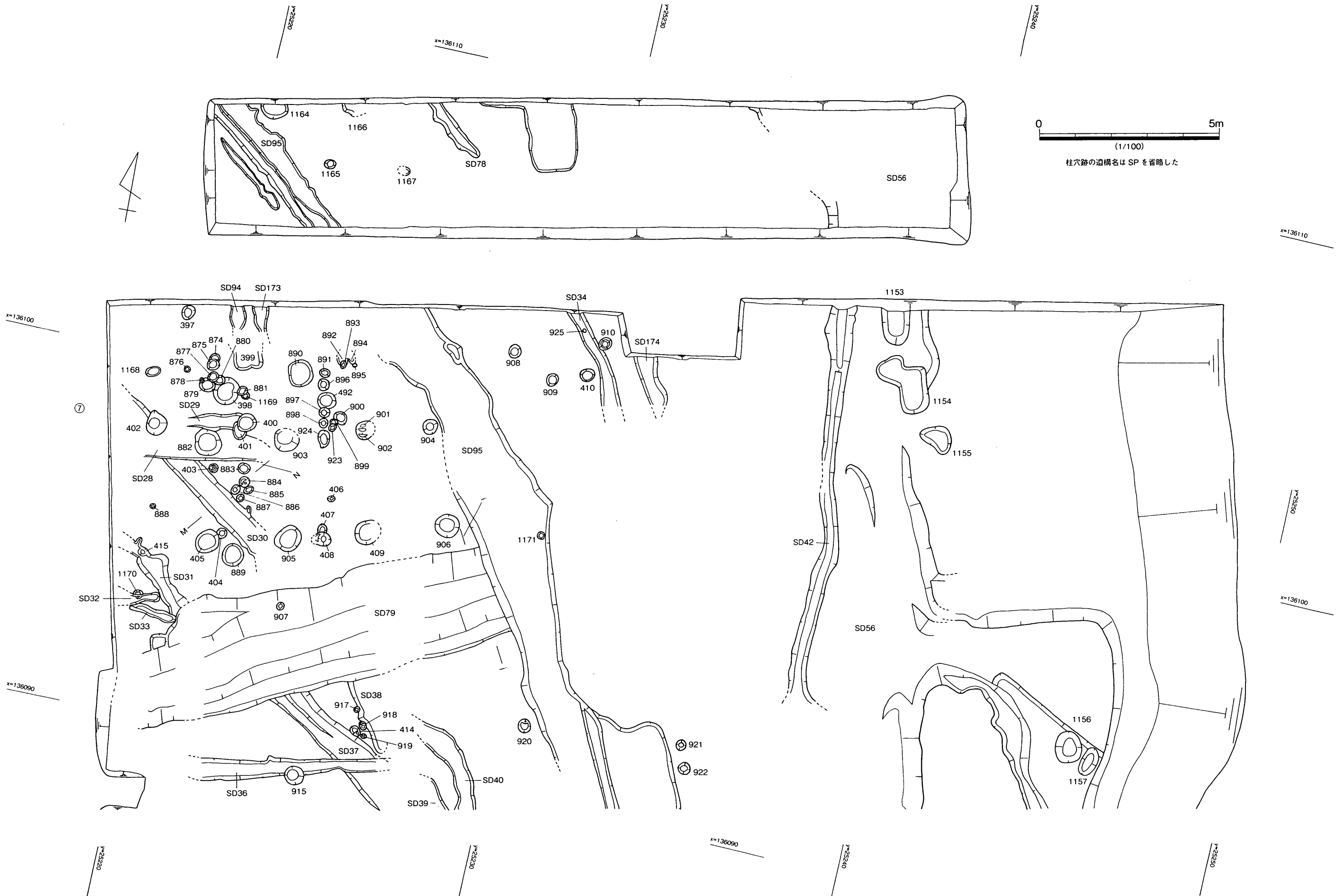


第 344 図 I ~ VI 区遺構配置図 5



柱穴跡の遺構名はSPを省略した

第 345 図 I ~ VI 区遺構配置図 6

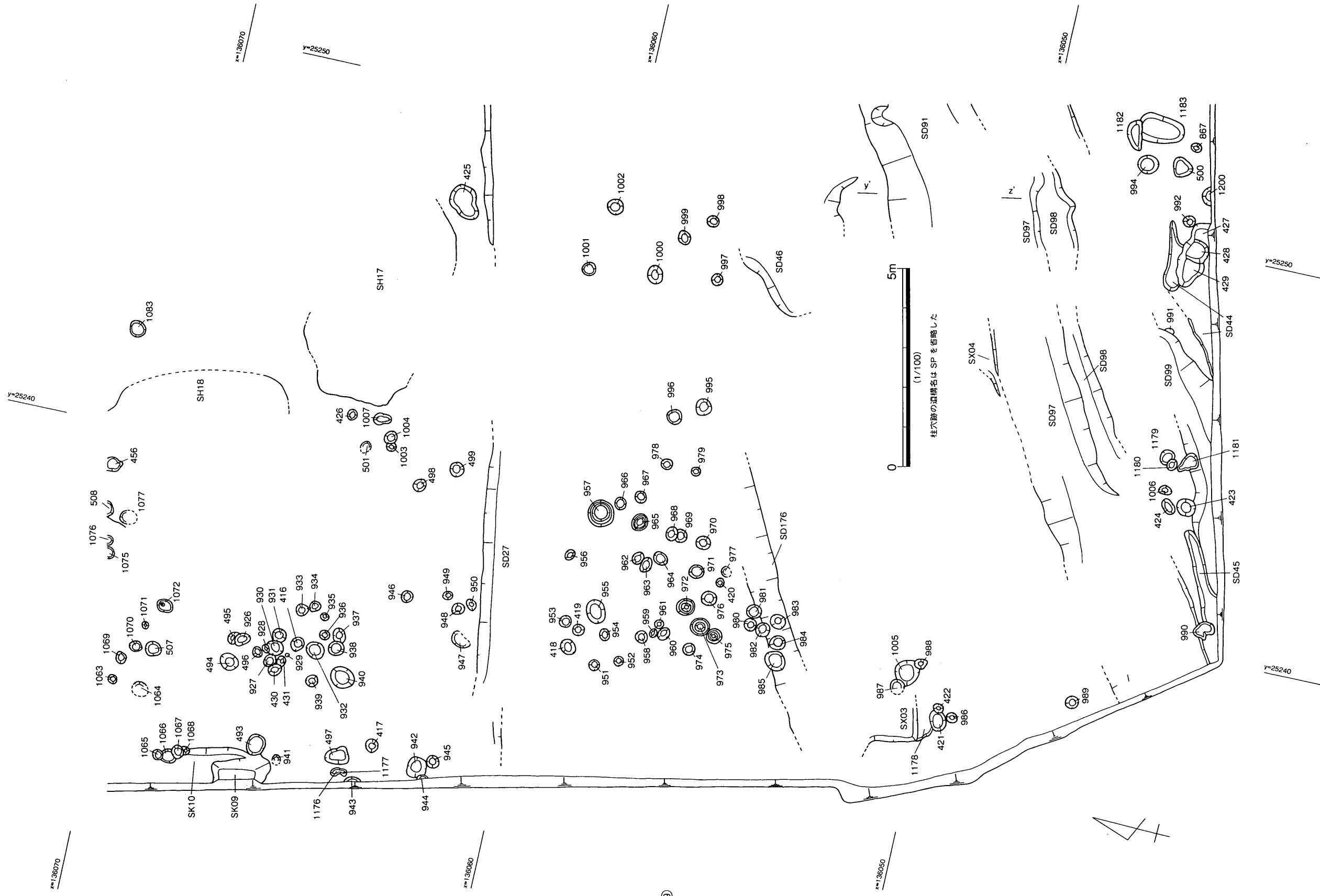


第 346 図 I ~ VI 区遺構配置図 7

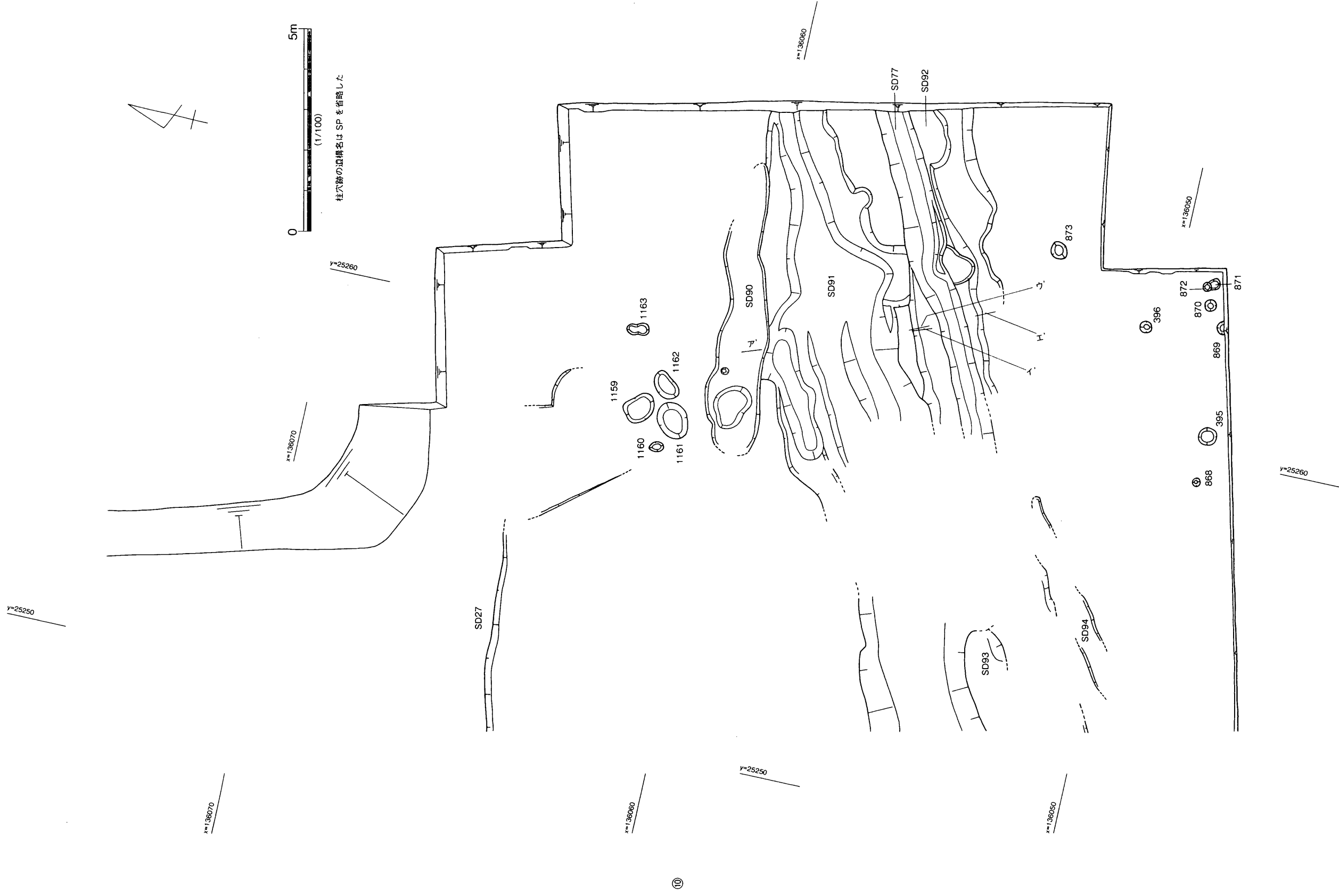


柱穴跡の遺構名はSPを省略した

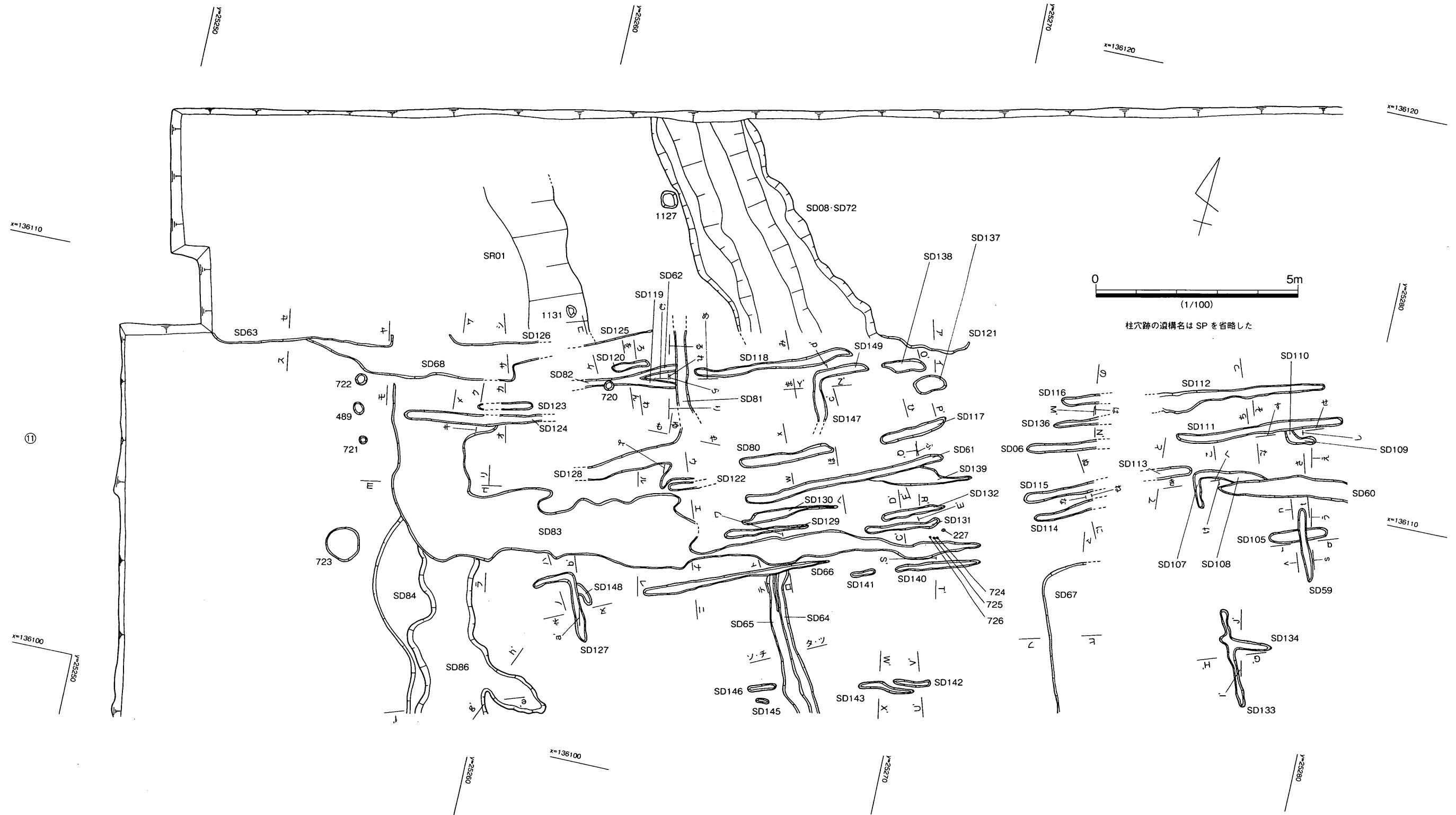
第 347 図 I ~ VI 区遺構配置図 8



第 348 図 I ~ VI 区遺構配置図 9



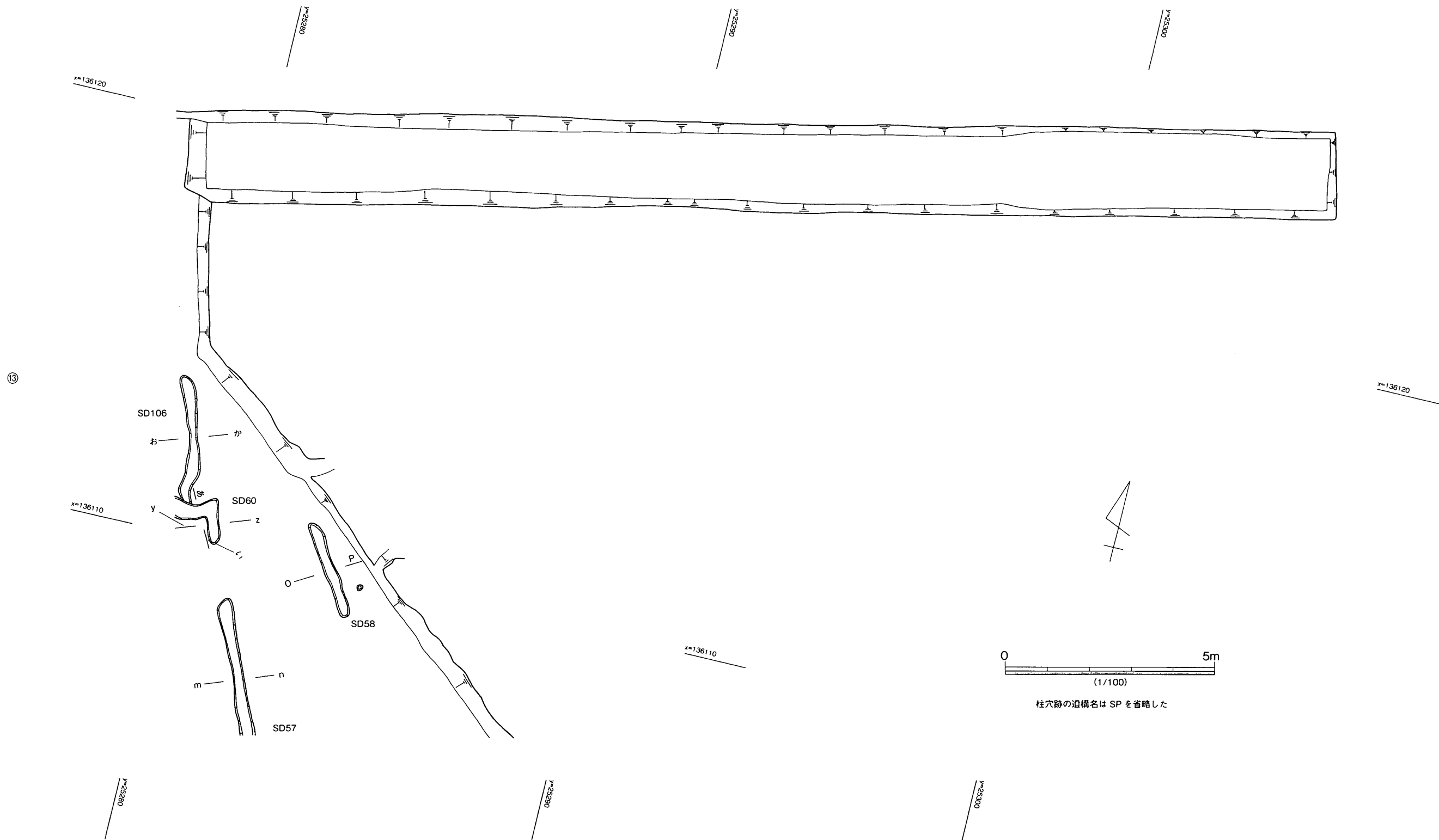
第 349 図 I ~ VI 区遺構配置図 10



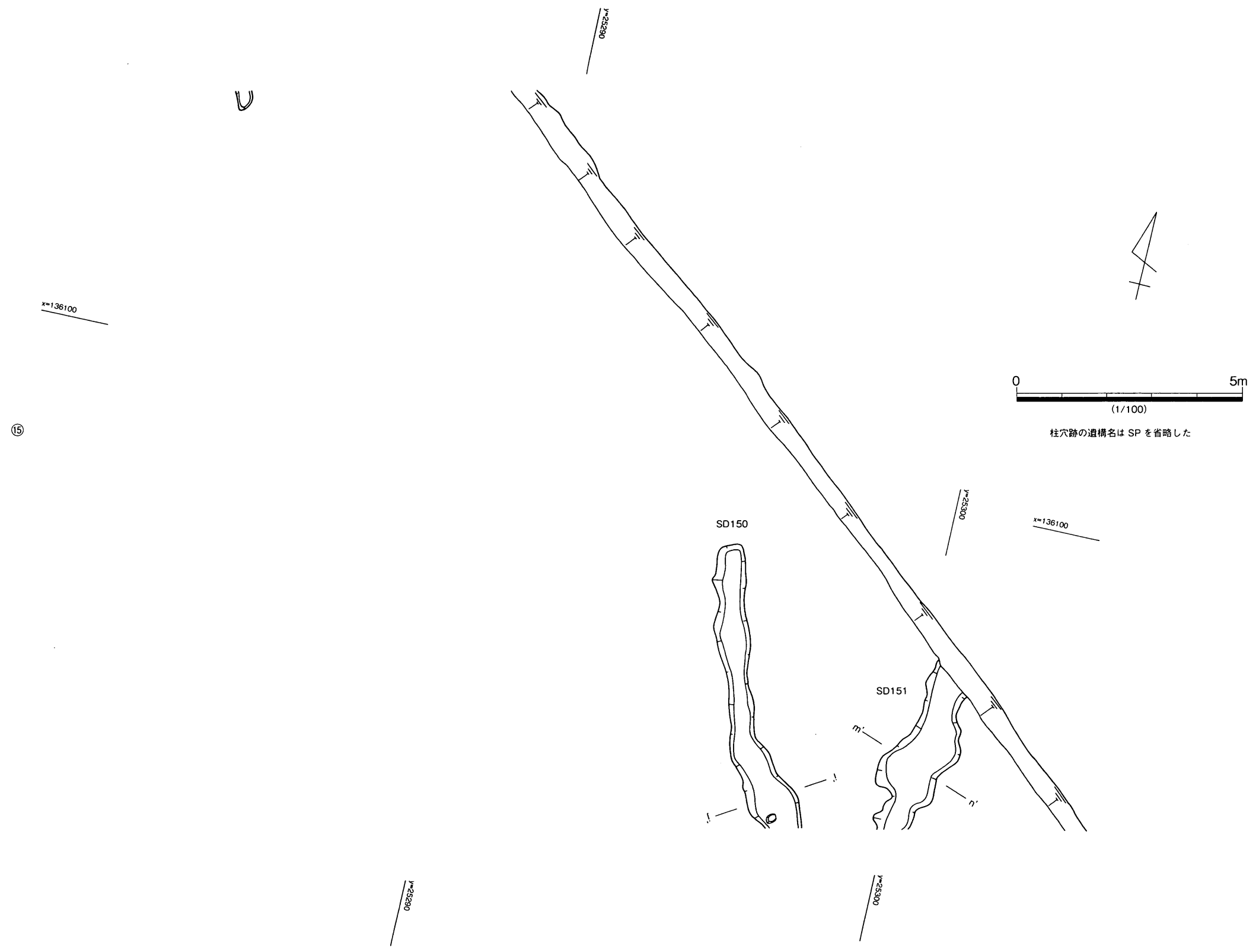
第350図 I~VI区遺構配置図11



第 351 図 I ~ VI 区遺構配置図 12



第 353 図 I ~ VI 区遺構配置図 14



第 354 図 I ~ VI 区遺構配置図 15

x=136090

y=23280

y=23300

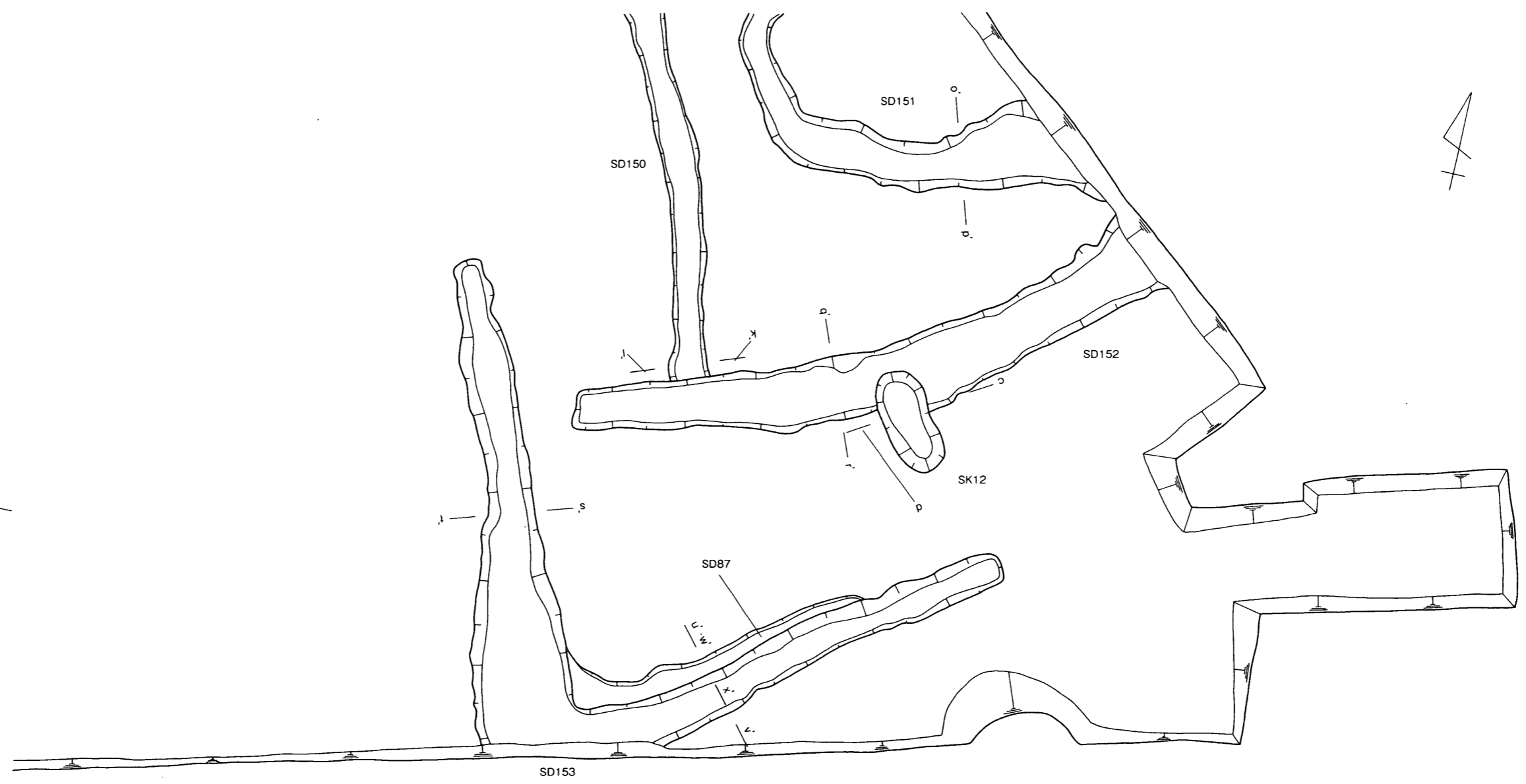
y=23310

⑬

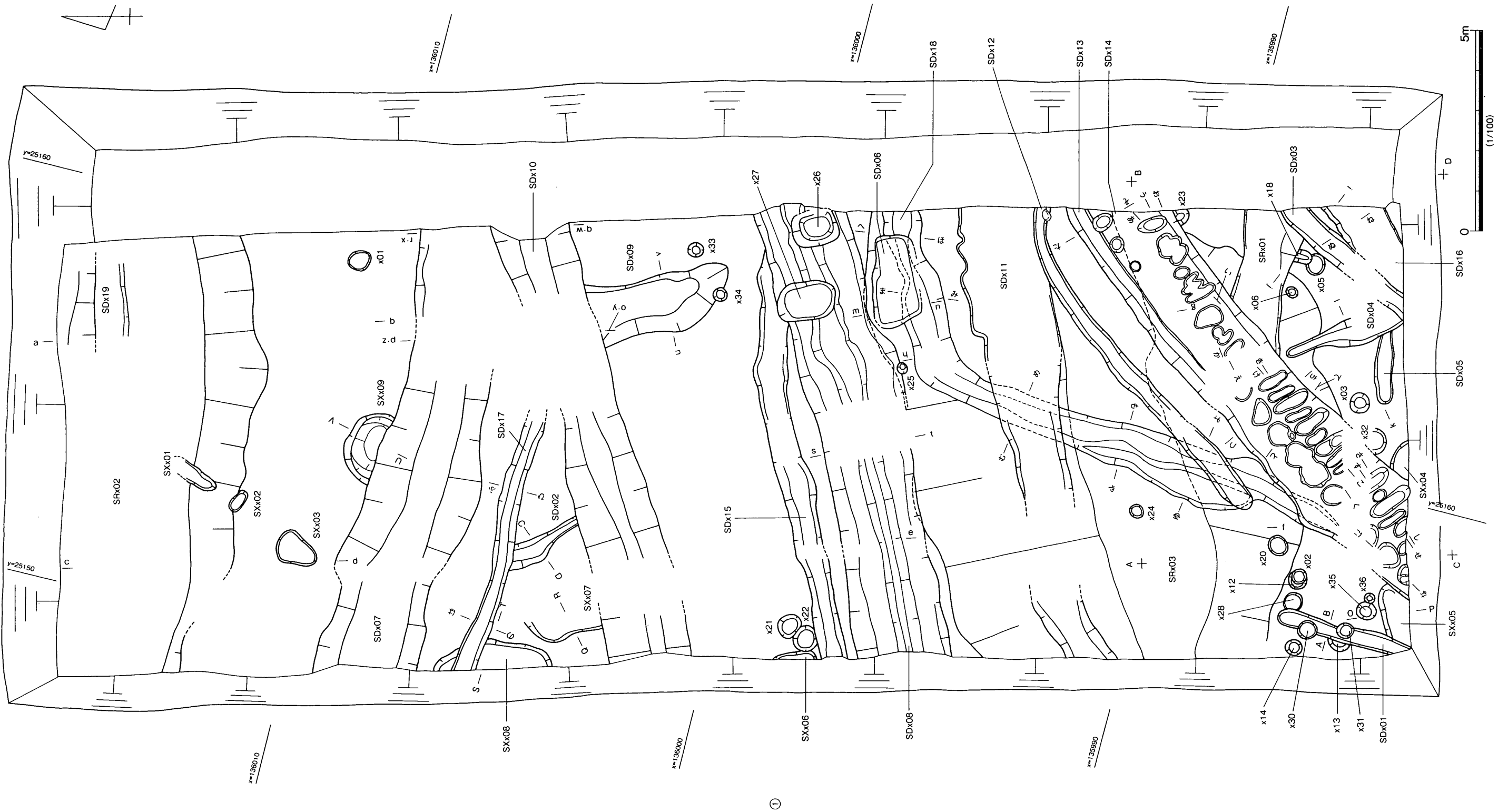
x=136080

x=136090

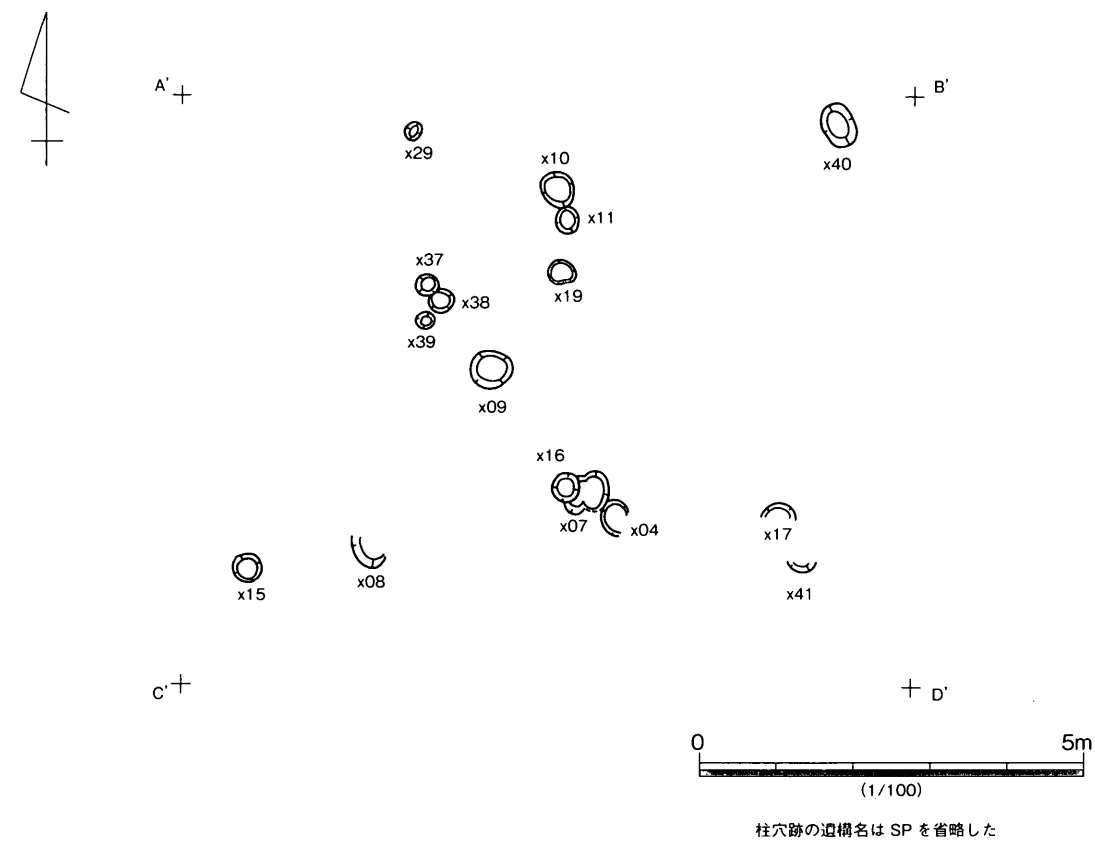
x=136080



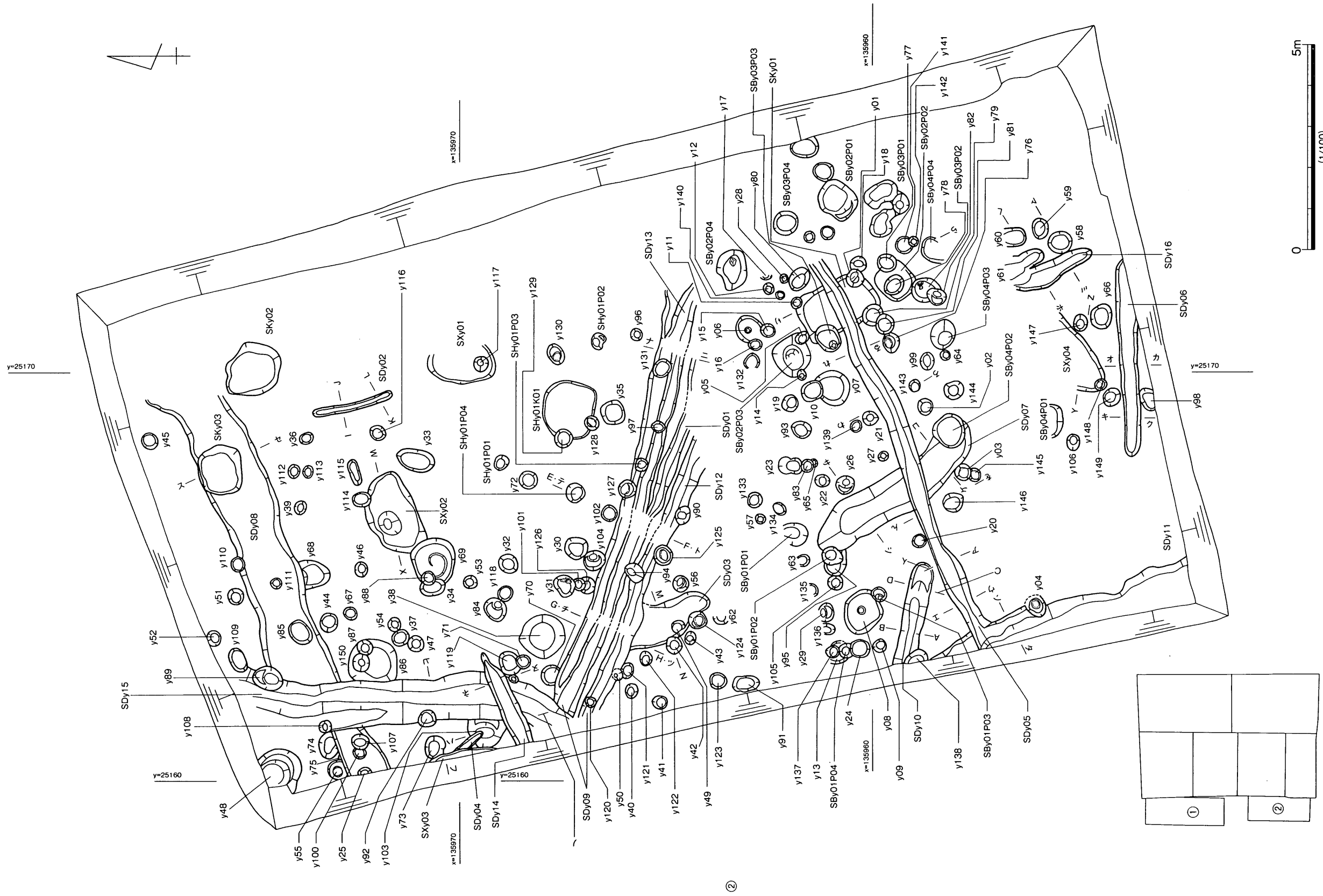
第 355 図 I ~ VI 区遺構配置図 16



第 356 図 X 区遺構配置図 1



第 357 図 X 区遺構配置図 2



第 358 図 Y 区遺構配置図

第5章 自然科学分析の成果

第1節 旧練兵場遺跡から出土した木材の樹種 (パリノ・サーヴェイ株式会社)

1 はじめに

旧練兵場遺跡は、弘田川右岸に位置する。これまでの発掘調査により、弥生時代中期～古墳時代に至る集落跡に伴う竪穴住居跡、掘立柱建物跡等の遺構や古代・中世の条里跡に伴う遺構が検出されている。遺物では、土器の他に装身具や銅鐸等も出土している。また、竪穴住居跡の中には焼失住居跡もあり、住居構築材に由来すると考えられる炭化材も出土している。

本報告では、弥生時代中・後期の竪穴住居跡や溝跡から出土した木材を対象として樹種同定を実施する。

2 試料

試料は、弥生時代中・後期の竪穴住居跡や溝跡から出土した8点(試料番号1-8)である。このうち、7点(試料番号1,2,4-8)は炭化材である。

3 分析方法

試料番号1,2,4-8は、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。試料番号3は、蒸留水を浸透させた後、剃刀を用いて3断面の切片を作成し、ガム・クロラールで封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

4 結果

樹種同定結果を表1に示す。試料番号3は樹皮であった。樹皮の組織に関する資料が蓄積されていないこともあり、組織の特徴から種類を同定することは困難であるが、現生標本との比較ではニレ科の環孔材であるニレ属やケヤキによく似ている。その他の炭化材はいずれも広葉樹で6種類(コナラ属個コナラ亜属コナラ節・ムクノキ・エノキ属・ケヤキ・サクラ属・フジキ属)に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

表1

番号	出土位置	時期	樹種
1	SH03	弥生中・後期	ムクノキ
2	SH10K01	弥生中・後期	コナラ属コナラ亜属コナラ節
3	SD56	弥生中・後期	樹皮(ニレ属・ケヤキ?)
4	SD56土器溜り	弥生中・後期	エノキ属
5	SD56	弥生中・後期	ケヤキ
6	SP329	弥生中・後期	サクラ属
7	SH17P02	弥生中・後期	フジキ属
8	SH17P13	弥生中・後期	フジキ属

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (Quercus subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと同複合放射組織とがある。

・ムクノキ (*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planchon) ニレ科ムクノキ属

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独または2-3個が放射方向あるいは塊状に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-20細胞高。柔組織は周囲状およびターミナル状。

・エノキ属 (Celtis) ニレ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-10細胞幅、1-50細胞高で鞘細胞が認められる。

・ケヤキ (Zelkova serrata (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-8細胞幅、1-50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・サクラ属 (Prunus) バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2-8個が複合し、晩材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

・フジキ属 (Cladrastis) マメ科

環孔材で、孔圏部は1-5列、孔圏外への移行は緩やかで、小道管ははじめは単独または2-3個が複合し、年輪界近くでは多数が塊状あるいは帯状に複合して配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性～異性、1-5細胞幅、1-40細胞高。柔組織は周囲状、帯状およびターミナル状。

5 考 察

竪穴住居跡から出土した炭化材には、ムクノキ、コナラ節、フジキ属が認められた。また、柱穴内から認められた炭化材はサクラ属であった。これらの広葉樹材が構築材として利用されていたことが推定される。いずれも比較的重硬で強度が高い材質を有する。ムクノキ、コナラ節、サクラ属は、現在でも本地域に生育していることから、遺跡周辺で入手可能な木材を使用したことが推定される。

溝跡からは、ケヤキ、エノキ属の炭化材とニレ科の可能性のある樹皮が出土しているが、用途等の詳細は不明である。ケヤキとエノキ属も現在の周辺地域に生育している種類であり、遺跡周辺で入手可能であったと考えられる。

弥生時代の竪穴住居跡から出土した炭化材については、高松市岡清水遺跡 (パリノ・サーヴェイ, 2001) で調査された例があるが、県内での調査例は少ないため、木材利用状況や地域差の有無等については詳細が不明であり、今後の資料蓄積が課題である。

引用文献

パリノ・サーヴェイ株式会社, 2001. 岡清水遺跡から出土した炭化材の樹種. 「国道193号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 岡清水遺跡」, 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター, 145-148.

第2節 旧練兵場遺跡出土遺物の赤色顔料成分分析（蛍光X線分析）（株式会社古環境研究所）

1 はじめに

物質にX線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光X線）が放出され、この蛍光X線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。この方法を用いて、考古学分野では朱やベンガラなどの顔料分析、リン-カルシウムの含量分析などが行われている。また、指標となる特定の元素の検出パターンの比較から、石器（黒曜石など）や土器（須恵器など）の産地を推定することも可能となっている。この方法は、石器や土器などの貴重な考古遺物を非破壊で分析することができる。

2 試料

試料は、旧練兵場遺跡から出土した赤色顔料が付着した土器6点および石器1点の計7点である。試料の詳細を表1に示す。また、写真図版に各遺物の写真および赤色顔料の顕微鏡写真を示す。

表1 蛍光X線分析用試料リスト（赤色顔料付着）

番号	種類	出土位置	時期
1	土器	SH11	弥生時代中期～後期
2	土器	SD56	弥生時代中期～後期
3	土器	SD56	弥生時代中期～後期
4	土器	Ⅲ①・②区第3層	弥生時代中期～後期
5	土器	SH18	弥生時代中期～後期
6	土器	SD56 第3層	弥生時代中期～後期
7	石器	Ⅲ①・②区第3層	弥生時代中期～後期

3 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム（日本電子(株)製、JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。測定条件は、測定時間300秒、照射径20mm、電圧30keV、試料室内真空であり、X線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット、ベリリウム（Be）窓、X線検出器はSi（Li）半導体検出器である。

なお、赤色顔料の成分と土器や石器そのものに含まれる成分とを識別するために、同一試料について赤色部分（R）と非（弱）赤色部分（N）の2箇所を測定し、比較検討を行った。また、番号4については粘着テープで微量の赤色顔料を採取し、蛍光X線分析の測定対象とした。この粘着テープの成分は99.8%が炭素であり、鉄、水銀、鉛などは含まれていない。

4 分析結果

各元素の定量分析結果（wt%）を表1に示す。なお、表中の空欄は自動定性分析で検出されなかったものである。各試料における鉄（Fe₂O₃）、イオウ（SO₃）、水銀（HgO）の含量を図1に示し、巻末に蛍光X線分析のスペクトルデータを添付する。

5 考 察

赤色顔料としては、一般的に水銀朱（硫化水銀： HgS ）、ベンガラ（酸化第二鉄： Fe_2O_3 ）、鉛丹（酸化鉛： Pb_3O_4 ）が知られている（市毛，1998，本田，1995）。蛍光X線分析では、水銀（Hg）・イオウ（S）、鉄（Fe）、鉛（Pb）などの元素の検出状況から、赤色顔料の主成分を推定することが可能である。以下に、各試料ごとに赤色顔料の種類について検討を行った。

（1）番号1（土器）

蛍光X線分析の結果、土器の赤色部分では鉄（Fe）の明瞭なピークが認められ、水銀（Hg）や鉛（Pb）は検出されなかった。鉄（ Fe_2O_3 ）の含量は16.34%であり、比較部分の10.63%よりも明らかに高い値である。以上の結果から、この土器に付着している赤色顔料の主成分はベンガラと考えられる。

（2）番号2（土器）

蛍光X線分析の結果、土器の赤色部分では鉄（Fe）の明瞭なピークが認められ、水銀（Hg）や鉛（Pb）は検出されなかった。鉄（ Fe_2O_3 ）の含量は7.68%であり、比較部分の3.16%よりも明らかに高い値である。以上の結果から、この土器に付着している赤色顔料の主成分はベンガラと考えられる。

（3）番号3（土器）

蛍光X線分析の結果、土器の赤色部分では鉄（Fe）の明瞭なピークが認められ、水銀（Hg）や鉛（Pb）は検出されなかった。鉄（ Fe_2O_3 ）の含量は16.88%であり、比較部分の15.83%よりも高い値である。以上の結果から、この土器に付着している赤色顔料の主成分はベンガラと考えられる。

（4）番号4（土器）

蛍光X線分析の結果、土器の赤色部分（微量採取）では鉄（Fe）および水銀（Hg）の明瞭なピークが認められた。鉄（ Fe_2O_3 ）の含量は12.02%であり、比較部分の6.40%よりも明らかに高い値である。また、水銀（ HgO ）の含量は10.07%であり、比較部分では検出されなかった。さらに、イオウ（ SO_3 ）の含量は5.37%であり、比較部分の0.65%よりも明らかに高い値である。以上の結果から、この土器に付着している赤色顔料の主成分は、ベンガラおよび水銀朱（ HgS ）と考えられる。

（5）番号5（土器）

蛍光X線分析の結果、土器の赤色部分では鉄（Fe）の明瞭なピークが認められ、水銀（Hg）のピークも認められた。鉄（ Fe_2O_3 ）の含量は13.0%であり、比較部分の7.79%よりも明らかに高い値である。また、水銀（ HgO ）の含量は、赤色部分では0.01%、比較部分では0.41%である。以上の結果から、この土器に付着している赤色顔料の主成分は、ベンガラおよび水銀朱と考えられる。

（6）番号6（土器）

蛍光X線分析の結果、土器の赤色部分では鉄（Fe）の明瞭なピークが認められ、水銀（Hg）や鉛（Pb）は検出されなかった。鉄（ Fe_2O_3 ）の含量は9.75%であり、比較部分の8.13%よりも高い値である。

以上の結果から、この土器に付着している赤色顔料の主成分はベンガラと考えられる。

(7) 番号7 (石器)

蛍光X線分析の結果、石器の赤色部分では鉄 (Fe) および水銀 (Hg) の明瞭なピークが認められた。鉄 (Fe_2O_3) の含量は2.11%であり、比較部分の1.3%よりも高い値である。また、水銀 (HgO) の含量は1.35%であり、比較部分では検出されなかった。さらに、イオウ (SO_3) の含量は1.38%であり、比較部分では検出されなかった。以上の結果から、この石器に付着している赤色顔料の主成分は、ベンガラおよび水銀朱と考えられる。

6 まとめ

蛍光X線分析の結果、土器 (番号1、2、3、6) に付着した赤色顔料の主成分はベンガラと推定された。また、土器 (番号4、5) と石器 (番号7) に付着した赤色顔料の主成分は、ベンガラおよび水銀朱と推定された。

文 献

市毛 勲 (1998) 新版朱の考古学. 考古学選書. 雄山閣出版

小野寺 浩・安東 和人 (1995) エネルギー分散型蛍光X線分析装置 JSX3200 の紹介. 日本電子 (株), 25p.

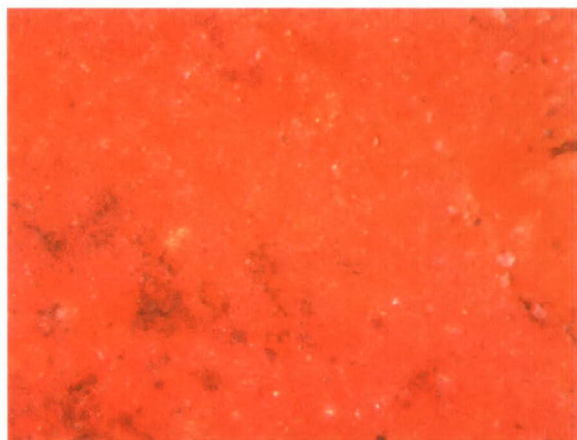
本田光子 (1995) 古墳時代の赤色顔料. 考古学と自然科学. 31・32, p.63-79.

本田光子 (2003) 「朱」から見た弥生時代の文化交流 - 博多湾沿岸地域に残された辰砂の謎 -. 日本文化財科学会報, 46, p.25-32.



339

番号1 弥生土器



番号1 弥生土器



3751

番号2 弥生土器



番号2 弥生土器



3652

番号3 弥生土器



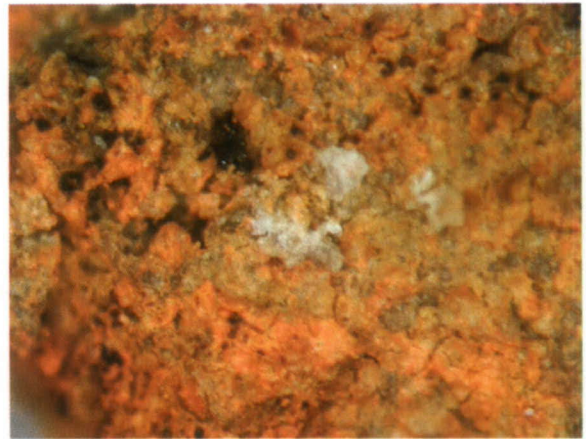
番号3 弥生土器

出土遺物の顕微鏡写真（スケール：右写真の横辺は1mm）



7221

番号4 弥生土器



番号4 弥生土器



560

番号5 弥生土器



番号5 弥生土器



3587

番号6 弥生土器



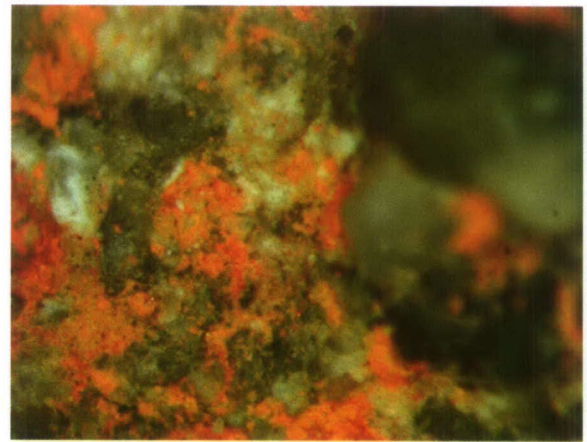
番号6 弥生土器

出土遺物の顕微鏡写真 (スケール: 右写真の横辺は 1mm)



7358

番号7 石器



番号7 石器

出土遺物の顕微鏡写真（スケール：右写真の横辺は1mm）

表1 旧練兵場遺跡出土遺物の蛍光X線分析結果

単位：wt(%)

地点・試料	1R	1N	2R	2N	3R	3B	4R	4R2	4N	5R	5N	6R	6N	7R	7N
原子No. 化学式	赤色部	比較	赤色部	比較	赤色部	比較	赤色部	赤色部	比較	赤色部	比較	赤色部	比較	赤色部	比較
11 Na2O	0.723	0.838	0.629	0.552	0.288	0.494	0.656	0.591	0.784	0.948	0.678	0.525	0.503	1.917	1.910
12 MgO	0.283	0.267	0.184	0.240	1.196	1.627	0.714	0.589	0.731	0.435	0.433	0.296	0.260	0.304	0.177
13 Al2O3	15.480	16.205	19.332	19.472	27.371	24.382	20.773	19.541	19.920	17.062	13.908	18.544	26.314	13.082	11.307
14 SiO2	60.579	65.702	62.860	67.906	44.289	48.010	63.651	41.918	62.856	58.172	67.990	61.141	56.503	73.066	78.952
15 P2O5	1.290	1.297	2.225	2.296	2.776	1.868	1.156	1.907	1.229	2.040	1.635	2.875	1.499	1.070	1.278
16 SO3			0.494	0.091	0.185	0.077	0.211	5.366	0.647		0.001			1.382	
19 K2O	2.060	2.110	3.579	3.323	1.045	1.286	3.313	3.308	3.637	4.623	4.028	3.161	2.691	4.126	3.792
20 CaO	1.288	1.445	1.045	0.998	3.960	4.525	1.307	1.918	1.830	1.729	1.299	1.573	1.790	0.954	0.873
22 TiO2	1.111	1.329	1.912	1.809	1.712	1.489	1.508	2.142	1.756	1.600	1.333	1.934	2.150	0.597	0.306
23 V2O5	0.010	0.007	0.012	0.012	0.031	0.063	0.017	0.030	0.001	0.015	0.009	0.019	0.032		
25 MnO	0.759	0.104		0.064	0.221	0.292	0.040	0.436	0.075	0.112	0.330	0.107	0.046		
26 Fe2O3	16.341	10.634	7.678	3.156	16.879	15.835	6.387	12.019	6.402	12.998	7.789	9.754	8.129	2.110	1.343
37 Rb2O	0.028	0.026	0.022	0.014	0.007	0.009	0.021	0.112	0.029	0.056	0.030	0.024	0.020	0.021	0.018
38 SrO	0.048	0.037	0.028	0.014	0.039	0.043	0.017	0.055	0.032	0.069	0.035	0.047	0.024	0.026	0.019
40 ZrO2				0.054			0.044		0.073	0.134	0.090				0.027
80 HgO							0.187	10.070		0.007	0.413			1.347	

微量採取

	1 赤色部	1 比較	2 赤色部	2 比較	3 赤色部	3 比較	4 赤色部	4 赤色部2	4 比較	5 赤色部	5 比較	6 赤色部	6 比較	7 赤色部	7 比較
Fe2O3	16.341	10.634	7.678	3.156	16.879	15.835	6.387	12.019	6.402	12.998	7.789	9.754	8.129	2.110	1.343
SO3			0.494	0.091	0.185	0.077	0.211	5.366	0.647		0.001			1.382	
HgO	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.187	10.070	0.000	0.007	0.413	0.000	0.000	1.347	0.000

第6章 ま と め

本書の中心である、I区からVI区までの総括を主体として、X区及びY区については、隣接する地区の整理作業が進捗した段階で、隣接遺構の様態と合わせて総括することにする。

第1節 遺跡の変遷

遺構及び遺物の所属時期は、縄文時代晩期から江戸時代後半期まで多岐にわたる。

1 縄文時代晩期から弥生時代前期まで

まず、縄文時代晩期の出土品はきわめて微量で、遺構は確認されていない。

しかしながら、善通寺市域における当該時期に所属する遺跡の多くは、後世の土地開発に伴い、覆土とともに損壊した状態で確認されることから、本遺跡についても、対象地内に遺構が存在した可能性がある。

特に、後続する弥生時代前期前半期に所属する遺物が多少出土することや、弥生時代後期以降の集落の急激な成長の原因を求める必要があることから、両時期には集落の萌芽があったことも考えられる。なかでも弥生時代前期については、遺跡の近隣において、甲山遺跡、乾遺跡、永井遺跡、稲木遺跡等の存在が知られており、これらの中には後世に発展を遂げたものが多いことが傍証となると考えられる。

なお、弥生時代前期に所属する資料は、弥生土器だけで、遺構は確認されていない。

2 弥生時代中期から古墳時代初期まで

特に、V区の遺構の保存状態が不良であるために、居住遺構の全体像は知り得ないが、対象地の西半部に竪穴住居跡及び掘立柱建物跡が存在し、東半部は広範囲にわたって自然河川跡（SR01）が占めることがわかった。対象地の西半部は、微高地の上位に相当することから、居住地としての占用条件が整っていたことは明らかである。

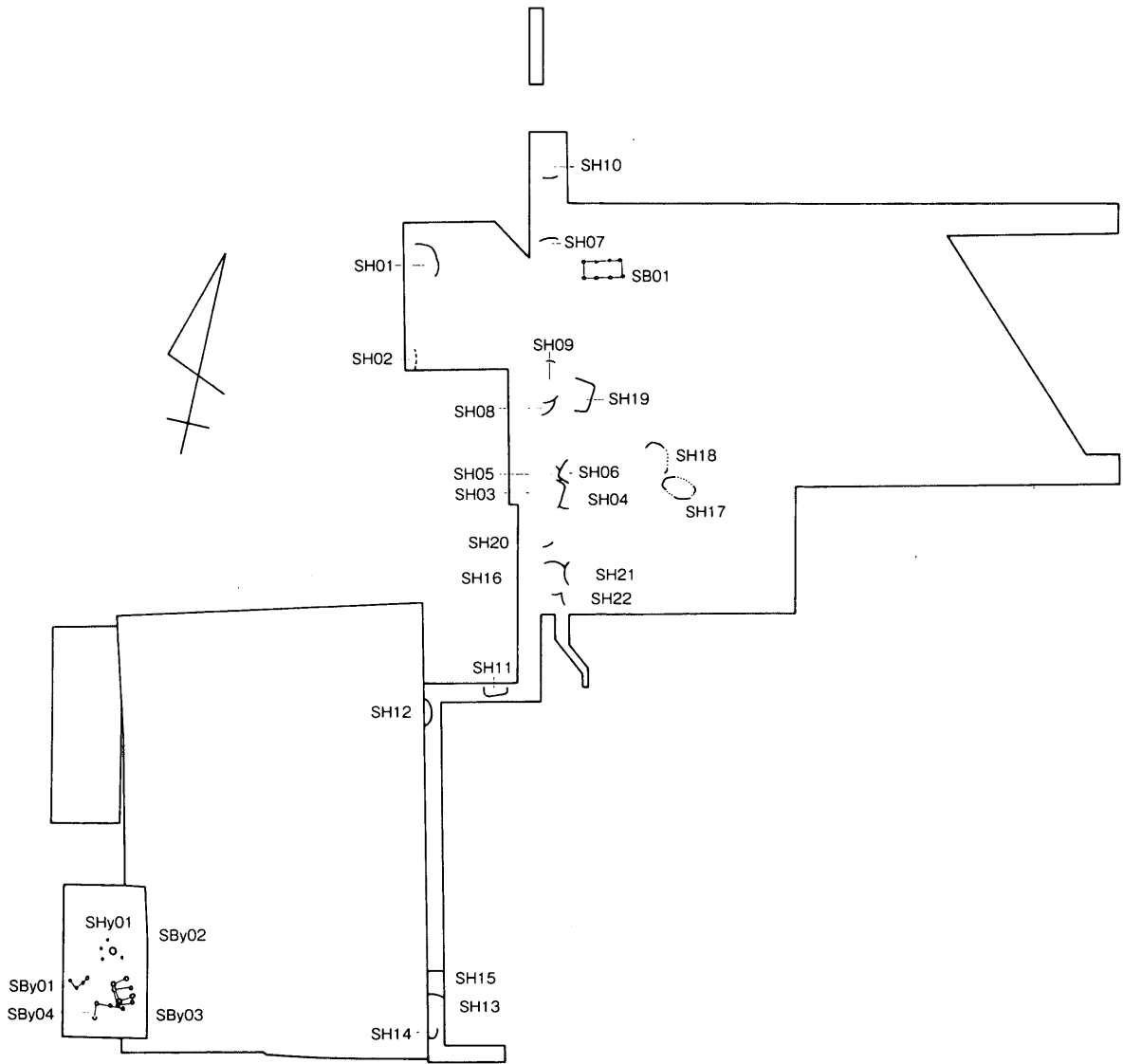
最初の竪穴住居跡は、弥生時代後期前半期に所属するSH12で、その後、同終末期までに断続的に、20棟が出現することにより、集落が継続的に経営されたことがわかる。これらは相互に重複した関係にあることから、併存した遺構は、限定された棟数であったことが推測されるが、平成13年度から平成16年度にかけての調査によって、相当数の竪穴住居跡が発見されたことを考え合わせると、集落の規模はきわめて大型であったことがわかる。

また、竪穴住居跡に併設された掘立柱建物跡（SB01）が存在する。各柱穴跡の直径が大きいことから、倉庫あるいは望楼様の高床か高層式の建物が建設されていたことが想定される。

当該時期には、住居跡に隣接して土器棺墓（ST01、ST02）が設営されており、乳幼児を集落内に埋葬する習慣を見ることができる。

古墳時代にも集落経営が引き継がれ、同時代初期に所属する竪穴住居跡が2棟（SH11、SH13）確認されている。住居跡の棟数の減少から、対象地内においては、集落の規模の縮小傾向と捉えることができる。

前代に見られた、集落内部における埋葬施設の設営は認められない。



第 359 図 弥生時代後期から古墳時代までの竪穴住居跡及び掘立柱建物跡配置図

ところで、当該時期の集落経営に関与したと考えられる遺構として、上記のSR01がある。同河川跡は、集落の東側において、微高地の縁辺を周回するような流路の様態を示していることから、集落の東限を明確にする自然地形として認識されていた可能性が高い。これは、同河川跡からの導水用に開削されたSD56が、同河川跡の方向性に合致した方向性を示すことが傍証と考えられる。

また、SR01及びSD56からは、弥生土器や土師器を始めとして、膨大な数の生活用具が出土していることから、不用品の廃棄場所として、集落の存在期間を通じて、日常生活に不可欠な場所として、人々の意識及び行動の範囲内に存在し続けたことが推測される。

当該時期の集落の廃絶理由は明らかでない。

3 古墳時代中期から古墳時代終末期まで

SD56及びSR01から出土した、陶器MT15型式に所属する、古墳時代中期に生産された須恵器に象徴される時期から、対象地内の各所で採取された、飛鳥Ⅰ及びⅡ型式に所属する、同時代終末期に流通した須恵器から判明した時期までの遺構及び遺物が対象である。

当該時期の主要な遺構は、上記の2遺構で、住居跡や建物跡のような居住遺構が全く存在しないために、前代とは様態が一変している。

微高地上では、土坑群が確認されたが、用途や規則性等が顕然としていないことから、活発な生活活動の痕跡とは判断できなかった。

一方の低地については、SD56及びSR01の様態から、間断のない埋積途上にあったことが判明しており、耕地としての積極的な利用の実態は認められない。この事実関係は、微高地上における生活活動の痕跡が不明確なものと合致するものである。

4 奈良時代から平安時代前半期まで

SD56及びSR01が完全に埋積した直後の時期が該当する。これらの跡地は、地表面の標高が西半部の微高地と同じ高さまでには至らず、依然として凹地形を示していたために、前代からの埋積作用が継続した結果、上位が厚い土砂によって被覆され、当該時期までにはほぼ平坦地化したことが判明した。この平坦地化が、対象地の土地開発の進展に大きく寄与したと考えられる。

すなわち、対象地の東半部は古墳時代中期以降、河水による埋積作用が激しいために、水田としての利用が困難な低地として放棄された様態であったと判断される。

ところが、平坦地化したことにより、農耕地としての利用が本格的に開始されたのである。このことは、Ⅲ①区を中心とする地域において、後代に所属する農耕地の痕跡と考えられる、小規模で、断続的であるが、一定の法則性がある溝状遺構群が確認されたことが根拠である。

河水により、肥沃な土砂が運搬されたことにより、可耕地へ変化を遂げたことが推測される。

当該時期における耕地化が、後代の広範で、規則的な土地開発の素地となったことが考えられる。

5 平安時代後半期から鎌倉時代まで

当該地域に現存する、条里型地割りが完成することで、現代までの善通寺市街地一帯の繁栄の基礎となった期間として評価することができる時期である。

特にSD79及びSD91は、対象地内で最大規模であるだけでなく、周辺地域の同一遺構も凌駕する規

模であることがわかる。したがって、同遺構の開削に象徴されるように、あるいは早い時期から進められていた、広域での土地開発が、当該時期に飛躍的に進展した可能性が考えられる。

さらに、対象地が想定される創建期の善通寺の寺域に近接することから、当該地域の条里型地割が、同寺を中軸に設定されたとする見解に従うならば、同遺構には周辺の関連施設開削のための基軸線としての役割が与えられていたことも想定される。

また、古墳時代初期以降の遺構及び遺物の少なさから一転して、当該時期に所属する遺構として、多くの柱穴跡が発見されたことから、集落の再生の様態として認識することができる。

この事実は、第2章における「一円保差図」の分析結果から想定された、対象地一帯における、多数の建物の存在を裏付けるものであり、後代の農耕地としての土地利用が開始される直前に、集住の様態の段階として認識される。

6 室町時代から江戸時代後半期まで

当該時期に所属する遺構及び遺物は、きわめて微量であり、対象地が、善通寺平野の広範に認められる条里型地割の中心部に所在するために、完全に完成された土地区画によって管理され続けたことがわかる。

特に、建物跡が確認されなかったことから、SD79を中心とした条里型地割を踏襲した水路網の内部において、農耕地として利用され続けた可能性が高いと判断される。

したがって、前代の遺構の様態及び「一円保差図」の分析から想定された集落については、当該時期までに廃絶したことが推察されるが、その原因を明らかにできる資料は見当たらない。

第2節 弥生時代の集落

1 居住地の中心部

対象地の西半部の竪穴住居跡群に象徴される箇所である。竪穴住居跡及び掘立柱建物跡で構成された居住地域と、集落内部に設営された土器棺墓による墓地によって構成されている。

(1) 竪穴住居跡

弥生時代後期前半期から同終末期までの遺構が20棟発見された。これらが、平面形態を基準とした場合に、概ね円形のものと同概ね方形のものに大別される点については、通有の様態である。各遺構の重複関係から、前者よりも後者が後出する傾向が見られる点においても、同時期に経営された集落遺跡の様態と酷似する。

ところが、SH17について詳細に観察すると、長楕円形の平面形態であることがわかる。これが、遺構の保存状態が不良であることに起因するのか、原形を留めているのかは判断が難しいが、当該遺構が集落の範囲の東端部に位置することを考えると、他の住居跡とは異質な性格であった可能性があると思われる。

さて、住居跡相互の規模を比較すると、SH16が最大であることがわかるが、特別大型な部類ではないことから、特殊な用途は想定できない。全形が復元できる他の遺構については、通有の規模である。

住居跡の内部構造についても、特殊な様態は認められない。

ところで、弥生時代に所属するSH01において、埋土中に破碎された土器の集中箇所が存在すること

が明らかになっている。これらについては、SH01の報告で記述したように、床面から遊離した状態を示すことと、原形に復元できるものが含まれることから、近隣で破碎された土器が、遺構の埋没過程において、投入された結果と判断される。

古墳時代に所属するSH11においても、床面から遊離した埋土中において、破碎された土師器が多量に採取されたことから、弥生時代から古墳時代にかけて、住居の廃絶に際しては、破碎された生活用具が住居内に投棄される習慣があったことが想像される。

(2) 掘立柱建物跡

全形が判明した遺構はSB01だけである。当該遺構については、高床あるいは高層の建物跡と判断したが、集落の北東隅部の微高地縁辺部を占有することと、遺構の東方に、視界を遮断した施設あるいは自然地形の遺構が認められないことから、監視を目的とした望楼様の高層建物の可能性が高いと考えられる。

対象地内では、IV②区とV①区において、高床あるいは高層の建物跡を構成していた可能性がある大型の柱穴跡群が4箇所を確認されている。これらについては、概報で掘立柱建物跡として報告したが、その後の周辺地域の調査結果に基づいて、再考する必要が生じたことから、本書では単独の柱穴跡として取り扱った。

さて、4箇所のうち3箇所は、柱間が1間であることが特徴である。未確認部分の柱間が1間であると仮想するならば、梁間と桁行がともに1間の正方形に柱が配列された建物が復元される。したがって、想定される床面積は、SB01の約3分の1になることから、同建物跡に比較すると低層で、さらに居住遺構であった可能性は低くなると考えられる。このことは、各遺構の所在地が近接する事実から、集落の変遷にかかわらず、同一地点で建て替えられたことが推測されるため、所在地を特定することが優先された特殊な遺構であったことを示すものである。

(3) 土器棺墓

乳幼児用のST01及びST02以外の、埋葬施設の可能性がある遺構としては、SK01が確認されただけである。したがって、集落の規模に比べて、埋葬遺構が少ないことと、成人墓が少ないことは瞭然である。

本遺跡に近接した彼ノ宗遺跡や九頭神遺跡等に見られるように、住居跡に近接した位置で、乳幼児用の土器棺墓が発見される例が頻出する一方で、成人墓が併存しない傾向が多く見られる。しかしながら、これまでの調査により、遺跡全体で確認された竪穴住居跡の棟数を考え合わせると、極端にその傾向が強いと判断される。

この要因については、隣接した仙遊遺跡において箱式石棺墓が発見されたことや、矢原高幸によって香色山北及び東山麓の土器棺墓群と、南山麓の土坑墓群の存在が明らかになったことから、墓地が集落から隔離されていたことが想定される。特に、香色山麓の墳墓群の規模が大きいため、農耕地としての利用が困難な丘陵が墓地として積極的に利用された可能性が高いと考えられる。

これらの推測については、前方後円墳の出現に象徴される次代において、大型墳墓が集落から隔離した丘陵尾根上に構築される現象との共通点として認識されるため、弥生時代から古墳時代にかけての一貫した土地利用に関する観念と捉えることができる。

2 居住地の周辺部

対象地の東半部の溝状遺構と、集落の縁辺部を取り巻いた自然河川跡によって構成されている。当該地域は低地のために、居住に不適当な環境と判断される。

(1) 溝状遺構

集落の東部を中心として、SR01と流路の方向性が合致した溝状遺構群が存在する。大部分の遺構が小型で、不定形な平面形態を示すことから、土地区画や農耕用水路等として開削されたものではなく、自然の傾斜を利用した排水路様の施設として機能していたことが推測される。

ところが、これらの中でも、SD56は規模が大きく、正確に居住範囲を迂回して開削されていることや、古墳時代初期まで維持されていることから、幹線水路として位置付けられていた可能性が高いと判断される。対象地の南方において、SR01と合流すると仮定した場合には、同河川から直接導水したことが考えられ、交差すると仮定した場合には、さらに東方の低地から導水したことが予測される。

(2) 自然河川跡

微高地の東側の縁辺部を周るSR01により、集落の東限が明確になっている。

旧練兵場遺跡については、過去の発掘調査及び微地形調査の結果に基づいて、遺跡内を縦断する複数の自然河川跡の存在が予測されており、東西約1kmの遺跡範囲は、河川跡により東西方向に分断されることにより、微高地が浮島状に横並びすることが想定されている。

すなわち、SR01によって明確になった西方の微高地は、さらに西方の河川跡により、中州状の地形に成形されている可能性が高いと言える。

SR01は集落に近接するが、当該時期においては水田として利用された痕跡が認められない。これは、激しい流水のために埋積が進行していなかったことに起因すると考えられ、埋土が粒子の大きい砂を主体とするとともに、無数の大型の石塊を包蔵していた事実から裏付けられた。

第3節 特徴的な遺物

遺物は、土器、土製品、石製品、金属製品等の弥生時代に所属する資料が、膨大な数に及んでいることから、香川県を代表する遺跡としての特色を良く表している。

また、古墳時代初期の土師器や、刻印が施された須恵器等の希少な遺物が含まれるため、古墳時代以降に所属する遺物にも、遺跡の特徴を表すものが多いことがわかった。

これらの中でも、特徴的な遺物についてまとめる。

1 ミニチュア土器

集落の東部のSD56から、多くの資料(3969～3985)が出土した。器種は、壺、甕、鉢、蓋があり、高杯以外の日用品としての各器種の模造品が揃っていることがわかる。

これらの出土位置及び検出状態からは、廃棄時における計画性は認められないが、ミニチュア土器の機能については、祭祀用具としての認識が確立していることから、上記の資料群についても同様と判断される。

SD56において、特に集中的に出土した理由は、以下のように推測される。

SD56は、居住地を迂回するように集落の縁辺部に開削された、基幹的な農耕用水路と考えられる遺構で、自然河川（SR01）から分岐していたことが想定される。弥生時代における農耕用水は、主として河水を利用することが定着していたため、同遺構もその様態を示すものと判断され、集落の縁辺部に位置する理由としては、その重要性から長期間にわたって維持管理される必要があったために、あらかじめ居住地を回避することで、集落の変化に伴う遺構への影響を防止した意図が考えられる。

さて、対象地内におけるSD56は、概ねSR01から分岐を開始した箇所に対応することが明らかになっているが、自然河川からの農耕用水の導引に際して、高低調整や法面強化等の工夫が最も必要となる箇所が河川との接点である。また、開削後の用水路の維持管理面においても、重視されるのは同箇所となっている。このことは、弥生時代後期から古墳時代初期にかけて、同箇所に青銅鏡の模造品を沈めることによる農耕祭祀が、香川県の広範に存在したことから実証されている。

したがって、確認されたSD56については、開削及び維持管理の両面から、重要箇所に対応すると判断されることから、長期間にかけて祭祀行為が行われ、その結果多くのミニチュア土器が沈められたものと考えられる。

2 赤色顔料付着土器

弥生土器22点と石製品1点について、赤色顔料の付着を確認した。このうち、7点の成分分析を行った結果、ベンガラが多いことがわかった。

弥生土器の器種別の内訳は、壺（甕あるいは鉢との区別が困難なものを含む）が11点、高杯が8点、鉢（可能性があるものを含む）が2点、不明1点で、壺と高杯の占める割合が多く、概ね当該時期に所属する集落遺跡出土の赤色顔料付着土器の傾向に共通している。

次に付着箇所に注目すると、出土頻度が高い壺と高杯については、前者が、39、1277、6814が外面に認められる以外は、圧倒的に内面が多いのに対して、後者は全資料が外面に存在し、3536と3640については、内面にも認められる。これは、壺が主として顔料の容器であったのに対して、高杯は装飾されていたためであると考えられる。

なお、6702は断面にも付着が認められることから、色付けの際の絵皿として使用された破損品であることが推測できる。

さて、出土地については、まずSH01とSH11から出土していることに留意する必要がある。すなわち、両住居跡は、遺構の廃絶時において、土器が一斉に投棄されたことに共通点が見出すことができた遺構であるため、赤色顔料付着土器が遺構廃棄に係る祭祀行為に使用された可能性を考察することができる。

また、SD56及びSR01からの出土量の合計が、全体の4割以上を占めることがわかる。先述したように、両遺構については、農耕用水路と水源という関係が明らかになっており、生業に関わる重要性から、祭祀用具としてのミニチュア土器が多く出土していることを指摘した。

そこで、SD56及びSR01の赤色顔料付着土器を観察すると、4743以外の9点について、外面の装飾を目的として着色されていることから、保存及び運搬用の容器としてではなく、視認性が重要視された用途が想定できる。すなわち、赤色顔料付着土器自体の出土量が、弥生土器全体の出土量に比較して、微少な比率であることを考え合わせると、日常生活用品としてではなく、宝器等の臨時的な祭祀用具としての用途を想定することが妥当と考えている。

したがって、SD56及びSR01の赤色顔料付着土器についても、農耕祭祀用具として理解することが

できる。

第3表 赤色顔料付着遺物一覧表

	遺物番号	器種	付着箇所（ ）は断定できなかった箇所	成分	出土遺構等
1	39	壺	(内面)・外面	-	SH01
2	315	壺	内面	-	SH11
3	339	鉢	内面・外面	ベンガラ	SH11
4	560	壺か甕	内面	ベンガラ及び水銀朱	SH18
5	749	壺か甕	内面	-	SD27
6	819	壺か甕	内面	-	SD45
7	1277	壺	外面	-	SD56
8	3536	高杯	内面・外面	-	SD56
9	3587	高杯	外面	ベンガラ	SD56
10	3640	高杯	内面・外面	-	SD56
11	3652	高杯	外面	ベンガラ	SD56
12	3751	高杯	外面	ベンガラ	SD56
13	4496	高杯	外面	-	SR01
14	4743	壺か甕か鉢	内面	-	SR01
15	4898	不明	外面	-	SR01
16	5947	壺	内面	-	SD91
17	5949	壺	内面	-	SD91
18	6702	鉢か	内面・断面	-	V④区第1層
19	6814	壺	外面	-	I①区第2層
20	7221	壺か甕	内面	ベンガラ及び水銀朱	Ⅲ①・②区第3層
21	7447	高杯	外面	-	I①区遺物包含層
22	なし	高杯	外面	-	SD56
23	7358	砥石	先端部	ベンガラ及び水銀朱	Ⅲ①・②区第3層

3 線刻画土器

ヘラ状の工具によって、弥生土器の器面に施された線刻のうち、成形及び調整工程に発生したと判断されるもの以外について、絵画としての線刻画として認識した。その結果、全体で10点の資料があることが判明した。

これらの最大の共通点は、線刻の対象となった器種が壺に限定されている点である。これまでに香川県で出土した線刻画が施された弥生土器についても、圧倒的に壺が多いことから、本遺跡の現象はその実態に即したものであることがわかる。

さらに、モチーフが、木葉、樹枝、蕨、花卉、昆虫類、魚類(鱈)の内容から、植物、昆虫、魚にまるとまっていることがわかる。特に植物が多く使用されていることは、水稻耕作に象徴される弥生時代の農耕における、豊穡への期待が濃厚に現れた結果と判断される。

ところで、全体の7割の資料がSD56から出土している事実に注目する必要がある。既にミニチュア土器の項目で明らかにしたように、同遺構は基幹的な農耕用水路として開削されたために、継続的に遺

構内において祭祀行為が行われていた。

そこで、線刻画土器が祭祀具であるとする通説に従うならば、7点の資料はSD56における農耕用水の確保に関連した祭祀の際に使用された可能性が高いと考えられる。

第4表 線刻画土器一覧表

	遺物番号	器種	モチーフ	出土遺構等
1	601	壺	昆虫類か魚類	SH20
2	639	壺	木 葉	SK08
3	1249	壺	不 明	SD56
4	1267	壺	不 明	SD56
5	1268	壺	不 明	SD56
6	1924	壺	不 明	SD56
7	1982	壺	樹 枝	SD56
8	2223	壺	蕨の茎及び葉	SD56
9	3576	高杯	不 明	SD56
10	5122	壺	花卉か鱗状のもの	SD74

4 土製品

土製品は、9点（X区及びY区の出土品を含めると12点）が出土しており、内訳は、匙形2点、勾玉形1点、分銅形1点、動物形3点、船形1点、不明1点である。

まず匙形土製品は、本遺跡の土製品の中では象徴的な模造品で、これまでに発見されたものを含めると、10点の資料が知られており、1遺跡からの出土量としては、香川県では他に例がない多さである。実用品を含む可能性があるが、本遺跡から多くの匙形土製品が出土する要因は明らかにされていない。

次に勾玉形土製品については、全体が精緻な造作であることと、精巧な穿孔が施されていることから、実用品であったことが考えられ、通常の土製品の機能と異なることが想定される。

すなわち、これまでの調査を通して、遺跡全体における装身具としての石製勾玉の出土頻度は、石製管玉及びガラス玉に比べると、圧倒的に劣ることが判明しているために、本資料については、石製勾玉の不足を補完するための代替品であったと判断される。

分銅形土製品の出土量は少ない。周辺地域では、彼ノ宗遺跡に代表されるように、1遺跡から多くの資料が出土しており、隣接した遺跡相互で様態が大きく異なることがわかる。同土製品を使用した祭祀の差異を示すものと考えられる。

イヌの臀部の模造品として、動物形と推定した資料がある。しかしながら、本遺跡の前例である鳥の頭部と考えられる資料、及び彼ノ宗遺跡のイノシシ形との差異が著しいことから、頭部あるいは四肢の発見を待ってから、歴史的な位置付けを行う必要があると考えられる。

船形は、所属時期が判然としないが、古墳時代に出現したことが明らかな構造船を模倣したものである。本遺跡の南西方に所在する善通寺西遺跡から、古墳時代に所属する精巧な木製櫓が出土していることを考え合わせると、当該地域においては、船の改良に対する取り組みが積極的であった状況を示すものと判断される。

第5表 種類別土製品一覧表

	種 類	遺物番号 (() はX区及びY区の出土品)	出土遺構等
1	匙 形	3988	SD56
2		4243	SP365
3		(9273)	SRx03
4	勾玉形	413	SH11
5	分銅形	706	SD104
6	動物形	3991	SD56
7		3992	SD56
8		7368	Ⅲ①・②区第3層
9		(9336)	SDx08
10	船 形	7448	I①区第1層
11	不 明	6047	SD96
12	円盤形	(8878)	SRx03

5 金属製品

旧練兵場遺跡の特徴として、これまでに多くの弥生時代の金属製品が発見されてきたことが指摘されている。本対象地内においても、製品として認定できたものに、未製品及び製造過程において発生した残滓等を含むと相当量が出土した。

これらのうち、弥生時代の所産と考えられる製品は、鉄製品 17 点（5661 以外）と、銅製品 2 点である。

まず種類別には、鉄鏃が最も多く、次に銅鏃が多いことから、武器の出土頻度が高いことがわかる。後者については、実用品でないとする考えが定着しているが、前者が多いことは実際の戦闘状態が存在したことを示しているものと考えられる。この様態については、彼ノ宗遺跡からも多くの鉄鏃が出土していることから実証されるものである。

銅鏃のうち 1 点は、SD56 の出土品である。同遺構については、再三にわたって農耕祭祀の痕跡が認められることを報告したが、青銅品に祭祀用具としての機能を見出してきた研究成果に従えば、3993 が祭祀行為に使用された可能性を想定することができる。

次に出土地別にみると、19 点のうち 14 点が、9 棟の竪穴住居跡から発見されており、対象地内の竪穴住居跡全体の 4 割に相当する遺構から出土したことがわかる。この比率の多寡を即断する根拠はないが、高率の傾向にあると見受けられる。特に、SH01 及び SH11 から 3 点ずつ、竪穴住居跡全体の 4 割以上が集中的に出土した事実からは、金属製品が赤色顔料付着土器と同様に、住居の廃棄行為に使用された可能性を示唆すると考えられる。

第6表 種類別金属製品一覧表

	種 類		遺物番号 (() はX区 及びY区の出土品)	出土遺構等	
	区 分	名 称			
1	鉄製品	鉄 鍔 (可能性があるものを含む)	208	SH01	
2			209	SH01	
3			224	SH03	
4			228	SH04	
5			258	SH07	
6			277	SH09	
7			278	SH09	
8			411	SH11	
9			552	SH11	
10			553	SH17	
11			5980	SD97	
12			5981	SD91	
13			ヤリガンナ	412	SH11
14			鋤 先	5661	SD80
15			不 明	210	SH01
16				240	SH05
17				249	SH06
18				(9350)	SDx08
19	銅製品	銅 鍔	3993	SD56	
20			(9430)	SDx14	

6 刻印須恵器

刻印須恵器は、香川県では本遺跡の資料(7369)を含む6点が確認されており、出土遺跡の種類別の内訳は、集落跡3遺跡と窯跡2遺跡に分かれる。

集落跡のうち、本遺跡以外の2遺跡については、坪井遺跡が大型掘立柱建物跡を主体として、推定南海道に近接した特殊な集落跡であることと、川津川西遺跡が墨書土器や土馬等の都城様の遺物を出土する特異な集落跡であることが判明している。

さて、奈良時代から平安時代前半期にかけての本遺跡については、遺跡の性格を明確にする遺構は確認されていないが、善通寺との位置関係から、同寺の影響を直接被る環境下にあったことが想像される。考古学的な研究方法による、古代における同寺の勢力については未解明の点が多いが、有力豪族の佐伯氏の存在と、後世の繁栄から推し量ると、創建当初から相当規模の勢力を有し、周辺社会へ多大な影響を及ぼしていたことは確実と考えられる。すなわち、本遺跡は寺院特有の高度な文化を直接受容していた可能性が高いと判断される。

このように3遺跡は、明らかに一般集落跡と異なる性格の集落跡であり、刻印須恵器の存在はその一端を示しているのである。

ところで、各々の押印箇所については、本遺跡の資料以外が内面見込みに押印されているのに対して、

本遺跡の資料は蓋の表面に押印されていることがわかる。これは、前5者が蓋や内容物の存在により、見立たなくなるように配慮されているのに対して、後者は恒常的に目に止まることが意図されているものと考えられる。

印面が「奉」であることを考え合わせると、「奉納」の行為をあからさまにする際に使用された容器の可能性が高いと考えられる。

第7表 香川県出土刻印須恵器一覧表

	遺跡名	所在地	出土遺構等	器種	押印箇所	所属時期
1	坪井遺跡	東かがわ市	遺物包含層	須恵器杯	内面見込み	8世紀
2	坪井遺跡	東かがわ市	遺物包含層	須恵器皿	内面見込み	8世紀
3	北条池1号窯跡	綾川町	表面採集	須恵器杯身	内面見込み	8世紀中頃
4	庄屋原2号窯跡	綾川町	表面採集	須恵器杯身	内面見込み	8世紀中頃
5	川津川西遺跡	坂出市	溝状遺構	須恵器杯	内面見込み	8世紀中頃
6	旧練兵場遺跡	普通寺市	遺物包含層	須恵器杯蓋	表面	8～9世紀

第4節 条里型地割の遺構

現在の普通寺市域に現存する、条里型地割の施工に当たっての基軸線となった可能性がある遺構として、SD79及びSD91を報告した。

前者は最大幅310cm、深さ84cm、後者は最大幅310cm、深さ104cmで、ともに対象地内では最大規模の遺構であるとともに、最大幅が一致することが判明している。

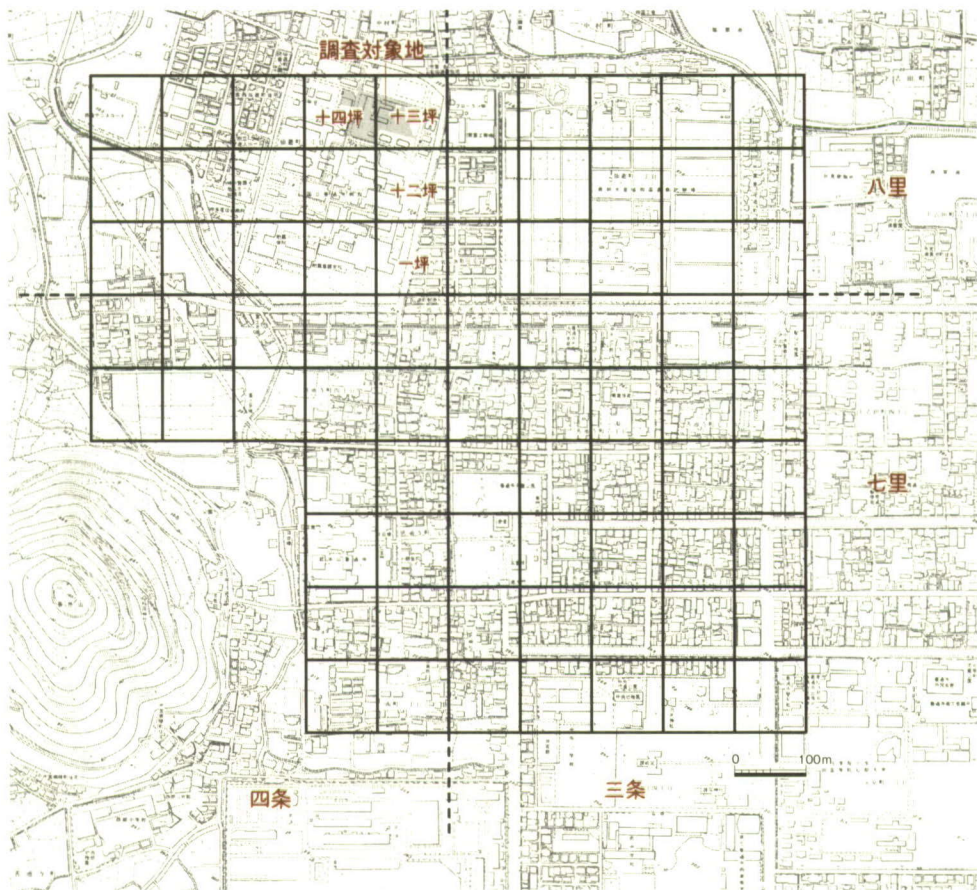
両遺構は平面形態が直線状であり、主軸方位が真北から60°東偏することと、約51mの間隔を保持して、平行な位置関係にあることが特徴である。既に明らかにしたように、これらの特徴は、現存する方格地割の東西軸の主軸方位に合致するとともに、主要な軸線相互の間隔が約50mを単位とする事象に酷似するものである。

以上のように、平面形態及び規模に共通性が認められる一方で、横断面の形態については、SD79がVかU字形であるのに対して、SD91が箱か皿形であるために差異が存在する。

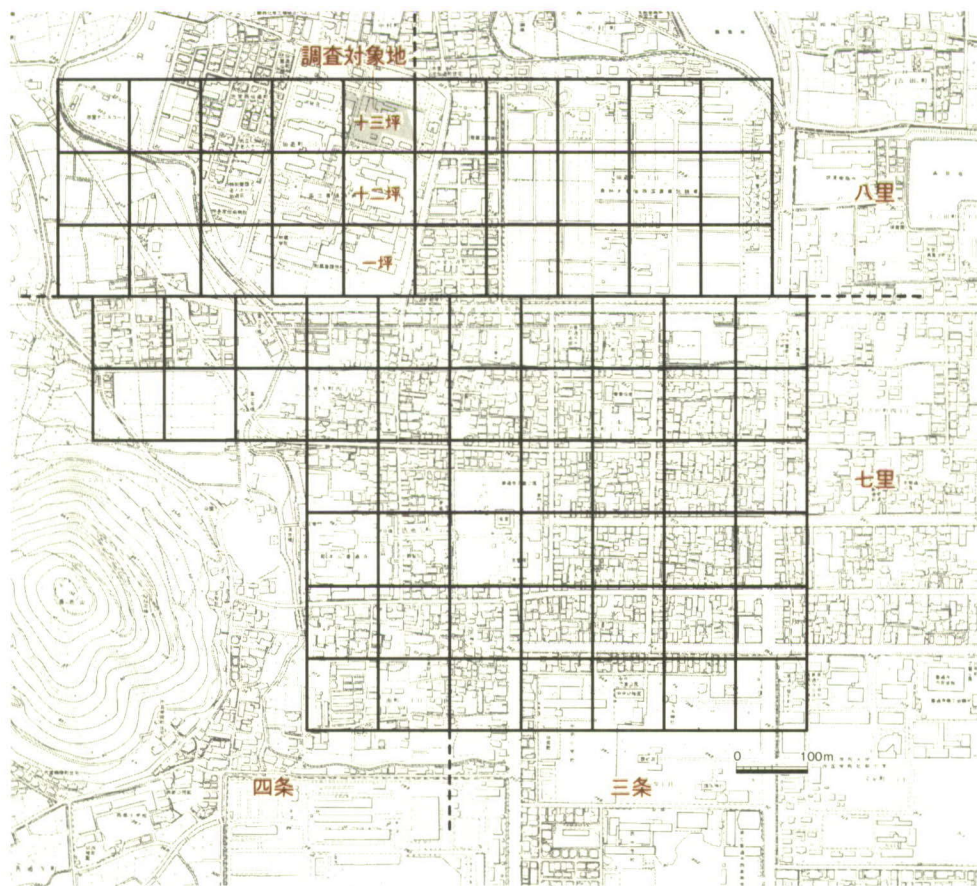
この点については、遺構の機能が農耕用水路に限定されるならば、日常的な保守管理を目的として、遺構内部への進入を容易にする必要性から、後者の形態が適当であると判断されるのであるが、前者には、逆に進入を阻む要素が認められることから、濠様の防御施設としての用途を想定することが適当と考えている。

これまでの研究により、対象地は旧多度郡四条八里十三坪あるいは十四坪に相当することが想定されている。この想定に従うならば、SD91が四条八里十一坪あるいは十二坪の坪界を明確にした遺構として、重要な位置にあったと認識することができることから、条里型地割の施工に当たっては、まずSD91と同遺構から南北方向に、約100m単位で離れて行く遺構が施工されることにより、当該地域の主要な方格地割が形成されたことが考えられる。その後、方格地割の内部を2分割した位置に、防御施設の必要性に基づいて、SD79が開削されたものと考えることが合理的である。

そこで、両遺構の遺物の比較により上記の仮説を検証すると、SD79の主体が、器高が高い土師器碗(5393～5433)、小型の同皿(5463～5504)、器高が低く、底面に回転糸切り痕が認められる土師器杯(5504～5521)、器高が低い和泉型瓦器碗(5546～5579)、磁器(5582～5584)であることから、13世紀を中心とした時期に最も機能したことがわかる。



金田章裕案による復元図



高橋昌明案による復元図

第 360 図 調査対象地周辺の条里型地割復元図

一方、SD91については、器高が高く、底面が突出気味な形態の土師器杯（5770～5801）、精巧に造作された口縁部及び鏝部がある同羽釜（5814～5827）、深い器高の須恵器杯（5885～5898）、形骸化した扁平な形態の高台部がある同杯（5901～5912）であることから、9～10世紀を中心として機能し、矩形の底部がある移動式の土師器竈（5959～5964）が出現する中世前半期頃まで継続的に利用されたことが推測される。

さらに、平城Ⅲ～Ⅵ型式に所属する須恵器（5857～5881）が多く含まれることから、開削時期が8世紀後半期に特定できる可能性があると考えている。

以上の分析からも、SD91が先行して開削され、長期間にわたって機能したのに対して、SD79は短期間で廃絶したことが実証できた。

ところで、遺物からはSD79の開削目的を明らかにすることができなかったが、遺構の様態が示唆する内容から推測を試みる。

本遺構については、SD95の位置で収束していたことが判明していることから、開削時から周辺の方格地割と機能面において無関係な施設であったことがわかる。これまでに香川県内で確認された、条里型地割に規制されながら、防御施設等の異なる機能を有する遺構としては、居館跡の濠（堀）跡が挙げられる。

本遺構を濠（堀）様の施設として捉えるならば、規模と横断面の形態は条件を満たすと判断される。しかしながら、東部において、南北のいずれかの方向へ屈曲して、包囲する空間を形成することが不可欠である。すなわち、本遺構は南北の空間を遮断する機能は有しても、東西方向に対しては効力を有しない様態である。

そこで、周囲の遺構との関連性から考察すると、東部の自然河川跡（SR01）に注目する必要がある。同河川跡は平安時代前半期までに完全に埋積したことが判明しているが、その後に居住地化した形跡は認められず、農耕地として利用されたことが考えられる。その要因としては、基盤土が河川跡の埋積土壌のために、湿潤な環境であったことが予測され、この環境がSD79の東部に延伸部分が開削されなかった原因と推測される。すなわち、同遺構の東部は、自然環境自体が防御施設として機能した可能性がある。

河川や湖沼等の自然地形を利用した防御施設は、中世後半期の戦国時代頃に頻出するが、SD79及びSR01の様態については、その形態の初期の様態を示すものとして理解される。

なお、防御の対象となったことが想定される、同遺構の南北いずれかの地域においては、該当する遺構は確認されておらず、これまでの各種の研究成果からも特定される事象は明らかにされていない。

参考図書（刊行年順）

矢原高幸・奥村武雄『善通寺市の古代文化』1973年

善通寺市『善通寺市史 第一巻』1977年

小林康男「縄文・弥生の匙形土製品」『信濃 第33巻第7号』1981年

野中寛文「讃岐国善通寺領一円保差図について」『宗教社会史研究Ⅱ』1985年

笹川龍一「彼ノ宗遺跡の発掘調査とその問題点」『香川史学 第15号』1986年

高橋昌明「地方寺院の中世的展開」『絵図にみる荘園の世界』1987年

金田章裕「条里と村落生活」『香川県史 第1巻』1988年

中井 均「中世の居館・寺そして村落」『中世の城と考古学』1991年

香川県教育委員会『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』2003年

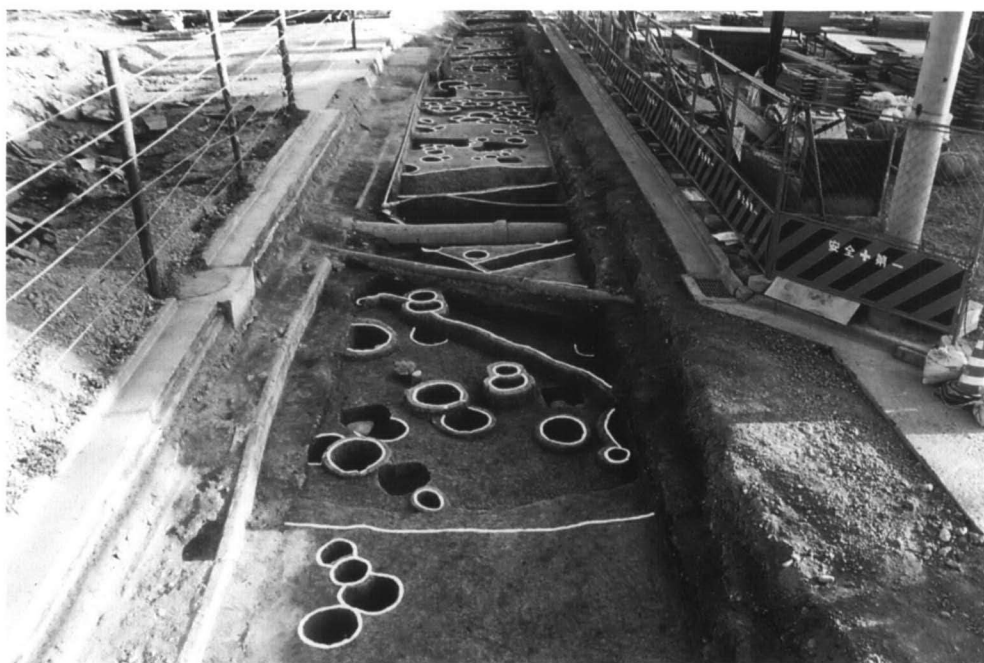
※香川県教育委員会及び香川県埋蔵文化財センター（財団法人香川県埋蔵文化財調査センター）並びに善通寺市教育委員会等編集・刊行の発掘調査報告書（概報）、研究紀要、小冊子等は割愛した。

写真図版

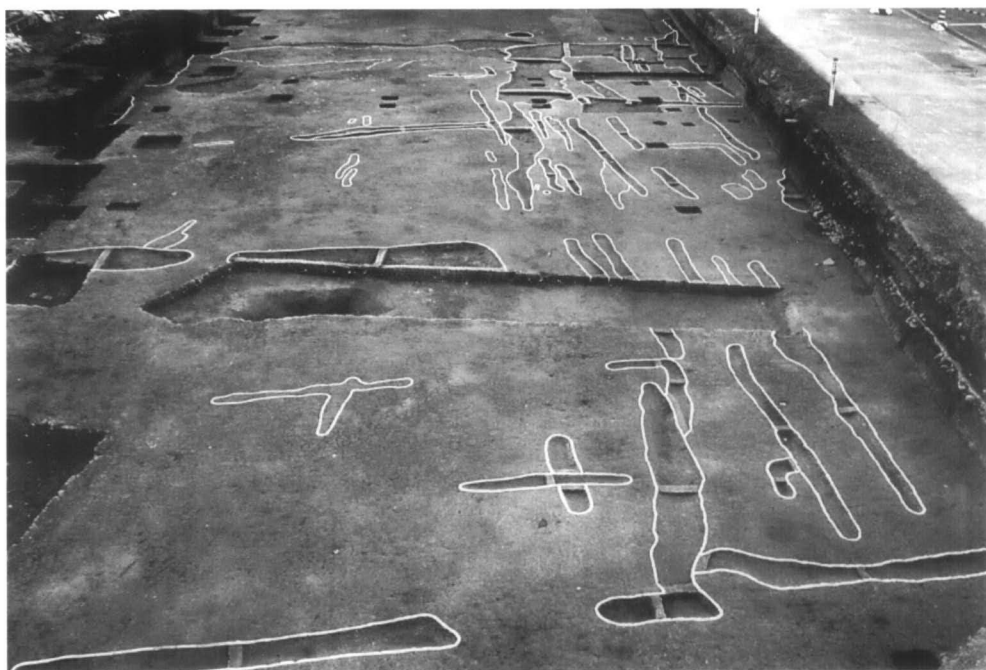




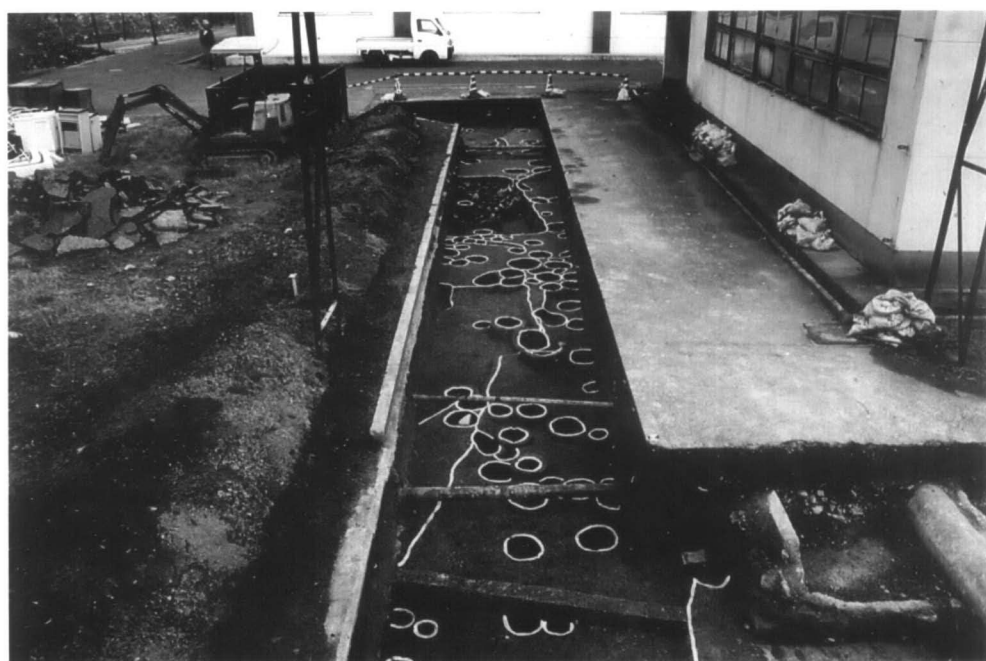
I ①区



II 区



Ⅲ①・②区



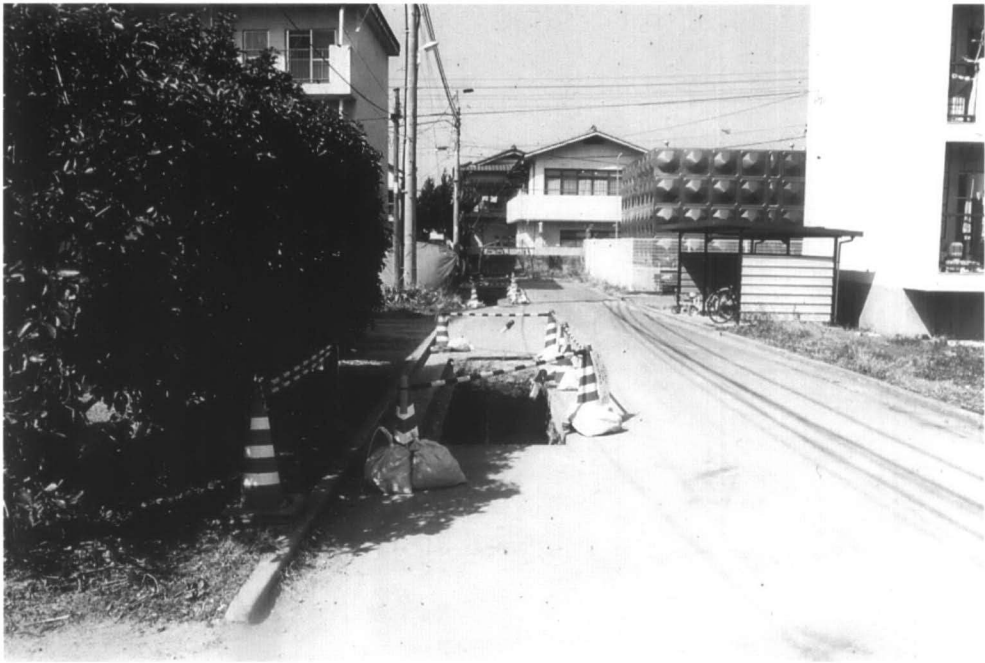
Ⅳ①区



IV②区



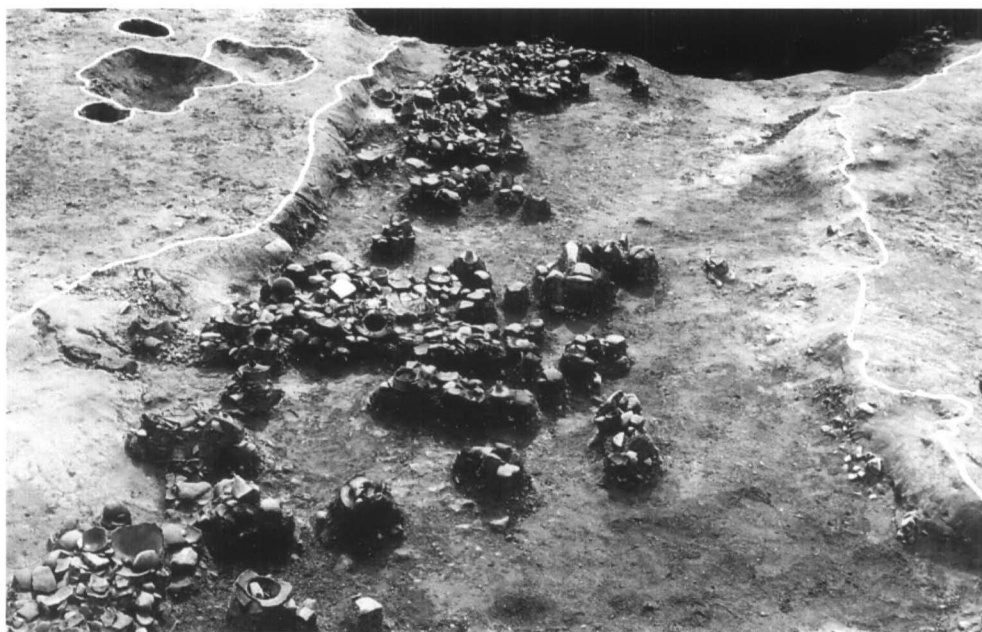
IV③区



IV④・⑤区



V①区 1



V①区2



V①区南部